四日、五十七にて歿す。

するしかいだうしさん

垂絲海棠詩纂　二卷　村瀨　之熙

唐土の垂絲海棠を詩作したる詩文を集めたる者。蓋し彼の垂絲海棠が、本邦の名花櫻に類似せるより、邦人櫻を詠する時の參考にとて作れるなり。故に最初に詩論詩話等を掲げたり。安永八年己亥〔二四三九〕の自序あり。

◉村瀨之熙の傳は「秇苑日涉」の下に出づ。

するじつしふ

水日集　（寫本）二卷　後西院天皇

後西院天皇の御集なり。一名を絲洞集といへり。

◉後西院天皇は後水尾帝の第六皇子なり。慶安元年戊子〔二三〇八〕親王に敍せられ、後光明帝の崩に及び、承應三年甲午〔二三一四〕御年十六にて踐祚し給ふ。在位八年寬文三年癸卯〔二三二三〕位を皇太弟に讓り、在院二十三年にして、貞享二年乙丑〔二三四五〕崩ず、御年四十九。

するしつろん

水質論　（寫本）一卷　高野　長英

水質に關する論述なり。其の題言に「青地林宗、西說に因て氣海觀瀾を述ぶ。世人之れを得て略萬有の理を解するを得たり。余今其の餘義を申明せんと欲す。然れども、小册子の得て說き盡すべきに非ず。是を以て唯水質の一章を擧げて、之れを詳にす」といへり。蓋し西書によりて譯出したるなり。

◉高野長英の傳は「二物考」の下にあり。

するしやういかう

水晶遺稿　一卷　首藤　元昺

著者水晶の詩文集なり。佐野藤綱の編輯するところ。安永六年丁酉〔二四三七〕南宮岳の序、石田言等の跋あり、天明二年壬寅〔二四四二〕出版す。

◉首藤元昺は、仲虎と字し、文二と稱し、水晶と號す、元昺は其の名なり。姓を修して藤と記す。もと美濃岩村の人なりしが、幼にして孤となり、伊勢桑名に至り南宮大湫に學ぶ。後師に從て江戶に出で、敎授の業に從ふ。著書には日本名家詩選、赤穗四十六士論、唐話小說等あり。安永元年壬辰〔二四三二〕八月二十二日、三十三歲にて病歿す。

するしゆつうかう

隧輸通攷　（寫本）六卷　堀　元厚

漢法醫書なり。素問、靈樞、難經、脈經以下數十書を引用して脈穴等に關する事を考述せり。皆漢文なり。湖南の人衞昌柏〔號甫山〕と共に編する所なり。凡例あれど年時を記さず。六卷三册に寫傳す。著者堀元厚は洛下の人にして北溪と號せり。

ずゐしゆろく

隨手錄　（寫本）三卷

慶安鼠賊略記、大神樂由來、三十三間堂由來以下數十項、軍記、人傳、古說等を謄寫したるものなり。何人が何時編輯したるかを詳にせず。

するせいかう

彗星考　（寫本）一卷

彗星の數一百四十四ありて、各分野に於て、其の匿證を露し、人主に告げて人君を儆戒との主意によりて、年中の彗星の位置行動等考說したる者也。

ずゐせいしげ

瑞聖詩偈　一卷　僧　瑞聖

著者の詩偈數百首を輯む。侍者元鶴等の編輯するところなり。元祿三年庚午〔二三五〇〕の自序、同翌年元鶴等の跋あり。著者瑞聖は悲極と字す。

するせいしんげん

彗星眞言　（寫本）一卷　內田　五觀

彗星は造化主が諸遊星を經するために設くるところにして、地球必用の寶物なりとて、其の效用位置年時等を、物理的に考論したるものなり。

◉內田五觀の傳記は「對數表精解」の下にあり。

するせつしゆかん

水拙手簡　（寫本）一卷　僧　水拙

著者の漢文手簡を集めたるものなり。「續群書類從」卷三百五十八、文筆部第四十二にあり。著者水拙は阿州の僧にして、惡俊と號せり。

ずゐせんじえんぎ

瑞泉寺緣起　（寫本）一卷

尾張國丹羽郡、大山社青龍山瑞泉寺の緣起なり。應永二十二年乙未〔二〇七五〕日峯和尚創建以來を詳敍す。

するせんひけつ

水戰祕訣　（寫本）三卷　佐藤　信淵

海軍水戰の事につきて、詳細に說明せるもの。西洋諸國の法に倣ひて、軍艦を作り、大砲を備ふべき事等漏すところなし。嘉永二年己酉〔二五〇九〕九月、某貴客の問に答へたるものなりといふ。

◉佐藤信淵の傳記は「經濟要錄」の下にあり。

するぞくし

水族志　十卷　畔田　伴存

第一編有鱗魚類、第二編洋海魚類、第三編無鱗魚類一、第四編同二、第五編同三、第六編沙魚類、第七編淡水有鱗魚類、第八編淡水無鱗魚類、第九編淡鹹通在魚類、第十編海蟲類、以上十編、八類に分ち、本條二百五十七種、同種異物四百七十八種、凡て七百三十五種〔異名を擧ぐれば一千三百十二〕を綱羅せり。實に「延喜式」「和名鈔」以下百九十六種の書に參考して作りたるものなり。文政十年丁亥〔二四八七〕正月の自序を附して十卷四册に作れるを、明治十七年田中芳男氏洋本一册に活刷せり。

◉畔田伴存は紀州藩の人なり。寬政四年壬子〔二四五二〕に生れ、夙く物產の學に志し、數十年間諸州を遍歷せり。南は熊野、北は三越、東は甲信、西は防長に至り、水產の庶物研究至らざるところなし、著書は、古名錄、大和本草註疏、綱目註疏、綱目外異名疏、救荒本草註、馬名考、大同類聚方藥註前集、紀南六郡志、熊野物產初志、野山草木通志、金嶽草木志、紫藤園攷證、吉野郡中物產志、吉野群山記、北越卉牒、白川草木志、白山の記、立山草木志、草木花圖、草木圖及菌果獸鳥譜、蟲圖、寫眞介錄、介圖魚圖、水族志、以上二十五部二百二十八卷あり。餘は詳ならず、安政六年己未〔二五一九〕六月十八日、熊野本宮に採藥中病歿せり、年六十八。

するぞくしやしん

水族寫眞　一卷　奧村　辰行

水族中鯛類を寫生したるものなり。安政四年丁巳〔二五一七〕出版す。

ずゐちしよせいさうひんづせつ

隨地所生草品圖說　（寫本）四卷　島　仙

野生の草品を列擧して圖說したるものなり。仁孝天皇の弘化二年乙巳〔二五〇五〕の作にかゝる。著者島仙は江戶の人なり。

するとうたいき

垂統大記　（寫本）七十二卷　小宮山昌秀

卷の一を篤烈記と稱して德川氏の祖親氏より廣忠に至る事績を記し、卷二を成勳記として家康の一生を敍し、卷三を纎述記として秀忠を記し、卷四、五を分藩記、卷六を述戾記、卷七を壼範記、卷八を俔妹記、卷九を百斯記、卷十、十一、十二を因親記、卷十三、十四、十五を極武記、卷十六より卷三十三までを推戴記、卷三十四より卷三十八までを歸順記、卷三十九より卷四十八までを勳封記、卷四十九より卷五十三までを欽承記、卷五十四より五十七までを臣林記、卷五十八を忠烈記、卷五十九を孝友記、卷六十を烈女記、卷六十一、六十二を儒林記、卷六十三より卷六十六までを術藝記、卷六十七を果毅記、卷六十八より七十までを倡亂記、卷七十一を職方記、卷七十二を職方外記として數百項を類排せり。三十八册に寫傳す。

◉小宮山昌秀は水戶の人にして子實と字し次郞右衞門と稱し、楓軒と號す。幼にして岐嶷あり、立原萬に就きて經史を研究し、深く其の旨に通ず、また博覽して典故に通ず。水戶文公立つに及び、命ぜられて侍讀となり、尋で郡宰に擢でられ、治功顯著なるものあり。老て職を辭するに方り、更に市尹に任じ、また側用となり、最も優遇を受けたり。天保十一年庚子〔二五〇〇〕三月二日、年七十五にて水戶に歿せり。

するどかいべん

水土解辨　二卷　西川　忠英

葬法及び氣運盛衰の事につきて辨論したるもの。著者無名の「水土解」といふものありて、神儒佛の起るところ、各其の水土による說、喪祭の法、時所位に應ずるの辨等を論じたりしを、本書は一卷に葬法を辨駁し、他の一卷に氣運盛衰の事を辨述したるものなり。

◉西川忠英の傳は「華夷通商考」の下にあり。

ずゐときだん

瑞兎奇談　一卷　大畑　春國

兎類に係る和漢の故事を輯錄したるものなり。慶應元年乙丑〔二五二五〕の著述にかゝる。

◉大畑春國は紀伊國の人、野々口隆正の門人にして、初め醫を學び金齋と稱し、更に龜卜を研究し、大學助敎より、宣敎使の博士となり、淺草神社の祠官となれり。

するにつき

水日記　（寫本）十三卷　源　師時

本書は一名を「長秋記」といふ。該題下に解題せり。

すゐのふなかはらもとさだのき

出納中原職定記　寫本一卷　中原　職定

大永六年丙戌〔二一八六〕前後の同略日記なり。

すゐのふもとたゞのき

出納職忠記　寫本一卷　中原　職忠

天正十六年戊子〔二二四八〕四月十四日聚樂亭行幸、同二十年正月二十六日聚樂亭行幸、寛永三年丙寅〔二二八六〕九月六日依將軍家御上洛行幸、同十二年九月十六日朝覲行幸等の記にて、中原職在と共に記する所なり。書籍の體裁より見れば、某部類書中より拔抄したるものゝ如し。

◉中原職忠の傳記は「童訓略頌類纂」の下にあり。

すゐはんけんぶんろく

水藩見聞錄　寫本二卷　小島　洪祚

天保十三年春德川齊昭、水戶城外に於て大に兵馬の操練を行ふ。著者此の時其の師佐藤信淵の命を受け、水戶に行きて其の實況を筆記したるものなり。水戶城の形勢を始として、弘道館の模範、演武場の經緯より、兵馬の繰り出し、押陣の行列、旗幟甲冑立物の形色、金鼓の制度、指揮進退、其の他陣場の小屋井樓、大銃小荷駄の運び方、旗麾諸軍器の事等詳細に筆記したるものなり。天保十四年癸卯〔二五〇三〕二月これを記せり。

ずゐひつ

隨筆　寫本一卷　屋代　詮丈（アキタケ）

著者の隨筆にして、下の二件を記せり。一は尾張熱田宮の攝社八劍神社の神體を盜み取るものありて、直に捕縛せられて處罰を受けしことの始末。一は仙臺侯綱宗の遊女に狂ひ、三股にて高尾をさげ切にしたりしと傳ふることの虛僞なることを考證したるものなり。編年詳ならず。「輪池叢書」第六に收む。

◉屋代詮丈の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

ずゐひつしよだん

隨筆諸談　寫本一卷

武邊雜話を筆記したるもの。太田道灌古歌の意を考へて敵の遠近を知る事より、黑田如水遺言の事に至る十二箇條あり。其の材料は「武家閑談」「武邊咄」等より抄取したるものなり。

すゐふこうけんさく

水府公獻策　寫本二卷　德川　齊昭

時事を極論して幕府に上りしものなり。末に當時の閣老に與へたる數通の尺牘文を揭ぐ。天保九年戊戌〔二四九八〕の事にかゝる。

◉德川齊昭の傳は「食菜錄」の下にあり。

ずゐへいしだい

隨兵次第　寫本一卷　小笠原　尙清

伊勢弓馬叢書の中の一書にして、同故實四十餘條を記し、伊勢貞丈の標註あり。明應九年庚申〔二一六〇〕十一月、自ら奧書す。寛政四年壬子〔二四五二〕貞春の奧書あり。著者小笠原尙清は民部少輔と稱す。

ずゐへいにつき

隨兵日記　一卷

出陣隨兵の故實十九條を記したるもの。文明十八年丙午〔二一四六〕正月十一日の記なり。「群書類從」卷四百十九、武家部第二十にあり。

ずゐへいのしだい

隨兵之次第　一卷

隨兵故實を記す。延德三年辛亥〔二一五一〕八月二十二日道勝華押の末記あり、次に大永五年乙酉〔二一八五〕八月二十七日、伊賀守孝盛の奧書あり。

ずゐへいのしだいのこと

隨兵之次第事　一卷

隨兵に關する故實五十箇條を記したるもの。明應九年庚申〔二一六〇〕十一月十五日の記なり。「群書類從」卷四百十九、武家部第二十にあり。

すゐぼせう

水母鈔　寫本一卷　鳴松　貞幹

甲冑の良工、益田明珍紀宗介が事を考論したるもの。世傳の事實を疑うて、最末に、「嗚呼聞くと見るとに同じ類の人まどはしなる事なりけらし、されば古に博き君子の目をかりんとするは、硯の海の水母ならずや」といへり。書名の由來をも知るべし。寛政七年乙卯〔二四五五〕著者の末記あり。著者鳴松貞幹は五世と肩書せり。

すゐめいしよ

推命書　三卷　櫻田　質

五行說に基きて、人生の運命を豫推する方法を論じたるもの。宋の徐公升の著書に就て其の大要を譯出したるものなりといふ。文政元年戊寅〔二四七八〕の自序あり。明治十七年三册に翻刻す。

◉櫻田質の傳記は「松島圖誌」の下にあり。

すゐめいろく

遂明錄　寫本一卷　長谷川　遂明

伴部安崇の口授を、編者長谷川遂明が筆記したるものなり。修身上の雜話數十項あり。寶永五年戊子〔二三六八〕の筆記にかゝる。著者長谷川遂明の傳は詳ならざれども別著には「安崇先生學話」あり。

すゐめいろく

（改正）遂明錄　寫本一卷　三浦　義綴

「遂明錄」に多少の增減を加へたるものなり。享保十年乙巳〔二三八五〕十一月の編輯なり。

すゐゆうだうかくん

垂裕堂家訓　寫本一卷　唐金　梅所

家訓十五箇條を典雅なる和文に記したるもの。寶永七年庚寅〔二三七〇〕の自序、及び三輪希賢の序、同六年、正德二年壬辰〔二三七二〕等諸家の序あり。

◉唐金梅所は泉州岸和田の豪族にして、名を興隆といひ、堂を垂裕堂と號す。詩を以て當時の名家と交り、また韓人と唱和したることあり。「梅所詩稿」若干卷の著あり。

すゐよせうろく

睡餘小錄　一卷　藤原　吉廸

古書畫古器瓶物、及び古印類、名妓の古風、相撲芝居の圖等、中古の有樣を圖して、傍に其の考を附したるもの、文化三年丙寅〔二四六六〕西村勘解由判官出羽守正邦の序あり。

すゐよろく

睡餘錄　寫本四册　藤井　臧

和漢古今の雜事を記したるもの。其の古人の言行を記するところには浮屠氏を罵詈するもの多し。全篇漢文にて記す。蓋し事實は「閑際筆記」に載するところと全く同じけれど、文體に於て和漢を異にし、版刻と寫本とにて卷册數等の差あり。

◉藤井臧の傳は「閑際筆記」の下に出づ。

すゐりくせんかう

水陸戰考　二卷　小島　省吾

西洋諸國に於ける水陸戰法を詳述したるもの。西洋軍船に大砲を用ふる起元、西洋軍船の製、西洋砲製沿革の說等より、漢土五里霧距風化灰の法、古今戰法に三法ある事等に至る百四十餘條を詳說せり。安政三年丙辰〔二五一六〕安積貞〔明卿〕の序あり。上下二編を一册に作る。著者小島省吾は越後の人なり。

すゐりくせんぱふひけつ

水陸戰法祕訣　寫本五卷　佐藤　信淵

表題の示せるがごとく水陸の戰法を論述したるものなり。かれて支那道光年間に於ける英清戰爭の事をも記述せり。

◉佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

すゐりくせんぱふろく

水陸戰法錄　寫本八卷　佐藤　信淵

英清戰爭の優劣を評論したるもの。洞津侯の命によりて鹽谷世弘が「阿芙蓉彙聞」、齋藤子德の「鴉片始末」、長山貫が「淸英合戰記略」等に據り、更に著者の見を加へ、尙諸說を會集して評論を逞せり。弘化四年丁未〔二五〇七〕の自序あり。

◉佐藤信淵の傳記は「經濟要錄」の下にあり。

すゐろけんわかしふ

醉露軒和歌集　寫本三卷　河瀨　菅雄

著者の家集なり。醉露軒は其の號によりて書名としたるなり。

◉河瀨菅雄は京師の人にして、醉露軒と號し、歌學者を以て知らる。著書は本書の外に、百人一首玉葛、和歌まさな草、類葉抄、春風抄、和歌拾類集、和歌集、增補和歌道しるべ等あり。

すうえうしふ

樞要集　寫本一卷　伊勢　貞雅

鞍鐙故實の傳書にて、卷頭に祖先來の略譜、及び祖先來の各武器の制法異同等を記せり。貞雅の跋書中に、「自祖父貞倍以是傳之於亡父貞常、貞常以是傳之於余、余以是傳之嫡子貞景」云々とあり。

すうがくしようしやへん

數學松社編　一卷　多田　弘武

門弟數人の自設自答の算題及び著者自身の出題に術文を附したる漢文體の算法書なり。安永四年乙

未〔二四三五〕の出版にかゝる。著者多田弘武は讃岐の人にして松園と號す。

すうがくしようしやへんひやうりん

數學松社編評林　木版一巻　會田　安明

數學松社編の題術等の闕點を數へて、一々評論を加へたるもの。評者の算癖は固より脫する能はざれども闕流に對する語氣に比すれば、稍、平かなるが如し。

◉會田安明の事は「算法古今通覽」の下に詳なり。

すうがくたんき

數學端記　五巻　田中　佳政

算顆術に依らず、亦天元術をも用ひず、一に算器法を以て術を施したる書也先づ諸物の名義、因乘、歸除法より、人間急用の諸算法、地積、遠近、高低の測法等、許多の算法を記載したるものなり。全巻の體裁、他の算書と頗る趣向を異にして、自ら一見識を存す。年代詳ならざれども、元祿十六年以前に在りたること明なり。

◉田中佳政は唯五郎と稱す。本性は山家氏、一旦母氏の家を繼て、田中氏を冒す。後、本氏に復せり。

すうがくめいぎしふ

數學名義集　一巻　山本　格安

大數、小數、度、量、衡、等をはじめとして數學に關する諸數諸語を解釋したるものなり。寬延四年辛未〔二四一一〕出版す。

◉山本格安の傳は「獻喧錄」の下にあり。

すうそうけうりやく

雛僧敎略　一巻　僧　繼成

僧侶の行儀作法を示さんとて、諸の敎典より二十餘文を引抄したるものなり。

◉繼成は眞宗本願寺派の僧。日溪法霖の門人にして、善性と字し、豐前小倉永照寺に住す。別著に「讃阿彌陀偈提釋」二巻及び「阿彌陀佛說林」七巻あり。

すうだうしよじゆつぜんしふ

數道初述前集　三巻　東　房　軒

數學に關する心得より、必ず算數に依るべき世俗の談話、或は愚言等を述べ、概ね或人の問に、田中佳政が答へたるに寄せて記述したる書にして、頗る興味あり。且つ成言あり、元祿十六年癸未〔二三六三〕出版す。著者東房軒は田中佳政の門人なれども、本姓は詳ならず。

すうどせうだん

數度宵談　二巻　西村　遠里

著者が友人水之長、杉知一の二氏の問を設けて、算學上必須の件々を談話に寄せたる書にして、興味ありて、且つ有益の書なり。表題は初め「數學夜話」としたりしが、後改めて「數度宵談」とす。安永七年戊戌〔二四三八〕出版せらる。

◉西村遠里の傳は「雨中問答」の下にあり。

すうへききやう

趨避鏡　一巻　渡邊　之道

方位說に基きて、人事の吉凶を說き、轉禍爲福を示したるものなり。文政九年丙戌〔二四八六〕の自序あり。著者渡邊之道は尾張の人なり。

すうりしんぺん

數理神編　二巻　齋藤　宜義

二三の點竄問題を除く外、皆圓理問題にして、術文を附したる書なり。終巻門人等の名を以て記載せり。設問頗る新題あり。谿術の盛んなること見るに足るべし。然れども惜哉術文正しからざる者多し。萬延元年庚申〔二五二〇〕の出版にかゝる。

◉齋藤宜義の傳は「算法圓理鑑」の下にあり。

すうりむじんざう

數理無盡藏　木版一巻　白石　長忠

近易の算法より、圓形の矩合、圓理の諸數等を記載して、演算の助術となるべきもの。其の要を拔きて臆川盡さず、故に之を「數理無盡藏」と曰ふ。池田純夫の名に於て記述せり。天保元年庚寅〔二四九〇〕に成れり。川井久德之れが序を爲る。

◉白石長忠のことは「社盟算譜」の條に詳なり。

すうろたいし

鄒魯大旨　二巻　伊藤　長胤

巻上に聖門立敎の綱領、聖門言仁之旨、仁智並言之旨、仁智相資之旨、智仁並言之旨、附智仁勇、同智仁非禮、同仁智信直勇剛、専言禮之旨、仁禮並言之旨、仁禮相資之旨。巻下に専言義之旨、附道義、同理義、禮義並言之旨、附禮義信、仁義並言之旨、仁義禮倂言之旨、仁義禮智倂言之旨、仁義禮智樂、言心之旨、言性之旨、知命之旨、仁義禮智性命天道錯舉互言之旨等を述論せり。初進者の爲にとて俚語假名文にて記せり。享保十年乙巳〔二三八五〕の自序あり。

◉伊藤長胤の傳は「輶軒小錄」の下に出づ。

すゑなかき

季仲記　木版一巻　藤原　季仲

此の書は「支記」といふ別名の下に解題したり。

すゑのを

末之緒　一巻　梅辻　春樵

著者の遺詠數十首を編輯したるもの。明治九年秋漁琴更張、萬曆琴延操の輯錄するところにして、諸家の手に成りし數多の序跋あり。また巻首に著者の像を揭げたり。

◉梅辻春樵の傳は「春樵隱士家稿」の下にあり。

すゑひろがり

末ひろがり　一巻

御伽草紙物の類にて、扇の德を述べつゞけたるものゝ抄本なり。慶長年代のものなるべし。

すゑひろじふにだん

末廣十二段　一巻　紀　海音

源義經牛若丸の少時を筋に書き成せる淨瑠璃なり元祿十五年壬午〔二三六二〕五月の作にかゝる。

◉紀海音の傳は「信田森女占」の下にあり。

すゑもりき

末森記　一巻　岡本　慶雲

天正十二年甲申〔二二四四〕翌十三年に渡り、加越境末森にて、前田利家と、佐々成政との戰爭顚末を記したるもの。末に「右此の書は、依御懇望、見聞之趣粗書記、致進覽之候。聊帶外見而已。九月十五日、岡本慶雲長見右衞門尉殿」とあり。「群書類從」巻三百九十二、合戰部第二十五に收めたり。

◉岡本慶雲の傳は「加越戰爭記」の下にあり。

すゑもりぐんき

末守軍記　木版一巻

此の書また天正十二年甲申〔二二四四〕より、同十三年に至り、加越の境末森た於て、前田利家と、佐々成政と合戰したる始末を記したるものなり。編者詳ならず。

すゑわかば

末若葉　二巻　榎本　其角

彫棠、紫雫、揃爻、闇指、我常、以下の俳句集なり。元祿十年丁丑〔二三五七〕の編。近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」の中にも收む。

◉榎本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

すがたみ

姿見　木版五册

和歌の祕訣傳授に係る諸項を記したるもの。歌道唯授一人大事、古今傳授切紙口傳條々三箇大事、和歌極祕大事、和歌條々懷紙心得の事、歌會の事、源氏箱入日記八代集二十一代集、年中歌撰學惜の事その他等を輯錄す。此書何人の編なるかを知らず、宣恕といふ人の朱註多く、所々に嘉永庚戌〔二五一〇〕宣恕の圖書印を捺せり。

すがとしつねきやうおんやわ

菅利常卿御夜話　木版二巻

前田利常の語錄行狀記なり。其の性質仁愛に富めること、生涯不學に安じたることなど、美惡共に詳敍せり。藩士の筆記なるべし。

すがはらけいづ

菅原系圖〔別本一〕　木版一巻

從五位下大江介古人を祖として、參議正二位長嗣に至る。「續群書類從」百七十五、系圖部七十にあり

すがはらけいづ

菅原系圖〔別本二〕　木版一巻

從四位下阿波守宇庭より出でて文祿三年甲午〔二二五四〕誕生の長維に至れり。「續群書類從」巻百七十五、系圖部第七十にあり。

すがはらけいづ

菅原系圖〔別本三〕　木版一巻

宇庭を始祖として、文章生在顯に至れり。「續群書類從」巻百七十五、系圖部第七十にあり。

すがはらしけいづ

菅原氏系圖　木版一巻

其の祖從四位下土師宇庭の男にして、桓武天皇御位以前に侍讀たりし從五位下遠江守古人より、本支數百葉を經て在實、在遠、在豐に至れり。「續群書類從」巻百七十五、系圖部第七十にあり。同巻には別本三編あり、前に揭ぐ。

すがはらしけいづ

菅原氏系圖　一卷

阿波守宇庭を祖とし、本支數百代の後、凡そ天文年代に及べる系圖なり。『群書類從』卷六十三、系圖部第四にあり。

すがはらしけいづ

菅原氏系圖　（寫本）一卷

從四位下阿波守宇庭を祖として、文章生在顯に至る。本書は鎌倉菅祠別當荏原一乘院藏本なるより、荏原本といへり。『續群書類從』卷百七十六、系圖部第七十一に收む。

すがはらじつき

菅原實記　一卷

菅原道眞の事實を小說的に插畫編輯したるものなり。明治十九年活刷に附す。

すがはらてんじんごいちだいき

菅原天神御一代記　一卷

菅原道眞の事績を、小說的に插畫編輯したるものなり。明治十九年活刷す。

すぎたにつき

杉田日記　一卷　清水濱臣

著者が武州なる蒲田及び杉田に梅見したる時の雅文紀行なり。道すがらの景色、神社佛寺、地名等委しくをもしろく記されたり。歌は杉田にて讀みたる長歌一篇のみ。

◉清水濱臣の傳は『伊勢物語添註』の下にあり。

すぎのをやまのき

杉の小山の記　（寫本）一卷　千家俊信

阿波國名西郡矢野村に鎭座せる杉屋大明神の緣起由來を記述したるものなり。『輪池叢書』第十六に收めたり。

◉千家俊信は出雲國造俊秀の男にして、字を淸主といふ。少壯の時京阪の間に寓居し、伊勢に行きて本居宣長の門に入り、古學の研究に精勵し、業大に成る。是より山陰道の古學主張家を以て知らる。

すぎのしたば

杉能下葉　一卷　中條信禮

稻荷大神の神體、名義及び稻荷の三社五社、また稻生と祭る三社五社等の事を辨じたるもの。『稻葉神社考』の足らざるを補ひ、稻荷山の三社、五社等をも辨じたり。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕の著なり。

◉中條信禮は幕府の高家にて有名なる人なり。豐濫館と號す。當時從四位下左衞門督たりき。別著に『發憤一家言』あり。

すぎのしづえ

杉のしづ枝　二卷　荷田蒼生子（タミ）

著者の家集なり。「むつきたつけふを始によみそむる、春の日數は長くもあらなん」以下數百の和歌、十餘篇の和文を、其の弟子菱田縫子の編輯したるものなり。寬政七年乙卯〔二四五五〕橘千蔭の序、及び三島自寬の跋あり。

◉荷田蒼生子は春滿（アヅママロ）の女にして、在滿の妹なり。幼より在滿に從ひて江戶に在り。某氏に嫁せり。未だ幾らずして夫を喪ひ、家に歸りて、專ら家學を受け、終に歌文の妙を究む。これを以て紀州侯の女公子に仕へ、後致仕して、諸侯の夫人等に禮招せられて業を授くるもの多し。天明六年丙午〔二四四六〕二月二日、六十五にて歿す。淺草金龍山に葬れり。

すぎはひぐさ

治生草　二卷　橘東海

書名の示す如く、治生經濟を主として、日常の道德勤勉の事等を、懇切に說明したるもの。和漢の例を引き、繪圖を插みて、子女の讀本とせり。自序、天保八年丁酉〔二四九七〕鈴木信成、佐久間思孝の序あり。著者の遺稿を、右兩人の校正發行することなり。

すぎまるた

杉丸太　一册

筑前の中澤、東に、野坡等の編述にかゝる俳諧集なり。寶永二年乙酉〔二三六五〕京都にて出版す。

すぎむらねんぷ

杉村年譜　（寫本）一卷

杉村君强の年譜なり。君强は醫齋、勉庵、螺翁、霞皐等の號あり、名を正誼、字を君强また晉道といふ。寶曆十一年辛巳〔二四二一〕六月二十二日東都中橋通りに生れたる人なり。本書は此の一生を漢文にて詳記したるものなり。

すぎやき

杉やき　一册　井原西鶴

著者が俳諧の集なり。編述の年時を詳にせず。

◉井原西鶴の傳記は『小夜嵐物語』の下にあり。

すぎやまじんじやかみよごとのうた

杉山神社神壽歌　（寫本）一卷　黑川春村

武州橘樹郡鶴見村杉山神社五十猛命を祭り來れるに古來傳り來れる神壽歌を考證したるものなり。

◉黑川春村は『神名帳考證土代附考』の下に傳す。

すぐぢのとこよぐさ

直路の常世草　三卷

神道神敎の貴重遵奉すべきを論じ、兩部習合、理當心地等の諸說の曖昧なることを辨じたるものなり。項を四十五に分ちて理論と實例とを以て、精しく神德を主張せり。往々繪畫を插入せるは童蒙に示す爲なり。享保二年丁酉〔二三七七〕仲春の自序跋あれど、作者の姓名を記さず。

すくなびこなのみことのでん

少彥名命傳　（寫本）一卷　伴部安崇

日本紀の神代の卷より、少彥名命の傳記を摘抄綴成したるものなり各原文を舉げ、更に假名文にて敷衍せり。

◉伴部安崇の傳は『一切成就祓抄』の下にあり。

すくわうのゐんぎよき

崇光院御記　（寫本）一卷　崇光院

曆應二年己卯〔一九九九〕五月、延文元年丙申〔二〇一六〕十月、同三年八月、貞治五年丙午〔二〇二六〕十二月、永德元年辛酉〔二〇四一〕九月等の御日記。

◉崇光院は北朝の帝にして、御名を興仁また益仁といひ、光嚴帝の太子たり。年十五光明帝の禪を受けて卽位す。在位三年、南朝兵の爲めに、光嚴院、光明院と共に擁し去られ、河州東條に幽せられ、後、御出家在まし應永五年戊寅〔二〇五八〕崩御せらる。

すげかさにつき

菅笠日記　二卷　本居宣長

吉野花見の紀行文なり。明和九年壬辰〔二四三二〕三月五日出立して、同中旬歸宅するまでの詳細記事なり。文末に「ぬぐもなし吉野の花の下風に、ふかれきにけるすげのを笠は。よしや匂ひのとまらずとも、後しのばん形見にも、其の名をだにと、せめてかきとゞめて、菅笠の日記」と書けり。

◉本居宣長の傳は『古事記傳』の下にあり。

すけかつきやうき

資勝卿記　（寫本）十册　日野資勝

元和五年己未〔二二七九〕正月より、寬永九年壬申〔二二九二〕十月に至る日記なり。往々闕記の月日はあれど、概して詳細に記せり。末孫正二位資矩の抄出するところなり。內題には「凉源院殿御記」と、あり。

すけがはむらきうききかん

助川村舊記寄鑑　（寫本）一卷

水戶藩北郡の農政に關する觸書または屆書類を編輯したるもの。元祿以來文化に至るまでの書類なり。編者は常陸助川村の人岡部某なり。

すけさだきやうかいげんさだめのき

資定卿改元定記　（寫本）一卷　資定

享祿改元と、永祿改元との改元定記なり。元龜三年壬申〔二二三二〕四月二十三日、參議右大辨藤原經元の奧書あり。『續群書類從』卷二百九十、公事部第四十三にあり。

すけざねながかねりやうきやうひやくばんしあはせ

資實長兼兩卿百番詩合　一卷　弘誓院禪閤

春夏秋冬雜の題にて、左を資實、右を長兼として百番詩合を作りたるものなり。建長八年丙辰〔一九一六〕寫本の奧書あり。『群書類從』卷百三十四、文筆部第十三にあり。

すけすゑきやうのき

資季卿記　（寫本）一卷　藤原資季

仁治三年壬寅〔一九〇二〕三月十二日より、同月三十日に至る日記なり。十八日の御卽位、二十五日左大臣長者內覽の事、二十九日新關白拜賀の事等を記錄せり。藤原資季は平松權大納言と稱せり。

すけつねきやうき

資經卿記　（寫本）一卷　藤原資經

貞應元年壬午〔一八八二〕十一月の日記なり。著者藤原資經のことは『自曆記』の下にあり。

すけともきやうのき

資朝卿記　（寫本）一卷　藤原資朝

日野中納言資朝の日記殘編なり。載するところ、文保二年戊午〔一九七八〕二月の事にかゝる。

◉藤原資朝は家を日野と號す。大納言俊光の子なり。才學あり、上下の尊重を受く。官文章博士を歷て藏人頭右中辨左兵衛督となり、元亨元年參議に任じ、同三年從三位に敍せられ、檢非違使別當となり、後權中納言となる。後醍醐帝の密に興復を圖り給ふに方りて其の謀主となる。事顯はれて北條高時の爲めに佐渡に流され、隱岐に遷されて殺さる。

すけながきやうのき

資長卿記（寫本）一巻　日野資長

著者の日記殘編なり。記するところ、仁安二年丁亥〔一八二七〕十二月の事にかゝる。著者日野資長は藤原姓にして、中納言たり。

すけなきやうのき

資名卿記（寫本）一巻　藤原資名

日野中納言資名の日錄殘編なり。元德元年己巳〔一九八九〕十二月の記事にかゝる。

◉藤原資名は權大納言俊光の子なり。後伏見上皇に眷遇せられ、後醍醐天皇の朝に正二位權大納言となる。北條高時帝を六波羅に幽し奉り、光嚴院京都に即位し給ふに方り、また寵任を受く。後醍軍の爲めに、諸所に貶竄したりしが、尊氏鎭西の大軍を率ゐて京に迫るに及び、また出でて、光嚴院を奉じ、尊氏に東寺に歸せり。

すけのぶぐわかん

祐信畫鑑　三巻　西川祐信

兼好法師の「徒然草」の毎條を圖出したるもの。されば、「繪本徒然草」と表題に割冠せり。毎畫の餘地に本文を揭げたり。元文三年戊午〔二三九八〕の自序あり。明治二十七年甲午〔二五五四〕東京博物館にて木版に附す。

◉西川祐信は京師の人。初の名を祐助といふ、右京と稱し、自得齋また文華堂の號あり。夙く狩野永納に就てその畫を學び、中途にして浮世繪師に變じ、遂に西川派の名人となれり。寶曆四年甲戌〔二四一四〕九月十一日、年八十一にて歿す。

すけのやかつさだのでんき

菅谷勝貞傳記（寫本）一巻

永正年中、常陸國小田の城主、讃岐守源政治の幕下にて藤澤の城主たりし菅谷勝貞一生の事績、及び其の子範政、其の孫範重が文祿以後德川家康に仕へたりし事等を記す。

すけますわうのき

資益王記（寫本）一巻　資益王

文明六年甲午〔二一三四〕正月、二月、三月、四月、同十三年正月、二、三、四、六、七、八、九、十、十一月。同十四年正、二、三、四、五、六、七、八、九、十月。同十六年正、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十二月等の大要記事なり。著者資益王は神祇伯たり。

すゞきそうしよ

鈴木叢書（寫本）百〇二巻　鈴木眞年

本書に收錄するところは、里見九代記、里見軍談記、岩淵夜話別集、甲斐國都留郡內木立村妙法寺記、川中島五戰記、古醫方經驗略、醫家古籍考、中村式部少輔家覺書、大須賀家傳、懷橘談、隱岐名勝志、弘道館述義、東極雜記、飛州志、上陽箕輪軍記、深谷記、南向茶話、神樂三辨、大刀契考、鎭魂祭次第、橘家鎭魂祭之祕、安座傳、十種神寶行事、卜する次第、元人來寇考、明智系圖外二種、堤家傳記及系圖、榊原康政贈加藤淸正書翰之寫、品川御社傳記、熊野軍記、湯川記、本宮記、熊野神廟記、熱田神社錄、伯家神事式、山王一實印明、駿河國延喜式內神社記、正三記、越後三條代々之城主池並山吉之舊記略、讃州二十四社順拜案內略記、周防國式內神社考、貞觀年中行事、葛野座月讀太神宮傳記、壬生家舊臣錄、御十代年數考、新田老談記、藤堂高虎記、芥舟魚腹石蹟辨、新田岩松家系考、新井家系、荻野家文書、具足之餅、祖父物語、武烈天皇禁處誕名、衣川百首、文龜勘文、古今集三木三鳥考、今三辨、遠江國式內社摘考、鐵直垂色目、保呂衣邪說辨、東鑑不審問答、逆頰箙之事、鐙鞍記、犬追物再興土筵、淸和天皇御流、十二月往來、位署式私考、如來齒舍利傳來記、造殿儀式、烏名子記、御牧望月大伴神社記、諸系圖、東國戰記、三人法師、湯次誓願寺譜傳、野長瀨家由緒書、十七條憲法、白鹿之圖、御影之記、有親君御願文考、新田金山傳記、閑窻自語、なめん物語、おきく物語、鎭西軍記、大道寺駿河守家中名前留記、長尾但馬守足利小屋城分限帳、地下傳以上八十九種にて、凡て二十冊に寫本せり。著者鈴木眞年は土佐の國の系圖學者なり。

すゞきそうしよ

鈴木叢書（寫本）十四冊　鈴木士敬

第一に古老夜話上。第二に同下。第三に水野左記一代武功覺書、本多越前守書上、北條安房守書上長湫合戰、長久手或說。第四に武功實錄。第五に古戰談話上。第六に同下。細川家大阪陣の控、世上雜話。第七に軍中士之心得覺書、川中島戰之記、志津ヶ嶽合戰小須賀九兵衛話。第八に越國內輪弓矢老師物語聞書、近藤氏書上、毛利家檢手、前九鬼長門守隆公御働拔書、淸水長左衛門尉平宗治由來、岩崎記。第九に水谷記、水谷幡龍記、有吉家代々覺。第十に武田滅亡記、南部根元記。第十一に齋藤記、眞田家臣覺書、山邑記。第十二に眞田軍功家傳記、豆州樣御出之節御語覺書。第十三に依田記、大聖寺城落去並淺井繩手、首帳、若話。第十四に藤堂高虎息高次へ遺す文書、同家の舊臣戰功奬事書出の寫。以上の諸編を收錄す。文化三年丙寅〔二四六六〕正月、友人樫庭盈の序あり。

すゞきだいにつき

鈴木大日記（寫本）十九冊　鈴木大

著者の日記にして、安政五年戊午〔二五一八〕正月より、文久三年癸亥〔二五二三〕十二月に至れり。小本十九冊に寫傳せるは、著者手記のまゝなるべし。

◉鈴木大は水戶の人。著はす所は本書の外に、「賜救始末」一卷あり、刊行す。

すゞきもんどゑいころく

鈴木主水榮枯錄　一巻

俗傳鈴木主水の遊蕩事績を小說に綴りたるものなり。古版の本によりて、明治十九年丙戌〔二五四六〕活刷に附せり。

すゞのやうしごじつくわいれいさいのうた

鈴屋大人五十回靈祭歌　二巻

嘉永三年庚戌〔二五一〇〕三月七日、鈴屋大人本居宣長の五十回靈祭の時諸國諸家の詠み集めたる「朝櫻」の歌を編輯したるもの。實に數百首あり。本居內遠、長澤伴雄の序、細田爲由、大橋長廣の跋あり。一卷は附錄にして「鈴屋翁眞跡縮圖」と稱す。當時諸家の所藏を取り出し紀念の爲に模刻したる也

すゞのやうしみやこにつき

鈴屋大人都日記　二巻　石塚龍麿

寬政五年癸丑〔二四五三〕本居宣長都に上りたる時、終始隨從して、細大を記したる日記なり。卷末に「此日記をよみてかへすとて」「たかはすよ有りし京のおもかげも、又立かへり見るこゝちして」といふ、大人自筆の和歌を揭げたり。安田廣治の序、文政二年己卯〔二四七九〕正月、夏目甕麿の「都日記を彫れる所由」といふ跋文を揭ぐ。

◉石塚龍麿の傳は「古言淸濁考」の下にあり。

すゞのやおうりやくねんぷ

鈴屋翁略年譜　一巻　伴信友

卷首に、其の祖本居縣判官平建繩より宣長に至る世系を揭げ、次に年譜に入りて、享保十五年庚戌〔二三九〇〕五月七日子刻伊勢國飯高郡松坂に誕生せるより、享和元年辛酉〔二四六一〕九月二十九日曉、七十二歲にて松坂に死去せる年表を示す。一年毎に區畫して、上段に毎年號を、下段に年齡を、中段に略曆を記す。寶曆十三年、齡三十四の年以後は中段を更に二分し、其の下段に著書を載せ、安永二年齡四十四以後は此の下段を更に區分して其の下段に年々新門弟の數を記せり。文政九年丙戌〔二四八六〕九月二十九日編輯の業を畢へ、同十二年村田春門の序、本居大平の跋あり。同年出版す。

◉伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

すゞのやしふ

鈴屋集　五巻　本居宣長

著者鈴屋翁の歌集なり。卷一、卷二、卷三に近調の歌を揭げ、卷四に古風の歌を載せ、卷五には長歌を收めたり。本居春庭の序あり。

◉本居宣長の傳は「古事記傳」の下に出づ。

すゞのやたふもんろく

鈴屋答問錄　一巻　本居宣長

年來諸國諸弟子の質問に答へたるものなり。享和元年辛酉〔二四六一〕の編輯にかゝる。

◉本居宣長の傳は「古事記傳」に下にあり。

すゞみぐさ

涼草　一巻　建部涼袋

夏日の避暑に關することを記せり。或る極暑に際し、過去遊歷中の、避暑的雜事を記して、忘暑の料に充てたるなり。附錄あり、羇旅に關する類語を集めて作文の用に供す「俳諧談の序あり、寬政六年甲寅〔二四五四〕十二月出版す。

◉建部涼袋の傳は「歌文要語」の下にあり。

すゞめのもり

雀の森　一冊　高村和及

俳句の集なり。元祿三年庚午〔二三五〇〕孟夏の編にかゝる。

◉高村和及は僧たり。常長の門に出でて俳諧を善くし、露吹庵、直唱法師等の號あり。京の壬生村に住せり。著書は本書の外に、藤浪集、ひこばえ、番匠童、同增補、水整の閣等あり、元祿五年壬申〔二三五二〕正月十八日歿す、年四十四。

すゞりのうみ

硯の海　寫本五冊

成島司直、松平樂翁、堀田正敦、林大內記、新見正路其の他の文章を輯集したるもの。年代は近く弘化年中のまでをとれり。

すてごしふ

捨子集　四冊　高瀨梅盛

著者の俳諧集にして、萬治二年己亥〔二三一九〕十月編輯したるものなり。著者高瀨梅盛の傳記は「鸚鵡集」の下にあり。

すてごもんだふ

捨子問答　二卷　僧隆寬

淨土念佛の教義を和述したるもの。捨子なりし非人修行者と、或僧との問答に假託し、卑俗なる假字文にて綴られたり。著作年月未詳。貞享二年乙丑〔二三四五〕に刊行す。

◉隆寬の傳は「一念多念分別事」の下に在り。

すてものならびにきんすみいだしとうのるゐ

捨物竝金子見出等の類　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、文化十三年丙子〔二四七六〕より、安政三年丙辰〔二五一六〕に至る。

すはじやうぐうしやれいきうつし

諏訪上宮社例記寫　寫本二卷

信濃國諏訪社の緣起雜錄なり。下卷には下諏訪の緣起を揭げたり。書中に「當社草創歷年遼遠にして、未だ分明ならず、之れに加ふるに天正十年三月織田信長、甲州亂入の時、神社寶藏悉く回祿に罹る。緣起も此の時に至り燒失す。今僅に殘る所を以てこれを標出す」云々とあり。本書は文化十五年戊寅〔二四七八〕同社祠官の幕府へ注進したる者也。

すはじやうくわうじはつけいし

諏訪淨光寺八景詩　寫本一卷　僧寶山

信濃國一宮南方刀美禮神を、勸請したる武藏國豐島郡平塚庄日暮里邑淨光寺境內の八景を詠じたる詩を集めたり。享保十三年戊申〔二三八八〕井上通熙の序あり。編者寶山は同寺の住職なり。

すはだいみやうじんゑことば

諏訪大明神繪詞　寫本二卷　土佐隆盛

信州諏訪明神の緣起にして、繪は中務少輔隆盛の筆なるが、今其の繪は闕けり。詞は近衞右大臣兼章、宮內卿行忠、圓滿院二品親王、靑蓮院一品尊道親王等の筆に成れり。文明四年壬辰〔二一三二〕寫本の奧書あり。「續群書類從」卷七十三上下、神祇部第七十三に收む。

◉土佐隆盛は畫家土佐家の支族にして、伊豫守に任ぜられ、また中務少輔たり。父隆兼の技を承けて畫を善くせり。延文年中の人なりといふ。

すはだいみやうじんえんぎ

諏訪大明神緣起　寫本一卷

信濃國一宮南方刀美禮神を、勸請したる武藏國豐島郡平塚庄日暮里邑淨光寺諏訪大明神の緣起なり。卷末に、慶安中幕府より寺領を得、貞享中御朱印を得たること等を記せり。

すはりうたかのしよ

諏訪流鷹書　寫本二卷

本朝鷹之始卷と、三十六之祕傳卷と合せて諏訪神處の卷といふ。編年等詳ならず。

すはりうたかのしよ

諏訪流鷹書　寫本一卷

同流鷹故實の書なり。本朝鷹の沿革より、飼養法に至るまで詳しく記せり。

すふじんじやちんざゐぐんかう

周敷神社鎭座違郡考　一卷　壺井義知

延喜式神名帳なる伊豫國周敷郡周敷神社鎭座の地を考證論定す。其の神明帳の所載と鎭座の現地と其の郡の合はざることにつきて考說せるなり。享保四年己亥〔二三七九〕これを考す。「續史籍集覽」の中に入る。

◉壺井義知の傳は「官職浮說或問」の下にあり。

すまあかしめいしよき

須磨明石名所記　一卷

一の谷鵯越古戰場。平氏諸將の墳墓、內裏跡、兵庫湊川、淸盛、正成の事實其の他等同地方に於ける名所を略記せり。享保六年辛丑〔二三八一〕書する由末記あり。

すまあかしめいしよづゑ

須磨明石名所圖會　六卷　蔀（シトミ）關月

播州一圓の圖繪を本として、津の國難波より、須磨明石に至る海陸の順路、神社佛閣、名所古蹟等を詳敍したるものなり。

◉蔀關月の傳記は「山海名產圖繪」の下にあり。

すまのうらこせきき

須磨浦古跡記　一卷

光源氏、行平、敦盛等の舊蹟地として、各來由を記し、人丸、行平、賴政、俊成、定家、兼昌等の和歌數首を揭げたり。旅人のために、土人の作りたる者なり。

すまのき

須磨記　寫本一卷

菅原道眞左遷の時、京都より須磨浦に至りし道の記なり。されど菅公の作ならざる事は幾多の先輩既に論ぜり。本居宣長も「玉勝間」に、「須磨記といふものなどは、やゝ世にひろごりて、誰れもまことゝ思ひためる、これはたいみじき僞書なるをや」云云といふ。明和八年辛卯〔二四三一〕某の奧書あり。

すまふいんうんかい

相撲隱雲解　一卷　式守蝸牛

本朝相撲之濫觴、朝廷相撲之始、最手役之始、行司事之始、橫綱之許、吉川追風之先祖書、上覽之式、上覽土俵之古實、同相撲之勝負附、同行事之式、四十八手之古法、立合之意味、七體七足之虛實、相撲之批判、投手業之理解、以上の目につきて略說す。蓋し古來相傳の遺稿を補訂して寬政五年癸丑〔二四五三〕の自序を附して出版したるものなり。

すまふきらきならびにくけつ

角力舊記竝口訣　寫本一册　木村孫六

本書は一名「角力祕訣」といふ題下に解題せり。

すまふきげん

相撲起顯　九卷　三河舍翁

相撲の起原沿革を記し、安永三年甲午〔二四三四〕以來、弘化四年丁未〔二五〇七〕に至る每年春冬の興行每日の相撲勝負附を編輯したるものなり。

すまふしき

相撲式　寫本一卷　吉田追風

相撲の規式一切を記したるもの。式守說、力士目錄より、相撲の沿革、故實等凡て十箇條あり。文治年中の定なりといふ。寬延二年己巳〔二四〇九〕八月著者の奧書に、式守五大夫に傳授する由を記せり。著者吉田追風は本朝相撲行司十六代目なり。

すまふしき

相撲私記　寫本一卷　成島峯雄

寬政三年辛亥〔二四五一〕六月十一日、吹上にて將軍家相撲觀覽の時、義父和鼎に從て陪觀したる時の記事なり。

◉成島峯雄は幕府の儒員成島和鼎の養子なり。字を勝雄又叔飛といひ、仙藏と稱し衡山と號す。文化十二年乙亥〔二四七五〕七月六日歿す、年六十八。

すまふでんしよ

相撲傳書　一卷　木村孫六

本朝相撲の起原を諸書に徵證し、其の敎方、手合等を詳しく記したるもの。各手取組圖を揭げて、其の虛實を示したり。享保寅年〔七年か十九年か〕の自序中に「今此書者、古今相撲有功之敎形、猶亦戰具之組合、眞劍之中、各集相撲之家傳、故號相撲傳書矣」とあり。「溫知叢書」の第六編に收めたり。

◉木村孫六の傳は「角力祕訣」の下にあり。

すまふにんづ

相撲人圖　寫本一卷　藤原基光

古來の相撲の圖なり。元祿九年丙子〔二三五六〕藤原光成の奧書に「右件之圖者、本是畫所預土佐之祖、從五位下內匠頭基光竝に息男阿闍梨公、及巨勢公持之所圖也」とあり。

◉藤原基光は畫家土佐家の元祖なり、中納言清隆の子にして、初の名を盛光といふ。傳を巨勢金持より受けて佛畫に達し、遂に一家をなす。南都東大寺に仕し、春日を以て稱とせり。畫所預となり、從五

位上内匠頭に任ぜられまた越前守と稱す。其の遺品の著名なるものは、本書及び『三尊來迎』『阿彌陀佛』等なりとぞ。寛弘〔或は寛仁〕中の人なり。

すまふひけつ

角力秘訣　一卷　木村　孫六

土俵、四十八手、眞劍中の事、其の他數條角力の祕傳故實を記す。卷首に寛延二年己巳〔二四〇九〕八月、吉田追風の「式字說」、及び「力士目錄」を揭げ、卷末に、安永三年甲午〔二四三四〕寫本の奥書あり。⊙木村孫六は木瀨太郎大夫直政の嫡流にて、山中流藤原姓なり、初め喜平次と稱し、後入道して柳全守直といへると。別著に相撲傳書あり。

すみだがはかう

隅田川考　一卷　中神　守節

武藏國隅田川を考證したるもの。僧契沖、賀茂眞淵、山岡明阿、松平冠山、三島政行、高田與淸等の數說を參考し、古書と地形とに由りて詳博に考證す。⊙中神守節の傳は『慶長年中江戸圖』の下にあり。

すみだがはざつわ

隅田川雜話　（寫本）一卷

武藏國の隅田川及び其の近邊の神社佛閣の古今の沿革變遷、地名文字、其の他古今の雜話を記載したるものなり。或は『隅田川雜話』、また『隅田川雜書』とせるも皆同書なり。

すみだがはばいりうしんしよ

墨田川梅柳新書　六卷　瀧澤　馬琴

梅雅の一生を宗として作れる小說なるより、「梅柳新書」とは名けたりといふ。卜部惟通嵯峨野に孤を訪ふ、吉田少將野上驛に美人に遇ふ、光政避雨して赤縄に繫る、斑女花に寄せて黄金を賜ふ、龜鞠俳優して賊僧を欺く、盛景彩の江に胤時を殺す、松稚丸潛に白川山に遯す、忍宗太醉て西洞院を鬧す、金鷄凶を告げて惟房を陷る、天狗石を飛ばして松雅を救ふ、春雨厚原野に山客と戰ふ、光政平尾郷に妻子を殺す、澤石淵の惡棍怒て少年を鞭つ、墨田川の津人憐て狂女を渡す、因を說き果を示す楊柳塚、奸を鋤き冤を雪む大團圓等八編十六條に分ち綴れり。文化三年丙寅〔二四六六〕の自序あり。⊙瀧澤馬琴の傳は『南總里見八犬傳』の下にあり。

すみだがははつけいしいか

隅田川八景詩歌　一卷

隅田川秋月、關屋落雁、潮入夕照、橋場夜雨、待乳晴嵐、駒形歸帆、洲崎晩鐘、富士暮雪。以上八景の詩歌圖畫等を纂む。詩歌には作者の名をも揭げたり。『隅田川木母寺略緣起』『隅田川和歌』と合刻す。

すみだがはもくぼじりやくえんぎ

隅田川木母寺略緣起　一卷

武藏葛飾郡須田村木母寺〔梅柳山隅田院〕の略緣起にて、梅若の事績を記せり。書中天正十八年庚寅〔二二五〇〕將軍家より梅柳山の號を授けたる由あり。『隅田川八景詩歌』『隅田川和歌』とを合刻せり

すみだがはわか

隅田川和歌　一卷

在原業平の隅田川邊に詠める歌より、木母寺三十九世の住僧典海の歌に至るまで、凡そ五十首の和歌を收む。『隅田川木母寺略緣起』、『隅田川八景詩歌』等と合刻せり。

すみだはら

炭俵　二卷　志田　野坡

芭蕉、野坡、利牛、孤屋、嵐雪、許六、その他の俳諧を集めたるもの。芭蕉の門人志田野坡、小泉孤屋、池田利牛三人の撰集するところにして俳諧七部集の一なり。元祿七年甲戌〔二三五四〕撰集して同年出版す。⊙志田野坡は有名の俳人なり、越前に生れ、字を彌究通稱を半次郎といふ。樗木社、樗子、淺生庵、野坡等は其の號なり。最初西海に遊び、大阪に寓し、後江戸に住して當時に俳名を擧げたり。元文五年庚申〔二四〇〇〕正月三日、七十八歲にて歿す。

すみともまさかどとうざいぐんき

純友將門東西軍記　（寫本）一卷

朱雀天皇の御宇、承平六年丙申〔一五九六〕藤原純友、平將門等の反亂戰爭を記したるもの。『續群書類從』合戰部に收むるものは寛文五年乙巳〔二三二五〕の寫本に基き「將門純友東西軍記」と表題せり。

すみよしうたあはせ

住吉歌合　一卷

道經、仲房、重道、親房、その他の十番歌合にて、神祇伯顯仲の判にかゝる。大治三年丁未〔一七八七〕九月二十八日、住吉社頭にて行ひたるものなり。

『群書類從』卷百八十四、和歌部第三十九に收む。

すみよしをどり

住吉踊　一册　北條　團水

俳句の集にて、元祿五年壬申〔二三五二〕の編輯にかゝる。⊙北條團水の傳記は『新永代藏』の下にあり。

すみよしこじつき

住吉古實記　二卷　僧　義統

此の書は一名『墨江紀略』の下に解題せり。

すみよししやうたあはせ

住吉社歌合　一卷

社頭月旅宿時雨、述懷の題にて、實定、實房、俊惠、淸輔、成範、實家、其の他四十餘家の七十五番〔各題二十五番〕あり。嘉應二年庚寅〔一八三〇〕十月九日の歌合なり。『群書類從』卷百八十六、和歌部第四十一にあり。

すみよししやうたあはせ

住吉社歌合　（寫本）一卷

承元二年戊辰〔一八六八〕五月二十九日、住吉社に於ける歌合なり。

すみよししやしよじんじしだい

住吉社諸神事次第　（寫本）一卷

住吉神社年中の神事次第を記錄せること名の示すが如し、正月一日、二日、三日、四日、五日、七日、八日、十日等の行事より、十二月晦日社頭御煤拂までを記せり。『續群書類從』卷四十七、神祇部第四十七に收む。

すみよししやほうのふひやくしゆ

住吉社奉納百首　（寫本）一卷

永享九年丁巳〔二〇九七〕三月十五日住吉社に奉納したる百首和歌なり。春二十首、夏十首、秋二十首、冬十首、戀二十首、雜二十首等なり。作者は公保、實雅、持之、定親、親世、資豐、瑞禪、宗繼、資任その他等なり。『續群書類從』卷三百八十四、和歌部第十九に收めたり。

すみよしじんじやじんだいきじ

住吉神社神代記事　（寫本）一卷

「攝津國住吉神社神代記事」と標題して、同社の故事を漢文にて記したるものなり。明治十年內務省の謄寫するところなり。

すみよしじんじやつもりしけいづ

住吉神社津守氏系圖　（寫本）一卷

康平三年庚子〔一七二〇〕神主に補せられたる國基を祖として、本支系數十代の後、國家、通宣、國通等に及べり。『續群書類從』卷百八十一、系圖部第七十六にあり。

すみよしせんく

住吉千句　一卷　大島　蓼太

蓼太、夜兎、吐月の三吟千句にて、安永四年乙未〔二四三五〕の作なり。同年の自序あり、翌年發行す。近年發行の俳諧文庫第十七編『蓼太全集』の中にも收む。⊙大島蓼太の傳は『筑波紀行』の下にあり。

すみよしだいじんぐうねんちうぎやうじ

住吉大神宮年中行事　（寫本）一卷　津守　國敎

同神社の年中行事を記す。天和三年癸亥〔二三四三〕六月十七日、敕を奉じて注進するところなり。同年松下見林の後序あり。著者津守國敎は從五位上たり。

すみよしひき

住吉祕記　一卷

住吉社の緣起、古例、神事、寶殿等を記したるものなり。年代詳ならず。

すみよしひやくしゆ

住吉百首　一卷　松平　定信

百首の組題を詠して住吉社へ納めたるものなり。文安年間の徹書記の組題に倣ひて、同題の歌をよみたるなり。⊙松平定信の傳は『花月草紙』の下にあり。

すみよしまうでのき

住吉詣記　（寫本）一卷　足利　義詮（ヨシアキラ）

一名『義詮公難波紀行』の下に解題せり。

すみよしめいしようづゑ

住吉名勝圖繪　五卷　秋里　湘夕

堺住吉の神事祭禮年中行事、神宮寺由來、緣起、住

吉神輿受渡、神木由來等を繪圖したるもの。畫工玉山の寫すところにして、寬政七年乙卯〔二四五五〕花洲主人〔三位大中臣藤波寬忠〕の序あり。

◉秋里湘夕の傳は『近江名所圖會』の下にあり。

すみよしめいしよし

住吉名所志　一卷

堺住吉社の緣起、祭禮、古蹟等を記載せり。享保元年丙申〔二三七六〕原田亮節の序、同丁酉歲白鷗堂の序あり。其の序に據れば白鷗堂も此の編輯に與りし由なり。著者は浪華の書賈田寺某と記せり。

すみよしものがたり

住吉物語　二卷

中納言兼左衞門督某の女、繼母の虐待に遇ひて、住吉に落魄し、後立身せし趣に作り成せる物語なり。本書の事、古くは『枕草紙』『今昔物語』等に、近くは契沖、季吟等の說ありて、何れもその古き作なることを云へれど、今日に傳はるものは後世の僞作也。

すみれぐさ

すみれ草　三卷　北村　久備

源氏物語の系圖並に年立を委しく撰出したるものなり。初學者の爲めにとて見易く表示せり。

◉北村久備は備中松山の藩士にて平田篤胤の親戚なり。別に『勇魚取』といふ隨筆ありといふ。文化年中の人にして細井貞雄の『姓氏考』に序したることあり。年代知るべし。

すみれのせつ

すみれの說　（寫本）一卷

すみれ草と、れんげ草との異同を辨じ、例證を擧げて圖說したるものなり。

するがあそび

駿河安蘇備　（寫本）二卷　永田　可安

駿河國の名勝地誌なり。嘗て其主君に從て同國に遊びたる時、自ら見聞し踏査し、かねて諸家の著書を參して此の書を編めりしなり。嘉永四年辛亥〔二五一一〕の自序、同年蘆河外史の序、同五年松木猶秀の跋等あり。著者永田可安は東都の人にして、南溪と號せり。

するがおそでがき

駿河御袖書　（寫本）十卷

本書は一名『駿話本別集』といふ題下に解題せり。

するがおぼえがき

駿河覺書　（寫本）一卷

寬文九年己酉〔二三二九〕以下、元祿年中に至る駿府城代の人名を記し、且、寺社、山川、町等の數、朱印地、領村高、及び石高等を記したり。

するがおんとめちやうぬきがき

駿河御留帳拔書　（寫本）一卷

寬永十九年壬午〔二三〇二〕より、慶安四年辛卯〔二三一一〕に至る駿府御城番の書留を抄錄したるもの。一に『駿州御留帳寫』ともいふ。寬政九年丁巳〔二四五七〕三月二十五日、太田覃書寫の奧書あり。

するがぐさ

駿河草　（寫本）一卷　林　信篤

德川家康時代なる戰場記事を抄錄したるもの。卽ち著者の家に傳ふるものゝ中より、凡て七通を拔き出で各當年月日を記入せり。享保元年丙申〔二三七六〕十一月、同二年六月、七月等に八代將軍吉宗へ書き上げたるものなり。

◉林信篤の傳は『鳳岡林學士集』の下にあり。

するがこくし

駿河國志　（寫本）一卷

油井驛、矢田壘、蒲原驛、吹上六本松、內房、富士河、白鳥山壘、厚原、福泉寺、吉原驛、今泉村、善德寺、天香久山壘、大宮神田、富士山、同出現傳說、同正見之圖、同山燒、淺間神社、神山、手向山、御手洗川、星合山、眞柴川、勝の橋、衣掛山、白糸の瀧、氷室、波志太山戰爭、浮島ヶ原、足高山、原宿、大泉寺、千本松原、沼津驛、三枚橋の城、興國寺城蹟、車返、木瀨川、遇澤、竹の下、足柄山壘、桃園、狩野川、德倉城蹟、橫走關、千貫樋等を略記せり。

するがこくし

駿河國志　（寫本）八卷　榊原　長俊

國號郡邑、並に府城創業の始を論じ、當時府城の大意、護衞の次第、府內市井の街數を記し、府外は東三島驛、千貫樋に至る凡十三里餘、西は島田驛大井川に至る凡そ八里餘、艮方は山崎、羽鳥、建穗、椎尾、足久保、猪川に至る凡十餘里間の大略を記せり。每條眼目の及ぶ所を究め、古老の知るところを盡し、且稗錄野乘に考訂して、山海、地理、川谷、宮社、巖窟、泉石、橋路、村巷、寺院、墳墓、人物、題詠の類殆んど載せざるなしといふ。天明三年癸卯〔二四四三〕小春の自序あり。

◉榊原長俊は江戶の人。一擧と稱し、子章また五陵と字し、香山また忘筌齋と號す。儒學者にして、故實禮式等に精通せり。蓋し伊勢貞丈の門に入りて學べるなり。著者は本書の外に江戶誌、本邦刀劍考、東鑑異本考、東鑑部類索引、東鑑要目集成、中古甲胄製作辨等あり。寬政九年丁巳〔二四五七〕十一月二十二日、六十六歲にて歿す。江戶谷中感應寺中了院寺に葬る。

するがこくしほい

駿河國志補遺　（寫本）七卷　猶村　惟明

榊原長俊の『駿河國志』の遺漏を輯錄したるもの也。著者松平定興に仕へ、定興の父定常が、寬政八年駿府加番となり、翌九年丁巳〔二四五七〕府中にありて惟明に編輯せしめたるものなりといふ。堀直之に作らしめたる社寺勝地及び古器等の圖を附錄せり。著者猶村惟明は允卿と字し吉職と稱す。後龜井氏を嗣げり。松平定興に仕へたりといふ。

するがこもんじよ

駿河古文書　（寫本）一卷

駿河古來の文書を輯錄したるものにして、珍奇のものいと多し。第一天正五年丁丑〔二二三七〕九月十八日跡部大炊助より村岡大夫へ與ふる一通より、天文七年戊戌〔二一九八〕五月二十二日の今川義元の文書に至るまで凡て百〇九通を收めたり。

するがさうまつ

駿河草末　（寫本）七卷

駿河國の地誌に、『駿河草』といふものあり、本末に分つ。本書は其の末に屬するものにて、第一卷に安倍郡、第二卷に益頭郡、第三卷に志太郡、第四卷に有渡郡、第五卷に廬原郡、第六卷に富士郡、第七卷に駿河郡の名所舊蹟等を載す。寬延二年己巳〔二四〇九〕志貴昌澄の凡例、天明三年癸卯〔二四四三〕植野興龍の奧書あり。七卷三冊に寫傳す。

するがし

駿河志　（寫本）一卷

駿河一國の時候形勢を記したるものにて、駿府よりはじめて大堰川附り島田に終れり。享保十八年癸丑〔二三九三〕寫本の奧書あり。

するがしれう

駿河志料　（寫本）七十九卷　高　平

卷一に總載、疆域、建置沿革、制度變革、田租、調府、國造、國司郡司、軍團。卷二に總載、武內神社、國司歷名、今川武田歷名、城主次第、古城、貫高、國高。卷三に總載、上古中古近世驛路等を詳說し、卷四以下卷六十九までは各郡別に其の地誌を記し、卷七十以下、七十六までに各眞景圖を收め、卷七十七に古器卷七十八、七十九に和歌を載せ末に駿河國圖を添へたり。著者の凡例あれども年時を記さず。七十九卷凡て八十一冊に寫傳す。

◉高平は國府の人にして、淺間新宮前神主とあり、同社神主男高景の校正するところなり。

するがせうし

駿河小志　一卷　羽倉　用九

此の書は一名『駿府志略』の下に解題せり。

するがぞめめいしよき

駿河染名所記　（寫本）一卷

駿河國中の名所を略記したるもの。稍粗雜に失す。江府小川住花杖の自序あり序中に、「東西は四里を限り、南北は二里にして止む。所謂駿河染とは、府に錐をとるの謂なり」といへり。書中に、正保二年乙酉〔二三〇五〕の林羅山の鐘銘等あり。

するがないぐわいじしやだかはうもつ

駿河內外寺社高寶物　（寫本）一卷

駿河內外の寺社高、寶物等を記載したるものなり。

するがなすび

駿河茄子　一卷

種々俗間の滑稽話をかき集めたるものなり。けんやく、日出度振舞、雷の子、藪醫者等の話題にて三十餘あり。江戶下谷伏見屋善六出版す。

するがのくにいまがはかちうぶんげんぼ

駿河國今川家中分限簿　（寫本）一卷

今川義元の領地中駿河國百石以上の分限を人名每に列記したるものにて、永祿三年庚申〔二二二〇〕正月十一日の記にかゝる。

するがのくにがうちやう

駿河國鄕帳　（寫本）一卷

駿河全國七百九十五箇村、二十三萬七千九百三十七石四斗七合二勺八才の石高を、各郡村鄕別に列

載統計したるものなり。末に元祿十五年壬午〔二三六二〕十二月、太田攝津守、井伊兵部少輔との署名あり。

するがのくにくのうじえんぎ

駿河國久能寺緣起　（寫本）一巻

久能寺の緣起を略記したるもの。康永元年壬午〔二〇〇二〕六月十七日記すところなり。『續群書類從』巻八百〇四、釋家部第八十九に收めたり。

するがのくにぐんそんなよせちやう

駿河國郡村名寄帳　（寫本）一巻　中川　忠英

一國各郡の村名を列擧し、往々城下町名湊附宿附等をも加へたり。文化元年甲子〔二四六四〕中川忠英幕府の命を奉じて諸國村名帳編輯總裁となり、十數人を指揮し、四年にして成りたるものなるが、本書は其の中より、駿河一國を拔出したるもの也。

◉中村忠英の傳記は『清朝紀聞』の下にあり。

するがのくにしはうこくきやうづ

駿河國四方國境圖　（寫本）一折

駿河國四方の國境圖なり。未定稿にして舉りたる者の如し。圖端に道法、七郡の石高村數を揭げたり

するがのくにじゆんそんき

駿河國巡村記　（寫本）十九巻　山梨　治憲

駿河國の村々を巡回したる時の地誌的紀行なり。各郡を一巻若しくは數巻に分ち、巻毎に某々地初度巡覽帖とやうに題して村里、行程高、社寺院、物產、山川、古境、舊家、古戰場、墳墓、驛路等を記せり十九巻七册に寫せり。

◉山梨治憲は駿河國庵原の人。玄度また叔子と字し、稻川また東平と號す。夙に狹山侯の儒官陰山に就きて儒を學び、また大岳太仲、僧石梁等に學び、更に音韻の學に精通し、また書法に長じたり。著書は本書の外に說文緯、皇水經、孟涙俚言、稻川集等あり、文政九年〔二四八六〕七月、五十餘歲にて歿す

するがのくにちづ

駿河國地圖　（寫本）一折

東は豆相界、西は遠州界に至り、南は海、北は甲信界に至れる駿河國古地圖なり。朱線を以て道路を示し、里程等を圖端に揭げたり。

するがのくにのづ

駿河國之圖　（寫本）一折

同國一圓の市村山川寺社陣地等を彩色圖したるものなり。編者年月等詳ならず。

するがのくにふどき

駿河國風土記　（寫本）一巻

本書は一名を『薦河風土記』といふ該題下に解題す

するがのくにふどき

駿河國風土記　七巻

日本總國風土記中、駿河國風土記の殘册にして、第五十三鳥渡郡。第五十四伊穗郡。第五十五安辨郡。第五十六富士郡、薦河郡。第五十七益頭郡。第五十八止駄郡等なり。文和元年壬辰〔二〇一二〕、明曆二年丙申〔二三一六〕萬治元年戊戌〔二三一八〕等の奥書あり。寫本は第五十六を上下に分ち、凡て七巻とせり。『群書類從』巻五百、雜部第五十五にも收めたり。後人の假託せしものなり。古書にあらず。

するがのくにむらわけ

駿河國村分　（寫本）一巻

駿河一國一村の總高を記し、各村地頭の姓名を記したるものなり。大久保出羽守領地駿東郡下大狩村より、淺間領社人岡村兵庫に終れり。

するがふどき

駿河風土記　（寫本）一巻

日本總國風土記中、第五十三より五十八に至る殘册『駿河國風土記』と同書にて、書名と册數とを異にするのみ。後人假託の僞撰なり。

するがみやげ

駿河土產　（寫本）十巻　大道寺友山

駿府在城の德川家康が言行逸話に關することを雜記したるもの。「權現樣於駿府城或時本多佐渡守へ秀忠樣御律義に就き上意の事」といふ項より、「關東御入國後江戶御藏米過多候段御勘定方より申上候に付權現樣御不興の事」といふ項に至る數十項を記し、十巻一册に作る。別に五巻五册に作りて寫傳せるもあり。

◉大道寺友山の傳は『岩淵夜話集』の下にあり。

するがめいしよき

駿河名所記　（寫本）一巻

同國一圓の名所記なり。巻首の「駿河」の字擬五種を揭げて論證し、同國の故事來歷等を記し、島田大堰川の事より天神の條に至る二十四條あり。和歌を用ふること多し。

するがめぐり

駿河免久里　（寫本）一巻　松平　定常

駿河紀行なり。駿府の衞にありて、巡見したる所々を折にふれて書き集めたるもの、一册となりたるなり。寬政六年甲寅〔二四五四〕十月七日に始り、翌年八月十日に終れり。

◉松平定常の傳は『池田家譜集成』の下にあり。

すんがうたいめいき

駿江太命記　（寫本）一巻

政法賞罰任命其の他に關する教誡なり。慶長の末の頃、德川家康駿河在城の時、將軍秀忠より、井上主計頭を使者として遣したる時、主計數日駿府にあり、天下の政道に關し、秀忠を補佐すべき條々、家康より承りて、江戶に歸り、委細秀忠へ言上したる始終の事を書き留めたるものなり。何人の書き留めたるかを詳にせず。

すんこくざつし

駿國雜誌　（寫本）四十九巻　阿部　正信

駿河國の國名、風土氣候、俚言、郡鄕庄領名等より、封疆の廣狹、貢賦の多寡、山川の險夷、田土の肥瘠、民俗物產の如何、其の他凡ての地誌的事項、大小遺漏するところなく網羅せり。榊原長俊の「駿河國志」、栖村惟明等の補遺等を基として、其の脫漏を拾集して大成せるなり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕の和文自序、同十二年大學頭林皝の漢文序あり。四十九巻、目錄共に七十八册に寫せり。

すんしうおんとめちやううつし

駿州御留帳寫　（寫本）一巻

此の書は一名『駿河御留帳拔書』の下に解題せり。

すんしうくのうざんのづ

駿州久能山之圖　（寫本）一折

德川家康を埋めたる駿河久能山の宮社、寺院、奇木、怪石、靈泉等を詳細に記されたり。文化七年庚午〔二四七〇〕八月、片岡直亮寫本の奥書あり。

すんしうせいしうさいやくき

駿州勢州採藥記　（寫本）一巻　小野　職博

文化元年甲子〔二四六四〕七月君命に依て、同地方に採藥したる時の日記なり。

◉小野職博の傳は『飲膳摘要』の下にあり。

すんしうぞうぜんじのき

駿州增善寺記　（寫本）一巻

駿河增善寺の緣起由來を略說したるもの。元祿十五年壬午〔二三六二〕寫本の奥書あり。『輪池叢書』第二に收む。

すんしうたなかじやうのづ

駿州田中城圖　（寫本）一折

駿河國有度郡田中城の圖にして、城廓の結構、四圍の溝渠等を細寫せり。編者の名は知れざれど、軍學者の手に成りしものなるべしといふ。

すんしうはざまがたかうしでん

駿州羽左間縣孝子傳　（寫本）一巻

寬保の初、本多紀州の牧正珍の預所、駿州志太郡、羽左間縣に、孝子三太郎といふ少年あり、早く母を喪ひ、病父に仕へて至孝なる事、州牧に聞えて米錢の賞賜を受けたる顚末を漢文にて記したる者也。

すんしうめいしようし

駿州名勝志　三巻　川合　長行

駿河國各郡に就きて其の名地勝域を說明したるもの。歷史、記錄、物語、歌集等百餘種の古書中に引證して、其の應用せられたるものを一々證明したるなり。著者の歿後、門人植松修道子敬の校正するところにかゝる。天明三年癸卯〔二四四三〕秋山章の序、同四年植松修道の跋、同六年諸島の序等ありて同年上梓す。

◉川合長行は駿東の人。子方と字し隣山と號す。本書に序せる足利秋山章の友なる山同序中にあり。

すんしうやまだにざゑもんきじ

駿州山田仁左衞門紀事　（寫本）一巻

元和年中駿府馬場町に寓居したりし山田仁左衞門長政といふもの交易商船に伴ひ、臺灣へ渡り、更に暹羅へ渡りて國王となりし始末を詳細に記し、同國にて、日本援兵と號して隣國と戰ひ勝利を得たる時の軍艦を畫て日本に贈り、淺間宮に奉納せりといふ額面を添へたり。其の端に「今天竺暹羅國住

居寛永三年丙寅年〔二二八六〕二月吉日、山田仁左衛門長政」と記せり。

すんじやうごばんしうおぼえがき

駿城御番衆覺書　（寫本）一卷

駿河城に番詰たりしもの丶覺書を輯めたるものにて、見るに足るものなし。卷末に寶曆九年己卯〔二四一九〕駿府深草御小屋に住して寫せる由を記す。

すんだいおういくん

駿臺翁遺訓　（寫本）一卷　室　直清

詩文その他修學の心得に關する翁の談話を門人等の筆記したるものなり。全編問答體に成れり。

◉室直清の傳は「駿臺雜話」の下に出づ。

すんだいざつわ

駿臺雜話　五卷　直清

學術道德に關する隨筆なり。卷を五常の名目に分ち、仁集に老學の自敍、釋源空が誓等より、釋寂室が祕訣に至る十八條。禮集に天下は天下の天下、直諫は一番鎗より難し等より、二人の乞兒に至る十三條。智集に燈臺もと暗し、逝匿が口傳等より、大獻外になしに至る十七條。信集に月は世々の形見、離騷の祕事等より、年にはづかしに至る十六條を掲げたり。著者は卷首に目錄を掲げて、さていふやう「駿臺問答の話、是れに限るにあらず、經傳の文を論ずれば、所論の書により、諸生の問に答れば、所問の人に從ふ。此の故に所論の文、參差として齊しからず、所問の事多端にして一にあらず、今こゝに所記は、正道を明にし、邪說を辨じ、凡て學問の大綱に係り、又は世俗の諺淺近の語と雖も、平生の事に通じて觀者の益ともなるべき事どもを採り集めて記し置くになむありける。由りて觀るに便りあるべき爲めに章段を分ち、其の中の提要の一語を摘て編に名付けらし」云々といへり。享保十七年壬子〔二三九二〕九月中旬の自序、寛延三年庚午〔二四一〇〕十一月藤原明遠の序あり。

◉室直清は子禮また汝玉と字し、順祥と稱す。鳩巣、滄浪、靜倹等の號あり。幼にして神童の稱あり、年十四、加賀侯に召されて「大學」を講ず。侯其の英敏を歎美して、祿を與へ京師に遊學せしむ。木下順庵、羽黒成實等の門に遊び、學術日月に進み、到るところとして同門に尊信せられざるものなし。貞享三年加賀に還して、徒を敎へまた書を著す。正德元年新井白石の薦擧によりて、幕府の儒官となる。即ち邸を江戶駿河臺に賜り、是れより、人々駿臺先生と稱す。推でられて將軍吉宗の侍講となる。吉宗之れを信ずること厚く、政治の得失をまで、親しく諮詢せり。著書は本書の外に、大學新疏、義人錄、五常五倫名義、六諭衍義大意、周易新疏、中庸新疏、西銘詳義、太極圖述、士說、楠正成諸士敎、國喪正議、獻可錄、不正抄、文公家禮通考、神儒問答、朝鮮客館詩文稿、鳩巣遊話、鳩巣先生祕錄、鳩巣先生文集、同後編、同補遺等あり。享保十九年甲寅〔二三九四〕八月十二日歿す、年七十七。

すんだいずゐひつ

駿臺隨筆　（寫本）五卷　室　直清

和漢古今の雜事を隨筆せると他の雜話と同一體なり。著者室直清の傳は「駿臺雜話」の下にあり。

すんてつろく

寸鐵錄　二卷

四書五經中の語を撰出して、假名文もて註解したるものなり。寛永五年戊辰〔二二八八〕板本二冊に發行す。

すんぱふせう

寸法抄　（寫本）一卷

裝束の寸法を記したるものなり。卷末に「永享十一年〔二〇九九〕七月十三日從二位判」とあり。天明三年癸卯〔二四四三〕源忠理の奥書に「右高倉家抄なり、祕藏すべし」とあり。

すんぷあんないき

駿府案內記　（寫本）二卷

駿河及び近在の名所舊蹟諸案內を略記したるものなり。上卷に島田大堰川より府中天神に至る二十三箇所。下卷に靈社より黃瀨川に至る三十箇所を掲げたり。

すんぷかうぢよまきのきじ

駿府孝女滿喜記事　一卷　昌　樹

駿府にて母に孝養を盡したる滿喜女の事績を記したるもの。天明八年戊申〔二四四八〕の自序跋、及び羽太正養の附言、武者小路實純の歌、林孟高の跋等を掲ぐ。

すんぷき

駿府記　（寫本）九卷　後藤　光次

本書は一名「駿府政事錄」の下に解題せり。

すんぷきんざいじゆんけんしふ

駿府近在巡見集　（寫本）一卷

駿府近在の名所、社寺凡そ百餘を略記したるものにて、元祿十六年癸未〔二三六三〕の覺書なる由を末書せり。

すんぷじやうのづ

駿府城圖　（寫本）一折

同城圖、廓外諸士の邸宅、社閣、町村並に塘堤等に至るまで頗る詳密に記せり。

すんぷじやうのづ

駿府城圖　（寫本）一鋪

本圖は駿城本丸より、外濠に至るまでの各所を圖したるなり。圖末に町數二千三百九十五、家數一萬二千四軒、橋數十箇、社寺數五十九等の統計を示せり。慶長年中の圖なるべし。

すんぷじゆんけんき

駿府巡見記　（寫本）一卷

寶永二年乙酉〔二三六五〕の記にて、駿府中の神社、佛閣、名所、舊蹟等の來歷を略記し、古歌をも擧げたるものなり。

すんぷじゆんけんばのづ

駿府巡見場圖　（寫本）一折

駿河府中より、四方巡見使の至るところを圖したるもの。東山井驛、西金屋驛、南三保久能山、北午妻村を限りて圖せり。圖傍には道程、符號等を記す。

すんぷしりやく

駿府志略　一卷　羽倉　用九

興替、都城、海港、山水、寺廟、古蹟、人物、物產の八門に分ちて、其の大略を記せり。例言第一に曰く「此編所ㇾ載、斧畫方五里、其在二畫外一者、雖二名山大川奇事異蹟一、一切不二采入一焉」とあり。其の範圍知るべし。全編漢文にて記す。一名を「駿河小志」といふ。文政十二年己丑〔二四八九〕仲秋出版の活字本なり。

◉羽倉用九の傳は「簡堂叢書」の下にあり。

すんぷせいじろく

駿府政事錄　（寫本）九卷　後藤　光次

慶長十六年辛亥〔二二七一〕八月朔日より、元和二年丙辰〔二二七六〕十二月二十九日に至る駿城の細大事を記したるもの。朝野の政令、中外の擧措等より、毎日の瑣事末務までを記す。漢文の記なり。天保七年丙申〔二四九六〕林衡の跋あり。或はいふ本書は林羅山の作なるを、後藤光次の名にて行へり。

◉後藤光次は庄三郎と稱し、寶貨鑄造の役を掌る、また文學あり、慶長年間駿府に在職し、林羅山と相謀りて學校を起したることあり。本書は駿府在職の日、官暇に編したるものなり。

すんぷづ

駿府圖　（寫本）一鋪

東久能山矢部村邊に至り、西宇津谷に至り、南當日山に至り、北安部郡下村邊に至れる、駿府及び近在の方角等を圖せり。

すんぷないぐわいじしやたかはうもつ

駿府內外寺社高寶物　（寫本）一卷

駿府內外寺社につき。各開基、本尊、寺領、社領、寶器、境內由緒書、堂塔、鐘銘等を詳記す。寺社より書出したるもの丶末には、多く寛政八年丙辰〔二四五六〕の記あり。

すんぷめいしやういちらんづ

駿府名勝一覽圖　一折

駿府の名勝の地圖にして、先づ市街を全圖し、屋敷、明屋敷、寺社、町家、海河、橋路、山土手、村名等を色示し、久能山眞景は圖端に別揭し、更に諸國諸名地への行程を附記し、江戶書物問屋大和屋喜兵衛方より出版す。

すんやうちようこ

駿陽徵古　（寫本）六冊

駿河國中の古文書を編輯したるもの。凡て數百通皆實物のまゝを存せり。蓋し享保元文の間、幕府民間に係ふるところの古文書を徵したるが、本書に收むるものは、當時の蒐輯に漏れたるものなるべし。而して本書六册中、一册は、右享保元文中に幕府に差し出したる古文書の目錄なり。千餘通を揭ぐ、世に修史家の重寶たり。

すんわほんべつしふ

駿話本別集　（寫本）十卷　瑞　龍　軒

「權現樣於駿府本多佐渡守へ秀忠御律義上意の事

明智光秀出語老人雜話」より、「關東御入國御識米御貯之事」に至る三十餘目、駿河土產、武家閑談、岩淵夜話、秀賴事記等を參考して、德川氏に關する雜話を記せり。一に「駿河御補遺」ともいふ。寶曆六年丙子〔二四一六〕の作なり。

◉瑞龍軒は名を茂雄といひ、恕翁と別號す、武州豐島郡麻布の產なり。時に年古稀なりきといふ。

せ

せいあせう

井蛙抄　（寫本）二卷　僧　頓阿

歌學上の評論なり。明應三年甲寅〔二一五四〕正月十一日の奥書に「右此書者頓阿法師、對爲世卿所被聞書也。號井蛙抄六軸、合爲一册、於二條家、尤爲祕藏者也」とあり、尙諸家の奥書多し。「續群書類從」卷四百六十二上下、和歌部第九十七に入れたり。寶曆二年壬申〔二四一二〕に出版せられたる六卷の版本もあり。

◉頓阿の傳は「高野日記」の下にあり。

せいあんきぶん

成安記聞　（寫本）二卷

寛政享和の頃德川幕府に差し出したる諸家の伺書類を編輯したるものなり。大名、旗本、寺院等に關せるものなり。

せいあんせんせいいしふ

省庵先生遺集　十一卷　安東　守約

著者の詩文集なり。卷一に賦、七、論、辨、解。卷二に傳、贊、箴、銘。卷三に序。卷四に題跋、說、記。卷五卷六に書。卷七に文辭、碑、誌。卷八に古詩。卷九に五言律排律。卷十に七言律。卷十一に七言絕句等を收めたり。別に一卷目錄を添ふ。元祿十五年壬午〔二三六二〕南部景衡の序、同十六年貝原篤信、山崎道貞の序、西格庵の跋あり、享保元年丙申〔二三七六〕安積覺の序を附し、同六年孫守經序凡例等を附して出版す。

◉安東守約の傳は「三忠傳」の下にあり。

せいあんぶんせう

精菴文抄　（寫本）三卷　小澤　斑美

著者の漢文數篇を寫したるもの。末に諸家の文章を評註したる「鍼砭錄」二卷を附す。凡て二十四枚の寫本なり。

◉小澤延美は自炤と字す。別に十三經考勘記補遺、二十二史臑、唐書土貢名物考、辨志錄、山海經辨譌、水經注讀記、三藩通史、越後武林傳、眼學新書、百際漫錄、傷寒論爽解鍼砭錄等の著あり。

せいゐきものがたり

西域物語　（寫本）三卷　本多　利明

和漢洋の雜事を筆錄せるもの。和漢の事は人々の既に知る所なれば、西域を取て特に書名としたる由、序文中に見えたり。文章は通俗にして、事實は多く露骨的に表白せられたり。寛政十年戊午〔二四五八〕七月中旬の自序あり。

◉本多利明は通稱を三郞左衞門といひ、號を魯鈍齋といふ。算數の學に長じ兼て蘭學に通ず。本書の外に「蝦夷國風俗人情の沙汰」三卷を著せり。

せいいこんにちはう

西醫今日方　六卷　藤森　普山

西洋にて近年使用する藥劑處法等を集錄せり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕弘化四年丁未〔二五〇七〕同五年等諸家の序あり。

せいいつしふせつ

精一集說　一卷　淺見　安正

本書は著者の和漢學雜說を編輯したるものなり。

◉淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

せいいとくかうはうづしん

世醫得效方圖眞　（寫本）五卷

草木を網羅して着色寫眞したるものなり。著者年代共に詳ならず。

せいうしようかうへう

晴雨昇降表　（寫本）一卷

文政十年丁亥〔二四八七〕七月一日より、翌年六月三十日に至る每日朝午夕三度の晴雨を測量表記したるものなり。

せいうんこじやうぞろへもくろく

青雲古狀揃目錄　一卷

今川狀、手習狀、腰越狀、義經含狀、辨慶狀、熊谷狀、同返狀、大阪狀、同返狀、曾我狀、同返狀等を集め、大書して當年童女の習字本讀本に充てたるものなり。年代詳ならず。

せいえうさんぱふ

精要算法　三卷　藤田　定資

點竄術の自設自答にして、各術文を附したる算學書なり。其の撰法は日用至要の問題より、漸く進みて高尙の算法に及べり。此の撰法當時以前に替て見ざる所にして實に算題の設法本書より一變す。是を以て當時世に隨一の算學書と稱せり。安永八年己亥〔二四三九〕の出版にかゝる。

◉藤田定資は權平と稱し、雄山と號す。山路主住の高弟にして算學の名四方に聞え時人名人を以て稱せり。有馬中務大輔に仕へて文化四年丁卯〔二四六七〕八月六日卒す行年七十四。

せいえうさんぱふきげん

精要算法起源　（寫本）一卷　會田　安明

精要算法の問題を詳解したる書なり。享和元年辛酉〔二四六一〕に成れり。

◉會田安明の傳は「算法古今通覽」の下にあり。

せいえうぜんろく

政要前錄　（寫本）二卷

正德二年壬辰〔二三七二〕より享保七年壬寅〔二三八二〕の間に、德川幕府執政より三奉行に渡したる書付類を編輯したるものなり。凡て三百四十九條あり。乾坤の二卷、四册に寫傳す。

せいえうひかん

政要祕鑑　（寫本）一卷

目安裏書初判の事より、門前拂追院閉門都ての御仕置の事に至る百十三條の法政事件を輯錄す。明治八年內務省の寫本による。

せいえうひだん

政要祕談　（寫本）十二卷　室　直清

當時の國事、政事を論議したるものなり。文政十二年己丑〔二四八九〕日尾瑜の序あり。十二卷三册に寫傳す。

◉室直清の傳記は「駿臺雜話」の下にあり。

せいえうろく

政要錄　（寫本）一卷

寛保二年壬戌〔二四〇二〕寺社奉行、牧野越中守、町奉行石河土佐守、御勘定奉行水野對馬守、その他が、幕命に因て改革したる公事裁許等の事を記したるもの。山野入會村境論、魚獵海川境論、田畑禁論、堤井堰川水論、證據證跡用不用、馬繼河岸場市場論、跡式養子離別後住並引取人、寺社並譜代且出入、質田畑論、借金家質出入、奉公人出入之部、裁許背其外御仕置物大概。以上の十二門に分ちて詳細に記載せり。

せいえつものがたり

清悅物語　一卷　小野太左衞門

文治年中伊豫守義經の高館に於ける合戰の次第を聞書したるもの。清悅といふは其の比二十歲許りにて義經に從侍し、數百年生き延びて寛永に至りし此の話をなせる由記せり。後人の僞書なること知るべし。著者小野太左衞門は清悅が兵法の弟子なりとあり。

せいゑんかうき

猩猿行記　（寫本）一卷　牧村　昝

貞享四年丁卯〔二三四七〕七月、その主命によりて伊勢より江戶に行ける道中の記なり。猩猿と謙遜したる意に用ひたる名なるべし。自詠の和歌數十首を擧げたり。黃中欽の跋あり。著者牧村昝は伊勢桑名の人にして、東山と字す。

せいゑんくわかうせいせん

西遠火攻精選　（寫本）十二卷

西洋兵書を譯出したるものにて、銃砲火藥等を詳說せり。十二卷六册に寫傳す。

せいゑんごさう [illegible]

清園後草　（寫本）二卷

著者の家集「[illegible]」「清園詞草」〔天保十四年編生涯までの詠歌集〕等の版本につぎて、其の後の詠歌を拾輯したるもの。嘉永二年己酉〔二五〇九〕四月九日編者正純の序あり。第二卷の末に「源の順朝臣のあとを追ひてよみけるあめつち四十八首のうた」として、春夏秋冬思戀等に分ち、一首の首尾に同字を用ひてよみなせるもの四十八首あり。

せいおうしふ

聲應集　二卷　野澤　醉石

野澤醉石、勝田半齋、中村爲一、星野瀰軒、野呂栗原、以上五人の詩を集めたるもの。五人相約して每年其の出詠を出版し凡そ十年に及べるを、更に合册したるものなり。本書には、文化十一年甲戌〔二四七七〕野村温の序を附せり。書名は「同聲相應」の義にとれりと。但し、瀰軒、栗原、の二人は中途にして其の會を脱したりといふ。◉野澤醉石は名を恒、字を舜恒といひ、彦六と通稱す。醉石は其の號。儒學者を以て知らる。天保十二年辛丑〔二五〇一〕八月十一日、六十一歳にて歿す。田原城寶寺に葬れり。

せいおんたい

聲音對　一卷　僧　天産

漢音吳音の事を、漢文にて考述したるものなり。享保元年丙申〔二三七六〕僧來鳳の序あり、同五年出版す。

せいおんろうしふ

清音樓集　五卷　山村　良由

著者の詩文集。卷一、二、三に詩を揭げ卷四、五に文を載せたり。文化元年甲子〔二四六四〕源利蘊の序、同三年桑鼎の跋、同十五年樺島公禮の序。文政二年己卯〔二四七九〕孫祇の跋あり。◉山村良由は木曾の人。字を君裕といひ、蘇門と號す。其の先は德川家康に屬して關ヶ原役に從ひたりき。七世の後良由に至り、專ら學に志す、江戶に出でて大内熊耳に師事し、旁ら當世の諸名家と交る。後、國に歸り父の跡を襲ぐに及び、專ら政治を研究し、封を冢子に襲がしめ、良由は尾藩の國相となり、祿三千石を受く。職に在ること十餘年にして、寛政十年戊午〔二四五八〕致仕す、時に年五十七。清音樓、仙鶴亭等を造りて諷詠の業に從ひ優遊して餘生を送る。著書は別に「忘形集」あり。

せいかいがんせう

清獬眼抄　（寫本）一卷

承和元年甲寅〔一四九四〕長德二年丙申〔一六五六〕等の流人記事より治承三年己亥〔一八三九〕の記事等に至れり。刑罪に關する記事を輯錄せるもの。國史の闕逸を補ふに足る。

せいがいくわんししふ

西涯館詩集　七卷　近藤　篤

著者西涯館の詩集。寛政八年丙辰〔二四五六〕菅原爲德、岳之浩、井上通熙等の序あり。◉近藤篤は子業と字し、六之丞と稱し、西涯と號す。河口靜齋に就て宋學を學び、岡山侯の儒官たり。

せうかいじらん

正楷字覽　一卷　宇田　深林

幾多の字書によりて、流用楷書の誤謬を訂正したるものなり。字數凡て一千三百八十字あり。皆片假名を附して其の要を註せり、

せいかいぜんしよ

靖海全書　（寫本）一卷　豐田　亮

合衆國の地理風俗沿革等を記し、併せて我が國との關係等を錄したるもの。著者の跋あり。「癸丑九月初五日」と記す。書中の事實によりて考ふるに、癸丑は嘉永六年〔二五一三〕の事なり。◉豐田亮の傳記は「北島志」の下にあり。

せいかいひやくりん

勢海百鱗　（寫本）一卷

此の書は伊勢海中にて漁すべき、魚類數十種を寫生したるものなり。

せいかいろく

正楷錄　（寫本）三卷　近藤　篤

本書は楷書の訛謬を正したるものなり。四聲の韻によりて各字を列擧し、上に正字を揭げ、下に訛字俗字を出せり。桃園天皇の寛延三年庚午〔二四一〇〕の自序あり。◉近藤篤の傳は「西涯館詩集」の下にあり。

せいかうぐわふ

淸香譜　（寫本）二卷

蓮花六十餘品の着色圖譜なり。白萬々蓮、雲上蓮、蜀紅蓮、肥後絞り、茶碗蓮、江戶不忍蓮その他全國各地の名花を網羅せり。編年は記さゞれど、思ふに寛政年中の作なるべし。

せいかうしふ

省耕集　一卷　毛利　廣篤

嘉永三年庚戌〔二五一〇〕八月颶風の時、封内を巡視して救恤の道を講じたりし時の作詩及び侍臣等の作を併せて作れり。書名は「孟子」の「春省」耕而補ニ不足ニ」にとれり。嘉永四年安積信の序、庄原毉の跋あり。著者毛利廣篤は淡路守と稱せり。

せいかうだうしよざうこきんづしき

靜好堂所藏古金圖式　（寫本）一卷

天正大判、天正長大判、慶長大判、同笹判、元祿大判、朝鮮大判、以下凡て百十一種の古金を圖寫し併せて、純否、重量等を附記したるものなり。寛政元年己酉〔二四四九〕藤原忠寄の奥書に、松岡辰方の藏本を借りて寫し取れる由を記せり。

せいかかう

青霞稿　五卷　大神　景貫

著者の詩稿にして、卷一に四言古一首、五言古十一、七言古二十六。卷二に五言律百五十六、五言排律七。卷三に七言律百五十。卷四に五言絶五十七。卷五に七言絶百九十二首を收載す。安永七年戊戌〔二四三八〕正二品滕公享の序、同八年龍公美の序、同年左京權大夫藤原近光の跋等あり。同九年五卷三册に版行す。◉大神景貫は山井氏京都の伶人にて儒學あり子一と字し、青霞と號す。仕へて正四位下に敍せられ、備中介に任ぜらる。

せいかくさんぱふ

精覈算法　（寫本）一卷　松永　良弼

下學算法十一問の答術なり。每題演段を詳にせり。享保元年丙申〔二三七六〕に成れり。◉松永良弼の傳は「方圓算經」の下にあり。

せいがくしうは

正學宗派　二卷

禪宗各派の傳統を順記したるものなり。慶安元年戊子〔二三〇八〕講習堂人の序あり、或は此の人の作なるか。

せいがくししやう

正學指掌　一卷　尾藤　孝肇

道、學、致知、力行、讀書、詩文の六項を解釋し、更に古義學、古文辭學等を論して附錄せり。皆假名文にて記す。天明五年乙巳〔二四四五〕賴惟寛、及舍弟孝章の序あり。天明七年刊本す。◉尾藤孝肇の傳は「稱謂私言」の下にあり。

せいかくしふ

晴霞句集　一卷　市原多代女

著者が年來の俳句を晩年自ら編したるものなり。嘉永六年癸丑〔二五一三〕出版せらる。近年發行の俳諧文庫第十編「元祿名家句集」中にも收めたり。◉市原多代女は奥州岩瀬郡須賀川の人にして、早く夫を喪ひ、金令舍道彦に隨ひて後松窓乙二の門に入りて俳諧を學び晴霞庵と號せり。慶應元年乙丑〔二五二五〕八月二十日、九十歳にて歿せり。

せいがくしゆち

星學須知　（寫本）八卷　澁川　佑賢

本法暦法起原より、凡そ星學必要の事項を略述せり。卷端の小序に、「此編多くは星學の首務なるものを纂集す。風雨雲虹流星の理は、蓋し傅會の說に屬し、且星學者の正說に非ずと雖も、亦皆地體渾圓、地氣蒸騰に關係する所以なり。故に略此の理を論す」といへり。内閣文庫に、特別書として所藏せり。著者澁川佑賢は、天文方見習役たり。

せいがくづかい

聖學圖解　三卷　氏家　源內

易の太極說を圖解したるもの。陰陽、乾坤、靜動、女男等を應用的に說明し、心性情をも圖したり。寛文四年甲辰〔二三二四〕三卷一册に出版せらる。

せいがくもんだふ

聖學問答　二卷　太宰　純

宋學の淺溥なることを破し、古學の純粹深遠なることを主張したるもの。人の問に答へたるものを編次し、初學者の爲にとて假名文にて寫せり。享保十七年壬子〔二三九二〕の自序あり。◉太宰純の傳は「經濟錄」の下にあり。

せいがせつばう

西河折妄　三卷　猪飼　彦博

清の毛奇齡の「經問」の說を辨駁したるものなり。文政七年甲申〔二四八四〕日野資愛の序、同十二年中村元恒の跋あり。◉猪飼彦博の傳は「管子補正」の下にあり。

せいかせんぐうき

正假遷宮記　（寫本）二卷

伊勢二宮の慶長以來慶安に至る間の遷宮儀式を記錄したるものなり。

せいかつろく

製葛錄　一卷　大藏　永常

葛生育の適地、採根の季節、及び收入法、並に器具、製粉法、曝葛法、葛絲、葛布製法等、圖畫を加へて說明したるものなり。文政十年丁亥〔二四八七〕の作。

◉大藏永常は豐後日高郡の人にして孟純と字し、德兵衞と稱し、龜翁と號す。夙に農殖の研究に志し、理論と實際とより研究して最も農事の發達を思ひ世益を謀ること七十年一日の如くなりしといふ。著はす所の書は老農茶話、農稼業事、雅俗早引節用集、日用助食竈の賑ひ、農家益、農具便利論、農稼錄、再種方除蝗錄、民家敎育草、琉璃百方、綿圃要務、甘蔗大成、抄紙必用、製葛錄、民間普請法、耕作便覽、農家肥培論、油菜錄、田家茶話、德川食鑑、農家心得草、製油錄、廣益國産考、山家藥方集、心學遺話、假字集等あり。其の書たるや間々圖畫を插入し說明懇切にして皆世用に益あり。中年江戶に來り下谷根岸に寓し天保十五年甲辰〔二五〇四〕濱松藩に仕ふ時年七十七、大阪の寓居に於て歿すと云ふ。

せいかていいかう

晴霞亭遺稿　一卷　山中　恕之

著者の詩文遺稿を雜載す。寬政三年辛亥〔二四五一〕中野正具、山本信有等の序、大窪行の跋を附し、翌四年出版す。

◉山中恕之は伊勢の人。一の名を宣、字を宣卿、通稱を猶平といひ、天水、鈴山、晴霞亭等の號あり。家世々農を業とせり。恕之夙く學に志し、家を脫して京に遊び、また江戶に出でて山本北山に學ぶ。業成りて帷を下し敎授す、來り游ぶもの多く、門下に中井敬義、松浦則武、大窪天民等の名士を出せり。著書は周易考證、周易發蘊、尙書精蘊、毛詩知原、左傳考證、四書考證、論語發蘊、經傳斷名義、性命論、敎學解、學蹊、沮勸、資治鑑一、旨察解、集格言樞機、歷代旨掌、古今詩評、雅談一丁、濫觴編、諸子傳謬、助字準、鉸槧規、敎學解、官職探賾等あり。寬政二年庚戌〔二四五〇〕九月六日歿す、年三十三。

せいかろく

淸家錄　（木活）二卷

德川氏に關する系記なり。「淸流記」と同書にして、十代將軍家治までの記を添加して、卷數三卷を二卷としたるものなり。

せいがんき

淸眼記　（木活）二卷

此の書は其の別名「世鏡抄」の下に解題したり。

せいかんざつし

征韓雜志　一卷　靑山　延光

文祿年中豐臣太閤の征韓事實を雜記せるもの。漢文にて記す。天保十年己亥〔二四九九〕の自序、壬子〔嘉永五年か〕八月松岡豐田亮の跋あり。

◉靑山延光の傳記は「赤穗四十七士傳」の下にあり

せいがんしふ

星巖集　三十二卷　梁川　孟緯

著者の詩集。甲集二卷、乙集三卷、丙集十卷、丁集五卷、閏集一卷、以上五集廿一卷を、金石絲竹瓠土草木の八冊に作り、詩數凡て一千二百卅七首を收む。更に星巖集戊集四卷に二百八十首、玉池吟社詩〔社中諸子の詩〕五卷に四百六十八首、紅蘭小集〔宗張氏の詩〕二卷に百三十一首を收め、右四集を日月星辰の四冊に作れり。諸家の敍序あり。天保十一年庚子〔二五〇〇〕門人筬浦谷等の編輯するところ也。

◉梁川孟緯は美濃國安八郡曾根村の人なり。公圖また無象と字し、新十郎と稱し、星巖、天谷、百峰、老龍庵等の號あり。星巖の號は居村に星が岡あるより取れり。夙く怙恃を喪ひ、年十五にして江戶に出で、古賀精里、山本北山等に就きて學び學識大に進み、最も詩に長ず。當時の詩家菅茶山、廣瀨淡窓、菊池五山、大窪天民等の詩名の上に立てり。妻紅蘭を携へて四方に吟遊すること二十年にして、江戶に還り、玉池吟社を建て、大に生徒を敎へたりしが、後京都の東北鴨川の上に住し、鴨沂小隱と號け、詩を以て、優遊餘生を送る。其の門人の著名なるものには、大沼枕山、遠山雲如、森春濤、小野湖山、岡本黃石、江馬天江、鱸松塘等あり。安政五年戊午〔二五一八〕歿す、年七十。

ぜいがんしふ

蛻巖集　八卷　梁田　邦美

著者の詩文集なり。寬保元年辛酉〔二四〇一〕桂山義樹の序あり、延享三年丙寅〔二四〇六〕出版す。

◉梁田邦美は勝秀の子にして江戶に生る。字を景鸞、通稱を新六といひ、蛻巖と號す。夙に學を好み、處士大橋某、人見鶴山等に學び、又山崎闇齋の學を喜び其の所著に就て精究す、業大に成り又頗る詩に巧なり。年二十餘にして江戶に徒を敎へ、後新井白石、室鳩巢、三宅觀瀾等の諸學者と往來す。一時儒を以て加納侯に仕へ、後赤石藩の文學となる。著書は本書の外に蛻巖問答書、濟詩選、學範等あり。

寶曆七年丁丑〔二四一七〕七月十七日、年八十六にて歿す。

ぜいがんしふこうへん

蛻巖集後編　八卷　梁田　邦美

前集につきて、安永九年庚子〔二四四〇〕出版す。寶曆八年戊寅〔二四一八〕淸田絢の序を揭げ、卷後に蛻巖の行狀を記す。

◉梁田邦美の傳は「蛻巖集」の下にあり。

せいがんぜつさん

星巖絕句刪　一卷　梁川　孟緯

內題には「星巖丙集絕句刪」と記して、著者の絕句數百首を集めたり。天保六年乙未〔二四九五〕出版。

◉梁川孟緯の傳は「星巖集」の下にあり。

せいがんせんせいいかう

星巖先生遺稿　十五卷　梁川　孟緯

著者の遺稿。前編九卷、後編六卷、凡て八冊に版す。越態の序を附し、文久三年癸亥〔二五二三〕に刊本とす。

◉梁川孟緯の傳は「星巖集」の下にあり。

せいがんろく

省諐錄　一卷　佐久間　啓

嘉永七年甲寅〔二五一四〕著者事を以て獄に下り、七箇月間、囹圄の中にあり、出でて在獄中の諸感を筆錄したるもの。凡て五十七條嚴肅なる漢文にて記せり。附錄上下あり。中に詩歌百數十首を收む。明治四年辛未〔二五三一〕勝安房の序あり。

◉佐久間啓の傳は「佐久間修理書上」の下にあり。

せいかんろく

征韓錄　（木活）六卷　島津　久通

文祿慶長間に於ける豐臣氏の朝鮮征伐の始末を記述したるもの。其の屬士高柳行文と共に編するところなり。寬文十一年辛亥〔二三三一〕弘文院學士林子の序文あり。

◉島津久通は島津藩の國老なり。元和元年元服し、寬永四年家久に隨て江戶に出づ。正保元年家老職となり、翌二年遂に州老となる。久通文武の才あり、犬追物の練習を再興す。著書には「征韓錄」の外、「世錄記」八卷あり。延寶二年甲寅〔二三三四〕歿す、年七十一。

せいきうき

西宮記　（木活）二十冊　源　高明

禁裏年中の恆例並に臨時の作法等を記したるもの。著者高明は「西宮左大臣」と稱するより、「西宮記」とは名けたるなり。

◉源高明は醍醐天皇の皇子。冷泉天皇の朝に左丞相正二位となり、西宮左大臣と稱す。安和元年藤原實賴等の讒謀によりて太宰權帥に貶せられ、天祿三年宥されて歸る。天元五年壬午〔一六四二〕十二月二十六日、六十九にて薨す。

せいきうせう

西宮抄　（木活）四卷　源　高明

恆例臨時の公事儀式を記し、多く古禮を述べたるもの。「桃華蘂葉」に「西宮抄は古禮なり、北山抄は一條院以來の儀式なり、江次第は延久以後の禮儀なり」云々とあり、但し本書は前に揭げたる「西宮記」より抄出したるものなるべし。

せいきけんぶんしふ

靜寄軒文集　十二卷　尾藤　孝肇

著者の文集。靜寄軒は其の別號なり。故に書名とす。版本七冊にして行る。著者尾藤孝肇の傳は「稱謂私言」の下にあり。

せいぎさんかう

靜宜懶稿　（木活）二卷　野村　溫

本書は著者の詩文稿を編輯したるものなり。

◉野村溫は君玉と字し、兵藏と稱し、篁園と號す。江戶の人にして古賀精里の門人たり。晚年仕へて儒官となる。別に「採花集」あり。

せいきひつろく

西歸筆錄　（木活）一卷　湯淺　元禎

著者西歸の紀行雜記なり。明和二年乙酉〔二四二五〕七月、江戶に使せし時、歸路、道を中仙道に取りて、板橋宿より、守山宿に至る紀行なり。天明二年壬寅〔二四四二〕宮內明の序あり。

◉湯淺元禎の傳は「常山紀談」の下にあり。

せいきやういかう

淸狂遺稿　二卷　僧　月性

著者の詩文數百編を雜載す。明治二十五年壬辰〔二五五二〕大洲鐵然、天地哲雄の兩人が編輯發行するところなり。三條實美公の題辭、山縣有朋、品川彌

二郎、長炎、櫟藤直等の序あり。土屋根の撰びたる清狂の傳を附す。

◉月性は字を知圓といひ、清狂と號す。周防國遠崎村妙圓寺の住職なり。幼にして毋氏の嚴肅なる教養に感じ、年十五にして鄕を出で、諸州に佛を修め、また詩を學び天下の名士と相唱和し、名漸く著る。また宗教上には破邪の激論家にして聽くもの皆快となす。本願寺徵して將に用ひんとす。有國の士梅田雲濱と善し、共に海防の論を主張し、紀藩に說く等の事あり。安政五年戊午〔二五一八〕五月十一日、四十二にて病歿す。

せいきよくるゐさん

聲曲類纂　五卷　齋藤幸成

我邦聲曲に關する沿革傳流を類集圖示したるもの。卷の一の上に平家物語の事、淨瑠璃節の始原、小野通女が事、三味線の權輿。卷の一の下に、京師浪花諸流、淨瑠璃譜略傳、系圖。卷の二に浪速竹本豐竹略傳、兩座作者名譜、同淨瑠璃外題、三都操座淨瑠璃外題略記。卷の三に江戸諸流淨瑠璃譜略傳系圖、淨瑠璃作者名譜。卷の四に江戸芝居古圖、同古淨瑠璃正本類、古版本操芝居圖類。卷の五に諸流小唄部類、年代の考、江戸長唄略記、追考等の目より成る。書は凡て長谷川雪堤の筆に成れり。弘化四年丁未〔二五〇七〕荊山居士瑜の序、同鼎吟竹孝の序等あり。同年江戸にて五卷六冊に出版す。

◉齋藤幸成の傳記は「東都歲事記」の下にあり。

せいきよひつ

靜寄餘筆　二卷　尾藤孝肇

詩文の趣味作法其の他に關する評論なり。全編漢文にて記し、無點にて行る。卷首に書して、「余少壯之時、有所漫記、頗成卷帙、其說涉問學者、往年輯爲槃薖錄、近日閒暇又取其涉詩文史乘及雜事者、付之兒輩、敍爲一書、曰靜寄餘筆、初年文字尙非可鄙、今刪去其甚者、間復新加數條、雖無足傳、亦可以資一夕之話」といへり。末に「靜寄軒記」及び「靜寄東軒詩」を附す。天明七年丁未〔二四四七〕初冬の作。弘化三年丙午〔二五〇六〕活字版に附す。

◉尾藤孝肇の傳は「稱謂私言」の下にあり。

せいきりやくし

勢龜略志　（寫本）一卷　熊木包信

伊勢國龜山城下の來歷より、鄕驛、社寺、名蹟、石高等を記載したるものなり。享保十七年壬子〔二三九二〕の自序あり。著者熊木包信は板倉家の臣にして、何左衞門と稱せり。

せいくさんじんししふ

生駒山人詩集　七卷　日下文雄

著者の詩集。生駒山人は其の號なり。本書は其の詩集を龍公美の論する所、桃園天皇の寶曆十年庚辰〔二四二〇〕序あり同十二年刊行せられし者の如し。

◉日下文雄は河內國日下里の人なり。世潔と字し、眞蹤と稱し、鳴鶴隱人、愚拙農夫、生駒山人等の號あり。孔姓なるより或は孔生駒と稱せり。最初宋儒を學び、後古文辭を研究して李王の說を主張せり。然れども其の任ずるところは交通、貨殖、運漕等の時務經濟にありて、詞藻の末に走らず。著書は本書の外に延慶史斷、聖楠舍文稿等あり。寶曆二年壬申〔二四一二〕十二月晦日、四十一歲にて歿す。

せいくわうほんき

聖皇本紀　四卷

先代舊事本紀の中なる第三十五、三十六、三十七、三十八の四卷を單行したるものにて、延寶五年丁巳〔二三三七〕五月のに出版にかゝる。

せいくわせんせいぶんしふ

惺窩先生文集　十八卷　藤原肅

著者の孫冷泉爲經編次し、德川光圀校定す。文集十二卷、歌集五卷、目次一卷あり。慶安四年辛卯〔二三一一〕後光明帝御製の序を掲ぐ。蓋し程朱學主唱の功を稱し給ひ、御製の序を加へて御文庫に納めしめ給ひたるものなり。學者無上の榮といふべし。卷末に享保二年丁酉〔二三七七〕爲經の撰したる系譜略、道春の作れる行狀記を載せたり。

◉藤原肅の傳は「惺窩文集」の下に見よ。

せいくわぶんしふ

惺窩文集　八卷　藤原肅

著者の文集にして、林道春の編輯するところなり。卷首に道春の撰したる行狀を掲げ、卷末に追悼の詩文和歌等を載す。八卷の中三卷は續集にして凡て七冊に刊行す。寬永四年丁卯〔二二八七〕堀正意、林永喜の序あり。續集は菅玄同の編輯にて、同年同人の序、及び朝鮮人姜沆の跋あり。

◉藤原肅は有名の巨儒。斂夫と字し、惺窩、柴立子、廣胖窩、北肉山人等の號あり。幼より穎悟にして神童の稱あり。夙く剃髮して僧と爲り、名を舜と稱し、妙壽院と號す。志は專ら儒にありて、其の詩學夙く學者間に重ぜらる、一朝朱子學の要を悟り、遂に儒となり、斷然僧學を棄て、洛閩の說を表章するを以て任とせり。蓋し戰亂絕學の後に出でて文學を普及し、殊に朱學の主唱者たり。關白秀次、德川家康等屢延見して其の學を尊重す。門人日に多く、林羅山、那波活所、菅玄洞、堀正意、三宅亡羊、松永遐年等は其の門の著名なるものなり。家康、京師に學校を興し惺窩を以て祭酒たらしむるの計畫ありしも、偶大阪の役あり、また家康の薨去ありて果さず、秀忠また學問せん意ありしが又果さゞりき。著書には文章達德錄、同綱領、千代もと草、假名性理、四書大全頭書、惺窩歌集等あり。元和五年己未〔二二七九〕九月十二日歿す、年五十九。明治二十六年十二月正四位を贈らる。

せいくわろん

正花論　一卷　大島蓼太

門人寥堂白牛が撰びたるを補正して、古來紛はしき正花の論を解きたる俳諧の書なり。一名を「俳諧花箕箭」といふ。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」の中にも收めたり。

◉大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

せいくわわかしふ

惺窩和歌集　（寫本）一卷　藤原肅

「惺窩先生文集」中より歌集を抄出したるもの也。

◉藤原肅の傳は「惺窩文集」の下にあり。

せいぐわんじえんぎ

誓願寺緣起　二卷　僧　惠明

洛陽誓願寺の緣起を、舊記、古器に照して記したるもの。寬政四年壬子〔二四五二〕秋八月の作を、翌五年出版す。「續群書類從」卷七百八十三、釋家部第六十八に收めたる「誓願寺緣起」とは別本なり。

せいけいかう

清溪稿　（寫本）二卷

試筆の詩より富士八景文の序に至る詩文數百編を收めたり。「續群書類從」卷三百五十四上下、文筆部第三十八にあり。

せいけいしやしん

成形寫眞　（寫本）四卷　木村孔恭

花果、鳥獸、蟲魚の圖譜なり。皆着色にて成る。

◉木村孔恭の傳は「一角纂考」の下にあり。

せいけいつうしちづせうしゆつ

盛京通志地圖抄出　（寫本）一軸

彼の國の「盛京通志」中より、盛京輿地全圖、奉天府將軍所屬形勢圖奉天府形勢圖、錦州府形勢圖、寧古塔將軍所屬形勢圖、黑龍江將軍所屬形勢圖等の五圖を抄出して、里程、山川、城池、關門等を示したるものなり。

せいけいづせつ

成形圖說　三十卷　島津重豪

農產植物を類纂圖說したるもの。卷一より卷十四に至る農事部。卷十五より卷二十に至る五穀部。卷二十一より卷三十に至る菜蔬部とす。薩摩守重豪〔松平榮翁〕が藩士に命じて編輯せしめたるものなり。文化元年甲子〔二四六四〕編者曾槃の提要中に曰く「大公臨聽の日、民に教へて農桑を勸め、更に藥園署を設けて有用の藥種を致來し、其の產地の異同を審にし、其の時候の先後を考へ、各其の物をして生成の功を遂げしむ。又其の事を世に公にしらしめんがためとて、曾槃、白尾國柱等の數人に命じて大に品物をもとめ、之れを類從し、書成て一百卷、題して成形圖說と名づく」云々と。其の三十一卷後は草稿のまゝ今傳へて岩崎家にありといふ。

◉島津重豪は薩州鹿兒島の藩主なり。榮翁と號し、從三位中將薩摩守に任ぜらる。學識ありて文事を好めり。南島誌、中山入貢紀略、南山俗語考等の自著の外、藩士に命じて編輯せしめたるもの多し。

せいけうえうろく

聖教要錄　（寫本）三卷　山鹿高祐

著者の諸論說を編集したるもの。上卷に聖人、聖學、師道、立教、讀書、道統、詩文。中卷に中、道、理、仁、德、禮、誠、忠恕、敬恭、鬼神、陰陽、五行、天地。下卷に性、心、意情、志氣思慮、人物之生、易有大極、道原。以上の諸項を略說して古學の要を發揮し、宋儒の理學說を破したるものなり。寬文五年乙巳〔二三二五〕門人等の編輯するところなり。

◉山鹿高祐の傳は「海備全策」の下にあり。

せいけうるゐご

聖教類語　（寫本）三卷　宇佐美惠

經書の類語を抄出して、一々假名文にて解釋したるもの。卷一に勸學、戒愼。卷二に改過、納諫、勸學書上。卷三に勸學書下、補儲談、附り上言等なり。其

の上言は寶暦十一年辛巳〔二四二一〕正月の者たり
◉宇佐美恵の傳は「輔儲編」の下にあり。

せいけんいげん

靖獻遺言　二卷　淺見　安正

楚の屈原以下明の方孝孺に至る忠臣烈士にして時を得ず、凜然たる節義の人、八人の文を撰集し、其の略傳を掲げ、更に歷代忠臣義士の行狀を附示す。◉淺見安正は、近江高島の人、後光明天皇の承應元年壬辰〔二三一二〕に生る。絅齋と號す。後、家を京都に移し醫を業とす。一朝山崎闇齋を見るに及びて心服し、忽ち業を改めて儒となる。勤學、節操人をして驚かしむ。門人頗る多く、著書、亦少からず。即ち物之說一、精一集說一、父母存說一、明德說一、論性諸說一、三綱八目知止能得一、敬義內外說一、大極圖說解一、童子習一、忠士筆記一、靖獻遺言八、同講義二、聖學講義一、氏族辨證一、白鹿洞揭示考證一、四箴附考二、拘幽操附考一、辨大學非孔書辨一、批大學辨斷一、宗廟圖一、聖學圖一、宗法圖一、六族圖一、九族圖一、擯介圖一、大戴禮記點二、朱子文集點百、詩藪點十、小學講義六、喪祭小說一卷等あり。正德元年辛卯〔二三七一〕十月六十歲にして歿せり。

せいけんいげんかうぎ

靖獻遺言講義　二卷　淺見　安正

著者の著したる「靖獻遺言」の義例、文意、編次の大意等を門人の爲めに講じたるものなり。元祿二年己巳〔二三四九〕の自跋あり。
◉淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

せいけんいげんかうぎ

靖獻遺言講義　（寫本）十卷

安永六年丁酉〔二四三七〕三月、其の師山口某、小野某の講ずるところを宮地信敬の筆記したるものなり。延享三年丙寅〔二四〇六〕の自序あり。

せいけんざうさん

聖賢像贊　四卷

孔子以下元明に至る聖賢百數十人の像贊なり。名の下に字、號、產地等を記し、贊は諸家の敷作あるものは併せ擧げたり。寬永二十年癸未〔二三〇三〕京都にて出版せり。

せいげんちやわ

清嚴茶話　（寫本）一卷

歌學に關する評論なり。「續群書類從」卷四百六十三、和歌部第九十八に收めたり。

せいけんてきえう

成憲摘要　（寫本）二卷　丸山　可澄

德川家康が文武の功業、仁慈の事績等を摘記したるものなり。每條出所を明記し、凡て二十餘部の引書に出れり。寶永五年戊子〔二三六八〕二月、安積覺の序あり。
◉丸山可澄の傳は「花押藪」の下にあり。

せいけんぶんせう

靜軒文鈔　二卷　寺門　靜軒

著者の文集なり。上卷蕣生主より、遂松本文齋序に至る六十一、下卷自畫竹帖の序より、川津氏書齋銘に至る四十九、凡て一百十編を收む。各體に類別なく雜載す。明治七年甲戌〔二五三四〕友人今郁亮の編輯發行したるものなり。
◉寺門靜軒の傳は「江戸繁昌記」の下にあり。

せいご

政語　一卷　松平　定信

政教の根本を論じ、凡て十三條を擧げたり。天明八年戊申〔二四四八〕著者歲三十一にて將軍補佐たりし頃の事なり。
◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

せいご

政語　（寫本）一卷　莅戸　大華

政道の大要を論述したるもの。君臣、安民、政教、用人並觀人、賞罰、治民、節用、戰兢の目につきて略述し、藩侯世子に上るところなり。寬政元年己酉〔二四四九〕四月十四日の自序あり。
◉莅戸大華の傳は「翹楚編」の下にあり。

せいこうき

成功記　（寫本）十七卷

德川氏祖先の事より、元和二年丙辰〔二二七六〕に至る記なり。紀事本末の體に倣ひ漢文にて記せり。

せいこうけんぶつ

砌公嫌物　（寫本）一卷　宗　砌

高山民部入道宗砌法師が、連歌嫌物なり。連歌上に用ふる、趣向、言句其の他の禁忌を、歌、また詞にて

說明せるものなり。天文十四年乙巳〔二二〇五〕某〔宗砌〕の奧書あり。
◉宗砌のことは「花能萬賀喜」の下にあり。

せいごゑんまんぴつ

青梧園漫筆　一卷　川村　榮壽

著者の隨筆なり。寬政五年癸丑〔二四五三〕細惟直の序あり。
◉川村榮壽の傳は「松風館集」の下にあり。

せいごおくだん

勢語臆斷　五卷　僧　契沖

伊勢物語を註釋したるものなり。和漢古今の諸書を引徵して最も詳細に精確に註したり。伴高蹊、田山敬儀等の序あり。
◉契沖の傳は「萬葉代匠記」の下にあり。

せいごおくだんべつかん

勢語臆斷別勘　（寫本）一卷　伊勢　貞丈

本書は契沖の「勢語臆斷」中の故實に關する註解の誤謬せるを指摘評論したるもの。安永九年庚子〔二四四〇〕七月二十三日著者の奧書あり。
◉伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

せいごかなづかひ

正誤假名遣　一卷　賀茂　季鷹

古事記、日本書紀、萬葉集、和名抄等に基きて、あらゆる詞をいろは順に列擧し、各詞は五十音順に、一言、二言、三言、四五言とやうに順に揭示して、其の假名を正したるものなり。天明八年戊申〔二四四八〕の作なり。本書の增訂したる者あり。次に揭ぐ。
◉賀茂季鷹は賀茂の祠官にして歌をよくす。寶暦三年辛未〔二四一一〕生れ、雲錦亭と號す。有栖川熾仁親王、加藤千蔭等に就きて學び詠歌の技に達せり。後年來りて業を受くるもの最も多かりきといふ。天保十三年壬寅〔二五〇二〕九月、九十一歲にて歿せり。

せいごかなづかひ

（増補大成）正誤假名遣　一卷　鶴峯　戊申

前揭賀茂季鷹の「正誤假名遣」を增訂したるものなり。弘化四年丁未〔二五〇七〕の凡例あり。橫綴小本一冊に作る。
◉鶴峯戊申の傳は「[illegible]階錄」の下にあり。

せいこくいかう

青谷遺稿　二卷　宮崎　青谷

著者の詩文遺稿なり。乾卷に文、坤卷に詩を收む。從姪渡邊碩也蒐集し、諸家の序跋を附して、明治十七年出版す。

せいごしちかう

勢語七考　（寫本）一卷　賀茂　眞淵

伊勢物語の大要七件を略述したるもの。物語といふ事、伊勢の物語と名けたる事、伊勢の御の書きたりといふ事、業平の自記ならんかといふ事、時世たがへる事、作れる時世の事、むかし男といへる事、以上七項享保元年丙申〔二三七六〕某者の請に應じて「伊勢物語」を講じたる後、更に以上七項の大要を書き示したるものなりと、自らの奧書あり。
◉賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

せいごつう

勢語通　（寫本）二卷　五井　純禎

伊勢物語を註解したるものなり。單に「伊勢物語」內卷、外卷上下として三册に作る。蓋し今見るところ著者手筆の本にして「勢語通」の原本なり。
◉五井純禎の傳は「源語詁」の下に出づ。

せいこつしんしよ

整骨新書　四卷　各務　文獻

人體解剖整骨に關する醫書なり。文化七年庚午〔二四七〇〕出版す。
◉各務文獻は字を子徵、通稱を相二といふ。大阪の人にして、整骨術に精しく遂に其の名を著はせり。別に「婦人內景之圖」の著あり。

せいごづせつせう

勢語圖說抄　（寫本）五卷　齋藤　彥麿

伊勢物語の中の衣服、器財、草木等を本文の間に圖出したるもの。契沖、眞淵、宣長等の說を參酌し或は實物を見査し、或は古器等によりて物したりといふ。
◉齋藤彥麿の傳は「傍廂」の下にあり。

せいこつはん

正骨範　二卷　二宮　獻

解體整骨に關する醫書なり。文化五年戊辰〔二四六八〕出版す。
◉二宮獻は長崎の人にして、濱田侯の醫員たり。字

な彦可といふ。吉原元棟に從て整骨術を修め遂に名家となる。

せいさいかんご

惺齋閑語　（寫本）二卷　中村　明遠

經史、其の他の雜記なり。卷一を「諸經說付子史說」と題し、卷二を「雜說」と題す。杉原眞養、卷末に書して曰く「按するに此書闕林氏の著す所の講習餘筆と名を異にして實を同じくする時は、則惺齋名にして、閑語はこれ其の初名なり。且講習餘筆は卷を爲す四にして、此の書合して二となす。蓋し其未定に屬す。此亦閑語の初名となす所以の一證也」と

◉中村明遠の傳は「寓意錄」の下にあり。

せいさいししゆ

惺齋四種　（寫本）四卷　石成　金

「童禮知要」一卷、「常禮須知」一卷、「堅位圖註」一卷、「發答心言」一卷とを併輯したるもの。卷每に自序目錄等あれど年時を記さず。

せいさいそうしよ

整齋叢書　（寫本）二十九卷　藤川　貞

故實雜說、武器要領等に關する雜抄蒐錄なり。卷端に「夢ならで見ぬ世の事を見つる哉、昔世語く筆のすさみを。」于時安政三年丙辰〔二五一六〕七月朔旦、整齋貞六十六歲」と記せる一枚を揭げ、次に明治十二年男寬の附言あり。父の歿後同人の編次命名するところなり。二十九卷十六冊に作れり。其の一冊は本文每卷の總目錄及び引用書目錄なり。

◉藤川貞は家學敎授の餘暇正史野乘を嗜讀し、門徒の質問に關する武器の得失、故實の淵源等を研究したるものにて、安政三年六十六歲なりき。

せいさいぶんしふ

靜齋文集　十卷　齋宮　必簡

著者の詩文集なり。卷一に五言古詩。卷二に七言古詩。卷三に五言律詩、五言排律。卷四に七言絕句。以下文章にして卷七、八に序。卷九に記、傳、墓誌、銘。卷十に論、說、書、贊、騷、哀辭、祭文等を類收し、尺牘數篇を附錄す。

◉齋宮必簡は字を大禮、通稱を五右衞門といひ靜齋と號す。安藝の人にして服部南郭に學び、後京都に出でて儒を講ぜり。著書には、音例、初學作文法、孝經傳等あり。

せいさうりやくせう

盛葬略抄　（寫本）一卷

天明三年癸卯〔二四四三〕十一月十三日盛化門院葬送の記なり。明治七年內務省の謄寫するところ也。

せいさたふきやうしふ

星槎答響集　二卷　僧　月心

享保四年己亥〔二三七九〕朝鮮來聘使、對馬に到着したる時、著者對馬守に隨從して賓館に應接して贈答したる詩賦文章を蒐めたるものなり。

◉月心は號を可竹といふ。天龍寺の長老にして紫衣を許されたるものなり。

せいざんいじ

西山遺事　（寫本）五卷　安積　覺

水戶中納言光圀の盛德事績を記述したるもの。卷首に水戶家四代の系譜を揭げ、本文に入りて光圀の一生を一々證據を正して最も詳細に記載せり。中村顧言、栗山成信、酒泉弘等と共に編述するところなり、一に「桃源遺事」ともいふ。元祿十四年辛巳〔二三六一〕三木之幹、宮田淸貞、牧野和高等三臣の奥書あり。

寛政七年十二月　大和守[illegible]遠ノ後記モアリ

◉安積覺の傳は「湖亭涉筆」の下にあり。

せいざんいぶん

西山遺聞　（寫本）一卷　立原　萬

水戶光圀公の事績を記したるもの。西山公御誕生の屋敷の事、誕生梅の事、御乳母の事、御局の事等より一生の事歷を略述せり。

◉立原萬の傳は「新安手簡」の下にあり。

せいざんこうずゐひつ

西山公隨筆　（寫本）一卷　德川　光圀

著者の考證的隨筆なり。神祇、釋氏、山川地理、士婦女、儒學等に分ち各數項、皆傳說事實等の誤謬なるを、皮肉的に評論したるものなり。

◉德川光圀の傳は「大日本史」の下にあり。

せいざんずゐひつ

靜山隨筆　（寫本）一卷　白　龍甫

著者の見聞筆錄なり。凡て六十四條あり。享保十四年己酉〔二三八九〕九月の自跋を附載す。

せいざんせうしやうしふ

西山樵唱集　二卷　入江　兼通

著者の詩集。上卷に五七言古詩、五言律を揭げ、下卷に七言律、五言絕句、七言絕句を載す。寶永五年戊子〔二三六八〕徂徠の序、享保四年己亥〔二三七九〕朝鮮申維翰の序、同五年僧獨麟の跋、同十年、十五年等の諸家の序あり。

◉入江兼通は子徹と字し、若水、また櫟谷山人等の號あり。攝津富田の酒造家なりしが、一朝學に志し、烏山芝軒に從て詩を學び、諸方に遊歷して詩名頗著る。廬を京師西山に結び、詩人と相唱和したりといふ。

せいざんせうしやうしふ

靑山樵唱集　八卷　僧　耆山

靑山樵唱の詩文集なり。光格天皇の天明六年丙午〔二四四六〕泉谷杜多惠頓の序あり。初編三卷、二編三卷、三編二卷より成り、律詩、古詩、律詩、文、及び絕句等に順序せり。著者耆山は妙有庵主なり。今その詳傳を得ず。

せいしいちらん

姓氏一覽　（寫本）十三卷　原　愼

萬多親王の「新撰姓氏錄」の索引なり。其の頭書の字畫に就きて搜索すべきやうに作られたり。

◉原愼は松江藩の醫官にして、藍川と號す。延喜式及び儀式和名抄等の攷異を著し、康賴本草、新撰字鏡等の註あり。

せいしうおしかめだもんじよ

勢州御師龜田文書　（寫本）一卷

勢州御師龜田大夫所持の古文書十餘通を模寫したるものなり。天明四年甲辰〔二四四四〕荒木田弧形の模寫を、檢挍保己一の書寫せしめたるものなり。

せいしうかめやまりやうゑづ

勢州龜山領繪圖　（寫本）一折

元祿十三年庚辰〔二三六〇〕の調査に係る龜山領大繪圖なり。

せいしうぐんき

勢州軍記　（寫本）二卷

卷首に北畠氏の系圖を載せ、本文に入りて、卷上に勢州諸家、亂世形勢、義賢兵亂、信長出張、勢南兵亂、信長治世、卷下に具教騷動、諸國退治、光秀騷動、信孝兵亂、信雄兵亂、秀吉治世。以上の目につき漢文にて記し、卷末に長野の城主長野家、十六代系譜を揭げたり。

せいしうぐんき

勢州軍記　（寫本）三卷　神戶　良政

伊勢に於ける軍事を記したるもの。其の目次を擧ぐれば、卷上に勢州諸家、武家執權、亂世形勢、國司權威、義賢兵亂。卷中に信長出張、勢南兵亂、信長治世。卷下に具教騷動、諸國退治、光秀騷動、信孝兵亂、信雄兵亂、秀吉治世、天下太平等。凡て十五條也

せいしうぐんき

西州軍記　（寫本）五卷　竿　貞子

應永六年己卯〔二〇五九〕以下德川家康將軍宣下の事に至れる迄の大內、大友、菊地、龍造寺、島津、秋月、新田、毛利、高橋等の盛衰を詳敍したるものなり。著者は豐陽の人なる故殊に豐前一國の事實を詳細にす。

せいしうぐんきべつぽん

勢州軍記別本　（寫本）三卷

こは前揭「勢州軍記」と全編異にして、勢州分領之事より、蒲生氏鄉之事に至る百七十箇條を揭ぐ。

せいしうこんめいしよしふ

勢州古今名所集　（寫本）五卷

第一卷に伊勢國十三郡の事、度會郡十三鄉の事、內宮、外宮の事を記し。第二卷に五十鈴宮より、豐川に至る八箇所。第三卷に天照宮より、五百枝松に至る十六箇所。第四卷に內宮相殿より伊雜宮に至る十箇所。第五卷に外宮四所別宮より朝熊社に至る七箇所を記せり。延寶七年己未〔二三三九〕重て書寫する由の奥書あり。

せいしうしかき

勢州四家記　一卷

永祿、元龜、天正間に於ける、北畠、工藤、關、千等四家の戰爭始末を記したるものなり。「群書類從」卷三百八十一、合戰部第十三に收めたり。

せいしうしやけもんじよ

勢州社家文書　（寫本）三卷

大宮司所持の古文書、福島佐渡所持古文書を始め數十通を集めたり。

せいしうしんこかいだうのづ

勢州新古街道之圖　（寫本）一折

伊勢國を十二部に分ち着色して新古の街道を別示せり。

せいしうせんすうき

西州船數記　（寫本）一卷

海岸諸國の船數、船水主、浦數其の代官領主等の姓名を記す。

せいじえうりやく

政事要略　（寫本）九卷　惟宗（コレムネ）　允亮（コトスケ）

古來の法制に關することを記述したるもの。年中行事、神社、官舍、溝池、堰堤、田地、戸籍、裁判の事、其の他の事を載す。全編漢文にて記せり。父祖の蓄記を始め、あらゆる諸書に就て編したるものにて、其の當時は實に百三十卷の大部なりしが、漸次闕本して現在の九卷は僅に其の殘闕本の一部なり。伴信友の「比古婆衣」卷七「令義解及令集解三代格政事要略闕本考」の中に「件の三書今世に在るは闕本なるに、かの抄出の文みな在り、三書全本ならむには、猶其の餘の逸文もあるべきに、僅に倉庫令の文ただ一條のみ今在る三書に見えざるを思へば、かの三書も同じ亂世に闕失て、其のかみ大かた今の世に傳れるばかり殘りたりしものなるべし。然るに後の書に、法曹至要抄と、貴嶺問答に倉庫令の文を唯一條づつ引きたるは、既く要略に載せたれば其れより又轉じ引たるものなるべし」云々といへれば、其の闕本せしも久しき以前よりのことなること知るべし。

◎惟宗允亮は一條天皇の正曆中、仕へて勘解由次官となり、尋て左衞門權佐に任じ、檢非違使に補せらる。長德四年戊戌〔一六五八〕姓惟宗朝臣を賜ひ、彈正判事を兼ね、寬弘中河內守を兼ね、從四位下に敍せられ、檢非違使佐となる。夙に才名あり、家學に通じて明法博士たり。其の著政事要略、類聚別集、宗河記等は、法家の至重する所なりきといふ。

せいしかう

姓氏考　（寫本）一卷　荷田　在滿

本邦姓氏の事を考說したるもの。田安侯の問に對へて上りたるものといふ。

◎荷田在滿の傳は「羽倉考」の下にあり。

せいじだん

政事談　（寫本）一卷　名越　克敏

施政治民の根原を略論したるもの。先づ幼沖輔導、學問、文武、知人、法、守儉、謹嗜好、戒倦怠、論權勢移下、寬猛、君臣、防宮闈之驕等を述へ、次に祭祀、田獵、放淫聲、賞罰、聽訟、糾彈、納諫等を記す。記述頗る簡略なれども、能く其の要を摘せり。自序あれど年月日なし。

◎名越克敏は水戸藩の人。初の名を時中といひ、子聰と字し、十藏と稱し、南溪また簡齋等の號あり。夙く林門に入り、また昌平黌に學び、秀逸を以て知らる。享保十九年水戸に仕へ、國史編纂總裁に擢でらる。安永六年丁酉〔二四三七〕五月十六日、年七十六にて歿す。本鄕六町目養福寺に葬る。

せいじつうさくしやべんならびにえんぎ

正字通作者辯並緣起　一卷　僧　珂然

正字通の作者を辯し、僞點、廖吳二氏の敍、張氏の凡例、數多の異本、正否の決擇等を記したるもの。京都極樂寺見阿上人の遺語なりといふ。寬保元年辛酉〔二四〇一〕の序あり。

◎珂然は眞阿と字し、別號を寒叟といふ。攝州大阪淨土宗法泉寺の住職なり。大阪の人にして俗姓を松井氏といひしが、夙く佛法に歸依し、河州玉手山珂憶信公に就て得度し、學進み行成り、宗徒悅服す。布敎の傍ら經疏を講じて徒弟を敎ふ。著書若干部あり。延享二年乙丑〔二四〇五〕十月、七十七歲にて寂す。

せいしていしふ

靜思亭集　十卷　赤松　鴻

著者の詩文集。卷一に五言古詩二十、七言古詩十三。卷二に五言律詩八十九、五言排律二。卷三に七言律詩九十三、七言排律一。卷四に五言絕句三十。卷五に七言絕句百四十。卷六に書十五。卷七に書十六。卷八に書十五。卷九に序六、記二、傳一。卷十に讚一、說二。贊八、題跋五、墓碣五、祭文一、雜著二等を收む。明和六年己丑〔二四二九〕松崎惟時、宮田明の序、同庚寅劉維翰の序、同辛卯江村北海の序、同壬辰淸田絢の序、同丁亥岡思譜の後序、湯淺元禎の跋等あり。男勳編輯、門人山世幹の校する所なり。

◎赤松鴻は、通稱を亘平といひ、滄洲また靜思翁と號し。國鸞と字す。舟曳通益の子にして大川耕齋の養子となる。兩姓共に赤松氏より出たるを以て其の氏を稱す。夙く京師に出でて宇野明霞につき經義を學び、香川修庵に醫を學ぶ。後專ら儒を考究し、延享四年擢出せられて赤穗侯の儒員となり、後進みて遂に家老となる。其の職にあるや學校を興し、文敎を張り、自ら經史を講說して大に士風を鼓舞す。著書には、周易象徵、論語省解、尙書獨斷、博物強識、讀孟子、琉客談記、赤穗四十六士論、靜思亭雜著、一得錄等あり。寬政十年致仕し、京に出でて學を講じ、後播州に歸り、享和元年辛酉〔二四六一〕八十一歲にて歿す。

せいじにつき

誠貳日記　（寫本）一卷

慶長五年庚子〔二二六〇〕より、寬文三年癸卯〔二三二三〕に至る年々の世間聞書を輯めたるものなり。

せいしはいぞくろく

姓氏廢續錄　（寫本）一卷

食祿一萬石以上のものにして、減祿若くは廢家に歸せしものゝ姓氏年月等を輯集す。減祿の部は天野三郎兵衞より、遠藤岩松に至り、廢家の部は武田萬千代より、本多飛驒守重盛に至れり。

せいじやうゑづ

西城繪圖　（寫本）一折

江戸城將軍屋敷の詳細繪圖。彩色を以て明示せり。

せいしやうせんく

正章千句　一冊　安原　正章

著者の俳諧千句にて、其の師松永貞德の判詞あり。慶安元年戊子〔二三〇八〕出版す。近年發行の俳諧文庫第二編「芭蕉翁以前俳諧集」上卷中にも收む。

◎安原正章の傳は「片言」の下にあり。

せいじゆていはつべん

世儒剃髮辨　（寫本）一卷

世の儒者が、一時剃髮するの弊ありしを辨論したるものなり。漢文にて記す。慶安四年辛卯〔二三一一〕の作にかゝる。

せいじゆんかう

正順考　一卷　澤田　師厚

稱謂の事を論述考證したるものなり。天保十一年庚子〔二五〇〇〕千村仲冬の序あり。

◎澤田師厚は尾張の人にして、天爵と字し、眞藏と稱し、眉山と號す。別著に「三當集」四卷あり。

せいしよいちやひやくゑい

靜所一夜百詠　一卷　尾芝　質

著者の一夜詠五言律詩なり。享和二年壬戌〔二四六二〕篠崎弼の序、矢追英從、森本聖謨の跋あり、文化元年甲子〔二四六四〕出版す。

◎尾芝質は播磨の儒者にして、文彬と字し、靜所と號せり。

せいじよかう

姓序考　一卷　細井　貞雄

本邦諸姓の根元沿革を說明したるもの。其の目を云へば、眞人、朝臣、宿禰、忌寸、臣、連、公、首、國造、伴造、縣主、直、村主、史、道師、稻置、氏上部曲、國司、郡司等なり。文化十一年甲戌〔二四七四〕北村久備の序、及び自序あり。「史籍集覽」の中にも收む。

◎細井貞雄の傳は「空物語玉琴」の下にあり。

せいしよせんせいたいもん

星渚先生對問　二卷　大江　星渚

聖經賢傳中の道理學說に關する答問を輯錄したるものなり。文政元年戊寅〔二四七八〕門人源孟虎の輯錄するところなり。

◎大江星渚は尾張黑崎荒井里の人なり。名を璧吉、字を無告といふ。星渚はその號なり。幼より學を好み志を勵して道を求め、心を經籍に潛して得るところあり、門人頗る多きに至る。著書には周易義象、毛詩存疑、尙書考文、論語考文、大學考文、中庸考文、孝經考文、周禮考文、周禮義、儀禮考、三經義、尙書衍文考、禮記鄭註補義、對問、左傳考、國語考、戰國策考、史記考、前漢書考、荀子考、列子考、莊子考、韓非子考、淮南子考、呂氏春秋考、詩集、文集、助語辭訣等あり。

せいしりやくき

正史略記　（寫本）七冊　輿郡　弘正

「二所太神宮雜川正史略記」と內題して、諸史中より同事實を抄出編成す。第一冊を「日本紀之部」、第二冊を「續日本紀之部」、第三冊を「日本後紀、續日本後紀之部」、第四冊を「文德實錄之部」、第五冊を「三代實錄之部」、第六冊を「扶桑略記之部」、第七冊を「東鑑之部」とす。其の意に曰く「施之於宗社不謬、用之於祭祀無闕、以博守約、溫故知新、上以遵正史之遺制、下以明將來之法例、可謂集數家之雜說、舉二宮之定準者也」とあり。度會延長、秦末滿、荒木田成近、度會貞親、度會貞滿等皆補助するところありきといふ。明曆三年丁酉〔二三一七〕の自序あり。

弘化二年乙巳〔二五〇五〕度會弘維、父清安が豐崎文庫本によつて書寫したるものを校正する由を奥書せり。

せいしるゐみやう

姓氏類名　寫本五卷　堀　直格

六國史中の姓名を、頭字の五十音順に排次し、各出所丁數等を記して捜索に便したるなり。

◉堀直格の傳は「扶桑名畫傳」の下にあり。

せいしろくせうけん

姓氏錄提見　寫本二卷　狩谷　望之

萬多親王の「新撰姓氏錄」の索引なり。姓名を五十音順に並列し、各名下に原本の丁數を註して、全く捜索の便に供せり。其の凡例に曰く、「凡そ姓氏錄に載るところの皇神蕃の三別は言に及ばず、天神、天孫、地祇、漢、百濟、高麗、新羅、任那等皆類を以て從ふ。其の源流を混淆せざらんが爲めなり」とあり。其の分類基每に假名順にせるをいへるなり。

◉狩谷望之の傳は「古京遺文」の下にあり。

せいしんえうろくさいえう

聲振要錄撮要　寫本一卷

舞樂に關する一切故實を記載したるものなり。舞人の插花、常樂會の造花以下發音舞譜等の事までを記せり。

せいしんくわしふ

棲眞窩集　三卷　小泉　益

著者の文集。文化十年癸酉〔二四七三〕海保鶴皐、河合衡の序、梅辻琴の跋、同十一年藤原環の序、村瀬之熙の序等ありて、同年刊行せらる。

せいしんこうかしふ

清愼公家集　寫本一卷　小野宮實賴

太政大臣小野宮實賴清愼公の歌集なり。延喜の御時飛香舍にて藤の宴ありしに「うすくこく亂れてさける藤の花、ひさしき色はあらじとぞ思ふ」より、凡て二百餘首を收む。永享二年庚戌〔二〇九〇〕尋阿の奥書、文明五年癸巳〔二一五〇〕藤原某の奥書等あり。今見る本は天保十年己亥〔二四九九〕五月二十七日伴直方校了の寫本なり。

◉小野宮實賴は藤原姓、關白忠平の長子にして、幼名を牛養といふ。延喜の末阿波權守右衞門佐に任ぜられ、是より歷官して、朱雀の朝大納言に昇り、また右大臣に拜し、藏人所別當を兼れ、天曆の初左大臣に轉じ、後、皇太子傅を兼れ、正二位に敍せられ、康保元年從一位に進む。冷泉帝位に卽くに及び、詔して機務を關白せしめ、牛車帝門に出入するを聽し、尋て太政大臣となす。圓融帝卽位するに及び、實賴攝政せり。天祿元年庚午〔一六三〇〕五月十八日、七十一にて薨す。其の日正一位を贈り、尾張公に追封し、清愼と謚す。世に小野宮殿と稱す。著書は別に「水心記」あり。

せいしんさいえう

聲診撮要　寫本三卷　平野　元忠

聲律に依て體力を診察することを說論せるもの。醫家の律を考ふるは四診の一に數へたるによれりと。天和元年辛酉〔二三四一〕の自序、同二年江東柳剛、三流の序等あり。

◉平野元忠は洛下の人にして、法橋大極進たり。醫を業として、產金庵と號す。

せいしんざつき

誓眞雜々記　寫本一卷

武家有職の書なり。天正十五年丁亥〔二二四七〕の奥書あり。

せいしんろく

清愼錄　寫本一卷　大內與一郎

水戶の藩士小宮山楓軒が郡宰たりし時の事績を記述したるものなり。弘化二年乙巳〔二五〇五〕の著にかゝる。

せいすゐいんひろく

盛衰隱祕錄　寫本七卷

諸家の盛衰を記したるもの。卷一に太田家出世出來並田村四郎右衞門物語之事より、松平越前守綱昌所領被召上事に至る十一箇條。卷二に高野山學侶方與行人方諍論就騷動上使本多紀伊守副使高木柴田兩三將江戶發足之事より、小島源藏與山崎太郎左衞門喧嘩討果事に至る二十一箇條。卷三に東照宮御不例就被爲重諸侯へ被仰渡之事より、瑞光院樣並嵯峨宗甫之事附進藤伊右衞門木下清兵衞立身事に至る二十五箇條、卷四に水戶御家臣藤井紋大夫叛逆露顯に付黃門公御手討之事より、輕部彌次郎蝮打並天狗出合勝負之事に至る十七箇條。卷五に荒木玄蕃秋田家に仕ふる由緒之事より、袋笠之助家系由緒之事に至る二十二箇條。卷六に上杉家臣直江山城守被誅附上杉先祖事より、高木善宗兄弟流刑附阿部豐後守忠秋賢慮事に至る十四箇條。卷七に古幡隨院寄妙附萬瑞長兵衞男立之事より、山村長大夫亡失前表附總役者御免之事に至る十三箇條等なり。

せいすゐき

（古實參考）盛衰記　寫本二十卷

諸種の戰記實錄等によりて、平氏、源氏間の大小戰事を始め、將士上下の奇績異功等を詳敍したるものなり。

せいすゐせう

醒睡笑　寫本八卷　僧　策傳

種々雜談を輯錄したるもの。卷一は云へば云はるるもの、由來より、祝過ぐるもいなものと云ふ事に至る六項。卷二は名つき親方より、賢達の事に至る五項。卷三は文字知顏の事より、清僧の事に至る五項。卷四は聞多批判より、唯有といふ事に至る四項。卷五は姥心より、人のそだちに至る三項。卷六は兒の噂より、うそつきに至る七項。卷七は思ひの色を外にいふと云ふ事より、舞の事に至る六項。卷八は頓作の事より、祝濟たの事に至る六項。凡て四十餘項、皆著者が聞き說けることを記して、睡を醒さん料にとて物したりといふ。元和九年癸亥〔二二八三〕の自序あり。

◉策傳は茶人なり。京師誓願寺の竹林院に住し、安樂庵を造りて隱居して名器を珍藏して樂む。後水尾天皇の寬永十九年壬午〔二三〇二〕正月八日、年八十九にて歿す。

せいすゐひしようだん

盛衰祕證談　寫本十二卷

慶長元和間の德川氏に關する日記なり。「玉露證話記」と題する寫本と同じものなり。十二卷五冊に寫傳す。寫本者中西貢敎の天明元年辛丑〔二四四一〕八月の奥書に、伊豫松山の城主京師の留守居金子仙五郞昇義の祕藏書を借寫せる由あり。

せいすゐべんえう

盛衰辨要　寫本二十五卷

京都鎌倉の將軍事績より、戰國時代の朝野大小の事績を抄錄したるもの。古史舊記の本文を抄出するもの多し。中條某の自序あれど、年代と著者名とを詳にせず。

せいすうきげんせうしよへん

（算法）整數起源抄初編　二卷　菊池　長良

整數術の起源を明解したるもの。全體は先づ勾股形に源起し漸く進みて圓、側圓等諸形の關係に及ぼしたるもの。蓋し整數術の發明ありて以來、殆んど二百年、世々算家の間に傳はりて、其の解書も無きに非ざれども、皆門々に寫傳するのみ。刻本にも其の解法無きに非ざれども、僅々雜題中に散見するのみ。未だ曾て解法を以て專述したる者を見ず。本書は其起源を明解したるものゝ嚆矢なり。弘化二年乙巳〔二五〇五〕の出版にかゝる。

◉菊池長良は奥州仙臺の人にして、字多之丞と稱し、錦衣と號す。長谷川寬に就て算學を修む。本書の外に算法約術詳解、算學階梯新法等の著書あれども、未だ上木に至らずして止みたりと。生歿の年月詳ならず。

せいせいしせう

西征詩抄　一卷　青木　孝先

著者西遊の紀行詩集なり。文久二年壬戌〔二五二二〕寺門貢、松平政秀等の序、僧誠研の跋、同三年今村亮の序あり。

◉青木孝先は上州高崎の人にして、忠孝と字し、錦村と號す。寺門靜軒の門人にして、詩を以て知られ大學少助敎となる。明治七年甲戌〔二五三四〕五月十五日、年五十八にて歿す。

せいせいだうかう

井井堂稿　寫本三卷

著者の詩文集なり。最初に貞享二年乙丑〔二三四五〕五月十日の感興賦あり。其の序詞に曰く、「貞享二年余春秋四十有八、自近來年、毛血月衰、志氣日微、雙眼茫茫、頭髮蒼蒼、齒牙動搖、半闕者二、今茲五月、一齒又脫、於是搦管拂紙、慨然而賦」とあり。

せいせいでふ

西省帖　一軸　賴　襄

賴山陽の詩書を寫眞版に付して軸に作りたる者。筱崎弼の題字あり、其の闕損を長三洲揮毫補せり。

◉賴襄の傳記は「日本外史」の下にあり。

せいせうなごんまくらのさうしせう

清少納言枕草子抄　十五卷

枕草紙に頭註を加へたるもの。世に萬歳抄といふ。卷首には異本の事、先達共の諸評、一書の大意、作者の事、題目の事、難間口訣の事等を記せり。延寶二年甲寅〔二三三四〕五月の出版なるが、何人の註したるかを詳にせず。すゑの物集[illegible]卯されに從ふは

せいせきがいろん

西籍概論　四卷　平田篤胤

本書はもと「漢學大意」と名けたる講說の覺書なりしを、名を改めて版行したるなり。皇國に漢學の始れる本緣より漢土の謂はゆる、夏殷周三代の沿革、また周の世より儒道といふ道の興れる故、及び諸子の說區々なる事、また周の世以來の學變、かつ宋學、古文辭家五の得失また俗儒猥みだりに彼の國を尊崇して、皇朝の御制度に背くことゝも有るは孔丘氏の尊內卑外の旨にも逆ふ由までを論じたるものなりと。「氣吹舍著撰書目」にも云へり。安政五年戊午〔二五一八〕出版し更に明治三年渡邊重石丸、羽田野敬雄の序を附して出版す。平田鐵胤の末書あり。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

せいせきづし

聖蹟圖志　一卷　津久井清影

全國御歷代の御陵地を圖說したるものなり。嘉永七年甲寅〔二五一四〕自引を附して銅刻す。著者津久井清影は時に年還曆〔六十一歲〕なりきといふ。

せいせきもんだふ

清石問答　一卷　清水濱臣

源氏物語の中の不審數箇につきて、石川雅望と問答したる往復文書なり。文化二年乙丑〔二四六五〕の作。「百まと叢誌」の第四に收む。

◉清水濱臣の傳は「伊勢物語添註」の下にあり。

せいせつくわんしやうきやう

西說觀象經　一折　吉雄俊藏

西洋科學說に基きて、天體天象の大要を述べ物質不滅の概說を記したるものなり。文政五年壬午〔二四八二〕夏六月の作。明治十二年出版す。

◉吉雄俊藏は尾張の人にして、尙貞と字し、南皐と號す。本書の外に「（理學入式）遠西觀象圖說」の著あり。

せいせんひようはう

精選祕用方　寫本一卷

中風中寒より、小兒諸病に至るまで、多くの病症を擧げて、適方三百八十方を記したる處劑書なり。卷末に「天文十八年己酉〔二二〇九〕十月下旬日三輪寺釋迦院源貞」と記せるは著者なるや否や、未だ詳ならず。

せいせんべんぢしふ

精撰辨治集　寫本一卷

本書は療法醫藥略說なり。處方と病名とを列記せり。著者及び年代等詳ならず。

せいだいさくかんこどり

聖代策諫鼓鳥　寫本一卷　松平定信

版本「諫鼓鳥」の下に解題せり。此の寫本には、天明七年丁未〔二四四七〕の奧書あり。

せいたいちやうやうろく

聖胎長養錄　一卷　僧潮音

宗門修行の漸修を論述したるもの。既に其體ありといへども、能く聖胎長養して力用を具へ悉く衆藝を習得し、灌頂を受職し、神通力を感得して果滿の佛位を繼ぎ普く一切の衆生を度するに至るべきを論じたるものなり。久しく諸善知識の長養說を拾集して本書を成せりといふ。貞享二年乙丑〔二三四五〕の自序あり。同四年出版す。

◉潮音の傳は「指月堂夜話」の下にあり。

せいたいひやくものがたり

聖泰百物語　二卷

種々虛實の雜話を書き集めたるもの。卷上は手習のしやうの事より、徹書記は定家の再來の事に至る五十條、卷下には返歌連句付にする事より、しぶかたびらの事に至る五十條を揭ぐ。各卷を二冊宛に分ちて四冊に作る。

せいだいろく

靑大錄　寫本一冊　桑原茂右衛門

靑山大膳亮幸利が生涯の美事を筆錄したるもの。幸利は嚴有院の時奏者の役を勤めたるものなり。本書は家人桑原茂右衛門重英が後桃園天皇の安永五年丙申〔二四三六〕夏之れを寫すとあり。

せいだうがふご

聖道合語　二卷　冢田虎

古來の諸經傳によりて、下の各項を論述したるもの。上編に學習、道德、性情、天命、五常、一貫、克己、明德、中庸、三重。下編に異端、丹商、三仁、泰伯、夷齊、晏子、管仲、湯武、王覇、武備。以上二十條目を漢文にて詳論す天明八年戊申〔二四四八〕の自序あり。

◉冢田虎の傳は「滑川談」の下にあり。

せいだうさいざうき

聖堂再造記　寫本一卷　林戇

元祿三年庚午〔二三五〇〕昌平黌聖堂再造の記なり。寬永十年癸酉〔二二九三〕の年忍岡に創建したるを、今度城北新開坂に移したるなり。著者當時從五位下大學頭に任じ、祭酒の事を管し、敎授の任に當り、新堂落成に際し本記を作り、併せて釋典式を附錄せり。

◉林戇の傳は「鳳岡林學士集」の下にあり。

せいだうとくもん

聖道得門　一卷　冢田虎

志道門、據德門、依仁門、遊藝門、興詩門、立禮門、成樂門、知命門、知人門の九に分ち、最初四門は主として學者志を立つるべきの表となし、次の三門は學者德を成すの表とし、最後の二門は君子道を行ふの表としたり。全編漢文なり。寬政四年壬子〔二四五二〕十二月三日の自序あり。

◉冢田虎の傳は「滑川談」の下にあり。

せいだうのゑづ

聖堂之畫圖　一折

江戶昌平坂の聖堂繪圖なり。內外の體裁詳細に圖出す。「元祿四年辛未〔二三五一〕」の版行なり。

せいだん

政談　十卷　荻生茂卿

當時の政治法律制度等の事を論じ、殊に國用の出入、官吏の職責等を論じて、時弊を矯正せんとせる意見なり。卷末に「機事密ならざれば則ち害生ずといふことなり。御政務上の事は明白に人に語るべき事にあらざる故、此の物語は弟子にも書せ候はず、自身老眼澀筆に認め侍るなり。上覽に入れ奉る後は火水ありたき事なり」とあり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園祕錄」の下にあり。

せいだんひしよ

政談祕書　寫本五卷

天明比より、弘化頃に至る幕府の制令、觸書、奉行其の他への伺指令書を輯錄したるものなり。

せいちうぜんしよ

淸廚全書　寫本二卷　大井雅矩

飮食に關する抄錄なり。炊蒸、粉麪、寒具、造釀、烹飪、蒸調、烏瑰、茶、鹽、以上の九門に分ちて幾多の諸書より摘出して、且自說をも附したり。著者大井雅矩は攝津の人にして敎軒と號せり。

せいちうでんしんろく

精忠傳神錄　十卷

淺野長矩の遺臣の復讐始末を記したるもの。四十六士の遺像、由緖、小傳等をも詳しく記せり。「太平義臣傳」を更に通俗的に譯述したるもの。故に卷首には「太平義臣繪傳」と題せり。卷を上下に分ち、更に上を五卷、下を四卷、一卷を目次とす。

せいちうぶかん

誠忠武鑑　寫本三卷

赤穗遺臣の復讐事錄なり。淺野家の濫觴より四十六士遂志落着に至る詳細記なり。

せいちえうりやく

井地要略　寫本一卷　牧野安右衛門

熊本藩の農政に關する名目を解說し、また加藤淸正以來の高積り雜穀交換法等を記したるものなり。寬政五年癸丑〔二四五三〕の編輯にかゝる。

◉牧野安右衛門は遠江國山香郡山鹿手長「寺島村の人なり。算數の學に通じ、兼ねて書を善くす。」最初里正なりしが、後に郡代御領頭となりて祿二百石を食めり。

せいちづかいせう

制地圖解抄　寫本一卷　色川三中

本邦古來の制地法を圖解說示したるものなり。其の根元沿革、算法等を詳しく記せり。

◉色川三中は常陸土浦の和學者なり。彌三郞また三郞兵衛と稱し、東海と號す。諸葛琴臺の門に入りて和學を研究す。其の著書頗る多し、列擧すれば、日本記抄、國史問答、延喜式書拔、黑坂命墳墓考、香取御社圖、神代身度考、皇國田制考、異號年表、類聚符宣抄年表、本朝通貨考、檢田考證、租庸調考、租稅考々證、田制必用、田令圖解抄、田租、錢貨租稅庸調、物價拔萃、度量考量品便覽、度量衡問答、本朝量品及附錄、和漢量品、周漢唐宋明淸度量衡、唐尺辨

僞、尺度考、京升考、草木考、束把考、萬葉集會說活眼搜、萬葉集名物類字、類聚五十音部分、五十音圖說、和名部類、和名抄註、香取文書纂總目錄、中山信名藏書目錄、足柄日記、辛亥紀行、常陸名所圖會、江戸の裏、衣手雜記、香取路廼記、俗言三百、六霜集、千種の花、子丑秋夏集、おもひ草、莿賞、意の栞、片葉雜記、野中の淸水、さゝがにのいと、筑南年譜、詠草、破綱治驗、日長醫話、醫事、倭方綱要、大同類聚方病名、食服語意解、火攻品解、問答書、東海隨筆、隨筆雜集、（大同類聚所傳）古醫方書等なり。安政二年乙卯〔二五一五〕六月二十三日歿す、年五十四。

せいちんえうらん

西鎭要覽 （寫本）十三卷

本書は一名によって「歷代鎭西要略」の下に解題す。

せいてうへん

聲調編 （寫本）二卷　關藤　政方（マサミチ）

我が音韻學に關する考論にて、發音の根元、音韻の沿革等を詳記す。附錄には「男信（ナマシナ）質疑」といふを添へたり、天保十一年庚子〔二五〇〇〕十二月の著。明治十年坂谷素の漢文序あり。

◉關藤政方は備中笠岡の人にして、葭汀と號す。醫を以て家業とし、和歌を善くし、國學に該通し、最も音韻に精しかり。さきに「俳字例」を著し、本書は版刻に及ばず、後孫某寫正して宮內省に獻じたりといふ。

せいでんえんぎ

井田衍義 （寫本）六卷　上田　一道

井田の和制を和解したるもの。內題には「井牧通行圖說」といふ。享和元年辛酉〔二四六一〕の自序附言あり、其の附言中に「近來井田和解といふもの有て、專ら童蒙の爲めに圖解を作る。一道これにならひて圖說を作る。然れども彼は鄭註孔疏に因仍し、此れは直に途人匠人の所言による。故に相合はざることあるべし」云々とあり。六卷は五卷の補にして、其の上卷に井地法を說き、中卷に錄地法を述べ、下卷を更に三卷となし、其の一に參主制、其の二に通本國法、其の三に答問を掲ぐ、漢文にて記されたり。著者上田一道は肥前の人なり。今其の詳傳を得がたし。

せいでんこくじかい

井田國字解 （寫本）一卷　荻生　茂卿

支那古來の井田法を、我が國の事實に比較して解題したるものなり。正德比の作なるべしといへり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園祕錄」の下にあり。

せいでんさんぱふ

井田算法 （寫本）一卷

井田法の計算を圖解したるものなり、著者年代共に詳ならず。

せいでんせう

靑傳抄 （寫本）四卷

調馬、療病等に關する傳書なり。安驥集第三十三の拔書、仲國祕傳抄の上下卷拔書、細谷宮內少輔高櫾の註書等を拔書したるものなり。編者年代等詳ならず。

せいでんちんごきやう

正傳珍語鏡 （寫本）二卷

慶長以來の武邊雜事を輯錄したるものなり。石田三成の素性、大阪陣の圖等十數項を記し、武家諸法度、禁中諸法度等をも掲げたり。

せいでんづかう

井田圖考 二卷　萬尾　時春

孟子に謂はゆる井田の事を假名文にて圖說考論したるものなり。享保十一年丙午〔二三八六〕の自跋あり。

◉萬尾時春のことは「勸農固本錄」の下にあり。

せいでんづせつ

井田圖說 三卷　齋藤　高壽

「鄕遂井田圖說」と內題して、卷上に鄕遂軍旅諸侯三則、遂縣軍旅諸侯三則、井田都鄙十則、鄕遂百里千乘四則、井田百里千乘五則、五溝分土三等二則。卷中に畿內諸侯一則、軍禮十二則、圖十四則、古說八則。卷下を附錄として、日本鄕遂井田圖說一卷を掲げたり。こは論十八則、圖十四則より成る。明和四年丁亥〔二四二七〕二月十八日の自序あり。文化元年甲子〔二四六四〕出版す。

◉齋藤高壽は權之助と稱し、芝山と號す。少より文武を修め、熊本侯に仕ふ。學識漸く進むに從て子弟の來り學ぶもの愈多し。敎ふるに文武兼修の要を以てす。官作事頭より物頭に進み、一時下士に貶せられしも、後また出でて高橋の市尹となり、遂に留守物頭の班に列す。嘗て「大射儀」一卷を作り、大

に大射の法を講じ、最も藩主の賞するところとなり、また叡聞に達して敎賞を受く。文化五年戊辰〔二四六八〕十二月二十一日、六十六歲にて歿す。

せいとうぞくだん

齊東俗談 七卷　松浦　默

俗語の義理を辨證したるもの。典故、凡言、單字、義訓、假借、世諺等の六類に分ちて論述す。延寶七年己未〔二三三九〕林愨の序、及び自跋、瀨田植の後序、松浦武の跋等ありて、貞享二年乙丑〔二三四五〕上梓す。

◉松浦默は播磨の人。號を交翠軒、字を成之、通稱を藤五郎といふ。年十五の時藩主姬路侯の命によりて江戸に出で林鵞峯に就て學び遂に文學を以て名を成す。後越侯の賓師となりて優遇を受く。著書には世諺故事、勢免天嶽迹、交翠軒文稿、孝經證解、論語證解、大學授蒙資講等あり。寛永九年壬申〔二二九二〕九月二十七日、六十四にて江戸に歿す。

せいどつう

制度通 十三卷　伊藤　長胤

和漢制度の沿革を考證論說したるものなり。凡そ六十二門あり。要は本朝諸制度の、多く漢土のに從ひて定制せられたることを考證せるなり。「三代以來宋明に至るまで、典章文物之れを參するに、本朝の制を以てし、書を讀み古を考ふる者をして、其の由る所を知らしむ」と自序にあり。享保九年甲辰〔二三八四〕の著。寛政八年丙辰〔二四五六〕男善韶の跋あり。

◉伊藤長胤の傳は「輶軒小錄」の下に出づ。

せいのうさたん

靑囊瑣探 二卷　片倉　元周

著者の隨筆漫錄にして、人の敎戒たるべき事、及び奇藥の祕方、甲斐德本の經驗處方十九種を擧ぐ。

◉片倉元周は相模國梁非郡の人にして深甫と字し、家、世々醫を業とせり。元周幼より多紀元德の門に入り、また京師に住きて賀川氏の產科を學べり。業成り難病を診するに方り、精思勇決、奇效を奏すること頗る多く。晩年に及び其の名一時に振へり。著書には、傷寒啓微、產科發蒙、靜儉堂治驗、黴癘新書、嬰保須知、痘瘡規、腫脹叢編、難病試效、居蘇考、及び本書靑囊瑣探等あり。

せいはうちうぜんしよ

淸庖厨全書 （寫本）二卷　荻　矩

食劑品料の名義を說き、其の製法を示したるものなり。炊蒸、粉麪、爽具、造釀、烹飪、烹調、烏壎、菜、顯、等の九類に分ち、諸書によりて註解す。附錄あり、煙草の事を記す。「淸厨全書」の異本なるべし。

せいはふしふ

制法集 （寫本）十卷

內題には「御當家代々御制法集」と記して、寛永年中より、天和三年癸亥〔二三四三〕に至る德川氏數代間の法令を輯めたるものなり。

せいはんでんそかう

西藩田租考 （寫本）二卷　伊地知季安

薩藩の農政沿革を記述したるもの。井田、租稅、蠶織、丁役、馬牧、國郡、倉院、新制、京制、令制その他凡て四十三項に種別して詳述せり。引據するところありて頗る參考するに足る。天保八年丁酉〔二四九七〕正月の作なり。

◉伊地知季安は薩摩の藩士なり。別に「薩隅日田賦雜徵」を著せり。

せいはんやし

西藩野史 （寫本）二十一卷

薩州島津氏歷代の事績を詳敍したるもの。その祖忠久より起りて宗信に終れり。同家の來歷を硏究するには、唯一の材料たり。久しく寫本にて傳りしが、近年刊本に發行せられたり。假名文にて記す。

せいひつかう

製筆考 （寫本）一卷　藤原　愛德

筆の製作法を考究したるもの。書家空海、道風、佐理、行成等の諸說より、執筆法、烏羽玉問答抄、金玉積傳集、筆法才葉集、入木抄、麒麟抄、筆札密傳抄、敦直筆記等の記述によりて考案工夫し更に晉の王羲之の「筆經」の中よりも製筆法を譯出す。享和三年癸亥〔二四六三〕三宅公輔の跋あり。

◉藤原愛德は權大納言中山榮親の第二子なり。出でて權大納言兼右近衞大將花山院長熙の後を襲ぎ、累遷して右大臣に任ぜらる。夙に才學あり、殊に書を以て著名なり。

せいびもんだふ

淸美問答 四卷　小原大夫軒

本書は一名によって「白木翁物語」の下に解題せり。

せいびやうごしふ

聖廟御集　（本寫）一卷　菅原　道眞

菅公一生の詠歌、百九十餘首を收めたるものなり。

◉菅原道眞の傳記は「菅家文草」の下にあり。

せいびやうごはふらく

聖廟御法樂　（本寫）一卷

元祿十五年壬午〔二三六二〕二月二十五日、院聖廟御法樂の時の詩歌なり。講師輝光朝臣、題者、奉行共に治部卿爲綱卿なり。

せいびやうりやくでん

聖廟略傳　二卷　僧　梅性

「菅家聖廟曆傳序說」と內題して、菅原道眞一代の事績を、漢文にて記せり。年月日に繫けて年譜的に記す。事實は考徵に資すべきもの多し。元祿十五年壬午〔二三六二〕二月二十五日出版す。

せいふうさげん　清風瑣言　（柳云　私爲著）

せいぶきばつする

聖武記拔萃　四卷　山中　信古

淸の魏源の「聖武記」を鈔錄したるものなり。安政三年丙辰〔二五一六〕の刊行に係る。

◉山中信古の傳は、「增訂南海包譜」の下にあり。

せいぶひえうき

聖武祕要記　（本寫）三卷　松平　定信

寬永の始、四君子十善人など唱へられし紀伊大納言賴宣、松平新太郞光政、阿部豐後守忠秋、板倉內膳正重矩。水戶黃門光圀、保科肥後守正之、久世大和守廣之、松平日向守信之、相馬長門守忠胤、板倉市正重太、服部備後守、鈴木伊兵衞、河野權右衞門、五味藤九郞等の行蹟を記したるものなり。「天明三年〔二四四三〕十二月」と末書せり、當時の編なるべし。卷末無名の奧書に、「此の書は白川少將定信朝臣、家中の子弟に授け給ふ書なり」云々と記す。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

せいぼくつうかうづせつ

井牧通行圖說　（本寫）一卷　上田　一道

「井牧通行圖說」は本書の內題にして、表書は「井田衍義」なり。故に同名の下に解題せり。

せいぼんしやうわ

聖凡唱和　一卷　僧　元政

著者每に寒山拾得の詩を愛誦し、其の韻を襲ぎて八十八首を詠出したるものなり。故に「聖凡唱和」といへり。近年「稱心病課」と合せて活刷したるものあり。

◉元政の傳記は「扶桑隱逸傳」の下にあり。

せいみかいそう

舍密開宗　二十一卷　宇田川榕庵

化學書なり。蓋し我が邦化學に關する首唱なり。天保八年丁酉〔二四九七〕の作。

◉宇田川榕庵の傳は「植學啓原」の下にあり。

せいみきよくひつけいぜんぺん

舍密局必携前編　三冊　上野　彥

西洋諸種の化學書中より、抄譯したる化學書にて、文久二年壬戌〔二五二二〕春正月、譯者の凡例、津藩堀江璀の序あり。著者上野彥は長崎の人にして、彥馬と字す。

せいみんじゆつ

齊民術　五卷　山田　好之

後魏の賈思勰が著したる「齊民要術」に傍訓を加へて、寬保四年甲子〔二四〇四〕出版したるものなり。農業稼穡より畜養其の他の事に至る。

◉山田好之は伊勢國下里灘の農にして、別に「風土蠡測」を著せり。

せいめいかいぎ

西銘解義　一卷　室　直淸

張橫渠の「西銘」と朱子の「解文」とに附說して解義せるものなり。天明四年甲辰〔二四四四〕集堂元成の序あり。

◉室直淸の傳は「駿臺雜話」の下にあり。

せいめいかう

正名考　一卷　松平　定信

支那稱號に就きて考論したるもの。唐といひ、漢といひ、中華といへる等のことを論述す。天明元年辛丑〔二四四一〕著者の奧書に、「此の比或る人間ひ侍るは、もろこしを凡て稱するは、何れの號がよくあたり侍らん、予答へて曰く予も久しくこゝに疑ありて、見る書々の中に、考の據となるべきは反古のはしに書きとめおき侍りぬと遂にうたがはしきを書きて論じ侍ることしかり」とあり。「輪池叢書」第十にも收めたり。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下を見よ。

せいめいさんかう

西銘參考　（本寫）一卷　淺見　安正

「卦變諸說」「明通論私考」「好學論照考」「定性書照考」「義利辨附錄」「西銘參考」等性理に關する自說六種を集めたるもの。「卦變諸說」の卷末に延寶八年庚申〔二三四〇〕の書後一編あり。

◉淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

せいめいしやうぎ

西銘詳義　一卷　室　直淸

天明四年甲辰〔二四四四〕門人集堂元成の序あり。

◉室直淸の傳は「駿臺雜話」の下にあり。

せいめいしよげん

正名緒言　二卷　菱川　賓

鎌倉以來、武家に用ひ來れるところの稱呼の名義を釋し、諸書に徵して考證したるもの。其の凡例に曰く、「國朝の形勢鎌倉に一變し、室町に至て極る。其の間名號の棼亂、稱呼の舛訛枚擧すべからず。因循今に至り、未だ之れを正すこと能はず。余恒に之れを慨す。私に名實の變遷を考へ、假りに賓主の對偶を定め、凡そ舊訛の稱謂に涉るもの、輯略して之れを折衷し、測るに臆見を以てし、取次に之れを錄し、復た類目を分たず、標して正名緒言といふ」と。其の梗概を知るべし。尾藤二洲の序あれど年月を記さず。

◉菱川賓は大觀、有門と稱し、岡山と號す。大阪の人〔或は備前の人〕にて佐倉侯堀田氏に仕へし儒者なり。著書には正名緒言、熊澤了介傳等あり。

せいめいつうへんせん

淸明通變占　三卷

占筮法を記述したるものなり。一名を「神明通變占」とも云へり。貞享四年丁卯〔二三四七〕小本三冊に出版す。

せいめいよかう

西溟餘稿　三卷　僧　元皓

著者の詩文集なり。延享四年丁卯〔二四〇七〕闊白駒の序を載せ、同五年出版す。

◉元皓の傳は「松浦詩集」の下にあり。

せいめいろくせう

姓名錄抄　（本寫）一卷

朝臣、眞人、宿禰、連、公、首、臣、造、直、忌寸、縣主、村主、使主、雜、伊美吉、史、勝、部、氏、阿祇奈君等に順序して古來の諸姓を列擧して附訓し、更に一字訓の姓七十二氏、一字音姓七、二字訓五百六十八、二字音姓八十三、上音下訓姓十八、上訓下音姓八、三字訓姓五十六、三字音姓七、上二字音下一字訓姓十二、上下訓中一字音姓一、上一字訓二字音姓二、上二字訓下一字音姓一、四字訓姓四、四字音姓三、五字訓姓三、等を列擧し、且無戶姓、名字等を列れたり。「續群書類從」卷九百二十六、雜部第七十六に收む。

せいもんにつき

誓文日記　（本寫）一冊　可兒　才藏

自家一生の事蹟を記したるもの。最初前田利家に仕へ天正十二年賀州末森城後詰の軍に從ひし時の戰功より、利家に口授せられたる軍中夜廻、火藥製造、五里松明、水松明、狼煙製造の祕法等を記し、更に天正慶長間の諸軍事顚末等を記述す。卷首に日本國大小神祇に誓ひ、自他の功名どもに聊か虛說なく正直に日記せしむるとの語を揭げて、書名も「誓文日記」とは名けたり。

◉可兒才藏は福島左衞門大夫正則の家臣にして、天正中末森の戰、小田原征討等に從ひて功あり。其の後國を辭し蹤を削りて京師に隱遁し、名を才人と改め竹葉軒と號せりといふ。

せいやうかなひつどく

西洋假名必讀　二卷　鶴峯　戊申

此の書は一名により「語學新書」の下に解題せり。

せいやうきぶん

西洋紀聞　三卷　新井　君美

上卷は奉行所に於て、羅馬人召對糺問の事を詳敍し、中卷は羅馬人の言によりて海外諸國の地理歷史事項を記し、下卷は羅馬人と問答せる雜話を記し、末に天主敎の大意を述べて、逐次に其の妄を辨駁せり。全編假名文にて、敍事快手の下に成れるを見る。上卷末に中御門天皇の正德五年乙未〔二三七五〕に作れる末記あり。明治十五年白石社に於て三卷二冊に活刷せり。

◉新井君美の傳記は「折たく柴の記」の下にあり。

せいやうくわこうしんきせつ

西洋火攻神器說　（本寫）四卷　清水　正德

明の周狀顧の著したる「雄略武備考」の中、銃礮說を抄出して註解したるものなり。
◉淸水正德の傳は「赤穗義士人の鑑」の下に出づ。

せいやうぐんき

勢陽軍記　七卷

伊勢の國司源中納言具親が、織田家と攻戰したる始末を詳記せり。一名を「北畠物語」とも云へり。

せいやうぐんそんめいばつしふき

勢陽郡村名拔集記　（寫本）一卷

伊勢國各郡內の領下支配の郡村名を拔記したるものなり。各郡の村數合せて千百九十四村あり。

せいやうざつき

西洋雜記　四卷　山村　昌永

西洋書中より、紀事、奇談、雜技、物產等の類を抄出して、實學の參考に供したるものなりといふ。卷一は「世界開闢の說」より、「羅馬國銅甲の說」に至る十七。卷二は「聖人婁瑟（モヤス）の說」より、「日月を神とする說」に至る二十一。卷三は「冠亞トルバンドの說」より、「曇是可國大鴉の記」に至る二十九。卷四は「印度小島の說」より、「工鄂國の奇鳥の說」に至る三十四條等あり。享和元年辛酉〔二四六一〕秋八月朔旦の著者の凡例、同四年鈴木善敎の序等あり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕江戶に出版す。
◉山村昌永の傳は「增譯采覽異言」の下にあり。

せいやうざつき

西洋雜記　（寫本）六卷　夢遊道人

西洋各國に於ける、奇事、奇談、雜技、物產等の事を輯錄したるものにて、第一卷に七項。第二卷に二十三項。第三卷に十二項。第四卷に二十項。第五卷に二十項。第六卷に十七項を收めたり。享和元年辛酉〔二四六一〕の自序によれば、著者近年洋學に志して、大槻槃水に從ひ、其の讀書法譯文法を學び、彼の邦の書を讀みて、奇說を得る每に雜錄したるものなりといふ。卷尾に白水山人再訂の由を記せり。

せいやうざつき

勢陽雜記　（寫本）九卷

伊勢國の地理歷史に關する雜記なり。最初同國の起原沿革より、各郡の地理的事項、歷史的事績を詳敍す。卷一に桑名、員辨、朝明、三重の四郡を、卷二に河曲、鈴鹿、安藝の三郡を、卷三に安濃郡を、卷四に一志郡を、卷五に飯高、飯野・多氣の三郡を、卷六七、八、九の四卷に度會郡を收めたり。著者年代詳ならず。

せいやうざつきしふゐ

勢陽雜記拾遺　（寫本）三卷　古谷　久語

前揭「勢陽雜記」に遺漏せるものを拾集して考證したるものなり。明和九年壬辰〔二四三二〕の自序、及び朝山元崧の序あり。

せいやうぜんにんろく

勢陽善人錄　（寫本）一卷

此の書は享保以來寶曆比に至る伊勢國內の孝子、節婦、義僕、仁睦者等の事績を輯錄したるものなり。編年詳ならず

せいやうせんぷ

西洋錢譜　一卷　朽木　龍橋

歐洲各國の錢貨を圖し、各種其の圍徑、重量、厚度、彫文等を記せり。天明七年丁未〔二四四七〕家臣小澤類稿の序を附して出版す。
◉朽木龍橋の傳は「新撰泉譜」の下にあり。

せいやうどりやうかう

西洋度量考　一卷　青山　幸哉

西洋の度量につき考說したるものなり。安政二年乙卯〔二五一五〕足立樂の序あり。

せいやうはうじゆつべんらん

西洋礮術便覽　二卷　上田　仲敏

西洋砲術の書を譯述せるものなり。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕黃花園主人の凡例あり。同六年出版す。
◉上田仲敏のことは「砲術語撰」の下にあり。

せいゆうし

勢遊志　（寫本）一卷　伊藤　長胤

此の書は一名「伊藤長胤勢遊記」の下に解題せり。

せいゆうりよだん

西遊旅譚　五卷　司馬　峻

此の書は一名により「畫圖西遊譚」の下に解題せり

せいゆろく

製油錄　一卷　大藏　永常

製油の方法を記述したるもの。天保七年丙申〔二四

九六〕の作。最初搾油の沿革を揭げ、次に搾法を圖說し、得失計算をも記したり。
◉大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

せいようこてつ

制用古轍　（寫本）一卷

節制して究饑を賑濟すべき事を論じたる小册子也

せいりいかう

西里遺稿　一卷　野口　景張

嘉永四年辛亥〔二五一一〕神惟孝、佐藤坦の序あり。西里は著者の號なり。

せいりうき

淸流記　（寫本）三卷

德川氏に關する系記なり。第一卷には淸和天皇より、德川家康に至る系圖及び家康一生の事、傳通院の事等を記し、第二卷には家康の諸子より、九代家重及び其の諸子の事を記し、第三卷には尾州家を始めとして、酒井家に至る二十三家の系圖を揭げたり。

せいりうきだん

淸流紀談　二卷　僧　龍護

眞宗本願寺派に屬せる學僧の行狀閱歷著書逸話等を蒐錄したるもの。即ち西吟、知空、桃溪、法霖、月筌、岐諭、性海、泰巖、義敎、智遇、僧樸、道粹、僧鎔、慧雲、崇廓、玄智、仰誓、大同、大乘、柔遠、道隱、廓究、衆鐵、道振、觀道、等五十餘人のを載せたり。天保四年癸巳〔二四九三〕の作にして、江州慶淵の校補に係る。明治十九年また刊行せり。近刊「眞宗學苑談叢」は本書の續編に充つべきものなり。
◉龍護の傳は未だ詳ならず。本願寺學庠儒學敎授泰山巖の序に「往年師〔龍護〕參二事于學庠一其爲レ人溫厚博學信道余甚敬慕焉」と云ひ、長諸旭道一の序には「當春新得二鳥街〔大阪〕長光寺龍護公一公與レ予同國一面如二舊知一」と云へり。

せいりさんしふ

精里三集　五卷　古賀　樸

著者の文集。卷一に己巳の稿十四編、庚午の作十四編。卷二に辛未の稿十二編、壬申の作二十五編。卷三に癸酉の稿二十二編。卷四に甲戌の稿二十二編、乙亥の稿十二編。卷五に丙子の稿十九編、丁丑の稿二編。凡て一百四十二編九年間の作にかゝる。文政元年戊寅〔二四七八〕增島固の序、吉田幾、男燾の跋同二年本多忠の序あり。
◉古賀樸の傳は「十字解」の下にあり。

せいりじぎげんかい

性理字義諺解　八卷　林　道春

性理に關する字義數百條を諺解したるものなり。寬永十六年己卯〔二二九九〕著者の末記あり。萬治二年己亥八卷四册に出版す。
◉林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

せいりじしふ

精里二集　二卷　古賀　樸

著者の文集。卷一に文三十三篇を揭げ、卷二に律、賦、及び古今體詩九十七首を載せたり。文化十四年丁丑〔二四七七〕山村良由の序、文政元年筱崎弼・男煜の跋あり。
◉古賀樸の傳は「十字解」の下に出づ。

せいりしよしふ

精里初集　三卷　古賀　樸

著者の文詩なり。卷一、卷二は文にして、凡て四十六篇。卷三は詩にして、古今體詩凡て百二十一首あり。文化十四年丁丑〔二四七七〕樺島公禮の序あり。男燾及び煜の編輯にかゝる。
◉古賀樸の傳は「十字解」の下にあり。

せいりぜんしよ

精里全書　（寫本）二十卷　古賀　樸

最初八卷に詩を、後の十二卷に文を收む。即ち卷一に古詩。卷二に五言律排律。卷三、四、五に七言律。卷六に五言、六言、七言絕句。卷七、八に七言絕句。卷九、十に書。卷十一、十二、十三に序。卷十四、十五に記。卷十六に論。卷十七に銘、贊、偶記。卷十八、十九に題跋。卷二十に祭表、祭文、律賦等に類聚す。男煜の編するところなり。文政四年辛巳〔二四八一〕同人の跋を附す。
◉古賀樸の傳は「十字解」の下にあり。

せいりぜんしよ

精里全書　（寫本）一卷　古賀　樸

文化八年辛未〔二四七一〕韓使來朝の時、對馬客館に於て、贈答したる詩文を集めたるものなり。故に「對禮餘藻」と內題せり。
◉古賀樸の傳は「十字解」の下にあり。

せいりやうでんじんじやうごしやうぞくづ

清涼殿尋常御裝束圖　（寫本）一卷

清涼殿尋常御裝束圖、四方拜、小朝拜、四節會、大床子御膳、神宮加茂奏事始、石清水臨時祭御禊、東照宮奉幣發遣日時定、加茂祭、清祓、石清水放生會、宣命、奏聞、月御覽、例幣、齋火御飯、御禊、新嘗祭等を圖示したるものなり。

せいりやうでんはなのえんごくわいわか

清涼殿花宴御會和歌　一卷

延享四年丁卯〔二四〇七〕三月十二日、「禁中翫花」の題にて催せられたる歌合なり。卷頭に櫻町天皇の御製を揭げ、有栖川職仁親王、烏丸光榮、中山榮親、久世通夏、飛鳥井雅香、庭田重照、烏丸光胤、飛鳥井雅重、西三條實稱、中院通枝、小川俊逸、風早公雄、風早實積、武者小路實岳等なり。

せいりやうき

清良記　（寫本）三十卷　土居　水也

土居清良の一生事歷を詳敍したるもの。最初土居家の由來より、藤堂高虎土居清良と高麗陣に誘ふ事、並に清良死歿の事に終れり。目錄三冊を添へ、凡て三十三冊一千百五十四枚に寫本せり。

せいりんぜんしよ

姓林全書　（寫本）三卷　伊藤　善韶

古今の姓氏を網羅し、頭字のいろは順に排列したるものなり。太田方、鹽田屯等增補せり。

◉伊藤善韶は「古義堂遺書總目敍釋」の下に傳す。

せいれいしゆくさんぴんかかう

星舲祝三品家稿　九卷　梅辻　希烈

著者の詩文集なり。內題を「幽獨唔言」とし、卷一を時雨聰課、卷二を釣唱集、卷三を綠陰結夏集卷四を囂覺集、卷五を松韻山房稿、卷六を細流奇石集、卷七を鳳嶠三十勝、卷八を鷗渚清課、卷九を空谷餘響と名け、文政七年甲申〔二四八四〕滕和聲の序を附し、九卷六冊に版行す。

◉梅辻希烈は梅辻希聲〔號春樵〕の弟にして、文化四年丁卯〔二四六七〕五月、兄の職を襲ぎて、小比叡禰宜となる。

せいれいつうゐ

制令通彙　（寫本）二十五卷　近藤　守重

天明元年辛丑〔二四四一〕正月より、文化十二年乙亥〔二四七五〕十二月に至る、德川幕府の觸書を編輯したるものなり。年代的に順序せり。

◉近藤守重の傳は「右文故事」の下にあり。

せいろうさんもん

井樓纂聞　（寫本）二卷　帆足　萬里

豐後大友梅岳子の事績を漢文にて記したるもの。井樓は立花城地にして山名に據りて名けたるなり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕十二月の自序あり。

◉帆足萬里の傳は「原敎」の下にあり。

せいろうびじんあはせ

青樓美人合　（繪本）五冊　田中　庵

江戸吉原の女郎姿を寫して、各俳諧を附して繪合にしたるものなり。明和七年庚寅〔二四三〇〕出版す。編者は田中庵とせり。

せいろてきえうでふ

靜廬摘要帖　（寫本）一卷　林　春德

經傳諸子の金言摘要錄なり。最初に朱文公勸學文の一節を拔揭す。末に萬治二年己亥〔二三一九〕五松閑人の奧書あり。

◉林春德の傳記は「讀耕全集」の下にあり。

せいろんめいびろく

性論明備錄　一卷　山崎　嘉

程明道の性說に朱熹の補說したるものを並錄し、更に「朱子語類」等より同說に關する事項を抄出して附錄せり。寛文十二年〔二三三二〕の自序を附す。

◉山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

せいわゐんぢざうえんぎ

清和院地藏緣起　（寫本）四冊

清和院地藏菩薩堂建立勸進につき、其の略緣起を述べたるものなり。永正三年丙寅〔二一六六〕の作にかゝる。

せいわげんじけいづ

清和源氏系圖　（寫本）一卷

清和天皇より出でて、上總介鎭守府將軍經基に至り、村上天皇の天德四年庚申〔一六二〇〕始めて源姓を賜り、爾來相繼ぎて、遂に從五位上備前守持朝に至れる系譜なり。「續群書類從」卷百十、系圖部第五に收めたり。

せいわせう

清話抄　二卷　淺　茅庵

和歌に關する評論雜話なり。作者、歌集、歌體等につきて論ずること詳密なり。淺草庵の序を附して、文政三年庚寅〔二四八〇〕發行す。

せいわんさわ

青灣茶話　二卷　大枝　流芳

煎茶に關する諸件を記したるもの。凡例にも「此の書專ら煎茶の爲めにす、末茶點茶の事を論ぜず」また「煎茶の事は今此の土點茶家者流の如く法に拘り、律に泥むの費を用ひず、雅趣を專として新奇を出すべし、一定の法なし」と云へり。寶曆六年丙子〔二四一六〕部賀庭鍾の序を附して刊行す。

◉大枝流芳の傳は「貝盡浦の錦」の下にあり。

せうあんさんぱふ

昭闇算法　一卷　榎　豐後

先づ一算術と謂へる算法を記す、此法は異乘同除の法に過ぎざれども、能く之れを擴て、點竄以上の諸題に及ぼしたり。編中には既刻の算書に於ける題術文を取て、之に評論を加へたる者多し。仁孝天皇の天保八年丁酉〔二四九七〕に成りて同十二年に至りて出版せり。

◉榎豐後は法眼淨門と稱し、南郊と號す。京都法王護國寺の雜掌にして、中島晋の門人なり。人呼で東寺の算者と云ふ。「昭闇算法」を編するに當りて、長持箱中に獨座して人語を斷て、晝夜勉強久うして成りたりと云ふ。其の勞苦想ふべし。

せういうき

小右記　（寫本）二十冊　小野宮實資

本名「をうき」と訓じて「を」の部に解題したり。

せういんくわんまんぴつ

招隱館漫筆　（寫本）三卷　源　賴紀

敎訓書なり。門を十一に分ち、俗諺故事等を引きて假名文に記せり。

せううんぞくろく

紹運續錄　一卷　速水　房常

後陽成天皇より、後桃園天皇に至る歷代の御系譜を揭げ、御卽位、行幸、崩御等を詳細に記し、皇子皇女の御連系任官出家等をも附記したり。延享三年丙寅〔二四〇六〕の自跋、高辻少納言家長の跋あり。

◉速水房常の傳は「掌中職原擥要」の下にあり。

せううんろうえいぶつし

小雲棲詠物詩　二卷　僧　大典

著者の詩集中より、殊に詠物の詩を抄出したるもの。上卷に古詩、五言律詩。下卷に七言律、同排律、同絕句等を收む。天明七年丁未〔二四四七〕釋慈周の序あり。

◉大典の傳は「柿本人丸事蹟考」の下にあり。

せううんろうかう

小雲棲稿　十二卷　僧　大典

著者の詩文集。卷一に五言古詩八、七言古詩六、五言律詩八十三。卷二に五言律詩九十二、五言排律十五。卷三に七言律詩百二十三。卷四に七言律詩二十九、五言絕句百四十。卷六に七言絕句百三十。卷七に賦一、序二十。卷八に傳二、記八。卷九に碑碣銘四、論三、說八。卷十に銘箴十二、哀文三、跋五、雜文四。卷十一に書二十七。卷十二に書二十四等を收む。安永四年乙未〔二四三五〕越後片猷の序、伊勢藤元稽の跋等あり。十卷六冊に版行す。

◉大典の傳記は「柿本人丸事蹟考」の下にあり。

せうえうしふ

逍遙集　（寫本）六卷　和田　以悅

著者の詠歌を編輯したるものなり。延寶五年丁巳〔二三三七〕の自序あり。

◉和田以悅は京都の人。宗翁と字し、一華堂切臨と號す。典故を松永貞德に、儒學を藤原惺窩に學びて和漢の學に通ぜり。嵯峨廣澤に隱居して、和歌を詠し、書を著す。卽ち本書の外に伊勢物語集註、大和物語首書、源氏綱目、源氏躰引抄等あり。延寶〔二三三三－二三四〇〕年中、七十二にて歿す。

せうがくくわんのうしんぺん

（奧羽）小學勸農新編　三卷　岡見　知平

上卷に諸國各種の農具を圖說し、中卷に肥料の種類、及び其の施加法を述べ、下卷に水利灌漑等の諸術を記せり。天保二年辛卯〔二四九一〕の作。明治十四年同地人岡田治助出版す。著者岡見知平は出羽秋田の人なり。

せうがくさんせつ

小學算說　（寫本）六卷　增島　固

朱子の「小學」に諸家の說を纂輯したるものなり。文政五年壬午〔二四八二〕凡內勞の序あり。
◉增島固の傳は「讀易小言」の下に出たり。

せうがくしかう

小學私考　（寫本）一卷　林　春信

小學を講釋したるものなり。本文を省略して、略註を施したるなり。萬治二年己亥〔二三一九〕十五日講筵を開きて講解したるものなり。
◉林春信の傳記は「史館茗話」の下にあり。

せうがくしよがうさん

小學書合纂　四卷　昌谷　碩

朱子の「小學」に諸家の說を纂輯したるものなり。安政二年乙卯〔二五一五〕の自序、同三年安積信、金子濟民等の序あり。
◉昌谷碩の傳は「周易音訓」の下にあり。

せうがくしよらんぐわいしよ

小學書欄外書　一卷　佐藤　坦

朱子の「小學」を註解講釋したるものなり。著者佐藤坦の傳は「愛日樓文詩」の下にあり。

せうがくびかう

小學備考　六卷　貝原　篤信

小學を註解したるもの。廣く諸書を引徵纂註す。蓋し我が邦に於ける「小學」註與の最初にして、著者に於ける著述の第一着手なりきといふ。寬文九年己酉〔二三二九〕の自跋を附し、同年出版す。
◉貝原篤信の傳は「自娛集」の下にあり。

せうがくひつき

小學筆記　（寫本）二卷　三宅　重固

朱子の「小學」を講解したるもの。享保十三年戊申〔二三八八〕の自序あり。
◉三宅重固は播磨明石の人。實操と字し、儀左衞門また丹治と稱し、尙齋と號す。最初父の遺命によりて醫を學び、年十九にして山崎闇齋の門に入り、專ら儒を學ぶ。後世佐藤直方、淺見絅齋と共に山崎門の三傑と稱せらる。業成りて江戸に出で諸生を教授し、後阿部家に仕ふ將軍德川綱吉も藩邸に臨み命じて論語を講ぜしめたることありき。仕ふること十年にして嗣君封を襲ふに方り、屢々性行を直諫して遂に罪を得幽囚せらる、赦に遇ひて學を京に講ず、搢紳列侯來り學ぶもの多し。學規極めて嚴にして生徒を遇すること最も厚かりきといふ。著書には狼疐錄、祭祀來格說、白雀錄、爲貧說、愼術說、默識錄、六經四書筆記、洪範全書、同續等あり。元文六年辛酉〔二四〇一〕正月二十九日歿す、年八十。

せうがくもうやうしふ

小學蒙養集　三卷　山崎　嘉

朱子の諸類文集中より「小學」に引用せる語句を釋けるもの。書名は「易經」の「蒙以養正聖功也」にとれり。寬文九年己酉〔二三二九〕五月四日の自序跋あり。
◉山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

せうかんざつき

消閑雜記　二卷　岡西　惟中

著者の隨筆なり。平等院延立匡房卿の記臆、兼撰の歌は稀なる話、白河院宇治のみゆき行家朝臣の美談、須磨寺櫻の制札評判等より、萬葉集の訓を知る事、百人一首古今集の訓、皇國の凡ての古書どもの訓付淸濁等に至る數十項あり。文政七年甲申〔二四八四〕の自序、晋臥鵬の後叙あり。翌八年出版す。
◉岡西惟中の傳は「一時軒隨筆」の下にあり。

せうかんざつわ

消閑雜話　（寫本）一卷

德川家康治世中に於ける偉績、諸將士の名話等を主と記したるもの。文政十年丁亥〔二四八七〕九月記筆の由を記せれど、著者の名詳ならず。

せうきうゑんしふ

小丘園集　十卷　秋　時憲

著者の詩集。卷一に擬古樂府卷二に五言古詩、卷三、四に七言古詩、卷五に五言律、卷六に五言律及び五言排律、卷七に七言律、卷八に七言律及び七言排律、卷九に五言絕句、卷十に七言絕句を收む。凡て一千〇二十四首あり。東都滕公弼・安藝平子英の輯校するところ。天明二年壬寅〔二四四二〕服元立の序、平子英の跋あり。
◉秋時憲は江戸の儒者にして、習之と字し、辰之進と稱し、小丘園と號す。天明三年癸卯〔二四四三〕七月十八日歿せり。小石川三百坂慈照院に葬る。

せうぎじちろく

笑戲自知錄　二卷　伴田　陳人

心學說に基きて、牛馬を呑む祕傳、家屋を車の如く

押廻し得べき傳、一文の金にて天下無上の寶物を得る傳などを記したる戲書なり。

せうぎよてき

樵漁餘適　十五卷　田中　良暢

著者の詩文集。卷一に五七言古詩、五言律。卷二に七言律。卷三に五言絕句。卷四、五、六、七に七言絕句。以上凡て詩にして以下文なり。卷八に序。卷九に贊、銘、傳、辨。卷十に說。卷十一に書牘。卷十二、十三に記。卷十四に雜文。卷十五に墓碑文、祭文、題、跋、及び遺稿詩文若干首を收む。山縣周南の序あり、又享保二十年乙卯〔二三九五〕服元喬の序及び寬保元年辛酉〔二四〇一〕定堅の序、雨森東、僧獨麟の跋等あり。
◉田中良暢は江戸の儒學者。子舒と字し、武助と稱し、蘭陵と號す。少時物徂徠の門に入りて研究し、早く社中に頭角を顯し、岡嵰州、菅麟岐、板帆丘と共に蘐社の少年四傑と稱せらる。研磋六年、年二十二にして同社を辭し、駒籠白山に假居して子弟を教授し、益時人に知らる。著すところに修辭考、謀野集刪考、蘭陵遺稿等あり。享保十九年甲寅〔二三九四〕二月二十五日歿す、年三十六。

せうぐんしのう

小郡詩囊　三卷　細合　幸

著者の詩集。天明元年辛丑〔二四四一〕江村綬の序、及び北山彰の序あり。
◉細合幸は京都の儒者にして斗南の子なり。元達と字し、三彌と稱し、張庵と號す。迂閣迂語、張庵印譜等を著し、年十八にして歿す。

せうげきやすをき

少外記康雄記　（寫本）一卷　康　雄

著者の日記にて、弘治三年丁巳〔二二一七〕九月、十月、十一月、十二月間のなり。十二月二十三日康雄の奧書あり。正保三年丙戌〔二三〇六〕中原師定奧書す。

せうげつていしせう

招月亭詩鈔　二卷

菅茶山、賴杏坪、同山陽、其の他諸大家の加評あり。

せうご

小語　（寫本）一卷　細井　德民

著者の隨筆なり。主として當時人の嘉言善行を見聞にまかせ漢文にて筆記したるものなり。
◉細井德民の傳は「詩經毛鄭異同考」の下にあり。

せうごべんくわ

笑語辨訛　（寫本）三卷　僧　摩尼庵

平田篤胤の「出定笑語」を辨駁したるもの。上卷に十七箇條、中卷に十七箇條、下卷に十七箇條凡て五十一箇條の疑難を擧げて答釋せり。文久二年壬戌〔二五二二〕の自序凡例等あり。著者摩尼庵は東備の人なり。

せうさうしよけふ

小草初篋　六卷　細合　離

著者の詩集。明和七年庚寅〔二四三〇〕木村孔恭の序、寶曆七年鳴鳳卿の序等あり。安永五年丙申〔二四三六〕出版す。
◉細合離の傳は「扭印補正」の下にあり。

せうさうらんかう

鷦巢嫻稿　二卷　山地　正誠

弘化元年甲辰〔二五〇四〕龜田梓の序、同二年大久保忠成の序、大久保奎の跋を附して出版す。
◉山地正誠は孟敬、また作寬と名け、孟叔と字し、武一と稱し、蕉窓と號す。正誠は其の字の一なり。儒者を以て當時に知られたり。弘化四年丁未〔二五〇七〕八月十七日、七十一歲にて歿す。

せうさんえう

招差三要　（寫本）二卷　有馬　賴徸

累裁招差、方程招差に於ける要件を記したるもの。卷中累裁招差、招程招差、渾沌招差の三術に分ち、皆詳に說明し、且つ實問を加へたり。明和元年甲申〔二四二四〕に成れり。
◉有馬賴徸の傳は「拾璣算法」の下にあり。

せうさしゆきよくはふ

招差取極法　（寫本）一卷　和田　寧

連續數にして、招差法に依るべき者の極段積を求むる法なり。是れ圓理學の最要術にして、同門祕術の傳書なり。年代の記載なきも、文化年間に成りたるもの〻如し。
◉和田寧の傳は「圓理算經」の下にあり。

せうさせいへう

招差正表　（寫本）一卷　和田　寧

連續數に於て、招差法に關する者の極段數を求むるの法を解きて、のち表と爲したるものなり。是れ亦圓理學の要用書なり。和田氏是れを土御門家の藏書と爲せり。

◎和田寧の傳は「圓理算經」の下にあり。

せうさはふ

（算法）招差法　（寫本）十卷　會田　安明

累裁招差法、反復招差法等凡そ十一法を記述し「拾璣算法」の問題の解義を附錄としたり。年代詳ならざれども、文化年間に成りたるものゝ如し。

◎會田安明の傳は「算法古今通覽」の下にあり。

せうざんしせう

小山詩鈔　二卷　奥野　純

著者の詩集なり。嘉永七年甲寅〔二五一四〕「小山文鈔」と併せ出版す。

◎奥野純の傳は「小山文鈔」の下にあり。

せうざんそんかう

樵山存藁　二卷　渡邊　㫖

著者の文六十餘篇、詩古今體二百五十餘首を收めたり。詩卷の卷首に安井衡の撰したる「渡邊㫖輔墓碑銘并序」を揭げ、明治九年丙子〔二五三六〕渡邊守輔の發行するところなり。

◎渡邊㫖は㫖輔と字し、樵山と號す。幼にして松崎慊堂の敎誨を受け、長ずるに從て學大に進み、後遂に帷を垂れて江戶昌平に敎授す。萬延元年庚申〔二五二〇〕紀藩に仕へ學政敎授等の事に任ず。元治元年藩府に召見せらる。慶應元年藩の樞機に參し、明治元年奥右筆組頭となり、後參政に累遷す。著書には本書の外に、「孟子章句考」、「焉能爲詩集」、樵山遺稿等あり。明治六年、五十三にて歿す。

せうさんぶんせう

小山文鈔　二卷　奥野　純

著者の漢文集。嘉永四年辛亥〔二五一一〕齋藤謙の序あり、同七年詩鈔と合せて出版す。

◎奥野純は字を溫夫といひ、小山堂また寸碧樓と號す。篠崎弼の門人にして儒學者たり。別著に「小山詩鈔」もあり。安政年中に歿せり。

せうしかいだうそうしよ

小四海堂叢書　十二卷　羽倉　用九

紀元通略、從書所好、非詩人詩、南汎錄、史評、簽小錄、資治通鑑評、詠史、能藪、以上九種の自作書を叢書としたるものなり。

◎羽倉用九の傳は「簡堂叢書」の下にあり。

せうじがそちう

小爾雅疏註　（寫本）一卷　增島　固

漢書「小爾雅」を註解したるものなり。廣く經傳子史に徵して考說す。

◎增島固の傳記は「讀易小言」の下に揭げたり。

せうしやうしんけいしだい

少將申慶次第　（寫本）一卷

着帶束、監日時勘文、有身固事、降香脫、立中門その他凡ての次第を記せり。「續群書類從」卷三百〇二、公事部第五十五に入れたり。

せうじやうはつけいしいかせう

瀟湘八景詩歌抄　一卷　宮川　道達

瀟湘の八景を題詠したる詩歌を集めたるもの。瀟湘の地理、八景の撰者を白居易又は東坡と云へるは誤りにて玉礀なる事等をも記せり。貞享三年丙寅〔二三四六〕の自序あり。

◎宮川道達の傳は「拾遺意行集」の下にあり。

せうじゆつぶんしふ

紹述文集　三十卷　伊藤　長胤

著者の詩文集にして、男善韶の校正出版するところなり。卷一、二に贈序。卷三、四に序。卷五、六に記。卷七に論。卷八に辨、解。卷九、十に說。卷十一に書。卷十二に引、贈言、銘、箴、贊。卷十三に墓碑銘。卷十四に墓誌銘、墓表、碑陰。卷十五、十六に題、跋。卷十七に策問、策對。卷十八に講義、制義。卷十九に傳、志、原、考、議、疏、上梁文、頌、歌、讚、雜記。卷二十に雜著。以上二十卷には凡て文を收め以下十卷には詩を收む。卷二十一に五七言古詩。卷二十二、二十三に五言律。卷二十四、二十五、二十六に七言律。卷二十七に五七言絕句。卷二十八、二十九、三十に七言絕句を收めたり。寬延二年己巳〔二四〇九〕右大臣常雅の序、元文二年丁巳〔二三九七〕の碣銘、寶曆十一年辛巳〔二四二一〕善韶の末書あり。

◎伊藤長胤の傳は「輶軒小錄」の下にあり。

せうしよあん

詔書案　（寫本）一卷　菅原　在秀

靈元天皇の天和三年癸亥〔二三四三〕八月十九日

「後水尾院尊儀御願文諷誦文」より、元文二年丁巳〔二三九七〕八月二十九日、兼香公關白宣下詔書敕書に至る四十二案なり、唐橋在庸、唐橋在隆、唐橋在廉、及び著者在秀とも四代間に作進せしところなり。元文三年戊午〔二三九八〕之れを編輯す。著者菅原在秀は少納言侍從文章博士大內記在秀とあり

せうしよちよくしよせんみやうのこと

詔書敕書宣命之事　（寫本）一卷

詔書、敕書、宣命の區別、認方等を說明し併せて其の例をも揭げたり。「輪池叢書」第三十六に收む。

せうせきせいざうべん

硝石製造辨　一卷　佐藤　信淵

硝石の製造法を細說す。附錄に、造焔硝、同傳授、藥方等を揭ぐ。嘉永七年甲寅〔二五一四〕奎文老人の序あり、同年出版す。

◎佐藤信淵の傳記は「經濟要錄」の下にあり。

せうせきせいれんはふ

硝石製煉法　一卷　櫻寧居士

硝石を取るべき地を撰ぶこと、土を嘗て硝石を得る多少有無を分つ事、其の他數件の說明圖解なり。嘉永六年癸丑〔二五一三〕の著、文久三年出版。著者の姓名詳ならず。

せうせつうきぼたん

小說浮牡丹　一卷　山東　京傳

別本表題に「怪談浮牡丹」と題せる小說なり。種々の怪說を根底として綴る。文化五年戊辰〔二四六八〕の著者の小引中に、「瑞島の奇計は石磯游の話と暗合せり。古昔の怪は山海經の泄精妖をなせしといふ。水晶燈の說を蹊索せり、賴風女郞花の事は正史には見えざれども女郞花物語といふ草紙は自ら稱く傳れり、牡丹灯記を附會して一回をなせり。義婦の魂魄魚腦に還着せし事は續園果物語に見ゆ、他石谷の一條は造化の量知るべからざるを示す。金蠶の奇病は夏子益が奇疾方に見ゆ、石蟹觀音の粉は本草綱目食物本食等に出せり。蛤蜊觀音の利益は觀音感應傳に詳なり。觀音經蛇に化するは宇治拾遺に例あり」云々といへり。

◎山東京傳は灰田氏、後に岩瀨氏に改む。名は田藏、また醒、字は伯慶また酉生、通稱を京屋傳藏、狂名を身輕折助、畫名を北尾政演と稱す。甘谷菊軒、醒々齋、菊齋等の號あり。寶曆十一年江戶に生る。長ずるに從つて狂歌を好む。年十八に至りて黃表紙小說を著し、是れより一生著作に從ふ。文化十三年丙子〔二四七六〕九月七日、歲五十六にて歿す。著書頗る多し、今下に列擧すべし。開帳利益遊合、御存知商賣物、江戶生艷氣樺燒、年寄冷水曾我、由過鵡蹴破仙、（太平記萬八）玉磨靑砥錢、（大極上大安賣）心學早染草、福種笑門松、冷哉汲立記、花芳野犬班、籠返行義鼓、虛生夢魂其前日、（地獄一面）照手淨頗梨、（復讐後編）人間一生胸算用、世上洒落見繪圖、女將軍七人化粧、（一百人面）屋の人魚、霞の隅春朝日名、（高慢齋行脚日記）奎々無我人鼻心神、鼻下何嵩干曾我、九界十年色地獄、新版替道中助六、八百萬兩金神花、福德果報兵衞傳、諸染郭色揚、龍宮羶鉢木、唯心鬼打豆、先開梅の赤本、怪物徒然草、四人諸南京傀儡、實語敎幼稚講釋、堪忍袋緒〆善玉、梁山一奇談、貧福兩道之記、天剛垂楊柳宿諸々竃操、小人國毀櫻、正月故事談、花之笑七福參詣、嘘生實子殘、忠臣藏即席料理、兒訓影繪喩、肩見尺三人泥醉、百化帖準擬本草、百人一首戲講釋、笆津蟲音寄、根笹草筆傍、一刻價萬兩回春、金銀先生造花夢、東海道五十三驛凸凹話、人心鏡寫繪、人間一生五十年、諺下司話說、化物和本草、鬼殺心角樽、京傳年十六利鑑、三歲圖會稚講釋、五體和合談、兩頭筆善惡日記、（唯心鬼打）假多手綱忠臣鞍、平假名錢問答、存通氣智言錢光記、（山中の不語齋）甘幾名利研、京吞込多嶺寶綠起、（牡丹燈籠）遺奇的見勢物語、秋野忠湊錢湯新話、早業七前、冬枯れ樹に花大悲の利益、御誂染綾夢字蓮、合解道胸中双六、江戶砂子娘敵討、（人間一代）悟道迷所獨案內、作者胎內十月圖、人間萬事吹矢的、榮花男二代目七色合點豆、（人生手段）裡家算見通座鋪、復讐煎茶濫觴、莊子自慢名產杖、（石枕四房）傾城嶋人傳、（二國一本）松魚智惠袋、敵討煎茶の始、敵討千鳥の玉川、同奥州狠河原、同白藤源太談、同岡崎女郞衆、同兩輪車、同馬士歌の始、同孫太郞蟲、同木曾の棧、同天笠德兵衞、（於杉於玉）二見仇討、山東奇談机之塵、於六櫛木曾仇討、俠客雙蝶々、絲車九尾狐、女達三ヶ月阿仙傳、岩井櫛粂野仇討、絞染五郞強勢話、八重霞かしくの仇討、萬福長者榮花物語、婦湯仇討話、咲替て花の二番目、松と梅竹取物語、梅由兵衞紫頭巾、志道軒昔講釋、曉傘時雨古手屋、笠森娘錦の笈摺、娘景淸襤褸振袖、岩戶神樂劍威德、男草履打、梅の於由女丹前、櫻姬筆再咲、戲場花牡丹燈籠、今昔八丈揃、昔織博多小女郞、鉤狐昔塗笠、親の敵うとふの俤、妹背山長柄文臺、（將門山）瀧夜叉姬物語、（梅川忠兵衞）二人虛無僧、絲櫻本朝文粹、芳女の仇討、籠釣瓶丹前八ッ橋、江戶の春一夜千兩、朝茶湯一寸口切、升繫男子鏡、朝妻舟柳三月、磯馴松金糸

櫻姫、へマムシ入道昔話、綺看板子持山姥、（近江/宗玄）婚禮累簞笥、女達磨之由來文法語、重井筒娘千代能、猨猴著聞水月談、無間鐘娘縁起、石の枕春宵抄、安達原氷姿見、蝶千鳥曾我俤、會談三ツ組盞、黄金花萬寶善書、黄金花奧州細道、琴聲美人傳、長髭姿蛇柳、大礒俄のねり物、風流伽三味線、袖之梅月之士手節、物草姫昔雛形、（不時/名古屋）稻妻表紙、かんにんぶくろ、女俊寬雪の花道、心學善玉惡玉、播州皿屋舖物語、九界十年色地獄、兒淵櫻之振袖、作者の胎內、娘淸玄振袖日記、安積沼後日の仇討、源雲猫之舊話、春相撲花の錦繪、累井筒紅葉の打舖、草履打所縁色揚、（小いな/半兵衛）夜の鶴親父形氣、（吃神三左衛/門絶間之助）勇雲外氣節、（男社/口女）（西/行）富士太郎梅隱家、一日替連理の花王、勸善辻談義、熊女越路の仇討、信田妻昔綺草紙、隅田の春梅若話、歌字盡靑柳硯・紫服紗茶入形氣、當り升矢筈の節限、黄金花男道成寺、朧富士出口の編笠、筆慰反古張團扇、物草太郎正本所、初役金烏帽子魚、氣を替て戲作問答、（時代/世話）二挺鼓、優曇華物語、天報正宗熊服帶、善知鳥安方忠義傳、春日話柄、捷徑太平記、忠臣水滸傳、京傳浮世の醉醒、稻妻表紙、梅花氷烈、浮世牡丹全傳、本朝醉菩提、雙蝶記、安積沼物語、人心鏡の寫繪、志羅川夜船、令子洞房、資武根、通言總籬、文盲小紋、小紋雜話、小紋新法、傾城觽、傾城四十八手、廓大帳、傾城ほんの眞跡、吉原楊枝、新造圖案、客衆肝照子、繁々千話、京傳餘師、吉原大全記、夜半の茶漬、錦裏、松魚智惠袋、小參裁、（靑樓/晝談）ほたて貝、古契の三笑、傾城買卓學問、仕懸文庫、娼妓絹篩、地者八景、紅葦の蹟、總財ます、唐賣情夜樓、腹筋鸚鵡石、骨董殘木集、骨董集、雜劇好古錄、狂畫譜、江戶年中四季交加、畫卷物古器圖考、燕都樓、畫兄弟、百人一首初衣抄、指南車、浮世綺原始考、新百人一首抄、（縞/本）擬本草、俳優百家系譜、雜劇考、奇妙圖彙、近世捜奇談、童話考、無垢衣考、山東漫錄、大雜難考證、俳優細見記、近世奇蹟考、名取籾黄白長者、遊人三幅對、（風風要女/金風六兵衛）米饅頭之始、洒落樣々飛羽衣、菓物見立御世話、顏面知勸善懲惡、通者云此事、化物通人寐言、七笑顏當世姿、七福神大通傳、敵討魚石劍、うんつく太郎左衛門咄、全盛大通記、可富見得の夢等なり。

せうせつじゐ

小說字彙　一卷　秋水園主人

支那小說の讀者の爲めに、小說上の熟語を畫引に列擧したるもの。例へば「小可」の字は三畫の小字の下に小可〔小たくし〕といふ如く揭出したるものなり。天明四年甲辰〔二四四四〕の凡例あり。寬政三年辛亥〔二四五一〕出版す。著者の姓名明ならず。

せうそうかんわ

小窓閒話　四卷　鈴木忠侯

故實に關する抄錄なり。例言にも「此の書は予看書の餘閑、本邦の正史及び稗官小說の中より、故實の人に益あるものを抄出し、繁を去り、省に從ひ、少しく愚意を加へて童蒙に便りす」云々とあり。寬政二年庚戌〔二四五〇〕太田南畝の序を附して出版す。

◉鈴木忠侯のことは「閑窓隨筆」の下にあり。

せうそうざつぴつ

小窓雜筆　（寫/本）六卷

古今雜多の事件を隨筆したるもの。蟲類の事もあり、人物の事もあり。理化博物に關する事もあり。

せうそうざつわ

蕉窓雜話　五卷　和田東郭

著者の醫療雜話を輯錄したるもの。文政元年戊寅〔二四七八〕近江服部流謙の序及び凡例あり。此の書は門人伊豫國久保脩德、杵谷守淸等の編錄を企てたるを、其の夭死後流謙の業を繼ぎたるものなりといふ。五編凡て五卷あり。著者家塾の窓前に芭蕉ありて、其の下に筆記したるより蕉窓雜話と號せしとぞ。

◉和田東郭は、攝津高槻の人にして、名を璞、字を泰純また韞卿といひ、東郭、また含章齋を號とす。醫業を戶田一齋、吉益爲則等に學び、古今諸家を參酌して漸く一家を成せり。寬政中徵されて御醫となり、法橋に敍せらる。功に依り特旨尙藥に任じ、法眼に敍す。治驗頗る著しく、また徒を敎ふること多し。著書には導水瑣言、蕉窓瑣言、方意解、傷寒正文解、醫則等あり。享和三年癸亥〔二四六三〕六十歲にて歿す。

せうそうまんぴつ

蕉窓漫筆　三卷　僧　義海

著者見聞の雜事を記述したるもの。漢文にて記す。凡そ百餘項多く智識道德に關する敎戒なり。寶曆七年丁丑〔二四一七〕謙忍、明和三年丙戌〔二四二六〕、同四年妙導等の序、同三年蓮雲の跋あり。

せうそうやわ

蕉窓夜話　（寫/本）二卷

詩の句を列擧して、其の出處典據用例等を略記したるものなり。「續群書類從」卷九百五十六本末、雜部第百〇六に收めたり。

せうそこあんもん

消息案文　三卷　黑澤翁滿

消息文の用語を五十音順に列擧して其の性格變化等をも註釋したるもの。二卷を後編として、「源氏物語」「落久保物語」「うつほ物語」「さごろも物語」「住吉物語」「榮華物語」「蜻蛉日記」「枕草子」「大和物語」等より消息の章句百數十章を摘出して標本に供したり。第一卷には天保四年癸巳〔二四九三〕の序、後編には安政六年己未〔二五一九〕の序あり。

◉黑澤翁滿の傳は「言靈抄」の下にあり。

せうそこごてふ

消息五帖　一卷　僧　蓮如

此の書は「五帖消息」として「こ」の部に出せり。

せうそこにていひせう

消息耳底祕抄　一卷

消息書認に關する一切の故實法則を記したるもの。最初硯事、人の前に硯を取出儀式等より、仰書樣、文箱封樣に至る凡六十條。嘉禎三年丁酉〔一八九七〕の奧書あり。「群書類從」卷百四十四、消息部第七にあり。

せうそこぶんてい

消息文梯　一卷　川島茂樹

消息文の法則慣例諸注意等を記述したるものなり。文化十一年甲戌〔二四七四〕友人ほとり敦夏の序あり。

◉川島茂樹は實は林氏にして、號を聽雨庵また蘐阿と云へり。淸水濱臣の門に入りて和學を研究す。著書は本書の外に言葉の千種、文苑玉露、すかその辨等あり。

せうそこぶんれい

消息文例　二卷　藤井高尙

雅語消息文の法則、用語等を揭示したるもの。昔の消息文のさた、文のこゝろばへ、文の詞づかひのこころえ、音便の詞の事、古風の文、物語なる文、今樣の文、人に物おくる折の文等の諸要件を、名詞、働詞、副詞、手爾波等の事にまで說き及ぼせり。雅文消息の階梯として唯一の標節たり。本居宣長の序あり、また寬政十二年庚申〔二四六〇〕九月九日島越常成の跋あり。「消息文典」として、明治二十六年活刷に附したるものもあり。

◉藤井高尙の傳は「淺瀨のしるべ」の下にあり。

せうそこやくぶん

消息譯文　三卷　黑澤翁滿

源氏物語の中の消息を抄出し、俚言にて譯解したるものなり。慶應二年丙寅〔二五二六〕出版す。

◉黑澤翁滿の傳は「言靈抄」の下に出づ。

せうそこわうらい

消息往來　一卷

消息、音信、啓上、尊翰、芳墨等の往復用書の熟語を集めて訓點振假名を施したるものなり。下半冊に更に其の講義を揭げたり。寺子屋時代の習字本讀本なり。

せうだうふくしう

笑堂福聚　一卷　山本信有

著者の漢文戲著にして、世の雜事を寓言評論す。桐生門人佐羽芳校し、享和三年癸亥〔二四六三〕齋藤天籟の序、佐羽芳〔淡齋〕の跋あり。

◉山本信有の傳は「作文率」の下にあり。

せうだんちえう

樵談治要　一卷　一條兼良

神を敬ふべき事、佛法を尊ぶべき事、諸國の守護たる人廉直を先とすべき事、訴訟の奉行人其の仁を撰ばるべき事、近習者を撰ばるべき事、足輕といふ者長く停止せらるべき事、簾中より政務を行はるゝこと、天下主領の人必ず勢あるべき事等を論述すること詳密なり。末筆に「樵夫も王道を談ずといふは、賤しき木こりも、王者の政を語る心なり。今八箇條を記せる事は、八幡大菩薩の加護によりて、大八島の國を治め給ふべき詮要たるによりて、樵談治要とは名つけ侍る物なるべし」と自記せり。文明十三年辛丑〔二一四一〕同十四年、長享元年丁未〔二一四七〕延德三年辛亥〔二一五一〕等の奧書あり。「群書類從」卷四百七十六、雜部三十一に收む。

◉一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

せうちくさいしせう

小竹齋詩鈔　五卷　篠崎弼

著者の詩集。天保十三年壬寅〔二五〇二〕齋藤謙の

序を掲げ、安政七年庚申〔二五二〇〕出版す。◎篠崎弼は大阪の儒者。字を承弼、通稱を長左衞門といひ、小竹また畏堂と號す。もと豐後の人醫家加藤吉翁の子なり。幼より大阪の篠崎三島に學び、終に其の養子となる。數歲家學を修め、出でて諸方に游歷し、また江戸に出でて古賀精里に學び、歸りて父に代りて教授し、子弟益々多し。學識共に高く、詩文書法また當時に稱せられたり。出て著作者に請はれて、其の序跋を書くもの最も多し。嘉永四年辛亥〔二五一一〕歿す、年七十一。

せうちよくしふ

詔敕集　（寫本）一卷

上古以來、延曆後に至る我が天皇陛下の御詔敕數百編を輯收す。年月を記さず、索引を設けず、見るものゝ爲には便を闕けり。

せうづしまやうすたいがいしよ

小豆島樣子大概書　（寫本）一卷

讃岐國小豆島の檢地、村鄕、運上、戸口、島風俗鹽濱、其の他の檢見的事實の書上なり。肩に「御勘定所古書付寫」と書し、卷尾に「午八月御勘定所諸御普請役樋口直七郎」と記せり。書中の記は延寶元祿間の檢査に係るもの多し。

せうとくこうふ

昭德公譜　（寫本）一卷

德川十四代將軍昭德院家茂一生間の年譜なり。

せうにいちりうのでん

小兒一流之傳　（寫本）一卷　村上　政次

小兒諸病の療法藥方等を聞書したるものなり。

せうにきうのしよ

小兒灸之書　（寫本）二卷

此の書は小兒の諸病に對する灸點の事を記せり。

せうにしよびやうひでん

小兒諸病祕傳　（寫本）一卷

小兒諸病に對する藥方灸所等を詳說したるものなり。磨野金右衞門尉家傳の灸藥たる事奥書に見ゆ。

せうにのろんぬきがき

小兒之論拔書　（寫本）一卷

小兒諸病の療法處方を集錄したるものなり享和三年癸亥〔二四六三〕十一月三日法眼安長の奥書あり

せうにひつえうき

小兒必要記　六卷　香月　啓益

兒童、養育敎誡の事より、諸病の治法、痘疹の療法等を記す。元祿十六年癸未〔二三六三〕の自序、正德四年甲午〔二三七四〕杏三折の序ありて、同年出版せらる。一名を「小兒必要養育草」とも云ふ。◎香月啓益の傳は「牛山活套」の下にあり。

せうにひつえうそだてぐさ

小兒必要養育草　六卷　香月　啓益

此の書は本名「小兒必要記」の下に解題せり。

せうにやうじやうろく

小兒養生錄　三卷　千村　眞之

嬰兒養育のことを記せり。元祿元年戊辰〔二三四八〕の自序あり。◎千村眞之は江戸の人にして、拙庵また杏圃と號せり。儒學者を以て知らる。

せうねんゐんくわんぱくき

照念院關白記　（寫本）一册　藤原　兼平

照念院兼平關白の正元元年己未〔一九一九〕の略日記なり。萬治三年庚子〔二三二〇〕正月十一日頭樵右中辨藤原昭房の寫本奥書あり。◎藤原兼平の傳記は「照念院殿裝束抄」の下にあり

せうねんゐんどのしやうぞくせう

照念院殿裝束抄　（寫本）一卷　藤原兼平

服飾のことを記載したるものなり。年代詳ならず。◎藤原兼平は猪熊攝政家實の三男にして、鷹司家の祖たり。建長四年十月攝政となり、同十一月太政大臣に任ぜられ、六年關白となり、永仁二年甲午〔一九五四〕八月八日六十七にて薨ず、照念院と號す。

せうはくくでん

肖柏口傳　（寫本）一卷　肖　柏

連歌の讀曲、切字難字の事より、發句の切字十八の事其の他等までを詳記す。著者が宗牧へ口傳したるものなり。◎肖柏の傳は「伊勢物語肖聞抄」の下にあり。

せうはくどくぎんくわんぜおんみやうがうひやくゐん

肖柏獨吟觀世音名號百韻　（寫本）一卷　肖　柏

名の表せる如きの獨吟百韻の連歌なり。「續群書類從」卷四百八十三、連歌部第十三に收む。◎肖柏の傳は「伊勢物語肖聞抄」の下にあり。

せうはせんく

紹巴千句　（寫本）一卷　里村　紹巴

著者が後奈良天皇の天文二十四年乙卯〔二二一五〕三月二十六日のに作りたる千句なり。◎里村紹巴の傳記は「源氏物語紹巴抄」の下にあり

せうはどくぎんせんくちう

紹巴獨吟千句註　（寫本）一卷　里村　紹巴

永祿六年癸亥〔二二二三〕十二月十四日、稱名院三條公條の追善に際して詠み出でる千句連歌なり。時に年三十九歲なりきといふ。句毎に註解を加ふ。◎里村紹巴の傳は「源氏物語紹巴抄」の下にあり。

せうはふじみちのき

紹巴富士見道記　一卷　里村　紹巴

永祿十年丁卯〔二二二七〕富士見旅行の記なり。多くの發句を詠み入れて優雅に物したり。同年八月二十八日之れを記するよしを末書す。「群書類從」卷三百三十九、紀行部第十四にあり。◎里村紹巴の傳は「源氏物語紹巴抄」の下にあり。

せうびきん

焦尾琴　三卷　榎本　其角

當年の俳家、行露、其角、白櫻、笹閑、楓子、琴風、闌幽、一雀の句を集めたるもの。元祿十四年辛巳〔二三六一〕の序中に「此の集の名も心づかざりしに、蔡邕が竈よりやけたる桐をとり出でて新に一張の琴を作りしに、焦たる所、自ら龍尾の景に成ぬるを、名づけて世に焦尾琴と傳ふる趣きを、彼の名琴にならはゞ、人もあはれと清怨にたえて却て稱美琴なるべくや」といへり。蓋し著者火災に遇ひ、燒餘の草稿を編したる由にて然かいへるなり。寛保三年癸亥〔二四〇三〕出版す。◎榎本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

せうびしやうせうせん

小備指掌小筌　（寫本）十卷

軍陣の事に就きて圖說したるもの。軍制、軍備、戰鬪等に關する各要件を詳細に記述したるものなり。卷數尚ほあるべけれど、今見る所十卷にて餘は闕本なり。

せうひんかう

小品考　一卷　西村　廣休

金石、動物、植物等、凡て二十種を撰びて、其の名稱性質等を說明し、併せて各縮圖を掲載せり。安政五年戊午〔二五一八〕山本錫夫の序あり。同七年江戸にて出版す。◎西村廣休は伊勢の人にして、三郎右衞門と稱す。本書は其の四十二歲〔安政四年丁巳歲〕の時、撰述するところなり。

せうぶしふえう

小部集要　四册　僧　先啓

眞宗本願寺蓮如、實如の短篇著述を輯めたるもの。始二册に蓮如の「安心用心集」一卷、「持要抄」一卷、「撰正集」一卷、「眞宗持專鈔」一卷、「念佛明要鈔」一卷、「一宗意得之事」一卷、「顯淨土眞宗鈔」一卷、「眞宗正意集」一卷、「神中鈔」一卷、「一念成就聞書」一卷、凡て十種十卷を收め、後二册に實如の「聞信鈔」一卷、「持得鈔」一卷、「安心定得鈔」一卷、「安心聞得鈔」一卷、「女人最要集」一卷、「往生明文鈔」一卷、凡て六種六卷を收めたり。寶曆六年丙子〔二四一六〕の編輯にかゝる。◎先哲の傳は「淨土眞宗聖教目錄」の下にあり。

せうふらうさうなよせ

小不老草名寄　一帖　水野　忠敬

萬年青の變種小不老草〔一名小萬年青〕の圖譜なり。凡そ百三十種をあつむ。關根雲停の着色寫生するところなり。天保三年壬辰〔二四九二〕出版す。◎水野忠敬のことは「草木錦葉集」の下にあり。

せうぶんきそく

小文規則　一卷　賴　襄

小品文の法則を記述したるものなり。光格天皇の文化三年丙寅〔二四六六〕の自序、及び賴惟柔の序あり。嘉永六年癸丑〔二五一三〕刊行せり。◎賴襄の傳は「日本外史」の下にあり。

せうほちくえふしふ

小補竹葉集　（寫本）一卷　僧　蓮阿

蓮阿自撰の歌集「竹葉集」は、凡二百九十九首を載せて、各歌の上に朱點ありしものなるが、蓮阿の歿後、川口某、心を盡して其の遺れたるを募れ、廣く求め

て、遂に五千餘首に增補せり。此の書は好辨といふもの、追撰にて、右二書に就て取捨撰擇し、七百六十六首を取りて「小補竹葉集」とせるなり。題の次第等は全く川口栄の增補本によれり。

◉蓮阿のことは「西行談抄」の下にあり。

せうもんはいかいごろく

蕉門俳諧語錄　二卷　五升庵蝶夢

蕉門諸家の俳論を、項を分ちて編輯せり。上卷に俳諧の名義の事、連歌と俳諧の差別の事、俳諧の法式の事、不易流行の事、切字手爾葉の事、發句の事、下卷に附句の事、發句と附句の差別の事、句作の事、讃名所句の事、等類の事、文章の事、雜談等を揭ぐ。安永三年甲午〔二四三四〕の自序、同六年國田房古跋の末記あり。出版の旨を示せり。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」の中にも收む。

◉五升庵蝶夢の傳は「蝶夢和尚文集」の下にあり。

せうゆうしふ

逍遊集　三卷　松永貞德

著者の家集「貞德家集」のことなり。其の號を逍遊軒といへるより、「逍遊集」とはいへるなり。

◉松永貞德の傳は「歌林雜話」の下にあり。

せうらうひ

笑螂臂　五卷　僧　日溪

華嚴宗の鳳潭「雷斧」を著して、日溪の「淨土折衝編」を返破せしに因り、更に斯書を作りて「雷斧」を返駁したるなり。「此非雷斧螂臂也。螂臂而拒轍、可笑而更笑、故斯編成名以笑螂臂」と卷頭に云へり。題號の由來を知るべし。享保十七年壬子〔二三九二〕五月の著作に係る。

◉日溪の傳は「淨土折衝編」の下に出でたり。

せうれんさんかうしふ

小蓮殘香集　二卷　鈴木　恭

著者の詩文遺稿なり。門人浪華の岡橋光矩、江戸の藤江計文等が編輯するところなり。上卷に詩を、下卷に文を收む。享和三年癸亥〔二四六三〕曾槃の序、北條讓、仁尾永胤の跋あり。同年上梓す。

◉鈴木恭は遠耻と字し、小蓮と號す。江戸の世家鈴木老遮の子なり。夙に讀書を好み、經史に通じ、またよく文を屬し、詩を作る。享和三年癸亥〔二四六三〕六月二日、年二十五にて病歿せり。

せうろしせう

蕉廬詩鈔　四卷　佐藤　信古

著者の詩集。慶應元年乙丑〔二五二五〕川口文之の序、同二年中村祐興の跋を附して發行せり。

◉佐藤信古は字を子老、通稱を次左衞門といひ、蕉廬また殘翁と號す。幕府金局の吏たり。詩を善くし、本書の外に詩文雜著一百卷及び和歌麕藥集十卷あり。明治十二年己卯〔二五三九〕七月二十九日歿す、享年七十三。

せきいだん

斥醫斷　一卷　畑　柳安

吉益子の「醫斷」の說を擧げて、逐條反駁したるものなり。寶曆十二年壬午〔二四二二〕和州足高恭の序及び凡例、柳渓啓の序、武川幸順の跋等あり。

◉畑柳安は惟和と名け、厚生と稱し、黃山と號す。平安の人、安藤氏なりしを、醫官畑柳泉其の才を奇とし、乞ひて嗣と爲す。延享の初め、法橋に敍せられ、御醫となり、法眼に進み、天明元年尙藥に任じ法印に敍せらる、武行の難により、殊に殿上杖を許し、醫學院の號を賜る。是れより、後進を誘掖して國恩に報ゆることを期し、書院を作りて廣く生徒を集め、講說最も勤む。弟子二千人に及べりといふ。著書は本書の外に、學範、辨溫疫論等あり。文化元年甲子〔二四六四〕五月二十六日、八十四歲にて歿す。

せきいんしふぎ

石印集義　二卷　木村　謦

石印に關する諸件を記述す。內題には「鐵筆集誼」とあり。上卷に印章の大意、篆書の譯、字體の譯、文を着る譯、印文の譯、印の體略。下卷に印體の略、刀法並文法、印を用ゐる式、左右すべき書、關防の義、古鈕の圖式、古印の譯、石の鑒定、石を砥ぐ法、印刀の制並に圖、印肉の方、印を洗法、印池の制、印斗の制並に圖、附錄に鈎字の法、學字の法、墨本の法並に蟬翌、乾打碑の法等の根源古實等を略記す。寶曆二年壬申〔二四一二〕の作なり。著者木村謦は黃檗主人と號す。今詳傳を得がたし。

せきうんりうけんじゆつしよ

夕雲流劍術書　（寫本）一卷

夕雲の劍法を輯錄す。無住心劍元祖針谷夕雲傳法嫡子小出切一雲の誌すところなり。次に揭ぐる「夕雲流劍術書前集」と大同小異なり。

せきうんりうけんじゆつしよぜんしふ

夕雲流劍術書前集　（寫本）一卷　針谷　夕雲

著者一流の劍術に關する傳說を輯收したるもの。

◉針谷夕雲は俗稱を五郎右衞門と稱し、一生浪士にて後江戸八丁堀に住し夕雲と改名せり。一生の中他流との眞劍仕合五十二度に及び、弟子二千八百人あり、年七十餘にて歿せりと記せり。

せきをかけしまつ

關岡家始末　（寫本）一卷

伊賀國關岡の城主伊賀守氏清、其の子氏隆、其の子氏元、氏則等一生の軍事及び氏則の子清祐、その子義實に至り、天正二十年壬辰〔二二五二〕加藤清正の手に屬して朝鮮征伐に從ひて功ありしこと等までの始末を略記せり。「續群書類從」卷五百九十七、合戰部第二十七にあり。

せきおくぜんじのたふめいならびにじよ

石屋禪師塔銘並敍　（寫本）一卷　僧　得巖

薩州玉龍山福昌禪寺開山、石屋禪師の行狀を記したる漢文なり。「續群書類從」卷二百四十、傳部第五十一にあり。

◉得巖は前住瑞龍山太平興國南禪々寺比丘惟省得巖と記せり。

せきがはらいちらんし

關ヶ原一亂志　（寫本）三卷

卷一石田三成逆心を企つる事より、三成兵を濃州に發する事に至り、卷二慶長五年七月二日濃州福束城落去の事より、東照宮江戸御發足の事に至り、卷三筑前中納言伏見城を攻捕ふ事より、敵將を生捕る事に至り、凡て十九條あり。卷首に「宮川氏聞書」とあれど、其の名を詳にせず。

せきがはらいつせんき

關ヶ原一戰記　（寫本）一卷

此の書は一名「關ヶ原軍記」の下に解題したり。

せきがはらゑづ

關原ヶ繪圖　（寫本）一折

慶長五年庚子〔二二六〇〕に於ける關ヶ原戰爭の地圖なり。諸侯の姓名陣地等を評記す。彩色を以て區別せり。

せきがはらかゞみ

關ヶ原鑑　（寫本）五卷

慶長五年庚子〔二二六〇〕の關ヶ原合戰の始末を詳敍す。中に「關ヶ原大全」と題す。此の書の序中に、慶長五年を距ること百二十年といへるより見れば享保四年比の作なるにや。五册に淸書して、一帙に納む。

せきがはらかつせんしき

關ヶ原合戰誌記　（寫本）二十七卷

卷一關ヶ原合戰の大意より、豐臣秀吉の素姓並に一門の事に至り、卷二十六卷豐前小倉城明渡より、筑前柳川合戰、卷二十七日州表合戰より、諸侯恩賞を賜る事に終れり。十五册に作る貞享四年丁卯〔二三四七〕比の編なるべしといふ。

せきがはらき

關ヶ原記　（寫本）五卷　阿部　忠秋

此の書は一名「關原日記」の下に解題したり。

せきがはらき

關ヶ原記　（寫本）四卷

卷一青野合戰濫觴の事より、石田關ヶ原出張の事に至り、卷二石田反逆露顯の事より、大津城明渡の事に至り、卷三島蒲生大物見の事より、浮田秀家流罪の事に至り、卷四眞田上田へ引込る事より、御治世御政道の事に至る。凡て五十一條より成れり。

せきがはらき

關ヶ原記　（寫本）一卷

慶長五年庚子〔二二六〇〕上杉景勝の異心に筆を起し、德川家康日光山改葬の事に終る。漢文にて目次を逐うて略說す。

せきがはらき

（別本）關ヶ原記　（寫本）一卷

天正十年壬午〔二二四二〕六月十三日、明智光秀の滅亡より、豐臣秀吉の薨去までを略記し、且會津陣供奉の人數、大阪方の交名等を記したり。

せきがはらきゝがき

關ヶ原聞書　（寫本）五卷

石田三成佐和山蟄居の事より、石田三成囚はるゝ

落着、京都所司代等の事に至る五十條あり。

せきがはらぐんき
關ヶ原軍記　（寫本）一卷

慶長四年己亥〔二二五九〕十二月、德川家康懸野に出づる事より、加々井彌八郎、水野和泉守を切害する事に及べり。

せきがはらぐんき
關ヶ原軍記　（寫本）一卷

會津發向より、逆賊の處罰終るまでの事實、二十一箇條を略記す。一名を「關原一戰記」といふ。

せきがはらぐんき
關ヶ原軍記　（寫本）二卷

上卷の最初豐臣氏治世の事より、下卷の終り岐阜落城並に河戶の鬪より、諸大將恩賞の事に至る凡て十九項を記せり。

せきがはらぐんきたいせい
關ヶ原軍記大成　（寫本）四十五卷　宮川　尙古

豐臣秀吉一生の事績大略より、石田三成等筑紫下向の事、伏見大阪の戰、關原合戰始末、上杉景勝、佐竹義宣等の處置等に至る記事百十餘條あり。酒井忠勝の「關原始末記」を本據とし、種々他書を參考して、異說を擧げ私考をも附して作られたり。書名は最初「伊吹物語」とし、後「慶五戰記」とし、また「關原記大成」とせしを、更に今の「關原軍記大成」に改めたりといふ。正德三年癸巳〔二三七三〕の敍序あり。別に目錄一卷を附し、四十六册に作らる。

◉宮川尙古の傳は「勇功記」の下にあり。

せきがはらぐんきぬきがき
關ヶ原軍記拔書　（寫本）一卷

慶長三年戊戌〔二二五八〕の豐臣秀吉薨去の事より、關原合戰の比に至る略記なり。

せきがはらぐんきびかう
關ヶ原軍記備考　五卷

關ヶ原合戰の發端より、其の結末に至るまでを、百餘條に詳敍したるもの。卷首に肖像地圖等を揭ぐ。何人の何時の撰なるかは知らざれど、明治十九年活刷五册に作らる。

せきがはらぐんきひでんせう
關ヶ原軍記祕傳抄　（寫本）三卷

卷一慶長三年石田治部少輔發足の事より、落首九首を記す事に至り、卷二堀尾帶刀へ六萬石を給はる事より、慶長五年家康人數押しの事に至り、卷三同日石田方にて討取の首評議より、增田居城請取の事に至る迄數十條を記せり。

せきがはらぐんらんいき
關ヶ原軍亂異記　（寫本）一卷

此の書は一名「關原御陣書物」の下に解題したり。

せきがはらこうき
關ヶ原後記　（寫本）六卷

最初卷一大柿之城責といふ目より、卷七家康公御繁榮といふ目に終る二十餘項を假名書にす。

せきがはらごぢんかきもの
關ヶ原御陣書物　（寫本）一卷

關原戰爭の始末を記したるものにて、最も確實なるものなり。他の同類の書は大抵本書に本據せりといふ。一名を「關原軍亂異記」と稱せり。

せきがはらごにんずのおぼえ
關ヶ原御人數之覺　（寫本）一卷

最初關東七萬二千三百二十餘騎と記し、淺野左京大夫幸長以下七將の姓名、居城石高を記し、次に西國勢九萬二千餘騎とありて毛利秀元以下二十七將の姓名居城石高等を記す。別に同陣立之圖一舖を添へ、着色にて諸將對陣の有様等を略示す。

せきがはらしふ
關ヶ原集　（寫本）二卷　小須賀信時

上卷に石田治部小輔三成筑前國に下る事より、大谷刑部少輔吉隆佐和山へ行く事並に廻文の事に至る二十項。下卷に德川家康江戶御出陣の事より、上杉景勝佐竹義宣降參の事に至る三十五項を記す。諸軍記を集めて、其の中より、確實の事項のみを抄錄したりといふ。延寶元年癸丑〔二三三三〕門人野子正の漢文序あり。著者小須賀信時は伊勢の人にして、藤原を本姓とす。

せきがはらしまつき
關ヶ原始末記　二卷　林　道春

上卷に慶長三年夏豐臣家病惱の事より、岐阜注進狀に至る二十項。下卷に同五年九月、朔日東照宮江戶御出馬より、同六年十月江府御歸府に至る四十項。明曆二年丙申〔二三一六〕の奧書に、若狹の酒井忠勝其の見聞するところを略述し、合せて耆老の言ふところを集め、林道春、林春齋等に命じて纂記せしむる由あり。

◉林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

せきがはらじやう
關ヶ原狀　（寫本）一册　太田　牛一

關原軍の事を主とし、著者の名を書名に冠らせたるなり。第一景勝御征伐の事、第二伏見へ押寄する人數の事、第三三河人數を越べき割符の事、第四御馬廻り衆尾州淸洲にて川越御供並合戰の御手合高名人數の事、第五大柿に籠る敵兵の事を載す。

◉太田牛一の傳は「信長記」の下にあり。

せきがはらせいくわ
關ヶ原正譌　（寫本）一卷　新井　君美

慶長三年戊戌〔二二五八〕五月五日豐臣家病惱の事より、關原合戰の始末を記し、同七年德川秀忠の女大阪入輿の事までを記せり。一名を「戶田左門覺書」といふ。或は云ふ新井君美、戶田左門の覺書に「正譌」の二字を加へて自著の如くしたるにはあらざるかと。

◉新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

せきがはらそなへだてひやうばんき
關ヶ原備立評判記　（寫本）一卷

慶長五年庚子〔二二六〇〕關ヶ原陣に於ける、軍勢備立の場所、及び、東西軍將士の交名を揭げ、終始の大略を記せり。

せきがはらたいぜん
關ヶ原大全　（寫本）五卷

此の書は表題「關ヶ原鑑」によつてその下に解題す。

せきがはらだいでうし
關ヶ原大條志　（寫本）十七卷

第一卷關ヶ原陣起の事より、第六卷禁裏四面石壁を築くことに至る凡そ百十餘項より成れり。十七卷六册に作れり。

せきがはらにつき
關ヶ原日記　（寫本）五卷　阿部　忠秋

慶長三年正月、高麗にて諸將朝鮮の楊鎬を攻圍せし事より始り、同六年八月比に至る日次記事なり。一名を單に「關ヶ原記」とも云へり。

◉阿部忠秋は幼字を小平次と稱し、九歲の時、德川三代將軍家光に近侍し、元和九年歷從部番頭となり、尋で從五位下に敍せられ豐後守と稱す。寬永元年父の邑を襲ひ明年四千石を加へられて一萬石を領す。同九年少老職となり、十年老中に補せられ、十一年從四位下に敍せられ、十四年采邑を加賜せられ、下野壬生城に居り五萬石を領し、十六年武藏忍城に移りてまた領を增され、慶安三年四代將軍家綱の傅となり、同五年侍從となる。其の後亦加增あり、寬文三年遂に八萬石の領となる。性慈仁にしてまた廉直なり、當時の執政者中有德の聞えありしものなり。延寶三年乙卯〔二三三五〕五月卒す、年七十四。

せきがはらのせつくにぐにぐんき
關ヶ原之節國々軍記　（寫本）一卷

一名「關ヶ原之節所々合戰記」の下に解題せり。

せきがはらのせつしよしよかつせんき
關ヶ原之節所々合戰記　（寫本）一卷

會津城の由來、德川家康會津征伐の事及び同時に於ける九州、丹波、丹後、尾張等の戰事を記したるものなり。故に一名を「關ヶ原之節國々軍記」とも云へり。

せきがはらひつき
關ヶ原筆記　（寫本）一卷

慶長五年庚子〔二二六〇〕五月七日、五奉行より、德川家康へ贈りたる難題の書より、同九月二十七日家康大阪西丸に移りたるまでの數條を記せり。

せきがはらものがたり
關ヶ原物語　（寫本）三卷

豐臣秀吉薨去より起りて、關ヶ原合戰の始末、關東恩賞に至る二十條にて終れり。

せきぐちりうゐあひ
關口流居合　（寫本）一卷

關口流の居合諸法を名目したるものなり。天保十四年癸卯〔二五〇三〕の寫本にかゝる。

せきけいだうしふ
石桂堂集　二卷　萩原　公龍

著者の家集。嘉永六年癸丑〔二五一三〕加藤貞白の跋、翌七年娃裕の序あり。

◎萩原公龍は名を承といひ、凪二郎と通稱し、綠野また敬齋と號し、室を石桂堂と號せり。安政三年丙辰〔二五一六〕九月、年六十二にて歿す。

せきげん

析玄　一巻　廣瀨　建

「孝子道德經」の大意を辨したるものなり。天保十年己亥〔二四九九〕筱崎弼、中島種任の序、同十一年矢上行の跋あり、同十二年版行す。

◎廣瀨建は豐後日田の人、子基と字し、求馬と稱し、淡窓と號す。幼より神童の稱あり、龜井元鳳に從學し、長ずるに方り、經史詩文に通じ、其門を開きて教授するに方り、來り教を請ふもの多く前後四千餘人に及べりといふ。鎭西知名の士多く其の門より出づ。安政二年乙卯〔二五一五〕年七十四にて歿せり。門人諡して文玄先生といふ。

せきけんたいこでん

赤縣太古傳　十二巻　平田　篤胤

支那太古の考證なり。「氣吹能舍著撰書目」にも「唐土の古籍を普く探り、彼の國に傳はれる古傳を正し稽へて、太一傳、盤古傳、三皇傳、六皇傳、太昊傳、神農傳、黃帝傳をたて、少昊、顓頊、帝嚳、堯舜禹の世までの事を論註して、彼の國も、我が皇神たちの開闢し坐る事實を明かし、彼の國の古史籍を讀む者の、木鐸とせられし書」云々と云へり。編輯の年月等を記さず

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

せきけんどせいかう

赤縣度制考　三巻　平田　篤胤

彼國度量衡の起原を考へ、歷代の尺度、一も我が國の尺度と同じものなきことを論辨して、古來の尺度考に、我が固有の尺度を、隋代また唐代の尺なりといへることの非を辨じたるものなり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

せきけんれきだいしやくづ

赤縣歷代尺圖　一枚　平田　篤胤

支那古今歷代の尺を圖して、各時代寸法等を記したるもの。殷尺以下周尺に至る三十種に及べり。圖法は、中央に本朝曲尺一尺五寸のを立て、其の左右に順次短きを圖し、右の終は殷尺六寸七分五厘、左の終りは周尺六尺の分に及べり。三十尺、異名同尺凡て五十一名を記す。天保五年甲午〔二四九四〕の作なり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

せきこうろく

斥候錄　（寫本）一巻　藤原　正行

兵時斥候に關する法術を說明したるもの。元治二年乙丑〔二五二五〕菅原夏繁の奧書に、著者が、夏繁の父翁に示したるを、父及び夏繁が校訂せし者にて、もと三巻なりしを合せて一巻に寫せりといふ。

◎藤原正行〔本多正信〕の傳は「本佐錄」の下にあり

せきさいしふこいんぷ

石齋集古印譜　十九册　上田　和英

唐宋元明朋名家の諸印を模集したる印譜なり。天三册、地三册、人二册、十干册、及び附錄一册、凡て十九册あり。古賀侗庵の序あり。文政十年丁亥〔二四八七〕の自跋あり。

◎上田和英は東都學館の士にして、文吉と稱し、石齋と號す。昌平黌の吏となりしこと侗庵の序中にあり。數百の印譜は、皆自ら模刻するところなり。

せきさはふ

釋鎖法　（寫本）四巻　會田　安明

釋鎖法は關流の創發以來、世に行はるゝこと既に久けれども、未だ本書の如き整ひたる者を見ず。惜哉說明の辭足らざるの憾あり。寬政十二年庚申〔二四六〇〕の著作なり。

◎會田安明の傳は「算法古今通覽」の下にあり。

せきさんじ

赤山事　（寫本）一巻　橘　直齊

叡山鎭守赤山大明神の緣起を漢文にて記したるもの。天曆二年戊申〔一六〇八〕朔日記すところなり。「續群書類從」巻六十三、神祇部第六十三にあり。

せきしうぎんざんき

石州銀山記　（寫本）一巻

石見國銀山の始掘以來の事を記したるものなり。或は「石州銀山小錄」とも寫傳せり。

せきしうぎんざんせうろく

石州銀山小錄　（寫本）一巻

同銀山に關する舊記古文書等を輯錄したるものなり。銀山役員の事、銀鑛採掘高等の事をも附記す。

せきしうはまだめいしよかう

石州濱田名所考　（寫本）一巻

石見國濱田の名所舊蹟を考證したるものなり。

せきしつしせう

石室詩鈔　七巻　福　世謙

著者の詩集なり。石室を作りて書を藏せるより石室の號あり。七巻三册に版行す。安永九年庚子〔二四四〇〕大阪にて版す。

◎福世謙は泉南の人にして、徙夫と稱し、石室また紫山と號す。

せきじやうぎしんたいわ

赤城義臣對話　（寫本）一巻

元祿復讐の赤穗遺臣、御預になりし後、十七人の人人より、直接に聞取りたる實話を覺書したるものなり。自序あれど、其の姓名を記さず。

せきじやうぎしんでん

赤城義臣傳　十五巻　片島　深淵

同種の書赤城盟傳を基として、赤穗の遺臣四十六士の復讐始末を、忌憚なく詳敍したるもの、最初第一册に義士銘々の畫像を揭げ、併せて其の由來書を附す。次の巻第一より本傳に入り、最後の第十四巻大義論、淺野家系、大石系圖付小山系、義士分限の目にて完結す。其の大義論の下に、義士復讐に關する天下の評判十數說を擧げて詳細に論辨せり。享保三年戊戌〔二三七八〕義士の十七年忌に當りてこれを著す、此の書は其の議論の露骨なる爲めか、官の忌むところとなりて、一時絶版を命ぜられたりといふ。

◎片島深淵は攝津の隱士にして、武矩と字し享保年代の人なり。著書は本書の外に、武士和訓、武藝訓、武家圖像傳、武田三代記、明君文武蹟等あり。

せきじやうし

石城志　（寫本）十二巻　津田　元顧

筑前國石城地誌なり。巻一、二に地理考、巻三に神社考、巻四、五に佛寺考、巻六に歲時考、巻七、八に土產考、巻九、十、十一に人事考、巻十二に雜著。貝原翁の著「筑前續風土記」の一邑一錄の瑣事に及ばざるより、此の書は疎妄猥雜をも顧みず、土人の傳說等聞見に隨て輯錄し、商豎、買兒の覽に見しむといへり。明治二年乙酉〔二四二五〕著者の凡例、同三年草江散人安惟允の序あり。

◎津田元顧は筑前國石城府の人にして、淡齋散人と號す。此の書は自ら校定して、男元貫に編輯せしめたるものなり。

せきじやうたん

席上譚　五巻　野間　子苞

古今の聖經賢傳中より、成德修業に關する章節を抄輯したるもの。間々著者の評論をも插入して後進の誦讀に充つること最も親切なり。事理を會得するの外、更に漢文章の標範として見るべきもの多し。明曆三年丁酉〔二三一七〕の自序、翌萬治元年林春齋の序、二年陳元贇の序あり。五巻一册に作る。

◎野間子苞の傳は「桑華紀年」の下にあり。

せきじやうめいでん

赤城盟傳　（寫本）一巻

赤穗義士各箇の行績を記述したるもの。巻末に「右晉子肉筆之一書、故歸來芥嶽翁所秘藏也、今茲乞於翁子伯定而校寫、爲宗珍云、文化十五年〔二四七八〕二月朝比奈貢寛」とあり。

せきじやまんぴつ

斥邪漫筆　一巻　深慨隱士

和漢耶蘇教傳來の濫觴を略敍し、且つ其の教義を駁し、害毒を論じたるもの。水府刊行の「破邪集」等、二三の書を參考著述したるなりと云ふ。孝明天皇の元治元年甲子〔二五二四〕の作。同人の著に、本書の續編「斥邪二筆」及び「寒更霰語」等あり。併せ讀むべし。

◎深慨隱士のことは「寒更霰語」の下にあり。

せきしゆししふ

赤須詩集　七巻　僧　猛火

赤須の詩集なり。古詩、律、絕句の各體、各、別巻を成せり。巻端に自家の肖像と、自撰の小傳とあり。明和二年乙酉〔二四二五〕僧玄衆妙の序、安永四年乙未〔二四三五〕釋普門の跋、同年僧樹法幢が序、同年僧光無極の跋あり。三僧、皆赤須が門人なりといふ。七巻三册に發行せり。

◎猛火は、勢州飯高郡常敬寺の住職にして、小字を勝といひ、後に明了と改め、赤須眞人と號せり。享保元年丙申〔二三七六〕六月十一日に生れ、學德の僧として尊敬せらる。

せきしゆしんじんししふ

赤須眞人詩集　七卷　僧　猛火

此の書は其の一名「赤須詩集」の下に解題せり。

せきしよき

關所記　（寫本）一卷

相州箱根の關所より始めて、全國四十三關を記し、各條例及び御番大小名の氏名等をも記せり。

せきしよてがたいつけん

關所手形一件　（寫本）一卷

德川幕府時代に於ける關所手形の書留寫なり。元祿以來文化二年乙丑（二四六五）の分に至るまで、諸例二三十通あり。

せきじん

石神　（寫本）一卷　伊勢　貞丈

筑後國柳川人形原の石人を圖說考證したる者也。

◎伊勢貞丈の傳は『安齋叢書』の下にあり。

せきしんかう

釋親考　一卷　伊藤　長胤

九族稱呼の事を辨明したるもの。卷首に宗族母黨內外兄弟妻黨夫黨の圖を揭げたり。元祿十四年辛巳（二三六一）の自序中に曰く「今子弟の習、親屬稱呼の別を諳んぜず。動もすれば有職の誚を招く。唯文に臨んで其義に乖くのみならず。而して內外の宗、昭穆の序、多く混淆を致す其失細に非ず。因て爾雅釋親に就て本經となし、其下諸儒の說を附し間々管見を其後に著す」云々。

◎伊藤長胤の傳は『輶軒小錄』の下にあり。

せきしんかうぞくへん

釋親考續編　一卷　伊藤　長胤

親族稱呼の異なるものを輯めて、一々其の出據を割り書に註記したるもの。享保八年癸卯（二三八三）安原貞平の序あり。元文元年丙辰（二三九六）刊。

◎伊藤長胤の傳は『輶軒小錄』の下にあり。

せきすゐかんわ

積翠閑話　三卷　中村　經年

著者積翠道人の雜事隨筆なり。嘉永二年己酉（二五〇九）黑澤枚の序あり。

◎中村經年（松亭金水）は「松亭漫筆」の下に傳す。

せきすゐよかう

赤水餘稿　二卷　五島　惠廸

著者の詩文。上卷に文、下卷に詩を收む。文化五年戊辰（二四六八）男增田必由の序、翌六年藤必興の跋あり。同七年出版す。

◎五島惠廸は播州の人にして、文敏と字し、一彥と稱し、赤水と號す。大阪に出でて醫業に從事せり。別に「醫事」「客難」「赤水論藪」等の著あり。

せきすゐろんそう

赤水論藪　三卷　五島　惠廸

卷一に書牘、卷二、三を「尾芋」と號して共に醫術に關する論文にて、漢文なり。寛政七年乙卯（二四五五）の自序、及び男增田必由、次子必賀の序あり。

◎五島の傳は「赤水餘稿」の下にあり。

せきせきしゆんじう

昔昔春秋　一卷　中井　積德

漢文に作れる戲作なり。昔々桃太郎の鬼が島征討といへる童話を根據として、猿蟹合戰、狸の土船等の昔話を混合して『春秋』の體に倣ひ、經傳を分ちて、嚴肅なる筆法を以て作りたる戲作なり。明治十三年庚辰（二五四〇）一小冊子に出版す。

◎中井積德の傳は『七經雕題略』の下にあり。

せきぜんしふ

責善集　三卷　松平　定信

忠告善導、責善に關する要項を論述す。人に學問の肝要なる事、士に臆病心の除去すべき工夫等を記し、別に一卷「責善集別集」といふを附したり。「樂翁公遺書」の中に收む。

◎松平定信の傳は『花月草紙』の下にあり。

せきぜんだうずゐひつ

積善堂隨筆　二卷　南部　彝

此の書は一名「拔萃錄」の下に解題せり。

せきそうぶんせう

石增文鈔　二卷　石川　正恒／增井　勝之

著者兩人の詩文を合編同刻したるもの。故に「石增文鈔」といふ。上卷は正恒の集にして、文二十五篇、詩四十四首を揭げ、下卷は勝之の集にして、文十八篇詩五十六首を載せたり。寛政二年庚戌（二四五〇）大井知寛編輯して自序を附す。同人は正恒勝之と同藩にして師友の關係あり、兩人の歿後に於て其の遺稿を集めたるなり。

◎石川正恒は伯卿また伯毅と字し、平兵衞と稱し、麟洲と號す。平安の人にして夙く學を好み、柳滄洲、堀南湖等に從て學ぶ。後ち小介侯に仕へて儒官となる。著書は本書の外に『辨道解蔽』ありて大に徂徠の學を駁擊せり。寶曆九年己卯（二四一九）七月十三日歿す、年五十三。

◎增井勝之は彥立と字し、立覽と號す。石川正恒に學びて、後小介藩の敎授となれり。

せきそまんぴつ

碩鼠漫筆　（寫本）十五卷　黑川　春村

我が古言古事等の考證をいろは順に編輯したるもの。碩鼠は螻蛄の異名にて、著者が謙辭なりといふ。門人高橋廣道の編輯するところなり。安政六年己未（二五一九）同人の序あり。

◎黑川春村は「神名帳考證土代附考」の下に傳す。

せきそわうらい

尺素往來　二卷　一條　兼良

上卷に小朝拜、三節會、御所的、聖廟法樂、鷹狩、新茗、諸香、四足二足、調味、名物、闘茶將棊、賀茂祭、桂里鵜飼、祇園御靈會、馬、弓、甲冑、鍛冶、救撰、手蹟、書籍、蹴鞠、犬追物、舞樂、神樂。下卷に神訴、藥種、地賢、祕法御祈、本領、相論、九重名、成敗、武官、僧官、二十二社、四箇大寺、八宗、佛說法次第、三國五山、七堂會下、新命入院、剪栽、山水立石、器財、禪錄、僧具、名筆掛輪、屏風障子、繪具、請僧、粥、點心、諸食物、菓子、菓子、布施物、茶毘、忌日、歲葬。以上の諸文句を輯載したるものなり。寛文八年戊申（二三二八）版刻す。

◎一條兼良の傳は『歌林良材集』の下にあり。

せきたつこくわんべん

積達古館辨　（寫本）二卷

安積郡、安達郡二郡の統計的地誌なり。城下、町等の間數、社寺、山川等其の數大小長短等を記し、各町村石高等を記す。文化三年丙寅（二四六六）松雅則といふもの寫傳す。卷首に禁祕の書を借寫す。人に借すべからざる由を記せり。

せきちくしふ

石竹集　一卷　冷泉　古風

著者の家集歌の部にて和歌二百餘首を集成したるものなり。男天野御民諸家の題序を附して明治十一年戊寅（二五三八）編輯出版す。

◎冷泉古風は新左衞門と稱し、後、讓一と改む。奈泥志古廼屋と號す。長門萩藩の醫員莊原信和の第三子なり。享和元年辛酉（二四六一）七月九日、周防國三田尻に生る。二十餘歲にして冷泉雅古の養嗣となる。中年以後專ら國學に志し、偏に和歌を學ぶ。晚年贈從一位毛利敬親公の聘に應じて國史を講ず。著書は本書の外に石竹集（文之部）、喫茶養神論、御狩之記、奈泥志古廼屋日記等あり。安政元年甲寅（二五一四）五月二十一日、年五十四にて歿す。

せきていおうざうせきもくろく

石亭翁藏石目錄　（寫本）一卷　木內　小繁

版本「藏石目錄」の名によりて「さ」の部に出す。

せきでらえんぎ

關寺緣起　（寫本）一卷

關東の古寺關寺の緣起を記したる漢文短篇なり。『續群書類從』卷八百十三釋家部第九十八に收む。

せきてんぎせん

釋奠儀詮　（寫本）一卷

昌平黌に於ける釋奠儀に割註したるものなり。

せきてんしぎ

釋奠私議　（寫本）四卷　大鄉　良則

釋奠の原始より、同諸式に至る裁錄なり。第一に原始、設像、御諡。第二に名目、齋儀。第三に新儀、諡號、位次、祭期、齋戒、祭服、解劍、拜揖。第四に祝文、奏樂、器數、陳設、香帛、犧齊、獻胙、雜議。以上の目につきて詳敍す。寛政十二年庚申（二四六〇）の自序あり。「學生鯖江大鄉良則識于八重洲舍之南窗」とあり。

◎大鄉良則は伯儀と字し、金藏と稱し、信齋また鯖江と號す。林門に學び、道學者を以て名高し、其の師林祭酒江戶吉河に一校を設け、信齋をして後進を誘掖せしむ。弘化元年甲辰（二五〇四）十月十四日歿せり、芝伊皿子長應寺中正壽院に葬る。信齋子なし、由て其の歿後林祭酒諸生と謀り須子浩齋を撰びて其の後を繼がしむ。

せきでんしふえふ

昔傳拾葉　（寫本）三卷　壺井　義知

著者の故實考證に關する隨筆なり。寶永六年己丑（二三六九）の自跋あり。

⊙壺井義知の傳は「官職浮説或問」の下にあり。

せきてんづ

釋典圖　（寫本）一軸

釋典祭の有樣諸式を圖出せり。卷頭に天明八年戊申〔二四四八〕源朝臣保繁浸の一枚畫を添へたり。

せきてんぶるゐ

釋奠部類　（寫本）一卷

古來の釋奠式に關することを部類したるものなり

せきどくごしき

尺牘語式　二卷　僧　大典

尺牘の用語を輯錄す。自序及び僧淨復の跋あり。大典の傳は「柿本人丸事蹟考」の下にあり。

せきどくしやしき

尺牘寫式　一卷　僧　大典

尺牘寫式を記す。自序及び明和六年己丑〔二四二九〕淨復の跋あり。著者大典の傳は「柿本人丸事蹟考」の下に傳す。

せきとりせんりやうのぼり

關取千兩幟　二卷　近松　半二

力士猪名川の出世始末に脚色したる淨瑠璃なり。猪名川は江戸方當年の關取にして、大阪に興行し、同地の最貧相撲鐵ヶ嶽との取組定まるや。當日の人氣宛然潮の湧くが如く、兩力士一世の晴相撲として騷ぎ立てり。猪名川の力量、遙に鐵ヶ嶽に優れりと雖も、當時猪名川に裏面の事情あり、即ち藝妓某大夫を身受けするに當つて其の金策に究せり。血氣驕慢なる鐵ヶ嶽は、此の弱點に乘じて、己が名聲を全うせんとし、其の日の勝を讓らんことを強迫す。猪名川亦怨を吞んで略其の意を領せり。然るに其の妻竊にこれを知り、夫の意を見るに忍びず、走つて北野屋七兵衞の義俠に據り、己に一世の面目を犧牲して、一身鐵ヶ嶽の爲めに傾倒したる猪名川を、飄然全幅の勝利を以て屹立し、土俵の眞中に天下の力士と叫ばしめたる次第を敍し、更に詐つて弟子千駄川の相撲を買つて周防岩國に興行し、猪名川の究策、再び破綻を醸して、危機一髮に瀕したるが、千駄川の來會によつて僅に事の全きを得たること等を敍せり。半二の作中、新版歌淨瑠璃、太平記忠臣講釋、近江源氏先陣館、妹脊山婦女庭訓、蘭奢待新田系圖、姻袖鏡等と共に著名なり。

⊙近松半二は浪華の淨瑠璃作者なり。少壯の時放蕩なりしが、中年に及びて竹田出雲に從ひて作者となり、遂に世に好評を博し、推されて竹本座の立作者となれり。其の生涯に作れるもの頗る多し。列擧すれば新版歌祭文、妹脊山婦女庭訓、太平記忠臣講釋、近江源氏先陣館、關取千兩幟、奥州安達原、本朝二十四孝、伊賀越道中雙六、時代織室町錦繡、道中龜山噺、假名寫安土問答、往古曾根崎村噂、心中紙屋治兵衞、鯛屋貞柳歳旦話、性根競姉川頭、躾方武士鑑、いろは織三組盃、櫻御殿五十三驛、傾城阿古屋の松、京羽二重娘氣質、蘭奢待新田系圖、姻袖鑑、小夜中山鐘由來、三日太平記、傾城阿波の鳴門、振袖天神記、讃岐三巴、荻大名傾城仇討、小野道風青柳硯、四天王寺稚木像、敵討稚、天竺德兵衞郷鏡、花系圖都鑑、安部淸明倭言葉、山眞湊千軒長者、古戰場鐘掛松、極彩色娘扇、日高川入相花王、太平記菊水之卷、蛭小島武勇問答、敵討崇禪寺馬場、昔男春日野小町、崇德院讃岐傳記、平惟茂凱陣紅葉、姫小松子日の遊、薩摩歌妓鑑、役行者大峯櫻、世話狂言漢楚軍談、伊達錦五十四郡、愛護稚名歌勝鬨、菖蒲前操の弦、小袖組貫練門平、替唱歌絲の時雨、獨判斷等五十四種あり。中につき關取千兩幟、新版歌祭文、妹脊山婦女庭訓、近江源氏先陣館、太平記忠臣講釋等は最も世にあらはるゝところの名作なり。晩年山科に退居し、天明三年癸卯〔二四四三〕二月四日歿す。享年九十九。

せきなんろく

責難錄　（寫本）二卷　佐藤　信淵

農政農事の大切なることを述べ、併せて、其の方法、經濟法等を細說し、且當時の諸侯の農政に心を用ひず財用の給らざる所は、家中諸士の俸祿を借り、上下共に、難澁するは、根本の培養を忘れて枝葉に姑息するの害に基く事等を論述せり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕二月初午日の著者の末記あり

⊙佐藤信淵の傳記は「經濟要錄」の下にあり。

せきねんずゐひつ

石年隨筆　（寫本）三卷

歷史紀傳等に關する隨筆なり。著者詳ならず。

せきのあきかぜ

關の秋風　一卷　松平　定信

著者白河へ歸城する時、白河の珍らしき事など、書き綴りて、名殘を惜める姉に與へて別れしものなり。天明五年乙丑〔二四四五〕著者二十八歳の時也。

⊙松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

せきのふぢかは

關藤川　（寫本）一卷

奈良の京より、武藏江戸に至る和文日記なり。和歌をよみ入れて優麗なる筆の上になれり。

せきはいびきふしえうせう

夕拜備急至要抄　（寫本）二卷

朝廷の年中毎月の行事規式を記錄したるものなり。文明十五年癸卯〔二一四三〕及び明曆元年乙未〔二三一五〕等の奥書あり。

せきひ

斥非　一卷　太宰　純

古來稱呼の謬誤を正し、その他の雜事をも辨論せり。別に附錄一卷ありて、著者の雜文九章を揭げたり。延享二年乙丑〔二四〇五〕原尙賢の序を附す。

⊙太宰純の傳は「經濟錄」の下に出たり。

せきひしふ

石皮集　一卷

こがらしの關叟法師の發句及び猿耳、大蘇、布舟、尺艾、周女、亞渓、十邑、嵐阿、羅風、士朗、岳輅、野翁、道彥その他の發句を集めたるもの。文化五年戊辰〔二四六八〕來樹叟士朗の序あり。

せきぶんきよさつき

惜分居劄記　（寫本）十四卷　増島　固

著者の考證隨筆なり。惜分居は、分陰を惜むの意にとりて、其の堂に名けたり。由て書名とす。

⊙増島固の傳記は「讀易小言」の下にあり。

せきまろく

績麻錄　（寫本）一卷　龜　協從

越後縮の製法始末を記す。寛政十二年庚申〔二四六〇〕の著なり。著者の事は「北越志」の下にあり。

せきめんろん

石綿論　一卷　黑田　玄鶴

本書は「いし綿論」として「い」の部に揭出せり。

せきやうせう

世鏡抄　（寫本）二卷

修身齊家治政御民の事を記したるもの。第一金輪護國之事、第二聖王守政事等より、第四十八侍之大法公儀之事並御教書といふ項に至る。本書は、淸眼記、正直抄、神託記、去惡經、二世抄、禁中鏡、祕密鏡等の別名あり。「續群書類從」卷九百三十八上下、雜部卷八十八にあり。

せきやどでんき

關宿傳記　（寫本）一卷　今泉　政隣

下總關宿の神社、佛閣、名所、舊蹟等を雜記せり。

せきようじきうせつせう

責鷹似鳩拙抄　（寫本）一卷

鷹の名の事、鷹物之具寸法の事、その他數十項鷹に關する法式故實を記したるものなり。「續群書類從」卷五百四十六、鷹部第六にあり。

せきらんよし

石卵餘史　（寫本）二十一卷

豐臣秀吉が天下一統の始末を記述す。卷一より卷十までを中原部として中國の軍事を錄し、卷十一、十二を東國部、卷十三、十四、十五を西海部、卷十六、十七を北國部とし、卷十八以下二十一までを一統部と稱し四海泰平琉球信服の事までを記せり。

せきりうさうじゆつ

關流草術　（寫本）三十六卷　關　孝和

天元術に至らざる近易の算術即ち算學の初步なる諸術を草術と曰ふ。故に其術頗る多種なれども、概して十七類とす。關流世々傳ふる所の傳書なり。卷數には種々あれども、今見るところの一種による。延寶前後の著なるべし。著者關孝和の傳は「大成算經」の下にあり。

せきりうしちしよ

關流七書　（寫本）七卷　關　孝和

開方翻變、病題明致、題術辨疑、方陣圓攅、算脫驗符、毬闕變形艸、求積、之れを關流の七部書と云ふ。關流の傳書にして最祕藏する者なり。孰れも同流の印可目錄中に在り。年代詳かならざれども、延寶天和〔二三三三―二三四三〕の間に成りたるものなるべし。著者關孝和の傳は「大成算經」の下にあり。

せきりやうぶんしふ

石梁文集　五卷　樺島　公禮

卷一、二、三に序、記を收め、卷四に論、題、跋、記、

辨、碑、行狀を收め、卷五に書牘、雜文、墓誌、碑銘等を收めたり。文化十五年山村良由、榊原敬文、有馬長照等の序あり。著者は「石梁遊草」の下に傳す。

せきりやうゆうさう

石梁遊草　二卷　樺島　公禮

著者の詩文集。上卷は各地の遊紀に關する詩、下卷は寛政六年甲寅〔二四五四〕下野常陸に行きたる時の紀行文なり。男織の編輯するところにして、文化十二年乙亥〔二四七五〕同人の序あり。

⦿樺島公禮は世儀と字し、勇八と稱し、石梁また萬年と號す。紀平洲に學びて儒に通じ、殊に文章を善くす。久留米侯に仕へて儒官となる。著書は本書の外に石梁文集、石梁遺草等あり。文政十年丁亥〔二四八七〕十二月歿せり、年六十餘。

せきわせう

席話抄　（寫本）三卷

歌學の書なり。發端詞、歌學の事、疑書の事に文字の休字の事以下數十項を論ず。二條家の流を汲めるもの。明和八年辛卯〔二四三一〕源華の序あり。宣恕の案に、此の書は朝信軒湊熈侯〔從四位侍從乘美濃守正則〕の作なるべしとあり。

せけんいしやかたぎ

世間醫者氣質　五卷　無跡散人

醫者を中心に作成したるもの。其の不攝生なるより却て不測の禍を招ける習俗に基ける小說なり。

⦿無跡は他に、世間學者氣質、世間藝者氣質、世間傾城氣質、世間出家氣質、世間役者氣質等を著せり

せげんいつとう

世諺一統　（寫本）百五十卷　菊岡　行宣

内外古今の雜事を集錄類書したるもの。天地、神佛、禽獸、草木、器具、衣食、遊戲、職業、故實、有職、天變、地妖、その他、百般の事件を、俗諺にとり、又は傳說により、記錄し、略解し、若くは考證したる者なり。此の書、從來一二の書目には、世諺一紘三百卷と記されたれど、今、上田文學博士の新に購ひ得られたるものによれば、「一紘」は「一統」の誤寫、「三百卷」は「三百册」の事なるべきかと知られたり。博士所藏の現本も全本にはあらざれど、それによりて、全部の中に、第一組乾十卷、〔天象水氣一卷、天竺地驗一卷、月氏算儀一卷、外土世界一卷、帝鑑唐帝二卷、和漢閨倫一卷、漢女略集一卷、和漢畫工一卷、秀女略集一卷〕。第一組坤十卷、〔編木一卷、編草二卷、禽考一卷、獸畜考一卷、蟲考一卷、魚考一卷、和漢異形一卷、奇怪變異一卷、不變奇妙一卷〕。第二組坤十卷、〔音樂一卷、拍子器一卷、著玉珠一卷、舍要笛一卷、堅笛祕流一卷、說茶一卷、財寶一卷、蹴鞠一卷、歷鍋志一卷、庖厨一卷〕。第四組乾十卷、〔人倫家業一卷、諸道根元一卷、歷代城主二卷、歷代館主二卷、所務人一卷、守護領式一卷、本朝貢式一卷、扶桑州理一卷、州分名物一卷〕。第四組坤十卷、〔神祇考五卷、神鑑一卷、二十二社二卷、一宮志一卷、本地垂跡一卷〕。第五組坤十卷〔兵具論三卷、弓矢皆具二卷、馬具圖形一卷、軍衛一卷、勇武故事二卷、劍刀略記一卷〕。第六組坤十卷、〔帝臣系鑑二卷、神器一卷、禁闕行事一卷、官具一卷、皇館篇一卷、職掌粗談三卷、世俗行事一卷〕。第七組坤十卷、〔絹布雜志一卷、邊境志一卷、銃器一卷、洛邊館跡一卷、普作雜事一卷、雜具不全一卷、國土雜類三卷、雜拾遺一卷〕。等の卷目あることを知る。博士は此の中の二十七種三十卷を所持せらる。蓋し該書は著者の自筆淨寫本にて無類の珍本に屬す。每卷奥書署名華押等あり。右現本は元祿十一年戊寅〔二三五八〕著者七十四歲の時、同翌年等の作なり。現本によりて想像するに、他人の寫傳本なきまでも、著者の自筆本、即ち博士所藏の三十卷に連續する他の卷册數は全かりし者なるべし。既に散佚紛失したるか、或は又京畿近邊の寺社若くは好事家の庫裡に所藏せられたるか。博士も爾かこそいはれたれ。

⦿菊岡行宣は、伊賀國菊岡の人。菊岡を氏とせるも、これに基けり。北村季吟の門に入りて國學を研究し殊に和歌に長ぜり。號を隨性軒如幻といふ。元祿十二年己卯〔二三五九〕年七十五歲なりきと。其の子行尙は「江戸砂子」の著者菊岡沾涼の養父也。

せけんおほひやうばん

世間大評判　（寫本）二卷

世の構造的雜話を書き集めたる者。明和寛政の比、都下に流布したる「世間大評判記」の中より、卑猥の條など除去したりと安政三年丙辰〔二五一六〕の自序中に見ゆれど、姓名を記さず。

せけんがくしやかたぎ

世間學者氣質　五卷　無跡散人

學者の理論に過ぎて實行に益なきを綴り作成したる讀物小說なり。明和五年戊子〔二四二八〕の自序あり。著者の事は「世間醫者氣質」の下にあり。

せけんげいしやかたぎ

世間藝者氣質　五卷　無跡散人

諸藝人を中心によく各藝者の祕密手段等を發き出して、滑稽的に作れり。著者の傳は前に出せり。

せけんけいせいかたぎ

世間傾城氣質　五卷　無跡散人

傾城の浮氣を中心として作り成せる小說なり。白人藝子花車仲居禿等を附す。著者は前にいだす。

せけんこしもとかたぎ

世間侍婢氣質　五卷　永井堂龜友

當代侍婢の氣質を土臺に作り成せる一種の讀物小說也。蛙文堂の端書あり。明和八年辛卯〔二四三一〕出版す。著者の事は「赤烏帽子都氣質」の下にあり。

せけんしゆつけかたぎ

世間出家氣質　五卷　無跡散人

出家の却て不道德なることを數へあげて作成したる讀本小說なり。著者は「世間醫者氣質」に傳す。

せけんてだいかたぎ

世間手代氣質　五卷　江島屋其碩

當代手代の氣質を土臺に作り成せる一種の讀本小說なり。首に「渡世勸辨」と割書せり。享保十五年の自序あり。著者は「其碩諸國物語」の下に傳す。

せけんなかうどかたぎ

世間仲人氣質　五卷　永井堂龜友

媒酌人の氣質を中心として作り成せる一種の小說なり。安永五年丙申〔二四三六〕自序を附して出版。

⦿永井堂龜友は「赤烏帽子都氣質」の下に傳す。

せけんはゝおやかたぎ

世間母親容氣　五卷　南圭梅嶺翁

其碩の「手代氣質」「親仁容氣」等にならひて、此の小說を作る。寶曆二年壬申〔二四一二〕の自序あり。

せけんむなさんよう

世間胸算用　五卷　井原　西鶴

元祿五年壬申〔二三五二〕の自序を附したる小說なり。井原西鶴の傳は「小夜嵐物語」の下にあり。

せげんもんだふ

世諺問答　三卷　一條　兼良

我が邦の節序故事を輯集す。孫兼冬の續成なり。

⦿一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

せけんやくしやかたぎ

世間役者氣質　五卷　無跡散人

演戲役者を中心として綴り成せる小說なり。のら大鼓持を附錄とす。著者は「世間醫者氣質」に見よ。

せじけんもんろく

世事見聞錄　（寫本）七卷

著者少時來の世事を見聞雜錄したるもの。卷一に武士の事。卷二に百姓の事。卷三に寺社人の事、商業の事。卷四に陰陽道の事、盲人の事、公事訴訟の事。卷五に諸町人の事、同中遊以下の事、卷六に遊里賣女の事、歌舞妓芝居の事。卷七に穢多非人の事、米穀其外產物の事、山林の事、日本神國といふ事、非命に死せるものゝ事、土民君の事。以上の目につきて、風俗習慣由來等を評論したるものなり。文化十三年丙子〔二四七六〕武陽隱士の自序あり。

せじこんげん

世事根源　二卷　憑虛子

和漢の歲時其の他に關する紀原を尋討したるもの。其の目を列擧すれば、元日慶賀、鏡餠、門松並に蓬萊、人日菜、子日遊、十五日粥、三元服、節振舞付十六日遊の事、上巳付草餠、桃花酒事、端午付艾菖蒲葺屋事、粽事、長命縷事、七夕、中元、重陽、亥子、追儺付節分夜打豆事、除夜大歲の事、正五九月の事、等あり。貞享三年憑虛子の序を附し、一册に出版す。

せじちんせつろく

世事珍說錄　（寫本）一册

最初に寬永七年庚寅〔二二九〇〕三月五日の初日參會といふ項より、數百項武士道に關する訓誡的雜記を記載せり。卷頭に「此始終十一卷迄て火中すべし、世上の批判、諸士の邪正推量風說等にて、只自分の後學覺居候を咄の儘に書付候へば、他見之末にては意恨惡事にも可成候間、堅火中可仕由返々御申候也」と記せり。蓋し、本書の原本十一卷に區別せられたりしを後其の區別を徹して一册に寫傳せるか、將、また別に尙十卷あるか詳ならず。

せじつうかう

世事通考　（寫本）一卷

二字、三字の連綴せる熟字數百を聚め、五十九門に類別して、各語其の音義を略註したるものなり。

せじひやくだん

世事百談　四卷　山崎　美成

卷頭に、「過ぎし頃、徒然のすさみに、筆に任せて記したることぐさのつまりたるを、かりそめに三卷雜記と名づけしが、其の後も尙ほ筆を止どめずして、思ひ出づるまゝに書きつけたるに、卷は四まき、事は四條に滿ちたれば、やがて世事百說とは名づけぬ」と自記して、諸家の訓點、平仄、韻書等より、懸鉤、引墨、苦學等を說く。「百家說林」第六卷に收めたり

◎山崎美成の傳は「書家便覽」の下にあり。

ぜしようゐんぞうないふき

是稱院贈內府記　寫本一卷　藤原　宗光

著者の日記にて、永正五年戊辰〔二一六八〕七月より、同九年壬申〔二一七二〕四月に至る記事なり。享和元年辛酉〔二四六一〕八月塙保己一の奧書あり。

◎藤原宗光は是稱院と號す。大永六年丙戌〔二一八六〕四月朔日、五十六歲にて薨じ、廓宗と道號し、祐寂と法名せり。天文七年三月晦日、內大臣を贈らる

せせつぐあんもんだふ

世說愚案問答　三卷　山崎　尤最

種々の俗間の故事慣例等を說明したるもの。例せば、土用の入に小豆を水にて吞む事、六月一日にかき餅を喰ふ事、童は風の子といふ事等以下數十項あり。享保十七年壬子〔二三九二〕九月の自序、及び寬保二年萩原正三位刑部卿卜部兼武の序あり。

◎山崎尤最は京師の人にして芥花堂と號し、音樂語學等に精しかりきといふ。

せせつけいび

世說啓微　二卷　皆川　愿

漢書中より諸德に關する章句を摘出して略註したるもの。上下二卷を更に下の如く分てり。卷一德行上。卷二德行下、言語上。卷三言語中。卷四言語下、政事、文學上。卷五文學中。卷六文學下、方正上。卷七方正下、雅量上。卷八雅量下、識鑒。卷九賞譽上。卷十賞譽下、品藻上。卷十一品藻下、規箴上。卷十二規箴下、夙惠。卷十三豪爽、容止、自新、企羨。卷十四傷逝、捿逸。卷十五賢媛、術解。卷十六巧藝、寵禮、妊誕上。卷十七妊誕下、簡傲、排調上、排調下、輕詆上、輕詆下、假譎、黜免、儉嗇、汰侈、忿狷。〔卷十八、卷十九の字を脫せり〕卷二十に尤悔、紕漏、惑溺、仇隙等に序せり。男允の校するところ、文化十二年乙亥〔二四七五〕東山圓光禪寺道隱の跋あり。

◎皆川愿の傳は「淇園文集」の下にあり。

せせつこじゑん

世說故事苑　五卷

普通の言語故事等を列擧して解釋したるもの。皆其の出據を詳にせり。其の記載の大綱を擧ぐれば卷一に倭文用語類二十八箇條、商家用字類、二十四箇條、嬉戲類十六箇條、歲時類四十六箇條。卷二、卷三、卷四に俗說雜誌凡そ二百十八條。卷五に稱呼類九十一箇條を揭げたり。寶永七年庚寅〔二三七〇〕の自序あり。正德六年大阪にて出版す。

せせつしんごほかう

世說新語補考　四卷　桃井　源藏

宋の劉義敬の「世說新語」を註釋補考す。あらゆる諸書に考證を取り、一々抄錄して章句を詳解せり。爾來、引書の精確を以て本書を稱せり。寶曆十一年辛巳〔二四二一〕の自引、後藤世均の序、中村文輔の跋、同十二年那波師曾の序等あり四卷二冊に版行。

◎桃井源藏は石見の人。子深と字し、白鹿と號す。儒を以て松江藩に仕へ、明敎館の敎授となる著すところは別に劉向說苑考、荀子遺秉、楊子增註等あり。

せせつひつかい

世說筆解　寫本四卷　野村　公臺

宋の劉義敬の撰びたる「世說新語」を補註したるもの。內題には多く「世說新語補」とせり。德行上下、言語上中下、賞譽上下、品藻上下、規箴上下、捷悟、豪爽、容止、企羨、傷逝、以下十數目に分ちて古書中の事實、例言等を聚めたるものなり。

◎野村公臺は近江の儒者にして、子賤と字し、東皐また蕉園と號す。姓を修して野公臺と稱せり。世々彥根藩に仕へて儒官たり。天明四年甲辰〔二四四四〕三月二十四日、六十八にて歿す。

せぞく

世俗　寫本一卷

俳諧連歌の諸用件を記したるもの。只句てにはちかひの事、ちかへるを直す詞の事、秀句につゞく事、秀句に依て續字に不成事、別而ならひある事、手にはちがはずしてちがふといふ事、以下二十餘項、各例を擧げて說明せり。天文二十年辛亥〔二二一一〕肥前守高長、慶長十一年丙午〔二二六六〕眞隆、享保十三年戊申〔二三八八〕關白家久等の寫本奧書あり

せぞくげんぶん

世俗諺文　寫本一卷　源　爲憲

世上普通の諺文を列擧し、其の典據、出所を示し、其の全文を示したるものなり。中卷、下卷闕佚せり。「續群書類從」卷百八十五、雜部三十五に收む。

◎源爲憲は光孝天皇の皇子是恒の曾孫筑前守忠幹の子。學を源順に受けて、最も秀逸たり。文章生に擧げられて、藏人伊賀守、式部丞、遠江守等を歷任して、長德元年從五位上に敍せらる。散位にあること二十年にして、長和三年甲寅〔一六七四〕美濃加賀二國の守に任ぜらる。別に「本朝詞林」「口遊」等の著あり。

せぞくせんしんひせう

世俗淺深祕抄　寫本二卷　一條　兼良

朝廷に於ける諸格式及び御裝束其の他の故實有職を記したる者。上卷に百四十六條、下卷に百三十九條あり。「續群書一覽」の統計によれば、上卷に百四十六條、下卷に百三十六條とありて三條の差あり、「群書一覽」とも少異あり。各一種の異本なるべし。元祿十七年〔二三六四〕藤原定基寫本の奧書あり。

◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

せぞくりつえうしふ

世俗立要集　寫本一卷　僧　正玄

卷頭「世俗立要集第百五十四」と記して、飮食部帝王諱御膳圖より七種の粥に至る二十一目の法式を略說す。百五十四卷中の端本なるにや。

せそんじはふしよ

世尊寺法書　十折

世尊寺流の法書を輯集したるものにて、各帖上毛町田清興の審定にかゝる。卷第一、第二に行成の書、第三に二代參議行經の書、第四に三代權中納言伊房の書、第五に七代中務權少輔伊經の書、第六に行能卿の書、第七に九代正三位經朝卿の書、第八に十一代行房朝臣の書、第九に十三代正二位行忠卿の書、第十に世尊寺庶流定成朝臣の書を收む。

せそんじはふでふ

世尊寺法帖　八帖

能書家世尊寺家代々の眞蹟を模刻す。上野國町田清興の鑑定せるを同國持田某が版刻したりとなり

せたがやき

世田ヶ谷記　寫本一卷　穗積　隆彥

武藏國荏原郡世田ヶ谷に關する由緒沿革を記したるもの。文化六年己巳〔二四六九〕隆彥の跋あり。

ぜたくをしやうてうせんにつき

是琢和尙朝鮮日記　寫本一卷　僧　是琢

文祿元年壬辰〔二二五二〕四月二十三日、船を朝鮮に航したる時の日記にして、竹島にありて此の記を作れる由を記せり。卷末に數首の詩を載せたり。

せたのながはし

勢田長橋　六冊　富尾　似船

俳句の集なり。東山天皇の元祿年中の編なるべし。

◎富尾似船の傳記は「堀川の水」の下にあり。

せちゑぎやうかうじしやうでうでう

節會行幸次將條々　寫本一卷

節會、行幸に關して、次將の要件數條を記したるものなり。寬文二年壬寅〔二三二二〕の奧書あり。

せちゑせう

節會抄　寫本一卷

古來の節會を諸記錄中より抄出部類したる者也。

せつあんしよしふ

節庵初集　十卷　武井　亨

著者の詩集。天保十三年壬寅〔二五〇二〕梁星巖、池桐孫、鱸田華等の序、東條耕、吉田淸等の跋あり。十卷三冊に版行す。著者武井亨は信州高島の處士にして、元卿と字し、精一郞と稱し、節庵と號す。

せついゑんこん

竊慰寃魂　二卷　碧川　好尙

推古天皇の御世より、元亨延武の頃に至れる忠誠義臣の人にして、却て非罪に罹り、其の善惡善行の顯れざりし人々の事績を纂輯して往々評論をも加へたるもの。材料は國史、記錄、物語等より取り、體裁は淺見安正の「靖獻遺言」に倣ひ、善を勸め、惡を懲し、其の寃魂を慰めむとの心にて書名を撰ぶ。

◎碧川好尙の傳は「神武沿革考」の下にあり。

せつえいひろく

攝營祕錄　寫本一卷

大阪城內外の由來沿革を記し、器具の統計修繕等

の事を記し、元文寶曆の比までに及べり。

ぜつかいをしやうしくわいごろく
絕海和尙四會語錄　一卷　僧　西胤

夢窓國師の十大弟子中なる絕海和尙の語錄集なること名の示すが如し。卷末に應永三十年癸卯〔二〇八三〕に妙祚の撰びたる同僧の年譜を附錄せり。著者西胤は絕海和尙の弟子なり。

せつかうせんせいしぶんしふ
雪江先生詩文集　寫本十一卷　人見　活

著者の詩千餘首、文二百餘篇を輯めたるもの。卷首に林信言の序、嗣子克己の撰びたる「雪江傳」次子子魚の作りたる「雪江行狀」等あり、卷末に著者の和歌及び一族の詠等を附錄す。寶曆十年庚辰〔二四二〇〕克己の編するところなり。

◉人見活は一名を美在といひ、寶函また行篠と字し、雪江また白醉と號す。貞享四年丁卯〔二三四七〕十月十日、江戶本鄕御弓町邸に生る。儒學を修めて、幕府に仕ふ寶曆九年己卯〔二四一九〕四月六日江戶四谷邸に歿す、年七十三。

せつぎよくしふ
雪玉集　十八卷　三條西實隆

著者の歌集なり。著者の法名聽雪と號せるより、最初「聽雪集」と名けたるを、後人今の「雪玉集」に改名したりといふ。

◉三條西實隆の傳は「有職問答」の下にあり。

ぜつくゐせんひやうほん
絕句類選評本　十卷　津坂　孝綽

諸家の絕句を類選して齋藤謙の評語を加へたるものなり。文政七年甲申〔二四八四〕の自序あり。文久三年癸亥〔二五二三〕出版す。

◉津坂孝綽は伊勢の人。君裕と字し、東陽と號す。最初醫に志し、更に經學に志し笈を京都に負ひて獨學精研すること十餘年、門を開きて古學を主張す、來り學ぶもの多し。諸公卿の間に遊び、皆賓師を以て待遇せらる。天明八年鄕に歸りて儒官となり、伊賀上野に教授たり、尋で直學士に補せられまた侍讀學士等となり、治教を論じ、獻替するところ多し。後文政元年〔二四七八〕藩祖創業記を代撰し、翌二年學館を建て、督學兼侍讀に任じ、田祿二百石を賜る。同年更に百石を、同五年また百石を加へられ、前後四百石を受け、執政大夫の亞に班せらる。著書には『退思錄』『孝立制』等あり歿年詳ならず。

せつくわしふ
雪華集　寫本六卷　中里　仲舒

古來の諸家の歷朝六言の詩を編輯したるものなり

◉中里仲舒の傳は「近代玉葉一覽」の下にあり。

せつくわづせつ
雪花圖說　一卷　源　利位

雪の溫度によりて、粒珠となり、花彩となるが如く、種々に形狀を變ずることを述べたるもの。天保三年壬辰〔二四九二〕出版せる小本なり。著者源利位は古河の城主なりき。

せつくわんごでんせう
攝關御傳抄　寫本三卷

攝關家の年譜なり。上卷に、良房、基經、忠平、實賴、伊尹、兼通、賴忠、兼家、道隆、道兼、道長、賴通、教通、師實、師通、忠實、忠通、基實、基房、基通、師家、兼實、良經、家實、道家、教實、兼經、良實、實經、兼平、基平、基忠、忠家、家經、師忠、家基の三十六人。中卷に忠教、兼忠、兼基、師教、冬平、家平、道平、內經、房實、經忠、冬教、基嗣、經通、道教、師平、良基、經教、道嗣、冬通、師良、忠基、師嗣、兼嗣、良嗣、滿基の二十六人。下卷に、滿家、持基、兼良、房嗣、持通、房平、教房、政嗣、政基、政良、政平、政忠、冬良、尙通、尙基、尙經、兼輔、尹房、稙家、稙通、房通、忠冬、晴良、兼冬、前久、兼孝、內基、昭實、信基、信房、幸家、信尙、信尋、昭良、康道、道房の三十六人。凡て九十八人を略譜す。

せつくわんぶにんしだい
攝關補任次第　一卷

文德天皇の天安二年戊寅〔一五一八〕十一月七日攝政に任ぜられたる藤原忠仁より、天文二十三年甲寅〔二二一四〕三月二日關白に任ぜられたる近衞殿晴嗣に至る補任次第なり。「群書類從」卷四十四、補任部第一に收めたり。

せつげつくわ
雪月花　寫本三卷

堂上御領即ち禁裏、院中の御料を始めとして、諸家の家領、院家、女中方、比丘尼衆寺領、地下之家領等より、寛永以來享保比に至る幕府の雜事を記したるものなり。

せつげつくわ
雪月花　二册　角　呂

諸家の俳句の集なり。東山天皇の元祿十三年庚辰〔二三六〇〕京都にて出版す。著者角呂は美濃の俳人なり。

せつげつくわゑい
雪月華詠　三卷　小畑　行簡

芭蕉及び門下十哲等の秀句を撰び、各首に擬作せる七絕詩集なり。其の一例を示せば、「古池や蛙とびこむ水の音」を、「草掩古池池水中、青蛙飛落響通空、玄々理外玄々理、竟起蕉門一派風」と擬したる類なり。自序あれど年時を記さず。

◉小畑行簡の傳記は「詩山堂詩話」の下にあり。

せつげつくわぐさう
雪月花愚草　寫本一卷　僧　立綱

著者の歌集なり。白蓮社歌集、奉納歌集、九日百首等を附錄せり。編年未だ詳ならず。

◉立綱の傳は「葎の跡」の下に出でたり。

せつげつくわみづからのうたあはせ
雪月花自歌合　一卷　松平　定信

雪月花の三題、各、十五番宛自作の歌を合せたるものなり。佐野侯堀田政敦之れを判し、林祭酒述齋跋文を附す。「樂翁公遺書」の中に收めたり。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

せつさいいかう
節齋遺稿　二卷　森田　益

著者の漢文集なり。上卷に書十四。下卷に雜體三十四編を收む。明治十五年壬午〔二五四二〕日向四屋恒之の序、島田泰夫、片山重範の跋あり。

◉森田益は大和國五條の人にして、謙藏と稱し節齋と號す。壯時京師に賴山陽に師事し、後三備の間を遊歷し、山陽逝後京師に歸りて門戶を張る。當時の名士伊勢の齋藤拙堂、大阪の篠崎小竹、福山の江木晉戈等と鼎峙する所ありて、大に名を知らる。姬路侯より、厚禮を以て招聘せられたれど、官を喜ばずして去り、成江丈兵衞の備中倉子城の學校に聘せられて多年の教鞭を執れり。門弟中吉田寅次郎の如き奇傑を出せり。備後藤江の豪農山路機谷といふもの、節齋を招きて師事し、一祠を建て、大史公、韓退之、森田節齋を祭る。祭日には神輿を出し雜沓す。土人之れを森田先生の祭典といふ。

せつさいせいざんせんせいしせう
拙齋西山先生詩抄　三卷　西山　正

著者の詩文なり。菅茶山之れを撰び、男諸門人中原貞固、小野達等の編輯するところにして、賴山陽、賴杏坪等を批評せり。文政八年乙酉〔二四八五〕賴惟柔の序あり。

◉西山正は備中鴨方村の人。拙齋と號し、初の名を忠義といひ、また見利の字を士雅と改む。別號を至樂居といへり。夙く大阪に出でて醫を古林見宜に、儒を岡白駒、那波魯堂に、和歌を伴高蹊、僧澄月等に學び當時の諸名士と交り、名、京阪の間に顯れたり。業成り、鄕に還るに及びては、來り學ぶもの頗る多し、遠近の諸侯聘すれども應ぜず、一時學德を以て喧稱せらる。著書は本書の外に、間窓瑣言、芳野紀行、謀間閑話、汗漫日記、松山遊紀、拙齋和歌集等あり。寬政十年戊午〔二四五八〕十一月五日、六十四歲にて歿す。

せつさいせうしふ
拙齋小集　四卷　青山　延于

卷一に賦二、序十六。卷二に記十、書八。卷三に碑誌八、雜著十七。卷四に詩百八十首を收む。卷首に景山公の題辭、著者の肖像、天保十年己亥〔二四九九〕雲龍六十四歲の自題等あり。末に男延壽の撰にかかる弘化二年乙巳〔二五〇五〕の跋あり。

◉青山延于の傳記は「皇朝史略」の下にあり。

せつしうおほさかおほゑづ
攝州大阪大繪圖　一折

攝津大阪市の大繪圖なり。町村寺社凡て符號を以て區別せり。

せつしうおほさかかつせんぢんどりのづ
攝州大阪合戰陣取之圖　寫本一鋪

東玉造口より河內川に限り、西日本橋より高麗橋に限り、南天王寺道に限り、北天滿橋、京橋より淀川に限りて、元和兩軍の陣取を示し、姓名を擧げ、戰死、進退、斬首、生擒、其の他の統計をも記載せり

せつしうおほさかわうこづ
攝州大阪往古圖　寫本一鋪

攝州高津の郡の蹟、長柄豐崎の郡の蹟、大阪難波津を始として郷名十、庄名二、里名二、村名三、橋三、渡六、道路八等着色を以て示せり。年代を記さず。

せつしうかんざきよりさかひがはにいたるめいしよき

攝州神崎至境川名所記　一卷

神崎より尼崎、大物浦、大物橋、猪名湊、浦初島、難波、入江、堀江、御津濱、難波里、同梅琴浦明神等を記せり。旅客のために土人の發行したるものなり。

せつしうちやうほうじけいづ

攝州長寶寺系圖　（寫本）一卷

攝州住吉郡平野庄なる長寶寺の系圖なり。最初に略譜を記し、系に入りて開山慈心大師より、三十一代崇心大師〔眞享四年〔二三四七〕八月十一日寂〕に至る。「續群書類從」卷百八十五、系圖部第八十に收めたり。

せつしうひらののおほゑづ

攝州平野大繪圖　一折　日野　長久

攝津住吉郡に屬する平野の繪圖にして寺社、產物其の名等を附記したり。圖は說田勝榮の作る所にして寶曆十三年癸未〔二四二三〕大阪にて版刻す。

せつしうめいしよわか

攝州名所和歌　（寫本）二卷

舊題「攝州名所舊蹟」と稱して攝津の名所に關する和歌を拾集し、中に就て兵庫須磨間のもの多し。慶安五年壬辰〔二三一二〕頃の記なるべし。

せつしやうけつきじつしゆうたあはせ

攝政家月十首歌合　一卷

建治元年乙亥〔一九三五〕九月十三日、十三夜晴、松月出山、月照籬菊、庭月聞蟲、旅雁叫月、月下擣衣、寄月忍戀、寄月忘戀、月前戀思、月前祝言の十題、各七番宛にて七十番、則任、道雲、則雅、隆博、教顯、顯綱、重經、邦長其の他等の作なり。「群書類從」卷二百〇三、和歌部第五十八に收む。

せつしゆによらいえんぎだんそう

攝取如來緣起談藪　（寫本）二卷

平安城東、雲居寺なる攝取阿彌陀尊の緣起を更に考證註釋したるものなり。

せつじよれいぞく

節序禮俗　（寫本）三卷　藤　良山

俗間に於ける歲時の事を記し、禮制を交へ記したるもの。數百書を抄出して成せりといふ。孝明天皇の安政四年丁巳〔二五一七〕の作なり。著者藤良山は掃塵書屋と號す。今其の詳傳を得ず。

せつせいりくかしせう

攝西六家詩抄　六卷　墨香

筱崎小竹、廣瀨淡窓、草場佩川、後藤松陰、廣瀨旭莊、坂井虎山、以上六人の詩を集めたるもの。嘉永二年己酉〔二五〇九〕安積信の序、奧野純の跋を附して出版す。

◉墨香は大阪の書肆なり。後に「攝東七家詩鈔」七卷を著して本書に相對せり。

せつせいりくかしひやう

浙西六家詩評　三卷　賴　襄

樊榭徵君、海珊刺史、穀原比部、蘀石宗伯、隨園太史、穀人司成の詩數十首を抄出して評點したるものなり。嘉永二年己酉〔二五〇九〕篠崎弼の序、後藤機の跋あり。

◉賴襄の傳は「日本外史」の下にあり。

せつせいげんかい

攝生俚言解　四卷　原　省庵

此の書は一名「俗說正誤衣光璧」の下に解題せり。

せつせんあんご

接鮮瘖語　（寫本）二卷　松崎　復

文化八年辛未〔二四七一〕朝鮮の使臣來聘の時、著者林祭酒に從て應接したることあり。本書は當時贈答したる詩及び問答の筆語を集めたるものなり。

◉松崎復は肥後益城郡木倉村の儒者なり。名復と字し、退藏と稱し、慊堂また益城と號す。幼時父の命によりて僧となりしが、後儒學に志し、江戶に脫走して淺草稱念寺に依り、住職の資を以て昌平黌に入る事を得たり。數年の研瓚を積み、更に林述齋の家塾に學び、業遂に大成す。享和二年掛川藩の教授となり、嗣公立つに及びて益敬重し、大小の政事皆諮詢するに至る。後年肥後侯其の國民たるを以て、掛川侯に照會して呼還したれども、遂に其の義の二にすべからざるを陳じて應ぜず、後致仕して石經山房に隱遯す。弘化元年甲辰〔二五〇四〕四月歿す、年七十四。

せつせんじつろく

攝戰實錄　（寫本）六十二卷

豐臣秀吉の事績より、德川家康一生の事實を記載し、元和三年丁巳〔二二七七〕日光山の改葬に終れり。就中大阪冬夏の戰爭を旨と記せり。「駿府政事錄」「家忠日記」「東武實錄」その他の諸家記錄によりて撰述したるものなり。外に附錄八卷あり、大阪役の雜事を記し、別一卷の目錄を添ふ。凡て七十一卷を二十八册に作れり。寶曆二年〔二四一二〕著者の例言あれど、其の姓名を記さず。文章は最も俗に近けれど事實の記載方頗る據るべき者あり。

せつそう

說叢　（寫本）一卷　村田　了阿

烈風、榮花物語寫誤、一升餅、黑白二見、間不容髮、見鏡夫婦諍、多語者寫信、黑鳥浴、居所羊、宇治拾遺寫誤、竹取物語抄、壞憂等を簡略に考證したるものなり。

◉村田了阿の傳は「異域同事錄」の下にあり。

せつそくひやくしゆ

攝速百首　（寫本）四卷　大野　吉規

砲術諸法を和歌百首に詠出したるものにて、元祿五年壬申〔二三五二〕の記にかゝる。今見るところは大野武龍、一首每に詳細なる註解を加へたるものにて、四册に寫傳す。

せつだうえんゆうさう

雪堂燕遊草　一卷　瀨尾　維賢

「雪堂燕遊草」一卷は、琉球人程寵文といふもの、中華に使して、往還滯留の間に賦するところの詩草なり。林麟焻、陳元輔等の序あり。正德三年癸巳〔二三七三〕維賢訓點を附し、琉球考を附錄として、書肆の發行を助く。

◉瀨尾維賢の傳は「桑韓唱和塤篪集」の下にあり。

せつだうきかうぶんし

拙堂紀行文詩　八卷　齋藤　正謙

著者の紀行に關する文詩なり。門人中內惇の編次するところなり。卷一京華游錄、卷二同附錄、卷三客枕夢遊錄、卷四白衣漫吟、卷五濼泉餘草、卷六續濼泉餘草、卷七南游志、卷八同附錄等なり。明治二十五年壬辰〔二五五二〕門人三島毅の序を附して出版す。

◉齋藤正謙の傳は「伊勢國司記略」の下にあり。

せつだうぶんしふ

拙堂文集　六卷　齋藤　正謙

著者の漢文集なり。卷一に記五十二篇。卷二に記十二、書八、序二十一。卷三に序六十六、引五。卷四に策二、論十一、辨十五、說七、喩三。卷五に碑五、誌銘二十二、墓表六。卷六に傳三、贊八、銘七、文二、讀三、書後九、題三十、跋三十八、雜八。以上六卷三百五十四篇を收載す。門人中內惇の編輯するところなり。明治十四年辛巳〔二五四一〕出版せらる。

◉齋藤正謙の傳は「伊勢國司記略」の下にあり。

せつだうぶんわ

拙堂文話　十六卷　齋藤　正謙

我が邦に於ける漢文の淵源變遷を敍し、秦漢唐宋諸家の文體を論じ、時流文章上の通弊を指摘して更に其の準據すべき標範を指示したり。十六卷四册の中八卷二册「續文話」と表題す。文政十三年庚寅〔二四九〇〕の自序、同賴襄、古賀煜等の序あり。「續文話」には天保六年乙未〔二四九五〕の自序、同年門人土井有恪の跋あり。

◉齋藤正謙の傳は「伊勢國司記略」の下にあり。

せつちうあんらんせつぶんしふ

雪中庵嵐雪文集　一卷　服部　嵐雪

俳諧家嵐雪の遺文斷篇を集めたるもの。風韻の掬すべきもの少からず。裝遊稿、塔澤記、胡蝶記、虱をとる辨、若菜の序、式時序、兒箍序、其袋序、弔翁辭、唐の蚊讚、黑茶碗銘。以上十一篇を收む。孫弟子蓼太、後桃園天皇の安永三年甲午〔二四三四〕序を附して編輯出版す。

◉服部嵐雪は江戶有名の俳人。所謂雪門の祖なり。通稱を彥兵衞といふ。黃落庵、石中、與參堂、雪中庵、不白軒、嵐雪、玄峯等は其の號なり。もと淡路小榎並村に生れ、江戶に出でて新庄隱岐侯、井上相模侯等に仕へたりしが、後、仕を辭して芭蕉の門に入り、遂に俳名を以て名を顯す。著書には若水、其袋等あり、寶永四年丁亥〔二三六七〕十月十三日、五十四歲にて歿す。駒込常驗寺に葬れり。

せつつおほさかゑづ

攝津大阪畫圖　一鋪

「攝津大阪繪圖」と大同小異。恐くは同圖を飜刻せしものならむ。赤松九兵衞書肆の署名あり。

せつつおほさかおほゑづ

攝津大阪大繪圖　一鋪

追手口、御城代屋敷、並家來屋敷、京橋御定番屋敷、並家來屋敷、同心屋敷、玉造口御定番屋敷並家來屋敷、與力同心、並諸奉行屋敷、御代官屋敷、並手代屋敷、北組、南組天滿宮、其の他等を細圖せり。大阪の書肆野村長兵衞の藏版するところなり。

せつつおほさかづ

攝津大阪圖　一折

攝津大阪を着色圖にしたるもの。諸大家の屋邸家紋等をも記せり。圖傍に町々の竪橫間數を示し、又新地年記を擧げ、元祿元年戊辰〔二三四八〕堂島安治川開地より天明三年癸卯〔二四四三〕今橋西詰蜆島築地に至る。寛政元年己酉〔二四四九〕大阪に版刻したるものなり。

せつつこせきき

攝津古蹟記　（寫本）十一卷

一國十二郡〔能勢、有馬、島上、島下、豐島、川邊、武庫、菟原、八部、東成、西成、住吉〕を區別し、各神社佛閣、名勝舊蹟、道路山川を示し、古今の詩歌をも載せたり。十二郡を十一卷に作り。二冊に寫傳す。

せつつこせきき

攝津古蹟記　（寫本）一卷

攝津の神社佛閣に關する古蹟を雜記したる者也。

せつつし

攝津志　十三卷　並河（誠所）永

攝津國の地誌なり「日本輿地通志」畿內部六十一卷中第四十九卷より、六十一の卷に至る十三卷にて、享保二十年乙卯〔二三九五〕の出版にかゝる。以上四冊に版行す。

◉並河永の傳は「河內志」の下にあり。

せつつちかひでゆづりじやう

攝津親秀讓狀　一卷　攝津　親秀

曆應四年辛巳〔二〇〇一〕八月七日、總領能直以下一族、其の采邑を讓與するところの證券十六通を列記したるものなり。「群書類從」卷四百二十一、武家部第二十二にあり。著者攝津親秀は掃部頭と稱せり。今その詳傳を得ず。

せつつづかんかうもくたいせい

攝津圖鑑綱目大成　一鋪

「大阪圖鑑綱目」の內題なり。因て解題は同題名の下に揭げたり。

せつつのかみありつなけうたあはせ

攝津守有綱家歌合　一卷

承保二年乙卯〔一七三五〕八月二十日の歌合なり。風、霧、野花、鹿、雁、虫、戀等の題にて、作者は帶刀兼定、史大夫成時、兵衞大夫、縫殿助、帶刀教定、越後四郎、馬大夫賴淸、上總大夫惟淸、遠江前司、越後前司、馬允宗忠、兵部大輔等凡て七番の歌合なり。「群書類從」卷百八十二、和歌部第三十七に收む。

せつつのくにありましようけいづ

攝津國有馬勝景圖　一帖

攝津國有馬溫泉地の勝景を圖したること名の如し最も鮮明なり。攝州江東の人橘守國の圖する所にして、寛延二年己巳〔二四〇九〕浪華に版行せり。

せつつのくにありましようけいづ

攝津國有馬山勝景圖　一折　橘　守國

有馬山風景を圖說したるものにて、寛延二年己巳〔二四〇九〕大阪にて版す。浪華泉必東の題詞あり。

◉橘守國の傳記は「扶桑畫譜」の下にあり。

せつつのくにかちをでらえんぎ

攝津國勝尾寺緣起　（寫本）一卷　源　高國

攝津國豐島郡池田村の丑寅の方にある應頂山勝尾寺の緣起なり。永正十四年丁丑〔二一七七〕著者の奥書あり。

せつつのくにぐんいふし

攝津國郡邑志　（寫本）二卷

上卷に河邊郡、島上郡、島下郡の三部。下卷に豐島、有馬、矢田部、菟原、武庫、能勢、西成、東生、住吉の九郡を揭げ、各石高村數等を記せり。

せつつのくにすみよしじんじやしよじやくもくろく

攝津國住吉神社書籍目錄　（寫本）一卷

同社の藏書目にて和漢書、凡そ三百餘部を雜載す。

せつつのくにのき

攝津國記　（寫本）一卷

攝津國の住吉、東生、西成、島上、島下、豐島、河邊、武庫、菟原、矢田部、能勢、有馬の諸郡下には村名を註し。住吉郡堺北之莊。島上郡高槻、富田。島下郡茨木。豐島郡池田。河邊郡小濱、伊丹。武庫郡西宮。矢田部郡兵庫。有馬郡湯山等は町名を註せり。享保二十年乙卯〔二三九五〕東生赤川村久保宜の奥書あり。

せつつのくにめいしよおほゑづ

攝津國名所大繪圖　一折

攝津國社寺、山川、古蹟等を着色圖したるものなり。著者の氏名をあらはさず「嵜竹堂光濟」と記せり。寛延元年戊辰〔二四〇八〕京都に版刻したるものなり。

せつつふどき

攝津風土記　（寫本）一卷

日本總國風土記第十八にて、攝津の內、僅に有馬一郡を存せり。嘉慶二年戊辰〔二〇四八〕藤原元隆の奥書、享保十二年丁未〔二三八七〕多田政仲の奥書等あり。

せつつめいしよづゑ

攝津名所圖繪　九卷　秋里　湘夕

攝津全國の名所を悉皆圖繪したるもの。卷一に住吉郡。卷二、三に東生郡、西成郡。卷四上下に大阪部。卷五に島下郡、島上郡。卷六上下に豐島郡河邊郡。卷七に武庫郡、菟原郡。卷八上下に矢田部郡、卷九に有馬郡、能勢郡等にて寺社の細描は竹原春朝齋〔信繁〕の筆に成る。凡て九卷十二冊に作らる。寛政六年甲寅〔二四五四〕中山前大納言愛親の序、同十年戊午の自跋あり。

◉秋里湘夕の傳は「近江名所圖會」の下にあり。

せつとうしちかしせう

攝東七家詩鈔　七卷　墨　香

菊池五山、安積艮齋、野田笛浦、大槻磐溪、齋藤拙堂、梁川星巖、中島棕隱、以上七家の詩を編輯す。嘉永二年己酉〔二五〇九〕篠崎弼の序を附して出版す。本書は「攝西六家詩鈔」と相對して共に其の編輯するところなり。

◉墨香のことは「攝西六家詩鈔」の下にあり。

せつはふめいげんろん

說法明眼論　二卷

佛敎の敎旨儀式及び佛僧の心得等に就て記述したるもの。其の作者に關しては、本書に略記して「優婆塞童圓通述」と云ひ、眞定の「說法明眼論端書」には「聖德太子前生在二南岳一時住二圓通院一故云二圓通一」と註し、亮典の「說法明眼論鈔」にも太子十七歲の作なるべしと云ひ又「聖皇本紀」にも用明天皇の二年丁未〔一二四七〕の紀に太子が「說法明眼論」を作られしことを記せども、本書が果して太子の眞製なりや否や、評家の之れを疑議するもの多し。然れども假令後人の僞作なりとするも、猶一讀の價値あることまた評家の許す所なり。本書の註解には前記二書の外、「評註頭書說法明眼論」二卷、了海の「說法明眼論大疏」六卷、丹諭の「說法明眼論添削鈔」三卷等あり。

せつぱふようかしふ

說法用歌集　十卷

撰集、家集、物語等より、佛教無常に關する和歌を撰集して、說法の引用等に充てたるものなり。本書を諺註したるものあり、次に揭ぐ。

せつぱふようかしふげんちう

說法用歌集諺註　十卷　坂內　直賴

釋教無常等に關する和歌を輯集したる「說法用歌集」に諺註を加へたるものなり。元祿四年辛未〔二三五一〕の自跋あり。

◉坂內直賴の傳は「山城四季物語」の下にあり。

せつぱふわうじやうでん

說法往生傳　三卷　僧　龍淵

此の書は一名「遂懷往生傳」の下に解題したり。

せつやうえうけつ

攝養要決　二十卷　物部　廣泉

此の書は養成衞生の要を記述したるものなり。

◉物部廣泉は伊豫國風早郡に生れ、後京に住せり、醫を以て朝に仕へ、醫博士兼典藥允となり、侍醫に選り、伊豫讃岐掾、次侍從等に累遷し、貞觀の初め從五位下に敍せられ、參河權守內藥正、侍醫たり。夙に醫術方書に精しく、又能く養生せり。本書は理論經驗等を表示せるものなり。年七十六にて歿す。

せつやうぐんだん

攝陽群談　十七卷　岡田　徯志

攝津國の地誌的事實を詳載したるもの。卷一、二に攝津國綱領。卷三に山、瀧、岡、川の部。卷四に池、沼、澤、瀨、浦の部。卷五に濟、潟、島の部。卷六に江、

湊、津。卷七に橋、濟。卷八に野、原、田、湯。卷九に里、塚、陵、城。卷十に歷世の都地古宮、古地舊居。卷十一に神社。卷十二、十三、十四、十五に寺院。卷十六に名物土產。卷十七に徵據して記せり。自序及元祿十一年戊寅昌平黌の學職菊地新三郎の序、同十四年高岡旋谷の跋あり。同年出版す。

◎岡田徯志は攝津の人にして、陸助と稱し、攝西陳人と號せり。

せつやうさわ

攝養茶話　（寫本）一卷　伊藤　弼

衞生保養に關する雜話なり。和漢の古書を引證して、多く道德的に心性的に、長命延壽の法を說けるが、自ら生理的に肯綮を得るもの少からず。天保八年丁酉〔二四九七〕の自序、修齡舍の序、伊東明庸の跋、及び同九年中山石潤の序、同十年太田敦の序等あり。蓋し本書は其の版下寫本のまゝなり。

せつやかんだん

雪夜閑談　（寫本）二卷

江戶時代に於ける諸將士の逸話を記述したるもの。京極水野兩將於旅中喧嘩之事、家光公御上洛進酒井宗印發明の事、葉室大納言勅勘並冷泉家秀歌の事、赤山百姓宗兵衞名玉所持の事、柴田家にて味噌を漉ざる事、奧州岩城の百姓一揆の事、島津家平戶領にて鎚を不立事、宗匠青峨隱里に往く事、以下二十餘目につきて記せり。

せつやせいわ

雪夜清話　一卷　青山　延光

赤穗義士に關する雜話を假名書にしたるものなり。慶應二年丙寅〔二五二六〕男延年の序、同三年弟延壽の序あり。

◎青山延光の傳は「赤穗四十七士傳」の下にあり。

せつようしふ

節用集　（寫本）二卷　林　宗二

日用の熟語諸文字を列擧して註釋したるもの。天地、時候、人倫、人名、官名、支體、財寶、食服、草木、畜類、光粉、言語、數量等の十三門に分類し、末に壹貳參より、萬億に至る數字、干支、律呂の名義を擧げ、點畫近の文字を擧げて區別せり。明應五年丙辰〔二一五六〕の作なるべしといふ。

◎林宗二は南都の饅頭屋にして、名を逸といふ。嘗て「源氏物語」を牡丹花肖柏より傳へられて、「源氏林逸抄」五十四卷を作り、「古今集奈良傳授」も本人の傳ふるところなりといふ。

せつようしふかう

節用集考　（寫本）一卷　黑川　春村

慶長以前に於ける「節用集」の來歷に就きて、最も詳細に考論したるものなり。

◎黑川春村は「神名帳考證土代附考」の下に傳す。

せつようしふくわつじぼん

節用集活字本　二卷　林　宗二

慶長二年丁酉〔二二五七〕の奧書を附したるを活版に附したるものなり。其の內容は、前揭「節用集」に收むるところに同じ。

◎林宗二の傳は「節用集」の下にあり。

せつようしふらんこくまんぢうやぼん

節用集卵刻饅頭屋本　一卷

林宗二の「節用集」を增減して出版したるものなり。何人の所爲なるかを知らず。

せつろうしせう

雪樓詩抄　三卷　中島　漁

上卷に古題類、節序類、春日類、夏日類、秋日類、冬日類。中卷に詠物類、遊覽類、行旅類、送別類。下卷に慶賀類、弔哭類、寄贈類、次答類、文會類、侍宴類等に類排し、凡て四百七十二首を收めたり。寬政十一年己未〔二四五九〕の自序、同十二年皆川愿の序あり。門人石轍の編輯版刻するところなり。

◎中島漁は丹波の人。潛史と字し、雪樓と號す。岡白駒に就て儒を修め業成りて京に塾を設け、後龜山侯に仕へて儒官となれり。

ぜてんだう

是天道　一册　菅谷　高政

著者の俳諧集なり。延寶八年庚申〔二三四〇〕七月下旬の編述にかゝる。

◎菅谷高政は京の人。宗因門の俳人にして、守武の風を唱へたり。著書は本書の外に、誹林三百韻、綸合同後集、中庸姿、芝居破、破邪顯正、賴政三人片輪等あり。

せとのあけぼの

せとの曙　三册　定　直

著者の俳諧集なり。備前六歌仙のなも一札添へたり。版行の年月を記さゞれど、延寶のものなるべし。

◎定直のことは「卯月まで」の下にあり。

せふぬきがき

世譜拔書　一卷　僧　藏六

慧日、虎關等の編輯書に基きて、禪宗諸祖の系譜を拔書したるものなり。明曆元年乙未〔二三一五〕沙彌藏六の自序あり。

せほんせいご

世本正誤　（寫本）五卷　多田　義則

太平記その他の誤謬を訂正考證したるものなり。自序あれど年月を記さず。

せみのをがは

蟬の小川　一册　齋藤　晚翠

著者の俳句集なり。元祿年中の作なるべし。

◎齋藤晚翠は備前の俳人にして、別號を紅白堂と稱す。初め貞直の門に入り、後、如泉の弟子となる。

せみのをがは

瀨見小河　（寫本）四卷　伴　信友

賀茂社の緣起を考證したるもの。「石川や瀨見の小川の淸かれと、みよをまもりの賀茂の神社」とよめる歌によりて本書の題名を成せり。凡例に「賀茂の大神たちの古事の考は專ら賀茂緣起、賀茂舊記、山城風土記等を表章し、秦氏本系帳を校へ合せ、古事記、日本書紀、姓氏錄、延喜式その外古書どもに見あたりたる限りを考證して、其の故實を註せるなり」云々とあり。文政四年辛巳〔二四八一〕の自序を附す。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

せめかたのしよ

責方之書　（寫本）一卷

御馬の故實法則を記したるものなり。責方、乘樣、直方等の注意數項を記載す。

せめてぐさ

慭遣草　（寫本）四十七卷　近藤　忠質

將軍家、三家、武家執役、若年寄、大老、老中、所司代、城代、三奉行、大目付、譜代大名、旗本、外樣その他等の由來事績等を記述したるものなり。每項其の根據の書名を揭示す。

せわしなぐさ

世話支那草　二卷

上卷を言葉部とし、下卷を諺部として、出所を明らかにして、精しく其の義を解したるもの。寬文三年癸卯〔二三二三〕の自序あれど、其の名を明記せず。只「松浦の某、學で思へる軒にしるす」とあり。

せわしふぶんき

世話集聞記　（寫本）八册　本多　四郎

文久三年癸亥〔二五二三〕より、慶應二年丙寅〔二五二六〕に至る日記なり。會津藩記多し第一册は文久三年正月より同年四月に至り、第二册は同五月より八月に至り、〔九月より十二月まで闕脫〕、第三册は同四年正月より四月に至り、〔五月より八月まで闕九月改元〕、第四册に元治元年甲子〔二五二四〕九月、第五册に同十月、十一月、第六册に同十二月、第七册に同二年正月より閏五月に至り、〔六月より十二月まで闕〕、第八册に慶應二年丙寅〔二五二六〕正月より同五月に至り、〔六月より十二月まで闕〕以上の日記を著者の兄小野權之丞の所藏について寫本するところによる。著者本多四郎は會津藩の人なり。今其の詳傳を得ず。

せわづくし

世話盡　五卷　僧　皆虛

俳諧に關する諸注意を記したるもの。其の目を擧ぐれば、卷一四季神祇、釋教、戀、述懷、旅、俳諧、酒宴、碁、蹴鞠等の話。卷二に曳語、消息、市の話。卷三に以呂波寄。卷四に體用の事、附句嫌物、打越嫌物、二句嫌物、三句去物、五句隔物、七句隔物、面嫌物、折嫌物、句數の事、俳諧制法の事、切字の事、賦物の事、俳諧和漢の事。卷五に回文詞、發句帳、付句、歌仙千句等なり。承應三年甲午〔二三一四〕の作なり。自序跋あり、明曆二年丙申〔二三一六〕出版。本書の五卷の中「世話燒草」と表題せるもあり。

◎皆虛は土佐國圓滿寺の僧にして本號を空願といへり。皆虛は假戲名なり。著書は本書の外に、「四書集」六册あり。

せわまんじもん

世話萬字文　一卷　和田　耕齋

往復尺牘用の文言より、萬民の作業人事に關して用ふべき日用一切の世話字を集めたるものなり。

せわやきぐさ

世話燒草　五卷　僧　皆虛

此の書は普通名たる「世話盡」の下に解題せり。

ぜんあくはうきやう

善惡報鏡　一卷　清水　春齋

心學說に基きて善惡應報を說きたるものなり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕出版す。

◉清水春齋のことは「三道一致心學辨」の下にあり

ぜんあんずゐひつ

善庵隨筆　二卷　朝川　鼎

著者の見聞隨筆にて、將棊王將、爛柯故事、鵜、熊經、十二月水名、拜賀その他凡て四十三項雜多の事を記載す。多く考證的に記されたり。門人等の編輯校正するところにて嘉永三年庚戌〔二五一〇〕出版

◉朝川鼎の傳は「仁義略記」の下にあり。

ぜんうたあはせ

撰歌合　一卷

建仁元年辛酉〔一八六一〕八月十五夜、月多秋友、月前松風、月花搗衣、海邊秋月、湖上月明、古寺殘月、深山曉月、野月露涼、田家見月、河月似水の題にて、釋阿、俊成女、有家、寂蓮、家長、長明、秀能、その他等の作、凡て五十番あり。「群書類從」卷百九十二、和歌部第四十七に收む。

ぜんえうもくろくのまき

撰要目錄卷　（寫本）一卷　僧　明空

宴曲の集歌を撰定したるものなり。後伏見院の正安三年辛丑〔一九六一〕八月上旬撰錄す。「續群書類從」卷五百五十四、遊戲部第四に收めたり。

◉明空のことは「郢曲撰要」の下にあり。

ぜんゑしやうにんりやくでん

善慧上人略傳　一卷　僧　鐵空

法然上人の弟子善慧〔證空とも號す〕の略傳なり。末に延寶年中の作なる鐵空の「三鈷寺記」を附す。

ぜんえつしふ

禪悅集　四卷　僧　月潭

著者の詩文集なり。元祿六年癸酉〔二三五三〕の自跋、延寶二年甲寅〔二三三四〕僧高泉の序あり。四卷二冊に版行す。

◉月潭は道徵と字し、峨山と號す。別著に「月潭禪師心華剩錄」あり。

ぜんゑんくわつつう

（算法）尖圓豁通　二卷　桑本　正明

圓理の自設自答にして術文を附したる算題集なり。全卷尖圓の問題のみにして一も他題を雜へず。他の雜題は附錄に於てこれを記載せり。尖圓とは俗に言へる寶珠形なり。安政二年乙卯〔二五一五〕出版す。

◉桑本正明は才次郎と稱す。石洲津和野の藩士にして内田五觀の門人なり。

ぜんかいせう

禪戒鈔　一卷　僧　萬仭

佛祖正傳の禪戒を衍述したるものなり。寶曆八年戊寅〔二四一八〕の自序あり。著者萬仭は道坦と字す。野州寶積寺の住職なり。

せんかうろく

踐好錄　（寫本）一卷　桂川　元廉

正德元年辛卯〔二三七一〕朝鮮信使來聘の始末を漢文にて記したるものなり。

せんがくじかきあげ

泉岳寺書上　（寫本）一卷

赤穗の遺臣四十六士の復讐始末なり。當時高輪泉岳寺より、書き上げたるなり。中に吉良家臣の首請取書付もあり。

せんがげんゑもんぢきたん

千賀源右衛門直談　（寫本）一卷　千賀源右衛門

川中島合戰の事より、慶長五年關原役の前合渡川の戰に至る、戰話十餘條を記したるもの。卷尾に「寶永八年辛卯〔二三七一〕正月吉辰」とあり。

◉千賀源右衛門は酒井修理大夫の家臣にして、林家の門人なり。

ぜんかしはのけいづ

禪家四派の系圖　（寫本）一卷　隨流軒林光

禪宗四派の法嗣の系圖を記したる者なり。漢文にて記す。寬延二年己巳〔二四〇九〕梭窩の奥書あり。

ぜんかんれきしべん

前漢歷志辨　一卷　平田　篤胤

前漢の歷史に劉歆が引用せる「三統曆」及び「三統譜」の妄誕會にして、後世を狂惑せるものなりとて、其の杜撰を指摘考證したるものなり。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

せんきやう

扇鏡　（寫本）一卷　小笠原元長

犬追物故實を集書したるものにて、「扇鏡」の義は言詞を離れて書き顯すの意なりといふ。

◉小笠原元長の傳記は「犬追物日記」の下にあり。

せんきやういぶん

仙鏡異聞　（寫本）三卷　平田　篤胤

著者の隨筆。文政三年庚辰〔二四八〇〕四月、人の問によりて答へたるものなり。

◉平田篤胤の傳記は「古史傳」の下にあり。

せんぎよくるゐだいわかしふ

撰玉類題和歌集　十六卷　伯水堂梅風

敕撰集の體にならひて、「新題林和歌集」時代前後の歌にして、同正續集に遺漏せる歌を編輯したるもの。原書は「部類現葉和歌集」といへるを、後人が增減正誤して「撰玉類題和歌集」と改めたり。寬政年中に有賀長收校正す。

◉伯水堂梅風「新後明題和歌集」の下に傳す。

ぜんぎよふ

譱御譜　（寫本）一卷

弓馬故實の書にて、御術の諸式を圖說したるものなり。「弓馬叢集」の中に收む。

せんきんはう

千金方　一卷　多紀　元堅

漢法藥方に關する書なり。蓋し、天正年中の古本を訓點標註して版行したるものなり。天保三年壬辰〔二四九二〕元堅の序、同年松本孝彥の跋あり。

◉多紀元堅の傳は「傷寒廣要」の下にあり。

せんく

千句　一册　荒木田守武

著者の俳諧千句にて、天文九年庚子〔二二〇〇〕の編述にかゝる。

◉荒木田守武「荒木田守武句集」の下に傳す。

せんく

千句　一卷　岡本　胤友

大阪の宗存、立以、可玖等の俳諧千句にて、立圃、令德、令富等の加點したるものなり。

◉岡本胤友の傳記は「角柱」の下にあり。

せんぐうものがたり

遷宮物語　三卷　荒木田末偶（スヱトモ）

伊勢太神宮の寬政遷宮の始終を記せんとて、光格天皇の天明二年辛丑〔二四四一〕三月大宮造らす御使の命を蒙りし喜びより、山口の祭を始めて、寬政元年己酉〔二四四九〕十月一日の御遷宮の次第、敕使の參向將軍名代の參詣等詳記したる記事なり。荒木田經雅の序、本居宣長の序、寬政元年己酉〔二四四九〕十一月八日の自序等あり。著者荒木田末偶の傳は未だ詳ならず。

せんくづか

千句塚　一册　保　風

著者が俳句の集なり。東山天皇の寶永元年甲申〔二三六三〕京都にて出版せり。著者保風は備中の俳人なれど、その詳傳は知りがたし。

ぜんくわうじえんぎ

善光寺緣起　（寫本）四卷

信濃善光寺の緣起にして、第一〔當卷明天竺百濟利益〕、第二〔當卷明日本王順逆利益〕、第三〔當卷明善光善佐因緣〕、第四〔當卷總明善寺種々靈驗〕の四卷、皆漢文にて記せり。「續群書類從」卷八百十四上下、釋家部第九十九にあり。

ぜんくわうじきかう

善光寺紀行　一卷　僧　堯惠

寬正六年乙酉〔二一二五〕信州善光寺へ參詣したる時。同七月四日の途出より、同十七日歸鄕までの雅文日記なり。歌も多く詠み入れ、北國紀行を附錄とせり。「群書類從」卷三百三十六紀行部第十に收む。

◉堯惠の傳は「古今血脈抄」の下にあり。

ぜんくわうじしりやく

善光寺史略　（寫本）二卷　岩下　貞融

善光寺開基以來、慶長六年辛丑〔二二六一〕に至る同寺の歷史なり。數十書に考へ漢文にて記す。

◉岩下貞融の傳記は「天ノ八衢」の下にあり。

ぜんくわうじとびはしらのき

善光寺飛柱記　一卷　僧　虎關

仙覚抄 1854

正和三年甲寅〔一九七四〕信州善光寺燒失し、其の翌年再建せんとするにあたりて、其の柱とすべきもの、飛來したりと云ふ奇瑞の由を筆記したるものなり。

◉虎關の傳は「海藏略韻」の下にあり。

ぜんくわうじによらいいせつけつせい

善光寺如來異說決正　一卷　僧　諦忍

信州善光寺の本尊を阿彌陀佛なりといひ、釋迦如來なりといふ兩說ありしを、著者本書を著して兩說ともに妨げなしと論斷したるなり。安永六年丁酉〔二四三七〕七月の作にかゝる。

◉諦忍の傳は「大光普照集」の下にあり。

ぜんくわうじべつたうでんりやく

善光寺別當傳略　（本寫）一卷　岩下　貞融

日本書紀以下の諸書によりて、同別當歷代の傳記を輯述せり。皆漢文にて記す。

◉岩下貞融の傳記は「天ノ八衢」の下にあり。

ぜんくわうじほんぞんかう

善光寺本尊考　（本寫）一卷　屋代　弘賢

信州善光寺の本尊を考證したるもの。享和三年癸亥〔二四六三〕善光寺本尊江戶淺草寺にて開帳ありし時、太田覃が「成事不說」を著して其の本尊の考證に關する事を發表したるを、著者更に其遺漏を補はん爲め本書を著はしたる也。最初、如來は彌陀三尊にて釋迦ならぬ事、佛體は金銅にして閻浮檀金にはあらざる事、印相の事、百濟より渡來の年紀、信濃國に移したる年紀、信濃國に護送せし人、地名の事、四號の事、六部の緣起の事等を辨し、更に、扶桑略記、一代要記、帝王編年記、決定往生集、雜記集、平家物語、同異本、源平盛衰記、吾妻鏡、玉葉集、風雅集、和漢三才圖會、善光寺紀行、北國紀行、新編分類、本朝年代記、豐臣家譜、甲斐名勝志、舜舊記、豐太閤譜書、越遊行選抄、大勸進答書、以上二十一書に記述せる要文を揭記せり。太田南畝の跋を附す。

◉屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

ぜんくわうじみちめいしよづゑ

善光寺道名所圖會　五卷　豐田　利忠

信州善光寺參詣の途次なる名所を記したるもの。洗馬驛の分街より、桔梗ヶ原を松本へかゝり、善光寺へ詣うで、追分驛に到る。其の間の名所、古蹟、神社、佛閣を載せ、驛每に一圖を冠らしめて行程をも記せり。要するに左右三里に過ぎず信濃一國の內を出づることなし。天保十四年癸卯〔二五〇三〕の自序、同十五年深田精一の序あり。著者豐田利忠は庸園と號す、濃陽今尾藩の人なり。

ぜんくわおうでん

剪花翁傳　五卷　中山　雄平

植物の溫室、冷窖、升水、藥水等の諸方、及び肥料、培養、下種、分栽、接揷法等を記せり。浪花に剪花翁といふ賣花翁あり、著者就て剪花保三月の事等を聞きて筆錄したるものなりといふ。五卷を春夏秋冬四季の四冊に分ち、各冊に各季節のものを撰び舉げたり。弘化四年丁未〔二五〇七〕友人剛齋古矢知白の序あり。嘉永四年辛亥〔二五一一〕の出版にかゝる。著者中山雄平は紀州の人にして水竹亭と號せり。

せんぐんきゝがき

船軍聞書　（本寫）一卷

潮の滿干より始めて、船軍法の大略を記述す。卷末に明和三年丙戌〔二四二六〕四月、傳授する由奧書あれど、其の姓名を記さず。

せんげあん

宣下案　（本寫）二卷

後土御門天皇の文明十六年甲辰〔二一四四〕以下、延德明應間に至る宣下文案數十通を輯錄したるものなり。中御門黃門宣順卿に請ひて寫せる由前亞槐經房の奧書あり。

せんけいばんづしき

占景盤圖式　二卷　愛　山

天然の景色を盤中に作成したるものゝ圖式なり。占景は盤中に天景を占有するの意、縮景盤ともいふべきものなり。著者の父武禪といふ人、此の技に獨特の妙を得て、一時世に稱揚せられ、其の作成凡そ一百餘筒に及び、其の遺風漸く流行するに從ひて、同人の作及び同社中人々の制等三十餘を圖し、更に其の製作法及び其の材料等を附記したり。文政九年丙戌〔二四八六〕篠崎弼の序、滕忠孝の序及び愛山の跋あり。同年出版す。

せんげせう

宣下抄　（本寫）一卷

古來の宣下の目錄なり。外記、辨官等より、大辨、近衞等に關する宣下表目なり。

せんげつえいわしふ

仙月影和集　一卷

齋藤拙堂、鷹羽雲淙、龍三五。以上三氏の詩なり。安政元年甲寅〔二五一四〕及び同二年等のを輯めたり。凡て長短十數首あり。

せんけりうちやじでんしよ

千家流茶事傳書　（本寫）一卷

茶事に關する規式故事等を記述圖說したるものなり。小本一冊に寫す。

ぜんけんこじつ

前賢故實　二十卷　菊池　武保

神武天皇の朝より、後村上天皇の御世に至る古賢者の圖像なり。上王公より、下庶民婦女に至るまで、凡て賢德を以て知られたるもの數百人を圖出し、各小傳を附記せり。圖は最も時代に則り、衣服弓箭の制度等よく區別せること他に比類稀なりといふ。天保七年丙申〔二四九六〕の自序、及び一二家の序あり。

◉菊池武保は甚平と稱し、容齋と號す。幼より好みて書を讀み、年十八にして高田圓乘に就き狩野派の畫を學び、精研して遂に一家をなし、有職衣冠の人物、山水花鳥等皆神に迫る。本書「前賢古實」は可美手命に始りて細川賴之に終る賢相良將忠臣烈士百餘人を畫き、關白の手を經て孝明天皇に獻じたるものなり。今上天皇また其の畫を嘉稱して日本畫史の稱號を賜ひきといふ。其の畫くところを米國博覽會及び內國博覽會等に出して每に褒賞を受けたり。著すところは「枕紙」七卷、「詩集」一卷、「歌集」二卷等あり。明治十一年戊寅〔二五三八〕六月十六日、九十一歲にて歿す。

せんげんせう

仙源抄　（本寫）一卷　長慶院法皇

源氏物語の詞をいろは順に類聚して解釋したるもの。其の跋中にいはく、「弘和の初めの年三のあまりのなり〱長き夜の徒然もなぐさめ難く侍りしまゝに、光源氏の物語をとりて見るに、おぼつかなき事ども多かりしかば、古き釋どもを尋ねて見侍るに、何れも簡要は少く枝葉は多し。又同釋とも所所にありて、開き見るに煩ひあり。これによりて、水源抄五十餘卷、紫明抄十二卷、源中最祕抄二卷の中、古人の解釋よりはじめて、何なきり辭をさすに至るまで、一ふしある事を殘さず、また定家卿自筆の本に比較して相違のことを考へつゝ、同じ文字なる詞をいろはの次第にあつめ、とゝのへ見れば五十餘帖只一帖に止り、文字のついでを尋ぬれば、掌を指すが如し」云々とあり。其の梗概を知るべし。

◉長慶院法皇は、御名寬成、後村上帝の太子にして禪を受けて南朝の帝となり、在位五年にして、弟熙成に讓位し給ふ。

せんげんそうしよ

先彥叢書　（本寫）一卷

「本多平八郎聞書」、「安藤帶刀物語覺書」、「水野左近物語」〔男平右衛門記之〕、「朝鮮南大門合戰記」、「吉野甚右衛門記」等を輯收す。文祿慶長間の事實雜記に係る。

せんけんづざう

先賢圖像　（本寫）一卷

高野大師、眞雅、宗叡、源仁、以下若干の僧像に小傳を附したるものなり。撰者を詳にせず。

せんこうのまき

戰功卷　二卷　加藤　莚屋

軍中心得、御戰鬪法、先登、殿等の條々を記述し、往往上欄に家康感狀の寫しを揭げたり。延寶八年庚申〔二三四〇〕の自跋あり。本書或は「武功物語」ともいふ。著者加藤莚屋は洛陽の人にして奧村莚屋とも記せり。

せんこうのまき

戰功之卷　（本寫）一卷

壹番鎗之事、以下軍法を破り逆心同前に被仰付事に至る三十八條、軍中に於て利を得、功を收むる諸法を記す。明和八年〔二四三一〕寫本の奧書あり。

せんこうばんし

千紅萬紫　一卷　太田　覃

自家の狂歌二百餘を集めたるもの。狂詩狂文をも交へたり。文化十四年丁丑〔二四七七〕の後序あり。江戶にて出版す。

◉太田覃の傳は「南畝叢書」の下にあり。

ぜんこうへうく

戰功標矩　（寫本）三十卷　佐久間高常

古今の戰爭を記して、其の戰法の取るべきものを示したるもの。戰數百九十八條、取る所の法八百〇七件、戰地の圖二百五十あり。凡例に「此の書上古よりの合戰を悉く載るに非ず、只兵法の爲めにするを以て、其の法の取るべきあれば之れを載す。是れを以て記傳の眞僞を正すに及ばず」また「此の書諸傳の中より抄出して、編をなすが故に毎條文章一體ならず、皆原本に隨ひて方言俗語と雖も改むることなし」と云へり。享保十二年丁未〔二三八七〕の自序あり。

◉佐久間高常の傳は「東遷基業」の下にあり。

ぜんごゑん

前後園　一册　池西　言水

俳句の集なり。元祿二年己巳〔二三四九〕の序あり。

◉池西言水の傳記は「東日記」の下にあり。

せんごくさくいどうかう

戰國策異同考　一卷　福井　大有

戰國策の異同を考究したること名の示すが如し。寶曆二年壬申〔二四一二〕の自序あり。著者福井大有は隱岐の漢學者なり。

せんごくさくかうちうほせい

戰國策高註補正　十卷　關　修齡

「戰國策」高誘の註本を補正したるもの。錯簡淆亂して解し難く讀み難きより、一々文義を考究して筆削是正す。正傳の補註を采て其の行間に標示す。寛政八年丙辰〔二四五六〕の自序及び長洲勝賢の序あり。十卷七册に作る。

◉關修齡の傳は「巡海錄」の下にあり。

せんごくさくせいかい

戰國策正解　十卷　横田　惟孝

戰國策を註解したるもの。一節一章毎に詳細に割註し、更に各章下に考異を附して諸本の異同を示したり。文政七年甲申〔二四八四〕の自序、同九年太田善世の序あり、同十二年十卷十三册に出版す。

せんごくさくつうかう

戰策國通考　八卷　戸崎　允明

戰國策の本文に評點を加へ、考註を入れたるもの。卷一に西周、東周、秦上。卷二に秦下。卷三に齊。卷四に楚、趙上。卷五に趙下。卷六に魏上。卷七に魏下、韓上。卷八に韓下、燕、宋、衞、中山。附錄に註解正誤あり。安永三年甲午〔二四三六〕常陽碕允明の自序、從四位侍從源賴寛の序、山本信有、東龜年の跋等あり。同六年八卷五册に版行す。

◉戸崎允明の傳記は「國語考」の下にあり。

せんごひやくでうだんたんかい

千五百條彈憚改　十卷　僧　義敎

延享三年丙寅〔二四〇六〕越中富山府海秀山仁諦院博善日芳といふもの「訶責謗法鈔」を著して、義敎等の「輪駁行藏錄」を破したるより、更に此の著を以て反駁す。寛延二年己巳〔二四〇九〕二月の作。本書十卷の外、別に緣起一卷あり。

◉義敎の傳は「淨土眞宗論客編」の下にあり。

せんごひやくばんうたあはせ

千五百番歌合　二十卷

土御門院の建仁元年辛酉〔一八六一〕の百首歌合なり。當代の名匠三十家の作にて、判者は後鳥羽院、後京極、慈鎭、忠良、釋阿定家、顯昭、季經、師光等にて卷により人を異にせり。

せんごふどきがいろんのろん

前後風土記概論之論　（寫本）一卷　中山　信名

伴信友の著作せる「前後風土記概論」〔東極雜記第四卷に收む〕を辨じたるもの。信友の論には、四箇國の風土記を前風土記といひ、總國風土記をも弘仁の頃になりたるものとして、後の風土記と名け、さて「前後風土記概論」を作りて論じたるが、中山信名は、四箇國の風土記をば只風土記殘編といひ、總國風土記をば僞風土記といひて、考證論駁したるなり。末に平祖衡の正德三年癸巳〔二三七三〕に作れる「辨日本總國風土記」の一編をも揭ぐ。本書「前後風土記概論之論」は文化十二年乙亥〔二四七五〕五月の稿なり。因に記す、伴信友も後に「總國風土記」の僞書なることを知りて「風土記」を作り論じ直せり。そは「比古婆衣」の中に收む。

◉中山信名の傳記は「墳墓考」の下にあり。

せんざいかく

千載佳句　（寫本）一卷　維　時

支那人の名詩を、四時部、時節部、天象部、地理部、人事部等の綱に分ち、更に細目を立てゝ一千數十首を輯めたるもの。白居易の詩五百七首、元稹の作六十五首、以下凡て百數十人の詩を集めたり。卷末に「或云本朝作在此中歟云々」、また「前江納言維時撰之云々」等の記あり。今見る所は正安二年庚子〔一九六〇〕前式部少輔藤原春範の本を以て校合したるものにかゝる。

せんざいずゐ

千載瑞　（寫本）一卷　平　嘉般

雜駁なる見聞錄なり。後桃園天皇の安永五年丙申〔二四三六〕冬に記せるの自序あり。

せんざいだうひやくかせんしふ

千載堂百歌仙集　五卷　丈　石

丈石が仙鶴、錬石、隆志、文虹、宮鈴、以下數十士と兩吟の俳句集なり。寛保三年癸亥〔二四〇三〕西川一四の漢文序、同年青楠園斧丸の序等あり。翌四年出版す。

◉丈石は俳人にして、宗順と字し、また千載堂と號す。別著に「長樂寺千句」あり。

せんさいひやくゑい

善齋百詠　二卷　渡邊　道一

著者の詩集。上卷に七言絶句一百首、下卷に五言絶句一百首を收めたり。光格天皇の天明八年戊申〔二四四八〕に記したる、源與晴の序、爽鳩允の序、及び自序等あり。

◉渡邊道一は善齋と號す。尾州の儒者にして、矢田部藩に仕ふ。

せんざいほんぎ

千載本紀　（寫本）二卷　依田　貞鎭

聖德太子の著と傳ふる「千載本紀」を註解したるもの。即ち推古天皇の三十年壬午〔一二八二〕より、後水尾天皇の元和七年辛酉〔二二八一〕に至る一千年の事實を豫想して記したるものなり。故に一名を「未然本紀」といへり。字句幽冥奇變にして通曉し難し。故に著者これを註すといふ。享保十三年戊申〔二三八八〕の自序跋あり。

◉依田貞鎭は通稱は五十嵐定右衞門なり。伊織と稱し、偏無爲居士と號す。明和元年甲申〔二四二四〕三月十七日歿す。〔或は萬治元年といふ〕年六十六、武藏國府中善明寺に葬れり。

せんざいわかしふ

千載和歌集　二十卷　藤原　俊成

後白河院の院宣によりて、文治四年戊申〔一八四八〕四月奏覽したる撰集なり。春上下、夏、秋上下、冬、別、旅、哀傷、賀、戀一、二、三、四、五。雜上中下、短歌、旋頭歌、物名等に部立して、歌數一千二百四首〔八雲御抄の計〕を收む。撰者の序中に、「後拾遺集に撰び殘されたる歌、上正曆の頃ひより、下文治の今に至るまでの大和歌を撰び上るべき仰言なんありける。彼の御時よりこのかた、年はふたもゝち餘りに及び、世はとつぎ餘りなゝ世になんなりにける。過にしかたも年久しく、今ゆくさきもはるかにとゞまらん爲め、此の集を名けて千載和歌集といふ」云々とあり。

◉藤原俊成の傳は「古來風體抄」の下に出づ。

せんざいわかしふるゐそ

千載和歌集類礎　（寫本）五卷　野田忠肅

千載和歌集の戀歌を其の同礎によりて列擧したるもの。第一册には初句、第二册は第二句、第三册は第三句、第四册は第四句、第五册には第五句を收め、各句皆いろは順に其の類礎の歌を擧げたるなり。著者は諱忠肅と記せり。

◉野田忠肅の傳は「柏傳」の下にあり。

せんさうかう

仙巢稿　三卷　僧　仙巢

著者の詩偶文の遺稿を、小千支方の編集したるものなり。慶安三年庚寅〔二三一〇〕支方の末記あり、同年出版す。

せんざうし

（俗間教誡）潛藏子　三卷　潛　藏　子

和漢の雜話を撰びて圖畫を插入して俗間童蒙の諭物としたるもの。卷上に年尼伯陽仲尼、烏も鳥鳳凰も鳥、弘誓のわたし舟、蕨菜で綿繡鐵、しきしまの道。卷中に座席の上の勤、疣で鯛との放、榮華は臥て待、某氏の詠歌、戀路の眞實、多生曠劫の緣。卷下に六藝の餘波、それ〳〵の樂、もろ〳〵の稽古、世は薄情、一條の本道。以上の目より成る。享保十六年辛亥〔二三九一〕の自序あり。著者潛藏子の姓名は詳ならず。

せんさうじえんぎ

淺草寺緣起　（寫本）一册

江戸淺草寺の緣起を記錄せるもの。全文六段に分れ、奥書に依るに、初、畫圖を添へたる緣起軸物六卷ありしを、一册に縮寫せしものなりといふ。慶安年間に記せしものなれども著者の名を記さず。

せんさうじくわんおんえんぎ

淺草寺觀音緣起　（寫本）一卷

元祿五年壬申〔二三五二〕淺草寺役人より書上の寫二通を合せたるもの。一通は本尊略緣起にして、一通は元祿五年觀音堂並に末社諸堂修繕して、遷座したる時の事を記したるものなり。

せんさうみやうれいせう

淺草名靈抄　一卷

江戸淺草寺觀世音の緣起由來を假名文にて記したるものなり。寛政三年辛亥〔二四五一〕淺草寺中專堂坊思然の閲して版するところなり。

せんさひつだん

仙槎筆譚　一卷　橘　元勳

著者朝鮮使と筆談したるものを版刻したる也。寛延元年戊辰〔二四〇八〕三英の序、服部甫の跋あり。

せんさんし

全讚志　七卷　中山　鷹

讚岐一國の全地誌なり。卷一を郡鄕志、都邑志、驛亭志とし。卷二を人物志。卷三を神祠志。卷四を佛廟志。卷五を古城志。卷六を名山志、名川志、坡地志、古冢志。卷七を名勝志、產物志となす。七卷十九册に作る。卷一より卷六までは漢文にて記し、卷七に至りて假名を交へたり。其の編輯法に就きては凡例に云へることあり、「此の編記するに華言を以てすと雖も、往々邦俗の言を用ふるものあり、要するに俗耳に入り易く、且事實を害するを惡むなり、神祠佛廟の如き收記するに遑あらず、苟も事由ある者は圓蕪遺趾と雖も之れを錄し、若し其の事なきものは巍然たる區域と雖も之れを記せず。城墟名勝の如きは犂して田と爲るもの少からず、其の漏るゝ所のもの必ず多からん、只聞見するところを記して以て他日を待つ。其の名勝の如きは歌章俳句多し、因て國辭を以て之れを記す。產物志の如きは多くは是れ土人誇土の言、聊記して以て他人の哄笑を博するのみ。山川及び地名の如きは一に俗稱に隨ふ、土人知り易きを要すればなり、古冢の如きは聞くまゝに之れを記し、以て父老の茶話に備ふるのみ」とあり、其の調査粗漏の點少からずと雖も讚岐地誌中にては最も參考に資すべきものなり。文政十一年戊子〔二四八八〕の自序及び赤澤道輔、藤澤甫の序あり。

◉中山鷹は讚岐國香川郡横井村〔今の池西村〕の人にして城山と號せり。藤原姓なるより、自修して滕と稱す。儀同三司中山孝親卿九世の孫なりといふ。今其の詳傳を得ず。

せんしうかしゐおもてかつせんしだいおぼえがき

泉州樫井表合戰次第覺書　（寫本）一卷

右合戰の次第を覺書して、寛永五年戊辰〔二二八八〕正月、龜田大隅高綱が、龜田善左衞門高成、同又太郎高連、同辰巳衞門家定に差出したるものなり。明治七年內務省の寫本による。

せんしうさいたくしあはせ

善秀才宅詩合　一卷

應和三年癸亥〔一六二三〕三月十九日、左茂能、藤政、橘能、藤賢、高岳、三二。右高俊、橘宣、茂興、源澄、高文、文傾にて、鶯啼春暮時、酒從花裡酌、紅霞間綠樹、風度殘花下、柳絮飄春雪、花鳥尙留春の題作なり。『群書類從』卷百三十四、文筆部第十三に收めたり。

せんしうし

泉州志　六卷　石橋　直之

和泉國の地誌。神祠は其の緣起を窺ひ、佛寺は其の遺編を檢し、古人の蹤跡はこれを前世の國書に稽し、題詠の名區はこれを歷代の歌集に訂し、加之軍志、家乘、稗說、俗諺、此の州に係るものは亦披羅採錄して參考に供へ、併せて自說を附して評論せりといふ。諸書は多く原文の儘に引用せり。元祿十三年庚辰〔二三六〇〕の自序、及び平安西峯山人〔林下見林〕の序、僧契沖の跋あり。同跋中に成書の由來を敍述せり。著者石橋直之は和泉の人にして、新左衞門と稱せり。

せんじせう

撰時鈔　二卷　僧　日蓮

佛教の弘まるべき時、佛教を學ふべき機根等の事を陳べて、法華宗は他宗の衰滅せし時までも盛え、法華經を信受する人は他經を信ずるものより勝ることなどを說き、念佛、禪、眞言等諸宗の教義及び宗徒を罵斥して、頻に法華宗を讚し、日蓮自身獨り佛教の極意を得たりと揚言せり。著者の面目字句の表に現れたり。『縮刷藏經』霜帙第十に收めらる。註釋に『撰時鈔見聞』三卷〔著者未詳〕あるよしなれども、未だ檢出する能はず。

◉日蓮の傳は『開目鈔』の下に在り。

せんじぞくかい

泉字俗解　（寫本）一卷

『周禮』『漢書』等によりて、泉字の義を詳釋したるものなり。泉、錢、寶また貨等の關係を論ず。

せんじふごばんうたあはせ

前十五番歌合　（寫本）一卷　藤原　公任

貫之、躬恒、素性法師、伊勢、在中將、遍昭僧正等の十五番歌合なり。

◉藤原公任の傳記は『北山抄』の上にあり。

せんじふさくしやいどうかう

撰集作者異同考　（寫本）一卷　僧　傳賢

內題には『代々撰集大臣諱名考』と記して、『古今和歌集』以下『風雅和歌集』に至る各集作者の諱名を明記し、更に大臣の同名考を末に添へたり。應安四年辛亥〔二〇三一〕の編輯にかゝる由奥書にあり。『續群書類從』卷四百五十三和歌部第八十八にあり。

せんじふせう

撰集抄　九卷　僧　西行

新古人の傳記行狀異蹟等を撰集したるもの。例せば第一に僧賀上人、親處分被押取、乞食法師惟返、伊勢長歌、座禪僧、越後國市老者、親院御墓白峯、行賀僧都耳切の事を揭げ、第二に壹和僧都、眞譽法眼、播磨國平野僧、花林院永玄僧正、雲林院法聽開發心、陸奥國平泉郡石塔、幡磨國谷尼僧、迎西上人の事等を載せ以下第九に至る。其の序中にも「新舊のかしこき蹟を選びもとめける言の葉を書き集め、選集抄と名けて座の右に置きて、一筋に智識に賴まんとなり。卷は九品の淨土に思ひて十に一をもらし、事は八十種好に思ひよそへて、百に二十を殘せり」云々といへり。壽永二年癸卯〔一八四三〕睦月下旬、讚州善通寺にありて作れりといふ。『續群書類從』卷九百五十三上中下本末の五册、雜部第百〇三にもあり。別に『西行撰集抄』として揭出したるものは、一種の異本なるべきか。

◉西行の傳は『山家集』の下にあり。

せんしふまんえふちよう

撰集萬葉徵　（寫本）四卷　田中　道麿

代々の撰集中に入れる『萬葉集』の歌を列擧して、明證したるもの。『萬葉集』の歌の撰集に入りたるは、『古今集』に十一首、『後撰集』に十七首、『拾遺集』に百二十二首、『新古今集』に五十八首、『新敕撰集』に五十七首、『續後撰集』に二十一首、『續古今集』に四十七首、『玉葉集』に八十一首、『續千載集』に十七首、『續後拾遺集』に三十二首、『風雅集』に五十六首、『新千載集』に三十首、『新拾遺集』に二十八首、『新後拾遺集』に五首、『新續古今集』に十首。以上五百九十二首なり。本書は各首本集の卷數を記し、本集と撰集のと違はざるもの、また違へるもの、本集に作者あるを、讀み人知らずとして採れるもの、又讀み人知らずを、明らかに讀み人を記して採れるもの、又兩書作者を異にせるもの等を、悉く考證せり。天明元年辛丑〔二四四一〕四月の奥書あり。

◉田中道麿は美濃の人にして、大阪に住す。庄兵衞と通稱し、榛木翁と號し、後剃髮して道全と號せり。賀茂眞淵の門に學びて、國學を研究し、頻りに萬葉の古風を主張せり。撰集萬葉徵、萬葉名所歌鈔、萬葉東語栞、萬葉集問答書、暗思鈔、榛木翁集等の著あり。天明四年甲辰〔二四四四〕十月四日、五十五にて歿す。

せんじもんかうしよう

千字文考證　一卷　高岡　實甫

周興嗣次韻の千字文を句々字々其の出據を尋ね解法を求め漢文にて考證す。寛政元年己酉〔二四四九〕澤元愷の序あり、翌庚戌歲出版す。

◉高岡實甫は實成といひ、また閑八と稱す。江戸の人なり。

せんじやうろく

全城錄　（寫本）二卷

日本全國の城居を記し、郡名、江戸よりの里程、築城の年時、或は轉移、討死、落城の年時、城主の名、所領高等を記せり。

せんしやくぶんごふどき

箋釋豐後風土記　一卷　唐橋　世濟

『豐後風土記』を箋釋したること名の示すが如し。著作の年時詳ならず。

◉唐橋世濟は江戸の人にして、一名を剛克、字を美

郷といひ君山と號せり。高閣亭に從て詩文に長ぜり。天明四年豐後岡侯召して侍醫とし祿二百石を與へて優遇す。また岡山に醫官を建てゝ君山を敎授に擢づ。君山經史詩文を講じて諄々子弟を敎ふ。幕府地志を編輯するに方りて、豐後國誌の編纂を命ぜらる。寛政十二年庚申〔二四六〇〕歿す、六十五

ぜんしやこうごしふ

前車後語集 （寫本）九卷

慶長前より、貞享の頃に至る將士の言行、盛衰事績等を輯錄す。就中廢家衰滅の條項多く、從て鑑戒の爲にとて「前車後語」の名をも與へたる者なるべし

ぜんしゆじこもんじよ

專修寺古文書 （寫本）一卷

下野國芳賀郡高田村の一向宗專修寺に所藏したりし古文書なり。文明九年丁酉〔二一三七〕より、明曆二年丙申〔二三一六〕までの綸旨數通、天正二年甲戌〔二二三四〕門跡號敕許の奉書、其の他數通の古文書を收む。

ぜんしゆぶるゐ

千首部類 一卷 小澤 玄中

宗良千首、耕雲千首、爲尹千首、宋雅千首、文明千首等を部類したるものなり。安永年中に自跋を加へて版行す。

⊙小澤玄中の傳は「袖中和歌六帖」の下にあり。

ぜんしゆるゐだい

千首類題 （寫本）二卷 尾崎 雅嘉

爲家千首、正徹千首、後水尾御撰千首、天文千首、慶長千首、元祿千首、貞享千首、享保千首、寛延千首等の歌を類題したるものなり。

⊙尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下に出づ。

ぜんしゆわか

千首和歌 （寫本）一卷 宗 良親王

春夏秋冬戀雜千首の詠歌集なり。中に「詠千首和歌」と題す。明正天皇の寛永十年癸酉〔二二九三〕光廣の奥書あり。

⊙宗良親王の傳記は「新葉和歌集」の下にあり。

ぜんしよ

饌書 一卷 羽倉 用九

魚鳥料理法を詳述したるものなり。凡例に曰く「此の編唯邦出を載せて海外の異產に及ばず、其の分つに四敍を以てするは時食を尙ぶなり。若し其の通歲賞すべきものは、姑く宜春單に附す」また「我が邦海鮮尤も饒く、尤も美なり、鯛眼、鯨鬣の如き八珍中恐くは其の比なし。首として出さゞるべからず、因て海鮮を以て江鮮に先んづ」とあり。本書は後に「養小錄」と改題にして行へり。

⊙羽介用九の傳は「簡堂叢書」の下にあり。

ぜんじよだいそうじやうき

禪助大僧正記 （寫本）一卷 僧 禪助

正應五年壬辰〔一九五二〕正月一箇月間の漢文日記なり。德治三年戊申〔一九六八〕閏八月二十六日大僧都禪擧寫本の奥書、文化三年丙寅〔二四六六〕塙保己一書寫の奥書等あり。

ぜんじるゐ

宣旨類 （寫本）一卷

諸社行幸事々、禁色、敕授、牛車、公事延引、天文密奏事、改姓改名、諸院宮中合爵、任官、造曆事、大嘗會檢校、補獎學院別當、橘氏是定、本座、恠異事諸社、東大寺寶藏開檢事等を揭げたり。皆年月を詳記せり。正保三年丙戌〔二三〇六〕また元祿七年甲戌〔二三五四〕等の寫本奥書あり。「續群書類從」卷三百〇六、公事部第五十九に收む。

ぜんじるゐがふ

千字類合 一卷 貝原 篤信

梁の周興嗣の千字文に代へて、韓人某の輯めたる千字類合を更に品彙を區別し、發端、乾坤、歲時、地理、菜草、植木、五穀、菜蔬、羽族、毛群、鱗蟲、人品、部邑、人倫、身體、居處、調度、貨財、食器、雜器、饌具服用、人事、物態の題名を標揭したるものなり。本文には音訓を附せり。元祿五年壬申〔二三五二〕の自序あり。

⊙貝原篤信の傳記は「自娛集」の下にあり。

ぜんしれいた

遷史戾枕 三卷 皆川 愿

司馬遷の作れる「史記」の列傳、本紀、世家等の中より抄出して評註したるものなり。男允の校刻するところなれど、其の年時を記さず。

⊙皆川愿の傳記は「淇園文集」の下にあり。

ぜんじん

全人 （寫本）一卷

修身成德の事に關する說明なり。あらゆる聖賢の格言事例等によりて、立志奮勵高位の人たるべきを敎へたる假名書なり。

ぜんじんさう

全人草 （寫本）一卷

これまた人道を分つべく、言行を愼謹して修身齊家の要を說きたるなり。

ぜんしんさんえうしふ

選鍼三要集 二卷 杉山 和一

鍼術の諸法を詳敍したるものなり。病により、時機に應じてそれ〳〵施術すべき事等を論述す。

⊙杉山和一の傳は「晉官紀談」の下にあり。

ぜんしんしやうにんでんゑせう

善信聖人傳繪鈔 三卷 僧 惠雲

覺如の著したる「親鸞聖人傳繪」を註解したるものなり。善信は親鸞の假名なり。慶安四年辛卯〔二三一一〕の作にかゝる。

ぜんしんせうざうぎよくせきざつし

先進繡像玉石雜志 九卷 栗原 信充

北畠親房以下、藤原爲子に至る先進者の肖像を摸寫し、其の小傳を揭げ、筆蹟遺物を摹寫す。賢否を撰ばず輯錄せるより、玉石雜志といへるなり。天保十四年癸卯〔二五〇三〕川田剛の序あり。本書には續編あり、次に揭ぐ。

⊙栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

ぜんしんせうざうぎよくせきざつしぞくへん

先進繡像玉石雜志續篇 五卷 栗原 信充

先著「先進繡像玉石雜志」につぎて、山本晴幸の像より、北條早雲の像に至れり。

⊙栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

ぜんしんだうしせう

善身堂詩鈔 （寫本）一卷 龜田 長興

著者の詩集にして、前刻に九十七首を補遺し、分て三百六十三首を收む。天保七年丙申〔二四九六〕孫毅の編輯するところにして、同人序及び淸水孝の同年跋あり。

⊙龜田長興の傳は「善身堂文集」の下にあり。

ぜんしんだうぶんしふ

善身堂文集 （寫本）八卷 龜田 長興

著者の漢文集なり。記論序說、その他各體數十編を雜載す。本書は類別排序して、刊行せるものあれど、目下得ること能はず、寫本によりて紹介す。

⊙龜田長興は江戶の人。字を穉龍といひ、鵬齋又善身堂と號す。桃園天皇の寶曆四年甲戌〔二四一四〕江戶に生れ、幼より學を好み、井上金峨に從ひて儒を學び、同門山本北山、原狂齋等と研磋講習して業成り名擧る。其著す所は本書の外に、論語撮解、大學私衡、審註蒙求、五經稽疑辨、律數解、中庸辨義、老壯摘解、國字考、候鯖一臠、北遊紀事、鵬齋居雜識、鵬翁詩鈔、善身堂一家言、善身堂詩集等あり。文政九年丙戌〔二四八六〕七十三にて歿す。

ぜんしんだうまんろく

善身堂漫錄 （寫本）三卷 龜田 長興

著者善身堂鵬齋の漢文漫筆なり。經傳史集の事、其の他等につき論說摘抄したるものなり。

⊙龜田長興の傳記は「善身堂文集」の下にあり。

ぜんしんどうさつき

洗心洞劄記 三卷 大鹽 後素

宋儒の語錄の體に倣ひて、道學、理學等の原理を論述したるもの。蓋し自學王陽明流の學理を主張發揮せるなり。三卷の中一卷は附錄にして、佐藤一齋外十六名家の著者へ贈りたる書牘侍序等を揭げたり。門人松本乾知、松浦誠之、但馬守約等の點校するところなり。天保四年癸巳〔二四九三〕の自序、同六年松本乾知の跋あり。

⊙大鹽後素は通稱を平八郞、字を子起といひ、後素は其號なり。少より學を好み、尤も王陽明の人となりを慕ひ、專ら其の學を硏究して、精通せり。大阪の與力となり、吏務に勵精し、町奉行高井某と相謀りて功を奏すること多く、其の名一時に聞えたり。後職を辭して、專ら諸生の敎授を事とす。天保八年丁酉〔二四九七〕米價騰貴して餓死するもの多きに方り、奉行に訴ふる所あれども聞かず、由て自ら其の財を散じて貧民を賑し、更に攝津、河內、和泉、播磨等に飛檄して貧民を煽動して亂を爲す。事成らずして自殺す。

ぜんしんものがたり

前親物語 （寫本）一卷 大河內 秀連

祖父政綱の偉績叔父政勝、政信等の逸話、其の他一族の行狀等を記したるものなり。寛文四年甲辰〔二三二四〕認めて、加々爪兵右衞門に贈るところなり

◉大河内秀連は大河内政綱〔德川賴宣に仕へ寛永四年丁卯〔二二八七〕二月歿〕の孫にして造酒充と稱す。父は茂左衞門秀元と稱し、慶長二年丁酉〔二二五七〕太田一吉に從ひ朝鮮に渡航し大功ありし人なり。著書は別に「大河内家記」あり。

せんすかう

扇子考　（寫本）一卷　大塚　嘉樹

扇子の各種を考論したるものにて、寛政八年丙辰〔二四五六〕六月の自記あり。

◉大塚嘉樹の傳記は「若梧隨筆」の下にあり。

せんせきし

禪籍志　二卷　僧　義諦

和漢の禪籍數百部を列擧して漢文にて其の略解を附したるもの。泉州佛花庵に住する比丘聖僕の序あり。正德六年丙申〔二三七六〕出版す。

せんせきろく

撰績錄　（寫本）一卷　藤原　康伴

宗祖從五位下左衞門忠治公の勳績を集成したるもの。多く軍記家乘等によりて其の精確なるを撰べりといふ。明和六年己丑〔二三二九〕の自序あり。侍臣多田守保、醫官宮田眞範、醫官八住恭伯等の校輯するところあり。

◉藤原康伴は近江國淡海膳所の人にして、從五位下たり、士游と號せり。今その詳傳を得す。

ぜんぜんたいへいき

前々太平記　二十二卷

聖武天皇の即位より、醍醐天皇の延喜年中に至る凡そ百七十餘年間の事を記せり。「前太平記」前の事實なるより「前々太平記」といへり。聖武帝の佛法皈依、「釋行基に仰せて諸國に國分寺を建て、南都に大佛建立、衣通姫を紀州に祭りて玉津島明神といふ。以下歷代の異事數百目を記載す。著者は延春山人橘墩と記せり。

せんそぶるゐせう

踐祚部類抄　（寫本）一卷

宇多天皇より、後光嚴天皇に至る歷代の御踐祚の日時儀式等を略記したるものなり。

せんそゆゐしよがき

先祖由緒書　（寫本）一卷　片桐又七郎

先祖片桐市正の由緒事績を記したるものなり。文政七年甲申〔二四八四〕、小柴研齋、寫して「見聞雜記」第二十八に收む。

せんだいきうでんろく

（政宗軍例）仙臺舊傳錄　（寫本）三卷　伊達　成實

別名を「政宗軍記」また「伊達成實記」と稱す。今見る所のものは、内閣文庫に、特別書として所藏せり。解題は「伊達成實記」の下に於てせり。

せんだいくじほんき

先代舊事本紀　十卷

此の書は一名「舊事紀」の下に解題したり。

せんだいくじほんき

先代舊事本紀　七十二卷　僧　潮音

一名を「大成經」といふ。聖德太子の「舊事本紀」なりとて、正部三十八卷、副部三十四卷共に僞撰したるものなり。本書は「國史大系」の第七卷にも收めたり。該書〔十卷〕は、中山繁樹が、度會延佳本を校訂上木せしものを原とし、紅葉山文庫本、前田家所藏安貞年間古寫本、其の他の異本を以て之を比校し、古事記、日本書紀、和名類聚鈔、新撰姓氏錄、國造本紀考などの諸書を參考したりといへり。

◉潮音の傳は「指月堂夜話」の下にあり。

せんだいけきじ

仙臺家紀事　（寫本）一册

仙臺藩古來の事實を記したるものなり。同藩士の手に成りしものなるべし。

せんだいじつそくし

仙臺實測志　（寫本）二卷　多植　茂蕃

享保十四年己酉〔二三八九〕以來、安永六年丁酉〔二四三七〕に至る仙臺の天文實測記なり。下卷は二十四氣實測の表なり。

せんだいせいしふはちやしじやうしよ

仙臺世子傳蜂屋氏上書　（寫本）一卷　蜂屋　可廣

仙臺世子の教育法等を詳細に具申したるものなり。寛政元年己酉〔二四四九〕の作なり。

◉蜂屋可廣は六左衞門と稱す。仙臺藩士にして廉直を以て知らる。原田甲斐の變起るに及び、伊達宗重の導をなして執政酒井邸に赴く。宗重甲斐對決の時に方りて、甲斐宗重を殺せしかば可廣、立ろに甲斐を斃す。酒井の士、可廣を兇者となし、これを斬る。可廣事の忽卒に出でたるを知り、毫も怨むとなく、自ら甲斐を斃したるを喜び、翌日遂に死す、年五十八。

せんだいはんかん

仙臺藩鑑　（寫本）三册

仙臺藩の御一門衆以下諸臣寺社等の姓名、知行、家紋、馬印等を列載したるものなり。

せんだいはんそじつろく

仙臺藩祖實錄　二卷　齋藤　馨

仙臺藩祖伊達政宗の一生實錄なり。全編漢文に記す。明治十四年諸家の序跋を添へて版刻す。

◉齋藤馨の傳記は「竹堂文鈔」の下にあり。

せんだいぶんげんちやう

仙臺分限帳　（寫本）一卷

仙臺諸士、一門、一家、一族衆等の領地高及び里程等を記せり。

せんたいへいき

前太平記　四十一卷　藤本　元

醍醐天皇の延喜七年丁卯〔一五六七〕より、近衞天皇の治世に至る凡そ二百四十餘年間の出來事を記せり。六孫王經基始めて源姓を賜はる事、妖鹿を射殺す事、相馬將門平親王と號し下總の國に内裏を營み關東を亂る事等以下數百項源氏代々の武功、諸國の變亂、群盜蜂起の始末等を記載す。享和三年癸亥〔二四六三〕の自序、同二年鼎山外史の漢文序あり。

せんだいへうかん

仙臺表鑑　（寫本）三卷

鎌倉の時、佐原義連、會津に封ぜられて子孫十八世を經、盛氏の時仙道白河悉く屬從し、後伊達氏興起せしことに至る四百年間の事實を記載したるものなり。

せんだいりやうちめいしよわか

仙臺領地名所和歌　一卷　藤原　吉村

從一位久我通誠、正二位廣幡豐忠、以下正五位烏丸光榮に至る二十名の古歌〔仙臺の名所を詠じたるもの〕二十首を輯めたるものなり。正德四年甲午〔二三七四〕の吉村の跋あり。著者藤原吉村は羽林中郞將藤原朝臣吉村と記せり。

せんたうししふ

錢塘詩集　二卷　僧　法閑

著者の詩集。卷上に古詩及び律詩、卷下に律詩、絕句を收む。卷中には天明八年戊申〔二四四八〕の詩あれど、寶曆四年甲戌〔二四一四〕江忠囿の序あるは、此の纂輯以前に撰びたるものなるべし。寛政四年壬子〔二四五二〕刊本となる。著者法閑は曾後の僧にして、同國廣圓寺の住職たり。

ぜんたうせいりつろん

全唐聲律論　二十五卷　谷　斗南

詩の格調聲律を論じたるものなり。專ら唐人の由來する所を論じて、明人の說を砭し、本邦後學を啓道せんために作れるなり。天保三年壬辰〔二四九二〕十月六日の自序及び同十年小山田與清の序、同九年谷立春の後序等あり。全編漢文にて、二十五卷八册に作る。

◉谷斗南の事は「唐宋元明變體僞集」の下にあり。

せんたくもの

洗濯物　六册　椋梨　一雪

著者の俳諧集にして、盤齋の序、西武の跋あり。寛文六年丙午〔二三二六〕二月編輯したるものなり。

◉椋梨一雪の傳記は「眉入奉公」の下にあり。

せんたついじ

先達遺事　（寫本）一册　稻葉　正信

山崎闇齋、佐藤直方、永田養庵、淺見絅齋、梨木祐之、野中兼山、三宅尙齋、僧時中、その他數人山崎門の人々を列擧し、其の氣韻行狀等を抄錄したるものなり。明和四年丁亥〔二四二七〕秋の序跋あり、同四年九月出版す。

◉稻葉正信は稻葉迂齋の子にして、默齋と號し、又三郞と稱す。享保十七年壬子〔二三九二〕に生れ、江戶にありて學術を修め後、下總に隱居す。著す所迂齋行實、墨水一滴、先達遺事等あり。寛政十一年己未〔二四五九〕六十八歲にて卒せり。

せんだんきうびもんだふ

栴檀鳩尾問答　（寫本）一卷　伊勢　貞丈

鎧の相引を覆ふ物の、左に鳩尾版を用ひ、右に栴檀版を用ふる事の由來故實を記したるもの。明和九年壬辰〔二四三二〕七月二十三日の作なり。

◉伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

せんだんずゐざうさんごくでんらいき

栴檀瑞像三國傳來記　一卷

山城國嵯峨五臺山清涼寺の本尊、釋迦如來栴檀瑞像の緣起を假名文に記したるものなり。內題には「釋迦如來栴檀瑞像記」といへり。版本なれど年月を記さず。

せんちうきじ

潛中紀事　六卷　清河　正明

著者の漢文漫錄なり。文久元年辛酉〔二五二一〕の夏より、翌年冬に至る潛匿中の日記なり。流離艱難の狀具錄して遺すものなし、詩序あり、上書あり、皆當年の事情を洞察するに足る。明治二十一年戊子〔二五四八〕活版に附す。

◉清河正明は羽前東田川郡清川村の人。通稱を八郞といひ、霞また樂水と號す。弱冠にして江戶に出で、憂國の士と相交り、尊攘を主張して遂に幕吏の爲めに捕はる。遁れて江戶に潛みたるも文久三年癸亥〔二五二三〕四月十三日赤羽根にて刺客の爲めに殺されたり。著書は、論語編、學庸論、文道編、兵鑑、及び潛中紀事等なり。明治二年朝廷其の忠志を嘉して祭粢料を賜ふ。

せんちうふ

千蟲譜　二卷　栗本　昌臧（マサヨシ）

有らゆる蟲類を圖譜したるものなり。蓋し本邦に於て蟲類を圖說したるものの、嚆矢なり。文化八年辛未〔二四七一〕の作にかゝる。

◉栗本昌臧は田村藍水の二男にして、母は江戶町醫田村宗宣儷豐（ヨシトヨ）の女なり。初の名を新次郞といひ、元東、元格、丹洲等の號あり。幕府の醫官となり、瑞仙院法印と稱し、また瑞見法眼と稱す。著書は本書の外に、栗本蔬圖、百鳥譜、皇和魚譜、丹洲七種考等あり。

せんちうもうぎう

箋註蒙求　三卷　岡　白駒

蒙求に頭註を加へたるものなり。文政十三年庚寅〔二四九〇〕黑田善の跋あり。

◉岡白駒の傳記は「皇朝儒臣傳」の下にあり。

せんちうもうぎうかうほん

箋註蒙求校本　三卷　佐々木　玷

前に揭げたる岡白駒の「箋註蒙求」を更に校訂版行したるものなり。

せんちうわみやうせうくんさん

箋註和名抄訓纂　一卷　森　立之

「箋註和名抄」の訓を、いろは順に列ねて、原書の所在丁數を揭げたるものなり。明治十九年丙戌〔二五四六〕出版せり。

◉森立之の傳は「臟腑和名攷」の下にあり。

せんちうわみやうるゐじゆせう

箋註倭名類聚抄　十卷　狩谷　望之

倭名類聚抄の原本異本二十餘種を校讐して其の誤謬を訂正し、箋註を加へたるものなり。

◉狩谷望之の傳は「古京遺文」の下にあり。

せんさ　んぱふ

淺致算法　一卷　平野　喜房

自設自答にして術文を附したる算題集なり。設問の法大率點竄法に依るべき形象問題なり。文久三年癸亥〔二五二三〕自序を附して出版す。

◉平野喜房は萬一郞と稱し、意山と號す。御粥安本の門人にして尾州侯に仕へたり。

せんぢやうひやくかでう

戰場百箇條　一卷

戰場に於ける要件百箇條の式法注意を記したるもの。安永二年癸巳〔二四三三〕六月、訂正者伊勢貞丈の奧書あり其の全文を擧ぐれば、「古戰場百箇條者乞多賀常政翁之藏本寫焉、未知何人所記也、蓋戰國老士之傳說乎。其緊要實用當信者也、比之於今世雜兵家之席上空說、則非同日之論矣」とあり。今見るところは寫本「竹中百箇條」といふ書と同じ。弘化四年丁未〔二五〇七〕赤井長發の序あり。

せんちやくしふかうぎ

撰擇集講義　五卷　僧　深勵

文化三年丙寅〔二四六六〕大學寮に於て講ずるところなり。明治十九年小栗栖香頂校閱版刻す。

◉深勵は龜洲又香月院と號す。深勵は諱なり。寬延二年己巳〔二四〇九〕越前に生れ、永臨寺に住し、幼より學を好み、宗乘に通ず。文化十四年丁丑〔二四七七〕七月八日、六十九にて入寂す。著書數多あり。

せんちやくしふかうぎはせき

撰擇集講義破斥　一卷　僧　潛龍

日溪法霖が、享保十年乙巳〔二三八五〕本山學黌に於て「選擇集」を講じたるを破斥したるものなり。

せんちやくしふちうげせう

撰擇集註解鈔　五卷　僧　存覺

本書は山南光照寺慶願の請によりて草したるもの。寬文二年壬寅〔二三二二〕の出版なり。

◉存覺の傳は「六要鈔」の下に出づ。

せんちやくほんぐわんねんぶつしふ

撰擇本願念佛集　二卷　僧　源空

淨土念佛の敎義を記したるものなり章を十六に分ち、多く唐善導和尙の說に憑據して說述せり。九條關白兼實の請に應じて作りたるものにして、實に本邦淨土宗の立敎開宗の根本書なり。著述の年代に就て、「拾遺古德傳」には元久元年甲子〔一八六四〕とし、「隆寬律師の弟子信瑞は同二年なりとし、十六門記、密要決、口筆鈔、決疑鈔、私記、繪詞傳等には、建久九年戊午〔一八五八〕と記し、「私聚鈔」の作者智圓は建仁元年辛酉〔一八六一〕なりと云ひ、或は建久八年に假字二卷を撰し、其の翌年漢文に改めたりとも云ひ、何れを是とも斷定し難し。異本また多し。元祿九年丙子〔二三五六〕義山刻本の跋文に據るに、初め四本ありしが、今世に傳はる所は、建曆二年壬申〔一八七二〕九月の刻本と、延應元年己亥〔一八九九〕のとあるのみなりと云ふ。然るに「和事始」第四に我邦印本の權輿を論じて、元久三年丙寅〔一八六六〕山門の徒が本書の刻版を燒却せんことを奏請したるに徵證するを見れば、著者生存の時旣に刊行せられたるものならん歟。

註釋　本書の註釋提要頗る多し。まづ淨土宗鎭西派に屬するものを擧ぐれば、派祖聖光坊辨阿の「徹選擇」二卷、然阿良忠の「傳弘決疑鈔」五卷、聖冏了譽の「決疑鈔直牒」十卷、寂慧の「決疑鈔見聞」五卷、良定の「選擇之傳」一卷、望西樓了慧の「大綱鈔」五卷、其他數部あり。同宗西山派に、派祖善惠坊證空の密要決五卷、行觀覺融の祕鈔五卷（世に鵜木鈔と稱す）、智圓の私聚鈔十卷、光居智通の口筆鈔五卷、深草流善偉の私集鈔八卷、竹林寺昌堂の較轄要義鈔十卷等あり。淨土眞宗の徒の手に成れるものには、常樂臺存覺の註解鈔五卷、漣谷派玄貞の本義十一卷、西福寺慧空の叢林記八卷、圓策の聞香記十一卷、僧樸の知津錄十二卷、慧雲の通津錄五卷、柔遠の錐指錄五卷、道穩の要津錄十二卷、石泉の義疏二卷、善譲の指津錄七卷等あり。

◉源空は本邦淨土宗の開祖。姓は漆間氏、作州稻岡の人、長承二年癸丑〔一七九三〕四月に生る。十五歲にして叡山功德院皇圓阿闍梨に從て剃度し、給仕三年台敎を研究し、また叡岳黑谷の叡空に從て密乘及び菩薩大戒を禀け、大藏の經卷、他宗の典籍披閱せざるものなし。慧心の往生要集及び善導の觀經疏を見るに及んで大に喜び、遂に所習を廢して專ら念佛を修む。承安四年洛東吉水に移り、盛んに念佛法を弘め部下靡然たり。建永二年門弟中王制を犯すものあり。爲めに讃州に竄せられ、謫居五年傳道務む、建曆元年辛未〔一八七一〕赦されて都に還り、其の翌年正月、八十歲にて入寂す。其の著す所、本書「選擇本願念佛集」の外に、「黑谷上人語燈錄、和語燈錄、西方指南鈔等ありて、後人の編纂に係る。元祿十年圓光大師と敕諡せらる。

せんちやしやうしふ

煎茶仕様集　一卷　大枝　流芳

藏茶、焙茶、湯候、辨水、選器、論客、飲時、得趣等の事を、各種の漢書により抄出して、訓解を加へたるものなり。

◉大枝流芳の傳は「貝盡浦の錦」の下にあり。

せんぢんしやうぞくせう

撰塵裝束抄　（寫本）一卷　高倉　永綱

裝束寸法を記したるもの。或は「裝束寸法」とも題せり。「奧書に「代々相傳のに傳、先づ一帖少弼殿に授け奉修。外見に及ばず、祕藏せしむべきものなり。貞治五年〔二〇二六〕九月六日、藤原永綱三位蓮阿判」とあり。

◉高倉永綱の傳は「高倉永綱記」の下にあり。

せんてつそうだん

先哲叢談　八卷　原　善

江戶時代儒家の性行履歷等を記載したるもの。藤原惺窩、林羅山、林春齋等より、武梅龍、原雙桂に至る七十二人を擧げ、五百五十條を記せり。其の順序

は率ね年齒時代の順序に排し、姓名の如きも各人の自稱するところを主と記せり。文化十三年丙子〔二四七六〕秋八月の凡例、同年佐藤坦、井上潛、朝川鼎の序あり。

◉原善の傳は「洙泗徵聲」の下にあり。

せんてつそうだんこうへん

先哲叢談後編　八卷　東條　信耕

原善の「先哲叢談」に續きて著したるもの。谷時中、三宅寄齋、小倉三省等より、那波魯堂、紀平洲に至る七十二人六百七十九條を揭げたり。體裁前編と異ることなし。別に一卷藤原惺窩以來の年表を添へたり。文政十年丁亥〔二四八七〕の凡例、文政十二年己丑〔二四八九〕原義の序あり。原義は「先哲叢談」の著者原善の子なり。同庚寅龜田梓の序あり、山崎美成跋を附す。

◉東條信耕の傳は「近代著述目錄後編」の下にあり

せんてつぞうでん

先哲像傳　四卷　原　義胤

儒者の肖像を揭けて小傳を添へたるもの。藤原惺窩、林羅山、林讀耕齋等より、平金華、宇佐美灊水に至る二十名あり。上標に各家の眞蹟を模刻し、傳後に著書を列擧せり。弘化元年甲辰〔二五〇四〕の自序あり。

◉原義胤の傳は「三省錄後編」の下に出づ。

せんでんしよ

仙傳書　一卷

此の書は一名により「仙傳抄」の下に解題せり。

せんでうせう

仙傳抄　一卷

生花故實の傳書にて、一に「仙傳書」に作れり。元服の花の事、法師なりの花の事、少人など申時の花の事、出陣の花の事、小たましの花の事、きたうの花の事、三ぐそくの花の事、ざしきのすみに花いくる事、なげしの花の事、ちがひ棚の花の事等以下凡て五十三條あり。文安二年乙丑〔二一〇五〕三月二十五日富阿彌相傳より、天文五年丙申〔二一九六〕正月十七日池房專慈に至る相傳の次第を末記す。「群書類從」卷三百六十、遊戲部第三に收む。

せんどううたあはせ

仙洞歌合　（寫本）一卷

建曆三年癸酉〔一八七三〕閏九月十九日、深山月、爽野蟲、寄風雜の題にて仙洞に催せる十八番歌合なり。作者には順德院女房、有家、定家、家隆、家衡、爲家、光家等にて定家判者となりて詞を添へたり。

せんどううたあはせ

仙洞歌合　一卷

寶德二年庚午〔二一一〇〕十一月、河落葉、曉千鳥、遂簡戀、忍逢戀、松歷年の題にて、宰相典侍、二條、式部卿親王、按察使公保、右近大將實量、權大納言宗繼其の他等にて、關白兼良、飛鳥井中納言祐雅の兩人判者たり。凡て七十五番あり。「群書類從」卷二百〇六、和歌部第六十二にあり。

せんどうえいくうたあはせ

仙洞影供歌合　（寫本）一卷

本書は建仁二年壬戌〔一八六二〕の仙洞歌合なり。

せんどうおんうたあはせ

仙洞御歌合　（寫本）一卷

寬永十六年己卯〔二二九九〕十月五日に於ける同御歌合なり。冬天象、冬地儀、冬植物の題にて凡て三十六番あり。三條實條の判するところ。「叢書料本」卷一に收めたり。

せんどうごじふばんうたあはせ

仙洞五十番歌合　一卷

乾元二年癸卯〔一九六三〕四月二十九日、春風、夏雨、秋露、冬雲、戀夕の題にて、伏見院女房、經親、兼行、爲相、俊兼、敎良女、その他等にて成る。「群書類從」卷二百〇四、和歌部第五十九に收めたり。

せんどうごちやくたうわか

仙洞御着到和歌　（寫本）一卷

寶永二年乙酉〔二三六五〕九月九日に始り、同十二月十九日に終る、作者十五人各百首宛の千五百番歌合なり。春三百、夏二百二十五、秋三百、冬二百二十五、戀二百二十五、雜二百二十五等なり。寶永四年丁亥七月十六日、某の寫本奧書あり。

せんどうさんじふろくばんうたあはせ

仙洞三十六番歌合　（寫本）一卷

寬永十八年辛巳〔二三〇一〕二條通觀音町風月宗智刊行の歌合寫本なり。

せんどうじふはちにんうたあはせ

仙洞十八人歌合　一卷

正治二年庚申〔一八六〇〕九月十二日、神祇、若草、落花、菖蒲、時鳥、浦月、山嵐、曉雪、水鳥、庭松等の題にて、權大納言忠良、隆信、定家、家隆、雅經、寂蓮前座主、女房、左大臣、内大臣の十人、凡て五十番定家の判するところなり。「群書類從」卷百九十、和歌部第四十五に收めたり。

せんどうねんぢうぎやうじ

仙洞年中行事　（寫本）一卷　藤原　朝隆

仙洞御所に於ける年中の御行事を記述したるものなり。

◉藤原朝隆のことは「雲圖抄」の下にあり。

せんとかう

遷都考　一卷　平本　定智

此の書は一名「日本歷代遷都考」の下に解題せり。

せんとくりやくめいくけつ

先德略名口訣　（寫本）一卷

記錄名、宗名、山號、法名等の省略言または字畫を省きて流用せるもの等を列擧して其の本稱を記したるものなり。「續群書類從」卷八百四十五、釋家部第百三十に收めたり。

せんばふしんでん

戰法新傳　（寫本）一卷　本多　忠俊

出陣戰法陣形の諸事につきて、説述したるものなり。文化八年辛未〔二四七一〕の作にかゝる。

せんぷくざんけいきやうしいかしふ

泉福山景境詩歌集　三卷　僧　周仙

武藏國埼玉郡忍の泉福山照岩寺の詠景に關する詩歌を集めたるもの。周仙嘗て其の八景と十二境とを撰びて詩歌を四方に求めたるなり。八景は日光晴嵐、筑波夕照、利根歸帆、熊谷晩鐘、長井夜雨、泉山秋月、成田落雁、赤城暮雪。十二境は山堂秋夕、野田耕夫、岸頭甘菊、隣里曉鷄、寒夜叫猿、芦洲鳴鶴、溪間桃花、龜岡古松、蓮池游魚、柳岸夜泊、虎溪紅葉、瀧淵瀑布等なり。著者周仙は笠岩と號す。泉福山照岩寺の住持なり。

せんぷせう

淺浮抄　（寫本）一卷

御冠、冠、笏、小忌の時着る平緒、野太刀に守をつくることその他の故實を記したるもの。永正五年戊辰〔二一六八〕古書を補修して寫し取れる由の奧書あり。「續群書類從」卷三百十四裝束部第四にあり。

せんぺいりやくき

錢幣略記　（寫本）二卷　青木　敦書

周より宋に至るまでの錢幣の沿革を記したるものなり。「文獻通考」によりて諸書を參考し其の記を作れりといふ。元文四年〔二三九九〕の自序あり。

◉青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下にあり。

せんべんぎよどう

蟬冕魚同　（寫本）一卷　藤原　惟房

此の書は一名「惟房公記」といふ題下に解題せり。

せんぼうじきやうしやうしふ

善峯寺舊章集　（寫本）一卷

山城國乙訓郡鷄冠井庄善峯寺往生院の古文書を集めたるもの。建長三年辛亥〔一九一一〕二月九日藤原實基の下文より、正中永享年間に及ぶ敎書、田券寄附狀等凡そ六十餘通を收めたり。

せんぼんけいづ

千本系圖　（寫本）一卷

明應七年戊午〔二一五八〕五月六日、六十八歳にて卒去したる千本常陸介資持より、元和寬永の比、德川秀忠に仕へたる清兵衞尉長勝に至る。「續群書類從」卷百四十九、系圖部第四十四に入る。

せんみんでん

先民傳　二卷　盧　驥

長崎に駐縱せし人の小傳事績を記したるもの。全編漢文なり。上卷を學術、談天、善書忠孝、貞烈。下卷を處士、隱逸、任俠、醫術、通譯、技藝、緇林、流寓、以上十三部に類別して記せり。享保十六年辛亥〔二三九一〕の作。元文四年己未〔二三九九〕竹田春庵、山縣周南、清人沈内等の序及び目錄凡例を擧げ、文政二年乙卯〔二四七九〕原善の序を附して版刻す。

◉盧驥は長崎の人にして千里と字す。范陽盧氏の子孫の歸化したるものなりといふ。

せんみんりかう

賤民俚考　（寫本）一卷

令の中の雜間、官戸、陵戸、家人、奴婢等の條を摘解したるものなり。光格天皇の享和元年辛酉〔二四六一〕七月十五日、刑部源左樹子の自序あり、僅十枚の寫本なり。

せんゆうじごびやうゑづ

泉涌寺御廟繪圖　（寫本）一舖

山城國泉涌寺なる歴代の御廟を記したるものにて卽ち八十六代四條院より、百十七代桃園院までの御廟及び皇后の御廟とも二十五を掲げ、廟、道、唐門、香爐場等は各着色を以て示せり。

ぜんりんこくはうき

善隣國寶記　三卷　僧　周鳳

我が邦が支那朝鮮等と交通を開きし最初より、當時に至る關係往來等を年序を逐うて漢文にて記し、後土御門院の文正元年丙戌〔二一二六〕の自序、明曆三年丁酉〔二三一七〕西山恭馬門人の跋あり。

⦿周鳳は鳳溪と號す。周鳳は其の諱なり。日野准大臣兼宣の子にして、無求和尙の弟子となり、相國寺に住持たりき。

ぜんりんじどのしちひやくしゆ

禪林寺殿七百首　（寫本）一卷

文永二年壬戌〔二五二二〕禪林寺殿に於て行はせられたる、仙洞七夕御會、當座七百首歌合なり。作者は御製八十首、前左大臣實雄二十五、民部卿入道爲家八十、以下資有、賢阿等に至る二十一名あり、各詠歌の數を異にす。

ぜんりんしふくゐん

禪林集句韻　（寫本）五卷

禪林諸家の詩偈中より、四聲の韻順に、拔摘集句したる詩韻本なり編者詳ならず。

ぜんりんせうか

禪林小歌　（寫本）一卷　僧　聖冏

禪理を詠じたる長編の詩なり。聖聰といふ人の補註にかゝる。「續群書類從」卷五百六十一、遊戲部第十一にあり。

⦿聖冏の傳は「釋淨土二藏義」の下にあり。

せんれいせいてんこうき

先例政典後記　（寫本）三十九册

德川將軍時代の政法事件を雜記したるものなり。「武家嚴制錄後記」と同書なり。現存三十九册は、殘闕なるべし。

せんろくさつえう

戰錄撮要　（寫本）八卷　中野　徵矩

足利氏の時より、天草役に至る間の戰爭事歷の大略を拔萃したるものなり。天保四年癸巳〔二四九三〕の自序あり。

⦿中野徵矩は近江彥根の人にして平馬と稱し、君觀また容安齋と號す。夙に儒を學び彥根藩に仕ふ。本書は其の六十八歲の時の作なり。別に「和漢歷史拔錄」の著あり。

せんわうびやうりようき

前王廟陵記　二卷　松下　見林

御歷代の陵地を考證したるものなり。自序中に「中世以來盜賊陵を發き、農夫犂て田園と爲すを見て、淚を草莽の袖に沾すまゝに、舊記を考へ、故老に問ひて之れを記錄す」といへり。元祿九年丙子〔二三五六〕の作なり。

⦿松下見林の傳は「異稱日本傳」の下にあり。

そ

そいうぜんじぎやうじつ

祖雄禪師行實　（寫本）一卷　僧　道演

丹波國氷上郡佐治上瑞岩高源寺の開山遠溪祖雄禪師〔康永三年甲申〔二〇〇四〕六月五十九歲にて寂す〕の略傳なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百三十一、傳部第四十二に收む。

そうゐえうりやく

僧位要略　（寫本）一卷　僧　宗親

僧位僧官の事を記したるもの。萬治二年己亥〔二三一九〕四月の撰述に係れり。著者宗親は京都淸水寺執行寶性院僧都たり。

ぞうゐき

贈位記　（寫本）一卷　在庸

元祿九年丙子〔二三五六〕八月、多田權現に正一位を授けられたる位記並に宣命奏聞の次第等を記したるものなり。同年八月二十一日に記す。著者在庸は權大納言たり。

そういんけんしよしふ

棕隱軒初集　二卷　中島　規

著者の詩文集にして、文政七年甲申〔二四八四〕の自序あり。

⦿中島規は京都の儒者。景寬と字し、文吉と稱し、棕隱軒、道華庵、畫餅居士等の號あり、二條庵に住して樓名を銅駝餘霞樓といふ。最も詩に長ず、本書の外に「鴨東四時雜詠」の著あり。安政三年丙辰〔二五一六〕七月十五日、七十七にて歿す。

そういんせんく

宗因千句　二册　西山　宗因

著者の俳諧千句にて、寬文十三年癸丑〔二三三三〕の編輯にかゝる。

⦿西山宗因の傳記は「大阪獨吟集」の下にあり。

ぞうえきかいさんき

增益改算記　一卷

舊來傳ふる所の「改算記」の諸術を取捨し、更に新題若干條を增益したるのみならず、早算割り懸け等を加へたる獨學書なり。多く坊間に行はる。天保年間の出版なり。書肆の編集したるものなるべし。

そうゑだいせうぜんじぎやうじやう

宗惠大照禪師行狀　（寫本）一卷　僧　龍統

長祿四年庚辰〔二一二〇〕閏九月五日、入寂せる宗惠大照禪師の傳記なり。漢文にて記す。長祿四年小師比丘龍統の記すところなり。「續群書類從」卷二百四十一、傳部第五十一にあり。

そうえふがいろく

總葉概錄　（寫本）一册　磯部　昌言

總州を領せし千葉氏の世系傳記を綴りたるもの。初祖忠常より、邦胤に至る三十一代間の盛衰を記す。主命によりて編輯したるよし、正德五年乙未〔二三七五〕十二月の自序にみゆ。寬政十年戊午〔二四五八〕日非常房の跋あり。

⦿磯部昌言は下總國佐介の人なり。別著に「古語拾遺篆註」三卷あり。

そうゑんせんご

總猨僭語　三十卷　瀨川　如皐

平將門が一生の事歷、其の覬覦謀反の顚末を記したる稗史なり。文政九年丙戌〔二四八六〕散木居士の序あり。

⦿瀨川如皐〔第二世〕は名を定相、通稱を文次といひ、狂言堂文車、御溝園等の號あり。戲作者を以て知らる。天保四年癸巳〔二四九三〕十一月、七十七にて歿す。

そうかうぶにんせうしゆつ

僧綱補任抄出　二卷　僧　深賢

僧侶位階〔僧正僧都律師等〕の補任解職等の次第を歷記したるもの。推古帝の第三十二年甲申〔一二八四〕に始まりて、永萬元年乙酉〔一八二五〕に終れり。卷頭に「東大寺東南院經藏本十二卷忠珍僧都撰、粗一見の次、處々抄書了。更不可及外見者也。深賢記」と云ひ、奥書に承應二年癸巳〔二三一三〕三月、前大僧正覺定書寫のよしを記せり。「群書類從」卷五十四、補任部第十一に收めたり。

⦿深賢は眞言宗小野流中の土巨流を傳へたり。三寶院成賢僧正の弟子にして、地藏院に住し「實歸鈔」等を著して、其の名當時に高かりきと云ふ。

ぞうがしやうにんぎやうごふき

增賀上人行業記　（寫本）一卷

長保五年癸卯〔一六六三〕六月九日、八十七歲にて入寂したる、和州多武峯寺住職增賀和尙の略傳。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百十四、傳部第二十五にあり。

そうがせんしゆ

宋雅千首　一卷　飛鳥井　雅緣

著者の歌集。應永二十七年庚子〔二〇八〇〕十月の奥書に「右聖廟法樂千首者、愚老一身瓦礫也」云々とあり。

⦿飛鳥井雅緣は權中納言從二位たり。應永五年戊寅〔二〇五八〕出家して宋雅と號す。本書の外に「宋雅道すがらの記」一卷あり、次に掲ぐ。

そうがみちすがらのき

宗雅道すがらの記　（寫本）一卷　飛鳥井　雅緣

稱光天皇の應永三十四年丁未〔二〇八七〕二月二十三日、社參の爲め暇を得て、越前へ下向する時の道中紀行文なり歌を主にして、各端詞を詳しく物したり。

⦿飛鳥井雅緣の傳は「宋雅千首」の下にあり。

そうかん

宗鑑　二巻　山本積善

宋史の龐雜にして、津涯なく、謬誤また勝て數ふべからざるを歎き、其の中の、要を拔て本書を作りたるもの。宋代三百年間の事績其の大要を觀るべし。全編漢文なり。天保五年甲子〔二四九四〕十一月の自序あり。成書の由來をも述べたり。

◉山本積善は阿波の人にして、通稱善太、字は伯厚、眉山また狂庵と號す。儒を以て勢州龜山に教授たりしことあり。著書は本書の外に、性理詳説、朱子學辨、仁齋徂徠辨妄、鄒京山孟子解拔勵、明智光秀紀事本末等あり。

そうかんじさんしふ

宋鑑自讃集　一巻　山崎宗鑑

「自讃和歌集」を註解したるものなり。下段は批して餘意を示せり。文明十六年甲辰〔二一四四〕或人の懇望によりて註せる由、著者の奥書に見ゆ。

◉山崎宗鑑の傳は「犬菟玖波集」の下にあり。

そうかんもんせう

總勘文鈔　一巻　僧日蓮

釋迦一代の説教を化他方便教と自行眞實教との二に分ちて、法華經を唯一眞實教なりと判定し、更に十法界十如是即身成佛等、法華宗の教義を演べたる假字交り文の書なり。弘安二年己卯〔一九三九〕十月の著作に係り「錄內」第十四卷及び「縮刷藏經」霜帙第十に收めらる。

◉日蓮の傳は「開目鈔」の下に出でたり。

そうきうをしやうろく

宗休和尙錄　（寫本）一巻　僧宗休

著者妙心寺宗休の詩文集。永正天文頃の作なり。

そうきうきかう

宗久紀行　一巻　僧宗久

觀應の頃筑紫より京都に出で、更に東海道を巡遊して、奧州鹽釜の邊に至りし時の紀行にして、詠歌をも多く雜へ記せり。一名を「都のつと」と云ひ、藤原良基の跋ありて、歌文の妙を嘆賞せり近刊「仙臺叢書」の中に收めたり。

◉宗久は筑紫の人平吉氏。和歌を好みて風月に吟咏し、世を厭うて僧となる。漂然雲遊足跡六十餘州に遍し。嘗て大江山の麓に寓し、後また東奥松島に至り自ら見聞する所を記したるもの、即本書なり。其詠歌は新拾遺已下の三代撰集に出でたり。

そうぎくわいこくざつき

宗祇廻國雜記　五巻　僧宗祇

宗祇が文明十八年丙午〔二一四六〕六月上旬より、北征東遊せる紀行俳歌なり。卷の首尾に法源捐多の序及び宗祇の傳贊を載せ、序中に宗祇の二百回忌に方り、本書を上梓する由を記せり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下に出でたり。

そうぎこかがみ

宗祇小鏡　（寫本）一巻　僧宗祇

最初「おさなくて山寺などにゐる人は、心もちこそさま〴〵にあれ」より、最後「此の歌に心をとめん人は皆、なむあみだぶつと我にたむけよ」に至る八十九首の歌集なり。

◉宗祇の傳記は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎしうえんのき

宗祇終焉記　一巻　柴屋軒宗長

宗祇が宗長に伴はれて、越後國より箱根山の麓に到り、身まかりける次第などを記したる俳文の記事なり。「群書類從」卷五百二十一、雜部第七十六に收めらる。

◉柴屋軒宗長の傳は「雨夜記」の下にあり。

そうぎしふ

宗祇集　一巻　僧宗祇

著者の歌集なり。文明三年辛卯〔二一三一〕の詠み歌も入れり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎしよがくせう

宗祇初學抄　（寫本）一巻　僧宗祇

發句初學者の注意すべき要件、及び發句の作例等を、親切平易に記し示したるものなり。斯道の梁となすべし。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎしよこくものがたり

宗祇諸國物語　五巻　井原西鶴

國々の物語を宗祇の諸國行脚に擬して構成せる雜著なり。貞享二年乙丑〔二三四五〕春の序あり。

◉井原西鶴の傳は「小夜嵐物語」の下にあり。

ぞうきぞくによしやうはふご

贈貴族女姓法語　一巻　僧超然

此の書は別名「法語筆記」の下に解題せり。

そうぎそでのした

宗祇袖下　（寫本）一巻　僧宗祇

歌の詠方、古語の解等を書き列ねて、常德院（足利義尙）へ進上するところなりといふ。貞享五年戊辰〔二三四八〕寶永七年庚寅〔二三七〇〕等の奥書あり。「續群書類從」卷四百九十四、連歌部第二十四にあり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎつくしみちのき

宗祇筑紫道の記　（寫本）一巻　僧宗祇

著者が文明十二年庚子〔二一四〇〕太宰府に詣でたる時の道中日記なり。九月六日の發途より、十月十二日山口の宿に歸着するまで、凡三十六日間の道中、見聞する所の名所社寺を記し、發句若干を載せたり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎとうごくきかう

宗祇東國紀行　（寫本）一巻　僧宗祇

著者が嘗て東國に漫遊したる時の日記なり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎどくぎんせんく

宗祇獨吟千句　（寫本）一巻　僧宗祇

宗祇獨吟の連歌千句を集めたること、其の名の如し。文明九年丁酉〔二一三七〕正月十八日、宗祇の奥書あり。其の中に同三年の頃伊豆三島明神へ立願の事ありて、吟詠したるものなるよしを記せり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

ぞうきはふしくまのきかう

増基法師熊野紀行　一巻　僧増基

著者の和文紀行にして、紀貫之の「土佐日記」につげる古書なり。本書は源至清考證標註して版行す。

◉増基は圓光院關白基忠の子なり、一名廬主といふ。覺助親王に從て灌頂を受け、元亨四年甲子〔一九八四〕寺長吏に任ぜられ、花園、後醍醐、光嚴、光明、崇光五代の護持僧たり。寶相院法主たるより、世に寶相院と號す。文和元年壬辰〔二〇一二〕七月二十一日、七十一にて寂せり。官大僧正に至る。

そうぎはふしまへくづけ

宗祇法師前句付　（寫本）一巻　僧宗祇

「人の心のかはる世の中」と云へる後の句に附くべき前句をば、春夏秋冬戀雜に分ちて、總計百句を載せたり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎはふしわかのことば

宗祇法師和歌の詞　（寫本）一巻　僧宗祇

和歌用の熟語を擧げて解釋したるものなり。一々證歌を引きて説明す。延德二年庚戌〔二一五〇〕正月十八日著者が村田肥前守へ贈る所の末文あり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

そうぎひでん

宗祇秘傳　（寫本）一巻　僧宗祇

歌學の傳書なり。歌書、古歌等を簡略に評論せる數枚の寫本なり。明應八年己未〔二一五九〕從一位一條冬良の奥書あり。

◉宗祇の傳記は「新玖波集」の下にあり。

そうぎよくぎんしやぜつく

漱玉唫社絶句　（寫本）一巻　日根野弘亨

著者の絶詩及び社友數人の詩を集めて百餘首より成れり。天保元年庚寅〔二四九〇〕の著。奥村安の序、奥村琢の跋あり。「土佐國群書類從」卷百二十四、詩筆部第七にあり。

◉日根野弘亨は大卿と字し、初め惡右衞門と稱し、後ち修平と改め、號を鏡水また佳園といふ。其の先は豐臣、德川等に仕へ、中古より、高知藩に仕ふ。弘亨父の職を繼ぎて、初め大扈從となり、後ち擢でられて教授館學頭と爲り、祿二百五十石を加へらる。夙く儒學に熱心し、最も詩に長じ、江戸に官遊して菊池五山、大窪詩佛、佐藤一齋を師友とし、詩を以て西國の巨擘と稱せられき。著書は本書の外に「四書國字解」あり、安政元年甲寅〔二五一四〕六十九歳にて歿す。

そうぎわかしふ

宗祇和歌集　（寫本）一巻　僧宗祇

著者の和歌。立春の「あらたまの春たつらしも天の原、ふりさけみればかすみたなびく」より、五十首の歌の中に寄松祝「なべてあはむ草木やしるべ杤のころ、心の松に御代の春風」に至る三百數十首を收めたり。

◉宗祇の傳は「新菟玖波集」の下にあり。

ぞうくわんせんげのき

贈官宣下記　一卷　東坊城和長

足利尊氏、同義持、同義教、同義勝、綾小路經有、足利義量、同義熙等へ贈官宣下の次第を、諸家の記より抄錄したるもの。天文二年癸巳〔二一九三〕九月、菅原長雅の奧書あり、「群書類從」卷五百二十二、雜部第七十七に收めらる。

◉東坊城和長の傳は「桂林遺芳抄」の下にあり。

ぞうくわんせんげぶるゐ

贈官宣下部類　（寫本）一卷　東坊城和長

本書は前揭「贈官宣下記」と同本別名なり。

そうくわんそうふくかんもん

僧官僧服勘文　一卷　僧　實觀

最初に僧官相當次第を載せ、次に官位門跡寺務院家坊官僧綱等の起原及び法服の故實品目等を記せり。奧書に、「右者享保八癸卯年〔二三八三〕正月、僧官並に僧服之儀、公儀御尋に付、凌雲院前大僧正實觀考へ上られ候寫也」とあり。これによりて本著者を實觀としたり。

そうくわんそうふくき

僧官僧服記　（寫本）一卷　僧　實觀

刊本によりて「僧官僧服勘文」の下に解題せり。

そうくわんひきつけ

總官引付　（寫本）一卷

文祿年間より元和年間に至る、伊勢內外兩宮の神官補任の次第を記したるもの。延寶九年辛酉〔二三四一〕信殷の奧書あり。

そうくわんぶにん

僧官補任　（寫本）一卷

僧侶官位の補任次第を歷敍したるもの。即ち、天台座主、西塔院主、橫川長吏、無動寺寺務、天王寺別當、熊野檢挍、園城寺長吏、平等院法務、興福寺別當、大師號、菩薩號、諡號、和尙號、贈官位等のを載せたり。永正十一年甲戌〔二一七四〕四月、菅原和長の奧書に「斯一冊以眞光院尊海僧正本、令書寫了。彼本東山左府手蹟相交」云々とあり。「群書類從」卷五十五、補任部第十二に收めらる。

そうけいぐうき

叢桂偶記　二卷　原　昌克

醫術方劑に關する漢文雜記なり。寬政十二年庚申〔二四六〇〕藤田一正の序、同大谷恭の跋及び男昌文の跋あり。

◉原昌克の傳は「醫事小言」の下にあり。

そうけいていいじせうげん

叢桂亭醫事小言　六卷　原　昌克

此の書は單に「醫事小言」の下に解題せり。叢桂亭は著者の號なる故後に冠したる名なるべし

そうけんゐんどのつゐぜんき

總見院殿追善記　一卷　藻　虫齋

初めに明智光秀の叛逆を記述し、天正十年總見院泰巖大居士〔織田信長〕の追善供養の次第を記したるものにして、同月二十五日に誌されたるなり。「群書類從」卷五百二十、雜部第七十五に收めらる。

そうけんき

總見記　二十三卷　遠山　信春

織田信長一生の事歷を敍したるもの。最初織田氏の系譜より、祖先の事を略記し、天文三年甲午〔二一九四〕信長誕生し、同十五年元服を加へ、同十六年初陣してより明智光秀の弑に遇ひ、後天正十年壬午〔二二四二〕正親町天皇の宸翰を以て太政大臣從一位の敕宣を拜するまでを記せり。蓋し、本書は小瀨甫庵の「信長記」を增訂したるものなり。貞享二年乙丑〔二三四五〕の自跋。同三年竹洞子の序あり。元祿十五年壬午〔二三六二〕出版す。

◉遠山信春のことは「織田軍記」の下にあり。

そうけんべいせんせいじつき

操軒米先生實記　（寫本）一卷　中村　欽

米川一貞〔字は乾叔、通稱儀兵衞〕の傳。操軒は其の號也。元文五年庚申〔二四〇〇〕著者の跋を載せり。

◉中村欽の傳は「講學筆記」の下に出づ。

そうげんみんかんきほうしせう

宋元明鑑紀奉使抄　二卷　吉田　松陰

宋元明三世間の奉使者にして、君命を辱めず、國家の利益をなせる事を抄錄評論したるものにて、安政三年丙辰〔二五一六〕三月十三日の自序あり。

◉吉田松陰の傳は「講孟劄記」の下にあり。

そうごおほざうし

宗五大艸紙　一卷　伊勢　貞頼

種々公私の作法心得等を雜記したるもの。人に召仕れ候仁心得らるべき事、奏者の事、公方樣御對面の事、同私樣のやう、公私御かよひの事・大酒の時の事、公方樣諸家へ御成の事、人の相伴する事、料理の事、衣裝の事、太刀打刀作やうの事、折紙調樣の事、書札之事、からかさの事、騎馬の事等を主として、數十箇條あり。一名を「宗五記」といふ。大永八年戊子〔二一八八〕正月、七十四歲の時の著なり。「群書類從」卷四百十三、武家部第十四に收めらる。

◉伊勢貞頼は因幡守貞長〔永享六年卒す〕の孫にして、下總守貞數の子なり。通稱を二郞左衞門といひ、下總守に任ぜられ、後入道して宗五と號す。永正大永〔二一六四―二一八七〕頃の人なり。別に「犬追物日記」の著あり。

そうごき

宗五記　（寫本）二卷　伊勢　貞頼

此の書は一名「宗五大雙紙」の下に解題したり。

そうごくゆふきぶかんごくひてんしよ

總國結城武鑑極祕天書　（寫本）二卷

內には「天正記」と題して當時結城氏の盛衰武軍を詳敍したるものなり。卷末に「右結城晴朝存命之內、見聞之事記置所也」と記せり。

そうごせんゐんすんぱふしよ

總御船員寸法書　（寫本）一册

幕府よりの預船總數の寸法來歷を記したるもの。向井將監、上村猪十郞、小笠原新九郞、橋本萬平、大橋總兵衞等の預れるものなり。

ぞうさふときのぶこうき

贈左府時信公記　（寫本）一卷　平　時信

著者日記の一部にて、天承元年辛亥〔一七九一〕十一月及十二月の記にかゝる。元祿元年戊辰〔二三四八〕彰考館の奧書あり。

◉平時信の傳記は「時信記」の下にあり。

そうさんだいかぜつくせんかい

宋三大家絕句箋解　二卷　大窪　行

山本謹と同編するところにして、享和三年癸亥〔二四六三〕山本信有の序あり、文政八年乙酉〔二四八五〕の出版にかゝる。

◉大窪行の傳は「詩聖堂詩集」の下にあり。

そうしういんばごうりさくらじやうのづ

總州印旛郡佐倉城圖　（寫本）一鋪

此の書は下總國印旛郡佐倉城の明細圖なり。神社佛閣に至るまで悉く揭載せり。光格天皇の文化四年丁卯〔二四六七〕片岡直亮の寫本による。編者詳ならず。

ぞうしうぞくわうだいいちらん

增修續王代一覽　十卷　栗原　信充

片山圓然の「續王代一覽」を增修したるものにて、第百八代後陽成天皇の天正十五年丁亥〔二二四七〕より、同慶長五年庚子〔二二六〇〕までの事實を記せり。「王代一覽」及び「續王代一覽」に舉げざる本書を示し、更に遺漏を補ひて、童蒙の爲にせりといふ。嘉永元年戊申〔二五〇八〕十一月十五日、著者の凡例あり。

◉栗原信充の傳記は「鞍鐙新書」の下にあり。

そうしうもんまりやうしやだいみやうじんしやき

總州文間兩社大明神社記　（寫本）一卷　高屋　近文

該社の緣起及び祭典等の事を記したるもの。當社は延喜式神名帳に載せたる下總國相馬郡蛟蝄の神社にして、水の神火の神を祭れるを、中古其の名を失ひて文間明神といへるなりと云ふ。享保元年丙申〔二三七六〕の跋あり。

◉高屋近文の傳は「徒然草與儀抄」の下にあり。

そうしかつぺき

宋詩合璧　四卷　村瀨　褧

宋詩人の作を撰集したるものなり。文化元年甲子〔二四六四〕賴襄の序、嘉永元年戊申〔二五〇八〕小坂觀の跋、弟有本の跋あり。

そうしかふ

宗氏家譜　（寫本）三卷　平田　眞賀

對馬宗氏の系譜にして、其の始祖平清盛の三男中納言知盛の第三子知宗〔元暦元年〔一八四四〕誕生〕より、二十三代の孫對馬守義成〔明暦四年〔二三一一〕十二月二十六日江戸に歿す〕に至り、各事績を詳記せり。對府の臣平田眞賢、加納貞清、陶山孝の三士が藩命によりて編輯したるものなり。元祿九年丙子〔二三五六〕加納幸之介の奥書あり。

そうしそ

宋詩礎　二卷　大窪行

宋諸名家の押韻を輯めて初學者の作詩に便したるものなり。享和二年壬戌〔二四六二〕山本北山の序あり。

◉大窪行の傳は「詩聖堂詩集」の下にあり。

そうじやうきかう

總常紀行　（寫本）一卷　牧野履

文化四年丁卯〔二四六七〕八月十五日、江戸を立ちて、香取、鹿島、息棲の三社に詣り、同月二十二日江戸に歸着するまでの紀行。漢文にて記せり。

◉牧野履の傳記は「鉅野先生詩集」の下にあり。

ぞうじやうくわういつかはしまわうじぼき

贈淨廣一河島皇子墓記　（寫本）一卷　竹口尚重

河島皇子は天智天皇第二の皇子にして、持統天皇の第五年〔一三五四〕に薨じ給ひ、御墓大和國高市郡越村にあり、この書は寛政七年乙卯〔二四五五〕同村服部某の請によりて考記す。「大柱記」「五郎社記」と合册せり。

◉竹口尚重のことは「南朝編年紀略」の下にあり。

ぞうじやうじおんみやごきろくぬきがき

增上寺御宮御記錄拔書　（寫本）一卷

德川家康の遺像の由來を記したるもの。御別當安立院の記錄に係るよしを末記せり。

そうじやうにつき

總常日記　（寫本）一卷　清水濱臣

著者の總常紀行なり。文化十二年乙亥〔二四七五〕三月二十二日より、同四月十三日まで、家族を伴ひての旅行日記なり。

◉清水濱臣の傳は「伊勢物語添註」の下にあり。

そうしやさんけいき

總社參詣記　（寫本）一卷

尾張國中島郡なる總社眞清田明神へ尾藩の士人が名古屋より參詣せし紀行文なり。總社の由來、故實道路、山川等を記せり。卷尾に寶永四年丁亥〔二三六七〕仲夏、間津南窓下に筆をとる由を記せり。子孫の筆寫なるべしと思はる。

そうしやわくもん

總社或問　（寫本）一卷　猿渡盛章

「武藏總社誌」に就きて、十九條の問題を設け、一々答辨したるもの。蓋し本編の闕漏を補足せるなり。

◉猿渡盛章の傳は「新撰總社傳記」の下にあり。

ぞうじゆさんみもとなりのゑいさう

贈從三位元就詠草　（寫本）二卷　毛利元就

著者の歌集。卷一を和歌とし、卷二を連歌發句とす。一首ごとに里村紹巴の判詞あり元龜三年壬申〔二二三二〕三條實澄の序紹巴の序等あり。天正二年甲戌〔二二三四〕大僧正某奥書す。

◉毛利元就の傳は「春霞集」の下にあり。

そうしよ

叢書　（寫本）六册

享保錄、遺策私辨、答問十策、新政談後編、羽川氏宗譜、國譜捷徑、韜軒小錄、其の他法政に關する雜事を輯錄したるものなり。

そうしよべんぎ

叢書辨疑　三卷　僧義邦

上卷に論語二十三條。中卷に春秋五條、禮記檀弓、唐書二條、古文二條、圓銘錄四條、白眉四條、魏書三條。下卷に楞嚴經十八條、維摩經五條、金剛經五條、臨濟錄五條等を辨論す。全編漢文なり。東山天皇の元祿五年壬申〔二三五二〕の自序、同八年弟子存策の跋あり。

◉義邦は讚岐の人にして、字を德巖といひ、龜山と號せり。

そうせいろん

崇聖論　（寫本）一卷　古賀煜

古來學者が、聖人を過崇して、却て其の實を失せるを評隲したる漢文なり。都合八編連綴せり。文化十一年甲戌〔二四七四〕の作なり。今見るところは「殷鑒論」と併せて寫傳せり。

◉古賀煜の傳記は「延元雜編」の下にあり。

ぞうぞくこれきべんらん

增續古曆便覽　一卷　中西敬房

「續古曆便覽」を增訂したるもの。月の大小、氣節、干支、日月蝕八卦等をかゝぐ。凡例に「德刻古曆慶長より安永に訖ると雖も、後年往々差謬を免かれず、且中根元圭が推歩の年限、既に盡るを以て、今貞享甲子より、筆を起し安永丁酉より以下十有餘年を加ふ」云々とあり。安永六年丁酉〔二四三七〕の自序あるは、未だ增補せざりし時のなるべし。

◉中西敬房の傳は「中星五穀荒豐古」の下にあり。

ぞうぞくしほんざう

增續詩本草　一卷　清敬直

清國程濂臣の原版に增補したるものにて詩事を輯例す。天保十五年甲辰〔二五〇四〕の自序あり。

ぞうだいそうじやうくうかいわじやうでんき

贈大僧正空海和上傳記　一卷

空海の誕生より、承和二年乙卯〔一四九五〕三月二十一日入寂の時までを記述せり。寛平七年乙卯〔一五五五〕三月十日、貞觀寺座主某の撰述なり。

そうたうさんえんぎ

走湯山緣起　（寫本）一卷

伊豆國賀茂郡なる走湯山に伊豆權現を祀れるが本書は其の緣起を詳記したるものなり。

そうちやうき

宗長記　（寫本）一卷　小笠原元長

「伊勢弓馬叢書」中の一書にして、笠懸故實三十餘條を記したる九枚の册子なり。明應九年庚申〔二一六〇〕三月八日宗長〔元長〕の記にて、寛政四年〔二四五二〕伊勢貞春松岡平太郎に免傳の奥書あり。

◉小笠原元長の傳記は「犬追物日記」の下にあり。

そうちやうきかう

宗長紀行　（寫本）一卷　僧宗長

著者が北國漫遊の紀行文なり。大永二年壬午〔二一八二〕五月、遠參尾勢より、大和山城を經て、北國に下りし時の記にて、和歌、連歌、贈答の歌文等を揭載せり。

◉宗長の傳は「雨夜記」の下にあり。

そうちやうさいこくきかう

宗長西國紀行　（寫本）一卷　僧宗長

文明十二年庚子〔二一四〇〕周防國山口へ下る時の紀行文也。或は「筑紫紀行」と題して傳ふるもあり。

◉宗長の傳は「雨夜記」の下にあり。

そうちやうしゆき

宗長手記　一卷　僧宗長

大永二年壬午〔二一八二〕より同七年に至る、北陸東海諸處漫遊の和文日記にして、俳歌發句等を多く雜へ記したり。「群書類從」卷三百二十六、日記部第七に收めらる。

◉宗長の傳は「雨夜記」の下に揭ぐ。

そうちやうするがぞくにつき

宗長駿河續日記　（寫本）一卷　僧宗長

此の書は前著「宗長駿河日記」に續きて、後柏原天皇の大永六年丙戌〔二一八六〕正月二十八日、駿河にての事實より記し起して、前編と同じく、自家經歷するところの事實を和歌俳句等を入れて詳敍したるものなり。

◉宗長の傳記は「雨夜記」の下にあり。

そうちやうするがにつき

宗長駿河日記　（寫本）一卷　僧宗長

大永二年壬午〔二一八二〕北地出立駿河行の紀行にて、到るところ和歌俳句等を插入して有りし事實を詳しく文章的に記せり。

◉宗長の傳記は「雨夜記」の下にあり。

そうちやうそくぢよのき

宗長息女記　（寫本）二卷　小池貞成

小笠原孫太郎治部大夫宗長の息女、年齡十六歲の三月、南條左衞門尉の媒妁にて武田甲斐守方へ緣組したる時の細記なり。故に内題には「宗長息女婚禮記錄」といへり。上下二卷一册に寫傳す。

◉小池貞成は小笠原流の射禮家にして、甚之丞と稱す。小笠原長時貞慶に仕へ、射術の奥儀を傳へて小池流と稱せり。

そうちやうどくぎん

宗長獨吟　（寫本）一卷　僧宗長

著者が後柏原天皇の大永八年戊子〔二一八八〕四月十二日に獨吟したる百韻なり。一名を單に「百韻」と號す。「續群書類從」卷四百八十二、連歌部第十二に收めたり。

◉宗長の傳記は「雨夜記」の下にあり。

そうちやうにつき

宗長日記 （寫本）一卷 僧 宗長

享祿三年己卯〔二一九〇〕元旦試筆なり。同四年七月以後の記にて和歌連歌等多し。末に寛政十二年庚申〔二四六〇〕書底の奥書あり。『續群書類從』卷五百二十三、日記部第二にあり。

◉宗長の傳記は『雨夜記』の下にあり。

そうちやうはふしうつやまのき

宗長法師宇津山記 （寫本）一卷 僧 宗長

駿河國宇津山の紀行にて、連歌數十首を詠み入れたり。永正〔二一六四―二一八〇〕の始の比の作也。

◉宗長の傳記は『雨夜記』の下にあり。

そうてい

崇程 （寫本）五卷 古賀 煜

程子の學說を尊崇して議論したるものなり。文化十三年丙子〔二四七六〕秋七月の自序あり。

◉古賀煜の傳は『建元疑編』の下にあり。

ぞうていなんかいはうふ

增訂南海包譜 三卷 山中 信古

柑橘類を集めて圖說したる「南海包譜」〔文政元年村瀨敬之の編輯〕を增訂したるもの。種類凡て七十餘種を網羅して彩圖一冊を添へたり。慶應元年乙丑〔二五二五〕の編輯にかゝる。

◉山中信古は、通稱篤之助、紀州の人、本居大平の門人なり。本書の外に文車遺響、南狩遺文、聖武記拔萃の著あり。

そうていれきかげんはふしちせいれき

崇禎曆加減法七政曆 （寫本）一帖 山路 才助

寛政五年癸丑〔二四五三〕の七政曆にして、「崇禎曆」の加減法に依りて、推步したるものなり。同四年の作。今見る所其の原本にして、內閣文庫に特別書として藏せり。

◉山路才助は幕府の日官にして、平の德風と稱せり。本書は、屬吏船山喜一、小林勝藏、佐野甚內等の補助隨步したるものなり。

ぞうどくかんぴし

增讀韓非子 四卷 蒲阪 圓

物徂徠の「讀韓非子」に增說したるものなり。諸本の異同は欄外に頭書せり。享和二年壬戌〔二四六二〕の自序跋あり。

◉蒲阪圓の傳は「韓非子纂聞」の下に出でたり。

そうびやうしやしよくたふもん

宗廟社稷答問 （寫本）二卷 吉見 幸和

本朝の宗廟社稷につきて答問的に論述す。伊勢內宮のみ宗廟にして、その餘は皆社稷なりと論斷す。元文五年庚申〔二四〇〇〕の自序、同三年男幸混の序あり。

◉吉見幸和の傳は『國學辨疑』の下にあり。

そうふくき

曾福貴 （寫本）一卷 清原 經賢

僧官僧服の事を記したるものにて、貞享、元祿、寶永、正德等の奥書あり。

◉清原經賢は舟橋氏にして、式部少輔たり。尊雅房常覺阿闍梨と號す。

そうふくわんじゐんるゐ

僧譜冠字韻類 百五十卷 僧 晃全

明凌廸知が「萬姓統譜」に倣ひ韻を以て僧名の冠字を類聚し、各其行狀を詳記したるもの。七佛略例、世雄年表、僧譜年表、府州沿革、卷次統名、僧譜或問等を附錄す別に一卷自序あり貞享二年乙丑〔二三四五〕の自序及び人見節、僧心越の序等あり。

◉僧晃全は俗姓宮脇氏にして讚岐の人なり。江戶に出で高輪泉岳寺に住職たり。

ぞうほいづしちたうぜんづ

增補伊豆七島全圖 一折 東條 信耕

伊豆七島の圖に無人島八十嶼圖、相武房總海岸圖を附す。海路の遠近、沿海の出入曲折より、戶口、田賦、物產、山川等を明示せり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕の作を、岡部喜任の校定するところなり。

◉東條信耕の傳は「近代著述目錄後編」の下に出づ。

ぞうほうたまくらあきのねざめ

增補歌枕秋の寢覺 八卷 有賀 長伯

先著「歌枕秋の寢覺」を增訂したるものなり。著者の傳は同書の下にあり。

ぞうほゑんきんかいりくみちのりにほんき

增補遠近海陸道程日本記 一卷

本邦諸國の道程及び各城主の江戶邸宅所在地を示したるもの。寶永年間の刊行に係る。

ぞうほおしめいしよづゑ

增補忍名所圖會 （寫本）二卷 岩崎 長容

洞李香齋の「忍名所圖會」に、其の遺漏を增加したるもの。忍は武藏の一地名なり。同地の古事奇談、社寺道程等を記入說明するもの多し。增補は一字を下げて記せり。天保六年乙未〔二四九五〕の自序あり、同十年の附言あり。尙諸家の序跋を附す。

ぞうほおほさかぐんだんしよせつさんかう

增補大阪軍談諸說參考 （寫本）三卷

關原戰後慶長七年壬寅〔二二六二〕より、同十九年甲寅に至る、德川氏に關する雜記たり。その記事の大阪戰役に及ばざるは、著者完稿する能はざりしもの歟。記述濫雜にして史實に乏しきよし、先哲既に評せり。

ぞうほおんからかさあまあがり

增補御傘雨夢 十冊 椋梨 一雪

俳諧の集なり。松永貞德の「御傘」を增補したるものなり。延寶四年丙辰〔二三三六〕三月の編に係る。

◉椋梨一雪の傳記は「肩入奉公」の下にあり。

ぞうほかいさんきかうもくだいぜん

增補改算記綱目大全 一卷

舊來傳ふる所の「改算記綱目大全」を改書したるものに過ぎず。年代及著者詳ならず、想ふに書肆が「改算記綱目大全」を變化したるものゝ如し。

ぞうほかうこぐわふ

增補考古畫譜 九卷 黑川 春村

五十音順に分ち、荒海御障子より、秀吉公像まで數百の古畫を考證したるもの。春村の原稿を、古川躬行纂輯し、黑川眞賴增補して、明治十五年より始め漸次二十二年に及びて第九冊ひの部までを出版す。宮內省博物館の藏版たり。

◉黑川春村の傳記は「神名帳考證土代附考」の下にあり。

ぞうほかがくしふ

增補下學集 五卷 山脇 道圓

東麓破衲の「下學集」の詳審ならざるを憂ひて、天地門、時節門以下凡て十八門に就て、大に增訂して、事物の名稱故實、名所舊蹟等を類集して、漢文詳註を加へたるもの。文安元年甲子〔二一〇四〕東麓破衲の原序、寛文九年己酉〔二三二九〕山脇道圓の序あり。

ぞうほかふやうずゐひつ

增補甲陽隨筆 （寫本）十卷 加賀美 齊宮

甲斐國の草創國號等より一國の沿革變遷、山川、古蹟、寺社等に關する歷史的事實を主に、地誌的事項を記したる隨筆なり。天明元年辛丑〔二四四一〕加賀美平五郞遠愼の所持せるを、祖父加賀美三四郞遠淸模寫〔甲陽尋蹟志として解題す〕し漸次增加して、文政三年庚辰〔二四八〇〕九月、齊宮昌平官庫に納めたりといふ。十卷五冊に寫傳す。著者加賀美齊宮は遠愼と字す。

ぞうぼくとうごくきかう

宗牧東國紀行 （寫本）一卷 谷 宗牧

京都より東海道を經て、江戶に至りし時の紀行。天文十三年甲辰〔二二〇四〕九月二十日といふに都を出でて翌年三月江戶に到着するまで、その間の見聞、社寺、舊蹟、名勝、佳景を記し、餘韻を詩歌、發句等に委ねて記せり。

◉谷宗牧の傳記は「闇夜一燈」の下にあり。

ぞうほくわいはうゑいたいぐら

增補懷寶永代藏 一卷 田中友水子

大阪藏屋敷に輸入したる、諸國米穀の入貫俵數を記し、また占候の方法等をも記したるものなり。寛延元年戊辰〔二四〇八〕の著にかゝる。著者田中友水子は本書の外に「風狂文草」五卷を著せり。

ぞうほくわだんだいぜん

增補花壇大全 八卷

牡丹、芍藥、櫻、梅、椿、桃、梨、躑躅、菊、其他諸草花の培養法、接木法等を圖說したるもの。元祿七年甲戌〔二三五四〕著者未詳の原本を、文化十三年丙子〔二四七六〕增補したるものなり。小本八冊に作れり。

ぞうほげんみんしりやく

增補元明史略 四卷 山本 正臣

後藤世鈞の元著「元明史略」に增補したるものな

り。寶曆元年辛未〔二四一一〕の自序及び越克敏の序、中村明遠の跋、享和元年辛酉〔二四六一〕岩垣彦明の跋、同三年源勒の序あり。著者山本正臣は藤原姓を稱す。

ぞうほこじめいえふしふ

增補古事名葉集　二卷　古筆　了伴

古筆名葉集を增補したるもの。其凡例に曰く、「古筆切は元祖了佐の頃、由緒正しき奧書等を見極めたるを名物切とす。また其正筆を本として類筆を新極するなり。古來極りたるは數無く追年古筆切となり、世上に出るなれば名物切を紛れて能く見覺え置かば、自然に類切見ゆるものなり。併し精鑑に至らざれば難し」とあり。安政五年戊午〔二五一八〕摘忠室の序あり。

◉古筆了伴の傳は「紫巖印章花押譜」の下にあり。

ぞうほししよごきやうじびき

增補四書五經字引　一卷

四書五經の本文を其の字の畫數によりて、列擧し音訓義譯及び各書名等を附したるもの。一畫より三十三畫に至る。安政四年丁巳〔二五一七〕横本一小册子に作り、卷頭書名の上には、道春點、後藤點と割書せり。

ぞうほしほんじ

增補詩本事　一卷　淸　敬直

淸の程羽文が撰集したる「詩本事」を增補したるものにして、詩史、詩聖、詩家等の熟語を擧げて出據を註せり。天保十五年甲辰〔二五〇四〕の自序あり。

ぞうほしゆはんはつもう

增補手版發蒙　一卷　大阪屋四郎兵衞

藥種のことを記す。古來の藥店袖珍の本を訂正したるものにて文政六年癸未〔二四八三〕上版せる横綴小本なり。著者大阪屋四郎兵衞は江戸の八官町の藥種屋なり。

ぞうほしようえふめいしよわかしふ

增補松葉名所和歌集　八卷　尾崎　雅嘉

宗惠の「松葉名所和歌集」を增訂して、更に四季の讀合景物を頭書したるものなり。

◉尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

ぞうほせんぱふえふりやく

增補占法要略　二卷　高松　芳孫

占筮法の大要を述べたる「占法要略」を增補したるものなり。弘化三年丙午〔二五〇六〕の自序を附し、翌四年出版す。

◉高松芳孫は貝陵また易蘇堂と號し、神田お玉ヶ池に住し易學を以て鳴る。著書は本書の外に「日東易蘇」「殷易索考」等あり。

ぞうほたうせいかいさんき

增補當世改算記　一卷　金子　昌良

既に「當世改算記」の著あり、本書は之れに點竄以上の諸術を增補したるものなり。弘化四年丁未〔二五〇七〕出版せらる。

◉金子昌良の事は「當世改算記」の條にあり。

ぞうほたうせいぢんこふき

增補當世塵劫記　一卷　會田　安明

著者先に「當世塵劫記」を著し、自ら謂ふ唐突の際にして杜撰なりしと。今是れ等を修正し且つ十三條を增補し前書より改正訂正したる所多し。寬政六年甲寅〔二四五四〕開版す。

◉會田安明の傳記は「算法古今通覽」の條に詳なり

ぞうほちきんせう

增補地錦抄　八卷　伊藤伊兵衞

植物の圖說。卷一に牡丹、芍藥。卷二に椿、山茶花。卷三につゝじ、さつき、梅、桃、海棠、櫻。卷四に楓。卷五に藤、桂、柑類、松、竹、冬木、實色付類。卷六に草花春の部、同夏の部、百合草、水草。卷七に草花秋の部、菊類、葉見事なる分、冬草。卷八に草木を植る土の品々、土地の見樣、植物を適地に遷る法、植替の季節等を記せり。寶永七年庚寅〔二三七〇〕の出版なり。

◉伊藤伊兵衞の傳は「廣益地錦抄」の下にあり。

ぞうほちくえふしふ

增補竹葉集　（寫本）一卷　蓮　阿

著者自撰の歌集「竹葉集」〔二百九十九首あり〕に、川口某といふもの、蓮阿の遺詠を廣く求めて、五千餘首に增補したるものなり。なほ好辨の「小補竹葉集」あり、此の書中より更に撰抄したるものなり。編年詳ならず。

◉蓮阿のことは「西行談抄」の下にあり。

ぞうほつゝゐけのき

增補筒井家記　（寫本）二卷

筒井氏數代の事績を詳敍す。始祖順武より數代を歷て順永より順昭に至る五代の事實を揭げ、次に第六代順慶一生の事業、其子定次父子の滅亡まで記せり。

ぞうほにほんしほぢのき

增補日本汐路之記　一卷　高田　政度

海路行程、磯、島、瀨戸、灘等の難所、湊の善惡、津々浦々の汐がかりに至るまで詳記し、大阪、江戸、長崎、肥前、豐前、筑前、肥後、豐後より、諸所との行程及び風雨の豫知法、潮の滿干等を記せり。明和七年庚寅〔二四三〇〕の自序あり。數多の船翁に就て四十年間見聞習熟せる所を記せりといふ。

ぞうほへうちうこげんてい

增補標註古言梯　一卷　村田　春海

揖取魚彥の「古言梯」に、村田春海の標註と、淸水濱臣の標註とを加へたる者。文化三年丙寅〔二四六六〕再版。文政四年辛巳〔二四八一〕淸水濱臣の序あり。

◉村田春海の傳は「作文通弊」の下にあり。

ぞうほへうちうことばのやちまた

增補標註詞の八衢　二卷

本居春庭の「詞の八衢」に、淸水濱臣增補し、岡本保孝標註し、加部嚴夫が校正して、明治十三年庚辰〔二五四〇〕刊行せられたるものなり。

ぞうほみやくろんくけつ

增補脈論口訣　五卷

卷の一に「兩手寸關尺三部の圖」より、「系脈といふ事」に至る四十條。卷の二に「四脈の辨察」より、「六部の脈診候」に至る二十一條。卷の三に「七種の死脈」より、「二十四脈病論附り藥註」に至る九條。卷の四に「婦人一切脈察の辨、附り胎脈」より、「六門三法の事」に至る三十二條。卷の五に「醫家の必用」より、「尺寸蜒際大推の定法、並に禁穴」に至る二十條あり。天和三年癸亥〔二三四三〕書林玉池齋の序あり。

ぞうほめいしよはうがくせう

增補名所方角抄　（寫本）三卷

日本各國を東西南北に分ち各名所の方角を指示したるものなり。古歌を引くこと多し。寫本には宗祇と署名したれども其の實然らずといへり。

ぞうほわかだいりんせう

增補和歌題林抄　十一卷　北村季吟

和歌の題を撰びて、各意義、趣向、時季等を詳細に記し、例歌を擧げて作歌の用に供したるもの。一條兼良の「和歌題林抄」三卷に漏れたる題どもを增補せるなり。上欄に歌詞を類擧せり。東山天皇の寶永三年丙戌〔二三六六〕出版し、更に安永六年丁酉〔二四三七〕再版したるものなり。

◉北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

ぞうほわかみちしるべ

增補和歌道しるべ　九卷　河瀨菅雄

榮雅の「和歌道しるべ」三卷に基きて、題、詞、證歌等を數倍に增益したるものなり。卷一、二、三、四、五、六に四季、戀、雜。卷七に制詞。卷八、九に名所の部を集めたり。自序あれど、年月を記さず。

◉河瀨菅雄の傳は「醉露軒和歌集」の下にあり。

ぞうほわかめいだいぶるゐ

增補和歌明題部類　二卷　尾崎　雅嘉

在來の「明題部類抄」七卷を正誤增減したるものなりといふ。寬政六年甲寅〔二四五四〕出版せり。

◉尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

ぞうほわかんめいすう

增補和漢名數　二卷　貝原　篤信

從來の「和漢名數」を增補したるもの。天文、節序、地理、人紀、人事、神祇、曆世、形體、動植、器物、經籍、官職、數量、醫家、佛家等に分ち、數字的の名詞を列擧す。元祿二年己巳〔二三四九〕の自序中に「王應麟が小學紺珠、張美和が群書拾唾の例に倣ひて、本邦の典故、人物、事績を併せ錄して、凡て名數にあづかるものを集む」云々とあり。

◉貝原篤信の傳は「自娛集」の下に出づ。

そうもんがくみなもとうりんにこたふるしよ

僧文覺答源羽林書　（寫本）一卷　僧　文覺

正治二年庚申〔一八六〇〕正月十日、鎌倉將軍源羽林賴朝に佛法信仰の大要を說示したる略書なり。

◉文覺は遠藤茂遠の子にして、俗稱の盛遠といふ。

少より性強悍にして武藝に達し、仕へて上西門院の北面となり、また院の武者所となる。年十八の時、誤て左衞門尉源渡の妻袈裟を殺し、忽ち悔恨感悟して僧となり、名を文覺と改め雲水修行を事とす。後罪を得て伊豆に流され、たま〳〵賴朝と知り、賴朝の覇業成るに及びて頗る禮遇を受け賴朝の薨後、朝廷の廢立を謀り、事露れて佐渡に流され、自ら食を斷ちて死す、時に年八十なりき。

そうやうさんぐわんしふ

宗養三卷集　（寫本）一卷　宗　養

宗牧の傳へたる連歌の祕體なり。風賦比興雅頌の說明其の他の數條及び詞句の使用までを記せり。

◉宗養は俳人宗牧の子にして慶長頃の人なり。別著に連歌答問、寄合連歌等あり。

ぞうやくさいらんいげん

增譯采覽異言　（寫本）十四卷　山村　昌永

新井君美の『采覽異言』に基き、和蘭陀の書『萬國航海圖說』、『萬國傳信紀略』の二書を以て、各國毎に增加し、更に桂川國瑞の『新製地球萬國圖說』及び和漢洋諸種の書を引て細註を加へたるものなり。卷一より卷十三までは、順次に歐羅巴、亞弗利加、亞細亞、亞墨利加等諸洲各國の地理を詳密に敍述し、卷十四には各洲の着色地圖十二面を載せたり。序卷には、享和二年壬戌〔二四六二〕大槻茂質の序、文化元年〔二四六四〕杉田勤の序、凡例十一則、五大洲の國名、引用書目〔西洋部三十六部、漢土部四十一部、日本部五十三部〕、全書の目錄並凡例、輿地總敍、世界略圖及び各國全圖等を收め、附錄には新井白石の『東音譜』を舉げたり。『增譯采覽異言』は杉田勤の校正し、大槻茂質の參閱したるものなり。

◉山村昌永は土屋相模守の臣にして、才助と稱し子明と字す。本書の外に華夷一覽圖、華夷一覽志、西洋雜記等の著あり。

ぞうやまのゐ

增山の井　二卷　北村　季吟

俳諧用四季の詞を類集したるものなり。寬文三年癸卯〔二三二三〕の作にして橫綴一冊なり。

◉北村季吟の傳は『源氏物語湖月抄』の下にあり。

そうよりあいとめちやう

總寄合留帳　（寫本）八十冊

幕府評定所より引繼ぎて、今內閣文庫に保存せり。明和九年壬辰〔二四三二〕より安永三年甲午〔二四三四〕に至るもの一冊、安永七年より十年に至るものの二冊、天明のもの三冊、寬政のもの八冊、享和のもの三冊、文化のもの十五冊、文政のもの十二冊、天保のもの十三冊、弘化のもの四冊、嘉永のもの六冊、安政のもの六冊、萬延のもの一冊、文久のもの三冊、元治のもの一冊、慶應元年乙丑〔二五二五〕のもの一冊等なり。各一冊は皆浩瀚にして、他の書冊と比較すべきものにあらず。

そうりかんかうぶんせう

宋李旴江文鈔　三卷

李泰白の集中より富國強兵安民の三策を抄錄したるもの。慶應元年乙丑〔二五二五〕杉原直卷の序を附し、同二年出版す。

そうりんしふ

叢林集　九卷　僧　慧空

淨土眞宗の教義儀式及び傳記等を集錄したるもの。初め六卷を「義集」とし教義に關す。後三卷を「事集」となし儀式史傳に關す。義集の部には、學問、三經大綱等より、二種回向、出世本懷等に至る四十八條、事集には一宗本尊、寺院道場等の事より、眞宗各派の略記等に至る三十條あり。凡て假字文より成る。題號の意は自序に「義文事理眞俗統て聚めしかば、林と叢との茂きが如し」とあるにて知らるべし。元祿十一年戊寅〔二三五八〕仲夏成稿す。明治十三年九月に校訂出版したる「眞本叢林集」は初め六卷のみなり。

◉慧空は東本願寺派の學僧。正保元年甲申〔二三〇四〕五月、近江國野洲郡金森村善立寺に生る。初め叡山にありて精研累年、後專ら宗乘を修め造詣頗る深し。門徒の請に因つて京都二條西福寺の住持となりしが、延寶八年十二月世務を辭し、只管藏經を閱覽せり。享保六年辛丑〔二三八一〕十二月、七十八歲にて歿す。本山諡して光遠院と曰ふ。實に高倉學寮第一世の講師なりき。

そうんしふ

素雲集　（寫本）一卷　素　雲

著者の歌集にて、靈元天皇の天和元年辛酉〔二三四一〕より、東山天皇の寶永七年庚寅〔二三七〇〕に至る間の詠出を編集したるものなり。四季戀雜に類別して數百首あり。

そがいしかはりやうしけいづ

蘇我石川兩氏系圖　（寫本）一卷

孝元天皇にはじまり、大化五年己酉〔一三〇九〕に自殺せる倉山田石川麿に至る。『續群書類從』卷百六十七、系圖部第六十二に入る。

そかうき

素行記　（寫本）一卷　山鹿　高祐

學術武略平素の行狀に關する事を論述したるものなり。假名文にて記せり。

◉山鹿高祐の傳は『海備全策』の下にあり。

そがうものがたり

十河物語　一卷

讃岐十河の城主三浦政泰に關する雜事を記したるもの。多くは天正年間の事に係れり。『群書類從』卷三百九十五、合戰部第二十七に收めらる。

そがくわいけいざん

曾我會稽山　一卷　近松門左衞門

曾我兄弟の復讐を骨子として作り成せる淨瑠璃なり。享保三年戊戌〔二三七八〕七月初興行せり。

◉近松門左衞門の傳は『國性爺合戰』の下にあり。

そがくんこうき

曾我勳功記　十五卷　馬場　信意

汎く世に行はるゝ『曾我物語』とは記述の體裁を異にし、始めに伊藤河津工藤曾我等の系圖を示し、曾我兄弟が父の敵祐經を討殺したる顚末を詳記したるものなり。

◉馬場信意の傳は『義經記判註』の下にあり。

そがけいづ

曾我系圖　（寫本）一卷

鎭守府將軍良文八代の末孫、太郎祐信より、寬永年中德川秀忠に仕へたる槇左衞門近祐に至る。『續群書類從』卷百四十六、系圖部第四十一に入る。同書には別本二種あり、一は從五位下伊豫守包助より、近祐の子、御書院御番仕侯にして二千五百石を領せる曾我又兵衞尉仲祐に至り、一は、同包助より、同仲祐の弟にして分知五百石を領せる曾我又十郎利祐に至れり。

そがけにつき

曾我家日記　（寫本）十卷　曾我太郎左衞門

著者が寬永十六年己卯〔二二九九〕七月十日、御奉行頭を命ぜられしより、寬文八年戊申〔二三二八〕十二月二十八日まで、奉職中の日記なり。傍ら營中沙汰の類をも記せり。

そがひやうごのかみはちじふごかでう

曾我兵庫頭八十五ヶ條　（寫本）一卷

家傳の儀式故實八十五箇條の目を列擧す。卷末に曾我又左衞門尉尙祐が慶長十五年庚戌〔二二七〇〕の奧書あり。

そがものがたり

曾我物語　十卷

阪東の將士相會して赤澤山にて遊獵の際角力を催し、河津三郎が近江小藤太八幡三郎の爲めに射殺されし事より、曾我兄弟祐成、時致が、建久四年癸丑〔一八五三〕源賴朝の富士野の狩に於て、父の敵工藤祐經を討殺し、祐成時致が十番切の武勇を顯せし事等の始末を、詳細に記したるものなり。正保三年丙戌〔二三〇六〕版行す。

そがものがたり

（復讐狂言）曾我物語　三卷

曾我兄弟の復讐に擬して作り成せる寬弱本なり。

そがりうしよさつはふしき

曾我流書札法式　（寫本）十冊　柳井儀左衞門

公儀の書式より、武家書札法に至るまで、詳しく記述したるもの。天和三年癸亥〔二三四三〕柳井の奧書に、「右八冊之間書並祕傳抄、口傳抄、從曾我又兵衞門尙祐、同喜太郎祐昌、淺山七兵衞尉相傳之祕抄也、從七兵衞、菅川權兵衞相受、從權兵衞戶澤勘左衞門尉相受、從勘左衞門相傳之通、不殘令相傳訖、猥不可他見於有懇望人者、堅以神文可相傳者也仍如件」と記せり。

そがりやうしやえんぎ

曾我兩社緣起　（寫本）一卷

曾我兩社八幡宮並に虎御前觀音の緣起なり。曾我兄弟復讐始末の大略を記せり。『續群書類從』卷六十九、神祇部第六十九にあり。著者編年等は未だ詳ならず。

そぎそうのき

疏儀莊記　（寫本）一卷　北村　季吟

著者の別莊高田村（小石川區）疏儀莊に於ける雜記なり。寶永二年乙酉〔二三六五〕五月の作。「續みそのや」第四にあり。

◉北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」にあり。

ぞくあけがらす

續明鴉　一冊　谷口　蕪村

逝俳句集「明鴉」の後を續きて集めたるもの。安永五年丙申〔二四三六〕の編なり。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◉谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

ぞくあひづふどき

續會津風土記　（寫本）一卷

越後國蒲原郡の地誌なり。方位、田畑、戶口、馬數、村名、村數、山川、道路、神社、佛寺、墳墓、碑文、人物、古蹟等を記す。越後國蒲原郡小川庄松平正之の所領なる故に、「續會津風土記」とはいへり。「會津風土記」は松平正之の著なり。

そくゐくわんちやうのこと

即位灌頂事　（寫本）一卷

藤原冬良、藤原定基等の記錄より、御即位灌頂の事を部類記したるもの。寶永七年庚寅〔二三七〇〕洛陽松堂閑人寫本の奥書あり。著者藤原冬良の傳は『官位令』の下に、藤原定基の傳は「玉食供進抄」の下にあり。

そくゐしき

即位式　（寫本）一卷　一條　兼良

御即位の式并に大嘗會の事を記したるものなり。宗祇の奥書あり。

◉一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

ぞくいしようにほんでん

續異稱日本傳　（寫本）二卷　尾崎　雅嘉

松下見林の「異稱日本傳」の十五卷に續きて明清の書中より、我邦の事實を輯錄したるものなり。

◉尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

ぞくいなばみんだん

續稻葉民談　（寫本）三卷　鵜殿　主水

小泉友賢の「因幡民談」に遺漏したる古城、古文書等を輯錄せり。古城百五箇、古文書百二十八通を擧げたり。「稻葉」は、「國造本紀」の字に據れるなるべし古くより法美郡稻葉鄕といふあれば、國の名は是れより出でたるものなるべしといへり。著者鵜殿主水は因幡の人なり。

そくゐみそぎだいじやうゑのき

即位御禊大嘗會記　（寫本）一卷　一條　兼良

御即位式、御禊、行幸事、大嘗會の事等を記せり。文明十年戊戌〔二一三八〕二月、宗祇の請によりて筆を馳する由著者の奥書あり。同十一年卜部兼倶の附錄を附す。

◉一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

ぞくうらしまこでんき

續浦島子傳記　（寫本）一卷

浦島子の傳を、世說のまゝに漢文にて記したるもの。末に浦島子の詠じたる詩歌、龜媛を詠じたる詩歌等を載す。永仁二年甲午〔一九五四〕寫本の奥書あり。

ぞくえどすなご

續江戶砂子　五卷　菊岡　沾凉

先著「江戶砂子」に漏れたる江戶の地理的雜事を拾集したるものなり。瑣碎猥雜に涉るものあり。享保二十年乙卯〔二三九五〕の自序あり。

◉菊岡沾凉の傳は「江戶砂子」の下にあり。

そくゑんしやうかい

（算法）側圓詳解　二卷　村田　恒光

側圓の算法を詳解したるもの。從來側圓の法を解きたるものあれども、皆諸題中の僅數を解說したるに過ぎざりしなり。本書は終卷側圓の問題のみを設けて大に其の理を明にしたり。寔に側圓の獨學書とするに足る。天保四年癸巳〔二四九三〕版す。

◉村田恒光は佐十郎と稱し、如訥と號す。伊賀の人にして藤堂侯の藩士なり。初め業を父に受け、後、長谷川寬の門に入りて、大に算學に通ず。南勢に著名の人なり。

そくゑんてきとう

側圓適等　（寫本）一卷　白石　長忠

側圓周と他の二線相切し、或は側圓周と他の正圓周と內外に切する適等式を求むるの解法を記したるものなり。文政五年壬午〔二四八二〕に成れり。

◉白石長忠の傳は「社盟算譜」の下に詳なり。

そくゑんないようるいゑんじゆつ

側圓內容累圓術　（寫本）一卷　馬場　正統

側圓內に累圓を容れ、其の罅隙に又累圓を容る、其の容圓の箇數に隨て、各圓經を求むるの術を記載したるものなり。其の解法容易ならず、結局之れを括りて數十字の術文を附したるものなり。天保元年庚寅〔二四九〇〕に成る。

◉馬場正統の傳は「嗣利匯揭算法」の下にあり。

そくゑんばうせうゑんじゆつ

側圓傍小圓術　（寫本）一卷　馬場　正督

側圓周の內外に小圓周を切したる算題の解法を記載したる書なり。從來此題の解法算家の爲す所皆頗る繁雜なりしが、著者其の捷徑を發見し遂に此の書を著し、自ら此の法を稱して新法と曰へり。天保元年庚寅〔二四九〇〕に成る。

◉馬場正督は金之丞と稱し、董々また貢州と號す。德川幕府の士にして、勘定奉行を職とす。天保十四年癸卯〔二五〇三〕九月歿す、享年未だ詳ならず。

ぞくおうにんこうき

續應仁後記　十卷

卷一に主上御即位公方家代替事より、柳本彈正遭殺事付播州騷亂事に至る、九項。卷二に公方家官位御昇進事附細川禪門所々潛行事より、三好氏家傳由來事に至る九。卷三に公方家歸洛事付一揆亂科本願寺炎上事より、遊佐方三好方所々合戰、四國勢渡海事に至る十一。卷四に新將軍御元服記一。卷五に公方家北向川御籠城御和睦事より、萬松院殿御追悼和歌事に至る十一。卷六に進士九郞賢光欲殺三好長慶事より、河州畠山家騷動事に至る十。卷七に三好長慶父子上洛任官事より、河州教興寺表合戰附長慶畿內一統平治事に至る八。卷八に細川晴元同氏綱三好義興死去事より、松永彈正起南都合戰付大佛殿炎上事に至る九。卷九に新公方家南都御沒落江州御潛居事より、同濃州着御事附長催促事に至る九。卷十に信長江州征伐事附新公方御入洛事より、二條御所御造營御移徙事付禁中御條理の事に至る七。凡そ八十四項あり。

ぞくおくのほそみちてふのあそび

續奧之保曾道蝶之遊　三卷　北華山人

著者が陸奧の松島に遊びたる時の紀行なり。行路の吟を一々順次して記せり。祖翁芭蕉の「奧の細路」を慕ひて「蝶の遊」の上に冠したるなり。延享二年乙丑〔二四〇五〕の自序、及び東都岱昌の序あり。

◉北華山人は七富道人、十無居士と號す。俳人にして俳文にも長じたり。

ぞくをりたくしばのき

續折たく柴の記　（寫本）四卷　新井　君美

先著「折たく柴の記」に續いて、種々の事を記したるものなり。

◉新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

そくかうなんしん

（農業）促耕南針　（寫本）三卷　橋　鶴夢

穀類、菜類及び草木の種藝栽培に關する、自家の經驗を記述せり。享保七年壬寅〔二三八二〕七月の作にかゝる。著者橋鶴夢は武藏國高柳の農夫なり。

ぞくかかくるゐせん

續歌格類選　二卷　半井　梧庵

嘉永四年の自撰にかゝる「歌格類撰」に續きて歌用の言詞數百を蒐集したるもの。いろは順に、各言詞を解し、一詞毎に四首若くは三首宛の例歌を擧げて傍釋し、末に歌學上の法則言詞の係結用法等を說明す。嘉永六年癸丑〔二五一三〕山田桑平の序あり。

◉半井梧庵の傳は「愛媛面影」の下にあり。

ぞくがくべん

俗樂辨　（寫本）二卷

上卷に申樂、散樂、散更、新猿樂、猿樂、能猿樂、田樂。下卷に白拍子、平家、幸若、說經、歌祭文、歌念佛、冷泉綱戶、歌舞妓、淨瑠璃、三絃等を辨說せり。二卷一冊に作る。

ぞくがくもんだふ

俗樂問答　一卷　松平　定信

俗樂の事に就きて、京師伶家の宿老と問答したる往復狀を書き輯めたるもの。今世行はれたる樂は昔李唐の代に彼の地にて學び得たる所にて俗樂なり。然るに此の宴遊の樂を以て雅樂と唱ふるより

其理由を質問したる也。「樂翁公遺書」中卷に收む。
◎松平定信の傳は「花月草紙」の下に出づ。

ぞくかりんりやうざいしふ

續歌林良材集　二卷　下河邊長流

一條兼良の「歌林良材集」に續く意にて、歌學上の用材を考説したるもの。上卷に下てる姫の事より、とゝきの矢の事に至る四十八條。下卷にかめの上の山の事より、ほとけの兄の事に至る六十八條を掲ぐ。和漢の書に引徵して論述す。自序あり、延寶五年丁巳〔二三三七〕五月の版なり。
◎下河邊長流の傳記は「枕詞燭明抄」の下にあり。

ぞくかんざつしふ

俗簡雜輯　一卷　吉田松陰

吉田松陰の書翰數十編を輯めたるもの。久坂義助の編纂に係り、明治二十八年乙未〔二五五五〕に新刊せられたり。
◎吉田松陰の傳は「講孟劄記」の下にあり。

ぞくかんはんよ

俗簡焚餘　木活二卷　佐藤坦

上卷に塾規〔三條〕塾中心得添書、京師の人渡邊顧齋の問に答ふ。與友人戒酒書、答福知山侯書、答望月主水、答加藤右近問、答三谷潛藏端書、答大鹽平八郎、答川路氏〔二通〕、丁亥偶得兒之儀に付掛合書面、梶介之服爲致候手紙。下卷に御心得向存意、御輔道存意書、某侯代撰、丁亥建言、重職心得箇條、答三宅辰之助、女中掟、己丑正月岩村異學之禁、濟厥略記、菩提所取扱方、答長村内藏助〔二通〕、答磯野定兵衛、答成島邦之助、答松島深藏、答鎌原伯耆、答櫻井兵藏等を收む。最終の書には嘉永三年庚戌〔二五一〇〕の日附あり。
◎佐藤坦の傳は「愛日樓文詩」の下にあり。

ぞくきいくしふ

續淇澳集　木活十卷　川田保知

編者の同門人なる久保寺正福は古川芳春の門弟子を讓與せられたり。正福其門弟子を教授するに當りて常に算題を壁上に掲げて諸子をして其の答術を案せしむ。文化十三年より文政三年に及びて、凡五年間設問頗る多し。本書は編者が正福氏に請うて其の算題を集錄したるものなり。先に古川氏の門に「淇澳集」あり、今編成の法全く相同うして、只年月相後れたるのみ。因りて名けて「續淇澳集」と曰ふ。故に本書も亦題者及び答者を記名したる答術加附の算題集なり、文政十二年己丑〔二四八九〕に編成す。
◎川田保知は彌一郎と稱す。古川芳春の門に入りて、大に算學を學べり。

ぞくきやうかいさう

續鏡海草　五冊　顯成

著者の俳諧集にして、寛文二年壬寅〔二三二二〕七月編輯したるものなり。
◎顯成のことは「鏡海草」の下にあり。

ぞくきやうくわうしんろん

續恐惶神論　木活一卷

一種の夢談に託して德川幕府の政治を論評したるものなり。著者詳ならず。

ぞくきやうげんき

續狂言記　四卷

「狂言記」に續きて數十番を錄したるものなり。四卷小本横綴四冊に版行す。

ぞくきよじかい

續虛字解　二卷　皆川愿

先著「虛字解」に遺漏したる漢字の虛字を、拾輯訓譯したるもの。寛政四年壬子〔二四五二〕九月に上梓せられたり。
◎皆川愿の傳は「淇園文集」の下にあり。

ぞくきよりつ

續虛栗　一册　榎本其角

著者と諸士との俳句集にて、天和三年の「虛栗」の續編なり。貞享四年丁卯〔二三四七〕の編にて共に行る。俳諧文庫第九編「蕉門十哲集」の中にも收む。
◎榎本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

ぞくきんせいきじんでん

續近世畸人傳　五卷　三熊思孝

伴蒿蹊の「近世畸人傳」に續きて、名人の事歷を傳したるもの。三熊思孝の編輯するところ、其の歿後蒿蹊の校正して上木したるものなり。插畫は思孝の妹露香女の筆するところなり。寛政五年癸丑〔二四五三〕三熊思孝の序、同九年石見浦世纉の序を附し、翌十年出版す。
◎三熊思孝は介堂と字し、主計と稱し、花顚と號

す、加州の人にして、山城鳴瀧村に住せり。幼より畫を好み、長崎の月湖に從ひて學び、日夜精研して遂に此の技に長じ、畫家を以て當時に知らる。就中櫻花に通精し、其模寫眞に逼れりといふ。光格天皇の寛政六年甲寅〔二四五四〕八月二十六日、六十五歲にて歿せり。

ぞくきんせいそうご

續近世叢語　八卷　角田簡

本書は「近世叢語續編」の名の下に解題せり。

ぞくぐうじくもんせう

續宮司公文抄　木活一卷

宮司の進退に關する公文諸先例を輯錄したるものにて、嘉永年中のものに迄及べり。

ぞくぐぎやうかでん

續公卿家傳　木活一卷

「公卿家傳」に續きて、近衞、鷹司、九條、二條、醍醐家等を傳譜せる一寫本なり。

ぞくくわあふそう

續花押藪　七卷　丸山可澄

先著「花押藪」に續ぎ、同例に由て諸家の花押を集めたるもの。卷一に天子、親王、執柄大臣、大中納言、參議、二位、三位。卷二に四位。卷三、四、五に五位。卷六に士庶。卷七に釋家、連歌師等の花押凡そ七百餘を收載す。寶永五年戊子〔二三六八〕九月の自序あり。同八年三月出版す。
◎丸山可澄の傳は「花押藪」の下にあり。

ぞくくわういんせううんづ

續皇胤紹運圖　木活一卷

「皇胤紹運圖」に續ける歷代皇胤の系圖略譜にして、後陽成天皇の諸皇子より、第百十四代の御世に至るまでを記し奉れり。

ぞくくわうてうしりやく

續皇朝史略　五卷　青山延于

先著「皇朝史略」に續ぎ、稱光天皇の應永二十年癸巳〔二〇七三〕より、後陽成天皇の慶長五年庚子〔二二六〇〕までを記載せり。天保二年辛卯〔二四九一〕の自序あり。
◎青山延于の傳は「皇朝史略」の下にあり。

ぞくくわんじかう

續冠辭考　木活二卷　服部高保

賀茂眞淵の「冠辭考」に續ぎて遺漏せる冠辭凡そ一百三十四條を撰びて解釋したるものなり。外に別記一卷を添へたり。次に解題せり。安永四年乙未〔二四三五〕冬十二月の考説なり。
◎服部高保の傳記は「萬葉集大註」の下にあり。

ぞくくわんじかうべつき

續冠辭考別記　木活一卷　服部高保

冠辭の、いれひもの、まつかれの、まつかへの、きみかいへに、こもりぬの、其の他總て五十三箇を擧げ、各箇下へのつゞけ詞を出して一々解釋說明せり。安永四年乙未〔二四三五〕冬十二月の記事なり。
◎服部高保の傳は「萬葉集大註」の下にあり。

ぞくくわんしよくふせつわくもん

續官職浮說或問　木活一卷　壺井義知

著者の前作「官職浮說或問」の續編なり。著者の傳は同書の下にあり。

ぞくぐんしよるゐじゆ

續群書類從　木活一千卷　塙保己一

曩に編輯したる群書類從〔五百三十卷〕に入らざる書類を、更に拾輯網羅したる大叢書なり。收むるところの書、實に二千一百〇三種。此の中刊行せられたるは、徒然草二冊、見在書目一册、後嵯峨院皇統系圖一册と、本書の目錄二册とにして、其の餘は寫本にて傳れり。其の寫本の現存も全國を通じて四五部に過ぎざるべし。其の中にも刊本目錄に相當せる完本は稀にして、宮内省、東京帝國大學圖書館、帝國圖書館等にあるものも、何れも數十卷若くは百餘卷を闕けり。塙家に傳りたる一書、近年岩崎男爵家に讓られたるが、其の一書のみは眞の完本なるべしといへり。然れども、此の際同家に就て實査するの暇なく、暫く人の傳ふるがまゝを記す。本書の分類法は「群書類從」の分類法と同じく、神祇部、帝王部、補任部、系圖部、傳部、官職部、律令部、公事部、裝束部、文筆部、消息部、和歌部、連歌部、物語部、日記部、紀行部、管絃部、蹴鞠部、鷹部、遊戯部、飲食部、合戰部、武家部、釋家部、雜部の二十五に分てり。左に其の細目を掲ぐ。
神祇部〔卷一より卷八十一に至る八十一卷〕＝神皇雜用先規錄、二所皇大神宮御鎮座傳記、同御鎮座次

第記、豐受皇太神宮御鎭座本記、倭姫命世紀、二所太神宮寶基本記、二所皇太神宮神名祕書、皇字沙汰文、內宮御神寶記、外宮御神寶記、外宮遷宮奉仕來歷、康曆二年外宮遷宮記、建久九年內宮假殿遷宮記、文永三年內宮遷宮沙汰文、正中御飾記、永享元年外宮山口祭記、應永二十六年外宮神寶送官符、寬正三年內宮神寶送官符、建久三年皇太神宮年中行事、二宮年中行事、四度幣部類記、伊勢公卿敕使雜例、康和以來公卿敕使設、仁安四年公卿敕使記、嘉曆三年公卿敕使參宮日記、永正十五年一社奉幣使參向記、高宮盜人闖入記、同注進狀、離宮院記、內宮子良館記、外宮子良館記、總官公文抄、應永以來外宮注進狀、延德以來內宮注進狀、永正以來宮司引付、荒木田氏經引付、荒木田守晨引付、度會常有引付、宇治土公家引付、有附日記、通海參詣記、釋尊寺蓉記、榊葉集、八幡愚童訓、鳩嶺雜日記、石淸水末社記、石淸水臨時祭記、文永六年兼文宿禰勘文、大永五年石淸水八幡遷宮日時定、永享十年石淸水放生會記、貞應二年宗淸法印立願文、嘉祿元年同人立願文、嘉元年中賀茂祭記、延文元年賀茂臨時祭記、長祿三年賀茂祭雜用引付、稻荷鎭座由來記、春日御託宣記、春日祭舊例、嘉慶元年春日臨時祭記、天文年中春日祭次第、弘安四年春日入洛記、貞治三年春日御動座記、永德二年春日社燒失記、應永十四年春日社造替日記、應永三十四年春日社遷宮日記、應安二年春日三十八所造替記、應永十五年春日若宮臨時遷宮記、寶德三年春日御八講日記、正安元年率川社注進狀、應永七年率川社遷宮記、春日社司補任記、春日權神主師盛記、春日權神主師淳記、春日正預祐範記、春日拜殿方諸日記、春日詣部類記、明德二年室町殿春日詣記、三輪大明神緣起、龍田大明神緣起、住吉社諸神事次第、耀天記、嚴神抄、日吉山王利生記、續日吉山王利生記、日吉本紀、日吉山王新記、元應元年比叡社司注進狀、永祿五年拜禮講記、應永元年室町殿御社參記、祇園牛頭天王緣起、貞治四年祇園三鳥居建立記、御靈會山鉾記、祇園社舊記、北野宮寺緣起、北野本地、天神講式、天滿大自在天神寶號記、北野神君託顯記、二十二社本地、惟賢比丘筆記、神祇正宗、神祇拾遺、類聚既驗抄、麗氣記、神階記、恒例修正月勸請神名帳、淸瀧宮勸進帳、戒壇院公用神名帳、和泉國神名帳、三河國神明名帳、若狹國神階記、隱岐國神名帳、紀伊國神名帳、筑前國神名帳、赤山大明神緣起、豐國大明神祭禮記、東大寺八幡驗記、同轉害會記、葛城寶山記、鐵作大明神緣起、菅神初瀨影向記、靈安寺御靈大明神緣起、粢田八幡緣起、熱田宮祕釋見聞、熱田講式、足助八幡緣起、曾我兩社緣起、弘安四年鶴岡八幡遷宮記、香取宮造營記、應永二十六年香取宮造營注文、至德年中香取神事目錄、香取宮遷宮用途記、媛殿遷宮用途記、鹿島宮社例傳記、同年中行事、新治郡賀茂大明神緣起、久慈郡薩都宮奉加帳、那珂郡甲明神奉加帳、諏訪大明神繪詞、近江國別浦八幡緣起、野洲郡兵主大明神緣起、信濃國中條宮辨才天由來記、會津高倉社勸進帳、加賀國白山緣起、嚴島御本地、熊野金剛藏王寶殿造功日記、慈源僧正熊野入堂記、丹生大明神儀軌、正應六年高野山官符、伊豫國三島社緣起、太宰府安樂寺緣起、同菅丞相祠堂記、豐後國由原八幡緣起、名法要集、兼邦神道百首和歌、諸社禁忌、永享十二年神宮服忌令、應仁二年神宮服忌令、八幡服忌令、稻荷服忌令、新羅社服忌令、日光服忌令、觸穢問答、觸穢考、神祇道服忌令（以上一百六十六種）

帝王部（卷八十二より卷八十八に至る七卷）＝皇代略記、朝覲行幸部類、延慶二年御方違行幸雜事、正和三年朝覲行幸記、元亨四年石淸水行幸行列、應永二十一年御方違行幸記、永享九年室町殿行幸記、聚樂亭兩度行幸記、御幸始部類記、元弘四年御幸始次第、正安元年新院兩社御幸記、延慶二年八幡御幸記、應永二十九年八幡御行次第、寶治二年宇治御幸記、建仁元年熊野山御幸記、正和二年後宇多院高野御幸記、內裡遷幸部類、永久五年遷幸記、法住寺殿御移徙部類（以上二十種）

補任部（卷八十九より卷百〇五に至る十七卷）＝撿非違使補任、藏人補任、相國歷名、院司次第、當儒侍讀年譜、將軍次第、執事補任次第、長門國守護職次第、二所太神宮禰宜轉補次第、祇園執行補任次第、熊野別當次第、宗像社大宮司次第、僧綱補任、護持僧補任、護持僧次第、任僧綱土代、法中補任、探題次第、仁和寺御室系譜、菩提院列祖次第、勝寶院列祖次第、大覺寺門跡次第、大覺寺門跡略記、梶井門跡略譜、靑蓮院門跡系譜、妙法院門跡相承次第、圓滿院門跡相承次第、曼殊院門跡傳法師跡次第、勸修寺長吏次第、安井門跡次第、醍醐寺座主譲補次第、金剛王院列祖次第、理勝院院務次第、三寶院列祖次第、東寺長者次第、金剛峯寺撿挍補任略記、傳法院座主補任次第、法琳寺別當補任、龍寶山住持位次、天台座主記、園城寺長吏次第、天王寺別當次第、大乘院門跡次第、興福寺寺務次第、興福寺三綱補任、法隆寺別當次第、鶴岡八幡供僧次第、鶴岡兩界壇供僧次第、同脇堂供僧次第、日光山別當次第（以上四十九）

系圖部（卷百〇六より卷百八十八に至る八十三卷）＝皇胤系圖、皇帝系圖、後嵯峨院皇統系圖、尊卑分脈脫漏、武藏七黨系圖、淸和源氏系圖、足利系圖、古河公方系圖、喜連川判鑑、武衞系圖、奥州斯波系圖、大崎系圖、最上系圖、山野邊系圖、細川系圖、同略本、同別本、畠山系圖、同別本、二本松系圖、山名系圖、同別本、吉良系圖、同別本、今川系圖、瀨川系圖、一色丹羽系圖、里見系圖、同別本、同密藏院本、由良系圖、吉見系圖、木曾系圖、小田系圖、宍戸系圖、奥州石川系圖、島津系圖、同別本、同歷代歌、佐竹一門系圖、佐竹系圖、同正宗寺本、同支流系圖、同耕山寺本、佐竹系圖密藏院本、美乃佐竹系圖、革島系圖、武田系圖、武田系圖、同淺羽本、兩武田系圖、若州武田系圖、同別本、同淺羽本、同山縣本、紀州武田系圖、武田法印系圖、大井系圖、小笠原系圖、小笠原系圖、同別本、同諸流系圖、同三家系圖、高天神小笠原系圖、三好系圖、同別本、十河系圖、南部系圖、秋山系圖、保田系圖、竹內系圖、土岐系圖、同別本、舟木系圖、明智系圖、多治見系圖、多田系圖、山縣系圖、川那部系圖、下間系圖、高梨系圖、同別本、山岡系圖、赤井系圖、三上系圖、和田系圖、本鄉系圖、渡邊系圖、松浦系圖、大佛師系圖、佐々木系圖、佐々木系圖、駒井系圖、上阪系圖、平井系圖、兒島三宅系圖、北畠系圖、星合系圖、名和系圖、同別本、赤松系圖、同別本、同略譜、同岡本、同梶井本、同菅窺山本、有馬系圖、石野系圖、上月系圖、本間系圖、同佐渡本、同淺羽本、同略系圖、海老名荻野系圖、田代系圖、桓武平氏系圖、常陸大掾傳記、同系圖、同石川本、小栗系圖、岩城系圖、同別本、北條系圖、小田原北條系圖、同別本、福島系圖、伊勢系圖、同別本、安村系圖、織田系圖、江戸系圖、千葉系圖、同別本、千葉支流系圖、東系圖、鹿島當禰宜系圖、君島系圖、般若院系圖、相馬系圖、兩相馬系圖、相馬胤覺書、相馬家傳、笠井系圖、熊谷系圖、長尾系圖、平群系圖、土屋系圖、曾我系圖、湯淺系圖、日野一統系圖、御子左系圖、飛驒國司系圖、武藤系圖、內藤系圖、山內首藤系圖、那須系圖、千本系圖、粟生系圖、大友系圖、同別本、戶次系圖、立花系圖、菊池系圖、同別本、大森系圖、同別本、宇都宮系圖、同別本、上杉系圖、同別本、上杉系圖、同淺羽本、深谷上杉系圖、宅間系圖、加々爪系圖、糟谷系圖、同別本、秀鄉流系圖、小山系圖、同別本、結城系圖、同家譜、白川結城系圖、長沼系圖、岡本系圖、蒲生系圖、同別本、佐野系圖、佐野松田系圖、下河邊系圖、荒木系圖、奥州御館系圖、佐藤系圖、小野崎系圖、常州江戸系圖、利仁流系圖、桐原系圖、長井系圖、吉川系圖、工藤二階堂系圖、二階堂系圖、同加志村本、伊藤系圖、河津系圖、天野系圖、同別本、相良系圖、遠藤系圖、井伊系圖、成田系圖、龍造寺系圖、有馬系圖、淺井系圖、熊野別當系圖、中岩系圖、本願寺系圖、同別本、光德寺系圖、橘氏系圖、同別本、同山中本、楠系圖、阿蘇大宮司系圖、多氏系圖、中原氏系圖、江州中原氏系圖、小野氏系圖、同別本、大宅氏系圖、越智氏系圖、河野系圖、同別本、賀茂氏系圖、同別本、蘇我石川兩氏系圖、紀氏系圖、同上田本、堀田芳賀系圖、芳賀系譜、浦上系圖、石淸水祠官系圖、安倍氏系圖、同別本、藤崎系圖、安藤系圖、和氣氏系圖、同別本、小槻氏系圖、同別本、綾氏系圖、日下部氏系圖、同醍醐本、私市氏系圖、春原氏系圖、淸原氏系圖、同別本、豐後淸原氏系圖、石島系圖、高階氏系圖、堀尾系圖、豐原氏系圖、眞野氏系圖、在原氏系圖、滋野氏系圖、増田望月系圖、菅原氏系圖、同別本、同荏柄本、大江氏系圖、同別本、大中臣氏系圖、同畠山本、同別本、和田系圖、中臣氏系圖、鹿島大宮司系圖、同大禰宜系圖、香取大宮司系圖、同大禰宜系圖、卜部氏系圖、度會系圖、賀茂神宮鴨氏系圖、松尾社家伊伎氏系圖、住吉神主津守氏系圖、大伴氏系圖、伴氏系圖、同別本、鶴岡社職系圖、紀伊國造系圖、伊香氏系圖、廣峯氏系圖、大神氏系圖、同別本、戶部氏系圖、御神本氏系圖、丹波氏系圖、同小森本、同畠山本、坂上氏系圖、同別本、攝州長寶寺系圖、大藏氏系圖、秋月系圖、田尻系圖、惟宗氏系圖、長曾我部系圖、同別本、大內系圖、同別本、狛氏系圖、百濟氏系圖、坊官系圖、仁和寺侯人系圖（以上三百三十三種）

傳部（卷百八十九より卷二百四十三に至る五十五卷）＝上宮皇太子菩薩傳、聖德太子傳曆、文應皇帝外記、恒貞親王傳、道助親王傳、橘逸勢朝臣傳、參議保則卿傳、耕雲老人壽像贊、竹田法印壽像贊、東下野守益之壙記、宇喜多和泉守能家像贊、山縣源七郎元之傳、本朝神仙傳、入唐五家傳、本朝法華驗記、仁和寺諸師年譜、拾遺往生傳、後拾遺往生傳、三外往生傳、新修往生傳、高野往生傳、眞言列祖表白集、淨土源流章、三國名匠略記、日本名僧傳、行基菩薩傳、同行狀記、同遺骨出現記、鑑眞和尙三異事、傳教大師傳、同行狀、同行業記、空海大僧都傳、空海贈大僧正傳記、弘法大師行狀集記、弘法大師傳、弘法大師行化記、弘法大師廣傳、弘傳略頌抄、光定和尙行狀、慈覺大師傳、智證大師傳、聖寶僧正傳、尊意贈僧正傳、慈慧大師傳、空也上人誄、元杲大僧都自傳、增賀上人行業記、皇慶阿闍梨傳、覺鑁上人傳、源空上人

傳、隆寬律師略傳、聖光上人傳、記主禪師傳、不可棄法師傳、三輪上人行狀、親鸞上人傳、最須敬重繪詞、日蓮上人註畫讃、蓮公薩埵傳、蓮公大師年譜、一遍上人繪詞、一遍上人行狀、同年譜、淨阿上人行狀、無人和尙行業記、杲寶僧都事實、貞安上人行狀、賴印大僧正行狀繪詞、千光法師祠堂記、明庵和尙塔銘、道元和尙行錄、永平寺三祖行業記、神子禪師行實、同年譜、東岩和尙行實、關溪和尙行實、源翁禪師傳、佛光禪師塔銘、大明國師塔銘、法燈國師年譜、佛照禪師行狀、寒岩禪師略傳、佛智禪師傳、大通禪師行實、法海禪師行狀記、大圓禪師傳、法照禪師行狀、東明和尙塔銘、佛通禪師行狀、規庵和尙行狀、佛國國師行錄、一山國師行記、佛燈國師塔銘、直翁和尙塔銘、深山和尙行狀、大應國師塔銘、古林和尙行實、南山和尙傳、雙峯國師年譜略、大燈國師行狀、明極和尙塔銘、一源禪師行狀、大鑑禪師塔銘、恭翁和尙行狀、高山禪師塔銘、祖雄禪師行狀、東海和尙行實、雪村和尙行道記、平田和尙傳、竺仙和尙行道記、虎關和尙紀年錄、夢想國師年譜、大幢國師行實、大陽和尙行實、大道和尙行實、眞源大照禪師行狀、無極和尙傳、固山和尙行實、佛嚴禪師行狀、弧峯和尙行實、廣智國師行狀、大年和尙傳、无德和尙行實、峨山禪師行狀、月菴禪師塔銘、別源和尙塔銘、古傳和尙傳、寂室和尙行狀、无雲禪師行狀、圓應禪師行狀、大現國師行狀、不聞和尙行狀、佛觀禪師行狀、覺源禪師年譜略、友山和尙傳、古先和尙行狀、宗鏡禪師傳、中岩和尙自歷譜、約庵禪師略傳、廣燕禪師行業、圓光大照禪師行狀南海和尙傳、定智禪師行狀、清溪和尙行實、天關禪師行實、大歇和尙年譜、拔隊和尙行狀、普明國師行狀、龍湫和尙傳、月庵和尙行實、無文禪師行實、正印禪師行狀、大淸和尙履歷略記、性海和尙行實、翊聖國師年譜、圓光國師行道記、勝定國師年譜、明照禪師道行記、普覺圓光國師傳、哲岩禪師行實、一庵禪師行狀、常光國師行狀、普濟禪師行狀、無求禪師行實、松嶺禪師行狀、岐陽和尙自贊、石屋禪師塔銘、東漸和尙傳、弘宗禪師行狀、寰中和尙傳、心關禪師履歷之記、雲章和尙行狀、錦谷禪師行狀、宗惠大照禪師行狀、瑞岩禪師行道記、竹居禪師塔銘、器之禪師塔銘、明敎國師行實、一休和尙行實、同年譜、一州和尙行實記、橫川和尙傳、大宗禪師行狀、心宗禪師行狀、瑩英和尙行實、碩由禪師行實、大弘禪師道行記、大聖國師道行記、春林和尙行實、普通國師塔銘（以上一百九十一種）

官職部（卷二百四十四より卷二百四十五に至る二卷）＝百官和祕抄、諸司職掌（以上二種）

律令部（卷二百四十六より卷二百四十七に至る二卷）＝法曹類林、妙華寺殿令聞書（以上二種）

公事部（卷二百四十八より卷三百十に至る六十三卷）＝年中行事御障子文、年中行事、口言部類、師遠年中行事、師元年中行事、年中行事抄、師光年中行事、元亨四年年中行事、年中行事大概、楊鑑抄、執政所抄、中山內府元日節會部類、元日節會次第、元日宴會次第、小朝拜部類、殿上淵醉部類、大永二年殿上淵醉記、妙音院相國白馬節會次第、慈眼院關白白馬節會次第、公宣卿白馬節會次第、寬正六年白馬節會次第、公宣卿踏歌節會次第、陽照院依同踏歌節會次第、寬正六年踏歌節會次第、縣召除目次第、後陽成院縣召除目次第、秋玉祕抄、妙光寺內府除目部類、除目中文抄、長德二年大間、享德二年大間、天文二十年大間、文明七年闕官寄物、長寬二年朔旦冬至記永仁五年朔旦冬至記、內侍所御神樂部類、御卽位次第、御卽位由奉幣部類記、淳和天皇御卽位記、二條院御卽位記、保元三年番記錄、六條院御卽位記、高倉院御卽位記、安德天皇御卽位記、後鳥羽院御卽位記、順德院御卽位記、四條院御卽位記、花園院御卽位記、光嚴院御卽位記、光明院御卽位記、稱光院御卽位記、延慶大嘗會記、應永大嘗會記、土御門院御讓位部類、後嵯峨院御讓位記、後光嚴院御讓位記、後圓融院御讓位記、後花園院御讓位下昔注文、元號字抄、元祕抄、改元烏兎記、改元旋記、改元部類自承平至寬治、同自承平至觀應、同自應和至建久、同自大治至正慶、同自康治至康正、同自永仁至貞治、同自元亨至文和、大治改元定記、久壽改元定記、顯時卿改元定記、安元改元定記、壽永改元定記、元曆改元定記、兼光卿改元定記、建久改元定記、師重改元定記、經光卿改元定記、弘安改元定記、實任卿改元定記、延文改元定記、貞治改元定記、應安改元定記、資定卿改元定記、弘治改元定記、應和四年革令勘文、文應二年革命定、永享十三年革命勘文、高倉院御元服記、東宮冠禮部類記、承元二年東宮御元服記、正元元年東宮御元服部類記、元德二年東宮御元服記、永正九年若宮御元服記、東宮御元服祝文、親王御元服部類記、相國拜賀部類記、大納言拜賀部類、中納言拜賀部類、實躬卿中納言拜賀記、參議拜賀部類、近衞院內府藏人頭拜賀次第、稱名院右府藏人頭奏慶從事次第、康親卿貫首拜賀次第、夕郞五代拜賀次第、諸仲卿藏人奏慶記、次將拜賀部類、少將申慶次第、水黃記抄、公卿宣下抄、臨時簡要抄、宣旨類、雜筆要集、參軍要略抄、延尉故實、中外抄、吉口傳（以上一百十八種）

裝束部（卷三百十一より卷三百十六に至る六卷）＝年中諸公事裝束抄、野槐服飾抄、衞府官裝束抄、衞府長裝束抄、衞府具抄、橋以國裝束抄、淺浮抄、大嘗會小忌抄、凶服部類、裝束圖式（以上十種）

文筆部（卷三百十七より卷三百五十八に至る四十二卷）＝類集句題抄、長元六年賀雨詩、三十五文集、高野雜筆集、花上集、橫川和尙百人一首、北斗集、天柱集、閻浮集、旱霖集、碧雲稿、木蛇詩、續翠詩集、猿吟集、田心詩稿、九淵詩稿、竹居淸事、村庵小稿、狂雲集、續狂雲集、雜菑集、齋菑集、島陰漁唱、宜竹殘稿、梅花無盡藏、天陰語錄、默雲詩稿、日下一木、幻雲稿、角虎文集、三益稿、三益艷詞、松陰吟稿、冷泉集、梅溪稿、梅屋和尙文集、三脚稿、枯木稿、策彥和尙詩集、金鐵集、淸溪稿、萬英和尙文集、宿蘆稿、南陽稿、水拙手簡、大覺禪師鏡像紀實、雨珠記、法燈國師踏跳贊、頂相發驗記、洛陽智恩寺松陰硯銘（以上五十種）

消息部（卷三百五十九より卷三百六十五に至る七卷）＝東山往來、續東山往來、庭訓往來、遊學往來、新札往來、類聚往來、臂牘往來（以上七種）

和歌部（卷三百六十六より卷四百七十に至る百五卷）＝金葉和歌集（奏覽本）、金葉和歌集（初度本）、月詣和歌集、東撰六帖、拾遺風躰和歌集、安撰和歌集、瀾葉和歌集、飛月集、二八要抄、中古六歌仙、秀歌大略、自讚歌、新百人一首、爲相卿千首、雅緣卿千首、耕雲千首、榮雅千首、正徹千首、宗尊親王三百首、正治二年院御百首、後花園院御百首、文明十五年將軍家百首、應永二十一年頓證寺法樂百首、永享九年住吉社奉納百首、同十年石淸水社奉納百首、同十一年同社奉納百首、同十三年松尾社法樂百首、文明四年玉津島社法樂假名題百首、同九年石淸水社法樂百首、明應四年水無瀨宮法樂百首、同年長門國住吉社奉納百首、同七年同社法樂百首、後鳥羽院御百首、土御門院御百首、順德院御百首、伏見院御百首、後小松院御百首、後土御門院御百首、後奈良院御百首、正親町院御百首、後崇光院御百首、陽光院御百首、宗尊親王御百首、邦高親王御百首、貞常親王御百首、等持院殿御百首、寶篋院殿御百首、後普光園院殿御百首、三條相國御百首、稱名院右府旬題御百首、俊成卿述懷百首、俊成卿祇園百首、定家卿藤川百首、爲家卿藤川題百首、爲相卿百首、爲定卿藤川題百首、前參議雅有卿百首、入道大納言雅世卿百首、入道大納言雅親卿百首、入道中納言雅康卿百首、入道大納言雅房卿百首、前大納言親長卿百首、入道大納言爲廣卿百首、從三位資直卿百首、長綱百首、太田道灌花月百首、蜷川親當百首、十市遠忠百首、寂蓮法師百首、登蓮法師戀百首、慶運法印百首、堯孝法印百首、正徹百首、正廣百首、心敬僧都百首、道堅法師百首、牡丹花百首、四吟百首、殷富門院大輔百首、安嘉門院四條百首、建仁元年仙洞五十首、天正五年親王家五十首、大永二年戀五十首、大膳權大夫行文五十首、萬壽元年高陽院行幸和歌、嘉應元年宇治別業和歌、承久元年最勝四天王院御幸和歌、正嘉三年北山行幸和歌、正應五年嚴島社頭和歌、正和三年詠法華經和歌、長享元年竹內僧正句題和歌、大永六年內裡御屛風和歌、同年中務卿貞敦親王御屛風和歌、文祿元年長壽院內府九十賀和歌、高野山金剛三昧院短冊、經旨和歌、心敬僧都十躰和歌、日本紀竟宴和歌、蒙求和歌、百詠和歌、天祿三年八月二十八日規子內親王家歌合、天元四年四月二十六日故右衞門督君達歌合、永延二年七月二十七日男女房歌合、天喜元年八月越中守賴家朝臣家歌合、承曆二年四月晦日內裡後番歌合、治承二年賀茂社歌合、同年八月二種歌合、正治二年三百六十番歌合、正治二年十月一日歌合、正安元年五種歌合、文和年中二十五番歌合、嘉吉三年二月十日前攝政家歌合、文明十三年十一月十五日三十番歌合、天正七年內裡歌合、陽成院歌合、河原院歌合、多武峯千代君歌合、源大納言師房卿家歌合、範永朝臣家十番歌合、歌繪合、金玉歌合、頓阿勝負付歌合、定家卿百番自歌合、素純百番自歌合、正廣三百六十番自歌合、十市遠忠五十番自歌合、十市遠忠百番自歌合、十市遠忠百五十番自歌合、道堅法師自歌合、貞德五十番自歌合、同十五番自歌合、長承二年相撲立詩歌合、三十六番相撲立詩歌合、和漢名所詩歌合、定家卿獨吟詩歌、朗詠題詩歌、永德元年室町第行幸詩歌、文明年中應製詩歌、文龜二年春日社法樂詩歌、永祿五年一乘谷曲水宴詩歌、畠山匠作亭詩歌、後鳥羽院御集、順德院御集、光嚴院御集、邦高親王御集、等持院贈左府御集、慈照院准后御集、後福照院殿御詠草、後妙華寺殿御詠草、中園相國御集、權中納言定賴卿集、權中納言爲相卿集、入道大納言爲兼卿集、前大納言爲廣卿集、前大納言爲廣卿詠草、前參議敎長卿集、前參議爲冬卿集、前參議時慶卿集、參議時直卿集、藤原爲賴朝臣集、大江匡衡朝臣集、藤原家經朝臣集、平忠盛朝臣集、藤原信實朝臣集、紀伊國造俊長集、松田丹後守貞秀集、心珠詠草、贈從三位元就卿詠草、若狹少將勝俊朝臣集、珍譽法印和歌、寂身法師集、閑谷集、閑放集、權大僧都心敬集、道堅法師詠

草、和泉式部續集、馬内侍集、源重之女集、殷富門院大輔集、民部卿典侍集、權大納言典侍集、俊成卿萬葉集時代考、定家卿長歌短歌說、顯昭法橋萬葉時代難事、親房卿古今集序註、古今集讀人不知考、撰集作者異同考、後撰集正義、難後拾遺抄、祕藏抄、新撰髓腦、和歌深祕抄、桂明抄、古來風躰抄、今來風躰抄、愚問賢注、袋草紙、袋草紙遺編、井蛙抄、清巖茶話、竹園抄、時秀卿聞書、假名能寸佐美、定家卿和歌式、愚見抄、隆源口傳、耕雲口傳、釣舟、綺語抄、師說自見集、歌林良材集、明月記抄出、和歌現在書目錄、和歌合略目錄（以上二百十六種）

連歌部（卷四百七十一より卷五百に至る三十卷）＝竹林抄、紫野千句、文安千句、寶德千句、河越千句、熊野千句、伊與千句、石山千句、出陣千句、至德二年石山百韻、寶德三年三代集作者百韻、同年以呂波百韻、寛政五年將軍家百韻、長享二年水無瀨三吟百韻、明應三年新撰筑波祈念百韻、同五年本式連歌百韻、大永元年伊勢物語詞百韻、天文二十二年尼子晴久夢想開百韻、弘治二年永原筑前守重興興行百韻、永祿五年飯盛城百韻、元龜三年林中務少輔興行百韻、天正二年水野監物丞守隆興行百韻、同三年蜂屋兵庫助賴隆興行百韻、同四年甲斐左京入道宗柳興行百韻、天正七年定家卿色紙開百韻、天正十年明智光秀張行百韻、一條殿御會源氏國名百韻、應永元年後小松院御獨吟和漢聯句、應仁二年後花園院御獨吟百韻、延德三年後土御門後柏原兩院御百韻、應仁元年慈照院殿御獨吟百韻、永正二年兼載獨吟盧名家祈禱百韻、大永八年宗長獨吟名號百韻、賀茂社法樂宗牧獨吟名所百韻、肖柏獨吟觀世音名號百韻、文章連歌五十韻、眞璧道無追善衆如五十韻、細川高國朝臣六々歌仙、出陣萬句三物、白川萬句發句、老葉、萱艸、下艸、園塵、春夢艸、壁艸、永仙句集、荒木田守武句集、荒木田守長句集、贈從三位元就卿句集、安宅冬康句集、梵燈庵返答書、同袖下集、宗祇袖下、花の万賀喜、馬上集、湯花櫻、白髮集、心敬僧都庭訓、同比登理言、連珠合璧集、雨夜記、淀乃和當里、胸中抄、闇夜一灯、連歌執筆次第（以上六十六種）

物語部（卷五百〇一より卷五百二十一に至る二十一卷）＝眞名伊勢物語、松浦宮物語、唐物語、提中納言物語、宇治大納言物語、しのびれ物語、岩屋の草紙、轉寢草紙、初瀨物語、嵯峨物語、幻夢物語、山路の露、伊勢物語知顯抄、伊勢物語愚見抄、伊勢物語山口抄、伊勢物語肖聞抄、伊勢物語惟清抄、源氏物語千鳥抄、類字源語抄、源氏物語和祕抄、雨夜談抄、布勢屋の塵、源氏物語竟宴記、狹衣物語下紐（以上二十四種）

日記部（卷五百二十二より卷五百二十三に至る二卷）＝春の深山路、高野日記、宗長日記（以上三種）

紀行部（卷五百二十四より卷五百二十六に至る三卷）＝室町殿伊勢參宮記、白川紀行、佐のわたり、美濃路紀行、湯本紀行、遠江守政一紀行、丙辰紀行、高野路記（以上八種）

管絃部（卷五百二十七より卷五百三十五に至る九卷）＝御遊抄、文永五年院舞御覽記、貞治三年舞御覽記、明應二年鳳管御灌頂記、時中卿橫笛譜裡書、御遊部類記、敎訓抄、舞樂小錄、掌中要錄、新撰要記抄、音律具類抄、吉野吉水院樂書、神樂血脈、和琴血脈、鳳笙師傳相承、篳篥師傳相承、郢曲相承次第、催馬樂師傳相承、大神氏笛系圖、神樂歌注祕抄、催馬樂注祕抄（以上二十一種）

蹴鞠部（卷五百三十六より卷五百四十に至る五卷）＝内外三時抄、蹴鞠十箇條、晩學抄、蹴鞠百首、蹴鞠百五十箇條、蹴鞠九十九箇條、松下十卷抄（以上七種）

鷹部（卷五百四十一より卷五百五十に至る十卷）＝鷹經辨疑抄、小倉問答、基成朝臣鷹狩記、鷹口傳、鷹聞書、鷹祕抄、養鷹祕抄、責鷹似鳩抄、齋藤朝倉兩家鷹書、根津家鷹書、荒井流鷹書、東求院殿鷹百首、後普光院殿鷹百韻連歌、梵燈庵鷹詞百韻連歌、箸鷹文字抄（以上十五種）

遊戲部（卷五百五十一より卷五百六十二に至る十二卷）＝三條家薰物書、四辻家薰物方、香爐之卷、菜家名香合、池坊專應口傳、慶長四年百瓶華、撰要目錄、宴曲集、宴曲抄、眞曲抄、究百集、拾菓集、拾菓抄、別紙追加曲、玉林苑、平家勘文錄、和謠分國記、文祿二年禁裡御能番組、中樂問書、禪林小歌、閑吟集（以上二十一種）

飮食部（卷五百六十三より卷五百七十に至る八卷）＝式三獻七五三膳部記、山内料理書、食物服用之卷、料理物語、神谷宗湛記、長闇堂記、紹鷗袋棚記、同茶湯百首、利休居士かざり樣之記、同客之次第、茶器名物集、茶道祕傳、喫茶雜話（以上十三種）

合戰部（卷五百七十一より卷六百五十四に至る八十四卷）＝將門純友東西軍記、泰衡征伐物語、承久兵亂記、竹崎五郎繪詞、船上記、異本伯耆卷、永享記、永享後記、上杉憲實記、結城合戰繪詞、嘉吉物語、長祿記、應仁亂消息、細川勝元記、官地論、長享年後畿內兵亂記、細川政元記、瓦林政賴記、道家祖看記、立入宗繼記、船岡山軍記、豐臣記、豐內記、佐久間軍記、柴田合戰記、賤嶽合戰記、余吾庄合戰覺書、惟任退治記、太閤紀州發向記、同四國發向記、同任官記、朝鮮記、島津家高麗陣記、吉野甚右衛門覺書、本山豐前守覺書、細川忠興軍功記、脇坂記、中村一氏記、一柳家記、渡邊水庵覺書、大和記、和田系圖裡書、關岡家始末、勢州軍記、蒲軍記、朝日物語、清須合戰記、名古屋合戰記、牛久保記、今川家譜、今川記、同、三師戰略、甲亂記、武田勝賴滅亡記、深澤城矢文、依田記、湘山星移集、關東合戰記、北條記、里見代々記、同九代記、里見軍記、土氣古城傳來記、土氣城雙廢記、土氣東金兩酒井記、國府臺戰記、國府臺後記、長倉追罰記、江戸軍記、岡部狀、常陽四戰記、水谷蟠龍記、土岐累代記、土岐齋藤軍記、兼山齋記、川中島合戰記、赤羽記、松陰私語、由良家傳記、堂洞軍記、飛驒國治亂記、大塔軍記、蘆田記、諱記、新田老談記、館林盛衰記、反町大膳覺書、唐澤軍談、唐澤城老談記、那須記、仙道記、藤葉榮衰記、東奥軍記、加賀一揆次第、九戸記、最上義光物語、矢島十二頭記、越州軍記、加越登記、謙信軍記、丹州三家物語、三刀谷記、播州佐用軍記、備前文明亂記、妙善寺合戰記、備中兵亂記、毛利記、太田水責記、湯川彦右衛門覺書、三好記、長元物語、長曾我部元親記、高橋紹運記、宗像軍記、豐後陣聞書、豐後崩聞書、黑田長政記、安西軍略、有馬晴信記、清正記、清正行狀、島津家記（以上一百二十三種）

武家部（卷六百五十五より卷七百十五に至る六十一卷）＝式目新篇追加、新式目、長曾我部元親式目、延德二年將軍宣下記、永正五年將軍宣下次第、慈照院殿御髮置記、常德院殿御髮置記、慈照院殿大將拜賀雜目、慈照院殿年中行事、年中恒例、御散飯供御調進次第、長祿年中御對面日記、天正年中御對面記、永正十五年室町殿醍醐御登山日記、大永二年祇園會御見物御成記、大永四年細川亭御成記、天文十七年同亭御成記、同十八年佐々木亭御成記、永祿四年三好亭御成記、文祿三年前田亭御成記、天文三年淺井備前守宿所饗應記、天正十年安土御獻立、同十八年毛利亭御成記、御內書案、御內書引付、玄以法印下知狀、御的日記、百手次第、射御拾遺抄、弓馬問答、佐竹宗三聞書、武田弓箭故實、同射禮日記、弓張記、矢代記、鬪物事記、挾物之記、丸物草鹿記、鬮本記、山名家犬追物記、犬追物檢見記、檢見故實、犬追物葛袋、同勢鏡、同明鏡、犬追物簽鏡、同付紙日記、同艸根集、同手組日記、笠懸躰配記、笠懸聞書、羽形圖、諸鞍日記、大坪道禪鞍鐙等記、鞍鐙寸法記、樞要集、齋藤流手綱之祕書、小笠原流手綱之祕書、三議一統大雙紙、了俊大艸紙、京極大艸紙、小笠原入道宗賢記、伊勢貞親以來傳書、伊勢兵庫頭貞宗記、伊勢備後守貞明覺悟記、同六郎左衛門尉貞順記、同豹文書、伊勢貞興返答書、同貞久武雜記、伊勢貞滿筆記、伊勢貞助雜記、常照愚艸、道照愚艸、中島攝津守宗次記、川村誓眞聞書、川村誓眞雜々記、澤巽阿彌覺書、岩村意休莊所聞書、宮參次第、豐記抄、故實聞書、烏板記、魚板記、人唐記、人賢記、大名出仕記、諸家參會記、風呂記、酌進記、酌次第、嫁取故實、女房故實、女房進退、女房筆法、今川了俊書札禮、曾我兵庫頭八十五箇條、書簡故實、沙汰未練書、式目聞書、兵具雜記、出陣日記、軍陣聞書、軍中故實、兵將陣訓要略抄、伊勢守貞孝誓約、武田家諸士起請文、佐竹國替之記、海津城主次第、慶長三年大名帳、同十六年禁裡御普請帳、織田內府分限帳、浮田家分限帳、京極家分限帳、北條家所領役帳、成田家分限帳、里見家分限帳、福島正則分限帳、加藤清正侍帳、相馬義胤分限帳（以上一百十九種）

釋家部（卷七百十六より卷八百五十に至る百三十五卷）＝佛法傳來次第、佛法由來集、如來舍利傳來記、日本感靈錄、地藏靈驗記、御質抄、後七日御修法由緒作法、後七日御修法部類、永治二年眞言院御修法記、養和二年後七日御修法記、文治五年眞言院御修法日記、建保三年後七日御修法記、永享六年後七日御修法記、維摩會記、永祿六年維摩會日記、諸法要略抄、祈雨日記、雨言雜祕記、永久五年祈雨日記、建久二年祈雨日記、祈雨法記、永久五年請雨經法記、同年請雨經法支度注進狀、同年請雨經御修法支度記、水天供現行記、止風雨法記、孔雀經法記、建久三年孔雀經法記、孔雀經法記、孔雀經御修法記、安鎭法日記、同、普賢延命法日記、建久二年普賢延命法日記、建保五年普賢延命法日記、熾盛光法日記、六字河臨法記、永仁年中北斗法記、德治二年北斗法記、五壇法日記、五壇法記、七佛藥師法現行記、四天王法記、承久元年仁王法記、正元元年仁王法雜事、仁王經法勤例、仁王經修法問答、保延六年如法尊勝法記、壽永二年轉法輪法記、應安三年如意輪法記、長星御祈記、弘安四年異國御祈禱記、大永三年室町殿護摩記、慶長元年豎義記、如法經手記、文治二年神宮大般若經轉讀記、康正二年八社仁王經御讀經記、上皇御落飾部類、後白河院御落飾記、伏見院御落飾記、大宮院御得度記、開明准后御得度記、後中御室御得度記、桂蓮院宮得度記、嘉吉三年若宮入室次第、傳法灌頂日記、弘仁三年高雄山灌頂歷名、稻山院御灌頂記、後宇多院御灌頂記、大御室御灌頂記、紫金臺寺御室御灌頂記、中御室御灌頂記、

尊快親王御灌頂記、遍智院法印灌頂資記、中性院法印灌頂資記、中性院法印灌頂資記、尊性親王御入壇記、義賢大僧正入壇記、報恩院入壇資、遍智院入壇資、覺洞院僧正入壇資記、寶池院大僧正入壇資記、東南院授與記、岳西院授與記、光明峯寺殿傳法灌頂記、三寶院傳法灌頂私記、佛母心院傳法灌頂記、嘉元四年結緣灌頂記、建武二年結緣灌頂記、永和二年結緣灌頂記、延文四年結緣灌頂記、康曆元年結緣灌頂記、觀音院恒例結緣灌頂記、東寺寶泉院結緣灌頂雜記、宸筆御八講記、文永七年宸筆御八講記、應安三年禁中御八講記、公武御八講部類、武家御八講部類、等持院御八講記、大治二年曼陀羅供次第、法守親王曼荼羅供次第、應安七年曼荼羅供見聞略記、永享十一年曼荼羅供記、永享十二年曼荼羅供雜記、永祿元年曼荼羅供雜記、文龜二年曼荼羅供記、應永元年禁中御懺法講記、應永十三年禁裡御懺法講記、同二十一年仙洞御懺法講記、諸寺略記、諸寺供養部類、法綱儀、金剛抄、淸水寺緣起、同假名緣起、同靈驗記、東要記、東寺要集、東長儀、東寺長者拜堂記、康永四年榮海僧正拜堂並御影供記、永享六年禪信僧正拜堂並御影供記、至德二年道快僧正拜堂下行物記、建武二年道我僧正加任拜堂下行物記、長保二年東寺寶藏目錄、東寺大塔升形銘、同造營文書符案、醍醐寺要書、醍醐初度具書、滋深座主拜堂記、弘鑁口說、澄心寺緣起、勸修寺資記、安祥寺資財帳、法勝寺金堂造營記、同阿彌陀堂造立日時定記、承曆元年同供養記、永久二年白河御堂供養記、護國寺供養記、誓願寺緣起、眞如堂緣起、廬山寺緣起、壬生寺緣起、大雲寺緣起、同諸堂記、鞍馬蓋寺緣起、大悲山緣起、廣隆寺供養日記、同資財交替實錄帳、神護寺畧記、高山寺緣起、淸凉寺緣起、二尊院緣起、天龍紀年考略、西方寺緣起、常住寺佛舍利記、三鈷寺拘留如來緣起、天文八年三鈷寺修造勸化疏、即成院緣起、羽賀寺緣起、七大寺年表、同日記、東大寺緣起、東大寺具書、貞觀三年大佛供養日記、享德二年東大寺供養記、同敕封藏開檢目錄、西大寺緣起、興福寺伽藍緣起、同寶記、同現住僧帳、二月堂緣起、西大寺資財流記帳、同緣起、法隆寺緣起資財帳、長谷寺靈驗記、藥師寺緣起、法進院釋迦堂修造勸進帳、內山寺記、久米寺流記、宀一山記、室生山舍利相傳緣起、隆池院緣起、河內國小松寺緣起、師子窟寺緣起、西琳寺文永注記、同流記、藤井寺勸進帳、荒陵寺御手印緣起、天王寺秘記、勝福寺鐘鑄勸進帳、廣嚴寺緣起、中山寺緣起、伊勢國多度神宮寺伽藍緣起並資財帳、宏德寺記、朝熊山緣起、尾張國笠寺緣起、妙興報恩寺記、駿河國久能山緣起、相模國大山寺緣起、鎌倉五山記、光觸寺頰燒阿彌陀緣起、江戶淺草寺緣起、多田藥師緣起、川口善光寺緣起、山家要記淺略、延曆寺護國緣起、三塔諸寺緣起、應永三年山門大講堂供養記、文明七年座主補任式、天台座主登山次第、叡山衆徒披陳狀、寺德集、寺門高僧記、三井寺勸進帳、石山寺緣起、同石記、葛川緣起、關寺緣起、桑實寺緣起、補陀洛山建立修行日記、瀧尾建立草創日記、瀧願寺三月會日記、善光寺緣起、越後國乙寶寺緣起、伯耆國大山寺緣起、播磨國書寫山緣起、峯相記、高野山記、同官符、同奧院興廢記、金剛峯寺建立修行緣起、後白川院御起請、高野山御幸御出記、同順禮記、粉川寺緣起、道成寺繪詞、淡路國諭鶴羽山勸進帳、阿波國井戶寺勸進帳、大龍寺緣起、摩尼珠山高越寺私記、土佐國蹉跎山緣起、和漢禪刹次第、傳教大師消息、眞言諸山符案、表白集、同、願文集、江都督願文集、願文集、卷數集、泉涌寺諷誦類、鷲林拾葉集、諷誦文類聚、諷誦願文稿艸、晦庵稿、長弁私案抄、三家撰集目錄、敕撰法相宗章疏目錄、東域傳燈目錄、北院御室拾要集、妙香院宮御參務日記、三昧發心集、露盛發心集、無住妄鏡、呆寶我慢抄、一言芳談、仁空置文、眞慧上人定、眞言血脈相承、三寶院傳法血脈、醍醐報恩院血脈、同無量壽院法流相承、入唐記、先德略名、東寺長者御祈賞記、諡號雜記、諸宗敕號記、素絹記、僧川集、肝心集（以上二百八十二種）

雜部（卷八百五十一より卷千に至る百五十卷）＝神皇正統錄、神明鏡、仁壽鏡、十三代要略、北條九代記、東寺王代記、興福寺略年代記、法林寺年代記、立川寺年代記、奈良年代記、曆仁以來年代記、享祿以來年代記、永祿以來年代記、同大事記、天延年代記、天延二年記、南都衆徒入洛記、仁和寺日次記、房玄法印記、祇園社怨記、松田貞秀筆記、延文四年記、正長元年記、長祿二年記、永正十七年記、永祿九年記、看聞記、滿濟准后記、嚴助大僧正記、見聞私記、見聞雜記、和漢合圖拔萃、弘長記、天正事錄、聚樂物語、鶴岡事書案、會津塔寺村八幡宮長帳、甲斐國妙法寺記錄、善隣國寶記、善隣國寶後記、續善隣國寶記、續善隣國寶外記、祕府略、日本現在書目錄、世俗諺文、明文抄、平他字類抄、反音抄、琱玉集、撮壤集、類集文字抄、藥經大素、輔仁本草、康賴本草、香字抄、香要抄、香藥抄、醫略抄、遐年要抄、長生療養方、醫家千字文、衞生祕要抄、延壽類要、延壽撮要、傳屍病二十五方、家傳心中脈治口訣、兩目祕傳書、金瘡祕傳、新撰六句集、簠簋內傳金烏玉兎集宣明曆經、方角禁忌、宿曜運命錄、本命抄、建天全書、大膳大夫有盛記、遷幸反閉次第、三寶吉日、吉日考祕傳、永久三年曆、建曆四年曆、貞應二年曆、延慶三年曆、應永十八年曆、長祿三年曆、麒麟抄、烏羽玉竅抄、定家卿筆諫口決、心底抄、行房右筆條々、行季二十箇條、鳳朗集、筆法禮儀集、玉章祕傳抄、金玉積傳集、梅庵古筆傳、儒林拾要、妙香院宮御院參引付、仁和寺諸記抄、醍醐寺雜事記、醍醐枝葉抄、醍醐雜抄、亞西抄、淨修房雜日記、姓名錄抄、諱訓抄、明翰抄、雜訴決斷所結番交名、諸國鍛冶寄、諸國鍛冶系圖、口遊、掌中曆、大內裡鈔、內裡抄桃華雜抄、富家語談、立車記、後三條相國抄、後押小路內府抄、上杉問答、多々良問答、塵滴問答、人鏡論、世鏡抄、童訓略頌類聚、百椿集、道鏡法師繪詞、淸少納言繪詞、西行法師繪詞、西行物語、長明四季物語、歌林四季物語、至寶抄、仲文章、菅家遺誡、實語敎、童子敎、君子集、君慎、假名敎訓、伊勢貞親敎訓、多胡辰敬家訓、尾籠集、五常內義抄、金言類聚抄、注好選、世繼物語、康賴寶物集、選集抄、閑居友、三人懺悔册子、蕉窓夜話、蠡測集、戴恩記、貞德翁筆記、寒川入道筆記、月刈藻集、桂川地藏記、鹿島問答、旅宿問答、後鳥羽院御靈託記、大織冠像破裂集、后宮略傳、院號定部類記、公宴部類記、初任大臣大饗雜例、任大臣大饗部類、延曆二年大饗次第、永享四年大饗定、大饗雜具目錄、三中口傳、諸藝方代物附、東寺庄園斗升增減帳、出雲國風土記、肥前國風土記、伊賀國太田文、常陸國太田文、淡路國太田文、豐前國太田文、豐後國圖田帳、後宇多院御領目錄、承和二年東寺領國判、文明十八年洛中東寺領目錄、遠江國御神領記、貞治七年宮田前太宮司家領記、弘長元年下總國小野織幡地帳、應永六年香取諸名帳、正長四年香取檢田帳、天平勝寶七年越前國桑原庄券、嘉保二年大江仲子解文、慶長十六年信濃國水內曲橋勸進帳、播磨國大部庄公文職務記、讃岐國萬濃池後碑文、日本得名、正元二年院落書、延陀丸於登之文、拾烈集、十番物爭、四十二の物爭、滑稽詩文、若氣勸進帳、十番狂詩合、躬恒自歌合、職人歌仙、狂歌三百首、金言和歌集、蟲歌合、鳥歌合、鴉鷺物語、昨日は今日の物語、皆々路物語、尤雙紙、色音論、鎌倉順禮記、堀河院昇霞記、凶事部類、明應凶事記、貞治四年諒闇終記、長享三年諒闇終記、後成恩寺關白諒闇記、長享二年渡御倚廬次第、同還御次第、郁芳門院崩御記、相親卿逆葬記、建保年中無緣葬記、東寺光明講過去帳、本法寺過去帳、下總國小金本土寺過去帳、常陸國赤濱妙法寺過去帳、播磨國書寫山過去帳、御產御祈目錄、御產部類記、康和元年御產部類、后宮御產當日次第、仁平御賀記、後成卿九十賀記、北山准后九十賀記、長壽院內府九十賀記（以上二百三十七種）

以上凡て一千卷、二千百三種を收め、分合其の便に隨つて一千百八十五册に作れり。「群書類從」の五百三十卷、一千二百七十三種、六百三十五册を合すれば、實に一千五百三十卷、三千三百七十六種、一千八百二十册（外に目錄三册）の大叢書なり。我が邦の古書は中古戰亂の時代、其の大部は兵火に罹り、且、爾來年と共に漸く其の數を減じたるに、塙氏の搜索拾羅によりて、他に再び見るべからざる古文の多くも此の中に保存せらるゝことを得たり。學界の其の惠を受くるもの大なりといふべし。近年東京經濟雜誌社に於て「群書類從」を版行し、更に此の「續群書類從」を印刷しつゝあり。庶くは其の完本を得て、塙氏の功績を全うし、廣く普遍すると共に、永く不朽に傳ふることを得ん。

◉塙保己一の傳は「群書類從」の下にあり。

ぞくけうくんせう

續敎訓鈔　（寫本）十一卷　狛　朝葛

音樂歌舞に關する種々の要件を詳細に註記したるもの。所載の項目枚擧するに遑あらず。當事者の須く一讀すべき價値あるべし。文永七年庚午（一九三〇）の頃の著作。

◉狛朝葛のことは「敎訓鈔」の下にあり。

ぞくけんいかう

息軒遺稿　四卷　安井　衡

著者の漢文集なり卷一は十七編、卷二に二十四、卷三に三十七、卷四に十九、凡て九十七編を收輯す。川田剛芳野世育等の序を附して明治十一年戊寅（二五三八）出版す。

◉安井衡は息軒と號し、仲平と稱す。近代の名儒なるを以て知らる。日向淸武の人、滄州の二子にして、幼より學を好み、矻々として飽くことを知らず、大阪に出で篠崎小竹に會し、江戶に上りて昌平黌に入り、更に增上寺の僧寮に寓して苦學し、業大成す。是れより徒を集めて敎授す來學するもの頗る多し。後幕府に辟せられ、祿二百苞、職俸十五口を受け、後彥根侯の優遇を受け、更に本藩に仕へ世子の師となる。「海防私議」一卷、「辨妄」一卷、「管子纂詁」十二卷、「左傳輯釋」二十一卷、「論語集說」六卷、「靖海問答」一卷、「書說摘要」四卷、其の他の數著あり。明治九年丙子（二五三六）九月二十三日、東京土手三番町の寓居に歿す、時に年七十八。

ぞくこうぼふだいしねんぷ

續弘法大師年譜　九卷　僧　道猷

僧空海の入定承和二年乙卯〔一四九五〕の入定より、天保五年甲午〔二四九四〕の一千年忌に至る年譜なり。六卷以下は「拾遺部」として雜事を記載す。天保十一年庚子〔二五〇〇〕天台沙門二品親王教人の序あり。

◉道猷のことは「弘法大師弟子譜」の下にあり。

ぞくこうものがたり

續功物語　（寫本）一卷

松平信綱島原一揆落去の注進狀簡便の事より、井伊掃部頭直孝儉約の事に至る五十五條、多くは當時の記事に係れり。

ぞくごがくしんしよ

續語學新書　（寫本）一册　鶴峯　戊申

西洋語の十品四格助辭完助辭等に比して、印度の八轉聲十羅聲等の事を論じ、また大日經疏第五所載の梵文偈を、てにをはに合せて譯を加へたり。

◉鶴峯戊申の傳は「神階錄」の下にあり。

ぞくこきんぎよくえふふうがぬきがき

續古今玉葉風雅拔書　三卷

卷一に「續古今集」、卷二に「玉葉集」、卷三に「風雅集」の歌を拔書したるものなり。

ぞくこきんわかしふ

續古今和歌集　二十卷　冷泉　爲家

文永二年乙丑〔一九二五〕十二月二十六日、後嵯峨院の院宣によりて撰集す。最初爲家一人に詔ありしが、後、藤原基通、藤原行家、藤原光俊、内大臣家良とを加へらる。家良は撰集に先ちて歿せり。春上下、夏、秋上下、冬、神祇、釋敎、離別、羇旅、戀一、二、三、四、五、哀傷、雜上下、賀等に部類して歌數凡て一千九百七十二首〔拾芥抄の計〕を收む。假名の序中に「此の集を續古今といへる事は、延喜に古今集を撰ばれて、後ち他の敕撰多くへだたれども、重て元久に新古今と名けらる。そのうへ古今の字を猶用ふるは、すなはち此三代の集をもちてとりわき正しきたゞちとおひつぎて、長き代にも傳へ聞く人にもしらしめんが爲めなり、且ははからざるに彼の二代のあとからはず、今も又乙丑のとしにめぐりあひて、時至り、ことかなへるなるべし。」云々といへり。

◉冷泉爲家の傳は「續後撰和歌集」の下にあり。

ぞくこくし

續國史　（寫本）十八卷　林　恕

宇多天皇より、近衞天皇に至る十八代間の典章綱紀、人物事績等を記す。著者嘗に台命を受けて「本朝通鑑」を編輯して神武天皇より、後陽成天皇までの御事績を詳悉す。後其の簡要を抄略して、「國史實錄」を作り、末年に至り、「國史實錄」に就て更に宇多天皇より近衞天皇に至る御事績を撰抄して、此の書を成す。上は六國史に續ぎ、下は後白河帝の世に連りて其の間を詳にせるなり。漢文にて記す。寶永三年丙戌〔二三六六〕藤易明の序あり。

◉林恕の傳記は「本朝通鑑」の下にあり。

ぞくごげんしふ

續五元集　三卷　榎本　其角

著者の俳句遺稿を、「五元集」、「五元集拾遺」の後に、寶曆二年壬申〔二四一二〕同じく百萬坊旨原が出版したるものなり。近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」にも收む。

◉榎本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

ぞくここんせうそこしふ

續古今消息集　（寫本）一卷

武家諸家の消息狀、掟書等を編輯したるもの。即ち朝鮮陣の時豐太閤よりの下知狀三通、同大友父子仕置申渡の書一、太閤及北政府より關白秀次に讓與品の目錄二、禁中の掟書定御茶湯茶々各一、太閤毛利と和睦の時、毛利氏よりの誓狀一、掟書二、太閤より小早川隆景への返書一通等を輯め、末に「武功話記」と題し會津表出發より關原の事、小田原陣の物語等凡て十餘條を揭げたり。

ぞくこじだん

續古事談　六卷

「古事談」に續きて、春日大明神衆徒の軍に御加勢の事、俊乘坊太神宮參籠の事、江帥筑紫より上洛の時寶積みたる船海に沈みし事等より。灰を食て飢をやむる事、安養の尼のもとへ盜人入る事、清瀧川の聖の事等に至る等の古談凡て六十項、奇怪非理の綺を入れて少年の弄讀としたるものなり。「群書類從」卷四百八十七、雜部第四十二にも收めたり。著者編年等詳ならず。

ぞくこじだん

續古事談　（寫本）三卷

「古事談」に倣ひ、古來傳說の雜事を記したるものなり。卷一に王道、后宮。卷二に臣節。卷三に雜事を記述す。

ぞくこじだんるゐへう

續古事談類標　（寫本）一卷

續古事談の中の事實を、いろは順に目次して其の搜索に便したるものなり。

ぞくごしふいわかしふ

續後拾遺和歌集　二十卷　藤原　爲定

後醍醐天皇の元亨三年癸亥〔一九八三〕七月二日、綸旨を受けて民部卿爲藤の撰集するところなるが、爲藤中途にして卒去したる故其の子〔或は甥といふ〕中納言爲定、業を繼で、正中二年乙丑〔一九八五〕十二月八日奏覽す。春上下、夏、秋上下、冬、物名、離別、羇旅、賀、戀一、二、三、四、五。雜上中下、釋敎、神祇等に部立して、歌數一千三百四十三首〔拾芥抄による〕を收めたり。

◉藤原爲定の傳は「新千載和歌集」の下に出せり。

ぞくごしやくぎ

俗語釋義　（寫本）二卷　留守　友信

漢語の熟字連用のものを抄出して各字の下に假名書に俗譯を記したるもの。各語は字畫によりて排擧し、一圓匝、一遝等の一畫より、纍積、纒繞等の二十九畫に至る。延享元年〔二四〇四〕漢文あり。

◉留守友信の傳は「語錄譯義」の下にあり。

ぞくごしんいき

（明和）續後神異記　一卷　度會　重全

明和八年辛卯〔二四三一〕に於ける、伊勢神宮の神異靈驗を記したるもの。先に神主度會延佳の「神異記」に續きて「續神異記」の著ありたれば、今は「續後神異記」とは名けたるなり。著者度會重全は從四位上、伊勢神宮の神主なり。

ぞくこせんとくしつろん

續古戰得失論　五卷　森　學機

織田信長父子の自害、明智光秀の滅亡賤ヶ嶽合戰等の際に於ける、諸將士の戰功擧動の得失を集錄評論したるもの。凡て五十六箇條あり。眞假名にて記し、元祿十六年癸未〔二三六三〕の著述出版に係れり。

ぞくごせんわかしふ

續後撰和歌集　二十卷　冷泉　爲家

寶治二年戊申〔一九〇八〕七月後深草院の敕を奉じ、建長三年辛亥〔一九一一〕十月、後嵯峨院の院宣に由て撰集したるもの。春上中下。夏。秋上中下。冬。神祇。釋敎。戀一、二、三、四、五。雜上中下。羇旅等に部立して歌集一千三百六十八首〔拾芥抄による〕を收めたり。光雄卿口授には「續後撰は初中後衣冠正しき人を見るやうなり、常に手を放つべからず」といひ、今川了俊は「續後撰集は爲家の撰なり、これまた新敕撰の餘風殘る」云々といへり。

◉冷泉爲家は藤原氏、歌人定家の子なり。少壯にして未だ和歌の要領を得ず、屢、父の嚴敎を受けたるが、一朝日吉神社に祈り、大に感得するところありて、七晝夜にして一千首の和歌を作り。これより斯道の名匠となれり。寶治中後嵯峨上皇の敕によりて本書「續後撰和歌集」を撰し、正元中また「續古今和歌集」を成し、弘長中また敕によりて藤原實氏家良等と仙洞百首を詠めて「七玉集」と名づく皆斯道に於ける名譽なり。嘉祿の初め藏人頭に補せられ、文武諸官を經て、嘉禎中正二位に敍し、權中納言に任じ、民部卿を兼れ、遂に權大納言に進む康元元年剃髮して融覺と號す。世に民部卿入道また中院禪門と稱せり。建治元年乙亥〔一九三五〕五月一日、七十九歲にて薨す。

ぞくごせんわかしふるゐそ

續後撰和歌集類礎　（寫本）五卷

「續後撰和歌集」の中の全歌を、初句、二句、三句、四句、五句に分ち各句中同礎の句を類擧し、いろは順に排して漸次第五句に及べり。

ぞくごめいだいわかしふ

續五明題和歌集　（寫本）六卷　今川　氏親

敕撰十六代集の後、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今の五集中より、題順に和歌を撰集したるもの。古今以下十六代集を撰出して「三八明題和歌集」といへるに倣ひ作れるなり。永正十二年乙亥〔二一七五〕の序あり。

◉今川氏親は義忠の子なり。義忠は文明十二年庚

子〔二一四〇〕鵯月坂に戰死す。氏親尙幼なり、母の手に養育せられ、外舅伊勢長氏の輔翼によりて駿州府第に成長し、修理大夫に任じ、上總介を兼れ、永正十三年丙子〔二一七六〕大河內某を安部山城に圍みてこれを拔き、遂に遠州を併有す。

ぞくごろく

俗語錄　一卷　野間　子苞

漢書中なる俗語の本邦語と同様のものを列擧して其の熟語法及び出處等を漢文にて示したるもの。例せば中州集の年來、「陳書」の大毀、「東坡文集」の千千萬萬、「宋史」の他所等の如し。寛文四年甲辰〔二三二四〕閏五月の自序及び林夕陽叟の序あり。

◉野間子苞の傳は「桑華紀年」の下にあり。

ぞくごろん

續五論　一册　各務（カガミ）　支考

前著「葛の松原」の餘論を受け、更に細說したるものなり。元祿十一年戊寅〔二三五八〕發行す。近年發行の俳諧文庫第八編「支考全集」の中にも收む。

◉各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

ぞくこんやうまんろく

續昆陽漫錄　一卷　青木　敦書

先著「昆陽漫錄」に續けるものにて、細馬、砂金、白銀等より理窕、造茶、瓦硯等の目に至る百七十六項を雜著考證せり「百家說林」第七卷にも收む。

◉青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下に出づ。

ぞくさうあんしふたまはゝき

續草庵集玉帚　一卷　本居　宣長

「草庵集玉帚」九卷に續きて宣阿の「諺解」、元茂の「難註」を旨と辨難せるものなり。天明六年丙午〔二四四六〕出版す。

◉本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

ぞくさうあんわかしふ

續草庵和歌集　二卷　僧　頓阿

著者の家集。卽ち「草庵集」四卷に續けるものにして、四季戀雜に部立して、二千〇〇二首、短歌二首、物名二十三首、折句十首、旋頭歌三首、廻文歌一首、俳諧歌十六首、外に連歌百韻等を掲げたり。

◉頓阿の傳は「高野日記」の下にあり。

ぞくさうあんわかしふもうぎうげんかい

續草庵和歌集蒙求諺解　二卷　香川　宣阿

續草庵和歌集を、一首毎に諺解したるものなり。梅仙堂平尋新訂正す。

◉香川宣阿の傳は「草庵集蒙求諺解」の下にあり。

ぞくさうしふ

束草集　（寫本）六卷

願文、諷誦文、表白知識文等を輯集したるものなり。最末に正和三年甲寅〔一九七四〕正月二十一日の記あり。

ぞくさくしやぶるゐ

續作者部類　（寫本）二卷　榊原　忠次

新拾遺、新後拾遺、新續古今の三和歌集中の作者を、帝王、親王、執政、大臣、僧正、僧都、女院、后宮、庶女等に分類掲記し、其の歌の出處歌數を指示したるもの。蓋、元盛光之の「倭歌作者部類」に續きて著したるものにして、之れにて二十一代集のを全備せしめたるなり。正保三年丙戌〔二三〇六〕の作。明和七年庚寅〔二四三〇〕本居宣長の校合を經たり。

◉榊原忠次の傳は「武家百人一首」の下にあり。

ぞくさしようせう

續左丞抄　四册

原名「壬生官務家古文書」の下に解題せり。「續左丞抄」は、近年東京の經濟雜誌社の發行したる叢書「國史大系」に收めたるものゝ名なり。

ぞくさるみの

續猿蓑　二卷　松尾　芭蕉

著者の俳句集なり。其の歿後、伊賀の松尾家にありし草稿を、書肆の乞ひて發行したるなり。近年發行の俳諧文庫第一編「芭蕉全集」の中にも收む。

◉松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

ぞくさんがくせうせん

續算學小筌　一卷　牛島　盛庸

先著「算學小筌」の續編なり。前者に比すれば、注意の跡よく現れたり。故に彼の正續の如き誤術あることなし。設問の法も稍々高尙なり。文化六年己巳〔二四六九〕の出版にかゝる。

◉牛島盛庸の傳は「算學小筌」の下にあり。

ぞくさんわうぐわいき

續三王外記　（寫本）三卷　石井　蠡

德川八代將軍有德院吉宗、九代惇信院家重、十代浚明院家治。以上三代の事績を漢文にて記したるものなり。

◉石井蠡は若無子また東武野史と記せり。

ぞくしいうしふ

續詞友集　五册　朝江　種寛

「俳諧詞友」に續きて、諸家の俳諧を集めたるものなり。寛文十二年壬子〔二三三二〕八月の編に係る。

◉朝江種寛の傳は「俳諧詞友」の下にあり。

ぞくしうとうだいじしやうさうゐんもんじよ

續修東大寺正倉院文書　六卷

詔書、戶籍、計帳、古曆、移文、解文、牒狀、物價等の部類を分ちて、南都東大寺正倉院所藏の古文書數百通を輯錄したるもの。「存採叢書」中に收めたり。

ぞくじうんしふるゐだい

續似雲集類題　（寫本）二卷　僧　似雲

「似雲集類題」に續けるもの。共に其の歌集「年並草」二十卷の歌を類題したるものなり。

◉似雲の傳は「磯の浪」の下にあり。

ぞくしかせん

續四歌仙　一册　谷口　蕪村

一交四唫の後を續きて、曉臺、几董、月溪、靑蘿の歌仙を集めたるもの。天明七年丁未〔二四四七〕の編なり。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◉谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

ぞくしくわわかしふ

續詞花和歌集　二十卷　藤原　清輔

春上下、夏、秋上下、冬、賀、神祇、哀傷、釋教、戀上中下、別、旅、雜上中下、物名、戲咲等に部立して九百八十八首あり。著者の父顯輔「詞花集」を撰して後二條院の仰によつてこを撰したるも、二條院崩御ましましより敕撰に准ぜられざりきといふ。「群書類從」卷百四十八、和歌部第三に收む。

◉藤原清輔の傳は「奥儀抄」の下にあり。

ぞくじこすゐ

俗耳鼓吹　一卷　太田　覃（フカシ）

著者の雜記。就中俚諺戲文狂言諧謔等の事を記載品評したるもの多し。天明八年戊申〔二四四八〕水無月の自序あり。

◉太田覃の傳は「南畝叢書」の下に在り。

ぞくじせつようしなんしや

俗字節用指南車　一卷　中村　平吾

書狀つかひ世話字、天象、地理、時節、樹竹、草花、鳥類、畜類、蟲類、魚類、貝類、靑物類、五穀其の外二十餘目に分類して普通俗字を集め、振假名したるもの。享保十六年辛亥〔二三九一〕春三月の自序あり。

◉中村平吾は京都の人にして三近子また絅錦齋と號す。本書の外に謠曲囂誌、家のみつぎ、四民往來等あり。

ぞくじだん

俗耳談　（寫本）十卷　山本　格安

和漢の雜事を記載したるものなり。內五卷を次編と稱せり。門人加藤元敏、早川敬明、柳川通故、柴田成美、矢島泰茂等の筆記するところなり。

◉山本格安の傳は「獻喧錄」の下にあり。

ぞくじだんじへん

俗耳談次編　（寫本）五卷　寛　齋

文學、言語、器物、その他の雜事につきての考證的雜說を門人等の筆記したるものなり。五卷二册に寫傳す。

ぞくしふいわかしふ

續拾遺和歌集　二十卷　藤原　爲氏

龜山院の院宣に依りて撰集したるもの。春上下、夏、秋上下、冬、雜春、雜秋、覉旅、賀、戀一、二、三、四、五、雜上中下、釋敎、神祇等に部立して、歌數凡て一千六百首〔拾芥抄の計〕を收めたり。文永十一年甲戌〔一九三四〕院宣を奉じ、弘安二年己卯〔一九三九〕十二月二十七日奏覽に及べり。

◉藤原爲氏の傳は「新和歌集」の下にあり。

ぞくじやまんぴつしよへん

息邪漫筆初編　（寫本）一卷　會澤　安

嘉永元年戊申〔二五〇八〕の號令以下、時々の思言を雜記したるもの。卷頭に「造物之主始作俑、併呑六合勢悩々殺人盈野又盈城民命何輕貨利重」と題し、「正志齋主人會澤安行年八十」と記せり。

◉會澤安の傳は「閑聖漫錄」の下にあり。

ぞくしようえふしふ

續松葉集　四卷　僧　宗惠

先著「松葉名所和歌集」十六卷に漏れたるを拾ひ、且、各名所毎に自詠一首づつを添へて編輯し、頭書には名所讀合の景物を記せり。但し第四の一卷には自作の和文七編を收めたり。

◉宗惠の傳は「松葉名所和歌集」の下にあり。

ぞくしんおうのき

足薪翁之記　（寫本）三卷　柳亭　種彦

著者の隨筆雜抄なり。露の五郎兵衞、萩野澤之丞、湯屋の看板、一角に雀、しめり茶磨等の事より、おたま杓子、梵天國、一銓竿、外畏右近、一隆達等の事に至る、總計四十九條あり。各々諸書を引證して其の出據を考說せり。

◉柳亭種彦の傳は「修紫田舍源氏」の下にあり。

ぞくしんかうれきしよ

續新巧曆書　（寫本）二十卷　高橋　至時

著者の遺譯に係る曆書にて、其の大綱を擧ぐれば、卷一に推日躔法、卷二に推月離法、卷三に推月食法、卷四に推日食法、卷五に推五星法、卷六に推恒星法、卷七に京師實測、卷八に江戸實測、卷九に各方實測、卷十に用表推日躔月離法、卷十一に用表推月食法、卷十二に日躔表上、卷十三に同中、卷十四に同下、卷十五に月離表上、卷十六に同下、卷十七に交食表上、卷十八に同中、卷十九に同下、卷二十に用表推月食算例を收めたり。各綱更に細目あり。數十條に及べり。男澁川景佑編輯し、門人足立信頭、孫澁川敬直の同校するところなり。編輯年月等を記さず。

◉高橋至時の傳記は「新考日食三法」の下にあり。

ぞくしんさいやご

續新齋夜語　五卷　梅朧館主人

先著「新齋夜語」の續編なり。卷一に蕉堅道人細川右典厩を貶す。附妓女但馬籠鳥を放ちし話、外一項。卷二に寶茱翁再笠叟が評に語る、外二項。卷三に伏水の妓女吳竹遊女の趣を知る、付兩翁男女對幾の可否を論ず、外一項。卷四に奧州白河山中地仙墳の來由、外一項。卷五に一品法親王寺門の遊災を知り給ふ事、外一項あり。皆古談の綺入假名書なり。安永七年戊戌〔二四三八〕朱正致、松石道人の序等あり。

◉梅朧館主人は江戸人なれど、今、其の姓名を詳にせず。著書は此の外に、新齋夜語、梅園雜話等あり。

ぞくしんさんか

續新山家　一册　觀　水

俳句の集なり。元祿二年己巳〔二三四九〕二月の編輯にかゝる。

ぞくしんじやうぶつぎ

即身成佛義　一卷　僧　空海

眞言宗の宗義なる即身成佛の義を示さんため、支那惠果阿闍梨の作なりと傳へらるゝ、六大無礙常瑜伽〔中略〕圓鏡力故實覺智の八句の偈を解釋したるもの。流暢なる漢文に成れり。所謂「十卷書」中の一なり。著作の年月未詳。萬治三年庚子〔二三二〇〕に訂刻せられたり。註釋には杲寶の「即身義東聞記」十卷、通玄の「即身義聞鏡鈔」一卷、妙瑞の「即身義帝綱鈔」二卷、濟暹の「即身義問答鈔」一卷、道範の「即身義鈔」一卷、宥快の「即身義鈔」十卷、賴瑜の「即身義顯得鈔」三卷、其他數部あり。

◉空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下に在り。

ぞくしんたうたいい

俗神道大意　四卷　平田　篤胤

いはゆる俗神道、即ち兩部神道、本地垂迹、惟一神道等の說論辨とを駁し、以て古道の眞意を發揮したるものなり。萬延元年庚申〔二五二〇〕吉川躬行の序を附して刊行す。一名「巫學談弊」といふ。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下に在り。

ぞくしんぴろく

續深祕錄　（寫本）二卷

綱吉公家宣公と御親和の事以下當代名士の逸事を輯錄したるものなり。

ぞくしんぺきさんぱふ

續神壁算法　一卷　藤田　嘉言

先に「神壁算法」の著あり、厥の後寬政八年以來、當年に至るまで藤田門派の諸子が各地の神社に揭げたる額面の算題を集錄したる者なり。故に題してこれを「續神壁算法」と曰ふ。體裁總て本編の如し。文化三年丙寅〔二四六六〕出版となる。

◉藤田嘉言の傳は「再訂算法」の條に詳なり。

ぞくしんぺきさんぱふきげん

續神壁算法起源　二卷　廣江　永貞

續神壁算法の答術を詳解したる點竄法式の書なり。蓋し當時前後點竄法に依れる解義の書頗る多し、術も一書出づれば算家大抵之れを爲すものとす。然れども皆一家に藏するのみ。畢竟是れ何人もこれを爲し得ればなり。故に點竄法に以て他書の解義のみを記して刻木としたる本書の如きものは其の類少し。天保四年癸巳〔二四九三〕の出版なり。著者廣江永貞は奧州岩城平の藩士なり。

ぞくじんめい

續人名　十卷　僧　法忍

婦女子の道德修藝其他萬端の心得を通俗平易なる消息文體にて綴說敎訓したるものなり。

◉法忍は怡溪の一號なり。諱を宗悅といふ。江戸品川東海寺中高源院の開祖にして、また大德寺に住せり。石州流の茶道に精し。著書は本書の外に正源林、神代私記祕要集、經閑論、裝束指掌、天經或問不審正義、天台四敎義雲梯抄、阿彌陀經疏記決疑、和讃法の玉章、傍訳本願和讃、日本孝敎ふみかゞ美、女中鏡、女中捷、女中大學、月の光安心要決、安心往生鏡、續人名息子卷、同遊女屋卷、同遊女卷、同御成敗卷、同農卷等あり。正德四年甲午〔二三七四〕五月二日入寂す。

ぞくじんわうしやうとうき

續神皇正統記　一卷　小槻　晴富

北畠親房の「神皇正統記」に續けるもの。同書は後醍醐天皇に止れば、本書には光嚴院より後花園に至り、北朝の帝凡て十代を記せり。長享二年戊申〔二一四八〕秀賢の奧書に本書は文明年中の所撰かと云へり。「東見記」に續神皇正統記二十卷とあり、本書は其の抄本なるべきか。天文七年、慶安四年、寬文七年、寬永戊子等諸家の奧書あり。「群書類從」卷三十、帝王部第二にもあり。

◉小槻晴富の傳は「正應六年官符」の下にあり。

ぞくすゐいつせき

涑水一勺　一卷　林　恕

周秦漢魏晉より、南北隋唐を經て以て五季に及び、凡そ一千三百六十二年間の、明君賢輔の功を頌し、亂臣賊子の罪を擧げたる古風の一大長編なり。延寶五年丁巳〔二三三七〕林整宇の序あり。內閣文庫に特別書として所藏す。

◉林恕の傳は「本朝通鑑」の下にあり。

ぞくすゐげつぶんさう

續水月文藻　（寫本）二册　堀田　正敦

水月文藻に續きて、序、跋、詞記、消息等に分ちて數十編を收む。第三卷、第五卷を脫するものゝ如し。

◉堀田正敦の傳記は「干城錄」の下にあり。

ぞくすゐしふ

續翠詩集　（寫本）二卷　豩　庵

著者の詩凡て數百編を載せたり。一本には「豩庵集」といへり。「續群書類從」卷三百二十七上下、文筆部第十一に收む。

ぞくすゐしんき

續水心記　（寫本）二十册　小野宮實資

本書は一名によつて「小右記（ヲウキ）」の下に解題せり。

ぞくせいすゐき

續盛衰記　（寫本）二十五卷

齋藤氏三老以三箇條諫言之事、太田宗盛莫由來、並田村四郎右衞門物語之事、石田氏臣島氏父子之事等より、松平越後守臣小栗氏事並小栗先祖由緒之事等數十條を記す。二十五卷八册に寫傳す。但內務省の謄寫するところによる。

ぞくせきさつそくはうちやう

即席早速庖丁　一折

魚類料理、精進料理の簡易法を說示したるもの也。

ぞくせつじよき

續節序記　（寫本）四卷

四季十二箇月の季節行事習俗等の事を記したるものなり。

ぞくせついごやくわうのたま

俗說正誤夜光璧　四卷　原　省庵

食物の宜禁能毒を辨じ、衞生修養の大要を示したり。一名を「攝生俚言解」といふ。中御門天皇の享保十二年丁未〔二三八七〕の作なり。著者原省庵は大阪の醫なり。

ぞくせつぜいべん

俗說贅辨　五卷　谷　重遠

本朝種々の俗說を辨明したるもの。井澤長秀の「俗說辨」四十五卷の後に作り出でたるより「贅辨」とは云ひしなるべし。五卷の中二卷は續編たり。著者の名は明記せざれども、谷重遠なる事は先覺既に論定せり。

◉谷重遠の傳は「甲乙錄」の下にあり。

ぞくせつべん

俗說辨　（寫本）四十五卷　井澤長秀

本朝に傳來せる種々の俗說を辨說したるもの。四十五卷中二十卷は前編、五卷は後編、五卷は遺編、七卷は附編、八卷は殘編と稱す。別に一卷目錄あり。第四十五卷の自跋に曰く、「西域之舍利、見レ碎ニ於博奕之槌一、我朝之俗說、見レ破ニ於不肖之辨一、雖ニ事物異ニ其類一、共是不ニ快意一乎。總著ニ正後遺附編一、今也殘編旣脫レ稿、若夫他日所レ出之俗說、猶待ニ終編之筆手机上一、享保壬寅〔二三八二〕之春、細川越中守定紀武臣鳥銃首井澤十郎左衞門長秀」とあり。

◎井澤長秀の傳は「漢字和訓」の下にあり。

ぞくせつべんせう

俗說辨鈔　一卷　井澤長秀

先著「俗說辨」の中より、數箇條を抄出したる者也。

◎井澤長秀の傳は「漢字和訓」の下にあり。

ぞくせんきよまさき

續撰淸正記　七卷

加藤淸正の一生を假名書にしたるものなり。

ぞくせんぎんしふ

續撰吟集　（寫本）三卷

天文九年庚子〔二二〇〇〕以下に、諸家の和歌數百首を編輯したるものなり。天文九年の奧書、寬永七年庚午〔二二九〇〕の奧書等あり。

ぞくせんざいわかしふ

續千載和歌集　二十卷　藤原爲世

花園天皇の文保三年己未〔一九七九〕四月十九日、後宇多院の院宣に依て撰集す。春上下、夏、秋上下、冬、雜體、羇旅、神祇、釋敎、戀一、二、三、四、五、雜上中下、哀傷、賀等に部立して、歌數二千百二十首（拾芥抄の計）を收めたり。

◎藤原爲世の傳は「新後撰和歌集」の下にあり。

ぞくせんじもん

續千字文　（寫本）一卷　三善爲康

周興嗣の「千字文」に倣ひ、其の續編に擬して作れるもの。今「群書類從」卷百三十五、文筆部第十四に收むるところによるに、首二百四十字闕け、尙中間義字の闕字あり、惜むべきことなり。

◎三善爲康の傳は「拾遺往生傳」の下にあり。

ぞくせんぶけぶにん

續撰武家補任　（寫本）六十五卷　小田彰信

武家補任の次第を類聚記錄したるもの。其の凡例に曰く「天正十一年〔二二四三〕より寬政十年〔二四五八〕に至るまで、凡そ二百十餘年、大納言中納言參議中將少將侍從四位五位の敍任年序に順て其の傳を載す。體裁は舊補任の例に倣ひ、旁ら諸家譜を搜索して、呼名職役所領等之を增補す」云々。以て本書の梗概を伺ふに足るべし。本書は寬政年間幕府命じて、編輯せしめたるものなり。別に目錄一卷、提覽二卷、合して六十八卷を以て寫傳せり。

◎小田彰信の傳は「廢絕錄」の下にあり。

ぞくぜんりんこくはうき

續善隣國寶記　（寫本）一卷　松隱玄棟

天正年間より天和年間に至る、本邦と朝鮮との往復交涉の書簡を集めたるもの。寶永八年辛卯〔二三七一〕に編集せらる。編者は「松隱玄棟」と署名す。

ぞくぜんりんこくはうき

續善隣國寶記　（寫本）二卷

續善隣國寶記に續きて、我が國と朝鮮との關係雜事を記したるものにて、「續群書類從」卷八百八十上下、雜部第三十にあり。

ぞくぜんりんこくはうぐわいき

續善隣國寶外記　（寫本）一卷

續善隣國寶記と同じく、日本、朝鮮、明の關係記錄を集錄したるものなり。「續群書類從」卷八百八十二、雜部第三十二に收む。

ぞくぞくしごすゐきんこうへん

續々詩語粹金後編　一卷　中根玄石

詩語を四季各題に類排して、各平仄音義等を註したるものなり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕織田梓の序あり、同年男閑の校正するところ、同人の跋あり。翌二年出版す。

◎中根玄石の傳記は「詩韻自在」の下の下にあり。

ぞくぞくたいへいねんぺう

續々太平年表　（寫本）十八卷　竹舍主人

續太平年表に續きて、嘉永六年癸丑〔二五一三〕正月十六日より、文久四年甲子〔二五二四〕十二月二十九日に至る武家日記にて、江戶及び近在の出來事をも年月に繫けて記載せり。

ぞくぞくほんぱうしき

續々本邦史記　（寫本）三十卷

卷一の最初切支丹發起者松倉家依武備廢事、附松倉長門守無賴依樂主奸人得時事より、卷三十の水野日向守板倉主水陣所へ見廻の事付松倉長門守死罪の事に至る數十箇條を綴りたるものなり。

ぞくたいへいき

續太平記　三十二卷　杉本豫八郎

太平記に續ぎて、後光嚴天皇の應安年中より、後土御門天皇の文明年中に至る、凡百餘年間の出來事を記したるもの。即ち細川賴之執事となりて四海一統の功を顯し、足利義滿南朝を滅して三種神器を京都に移し奉り、武家大に跋扈して公方の號始まりし事等より、山名宗全細川勝元の爭亂、四海紛亂足利氏衰微の事等に至り、要するに足利氏中葉までの諸家の興廢將士の臧否等を、條目を分ちて記載したるものなり。

ぞくたいへいきりしゆへん

續太平記貍首編　三十卷

前太平記四十卷は、後光嚴院の貞治六年丁未〔二〇二七〕京都將軍家二世、源義詮逝去、十二月に至て細川右馬頭賴之上洛の事に止る。本書はそれにつゞきて、應安元年戊申〔二〇二八〕義滿治世の最初より、御土御門院の文明九年丁酉〔二一三七〕中、義政の遁世に至るまでを記せり。末に一卷編外を附して、戰國年表、系圖等を掲げたり。

ぞくたいへいねんぺう

續泰平年表　（寫本）六卷　竹舍主人

大野權之丞の「泰平年表」十一卷、著者未詳の「泰平年表後記」三卷等に續けるものにして、寬政五年癸丑〔二四五三〕より嘉永五年壬子〔二五一二〕に至る

ぞくたうそうはちだいかぶんどくほん

續唐宋八大家文讀本　十八卷　村瀨季德

沈確之の「唐宋八大家讀本」に倣ひて、其中に遺漏せる唐宋諸大家の文を輯めたり。卷一、二、三に韓退之の文六十一編。卷四、五に柳子厚五十三。卷六、七、八、九に歐陽永叔六十二。卷十に蘇明允二十一。卷十一、十二、十三、十四に蘇子瞻六十八。卷十五に蘇子由二十四。卷十六、十七に曾子固三十四。卷十八に王安石、介甫三十。以て凡て三百五十三編あり。文政二年己卯〔二四七九〕古賀煜、佐藤坦の序、同八年林檉宇の序、柴田淸堅の跋あり、同年上木す。

◎村瀨季德の傳は「淸名家小傳」の下に出づ。

ぞくたじまかう

續但馬考　四卷　櫻井苗

但馬國の地誌なり。建置沿革名所舊蹟等を考說す。

◎櫻井苗の傳は「但馬神社佛閣舊記」の下にあり。

ぞくぢかたおちぼしふ

續地方落穗集　（寫本）十六卷

德川時代各地方の政務規約等に關する記錄を蒐輯したるものなり。御城米廻船の諸掟、咎人御仕置の事等あり。

ぞくちくだうぶんせう

續竹堂文鈔　三卷　齋藤馨

著者の漢文集。卷上に論十一、序八。卷中に序中、記二十。卷下に書五、傳記、說六、喩一、讚二、題跋九、墓銘二。通計八十編を載す末に嘉永二年己酉〔二五〇九〕安積信の評言數行あり。國分平、白石時康の同校するところにして明治十四年辛巳〔二五四一〕白石時康の序を附し同十六年に出版す。

◎齋藤馨は字を子德といひ、竹堂と號す。仙臺の人にして、家世々伊達氏に仕ふ。竹堂幼より穎異にして學を好み、江戶に出でて增島蘭園に學び、後昌平黌に入りて、業大に進み、諸先輩の歎賞するところとなる。黌を出でて後關西地方を遊歷し、妻子を提げて江戶に住し、帷を垂れて教授を業とす。當時の名士古賀洞庵、安積艮齋、野田笛浦、梁川星巖、羽倉簡堂、齋藤拙堂、篠崎小竹、後藤松陰等と知人たり。著書には、報桑錄、鍼肓錄、游毛覲梅記、藩祖實錄、盡忠錄、奧羽簒事、讀史贅議、蓬々傳、佔筆餘音、蕃史、洋艦孟浪譜、鴉片始末、竹堂文鈔、竹堂詩鈔等あり。藩侯其の名聲を聞き將に儒員に擢用せんとす。時に病褥にあり、終に死す年三十八。

ぞくちやじんくわあふそう

續茶人華押藪　一卷　河津遂萊

足利義政以來の茶人一百二十五名の花押を輯錄したるものなり。古筆了意の校閱するところにして、文化二年〔二四六五〕大華辰の序あり、同年上木す。

ぞくぢよそく

續女則　（版本）十卷

女子教訓の書にて、卷を新教訓、古教訓、倭教訓、裝束、姿見、寫繪、柳櫻、松楓、月雪、唐錦等に分ち、各卷數十項に分ちて注意すべき要件を網羅せり。

ぞくつれづれぐさ

續つれ〴〵草　二卷　清水春流

兼好法師の「徒然草」に倣ひて作れる道德學藝に關する和文の隨筆なり。內題には「睡餘操筆」と云へり。寬文十一年辛亥〔二三三一〕洛陽書肆中村道諦の跋を加へて上梓す。

◉清水春流の傳は「儒家十馬圖」の下にあり。

ぞくてんこうはうひえうせう

續添鴻寶祕要抄　（版本）七卷　僧　淨運

人身諸病の診法處方を記述せる醫書なり。因州太守の命によりて、先師淨秀の撰述せる醫書「鴻寶祕要抄」に增補加添して進じたるものなりといふ。永正五年戊辰〔二一六八〕の自序あり。七卷三冊に寫傳す。

◉淨運は醫師なり。明應中、明に赴きて張仲景の處方を學べり。後柏原帝の御藥を奉じ、法印に敍せらる。著書は本書の外に、遐仙方八卷、新椅方三十一卷等あり。

ぞくてんしやうき

續天正記　一卷　曲直瀨道三

先著「醫學天正記」の續編にて、診察處方、臨床治療の實例等を收錄したるものなり。

◉曲直瀨道三の傳は「醫學天正記」の下にあり。

ぞくとうざいもんだふ

續東西問答　（版本）一卷　大野武範

砲術の說明に關する書。著者が杉村采女の問に答へたるものなり。元文元年丙辰〔二三九六〕の自跋あり。

◉大野武範の傳は「國恩錄」の下にあり。

ぞくどくぎんしふ

續獨吟集　二冊　寺田重德

獨吟集に續げる、著者の獨吟俳諧の集なり。共に編輯の年代を記さず。

◉寺田重德の傳記は「新獨吟」の下にあり。

ぞくとりはかせ

續鳥博士　（版本）一卷

比野勘六の「鳥博士」を增訂して「續鳥博士」と名けたるものなり。諸鳥の形狀、產地、飼養法等を記す。文化文政頃の編なるべしといふ。

ぞくなんかうざつろく

續南行雜錄　（版本）一卷　丸山可澄

南京の社寺等に就きて、南京の舊記遺書等を輯集して、更に其の續輯をなせるもの。「南行雜錄」は天和元年辛酉〔二三四一〕佐々宗淳君命によりて輯集し、續編は元祿二年己巳〔二三四九〕大串元善南行して得るところあり、同壬申の夏、宗淳再び使して更に得るところを併せ、彰考館書吏丸山可澄をして、編輯せしめたるものなり。其の由元祿六年癸酉〔二三五三〕可澄の奥書あり。

◉丸山可澄の傳記は「花押藪」の下にあり。

ぞくにほんかうそうでん

續日本高僧傳　十一卷　僧　道契

師蠻の「本朝高僧傳」に續きて、本朝僧傳二百四十三人を集錄したるもの。慶應三年丁卯〔二五二七〕十一月、著者の凡例あり。就中、卷五までは明治十七年甲申〔二五四四〕大內青巒の校訂を經、三冊として上梓せられたり。著者道契は美作の人なりいま其の詳傳を得ず。

ぞくにほんわうじやうでん

續日本往生傳　（寫本）一卷

慶滋保胤の「日本往生傳」に續げるもの。權少僧都覺超、權大僧都桓舜、沙門增賀、仁賀、覺印、眞緣上人、阿闍梨理光、範久、成尋、覺眞、延殷、沙門良範、能圓、高明、安修、助慶、覺尊、賢救、日圓、慶滋保胤、大江爲基、定基、寂周、源章任、前伊豫守賴義、參議藤原兼經、比丘尼願西、緣妙、除子の三十人を收めたり。延保七年己卯〔一八七九〕の奥書あり。

ぞくにほんわうだいいちらん

續日本王代一覽　（寫本）二卷　佐野鄕成

林春齋の「日本王代一覽」に續げるもの。後陽成天皇の天正十五年丁亥〔二二四七〕より東山天皇の寶永六年己丑〔二三六九〕に至る體裁全く片山圓然の「續日本王代一覽」と異なることなし。著者佐野鄕成は水戶の人なり。

ぞくにほんわうだいいちらん

續日本王代一覽　（寫本）三卷　片山圓然

林春齋の「日本王代一覽」に續き、後陽成天皇の天正十五年丁亥〔二二四七〕より光格天皇の享和三年癸亥〔二四六三〕に至る十三世、二百十七年間の事にかゝる。文化元年甲子〔二四六〇〕の自序あり。

◉片山圓然の傳は「滄海一滴集」の下にあり。

ぞくにほんわうだいいちらんこうき

續日本王代一覽後記　（寫本）三卷　片山圓然

光格天皇の文化元年甲子〔二四六四〕より、同十三年に至る間の國家の治亂、人事の興廢、天變地異の事實等を漸次輯錄したるものなり。抑「日本王代一覽」七卷は、慶安五年壬辰〔二三一二〕林春齋が、神武天皇より、第百七代正親町院までの事實を錄したるものなり。此れに續きて片山圓然、文化五年甲子〔二四六四〕を以て、第百八代後陽成天皇より、第百二十代光格天皇の享和三年癸亥〔二四六三〕に至る事實を錄せり。本書は更に其の翌年文化元年以下の事を揭げて、「續日本王代一覽後紀」とはいへるなり。

◉片山圓然の傳は「滄海一滴集」の下にあり。

ぞくねんにつき

續年日記　（寫本）二卷

源俊光の「長帳續年日記」三卷に續きて、奥州會津河沼郡稻川庄塔寺村御鎭座正八幡太神宮の事につき記したるものにて、上卷は後陽成院の文祿元年壬辰〔二二五二〕より明正院の寬永十五年戊寅〔二二九八〕に至り、下卷は同十六年己卯より、享保二年乙卯〔二三九五〕に至れり。

ぞくのうかくわんぎやうろく

【續農家貫行錄　（版本）五卷　源信遍

農は國家の大本、田組、曆、三秦、制他業、農を天職といふ。耕作は天度生、川を引節以下數十項農時、農具、農法等詳細に論悉したるものなり。寬延二年乙丑〔二四〇五〕の自序あり。

◉源信遍のことは「歌仙考」の下にあり。

ぞくはくせきそうしよ

續白石叢書　（版本）二十二冊　新井君美

先編「白石叢書」に續きて、其の遺編を拾輯したるもの。第一冊に年中式令論、白石先生學訓。第二冊、第三冊に武人訓。第四冊五冊に文字考。第六冊七冊に白石手簡。第八、九、十冊に新安手簡。第十一より十五に至る古史通。第十六より二十一に至る退私錄。第二十二冊に高千觀遊記、經邦典例序、新井家系、集古圖序等を收載す。

◉新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

ぞくはなつみ

續花摘　二卷　湖十

晉其角が元祿三年、母の追福の爲めにとて編集せる「花摘」に倣ひ、著者が母の七周忌にあたりて撰集したる俳諧集なり。老鼠、柳原、波裂、其樹、心夕、山夕、岱兆、木兩、溪志、杉風、超波、其の他數十家のを集む。時に享保二十年乙卯〔二三九五〕なり。

◉湖十は江戶の俳人なり。湖十の名を數世相襲ふところなるが、これは第二世湖十の事なるべし。享保十八年湖十の名を襲ぎ延享三年丙寅〔二四〇六〕正月十四日歿せり。

ぞくはんかんぷ

續藩翰譜　（寫本）二十三冊　近藤吉左衞門

新井白石の「藩翰譜」に續きて、上は延寶八年庚申〔二三四〇〕より、下は天明六年丙午〔二四四六〕に至る百七年間の萬石以上諸侯の盛衰を詳記したるもの。幕府の命によりて、奥右筆組頭近藤吉左衞門、同格名瀨源五郎、奥右筆秋山吉之丞、その他表右筆數人等にて撰集す。文化三年丙寅〔二四六六〕十二月十六日、その功を褒賞せられたりといふ。

ぞくひえさんわうりしやうき

續日吉山王利生記　（寫本）一卷

日吉山王の緣起利生を略記したる短編なり。書中繪を闕けり。文化元年甲子〔二四六四〕書寫の奥書あり。「續群書類從」卷五十一、神祇部五十一に收む。

ぞくひぜんじぎやうじやうでんき

卽非禪師行狀傳記　（寫本）一卷　僧　明洞

黃檗宗卽非和尚の一代傳歷を漢文にて記したるも

のなり。寛文十二年壬子〔二三三二〕五月、廣諦の嗣法門人明洞の記すところなり。

ぞくびはんてんけい

續備藩典刑　（木活）一卷　湯淺　明善

明暦寛文の頃に於ける備前藩內政刑布達等を輯錄したるもの。天明八年戊申〔二四四八〕書寫の奧書あり。

◉湯淺明善は常山の子なり。子誠と字し、新兵衞と稱し、儒を以て岡山藩に仕ふ。其の著すところは、本書の外に、「天明大政錄」「吉備孝子傳」等あり。

ぞくふうたんいさう

續風簷遺草　二卷　天野　御民

防長藩內殉難烈士の遺稿を纂輯したるもの。萩藩士三十六名、長府藩士一名、德山藩士八名及び外藩十五名のを收め、附錄として三大夫遺吟、十一士遺吟、入江子遺揚屋詩稿を載せたり。慶應元年乙丑〔二五二五〕五月に編集し、明治二年己巳〔二五二九〕更に烈士諸傳を附加し、四卷として上梓せり。

ぞくふくじゆ

續福壽　二卷　菊岡　沾涼

俳諧者百人の詠を集め、一々具畫、影像等を入る。畫は二十三人の手に成れり。露沾の序文に「百福壽は百情の姿を顯はし、功成り遂げて見む人の目を悅ばしむ。つゞいて前に洩れたる好子の秀逸幽玄の句々を謹して後集となす。撰者則南仙今あらためて沾涼と呼ふ」とあり。

◉菊岡沾涼の傳は「江戸砂子」の下にあり。

ぞくぶけかんだん

續武家閑談　（木活）二十卷　木村　高敦

木村彌十郎高敦の「武家閑談」七卷に續きて、編輯したる武邊記事。卷一の初め、遠州引間城落去の後德川家康本坂越の事より卷十九山本勘助の由來に至る凡そ三百九十餘條。數家の系譜をも記せり。

◉木村高敦の傳は「武德安民記」の下にあり。

ぞくぶけせいすゐき

續武家盛衰記　（木活）二十四卷

慶長、元和、寛永の比斷絕に及びたる諸家の萬石以上なるを列擧略譜したる「古今武家盛衰記」三十卷に續げるもの。寛永以來元祿の比、斷家となりしものを略譜す、本編と異りて萬石に足らざるものをも取り、又、本編の闕を補ふものもあり。

ぞくぶけひやうりん

續武家評林　（木活）四十七卷

元弘建武以來、享保四年己亥〔二三七九〕に至る諸國の戰爭、島原の一揆、由井正雪の亂、其の他復讐の事等を專らに記したるものなり。但し卷一より卷四までを闕けり。

ぞくふさういんいつでん

續扶桑隱逸傳　三卷　僧　義堂

僧元政の「扶桑隱逸傳」に續きて、本邦隱士の事績を傳したるものにて、僧俗を分たず、凡て九十三人を擧げたり、上卷に善仲、善算より高峯に至る三十二人。中卷に徹道より明忍に至る三十二人。下卷に慧雲より三平乞士に至る二十九人を收む。就中僧侶を大多數とす。漢文にて書せり。寶永四年丁亥〔二三六七〕の自序あり。同七年法弟月澗の跋あり。正德二年壬辰〔二三七二〕出版す。著者義堂は「白石巖居沙門不器子心義堂」と記せり。

ぞくふさうしふえふしふ

續扶桑拾葉集　（木活）三卷

初め二卷には「靈元院法皇御幸宸記」と題して、享保六年辛丑〔二三八一〕より、同十六年まで、修學院其の他へ毎年行幸ましませし時の宸記を載せ、後の一卷には後奈良院の宸翰をはじめ、一條兼良、西三條實枝、同公條、牡丹花肖柏、僧榮海、源義詮、宗祇、太田道灌、其の他數人の序文紀行消息等を輯錄せり。

ぞくぶしやうかんじやうき

續武將感狀記　二卷　南條　八郎

德川家康時代に於ける諸將士の勳功感狀等を輯錄したるもの。樋口半四郎小鼓の上手の事より、池田の家臣土肥市正の事に至る百七十四條あり。寛政五年癸丑〔二四五三〕近藤守重、本書の由來を書して「世に碎玉話と云へる一書あり。一名を武將感狀記といふ。熊澤了介が著すところと云ひ誤れり。備藩に吉田源之丞と云ふものあり。弓馬を善くす。其の家に古く持傳へし古葛籠あり、其の中に古き物語を、紙の切れ反故のうらに書き集めて數卷ありしを、熊澤伊大夫といふもの、取り出して文を綴り、清書して書册をなし、碎玉話と題す。其の後また古葛籠の底より、數卷の物語の殘りありしを、南條八郎といふもの見出して一册をつゞり、志士清談と題す。八郎は了介が孫なりといふ。此の話池田山城守の臣、森田勘九郎に聞て酉山翁のところにて記し置くものなり」といへり。著者南條八郎は熊澤了介の孫なり。

ぞくぶしやうかんじやうき

續武將感狀記　五卷　栗原　信充

前著「碎玉話」に續きて武林の舊事を登載したるもの。故に內題には「中古正說碎玉話」と記せり。「前右兵衞佐賴朝卿令レ作二入牧夜討地圖一事」より、「淡輪大和守入道散妖狐事」に至る八十八項を載す。天保十四年癸卯〔二五〇三〕秋九月の漢文自序あり。

◉栗原信充の傳は「鞍鐙新譜」の下にあり。

ぞくぶりんいんけんろく

續武林隱見錄　（木活）十三卷

慶長の頃より正德享保の頃に至る、德川氏及び其の將士に關する雜話を蒐錄したるもの。凡百二十箇條あり。

ぞくぶりんいんけんろく

續武林隱見錄　（木活）二十卷

前揭同名の書と記載の事實ほゞ相似たり。唯其の順序を異にせるのみ。每卷の奧書に寛延三年庚午〔二四一〇〕古山忠義書寫の由を記せり。

ぞくぶんわ

續文話　八卷　齋藤　正謙

先著「拙堂文話」の續編なり。天保六年乙未〔二四九五〕の自序及び篠崎弼の序、土井恪の跋等ありて、翌七年出版せらる。

◉齋藤正謙の傳は「伊勢國司記略」の下にあり。

ぞくへいかさわ

續兵家茶話　（木活）六卷

諸家祖先の來歷より諸將士の美談等を編輯したるもの。卷一に大須賀五郎兵衞事より、小西飛驒守事に至る十七項。卷二に村越茂助御使として京上事より、菊池家事に至る十九。卷三に阿曾家事より、水野家三州苅屋を領する事に至る二十八。卷四に小出勘兵衞吉親事より、大澤家事に至る十八。卷五に戶田家事より、細川玄頭興元事に至る二十四。卷六に上總國望陀郡久留里之記浦田村の城始て企る事以下數條を記す。

ぞくへただんぎ

續下手談義　五卷　山本　好阿

敎訓の意を寓したる滑稽的說話なり。八王子の臍翁手代への說法、四谷苅豆店馬左衞門親類へ敎訓の事、戲言狂寺瓢箪和尙親屬へ敎化の事、三國通夜物語等の目あり。寶曆二年壬申〔二四一二〕の作。

◉山本好阿は通稱を善兵衞といひ、靜觀坊と號す。寶曆時代に於ける江戸の戲作家なり。其の著すところは本書の外に續江戸鹿子、敎訓雜長持、豐年珍話談等あり。

ぞくべつざしき

續別座敷　二册

江戸の杉風、禁毋の編する所にて、元祿十四年辛巳〔二三六一〕京都にて發行したるものなりといふ。

ぞくほんてうざつせう

續本朝雜抄　（木活）六卷

本朝雜抄に續きて、御元服習禮、御元服、加冠作法、御元服後宴、御元服雜抄、以下數十條を諸家の日記、記錄等より抄輯したるものなり。

ぞくほんてうつがん

續本朝通鑑　（木活）二百三十卷　林　恕

本朝通鑑に續きて、醍醐天皇の昌泰元年戊午〔一五五八〕已後、後陽成天皇の慶長十五年庚戌〔二二七〇〕に至る、歷代の事績を編敍したる漢文の歷史なり。著者の父道春、嚮に「本朝編年錄」四十卷を著して、神武の初年より、宇多天皇の御代〔紀元一五五七年まで〕に至る歷史を編敍したりしが、寛文四年甲辰〔二三二四〕に至り、幕府恕に命じて續編を修めしむ。其の成るに及んで先著を合せて「本朝通鑑」の名を賜ひしよし寛文十年の著者の序にあり。

◉林恕の傳は「本朝通鑑」の下に在り。

ぞくほんてうぶんずゐ

續本朝文粹　（木活）十三卷　藤原　季綱

藤原明衡の「本朝文粹」に續きて、其の後の名文を輯集したるものなり。もと八十四卷ありたるが、散佚して今十三卷殘りたる由「東見記」にあり。著者藤原季綱は別に「管見手爾波部類」をも著せり。

ぞくほんてうわうじやうでん

續本朝往生傳　一卷　大江　匡房

慶保胤の『日本往生極樂記』に續きて、一條天皇、後三條天皇、堀河入道右大臣、權中納言顯基、參議音人、沙門遍照、慈忍、覺運、源信、覺超、桓舜、增賀、仁賀、叡實、覺印、眞緣、理光、入圓、眞範、範久、成尋、能圓、高明、安修、助慶、覺眞、延慶、覺尊、賢救、日圓、慶保胤、大江爲基、同定基等、往生極樂を願ひし四十二人の事績を、漢文にて記したるものなり。建保七年己卯〔一八七九〕沙門慶政書寫の奥書あり。

『群書類從』卷六十六傳部第三に收めらる。

◉大江匡房の傳は『江家次第』の下にあり。

ぞくまんえふろん

續萬葉論　（寫本）二十卷　賀茂　眞淵

古今和歌集の註釋なり。契沖其他の諸抄を引きて、詳密叮嚀に註釋評論したるものなり。天明四年甲辰〔二四四四〕夏の頃の作と見えたり。

◉賀茂眞淵の傳は『冠辭考』の下に出たり。

ぞくみそのや

續三十幅　（寫本）五卷　太田　覃

三十幅に續ける叢書なり。即ち卷一に常盤日記、本朝刀劔略記、隣交始末物語、琉客談記。卷二に東鑑異本考、宮城堂舍諸門炎上記、閑窓一得、斑斗目考、假名曆註解。卷三に賓客禮俗式、閑學禮俗式、與白石論書、新版面命。卷四に曆細略記、觀阿居士文、十品考、琉儀莊記、和蘭出產、朝淸水記、梅名並花形、上苑梅譜、戸山御庭記、貞德終焉記、鎌倉閑居記。卷五に雨夜のともしび、廻文俳諧百韻、客殿畫之知源、琵琶撥、季吟子和歌、荒陵懷舊詠等なり。

◉太田覃の傳は『南畝叢書』の下にあり。

ぞくみなしぐり

續みなしぐり　二册　榎本　其角

「みなしぐり」に續げる俳句集なり。同じく元祿初年のものなるべし。

◉榎本其角の傳記は『句兄弟』の下にあり。

ぞくむさしあぶみ

續武藏鐙　（寫本）一卷

元和寬永の頃の雜話を記したるもの。水戸光圀の事、松平伊豆守信綱の事、其の他十數條あり。記す所多くは信憑し難きに似たり。

ぞくむしやものがたり

續武者物語　（寫本）九卷　國枝　清軒

卷一小田原陣の時豐臣太閤異裝にして傲言の事より、卷九の最後夜討の時の指物の心得に至る凡て百七十七項、武邊話を記せり。延寶八年庚申〔二三四〇〕霜月の編輯にかゝる。著者國枝清軒は江州志賀の人なり。

ぞくむみやうせう

續無名抄　三卷　岡西　惟中

鴨長明の『無名抄』に倣ひて名けたる隨筆なり。延寶八年庚申〔二三四〇〕八月の自序を附して出版す。

◉岡西惟中の傳は『一時軒隨筆』の下にあり。

ぞくめいじんじたい

續名人字體　（寫本）二卷

漢土名家の字體を、平上去入韻字の順に列載したるものなり。各體の下に、其の筆者の人名若くは書名等を記せり。

ぞくめいりやうこうはん

續明良洪範　（寫本）十二卷　眞田　增譽

德川三代將軍時代以下諸將士の言行逸話等を雜記輯錄したるものなり。十二卷十二册に寫傳す。

◉眞田增譽の事は『明良洪範』の下にあり。

ぞくもしほぐさ

續藻鹽草　（寫本）十卷

宗碩の『藻鹽草』に倣ひ、『萬葉集』の中の詞を部類し、諸書に徵して註釋したるものなり。

ぞくもんえふわかしふ

續門葉和歌集　（寫本）十卷

諸家の和歌を撰集したるもの。嘉元三年乙巳〔一九六五〕の序、延寶三年乙卯〔二三三五〕、貞享二年乙丑〔二三四五〕の奥書等あり。十卷四册に寫傳す。

ぞくやうくわひろく

續瘍科祕錄　五卷　本間　玄調

『瘍科祕錄』に續きて、瘍科の諸治法を詳細に圖說したるものなり。安政五年戊午〔二五一八〕門人川又誠、目黑安、稻葉賢、石塚雄、篠塚節等の編輯するところなり。

◉本間玄調の傳は『瘍科祕錄』の下にあり。

ぞくやまとじゆんれい

續大和順禮　五册　岡村　正辰

俳諧の集にして、寬文十二年壬子〔二三三二〕春の編にかゝる。

◉岡村正辰のことは『大和順禮』の下にあり。

ぞくやまのゐ

續山乃井　二卷　北村　湖春

春夏秋冬の部を分ちて、諸名家の發句を輯錄したるもの。作者九百六十餘人、句數五千三十餘句あり。寬文七年丁未〔二三二七〕五月、父の命によりて編集し山の井の續編となしたりと云ふ。卷尾に本編の作者部類等を附記せり。

◉北村湖春の傳は『源氏物語忍草』の下にあり。

ぞくやまびこ

續山彥　二册　助　然

先著『山彥集』に續きて編輯したる俳句の集なり。寶永二年乙酉〔二三六五〕京都にて出版せり。

◉助然のことは『山彥集』の下にあり。

そくりやうしふせい

測量集成　十一卷　福田　泉

古來の測量法より新法に至れる陸地測法及天體測法等を悉く集錄したる者。故に之れを集成といふ。初編、二編、三編、四編に分る。其の末卷〔即四編〕には四線表を記載したり。本書毎編記名の同じからず其の初編は花井健吉編、澤國任訂とし、二編は花井健吉編、西村泉次訂とし、三編は上原一成編、上原等成校、平松信孝訂とし、四編は平松信孝編、上原等成校、村山重任訂としたり。而して各編通じて福田泉總理と記せり。安政元年甲寅〔二五一四〕出版す。

◉福田泉は主計介と稱し、理軒と號す。初め數學を武田眞元に從て學び、後小出修喜の門人と爲り、大に名を浪花に擧ぐ。遂に土御門に隷みて司天史と爲る。主計介の稱は同家より受けたる名なり。

ぞくるゐじゆぎしき

續類聚儀式　（寫本）四卷　松岡　行義

行始、宮參、喰始、誕生日、髮置、袴餠、着袴、讀書始、弓始、乘馬始、矢開、鎧着始、元服等の儀式の事を、諸書中より拔抄記錄したるものなり。

◉松岡行義の傳は『手綱染樣考』の下にあり。

ぞくるゐだいわかしふ

續類題和歌集　（寫本）三百卷　坂　以得

古今五百數十部の歌集より、數萬首を類題したるものなり。延寶元年癸丑〔二三三三〕の草創にて、貞享五年戊辰〔二三四八〕の自序、葛山散人の序あり。

◉坂以得は奥州岩山の太守在京大夫藤原義泰の侍史なり、主命によりて編輯したりといふ。

ぞくれんじゆ

續連珠　一册　北村　季吟

此の書は俳諧の集なり。編輯の年月を詳にせず。

◉北村季吟の傳は『源氏物語湖月抄』の下にあり。

ぞくれんじゆしかく

續聯珠詩格　二卷　東條　升

元の蔡正孫の『聯珠詩格』に續きて著したる作詩本なり。天保十五年甲辰〔二五〇四〕大窪行の序あり、嘉永六年癸丑〔二五一三〕出版す。

ぞくわうだいき

續王代記　（寫本）一卷

光格天皇御一代の御事績を記し奉りたるものなり寬政十二年庚申〔二四六〇〕の御降誕より、文政十二年己丑〔二四八九〕に至れり。

ぞくわかめいだいぶるゐ

續和歌明題部類　一卷　尾崎　雅嘉

先著『增補和歌明題部類』に漏れたるものを補ひ、且、多くの題を增して專ら會席の便に供へたり。「此の書卷首に名所の組題を擧るを以て、續明題部類と號すと雖も、專ら會席に携へて、四季戀雜の題に詠み合すべき名所を知らしめむが爲に、著せるものなれば、先に著せる增補明題部類とは其の趣意異る書なり」と自解せり。寬政六年甲寅〔二四五四〕出版す。

◉尾崎雅嘉の傳は『群書一覽』の下にあり。

ぞくわかんめいすう

續和漢名數　三卷　貝原　篤信

先著『增補和漢名數』に遺漏せるものを拾集す。分類は前例によれり。元祿五年壬申〔二三五二〕竹洞野節の序あり、同八年出版す。

◉貝原篤信の傳は『自娛集』の下に出づ。

ぞくわげんぎんろくわいへん

續和言黔驢外編　（寫本）五卷　山本　格安

此の書は先著「和言黔驢外編」三卷の續編なり。

⊙山本格安の傳は「獻喧錄」の下にあり。

ぞくわげんきんろへん

續和言黔驢編 寫本五卷 山本 格安

先著「和言黔驢外編」に續きて、器服の原始等より、神事、藝話、その他に關する雜考を門を分ちて漫錄したるものなり。

⊙山本格安の傳は「獻喧錄」の下にあり。

ぞくわしよしふ

續和書集 寫本五卷 稻葉 正義

「和書集」に續き、著者の國字文編を輯集したるものにて、第一卷に三通、二卷に一通、三卷に四十五通、四卷に十一通、五卷に十通、凡て七十編あり。「和書集」と併せ見るべし。

⊙稻葉正義の傳は「迂齋學話」の下にあり。

そけいしゆかん

祖溪手簡 寫本一卷 僧 祖溪

著者の手簡を輯錄したるもの。建仁寺古澗和尙の遺物なりといふ。

そけんき

素絹記 寫本一卷 僧 定珍

天台宗敕許の素絹衣服の由來を旨と記したるものなり。顯密流傳の事を述べたり。元龜二年辛未（二二三一）四月の記。「續群書類從」卷八百四十八、釋家部第百三十二にあり。著者定珍は遂善寺學頭內供奉供と記せり。

そこうぐわいき

祖公外記 寫本六卷 大藪 國義

紀藩祖公の實錄なり。「大君言行錄」等の虛實相混ぜるより、純然眞正の事績を輯錄したりといふ。文化五年戊辰（二四六八）の自序あり。著者大藪國義は紀州藩の士なり。

そこくらき

底倉記 寫本一卷

南朝の遺臣脇屋相模守義陸の戰功を詳記したるもの。晚に應永十年癸未（二〇六三）竊に伊勢に上らんとて義陸同義行と共に箱根山まで上りける時、先年の創傷再發せしより、祖父義助の從者木賀彥六左衞門のもとに忍び、足柄郡底倉の溫泉に浴養したりしを鎌倉の奉行安藤隼人介、人數を向けて捕らへんとせし故二人相刺して遂に滅亡したることを記したるなり。書名は其の死所の名を取りて付けたるなり。

そこぬけうす

底拔臼 寫本二冊 江崎 幸和

著者の俳諧集なり。寬永二十一年甲申（二三〇四）の編にかゝる。

⊙江崎幸和の傳記は「鴉鷺千句」の下にあり。

そさいりやくき

麤細略記 寫本一卷

往年唐土の貨人が官へ差出したりといふ藥方二十餘種を假名文に譯したるものなり。「續みそのや」第四に收めたり。

そさんをしやうごろく

祖山和尙語錄 寫本一卷 僧 祖山

正法山妙心禪師の語錄集なり。侍者楚岷祖常の編するところなり。

そさんろく

素餐錄 寫本一卷 尾藤 孝肇

寬政三年辛亥（二四五一）十一月の自序中に曰く、「余少惑二于伊物一、又溺二于陸王一、出レ彼入レ此、不レ知レ所レ止、歲之及壯也、而始與聞二洛閩之說一、乃順二其初一、悚然自悔、是以當時與人談、輒多二斥邪明正之論一、嘗手記二其言一、爲二小册子一、名素餐錄、以二其隱逸無事一、乃成二斯書一也、今玆辛亥、命入二國學一、敎二督諸生一、因出二諸篋中一、以示二有志者一、亦其早知二正邪之分一、而無レ若二吾之貽一レ悔也」といへり。其の大要を知るべし。全編嚴肅なる漢文にて記せり。

⊙尾藤孝肇の傳は「稱謂私言」の下にあり。

そじきをしへぐさ

麁食救草 一卷 高井 伴寬

凶年救急の食製法を列擧す。一に「經濟救草」といへり。天保四年癸巳（二四九三）の自序あり。

⊙高井伴寬の傳は「孝子教鈔解」の下にあり。

そじやくもんだふ

鼠雀問答 二卷

淨土眞宗の教相を略述したるもの。窮鼠と鬪雀との問答に擬して記したるが故に、斯くは命題した

るなり。

そじゆんひやくばんみづからのうたあはせ

素純百番自歌合 寫本一卷 素 純

四季戀雜に分ちて自歌を歌合したる百番なり。享祿三年庚寅（二一九〇）の奧書あり。「續群書類從」卷四百十四、和歌部第四十九にあり。

⊙素純は有名の歌人なり。東野州につきて、古今傳授を受け、日夜精研して、遂に古今集聞書及び同切紙等を口傳せり。

そしよえうしん

祖書要津 三卷 僧 日進

日進上人の著書「法華題目鈔」「十法界明因果鈔」「內證血脈鈔」「十法界鈔」「總勘文鈔」「教機時國鈔」「本門戒體鈔」「立正觀鈔」「觀心本尊鈔」及び「受職功德鈔」を輯めたるもの。本妙日臨律師の編纂に係り、明治十四年辛巳（二五四一）に新刻せられたり。

⊙日進の傳は「開目鈔」の下に揭げたり。

そしよこくじかい

素書國字解 二卷 荻生 茂卿

黃石公が、素絹に書したる一書を、張良に傳へたるより、名付けたりといふ「素書」を片假字文にて詳解したるもの。本文は原始、正道、求人之志、本德宗道、遵義、安禮の六章數枚のものたり。明和六年己丑（二四二九）宇惠の序あり。同人の校訂して、その年發行したるものなり。

⊙荻生茂卿の傳記は「護園祕錄」の下にあり。

そしよしふいわごき

祖書拾遺和語記 二卷 僧 日性

先著「祖書和語式」に遺れたるものを拾集したるものにて、祖書中に用ひたる和語を集め、一々出所を糺し原本につきて說明解釋したるものなり。元祿九年丙子（二三五六）出版せらる。著者日性は日蓮宗圓智院の住職なり。

そしりぐさ

そしり草 一卷

古來の人物、守屋大連、聖德太子以下四十餘名の各略傳を揭げ、其の行爲の闕點を指摘して痛切に評論したるもの。著者につきては平賀鳩溪と署名せるもあれど、其の文勢等より、同人ならずと論ずるものもあれば、暫く未詳に附す。

そしりやくでん

祖師略傳 寫本一卷

眞言宗祖師の略傳なり。一行、惠果、弘法、實惠、眞雅、眞濟、眞然、眞紹、宗叡、源仁、益信、聖寶、觀賢、淳祐、元杲、仁海、成尊、範俊、嚴覺、增俊、顯嚴、親嚴の二十二僧を略傳す。

そじんせき

楚人石 寫本一卷 佐藤 有藤

著者嘗て林國雄より借りたる「皇國之言靈」（文化八年の著）の中より不審數箇條を書き列ねて林に糺したるもの。甲午八月とあれば、天保五年（二四九四）の著なるべし。「輪池叢書」第十九にあり。

そぜいはふえんかくへん

租稅法沿革編 寫本七冊 橫山 由清

我が國上古以來最近世に至る租稅法律の沿革を記せり。あらゆる國史其の他の出典を擧げて論す。原本七冊は貴重品として、東京帝國大學に所藏す。

⊙橫山由清の傳は「活語自他捷覽」の下にあり。

そゞろものがたり

そゞろ物語 一卷 三浦 茂信

遊女に關する雜話。歌舞妓をどりの事より、常佐眼をとつる事に至る八箇條を集錄したるもの。其の序によるに、三五庵木算入道なるもの丶見聞草紙中より、拔抄したるなりと云ふ。寬永八年辛巳（二三〇一）の刊本あり。

⊙三浦茂信は一名を、茂正といひ、五郎左衞門と稱せり。其の祖嘗て北條氏政に仕へ、北條氏滅亡の後、江戶に來つて商賈となりたり。茂信幼より文筆に長じ著作を好み、「北條五代記」「見聞軍抄」「慶長見聞集」等を著して、北條氏時代の戰事、及び江戶開府の頃の事を詳錄せり。晚年に至り天海僧正に歸依して淨心と改名し、天和元年辛酉（二三四一）三月、八十歲にて歿したり。

そたんしふ

曾丹集 一卷 曾根 好忠

此の書は一名「曾根好忠家集」の下に揭出せり。

そたんしふてきさう

曾丹集摘草 一卷 加納 諸平

曾根好忠の「曾丹集」の中の歌を撰出して、評釋したるもの。自序あり。明治十九年前田水穗の序に、柿園翁の歿後三十年にあたりて、此の稿を出版する由見えたり。

◉加納諸平の傳記は「類題和歌鰒玉集」の下にあり

そつき

帥記　（木寫）七卷　源　經信

著者にて一名を「經信卿記」また「都記」といふ。「帥記」は著者が太宰權帥たりしより稱したるなり。記事は後冷泉天皇の治暦四年戊申〔一七二八〕の冬。白河天皇の承暦四年庚申〔一七四〇〕の夏秋。同五年〔永保元年〕の春夏冬。堀河天皇寬治二年戊辰〔一七四八〕の秋冬。以上四年間の記事なり。「群書一覽」に治暦四年より寬治二年に至る二十一年間の日錄のやうに記せるは粗漏なり。蓋し最初は右二十一年間連續して卷數も從て多かりしものなるべけれど、今闕本して傳はる七卷には上の四年間なり。其の中にもまゝ蟲害ありて闕文す。然れども當事在朝者の日錄として、事實上修史家の參考を要すべき點少なからず。七卷五冊に寫傳す。

◉源經信は民部卿道方の子なり。長元年中從五位下に敍し、參河權守となり、爾來刑部少輔、少納言、左馬頭、左右中辨、藏人頭、右大辨、參議兼伊豫守、皇后宮大夫、兼勘解由長官、權中納言等を累歷して、承暦の初め正二位に進み、永承の初め民部卿を兼ね、尋て權大納言兼皇后宮大夫に轉す。博識多通にして、最も和歌を善くし、音學に長じ、また管遊に巧なり。常に帝の雅趣を輔け添り、御歌會の如きは與らざることなし。嘉保元年故ありて太宰權帥となり、承德元年丁丑〔一七五七〕八十二にて薨す。〔或は永長元年といふ〕。

そでかがみ

そでかゞみ　一舗　長野　義言

字音假名の例、假名の反切、字音の反切等の梗概を記したるものなり。渡邊隆古校正して、天保十二年辛丑〔二五〇一〕刊行す。

◉長野義言の傳は「玉の緒末分櫛」の下にあり。

そでくらべ

袖くらべ　一卷　菅沼　斐雄（アヤヲ）

文政元年戊寅〔二四七八〕の春著者が其師香川景樹に從ひて江戸に下りし時の紀行にて、「袖くらべ」は京師に近き里の名をとりて付けたるなり。「桂園叢書」の第一集中にあり。

◉菅沼斐雄は備中國吉濱の人にして、通稱を賴母といふ。江戸に出でて隅田川なる夕踰館にありて、師に代りて歌學を敎へ居たりしが、師に先ちて病歿せり。書を善くせり。

そてつせいしよくはふ

蘇鐵製食法　（木寫）一卷

蘇鐵を食物に製する方法を記す。享保十六年辛亥〔二三九一〕の作を、琉球藩の「農務帳」より拔出したるものなりといふ。

そでにつき

袖日記　（木寫）一卷

女子の和文日記なり。某宮家に奉仕中記すところなり。末に明和六年己丑〔二四二九〕卯月末の三日とあり。

そなんひやうご

素難評語　一卷　大野　通明

荻生徂徠の「素問難經」欄外の評語を集めて別行したるもの。首に通明が「讀素問」文一編を擧げたり。明和二年乙酉〔二四二五〕の自序あり。

◉大野通明は奥州の人にして、子赫と字し、忠右衞門と稱し、北海と號す。荻生徂徠に從ひて兵學を受け、その學を以て子弟を教授せり。著すところは、本書の外に「北海文集」あり。

そねざきしんぢう

曾根崎心中　一卷　近松門左衞門

平野屋德兵衞が、油屋九兵衞の爲めに辱められ、情婦天滿屋於初と情死する始末を仕組たる淨瑠璃にして、近松が傑作の一なり。元祿十六年癸未〔二三六三〕五月の初興業にかゝる。

◉近松門左衞門の傳は「國性爺合戰」の下にあり。

そねざきなさけのかさゝぎ

曾根崎情鵲　五卷　八文字　其笑

近松の作「曾根崎心中」を作り換へたる戲作なり。延享三年丙寅〔二四〇六〕に成る。

◉八文字其笑の傳は「彩色歌相撲」の下にあり。

そねのよしたゞいへのしふ

曾根好忠家集　一卷　曾根　好忠

著者の家集にて數百首を收めたり。一名を「曾丹集」といふ。下河邊長流の校正したる者と、源躬弦、岸本由豆流、藤原寬光等の校正したる者とあり。

◉曾根好忠は寬和頃の人にして、丹後掾たり、人呼で曾丹後また曾丹といふ。當時の歌人を以て知られたり。

そのいしずゑ

その石ずゑ　一卷

俳人楚石追善の發句を輯めたるもの。楚石は文政五年壬午〔二四八二〕死せり。本書は其が三周忌に方りて、遺弟知人等より寄せたる追悼の發句を編輯したるものなり。

そのくにぎせんかう

襲國僞僭考　一卷　鶴峯　戊申

文政三年庚辰〔二四八〇〕著者の端書によく本書の内容を紹介せり。曰く「此の書は古昔呉の支庶、我が西鄙に逃げ來り、其の子孫強大にして錦繡を裝ひ、城廓を築き、其のかみより、漢の文字を取りあつかひ、自ら王と稱して國號を建て、漢土を通じ、或は新羅と婚し、若し意に合ざれば、文を移して掠し、曆を作り、年を記し、寺を建て、錢を鑄、凡て漢土の僭僞の國に異ならざりしといふ考なり」云々と。而して其の事蹟年號等は皆證據の的實なるものにつきて論ぜりといふ。「やまと叢誌」の第三に收めたり。

◉鶴峯戊申の傳記は「神階錄」の下に出でたり。

そのゝよろこび

園慶　（木寫）一冊

春夏秋冬雜に分ちたる連歌なり。作者の名を記さず、横綴一冊に寫傳せり。

そのはまゆふ

其濱木綿　（木寫）一卷　服部　嵐雪

寶永二年乙酉〔二三六五〕俳友數名を伴ひて京都より伊勢神宮に參詣し、紀州を巡りて大阪に到りし時の紀行にして、一行の發句を雜へ記せり。同年京都にて出版す。

◉服部嵐雪の傳は、「雪中庵嵐雪文集」の下にあり。

そのふくろ

その袋　二冊　服部　嵐雪

此の書は俳諧の集なり。元祿年中の作なるべし。

◉服部嵐雪の傳は「雪中庵嵐雪文集」の下にあり。

そのふのぬきな

園圃の拔菜　二冊　竹村　茂雄

我邦の雅語を俗解したるもの。國語を五十音順に分ち、更に語數によりて排列し、平易なる譯解を施したり。先著「詞の園圃」の中より拔抄したるものなればこそ、「園圃の拔菜」と名けたるなれ。弘化二年乙巳〔二五〇五〕孫茂枝等の刊刻する所なり。

◉竹村茂雄の傳は「千町能拔穗」の下にあり。

そのゆきかげ

其雪影　一卷　谷口　蕪村

几董が父の追善にとて普く同人間の連俳句を集めたるものにて、几董の序あり。明和八年辛卯〔二四三一〕の編にかゝる。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◉谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

そばてびきぐさ

蕎麥手引草　（木寫）一卷　旭堂　開明

蕎麥產地の著名なるものを列擧し、各種の製法及び蕎麥皮の用途等を記載したるものなり。安永四年乙未〔二四三五〕の作にかゝる。

そふものがたり

祖父物語　一卷　柿屋喜左衞門

著者が其の祖父の語を錄したるもの。秀吉當時の實記にして、一名を「朝日物語」と云へり。著者柿屋喜左衞門は尾張清洲朝日村の人なり。

そほうろん

素封論　一卷　僧　貫道

百兩金の異種六十一餘種を列擧して各其形狀を說示したるものなり。寬政九年丁巳〔二四五七〕の作なり。著者貫道は京都の人なり。

そめがはしふ

染川集　一冊　肩　哺

著者の俳句集にて、元祿八年乙亥〔二三五五〕の編にかゝる。京都井筒屋の版行したるものなり。著者肩哺は筑前の俳諧者なり。

そめものはやしなん

染物早指南　一卷　好　染　翁

最初染色法に關する要領を記し、次に染色見本四

十餘種を示し、更に染料の配合を揭げたり。嘉永六年癸丑〔二五一三〕出版せる小本なり。

そもんかうぎ

素問講義　（寫本）十册　喜多村直寛

醫書「素問」を精釋詳解したるもの。著者の註釋書三十餘部の內、本書は「傷寒論疏義」と共に最も醫學界に尊重せらる。天保年中の作にして、版本のものあれど、今見るところは寫本なり。

◉喜多村直寛は士栗と字し、安齋と稱し、後父の稱を襲ぎて安政といひ、栲窻、香城等の號あり。嘗て儒を安積艮齋に學び、文政四年醫學館に入り、業成りて遂に醫學教諭となり、後幕府の侍醫に任じ、法眼に敍せらる。漢土の醫書を註譯するもの三十餘種、また「醫方類聚」二百六十六卷、「太平御覽」千卷を活版して官に獻じたることあり。明治九年丙子〔二五三六〕十一月九日、七十三にて卒す。

そもんきうじき

祖門舊事記　三卷　僧　玄智

天正十九年辛卯〔二二五一〕本願寺を京都七條堀河に移してより二百年間、同寺に關する出來事を記したるものなり。

◉玄智の傳は「大谷本願寺通紀」の下にあり。

そもんぎしき

素問識　八卷　多紀　元簡

「素問」の字句を摘擧して一々註釋したるものなり。文化三年丙寅〔二四六六〕の自序、天保八年丁酉〔二四九七〕男元堅の跋あり八卷十册に作らる。

◉多紀元簡の傳は「醫方契領」の下にあり。

そもんぶんせう

蘇門文鈔　二卷　服部　天游

著者の文集なり。卷上に序贊、銘、記、論、說、跋、傳、解、疏、書等を揭げ、卷下に放言數編を載せたり。明和六年己丑〔二四二九〕式部大輔菅原在家の序あり

◉服部天游は平安の人にして、伯和と字し、六藏と稱し蘇門又嘯翁と號す、夙く學に志し、一時物徂徠の復古學を研究せしが、後其非を悟りて、專ら其の攻擊に任ぜり。其の研究するところは經を主とし、兼ねて佛老に入り、自ら三教主人と號し、諸生を集めて教授せり。著すところには燃犀錄、同續錄、同別錄、同餘錄、同遺錄、落草放言、續放言、赤裸々、碧巖方語解、前戲錄、後戲錄、嘯臺餘響、同遺響等あり。明和六年己丑〔二四二九〕九月十六日、年四十六にて歿せり。

そゆうじうし

遡遊從之　（寫本）一卷　木村　孔恭

動植鑛物等の雜記に就きて、太田罩の問に木村孔恭が答へたるもの。凡て四十五箇條あり。享保二年壬戌〔二四六二〕春、太田罩の序を載す。

◉木村孔恭の傳は「一角纂考」の下にあり。

そらいじせき

徂徠事績　（寫本）一卷　荻生　茂卿

著者自身が、元祿九年丙子〔二三五六〕八月二十二日、柳澤出羽守に祿仕せし以後一生の事績を記したるものなり。俗文にて記せり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園秘錄」の下にあり。

そらいしふ

徂徠集　三十卷　荻生　茂卿

著者の詩文集なり。卷一に古詩。卷二、三、四に律。卷五、六、七に絕句。卷八、九、十、十一に序。卷十二に論、紀。卷十三に記。卷十四に贊、銘、碑誌。卷十五に紀行。卷十六に說、題言。卷十七に雜文。卷十八に雜文、跋。卷十九に題言。卷二十より卷三十に至る書牘文。別に補遺一卷あり、詩十九首を收めたり。著者の歿後其の門人等の相謀りて出版するところなり。元文元年丙辰〔二三九六〕本多忠統の序あり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園秘錄」の下にあり。

そらいせんせいがくそく

徂徠先生學則　一卷　荻生　茂卿

最初に學則七則を揭げ、以下附錄として、答安澹泊書、答屈景山書、與平子彬書、同上、對西肥水秀才問等を揭ぐ。門人平竹溪、滕南昌の編輯するところなり。享保十二年丁未〔二三八七〕出版す。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園秘錄」の下にあり。

そらいせんせいしんるゐゆゐしよがき

徂徠先生親類由緒書　（寫本）一卷

長平年中の祖先より、安永五年丙申〔二四三六〕九月二十九日、七十四歲にて死したる父道濟の跡を相續せる事までの大要を記せり。寬政元年己酉〔二四四九〕の記。

そらいせんせいたふもんしよ

徂徠先生答問書　三卷　荻生　茂卿

徂徠の尺牘を編輯したるもの。服元喬の序に「祉友根伯修の私錄するもの。蓋し先生遠人に答ふる所の書なり。伯修親ら先生の塾中に在て、見る每に輒ち傍らより之を私して、以て帳中に祕す。余既に採りて之を得たり。相共に校正して之を梓人に授く。其文辭修飾せざるものは之れを先生に請はざればなり」とあり。享保十年乙巳〔二三八五〕出版す。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園秘錄」の下にあり。

そらいせんせいぶんかい

徂徠先生文戒　一卷　荻生　茂卿

漢文述作の上に、和字、和句、和習の三を戒めたるもの。和字とは、和訓を以て字義を誤るもの、和句とは語理錯綜して位置上下の則を失ふもの、和習とは、既に和字なく又和句に非るも、其の語氣聲勢中華に純ならざるものをいふ。一々適例を擧げて詳論せり、著者の口語を、吉有隣の漢文にて錄したるものなり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園秘錄」の下にあり。

そらうそ

そらうそ　五册

肥後十四郡の名所物を詠みたる發句の集なり。編輯の年時姓名詳ならず。

そらつぶて

空礫　一卷　雛屋　立圃

著者の俳句集にて、一名を「立圃句集」といふ。四季に分序す慶安二年己丑〔二三〇九〕五月の版なり。俳諧文庫第十八編「俳諧珍本集」の中にも收む。

◉雛屋立圃の傳は「をさな源氏」の下にあり。

そりまちだいぜんそじやう

反町大膳訴狀　（寫本）一卷

「武田勝賴に罷在刻、排申す砌」と稱せる書付書狀なり。「續群書類從」卷六百二十五、合戰部第五十五に入れたり。

そりまちゆきさだぐんし

反町幸定軍誌　（寫本）一卷　反町　幸定

當時の領主酒井左衞門尉家次の需によりて、舊日武田勝賴、北條氏直等に仕へし時の軍功を記述して差出したるものなり。元和比の事なるべし。

◉反町幸定は當時上州高崎の浪人たりしが其の以前武田勝賴、北條氏直等に仕へて軍功あるものにて、子孫反町傳藏は安部攝津守に仕へて劍術の師範たりき。

そろばんしなん

算盤指南　一卷　大藪　茂利

數目八算見一より、開平開立に至り、且容術を雜へたる獨學者なり。附錄に點竄問題數條を載す。天保十三年壬寅〔二五〇二〕版行す。

◉大藪茂利は俵助と稱す。筑後柳川の人にして宮本重一の門弟なり。

そろりきやうかばなし

曾呂利狂歌咄　二卷

古來の狂歌を列擧し、一々其の時の事情由來等を記したるものなり。最初に曾呂利新左衞門の狂歌談を擧げたるより、書名とはしたるなるべし。寬文十二年壬子〔二三三二〕出版す。

そろりばなし

曾呂利ばなし　三卷

天正の比、曾呂利といふ雜談上手あり、秀吉の側に出でて折々奇怪なる談話をなすことあり。或人、後に至りて其の談話を編輯したりとて、因緣奇怪の談等二十七條を輯めたり。

そろんはんれい

訴論判例　（寫本）一卷

德川幕府時代の裁訴處刑等の例規を雜記したるものなり。

そんあんかう

村庵稿　（寫本）四卷　希　世

著者の絕律詩百餘首を輯めたるものにて、應永二十五年戊戌〔二〇七八〕岐陽叟方秀の序その他あり

◉希世は靈彥と稱し、村庵と號す。禪僧にして、詩文また當世に名あり。長享二年戊申〔二一四八〕六月二十六日、年八十六にて寂せり。

そんあんせうかう

村庵小稿　（寫本）一卷

著者の漢文集なり。各體凡て數十編を收む。「續群書類從」卷三百三十一、文筆部第十五に入れたり。

そんいぞうそうじやうでん

尊意贈僧正傳　（寫本）一卷

天慶三年庚子〔一六〇〇〕二月二十四日、七十五歳にて入寂したる贈僧正法印尊意大和尙の評傳なり漢文にて記す。『續群書類從』卷二百十三、傳部第二十四に收めたり。

そんゑんしんわうわか

尊圓親王和歌　（寫本）一卷　尊圓法親王

詠法華經百首和歌と、三十六首題との集なり。

◉尊圓法親王の御傳は『釋家官班記』の下にあり。

そんゑんていきんわうらい

尊圓庭訓往來　一卷　尊圓法親王

著者尊圓法親王の往復尺牘文を集輯編成したるものなり。

◉尊圓法親王の傳は『釋家官班記』の下に掲ぐ。

そんがうしんざうめいもん

尊號眞像銘文　一卷　僧　親鸞

淨土眞宗の佛名及び諸眞像の讃銘を和解したるもの。據りて以て該宗の敎義を伺ふべし。建長七年乙卯〔一九一五〕六月の著。『眞宗法要』第六に收めらる。註釋には某の『尊號眞像銘文講』一卷あり。

◉親鸞の傳は『敎行信證』の下に在り。

そんがくいちごき

存覺一期記　一卷

眞宗本願寺派常樂臺開基存覺上人一代の事績を記したるものなり。

そんがくはふご

存覺法語　一卷　僧　存覺

厭離穢土欣求淨土の敎旨を演べたるもの。文和五年丙申〔二〇一六〕三月の著。『眞宗法要』第二十二に收めらる。

◉存覺の傳は『六要鈔』の下にあり。

そんくわいしんわうごくわんちやうき

尊快親王御灌頂記　（寫本）一卷

承久二年庚辰〔一八八〇〕二月十九日、入道尊快法親王の灌頂記なり。同親王は後鳥羽院の皇子にして、御年時に十七歳なりきと。『續群書類從』卷七百四十七、釋家部第三十二にあり。

そんくわざてきろん

存華挫狄論　（寫本）五卷　佐藤　信淵

諸外國の淸國を侵略するを見て、淸國を助けて、之を復興せしめ、永く本邦の西屏たらしむべきことを論じたるもの。存華は淸國を存し、挫狄は歐米諸國を挫折するの意なり。某侯の防海武備の策を問へるに對して答へたるものなりといふ。嘉永二年己酉〔二五〇九〕二月十日の自序あり。

◉佐藤信淵の傳は『經濟要錄』の下にあり。

そんごてきご

孫吳摘語　（寫本）一卷　林　道春

『孫子』『吳子』中の雜語を摘抄し、假名文にて敷演註解したるものなり。元和六年庚申〔二二八〇〕の著者の末記あり。

◉林道春の傳記は『羅山文集』の下にあり。

そんさいぶんせう

遜齋文鈔　一卷　巽　世大

著者の漢文集。文久四年甲子〔二五二四〕森田節齋の序、同三年校訂者中村鼎五の序其他あり。

◉巽世大は儒學者にして、耀文と字し、遜齋と號す。別著に『謝盎山文鈔』三卷あり。

そんし

孫子　一卷　小畑　行簡

孫子の全文に詳細傍譯を加へたるもの。而かも假名文にて、一字一句毎に解釋すること親切なり。萬延元年庚申〔二五二〇〕の自序、及び伯虎の序あり。

◉小畑行簡の傳記は『詩山堂詩話』の下にあり。

そんしいちらん

孫子一覽　（寫本）六卷

孫子の十三編を、一節毎に、假名文もて詳解したるものなり。自序及び凡例あれど、其年時著者等記さず。

そんしかい

孫子解　二卷　河田　孝成

孫子に註解を加へたるものなり。序跋なくまた年時等を記さず。

◉河田孝成の傳記は『周易傷註』の下にあり。

そんしがふけつ

孫子合契　二卷　佐々木世元

孫子の註解なり。寬政三年辛亥〔二四五一〕の自序あり。

◉佐々木世元は近江の人。長卿と字し、帶刀また源三郎と稱し、琴臺また仁里と號す。幼にして穎悟絕

倫長ずるに從て文武兩道に達し、其名都下に高く、東叡の隨宜法王に聘せられて師となる。後ち津侯三百石を以て招けども遂に應ぜず。著書には『武經』其の他の一二種あれど刊するところは本書『孫子合契』のみなりといふ。寬政十二年庚申〔二四六〇〕八月二十日、五十五にて歿す。

そんしぎそ

孫子義疏　七卷　上田　寬

孫子を和解したるものなり。明和二年乙酉〔二四二五〕の自序及び後序あり。同六年出版す。

◉上田寬の傳は『國字孫吳義疏』の下にあり。

そんしげんかい

孫子諺解　（寫本）一卷　林　道春

孫子の全編を、假名文にて講解したるものなり。寬永三年丙寅〔二二八六〕將軍家の命によりて進講するところなりといふ。

◉林道春の傳記は『羅山文集』の下にあり。

そんししやうかい

孫子詳解　十三卷　伊藤　馨

孫子を註解したるものにて、文久元年丙辰〔二三九六〕源謹の序、土浦欽の跋、尾崎愈の跋等あり。翌二年出版す。

◉伊藤馨の傳は『傷寒論文字攷』の下にあり。

そんしせつちう

孫子折衷　十三卷　平山　潛

孫子全編を註解したるもの。凡例中に曰く、「明人劉寅解、多襲舊說、今此註不襲舊說、唯取劉說者、何也、前輩之說、欲一一祓之、則文理不貫、反失煩碎、劉氏合數家之說、以爲己物、故文理條暢、旨意貫通、是乃所以舍舊說而用劉說也」また曰く、「雖議論高奇、而難施實用者、不敢收載、雖論卑辭俚、而切于實効者、搜羅無漏」とあり。寬政十一年己未〔二四五九〕の自序あり、卷首に孫武子の畫像を掲げ、贊して「無聲又無形、變化如鬼神、誰能至此妙、孫武兵聖人」といへり。附錄一卷あり、補傳と解圖とを掲ぐ。

◉平山潛は幕府の臣。子龍と字し、行藏と稱し、兵原、練武堂、運籌眞人等の號あり。家の名を兵原草廬といふ。父祖以來劍技を以て聞えたるが、子龍は兼ねて文を好み、夙く選ばれて昌平黌に入り、後普請役に任ぜられしが、幾くもなくして職を辭して專ら意を文武の兩道に用ひ頗る造詣するところあり、來り學ぶもの亦多し。著すところは『兵原文稿』二十六卷『唐宋臆斷』九卷、『孫子折衷』十三卷『海防問答』五卷等あり。文政十一年戊子〔二四八八〕十二月、年七十にて病歿す。

そんしつうぞくべん

孫子通俗辨　三卷　柴田　春德

孫子の全編を通俗的に辨解したるもの。慶應元年乙丑〔二五二五〕の自序あり。

そんしていえう

孫子提要　二卷　梯　隆恭

孫子の註釋にして、上卷に始計、作戰、謀攻、軍形、兵勢、虛實。下卷に軍爭、九變、行軍、地形、九地、火攻、用間を註せり。文化十三年丙子〔二四七六〕の自序を掲げ、孫子の傳を載せたり。著者梯隆恭は筑後久留米の人なり。

そんしどうくわんせう

孫子童觀抄　十三卷　松亭　金水

孫子の全編を詳解したるものなり。元治元年甲子〔二五二四〕加藤道の序あり。

◉松亭金水の傳は『松亭漫筆』の下にあり。

そんしふくせん

孫子副詮　一卷　佐藤　坦

孫子の本文に字句を補足して初學者をして讀み易からしめたるものなり天保十三年壬寅〔二五〇二〕の自序あり。

◉佐藤坦の傳は『愛日樓文詩』の下にあり。

そんしやうしんわうごにふだんき

尊性親王御入壇記　（寫本）一卷　尊性法親王

建曆元年辛未〔一八七一〕四月四日、妙法院尊性六品親王御灌頂の記なり。『續群書類從』卷七百四十八、釋家部第三十三にあり。中間闕文す。

◉尊性法親王は一名を道法といふ。高倉院の第二子にして、後堀河の皇弟なり。光明諦院と稱す。天台座主に補せられ權僧正に任ぜらる。延應元年己亥〔一八九九〕九月、四十六歳にて入寂す。綾小路宮と號す。

そんしようじくやうのき

尊勝寺供養記　一卷

康和四年壬午〔一七六二〕七月二十一日、尊勝寺に於て供養法會を執行したる時の儀式次第等を詳記したるもの。『群書類從』卷四百三十二、釋家部第八に收められたり。

そんしりやくかい

孫子略解　三卷　櫻田　廸

孫子の古文を得て、之れに今文を照合し、删補校訂して古今文の得失を辨じ、諸家の說をも併せ考へて、略解したるものなり。假名文を以て記せり。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕の作。齋藤馨の序あり。◉櫻田廸の傳は『兵法新論』の下にあり。

そんしん

存心　一卷　奧田　士礩

敎訓の書なり。『孟子』の「操則存舍則亡」の語によりて名けたり。伊藤長胤の跋に「古にいふ此言小と雖も、以て大に喩ふべし。右奧田氏述ぶる所の存心五十則、前哲の遺訓に原き蒭蕘の鄙言に參し其の益たる豈鮮々ならん」やといへり。享保十五年庚戌〔二三九〇〕の自序、嘉永七年甲寅〔二五一四〕羽倉用九の跋あり。

そんぢひりやく

尊治鄙略（寫本）一卷

德川家康の言行數十箇條を記載せり。末に秀吉薨去後の有樣、伏見關原等の戰談數十箇條を加添す。

そんぴぶんみやく

尊卑分脈　十四卷　洞院　公定

帝王及び諸氏の系圖なり。首卷に『本朝皇胤紹運錄』と標して、天神七代地神五代及び人皇歷代の系譜は卽ち國常立尊より後陽成院までのを詳記せるは、長享二年戊申〔二一四八〕藤原宣胤の作。第一卷の初めに編纂本朝尊卑分脈圖、特進亞槐藤公定撰とありて、淸和天皇より記し初めて、卷三崇光院に至り、卷四以下に源氏平氏橘氏藤原氏の系圖を連載したり。卷末に天正十九年辛卯〔二二五一〕梵舜の奧書あり。蓋し古の氏骨を考ふべきものゝ唯一參考書たりといふ。然れども、まゝ散佚して今傳ふるところは、全部のものにあらずといふ。惜むべきなり。本書は勅を以て官庫に納められたるより、世に官本系圖と稱せり。また『諸家大系圖』として行へるもあり。或は十四卷系圖とも稱す。◉洞院公定は內大臣藤原實夏の子。幼にして從五位下に敍せられ、累遷して終に從一位左大臣に至る。博識を以て世に稱せられ、諸氏の流派等は悉くこれを暗記したりといふ。應永六年己卯〔二〇五九〕六月、年六十にて薨す。諡して後中園と號す。

そんぴぶんみやくだつる

尊卑分脈脫漏（寫本）三卷　洞院　公定

尊卑分脈の遺漏を補へるもの。『續群書類從』卷百〇八の上中下三册、系圖部第三に收めたり。又內藤廣前の校本は刊行なり。◉洞院公定の傳は『尊卑分脈』の下にあり。

そんぶへいはふたく

孫武兵法擇　十三卷　新井　君美

孫子を撰註したるもの。魏武帝の註以下諸家の說を採摘し、更に自家の見識を以て斷定せり。よく複雜を芟りて大義頗る簡明なり。別に『副言』二卷を添へて本註の餘義を假名書にす。享保七年壬寅〔二三八二〕の自序、及び閣罕の序あり。◉新井君美の傳は『折たく柴の記』の下にあり。

た

たいあんきげん

泰庵戯言（寫本）二卷　交泰庵朝陽

文武に關する著者の放言隨筆なり。戊寅の年、薩人坂本庶四郞といふ人に送りたるものなり。

だいあんじえんぎ

大安寺緣起　一帖　僧　恩覺

南都大安寺の古緣起なり。全編漢文にて記す。寬平七年乙卯〔一五五五〕八月五日恩覺、外寺主上座別當及び俗別當菅原道眞等連銘す。筆は道眞の眞蹟を石摺折本にしたるもの。帝國圖書館に貴重品として藏す。所々磨滅蝕等あるは惜むべきなり。

だいあんじがらんえんぎりうきしざいちやう

大安寺伽藍緣起流記資財帳　一卷　僧　靈仁

大和國大安寺創立の緣起、同寺の什器資財等を詳記したるもの。天平十九年丁亥〔一四〇七〕二月十一日、該寺僧綱所よりの具狀奏聞するところ。『群書類從』卷四百三十五、釋家部第十一に收めたり。僧靈仁等の編したるものなり。

たいいうゐんでんちせいりやくき

大猷院殿治世略記（寫本）一卷

德川三代將軍家光が慶長九年甲辰〔二二六四〕七月十七日の誕生より、慶應四年戊辰〔二二八八〕四月二十日の薨去及び同五月六日日光山に葬送の事贈位の事までを年表的に略記し、最後に同治世中に造營したる宮城社寺を列記せり。

たいいうこうごじやうらくちうのゑいか

大猷公御上洛中の詠歌　一卷　德川　家光

某年六月下旬より文月上旬まで、上洛の途中に詠じたる和歌二十七首を集めたるもの。『百萬塔』第二に收めり。◉德川家光の傳は『家光卿記』の下にあり。

たいいうこうちせいりやくき

大猷公治世略記（寫本）一卷

德川三代家光治世間の政事の大要を記したるもの。中には參內、日光來詣、諸大名增秩、參覲交替の始め、朝鮮琉球の來聘、寬永系圖編纂の事等を記載したり。『大猷院殿治世略記』とは自ら別物なり。

たいいうこうふ

大猷公譜（寫本）一卷

德川三代將軍大猷院家光一生間の年譜なり。

たいいつでふ

太乙帖　一卷　賴　惟寬

著者眞筆の習字臨本なり。太乙近天都以下凡て四十字あり、「戊午冬日書」とあり。寬政十年戊午〔二四五八〕のことなるべし。明治十五年出版す。◉賴惟寬の傳は『藝備孝義傳』の下にあり。

たいいんれきさいさう

太陰曆細草（寫本）廿四卷　足立　信行

太陰曆法を推算して、一月より十二月に至る。天文方足立左內信行と、岡山路金之丞彰常との推算に係るものにて、內閣文庫に、特別書として藏せり。◉足立信行のことは『新法曆書續編』の下にあり。

だいうんゐんかいさんぢやうあんしやうにんでん

大雲院開山貞安上人傳（寫本）一卷

天文八年己亥〔二一九九〕に生れ、元和元年乙卯〔二二七五〕享年七十七にて示寂したる貞安上人の略傳なり。漢文にて記す。『續群書類從』卷二百二十三、傳部第三十四に入る。

だいうんじえんぎ

大雲寺緣起（寫本）一卷

日野中納言文範の草創にかゝる山城國、岩藏山大雲寺の由來記なり。漢文にて記す。『續群書類從』卷七百八十六、釋家部第七十一にあり。

だいうんじしよだうならびにけいふ

大雲寺諸堂並系譜（寫本）一卷

名の如く先づ大雲寺の諸堂目錄を揭げ次に住僧の系譜を載す『續群書類從』に收む。

だいゑいけいちやうねんかんりやくふ

大永慶長年間略譜（寫本）二卷

卷一に德川氏祖先の事、豐臣家小田原攻及び朝鮮征伐の事等より、家康官位の事等に及び、卷二に秀吉薨去の後伏見騷動の事より、大阪合戰の後秀忠參內して諸將恩賞の事等に至れり。寬永八年辛卯〔二三七一〕の奧書あり。

だいゑいごねんいはしみづはちまんせんぐうにちじさだめ

大永五年石淸水八幡遷宮日時定（寫本）一卷

大永五年乙酉〔二一八五〕に於ける石淸水八幡宮の遷座日時定なること名の示すが如し。『續群書類從』卷三十二、神祇部第三十二にあり。

だいゑいさんねんむろまちでんごまのき

大永三年室町殿護摩記（寫本）一卷　僧　嚴助

大永三年癸未〔二一八三〕九月十五日、室町殿に於て行ひたる不動護摩の日記なり、同月二十一日の作なり。著者嚴助のことは『乙酉歲記』の下にあり。

だいゑいにねんでんしやうえんすゐき

大永二年殿上燕醉記（寫本）一卷　藤原　基規

大永二年壬午〔二一八二〕殿上に於ける燕醉略次第

な記したるものなり。「續群書類從」卷二百五十九、公事部第十二に入る。

だいゑいにねんはちぐわつよつかごくわいわか

大永二年八月四日御會和歌　（寫本）一卷

實香、堯空、曉覺、宗清、季種、元長、公條、爲和等の詠み出でたる戀五十首なり「續群書類從」卷四百和歌部第三十五にあり。

だいえきざつせう

代奕雜抄　二卷　石川　安貞

經書詩文世話等の事を雜錄したる假名書の隨筆なり。寬政十二年庚申〔二四六〇〕の自序に「余不知奕棊、講經之暇以涉諸書代之」と云へるにて題意を知るべし。

◉石川安貞の傳は「勸學俗訓」の下にあり。

だいゑんぜんじ

大圓禪師　（寫本）一卷

德治元年丙午〔一九六六〕京都に入寂せる宋歸化僧圓覺（敕賜大圓禪師）の略傳なり。「續群書類從」卷二百二十八、傳部第三十九に入る。

だいおうこくしたふめい

大應國師塔銘　一帖　僧　大應

尾張國中島郡妙興寺の塔銘なり。寬政十一年己未〔二四五九〕尾張秦鼎の跋文あり。

◉大應は諱を紹明といひ、字は南浦、敕號を圓通といふ。駿河國安部縣の人なり。入唐して禪法を修し歸朝の後太宰府宗福寺に住すること三十年、嘉元三年乙巳〔一九六五〕太上皇の敕によりて上京し、德治二年丁未〔一九六七〕北條貞時に聘せられて建長寺を董し、翌、延慶元年戊申十二月二十九日病んで寂す。

たいおんき

戴恩記　（寫本）二卷　松永　貞德

歌道に關する心得、祕訣、雜話等を集錄したるもの。孫寸雲子昌易の序跋を載せたり。天和二年壬戌〔二三四二〕の刻本ある由なれ共、今は見るを得ず。

◉松永貞德の傳は「歌林雜話」の下にあり。

たいが

體雅　三卷　多紀　元胤

人體解剖の書。身體各部の名稱を擧げて其の部位を示し、更に素問、靈樞、說文、爾雅、甲乙經、類經、釋名其の他十數種の書を引證して、其の名稱を參照考說したり。刊行の年月詳ならず。

◉多紀元胤は醫士。字は紹翁、柳沜と號し、通稱を安元と云ふ。元簡〔號桂山〕の子なり。父の封を襲ぎて醫官となり、博識を以て稱せらる。文政十年丁亥〔二四八七〕六月、享年四十有七にて歿す。

だいかいしふ

大海集　八冊

諸家俳諧の集にして、桑折、宗臣の序あり。寬文十二年壬子〔二三三二〕四月の編にかゝる。

たいかうこえきでん

太昊古易傳　四卷　平田　篤胤

太昊伏羲氏の傳へたりといふ古易の事を主として辨說したるものなり。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

たいかうこれきでん

太昊古曆傳　四卷　平田　篤胤

秦漢以前の古曆書等に散見せる太昊古曆法を拔萃して本文となし、古天文地理曆數の正旨干支の起原其の用法等をも辨明したるものなり。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

だいがくえうりやく

大學要略　二卷

大學の中の要句を摘抄して評釋したるものなり。一名「大學逐鹿評」若くは單に「逐鹿評」といふ。明正天皇の寬永七年庚午〔二二九〇〕橫綴二册に發行す。

だいがくえんぎかうしよう

大學衍義考證　（寫本）八卷　中村　明遠

大學を衍義考證したること名の如し。八卷五册に作らる。

◉中村明遠の傳は「寓意錄」の下にあり。

だいがくかい

大學解　一卷　荻生　茂卿

大學を註解したるもの。本文の一節毎に一字を下げて註解を加ふ。本文注文共漢文無點なり。元祿元年戊辰〔二三四八〕櫟信受の序あり。

◉荻生茂卿の傳記は「蘐園脈錄」の下にあり。

だいがくかいていぐわいへん

大學階梯外編　（寫本）二卷　生田　國秀

神代の事を論じたるものにして、安政三年丙辰〔二五一六〕の平田鐵胤の跋あり。

◉生田國秀の傳は「古學二千文」の下にあり。

だいがくかう

大學考　一卷　僧　大我

大學の作者年代を考論したるもの寶曆七年丁丑〔二四一七〕の自序及び圓中の跋、翌、八年牧春雅の序、僧敬雄の序等あり。

◉大我は山城國正法寺の住僧なり。絕外と字し、孤立道人、また夢庵と號す。著書は本書の外に新撰念佛和讚、唯稱安心鏡、唯稱門津決、辟窺決、阿彌陀經略鈔、吉水辟邪訓疏、專修念佛祈禱論、專修解或論、眞察大僧正傳、義奴傳、楠石論、紫朱論、淨業論、鼎足論、辨惑編、春遊興、夢庵戲歌集、玉石論、金鍮論、仁義論、四敎論、芝遊談、東海行等あり。

だいがくかうぎひつき

大學講義筆記　（寫本）二卷　佐藤　直方

著者が上毛國厩橋藩に於て、酒井忠明の爲めに「大學」を講じたりしを、筆記したるものなり。全文片假名文にて寫す。元祿十五年壬午〔二三六二〕九月二十八日の終講にかゝる。

◉佐藤直方の傳は「道學標的」の下にあり。

だいがくかんかい

大學簡解　一卷　神野　世猷

大學を簡解したること名の明示するが如し。天保三年壬辰〔二四九二〕の自序あり。

だいがくけい

大學啓　一卷　和田　絅

大學の一章一節毎に、一字を下げて略註を加へたるものなり。

◉和田絅の傳は「易傳圖解」の下にあり。

だいがくけいはつしふ

大學啓發集　六卷　山崎　嘉

文集語類中より、「大學」の疑問を解說したる語句を輯錄したるものなり。書名は「論語」の「不憤不啓不悱不發」の語に取りし由自序に見えたり。

◉山崎嘉の傳は「垂加文集」の下にあり。

だいがくけいぶんかうぎ

大學經文講義　一卷　松平　定信

大學經文の要旨を通俗適切に講演し、時務に論及したるもの。文政九年丙戌〔二四八六〕八月の奥書あり。「樂翁公遺書」中に收む。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

だいがくげんかい

大學原解　三卷　太田　元貞

一家の見を以て「大學」の精神原意を詳解し、かねて字句の註釋を加へたるものなり。

◉太田元貞の傳記は「周易詳說」の下にあり。

だいがくげんかい

大學諺解　一卷　遲塚　久德

大學の一節毎に、一字を下げ、假名文を以て解釋したるものなり。天保六年乙未〔二四九五〕の假名文自序あり。

◉遲塚久德の傳は「論語說」の下にあり。

だいがくげんかい

大學諺解　（寫本）三卷　林　道春

假名文もて「大學」の全部を解釋したるものなり。寬永七年庚午〔二二九〇〕著者の末記あり、三册に寫傳す。

◉林道春の傳記は「羅山文集」の下にあり。

だいがくしかう

大學私衡　一卷　龜田　長興

大學を註解したるもの。能く諸說を折衷して自家の見識を發揮せり。書名を「大學辨義」といへり。寬政十一年己未〔二四五九〕男長梓の末記あり。

◉龜田長興の傳は「善身堂文集」の下にあり。

だいかくじもんぜきしだい

大覺寺門跡次第　（寫本）一卷

恒寂法親王以下前太政大臣家熙の息寬守に至る四十一代の門跡を次第す。「續群書類從」卷九十五、補任部第七にあり。

だいかくじもんぜきりやくき

大覺寺門跡略記　（寫本）一卷

大覺寺門跡後宇多院以下各代の事實法制等を略記したるものなり。「續群書類從」卷九十五、補任部第七にあり。

だいかくしやうきさん

題額聖闢贊　十六卷　僧　良定

單に「聖闢贊」として「し」の部に解題し、著者の傳も同書の下に揭げたり。

だいがくしやうくかうほん

大學章句講本　一卷　砂川　由信

此の書は「大學」の章句を註解したるものなり。年代未だ詳ならず。

だいがくしやうくさんしやく

大學章句纂釋　一卷　古賀　樸

朱子の「大學章句」を纂註解釋したるものにて、薩摩石冢崔高、會津土屋朋の同校するところなり。寬政十二年庚申〔二四六〇〕九月の自序、文化八年辛未〔二四七一〕土屋朋の序等あり。

◉古賀樸の傳記は「十字解」の下にあり。

だいがくしやうくしんそ

大學章句新疏　二卷　室　直清

大學を疏釋したるものにて、最も詳密を盡せり。天明六年丙午〔二四四六〕出版す。

◉室直清の傳は「駿臺雜話」の下に出づ。

だいがくしやうくせう

大學章句抄　（寫本）二卷

大學の序文より本文の終り迄を詳釋したるものなり。全編片假名文にて記されたり。尙諸書を引きて頭書をも加へたり。

だいがくじゆつ

大學述　一卷　平　兪

朱子の意に從て「大學」を講解したるもの。本文に續けて直に自家の解說を敷衍し、漢文無點に作り、一卷を上下二册に分ち行ふ。此の書の名を「大學簡解」といひたりとぞ。門人江西僩等の校正するところなり。著者平兪は下總國の人にして、儒學者なり。

だいかくぜんじごろく

（建長開山）大覺禪師語錄　三卷　僧　道隆

鎌倉建長寺開山歸化蘭溪僧の法語集なり。大覺は敕諡號なり。上卷を「日本國相模州常樂寺蘭溪和尙語錄」と內題して、侍者圓顯、智光等編輯し。中卷を「山城州北京東山建寧禪寺蘭溪和尙語錄」と內題して、侍者了禪、從琛等編輯し、下卷を「普說」と題す。唐土佛光法師の序あり。延享二年乙丑〔二四〇五〕加點再鋟するところなり。

◉道隆は宋國の僧にして、我が鎌倉巨福山建長寺の開山たり。蘭溪と號す。嘗て日本僧の國光を稱する盛なるを聞き、また僧禪門の草昧なるを聞きて、遊化の志を生じ、寬元四年丙午〔一九〇六〕我が邦に來り、先づ泉涌寺の來迎院に留錫し、執權北條時賴、延きて常樂寺に居らしめ、また巨福山の基趾を開きて開山說法せしむ。居ること十三年關東の學僧來集することいと多し、後、平安の建仁寺に遷り、上皇の召を辱ふし宮中に入りて偈を奏す。後再び建長寺に歸り、弘安元年戊寅〔一九三八〕七月二十四日入寂す。朝廷大覺禪師を諡らる。本朝禪師の號は蓋しこれを以て嚆矢とす。

だいがくちゆうようかい

大學中庸解　三卷　荻生　茂卿

大學中庸共に本文の每章句に漢文にて自見を插註したるもの。元祿元年戊辰〔二三四八〕橘信受の序、韮川富の跋あり。因にいふ大學解の方は、著者水野明卿の問に應じ、一夜の中に講述したるものなりといふ。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園祕錄」の下にあり。

だいがくていほん

大學定本　一卷　伊藤　維楨

大學に考註す。中御門天皇の正德三年癸巳〔二三七三〕長胤の序、貞享二年乙丑〔二三四五〕伊藤某の跋あり。

◉伊藤維楨の傳記は「論語古義」の下にあり。

だいがくていほんしやくぎ

大學定本釋義　一卷　伊藤　長胤

父仁齋の「大學定本」を釋義したるもの。元文四年己未〔二三九九〕五月、弟長堅の序中に「先人大學を以て孔子の書にあらずとして、遂に辨を作り、十證を著し、亦定本を作る、亡兄亦釋義一本を著してこれを翼す」云々といへり。元文三年門人廣會未濟の跋あり。

◉伊藤長胤の傳は「韜軒小錄」の下に出づ。

だいがくどくげんぽん

大學讀原本　一卷　小南　寬

大學を論じたる漢文無點本なり。嘉永三年庚戌〔二五一〇〕十一月の自跋あり。

◉小南寬は江戶の儒者にして、常八郎と稱し、士栗と字し、栗齋また古道學人と號す。儒を以て壬生藩に仕ふ。著書には、四書談、聖學、經學文章論、古易大數、道德仁義說、和漢文明記、江戶竹枝論等あり。萬延元年庚申〔二五二〇〕十月十日九十歲にて歿す。

だいがくぶつせつ

大學物說　（寫本）一卷　淺見　安正

大學の「致知在格物」に就き、諸經傳中より「物」字を論說したるものを抄聚し、更に自見をも加へて詳細に辨じたるものなり。寶永三年丙戌〔二三六六〕十二月に記するところなり。

◉淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

だいがくべんぎ

大學辨疑　（寫本）一卷　龜田　長興

此の書は改名「大學私衡」の下に解題したり。

だいがくめいとくせつ

大學明德說　（寫本）一卷　淺見　安正

大學の中の明德を、朱子の章句、或問、發揮等の意を推して、講說したるものなり。漢文無點九枚に寫傳せり。

◉淺見安正の傳記は「靖獻遺言」の下たあり。

だいがくもんだふ

大學問答　四卷　古賀　煜

問答體に「大學」の大要を講解す。著者夙に四書大全の駁雜なるを憂ひ、之れを改正せんとして、明淸諸家の說を取り討究して成せる作なり。漢文無點に作る。文政十年丁亥〔二四八七〕篠崎弼の序、嘉永二年己酉〔二五〇九〕男垣の跋等あり。

◉古賀煜の傳記は「延元紀編」の下にあり。

だいがくやまとゑせう

大學倭繪抄　三卷　長谷川　光信

大學の本文を擧げ其下に普通の繪畫を入れ別に假名交り振り假名附にて譯出せり。蓋し童蒙の讀本に供したるなり。浪花桑門宜春堂薮花の序あり。

◉長谷川光信は畫工にして松翠軒と號す。浮世繪の妙手なりとぞ。

だいがくよし

大學餘師　一卷

大學に假名詳釋を加へたるもの。四書講釋の中にて、嘉永四年辛亥〔二五一一〕六月瓜生氏開版す。

だいがくわくもん

大學或問　二卷　熊澤　伯繼

農政經濟の要、山林水利の事等二十餘條を論述せり。明曆頃の作なるべしといふ。

◉熊澤伯繼の傳記は「孝經外傳或問」の下にあり。

だいがくわくもんしかう

大學或問私考　（寫本）一卷　林　恕

大學或問に考註を加へたるもの。延寶二年甲寅〔二三三四〕の自序あり。

◉林恕の傳は「本朝通鑑」の下にあり。

たいかふき

太閤記　二十二卷　小瀨　道喜

織豐二記を祖述して、豐臣秀吉の一生事績を記したるもの。卷一に秀吉の素性より、漸く立身せる事。卷二に因幡國鳥取城を攻め落し淡路退治等の事。卷三に備中陣信長生害の後明智退治の事。卷四に加賀越中合戰の事。卷五に秀吉柴田勝家と鉾楯に及び信孝と濃州にて合戰する事。卷六に志津ヶ嶽の軍柴田滅亡の事。卷七に所司代の沙汰金賦の評、北野大茶湯の事。卷八に諸將へ知行配分城主を定る事。卷九に信雄と尾州に戰ふ事。卷十に九州陣島津降參の事。卷十一に聚樂亭へ行幸の事。卷十二に小田原陣北條滅亡の事。卷十三に高麗陣の起り及び渡海並に小西加藤武勇の事。卷十四に名護屋越年の事。卷十五に加藤小西都へ攻入事。明帝和睦の使往返の事、朝鮮陣の最終に至る。卷十六に吉野花見高野詣大阪にて猿樂ありし事、醍醐花見の事。卷十七に秀次横暴によつて生害に及ぶ事。卷十八に諸家傳記織田造酒丞より板倉伊賀守に至る十五家。卷十九に山中鹿之助傳記。卷二十、二十一を「八物」と題し治國の要數條を記し、卷二十二は母衣衆の名、太閤遺物の書留なり。全部の事實は虛實混ぜりと雖も、これがために讀者を嬉ばしむること多し。後世更に法橋玉山が插繪して一層流行するものとなれり。元和三年丁巳〔二二七七〕の自跋、寬永三年丙寅〔二二八六〕朝山意林庵素心の跋あり。萬治四年辛丑〔二三二一〕出版す。

◉小瀨道喜、通稱を又四郎また長大夫といひ、甫庵と號す。美濃國土岐氏の庶流にして姓を坂井、土

肥、小瀬に改め關白豐臣秀次に仕へ、秀次の亡後雲州侯に仕へまた加州侯に仕へて祿二百石を食む。夙に易學に通じまた軍學に深く、著すところ軍學の外に信長記、童蒙先習、天正軍記、太閤軍記等あり。寛政七年庚午〔二二九〇〕年七十七にて歿す。

たいかふぐんき

太閤軍記　四卷

豐臣秀吉戰爭の事績を記したるもの。因幡國鳥取軍の事、伯耆國羽衣石岩倉兩城後攻の事等を初めとして、光秀の叛逆、山崎合戰、朝鮮征伐等の事を記せり。本書に署名なしと雖も、或は謂く小瀬甫庵の著なりと。今輙く之れを確むる能はず。承應三年甲午〔二三一四〕の刻本あり。

たいかふごじだいいちまんごくいじやうのぶんげんちやう

太閤御時代一萬石以上の分限帳　（寫本）一卷

人數百六十三人、知行高千八百十二萬四千二百石の分限帳なり、明治十年内務省の寫本による。

たいかふごだいおほさかごじやうてんしゆづ

太閤御代大阪御城天守圖　（寫本）一折　村山　延次

天守矢倉百分一の圖にして、其の統計的記事を示せば、矢倉高土臺下端より棟瓦上端まで、丸京間にて三十九間一尺、同高京間にて二十五丈四尺五寸、同高六尺間にて四十二間二尺五寸、桁行京間にて十六間、梁行十四間、上の重桁行八間、梁行六間、穴藏百八十坪、初重二百八十八坪、二重二百二十四坪、三重百六十八坪、四重八十坪、五重四十八坪、凡て九百八十八坪なり。元文四年己未〔二三九九〕村山延次江戸にありし時、大匠家大川内理兵衞より傳へたるを、傳寫したるものといふ。

たいかふしよこくぐんき

太閤諸國軍記　七卷

太閤秀吉の出生より薨去に至る一代の事績を詳細に記錄したるもの。寳永四年丁亥〔二三六七〕に上梓せらる。蓋し「本朝將軍記」の中より太閤の記のみを標出して題號を改め、書肆の手に刊刻せられたるなりと云ふ、文辭も雅に、體裁も整ひたり。

たいかふすじやうき

太閤素生記　（寫本）一卷

秀吉幼時の事、其の一族の生卒等を記し、一代の事功は「太閤記」に讓りて錄せずとぞ。「史籍集覽」の中に收めたり。

たいかふつうぐひやう

帶甲通愚評　（寫本）四卷　大野　一貫

山寺信正の「帶甲通」上下二卷に逐條評論を加へたるものにて、甲冑の故實を評記せり。寛政六年甲寅〔二四五四〕の跋あり。

◉大野一貫の傳は「弓式辨」の下にあり。

たいかふひでよししゆつしやうき

太閤秀吉出生記　（寫本）一卷

豐臣秀吉の父母妻妾の略系譜、秀吉の事績の數條を抄記したるもの。延寳八年庚申〔二三四〇〕及び元文二年丁巳〔二三九七〕書寫の奥書あり。

たいかふみよぶんげんちやう

太閤御世分限帳　（寫本）一卷

秀吉時代に於ける諸大名の知領高を列記したるものなり。

たいかんざつき

退閑雜記　十三卷　松平　定信

假名書の隨筆なり。寛政九年丁巳〔二四五六〕の自序に「この書は寛政甲寅〔二四五四〕のとしより、ふとかい初めて一二卷に成りけるを、こその初夏より、脚氣患ひて久しく閑居せし比、かの卷とり出してかいつけけるが、ことしきさらきの比、十あまり三の卷となりければ、退閑雜記と名けて、書櫃の底へ投じ入しなり」、「書このみてみれど忽ち遺忘しぬるにぞ、むかしは門類などわかち抄出したり、それも物うくて、こはめづらしきとおもふ事に、またはかゝみとすべきとおもふことも、めたにかいとどめぬ、そのゝちにはおもひ出しことなども、しるしものせしなり」とあるにて、本書の由來を知るべし。明治二十五年壬辰〔二五五二〕に至り、後編四卷と共に校正合刻せられたり。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

たいかんざつきこうへん

退閑雜記後編　（寫本）四卷　松平　定信

先著「退閑雜記」に續ける隨筆。寛政九年丁巳〔二四五六〕より、同十二年庚申の頃の間に成りたるものなり。明治二十五年壬辰〔二五五二〕に至り、正編十三卷と共に校訂合刻せられたり。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

たいき

台記　（寫本）十四册　藤原　頼長

著者宇治左大臣の日記なり。別名に「宇槐記」「槐記」「治相記」「宇左記」等の數種あり。支那の古例に、大尉、司徒、司空の三公を三台又は台輔といひ、又三公の位を三槐ともいふ。今、本書左大臣の記を「台記」「槐記」といへるは此例なるべく、「治相記」は宇治宰相「宇佐記」は宇治左大臣の意、「宇槐記」も亦以上の意より命じたる名なるべし。要するに著者の命名ならで後世各人の適宜に附したるものなるべし。記事は近衞天皇の康治元年壬戌〔一八〇二〕正月より、同久壽二年乙亥〔一八一五〕四月に至る十四年間のものに係れど、幾多の喪亂を經て佚失の條多し。「群書一覽」に、「此記頼長公生年二十三歳近衞院の康治元年壬戌正月より三十六歳久壽二年四月まで十四年が間の日記なり。此中久安二年正月より九月まで闕、同年十二月闕、又仁平元年四月より十二月まで闕、同二年卷首闕、同三年正月より六月まで闕、十月より十二月まで闕、第二十卷久安六年の記にして半は第十卷と同じ不審十九卷以下は保元の亂によりて記錄に及ばれずと見えたり」とあり。近頃史料大觀に收めて出版せり。

◉藤原頼長は太政大臣忠實の第二子にして、保安三年壬寅〔一八八二〕に生れ幼名を菖蒲若といひ、少にして學を好み、藤原通憲、源師頼、藤原成佐、僧惠曉等に就きて學び才學一時に顯る。長承中正二位に敍し、權大納言に任じ、右近衞大將、内大臣、皇太子傅、左近衞大將等を經て、久安五年己巳〔一八〇九〕太政大臣を拜し、從一位に進む。保元の亂崇德上皇に從ひ、敗れて流矢を受け、舌を嚙みて薨す。世に惡左府といひ、また宇治左大臣と稱す。

だいき

大記　（寫本）十七册　勸修寺　爲房

著者の日錄なり。別名を「大府記」、「大御記」また「爲房卿記」といふ。第一册に延久四年壬子〔一七三二〕十二月、同五年正月。第二に承暦三年正月より十月に至る。第三に永保九年秋冬。第四に同二年三月、四月。第五に應德二年秋冬。第六、七、八、九に寛治元年。第十に同二年十二月。第十一に同四年五月、六月。第十二に同五年秋冬。第十三に同六年春。第十四に嘉保二年の七月、八月。第十五に康和元年の正月、二月、三月、四月。第十六に同二年七月、八月。第十七に長治元年甲申〔一七六四〕正月、二月の諸事を記せり。蓋し全目錄中の殘闕なり現存十七册中にも蟲損の箇所多くして判然せざるもの少からず。

◉勸修寺爲房は藤原氏なり。白河、鳥羽、堀河の三朝に歷仕して、官職參議兼大藏卿に至れり。上に仕へて忠節を盡し、下を遇して仁義あり、當時名吏のありきといふ。

だいきうをしやうはふご

大休和尚法語　（寫本）一卷　僧　大休

著者の法語集にて、詩偈、拈香、法語等を輯錄せり。

著者大休は、正法山妙心寺の住職なり。

だいきつしふ

大橘詩集　一卷　川井　雍

著者の詩集にて寛政十年戊午〔二四五八〕細合方明の序あり、同十二年出版す、赤石藩の儒員梁田蛻巖の批評あり。

だいきつしふ

大橘集　一卷　川井　雍

著者の家集なり。前掲と同物なれど、書名は二様に行れたり。

たいきべつき

台記別記　（寫本）八卷　藤原　頼長

著者の日記「台記」に記載せる事の外、儀式に關する事を記錄したるもの。即ち卷一に長承四年二月賴長任大將記・康治元年十一月大嘗會、同二年正月賭弓。卷二に三月禪閤七十賀、四月官政、十月官政、十二月讀書始、卷三、四に婚記を揭げ久安四年七月より、同十二月に至るものを記す、卷五に久安六年より仁平元年に至る春日社に詣記、卷六に仁平元年藤隆長元服記、卷七に仁平三年詣春日記、卷八に久壽二年四月詣賀茂記を收めたり。

◉藤原頼長の傳は「台記」の下にあり。

だいきやうごしやうぞくのあひだのこと

大嘗御裝束間事　一卷

延中大嘗の際に於ける裝飾座席其他の式例を記したるもの、「群書類從」卷四百七十三、雜部第二十八に收めらる。

だいきやうざつぐもくろく

大饗雜具目錄　（寫本）一卷

永享四年壬子〔二〇九二〕七月二十五日、大饗の雜具を列擧す。『續群書類從』卷九百六十八、雜部第百十八にあり。

だいきやうざつじ

大饗雜事　一卷

其の名の如く大饗に關する雜事を記したるものなり。『群書類從』卷四百七十三、雜部第二十八に收めらる。

だいきやうしだい

大饗次第　一卷

嘉禎二年丙申〔一八九六〕六月九日に於ける、延中大饗の次第書なり。『群書類從』卷四百七十三、雜部第二十九に收めらる。

だいきやうのき

大饗記　（寫本）一卷

此の書は「大饗御裝束間事」と同本。該題下を見よ。

だいきやうりやくしだい

大饗略次第　一卷

大饗の際の儀式次第を略記したるもの。『群書類從』卷四百七十三、雜部第二十八に收めらる。

だいぎよき

大御記　（寫本）十七册　勸修寺爲房

此の書は一名により「大記」の下に解題せり。

たいきよくづせつじふろん

大極圖說十論　（寫本）一卷

無極而大極、無聲無臭、繼善成性、五行一陰陽、無極之眞、五性感動、陽善陰惡、定之以中正仁義、無欲故靜、體立而後用行。以上の十題につきて論述したるものなり。十編悉く漢文にて記す。

だいぎろく

大疑錄　二卷　貝原篤信

程朱二氏の言說の、先聖の道に異背せることを論じたるもの。著者少より、二氏の道を尊信し多年精研し、晩年に至り其の說の先聖の道に異るを疑ひ、遂に二萬言の大文字を著し、「大疑錄」と名けたるなり。明和三年丙戌〔二四二六〕大野通明後序を附し、自ら校正して上木せり。

◉貝原篤信の傳は『自娛集』の下にあり。

だいぐうじのき

大宮司記　（寫本）一卷　大中臣長春

伊勢兩宮御鎭座の後、孝德天皇の御代に定め置かれたる以來の大宮司の略記なり。

だいくきくしやくしふ

大工規矩尺集　二卷

上卷に四尺五尺之宮、三社やしろ、椅子七種たゝむ三社やしろ、一社やしろの事、王子作之宮わく鳥居、二本華表、大貫はなし鳥居。下卷に五間四方堂、三間四方堂、三間四方寶行作棟包、淨土宗御影堂、護摩堂、坊自分之護摩堂、眞言天台華嚴法相三論、黑堂、八宗之事等を假名文にて說明す。卷末に「右此規矩尺之一卷、古今之祕書、大工之傳授、無類之敎導也、然今末世之番匠爲助開板者也」と記し、元祿十三年庚辰〔二三六〇〕洛陽の書肆發行す。

たいくわいひせう

大槐祕抄　（寫本）一卷　九條伊通

年中行事、臨時儀式の時、帝王の御注意あらせらるべき事項を記したるもの。奥に「思ふことかきあつめたる言の葉ぞ、くたしなはてよ風にちらすな」の歌を揭ぐ。元祿五年壬申〔二三五二〕二月、左中將公韶寫本の奧書あり。

◉九條伊通は右大臣俊家の孫にして、鳥羽天皇の保安三年壬寅〔一七八二〕參議に任ぜられ、大治五年中宮權大夫となる。是の年不平を以て官を辭す。後再び仕へて直に權中納言に拜し、權大納言に進み正二位に敍せられ、保元元年內大臣となり、翌年左大臣に遷り、永曆元年太政大臣となる。著書は本書の外に無名鈔、人記除目鈔等あり。二條天皇の永萬元年乙酉〔一八二五〕七十三歲にて薨す。世に大宮大相國又は九條相國と稱す。

だいくわうゐんぶんけんろくつゐかう

大光院聞見錄追考　（寫本）一卷

上野國新田郡金山城山はもと岩松氏の居城なるを、或は傳へて由良氏の居城なりといへるより、由良氏が岩松氏の臣として專橫なりし當時の事實を陳して、右の誤傳を正したるものなり。長樂寺僧の編纂したるものなるべし。

たいくわうたいこうぐうたあはせ

太皇太后宮歌合　（寫本）一卷

堀河天皇の寬治元年丁卯〔一七四七〕太皇太后宮の御歌合なり。

たいくわうたいこうぐうのすけたひらのつねもりあそんけうたあはせ

太皇太后宮亮平經盛朝臣家歌合　一卷

仁安二年丁亥〔一八二七〕八月歌合の歌を集めたるもの『群書類從』卷百八十五、和歌部第四十に收む。

たいくわうたいこうぐうのたいしんきよすけあそんけうたあはせ

太皇太后宮大進淸輔朝臣家歌合　一卷

永曆元年庚辰〔一八二〇〕七月歌合の歌を集めたるもの。『群書類從』卷百八十四、和歌部第三十九に收めらる。

たいくわうふせうしふ

大光普照集　三卷　僧　諦忍

佛敎弘布の爲めに、諸の要領を摘述したるものなり。編輯の年月詳ならず、三卷の中一卷を拔書して行へるもあり。

◉諦忍は、尾張國八事山の住僧にして、著書には、普光寺如來異說決正、念佛無上醍醐編、念佛醍醐祕要識、阿彌陀如來和讚集註、西方十樂手鑑、念佛神力傳、同追加、日本最初念佛法語諺註、弘法大師念佛法語直解、善導大師行狀記、合掌叉手本義編、梵網經要解、諦忍語錄、天狗名義考、以呂波問辨・施供施餓鬼問辨、蓮花標名錄、空華隨筆、大光普照集中卷拔書等あり。

だいくわうふせうしふちうくわんぬきがき

大光普照集中卷拔書　一卷　僧　諦忍

前揭「大光普照集」の中より、「武家は念佛するによろし」といふ一項を抄錄したるものにて、慶應二年丙寅〔二五二六〕長防戰士鎭魂追福會を行ふ時施本したるものなり。

◉諦忍の傳は「大光普照集」の下にあり。

だいぐわしさん

題畫詩刪　二卷

上卷に山水、花卉、園竹。下卷に禽獸、蟲介、合景。附錄に數目畫題、謎語畫題、仙佛、古像、富士山題語等に分類して畫題詩を輯す。文政六年癸未〔二四八三〕及び同五年横堀逸民の序あり。

たいくわじやうのさんだい

（算法）帶過乘之算題　（寫本）一卷　會田安明

算者の大抵過乘を免れ難き算題を解きて、其の括法を施し、勉めて過乘なからしめんことを示したるものにして、大に見るべき書なり。

◉會田安明の傳は『算法古今通覽』の下にあり。

たいくわんしき

對換式　（寫本）一卷

算題を解くに當りて、二式以上にして、同勢なるものは、其の既に得たる所の一式より之を對換して、各式を生ずるもの。本書は題を設けて、是れ等のことを明にしたり。關流の祕書にして、別傳目錄中に在り。年代記載なく、著者も亦詳ならざれども、松永良弼の著なるべし。

だいくわんしやうやつとめがたこゝろえ

代官庄屋勤方心得　（寫本）一卷

寶曆七年丁丑〔二四一七〕平戶藩にて制定したるものなり。代官庄屋等の心得を條規す。

たいくわんずゐひつ

大觀隨筆　（寫本）三卷　田中瓚

諸子類の註解等を引徵して、漢書の故事訓詁を記し、かれて自家の意見をも附記したる隨筆なり。

◉田中瓚は京師の人。字を文瑟、通稱を與三郎、號を大觀といふ。父は由眞とて著名の算術家なりしが、大觀幼にして孤となる。故に父の門人川田由易、中井琼等に就て算術曆學を學び、また宇明霞に從て儒を學び、音韻の學に精しく、文章に長じ、支那近時の俗語にも通じ、遂に儒を以て京師に知らる。著書は本書の外に、尙書天文解、天經或問解、天學指要、發韻微關、名公四序評、大觀遺稿等あり、享保二十年乙卯〔二三九五〕十一月九日廿六にて歿す。

だいくんげんかうろく

大君言行錄　（寫本）二卷

紀州南龍院源賴宣卿の一生言行を輯錄したるもの。壬戌江南の儒者烏有といふものゝ序あり。著者

は江南隨無庵の沙彌として「直如騰子」と記せり。

たいけいせいろん

大經正論　二卷　馬　陵　子

上編に道本、天地經常、守分、輕重、正名性命、天帝、禮樂、道德、君臣、仁義。下編に食獸經典、不變、六詩春秋、孔丘、夷晉、老聃、墨翟、孟軻荀況等の目に就きて論述す。全編漢文なり。內に馬陵大人口義と記せり。明治六年癸酉〔二五三三〕高木眞陵、神谷道一の校正版行したるものなり。

だいけいづ

大系圖　三十卷　西　道智

此の書は「おほ系圖」として「お」の部に解題せり。

だいけいづくわくびきべんらん

大系圖畫引便覽　四卷　水野　忠央

「大系圖」の複名の頭字の畫數によりて臚列し、且本書の丁數を記して搜索に便せり。著者水野土佐守忠央が其の侍臣に命じて作らしむるところなり。嘉永二年癸酉〔二五〇九〕白井簡の序あり。「丹鶴叢書」の中に收む。

◉水野忠央の傳は「丹鶴叢書」の下にあり。

だいげきもろあつのき

大外記師淳記　（寫本）一卷　中原　師淳

後宇多天皇の弘安十一年戊子〔一九四八〕三月、伏見天皇の即位し給へるの次第を記したるものなり。同年四月二十八日正應と改元せらる。著者中原師淳の傳は未だ詳ならず。

だいげきもろしげのき

大外記師茂記　（寫本）一卷　中原　師茂

觀應三年壬辰〔二〇一二〕八月、後光嚴天皇の踐祚の次第を記したる當時の記錄なり。「後光嚴院御踐祚記」として、「群書類從」卷九十一、公事部第十三に收めたるもあり。

だいげきもろすけのき

大外記師右記　（寫本）一卷　中原　師右

著者が延慶四年辛亥〔一九七一〕正月の家記なり。

だいげきもろとみのき

大外記師富記　（寫本）一卷　中原　師富

著者の日記にて、正長二年己酉〔二〇八九〕九月、永享十三年辛酉〔二一〇一〕正月、嘉吉四年甲子〔二一〇四〕正月、二月文安六年己巳〔二一〇九〕七月寳德四年壬申〔二一一二〕享德四年乙亥〔二一一五〕七月長享三年己酉〔二一四九〕八月等の事を記す。

だいげきもろみつのき

大外記師光記　（寫本）一卷　中原　師光

著者の家記。嘉禎二年丙申〔一八九六〕十二月及び寛元四年丙午〔一九〇六〕正月の事を記せり。

◉中原師光は大外記たり。別著に「師光年中行事」一卷あり。

だいげきもろもとのき

大外記師元記　（寫本）一卷　中原　師元

著者が、保安四年癸卯〔一七八三〕二月に於ける日記なり。

◉中原師元は保安二年辛丑〔一七八一〕正月二十三日權少外記に任じ、同年十二月大外記に轉任し、安元元年乙未〔一八三五〕五月卒す。

だいげきよしなりのき

大外記良業記　（寫本）一卷　清原　良業

著者の目錄にして、元久三年甲子〔一八六四〕十月、十一月、十二月及び同二年正月の記事にかゝる。

だいげきよりなりのき

大外記賴業記　（寫本）一卷　清原　賴業

仁安三年戊子〔一八二八〕二月、三月、高倉天皇御即位前後の記事なり。

◉清原賴業は左大臣夏野の後裔にして、大外記祐隆の子なり。大外記明經博士に補せられ殊に明經博士を兼ね、高倉天皇の侍讀となる。安元中越中權守を兼ね性活達にして識見あり朱子と同時にして、「經の解釋自ら朱子と暗合せり」といふ。文治五年己酉〔一八四九〕年六十八にて卒す。子孫祠を建てて祭る。後嵯峨帝車折大明神號を賜ふといふ。

たいけはんかん

大家判鑑　（寫本）二卷

尾張中納言繼友、同光友、紀伊中納言宗直、水戸宰相宗堯、松平陸奥守吉村、以下諸侯の華押を模寫したるものなり。享保年代の作なるべし。

だいげんこくしぎやうじやう

大現國師行狀　（寫本）一卷　僧　禪興

天應大現國師の略傳。漢文にて記す。應永三十二年乙巳〔二〇八五〕靈山德禪寺第四世孫小比丘禪興の記すところなり。「續群書類從」卷二百三十六、傳部第四十七に入る。

だいげんしき

大元式　一札　中路　柳水

著者の俳諧書なり。元祿四年辛未〔二三五一〕正月の編述にかゝる。

◉中路柳水は眞木門の俳人にして、京の神樂岡に住せり。

たいけんしさう

耐軒詩草　二卷　曾我　景章

著者耐軒の詩集。安政六年己未〔二五一九〕安積信の序及び春田器の序、大槻崇の跋、高九淵の跋等ありて、萬延元年庚申〔二五二〇〕上梓せらる。

◉曾我景章は子明と字し、耐軒、詩仙また闇雪と號す。其先は水野監物に仕へ世々藩の教職たり。耐軒年十五にして昌平黌に入り、また古賀侗庵、松崎慊堂等に就きて經術を修め、最も和漢の史乘と古今體詩とに長ぜり。明治二年岡崎藩の文學となり、同三年五月文學總括に遷る、著書は本書の外に耐軒文草、耐軒遺稿、幽討餘錄、五倫名義辨證等あり。明治三年庚午〔二五三〇〕九月二十日、五十五にて歿す。門人等簡文先生と謚す。

たいげんせう

體源鈔　（寫本）二十卷　豐原　統秋

古樂器の來歷を記述したるものなり。「體源」の名は、豐原の姓字の旁たりし字を撰びて名けたりといふ。

◉豐原統秋は樂道の達人にて、柏原院の御師範となり。歌は逍遙院實隆の高弟なりきといへり。常に風雅を好み、一小廬を營みて山里と號し、嘗て詠して曰く「山にても憂からん時の隱れ家や、都のうちの松の下庵」と云へるを、實隆大に賞して爲に「松下鈔」を作りたることあり。大永四年甲申〔二一八四〕八月、七十五歲にて卒す。

たいげんづせつ

太元圖說　一枚　平田　篤胤

上に古道太元顯幽分屬圖を揭げ、下に其の說を說きたるもの。文政三年庚辰〔二四八〇〕正月の作にかゝる。明治三年鐵胤版す。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

たいげんぷくろん

大原反覆論　（寫本）一卷　市瀨　惟長

「算法標題類聚」より抄出したるものにて。諸方の算額を集釋したる十數枚の寫本なり。文化七年庚午〔二四七〇〕四月二十三日最上流直傳市瀨惟長の末記あり。

たいけんもんゐんのほりかはしふ

待賢門院堀川集　一卷　堀　川

なほさむきの歌「山陰のふせやは春もしらればや、軒端の垂氷とくる間もなき」より、しかのこゑの歌「夜もすがら妻戀かれて小男鹿の、うらめしげなるあかつきの聲」に至る百餘首を集む。文祿二年癸巳〔二二五三〕雅教書寫のよしを末記す。「群書類從」卷二百七十九、和歌部第百三十四に收めたり。

◉堀川は、神祇伯顯仲の女にして、生來和歌を善くし、仕へて待賢門院の女房たり。待賢門院は崇德、後白河兩帝の母なり。故ありて薙髮し、佛に歸す。

たいごろくわかい

對語驪錄和解　（寫本）一卷　清水永左衞門

唐人陳采若の「對語驪錄」（弓馬諸術を記したるもの凡て十九條あり）を和譯したるものにて其の自筆原文をも添へたり。譯者の奧書もあれど、年月日を記さず。「弓馬雜纂」の中にあり。

だいござつせう

醍醐雜抄　一卷　僧　隆源

種々の故實故事を記したるもの。孔雀經法結願事、宇治橋事、平等院事、離宮兩社事、平家作者事等の數項あり。「群書類從」卷四百五十五、雜部第十に收めらる。

◉隆源は別に「隆源口傳」をも著せり。

だいごじえうしよ

醍醐寺要書　（寫本）一卷

山城國宇治郡笠取山醍醐寺の舊記なり。「續群書類從」卷七百七十八、釋家部第六十三にあり。

だいごじえんぎ

醍醐寺緣起　一卷

山城國宇治郡笠取山醍醐寺の緣起を漢文にて記し

たるもの。「群書類從」卷四百三十、釋家部第六に收めらる。

だいごじざすじやうぶしだい

醍醐寺座主讓補次第　寫本一卷

同寺第十一代座主大法師明觀より、第四十二代法印權大僧都實勝〔弘安年代〕に至る讓補を次第したるものなり。「續群書類從」卷九十七、補任部第九にあり。

だいごじざつじき

醍醐寺雜事記　一卷

寬平九年丁巳〔一五五七〕より、天承元年辛亥〔一七九一〕まで山城國醍醐寺に關する雜件を集錄したるもの。奥書に「此書者自祖父從儀師慶延之手、從儀師實延生年二歲之時讓得之。于時文治四年〔一八四八〕二月」と記せり。「群書類從」卷四百五十三、雜部第八に收めらる。

だいごじざつじき

醍醐寺雜事記　寫本四卷

名の示すが如く醍醐寺に關する古來の雜事を筆記せり。「續群書類從」卷九百二十三上下各本末四册、雜部第七十三に收む。

だいごずゐひつ

醍醐隨筆　二卷　中山忠義

著者の假名文隨筆なり。種々の典故事實を記し、また自家の和歌詩文等を附載せり。寬文十年庚戌〔二三三〇〕二月の自序あり。本書は一册に版行せられたるものと、二册に發行せられたるものとあり。

◉中山忠義は土佐の人、三柳また花陽軒と號す。醫を長澤道辭に、儒を三宅道乙に學び、業成り醫を以て濃州大垣戶田左門に仕へ、後、病を以て辭すれども許されず、遂に一生の廢業を誓て暇を乞ひ、京都醍醐に隱居したりといふ。嘗て後水尾天皇の御脈を診して功あり、法眼に叙せらる。別著に飛鳥川、醫方口訣集あり。

だいごぢざうゐんにつき

醍醐地藏院日記　寫本二卷

貞和四年戊子〔二〇〇八〕と、觀應二年辛卯〔二〇一一〕との日記にて、一名を「房玄法印日記」といふ。

だいごはうおんけちみやく

醍醐報恩血脈　寫本一卷

此の書は同寺法嗣の系譜なり。各僧の僧位年齡等をも揭ぐ。「續群書類從」卷八百四十四、釋家部第百二十九に收めたり。

だいごむりやうじゆゐんはふりうさうじよう

醍醐無量壽院法流相承　寫本一卷

同寺法流系譜なり。享保元年寫本の奧書あり。「續群書類從」卷八百四十四釋家部第百二十九に收む。

たいごものがたり

大悟物語　一札　平泉鬼貫

俳諧の集にして、元祿三年庚午〔二三五〇〕六月十五日の編述なり。

◉平泉鬼貫の傳記は「ひとりごと」の下にあり。

だいこんはうちやうひでん

大根庖丁祕傳　一卷

大根の切方料理法四十餘種を記したるものなり。

だいざうせいづかい

大象正圖解　一卷

大象の圖及び象に附屬せる諸器械の圖を列擧したるものなり。

たいさうのき

大喪之記　寫本一卷

德川十代將軍浚明院家治が、薨去の時〔天明六年丙午〕の喪葬詳記なり。

たいさく

對策　寫本一卷

行政軍事文學等の事につき、上間に答へたる策書なり。天明八年戊申〔二四四八〕の作なれども、何人の、何人に上れるものなるかを詳にせず。

たいざんいじ

對山遺事　寫本二卷

德川家康の第十子紀州大納言源賴宣の行狀を雜記したるもの。對山は其諡號なり。貞享二年乙丑〔二三四五〕、左川長行古書を得たる由其序文に見えたり。末に北村德晉の漢文跋あり。

たいざんしんせんちんたくれいふ

太山神仙鎭宅靈符　寫本一卷

易占の上より說き出でて、鎭宅の護符を作ることを記せり。卷末に「右於行之時者、前後三日、禁汗穢不淨、食中除五辛之類、着新衣服、淸淨潔白、而無他念可修行、若於亂行者、可蒙天罰者也」と記せり。

だいさんずゐひつ

臺山隨筆　二卷　廣瀨淸風

著者の假名隨筆にして、上卷に雅俗辨、下卷に文武辨を揭ぐ。松崎慊堂の漢文序あり。年時記載なし。

◉廣瀨淸風は穆甫と字し、臺山と號し、嘗て雲大夫と稱す。畫を浪華の五岳に學び、遂に一流の秀となる。かねて、書を善くし、詩歌、文章、管絃等に通ぜり。また菲翡、白雲窩等の號あり。壯年京阪及び江戶等の留守官となり、後、剃髮して諸所に遊歷し、晚年津府に歸住す。著書には、文武涇渭辨、雅俗涇渭辨等あり。文化十年癸酉〔二四七三〕十月十三日歿す、年六十二。

だいしうえきしやうすうづけいえうりやう

大周易象數圖經要領　一卷　小林白蛾

周易象數の圖經にして、これは其の初刻に屬し、要領說略一枚、天閱十數第一圖、同第二圖、人三角五數第一圖、地方九數第一圖、同第二圖、第三圖、大衍筮象第一圖、解經定位之圖、會通變通之圖等の目より成れり。仁孝天皇の天保七年丙申〔二四九六〕の作なり。

◉小林白蛾は大易遺傳專門二千三百七十餘年の後學と稱し、復古大周易館象數學塾を興し、大に門人を敎授す。利同と字し、埋藏と稱し、函山と號す。

だいしうかうえう

台宗綱要　一卷　僧　光謙

天台宗々義の綱要を略說したるもの。元文四年己未〔二三九九〕二品親王公遵の序及び釋亮潤の跋あり。

◉光謙の傳は「觀經妙宗鈔講錄」の下にあり。

たいじうしゆちんはふ

大銃守鎭法　寫本一卷　大野武範

大銃守鎭法とは、大銃もて、賊の襲來を防禦し、其の蜂起を鎭壓する法を記したるものにて、文政二年己卯〔二四七九〕淸水正德の奥書あり。

◉大野武範のことは「國恩錄」の下にあり。

たいしうせつせんりよくわんづ

對州接鮮旅館圖　寫本一折

對馬國の町內客館旅舍の位置等を詳圖したるものなり。著者編年等詳ならず。

だいしうぜんじぎやうじやう

大宗禪師行狀　寫本一卷　僧　宗眞

明應五年丙辰〔二一五六〕正月十四日示寂せる宗熙春浦和尙大宗禪師の略傳。漢文にて記す。前住大德禪寺法孫比丘の撰定するところなり。「續群書類從」卷二百四十三、傳部第五十四に入る。

だいしうせんせいしふ

大湫先生集　五卷　南宮岳

著者大湫の詩集。體を分ちて輯錄す。寶曆十三年癸未〔二四二三〕武欽繇の序、石川貞の跋。翌明和元年甲申津侯藤堂高文の序、同三年瀧鶴臺の序等あり。五卷一册に作る。

◉南宮岳は尾張の人。字を喬卿、通稱を彌六といひ、大湫また積翠樓と號し、後に煙波釣叟と號せり。幼にして孤となり、中西淡淵に從學し、業成りて伊勢に行き桑名、松坂等に敎授す。時に細井德民と交遊あり、德民江戶に下帷するに及び、其の勸めによりて江戶に出で、同じく徒を敎ふ。來り學ぶもの多し。諸侯其の名を聞きて聘するものあれど、悉くこれを辭す。著すところは本書の外に論語師說述義、孝經指解補註、今文尙書定本纂、學庸旨考、大學定本、禹貢地理指掌圖考、春秋三傳、批考小爾雅、歷代備荒考、守成編、勸學編、積翠閑言、芸窓放言、漁翁秋言、病餘瑣言、諦餘獨覽等あり。安永七年戊戌〔二四三八〕三月三日歿す、年五十一。

だいじうづ

大銃圖　寫本一軸

洋銃葛論奈的（カロナーデ）砲、模爾底兒（モルチール）銃、訶烏微都兒（ホウウヰツツル）及び附屬諸器の圖說なり圖は凡て現品の五分の一に作れり。

たいしうふないのづ

對州府內圖　寫本一軸

對馬府中の明細圖にして侍家、町家、屋敷構、宄民小屋、船改番所、奉行所、其の他社寺、道路等最詳細に記せり。

だいしおぎやうじやうしふき

大師御行狀集記　一卷

弘法大師空海一代の事績をば、百三箇條に分ちて記載したるもの。屋代弘賢等の跋を載せたり。

だいじき

大寺記　（寫本）二卷　僧　貫證

同寺傳敎の剏始、行智の開闢以來凡九百年間の事績を略記したるものなり。享保十五年庚戌〔二三九〇〕の自序あり。

◉貫證は義幽と號し、後、珍窮と改む。當時中興より六世の住職なりと。

だいしくわうぎやうでん

大師廣行傳　（寫本）二卷

寶龜五年甲寅〔一四三四〕弘法大師の誕生より、承和二年乙卯〔一四九五〕の入定に至るまでの傳記なり。一名を「弘法大師勘文」といへり本書は一說に理源大師の作なるべしといへり。

たいしこうりつれきてんくわんさんしよくわんき

大史公律曆天官三書管窺　二卷　豬飼　彥博

大史公司馬遷の律、曆、及び天官の三書を註釋したるもの。天保八年丁酉〔二四九七〕著者の題言、弘化二年乙巳〔二五〇五〕齋藤正謙の序等あり。

◉豬飼彥博の傳は『管子補正』の下にあり。

たいししやうせつ

大祀詳說　（寫本）一卷　度會　益弘

新年祭、月次祭、神嘗祭、臨時奉幣、大奉幣、大神寶、公卿敕使等の事を詳說せり。元祿十二年己卯〔二三五九〕度會宗光の需に應じて記するところなりといふ。享保十二年丁未〔二三八七〕同十九年等の寫本奧書あり。

◉度會益弘は「外宮子良館祭典式」の下に傳す。

たいしつたふもん

大室答問　（寫本）一卷　澁井　大室

事務に關する雜錄なり。文化九年壬申〔二四七二〕丸山蔚明の跋に「此の書先師大室先生、人の問に答ふるところなり。予少壯江戶勤役の時、先生の門に遊びし侍座の日、梧右にあるを乞うて書記し置きぬ」云々とあり。

◉澁井大室の傳は『國史』の下にあり。

だいしでんかせう

代氏傳家抄　一卷　屋代　弘賢

享和元年辛酉〔二四六一〕十月十六日、著者の祖父母及び父母の法會を營むに際して、祖父母、父母等の恩德を記し、及び著者成長の有樣、佛事の誠意等を詳記したるものなり。卷首に祖父母及び父母の筆跡を版刻す。全編奉書紙に摺りて大册に作る。

◉屋代弘賢の傳記は『古今要覽稿』の下にあり。

たいしでんき

太子傳記　（寫本）五軸

聖德太子一生の詳傳を假名文に書き綴りたるものなり。五軸に作り帝國圖書館に貴重品として藏す。

たいしでんぎよくりんせう

太子傳玉林抄　（寫本）十九卷

聖德太子の傳記を、諸書を參考して詳記したるものなり。然れども事實は牽强附會多く、佛徒の濫作せるものなるべし。十九卷六册に寫傳す。

たいしでんれきびかう

太子傳曆備講　三十卷　僧　了意

平氏撰の「聖德太子傳曆」を詳註したるものなり。靈元天皇の延寶六年戊午〔二三三八〕の自序中に「採翰疏大概、記抄以備他之講助、卽名曰備講」云々とあり。

◉了意の傳は「盂蘭盆經疏新記直談」の下にあり。

だいしへんかきとめひしよ

大師邊書留祕書　（寫本）一卷

武藏羽田大師河原、神奈川邊の地理、風俗、產業等に關する書留記事なり。

たいしみらいきでんぎ

太子未來記傳義　（寫本）一卷

聖德太子の「未來記」傳の事を記せり。元弘二年壬申〔一九九二〕八月楠正成天王寺に詣でて、「未來記」を拜し、更に後來の事を書したる由の文にて、正慶二年癸酉〔一九九三〕二月二十九日正成の花押あり。後世の僞作なるべし。

だいじやうゐんもんぜきしだい

大乘院門跡次第　（寫本）一卷

權大僧都隆禪より、權僧正信雅に至る二十八代を次第したるものなり。『續群書類從』補任部第十三にあり。

だいじやうゑ

大嘗會　（寫本）一卷

天明七年丁未〔二四四七〕十一月二十七日、大嘗會の記なり。大嘗會行事所始日時定任大臣、臨時敍位次第、國郡卜定次第、荒見川祓儀、御禊次第、大嘗會由奉幣次第、大嘗會卯日次第、同卯日假名次第、辰日節會次第、巳日節會次第、豐明節會次第、清暑堂御神樂、散狀諸司交名、下行帳等を記載す。翌天明八年十月、押小路大外記、壬生官務、出納左近衞將監の進達にて注進したるものなり。

だいじやうゑをみのせう

大嘗會小忌抄　（寫本）一卷

大嘗會に用ふる小忌の裝束の事を記したるもの。寸法その他等を假名書す。『續群書類從』卷三百十四、裝束部第四にあり。

だいじやうゑのき

大嘗會記　（寫本）一卷　大江　匡房

天仁元年戊子〔一七六八〕十一月の大嘗會記事なり

◉大江匡房の傳は『江家次第』の下にあり。

だいじやうゑのき

大嘗會記　（寫本）一卷

櫻町天皇の元文三年戊午〔二三九八〕の大嘗會記なり。記者の奧書に、「依僧宗祇所望馳筆了」と記せり。數枚の小册子なり。

だいじやうゑぎしきぐしやく

大嘗會儀式具釋　（寫本）九卷　荷田　在滿

櫻町天皇の元文三年戊午〔二三九八〕十一月に行はれたる大嘗會の儀式を記し、其の事物名義等を精細に註釋したるものなり。

◉荷田在滿の傳は『羽倉考』の下にあり。

だいじやうゑげぎやうき

大嘗會下行記　（寫本）一卷

大嘗會の經費錄なり。記載の年月詳ならず。

だいじやうゑしき

大嘗會私記　（寫本）二卷　園　基勝

此の書上卷に靈元天皇の貞享四年丁卯〔二三四七〕八月二十三日より、同九月晦日に至り、また十一月一日より、同六日に至る記事。下卷に同年十一月十六日、十七日の記を揭げたり。著者園基勝は左中將權大納言たり。

だいじやうゑしんせんてうどのづ

大嘗會神饌調度之圖　紀　宗直　（寫本）一卷

大嘗會に用ふる調度器具の圖を彩寫し、併せて略說を加へたるもの。其列擧するところは、葉椀、葉盤、土瓶、土高杯、陶器、御箕器、土器、本柏韮柏、蘘穗、黑葛筥、竹御箸、竹御箸黑葛筥、神食薦、御食薦、神饌案、白黑御酒案、箕案、蒲盛筥、土爪爐、土釜、土鍋、巾取案、かるこ、水桶、辛櫃等なり此他の幾種は普通の具なりとてこれを圖せずといふ元文四年己未〔二三九九〕五月書記す。帝國圖書館に貴重品として所藏せり。

◉紀宗直の傳は「三節會御膳圖」の下にあり。

だいじやうゑたうた

大嘗會田歌　（寫本）一卷

大嘗會田歌種々のものを編輯す。中には八言、九言等の句多し。

だいじやうゑづしき

大嘗會圖式　（寫本）一卷

大嘗會の儀式。八月二十五日の國郡卜定、九月二十八日荒見川祓、十月二十九日御禊、十一月朔日忌日御飯、十一月二日由奉幣、十一月八日大嘗會、同九日辰日節會、同十日巳日節會、清暑堂御神樂、同十一日豐明節會等の次第を部類圖式したるものなり。自序によるに明和元年甲申〔二四二四〕の作なることを知らる。

だいじやうゑぶるゐき

大嘗會部類記　（寫本）二卷

長和元年壬子〔一六七二〕より、應永二十年癸巳〔二〇七三〕に至る大嘗會の記錄を集めたるものなり。

だいじやうゑべんもう

大嘗會便蒙　（寫本）二卷　荷田　在滿

田安黃門の命を受けて、元文三年戊午〔二三九八〕京都の大禮を拜して記したるもの。其の沿革を記して、日本紀神代卷に天照太神新嘗と見え、又天稚彥新嘗とあれど、皆聞召計にて祭にあらず、仁德天皇の四十年始めて此の禮始り、後花園院まで行はれしが、其の後は世の亂により、或は中絕などして、今年戊午また再興せらるゝ由を云へり。翌四年

己未の自序を附して出版す。但し本書は禁忌を顧ずして出版したりとて、著者は禁錮せられ、書は絶版を命ぜられたりといふ。

◉荷田在滿の傳は「羽倉考」の下にあり。

だいじやうゑみそぎにちれい

大嘗會御禊日例　一卷

大同二年丁亥〔一四六七〕十月より、長和五年丙辰〔一六七六〕十月に至る、御禊式の年月日及び場所を列記せり。「群書類從」卷九十三、公事部第十五に收む。

だいじやうゑみそぎのこと

大嘗會御禊事　一卷

大同二年丁亥〔一四六七〕十月より、延慶二年己酉〔一九六九〕十月に至る、御禊式の年月日、諸役司の人名を列記したるもの。「群書類從」卷九十三、公事部第十五に收めらる。

だいじやうさいづ

大嘗祭圖　（寫本）一折

大嘗祭宮殿式場の略圖なり。說明もなく、記者も年代も記さず。

たいしやうさんぱふ

殆將算法　（寫本）一卷　和田寧

圓理學に入る所の初門なり。圓及び他形を截斷す。其の截數多極にして、終に物形の圭角盡き、或は算の無窮小なるものは、終に空と爲る等の理を、圓球等にて圖示し、而る後圓理の眞理に進むべき順序を示したる書なり。寔に斯道に於ける要用の書とす。年月記載無きも、文化文政の間に成りたるものなり。

◉和田寧の傳は「圓理算經」の下にあり。

だいしやうじかつせんき

大正寺合戰記　（寫本）一卷

秀吉歿後石田三成の亂に、前田利長は加賀金澤城に據りて家康に與し、同國小松城に丹羽長重、大正寺城に山口玄蕃等ありて三成に黨せしが、本書は大正寺城が利長のために攻め滅されし顚末を詳記したるもの。蓋し、金澤藩士の手に成りしものなるべしと云ふ。

たいしやうしだい

大將次第　（寫本）六冊　飯田忠彥

古來の左近衞大將右近衞大將の交名略歷なり。

◉飯田忠彥の傳記は「國史姓名譜」の下にあり。

だいしやうてかゞみ

大匠手鑑　四卷　鈴木重春

建築匠工の事に就き、間尺の事、釿初其の他の雜事を記載せり。享保六年辛丑〔二三八一〕刊本とす。

たいじやうねんぶつふくしうけつ

台淨念佛復宗訣　一卷　僧性均

天台宗の癡空、卽心念佛談義本を著して、他力念佛の事を論じたるを評駁したるもの。享保十五年庚戌〔二三九〇〕四月の著なり。

◉性均の傳は「新選發心傳」の下に出でたり。

たいしやうのよそほひ

大將粧　（寫本）一卷

大將甲冑弓馬等軍仕度の要用順序を略記したるものなり。卷末に、「文明十四年〔二一四二〕卯月十六日、前備前守政清判」とあり。

たいしやうひながたたいぜん

大匠雛形大全　五卷　山田泰平

卷一を宮殿の部として、組物口傳、繼目口傳を揭げ、卷二を諸門塀の部として、廣間納戸掛を揭げ、卷三を彫物繪樣之部として、潤飾之口傳を揭げ、卷四を數寄屋之部として、諸勾配口傳を揭げ、卷五に違棚數品及び小道具の部を揭ぐ。本書元來丹陽本免里の人中井猪右衞門正春の父の編なるを、山田泰平校閱訂正して嘉永四年辛亥〔二五一一〕出版したるものなり。

だいしやうみやうわうじふどうりやくえんぎ

大聖明王寺不動略緣起　（寫本）一卷

甲州巨摩郡八日市場村なる同寺は、長光王院と號し、三守皇山と號す。本尊不動は弘法大師の唐土より持來りて嵯峨帝に獻じたるものにて、三たび朝廷の御難を守護したりといふによりて、三守皇と稱したりといふ詳細の緣起事績等を記せり。

だいしやき

大社記　（寫本）一卷

出雲社の大祭禮、年中行事を記し、大社說、素鵝社の事實、造營事實疏狩等を揭げて、各境古歌、杵築景境志とを擧げたり。

たいしやきろく

大赦記錄　（寫本）十二冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、年度未だ詳ならず。

だいじやげだつものがたり

大蛇解脫物語　一卷

本書具には「悟中禪師大蛇解脫物語」といふ。同禪師が蛇の憑據せる女人を解脫せしめたりといふ奇談を書き綴りたるものなり。享保十六年辛亥〔二三九一〕筆記するところなり。

だいしやし

大社志　（寫本）一卷

出雲大社の古事にして、最初素盞嗚尊のことを揭げ、次に同社の造營事實として官符を揭げ、林恕の「出雲國杵築大社再興記」、「永雲夢想記」、「古文書、名勝、「杵築景境志」等を附錄とせり。

たいしやものなまへのしよ

大赦者名前書　（寫本）一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、文化年度より、文久年度のものに至る。

たいしやりつのうつし

大赦律の寫　（寫本）一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる大赦律の寫にして、年度は詳ならず。

だいじゆきけいろく

大樹歸敬錄　（寫本）三卷

德川氏代々の佛法歸依の事を摘記せり。親氏より、家康薨去に至る。蓋し淨土宗僧侶の作なるべし。

だいじゆぎみごさうしき

大樹君御葬式　（寫本）一卷

德川家康が、元和二年丙辰〔二二七六〕正月二十一日、田中に狩して後病狀重り、二月十七日太政大臣に任じ、同二十九日變態の事ありし等より、薨後久能山に葬りたる始末を記せり。

だいじゆぎみごりよかうのき

大樹君御旅行之記　（寫本）一卷

寬永十一年甲戌〔二二九四〕大樹源家光上洛の時の旅行記なり。供奉の次第着京の模樣等を詳記す。

だいじゆけうたあはせ

大樹家歌合　（寫本）一卷

文明十四年壬寅〔二一四二〕六月十日、原上霞、見花忘恥、麓納凉、田早秋、月似鏡、叢間水、不叶心戀、無根戀、山家戶、祈世神祇等の題にて、前二條關白、權大納言義尙、天台座主尊應以下十餘家の詠、飛鳥井榮雅の判にかゝる百番歌合なり。永祿四年辛酉〔二二二一〕の奧書あり。

だいじゆごじふおんがのわか

大樹五十御賀之和歌　（寫本）一卷

文政五年壬午〔二四八二〕正月、五十年賀の時の祝歌を集めたるもの。題は松延齡、松及び竹にして、詠人は當時の大臣公卿等なり。

だいじゆじくわこちやう

大樹寺過去帳　（寫本）一卷

大樹寺及び同末寺塔頭等にあるところの德川氏門葉法號卒年月日並に諸家の法號等を記したるものなり。

だいじゆじくわこちやうぬきがき

大樹寺過去帳拔書　（寫本）一卷

本書は「大樹寺過去帳」より、形原、大給、福釜、櫻井、酒井、岩津等の諸家の大樹寺末寺塔頭中に墳墓あるものゝ法名を抄出したるものなり。

だいじゆじごさうさうりやくき

大樹寺御草創略記　（寫本）一卷　僧玉英

文明七年乙未〔二一三五〕二月德川親忠當時草創及び寺號の由來、第十三世登譽戰功の略記、寺中石塔位牌の事等を記したり。

だいじゆじごゆゐしよりやくき

大樹寺御由緖略記　（寫本）一卷

德川家康岡崎在城の頃正月二日の禮の次第、同親氏より家康までの列名、大樹寺の由緖、遠州光明寺、三州龍海院の由來等を記したるものなり。

だいじゆじのき

大樹寺記　（寫本）一卷

大樹寺に相傳したる古文書數通を集めたるもの。後柏原天皇の永正年間より、正親町天皇の元龜年間に至れるものを收めたり。

たいしゆせいてん

大狩盛典　（寫本）百五十九卷

天正十三年乙酉〔二二四五〕家康が三州田原の狩を始めとして、嘉永年代に至る迄德川家代々所々に、狩したるを、大小疎密、悉く網羅輯錄したるもの。百五十九卷あり、目錄、附錄、附圖等ありて百九十九册に寫傳す。

だいじゆつべんぎ

題術辨疑　（寫本）一册　關　孝和

凡そ算學に於て、病題、邪術、權術等の別あり、本書は是れ等を辨明したるものにして、關流七書の一なり。印可目錄内に置きたる同流の祕書なり。

◉關孝和の傳は「大成算經」の下にあり。

たいしよくかんわ

退食閒話　一卷　會澤　安

水戶藩黌弘道館の意義を、通俗平易に和解敷衍したるものなり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕季冬の自序あり。

◉會澤安の傳は「閑聖漫錄」の下にあり。

たいしよくわんかまたりのでん

大織冠鎌足傳　一卷

藤原鎌足の履歷を、年代の順に記せる、漢文版本なり。何時何人の作なるかを詳にせず。

たいしよくわんごけいびやくもんちゆうかい

大織冠御啓白文註解　一卷　資　春

藤原鎌足の略傳を揭げ、次に大化六年庚戌〔一三一〇〕六月一日中臣朝臣鎌子と奥書ある啓白文の註解なり。本文は「名法要集」下卷より抄出したるものなり。貞享四年丁卯〔二三四七〕に識し、元祿八年乙亥〔二三五五〕に版す。著者資春は禰宜たり。

たいしよくわんものがたり

大織冠物語　（寫本）一卷

大織冠藤原鎌足が功業の一端を書き綴れる物語なり。凡て十五枚はかりの古寫本なり。帝國圖書館に貴重品として所藏す。

だいしよれい

大諸禮　十七册

書札飮食、相伴、武家等の禮法を集記したるもの。諸册の奥に「此一册先年關東在國の砌、老父貞慶相傳之通、以下正本書寫畢」云々と記し、小笠原兵部大夫秀政と署名す。

たいしりうしんぴのまき

太子流神祕卷　（寫本）一卷

軍書なり。慶安四年辛卯〔二三一一〕の奥書に、「右太子流の軍要は明貫といふ人傳へて鬼一に傳ふ、鬼一義經に傳ふ。其の後甲斐の坊正成に傳へたり、傳ふる人は南面、受る人は北面にして聞く昔は此の軍を聞くものは、百日精進してこれを傳ふ。中頃より一子相傳なり、祕して他に傳ふる事有るべからず、これ皆口上極意を書き留むるものなり。一子たりといふとも、軍成就の後にあらずば、此書を見することなかれ、必々祕しても祕すべきなり。望月新兵衛尉於會陽城下寫之」とあり。卷首には二相大悟、四武の圖、一切劍、成就劍の圖を揭げたり。

たいしろく

退私錄　（寫本）六卷　新井　君美

史談世話等の出據意義を考說し、或は古文書を抄錄したる假名文の隨筆。凡て百餘箇條あり。「白石叢書」第十六より二十一に至る六册にも收む。

◉新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

だいしわせう

代始和抄　一卷　一條　兼良

御讓位、御卽位、御禊行幸及び大嘗會の儀式典例を記したるもの。卷末に此一册識者第一祕中之祕也云々。寬正第二〔二一二一〕正月吉辰、大外記判」とあり。文明十年戊戌〔二一三八〕二月、更に宗祇の望によりて追加したるよしをも記す。「群書類從」卷四百六十六、雜部第二十一に收めたり。

◉一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

だいじんえい

大臣影　（寫本）二卷　僧　豪信

古來諸大臣の畫像にて、著者の眞筆なり。卷の上に花山院左大臣家忠公、花園左大臣有仁公、中御門右大臣宗忠公、宇治左大臣賴長公、八條太政大臣實行公、中院右大臣雅定公、德大寺左大臣實能公、京極太政大臣宗輔公、九條太政大臣伊通公、三條内大臣公敎公、大炊御門右大臣公能公、中御門内大臣宗能公中御門左大臣經宗公、福原太政大臣淸盛、花山院太政大臣忠雅公、土御門内大臣雅通、妙音院太政大臣師長、小松内大臣重盛、八島内大臣宗盛、後德大寺左大臣實定、冷泉内大臣良通、三條左大臣實房、後花山院左大臣兼雅、禪林寺太政大臣兼房、中山内大臣忠親、六條太政大臣賴實、土御門内大臣通親、大覺寺左大臣隆忠、坊城内大臣實宗、花山院右大臣忠經、近衞右大臣道隆、八條左大臣良輔、野々宮左大臣公繼、坊門内大臣信親、淨土寺太政大臣公房、鎌倉右大臣實朝、近衞左大臣家道、後久我太政大臣通光、西園寺太政大臣公經、大炊御門右大臣師經。下卷は醍醐太政大臣良平、常盤井太政大臣實氏、後土御門内大臣定通、月輪内大臣基家、淨土寺右大臣實親、嵯峨内大臣家嗣、衣笠内大臣家良、德大寺太政大臣實基、九條左大臣道良、堀川内大臣具實、後花山院太政大臣定雅、冷泉太政大臣公相、京極右大臣公基、山階左大臣實雄、後三條内大臣公親、香隆寺内大臣冬忠、後花山院太政大臣通雅、三條坊門内大臣通成、花山院内大臣師繼、後久我内大臣通基、堀川太政大臣基具、西園寺太政大臣實兼、嵯峨太政大臣信繼、山本太政大臣公守、土御門太政大臣定實、後德大寺太政大臣公孝、二條太政大臣實重、竹林院左大臣公衡、柳心院内大臣内實、後淨妙寺太政大臣經平、後岩倉内大臣昌守、後山本左大臣實泰、今出川右大臣公顯、押小路内大臣公茂、花山右大臣家定、六條内大臣有房、後一條坊門内大臣通重、後花園院内大臣師光、光福寺内大臣冬氏、今出川右大臣兼季等の畫像にして各々位冠束帶なり。著者豪信は法印たり。

だいじんぐうぎしきかい

太神宮儀式解　（寫本）三十卷　荒木田經雅（ツネタダ）

桓武天皇の延暦二十三年甲申〔一四六四〕に、當時の太神宮司大中臣朝臣眞繼、太神宮禰宜神主公成等が、伊勢太神宮の儀式及び年中祭行事を制定上奏したる「太神宮儀式」をば、博く古書を涉獵考證して、詳細叮嚀に註釋和解したるもの。安永四年乙未〔二四三五〕の十二月に著され、本居宣長の序、荒木田守緒の跋を載せたり。

◉荒木田經雅は伊勢太神宮の神主にして、從四位上に敍せらる。强記博識にして、最も和學に精し、文化二年乙丑〔二四六五〕六十三歲にて歿せり。

だいじんぐうぎしきかいてきえう

太神宮儀式解摘要　（寫本）三十卷　荒木田末壽（スエホギ）

荒木田經雅の著「太神宮儀式解」の要點を摘錄したるもの。本書編成の後、故ありて散佚したる箇處多かりしを、弘化四年丁未〔二五〇七〕四月、蘭笈園御薗が拾輯補綴せしよし、其の序文に見えたり。

◉荒木田末壽の傳記は「伊勢參宮割竹三四辨」の下にあり。

だいじんぐうぎしきちやう

太神宮儀式帳　（寫本）二卷　大中臣眞繼

伊勢内外兩宮より朝廷へ奉りたる注進書なり。外宮儀式帳は延暦二十三年甲申〔一四六四〕三月二十四日、禰宜正六位上神主五月麿、太神宮司正八位下大中臣眞繼等以下連署して神祇官へ上るところ、内宮儀式帳は延暦二十三年八月二十八日、禰宜荒木田神主公成、太神宮司大中臣眞繼等の連署するところなり。

だいじんぐうぎしきちやうかい

太神宮儀式帳解　（寫本）一卷

太神宮儀式帳を詳註す。本居宣長の序あり。

だいじんぐうごはふらく

太神宮御法樂　（寫本）一卷

元祿十四年辛巳〔二三六一〕九月二十四日奉行せる法樂千首和歌なり。末に各詠者の姓名和歌數を記せり。

だいじんぐうごりしやうき

太神宮御利生記　一卷

内題には「伊勢太神宮利生記」とあり、一向宗の小僧利生の事伏見御祓御利生の事、西陣二ッ子に乳を飮する利生の事、池田村いさり利生の事、上宮川町小野郞利生の事、雨衣屋の小者利生の事、江戶芝惡心懲しめの利生の事、早川村に御祓身替利生の事、閑部の若黨命助り利生の事、伊賀越山中利生の事、武藏の女角を折利生の事、桑名の舟逝難風利生の事、京宮川町御祓踊り利生の事、以上十三項を假名書にす。寶永二年乙酉〔二三六五〕閏四月の自序あれど姓名を記さず。

だいじんぐうざうせいわくもん

太神宮造制或問　（寫本）一卷

伊勢兩宮の神殿瑞垣等の建築制度の事を問答體に記したるもの。寛文七年(二三二七)の奥書あり。

だいじんぐうさんけいき

太神宮參詣記　（写本）二卷

弘安元年戊寅(一九三八)八月十四日豐受太神宮遷宮の上棟式に參りて記したるものなり。よく同社の事實を詳にす。

だいじんぐうさんけいき

太神宮參詣記　一卷　坂　士佛

康永元年壬午(二〇〇二)十月十日、著者が、伊勢參宮の日記にして和歌を讀み入れたり。伊勢兩宮に關する事實を詳にせり。「群書類從」卷二十七、神祇部第二十七にあり。

◉坂士佛は名を慈勇といひ、健叟と號す。博學多聞にして醫術に達し、後光嚴、後圓融、後小松の三朝に歷仕し、また足利義詮、同義滿、同義持に近侍せり。士佛は義滿の命じたる名なりといふ。後民部卿に任じ、法印に敍せらる。

だいじんぐうじじんじぐぶのき

太神宮司神事供奉記　三卷　大中臣長則

本書は著者太神宮司の神事供奉の日記なり。卷一は延應二年庚子(一九〇〇)正月元日より、同十二月三十日に至り、卷二は仁治四年癸卯(一九〇三)正月元日より、同十二月三十日に至り、卷三は寛元四年丙午(一九〇六)中の事を記せり。度會延佳の發行するところなり。

◉大中臣長則は伊勢太神宮の大司たり。

だいじんぐうしよざふじき

太神宮諸雜事記　二卷

垂仁天皇の即位二十五年丙辰(六五六)より、延久元年己酉(一七二九)に至る伊勢太神宮に關する雜件を輯錄したるもの。奥書に「此記文寛治七年(一七五三)官沙汰被召上之後、同八年所ㇾ被㆓返下㆒也」と記せり。「群書類從」卷三、神祇部第三に收めらる。「太神宮諸事雜記」として寫傳せるものあり。

だいじんぐうしんのみはしらのき

太神宮心御柱記　（写本）一卷

同御柱奉仕の次第を記したるもの。最初に「夫大宮柱者則太田命始奉仕、下津磐根之命磐以降、相繼而無忘、寔是一氣顯現之記、萬品總持之源也」云々とあり。末に御柱の品をも掲げたり。

だいじんぐうしんぽうからくらこまかたのづ

太神宮神寶唐鞍駒形圖　（写本）一卷

太神宮の神寶なる唐鞍、鞍褥、御鞍、連着鞦、村濃差繩、金鈴鏡、服帶、手綱、鞭、鐙、白馬形等を圖說せり。安永八年己亥(二四三九)模寫の奥書あり。

だいじんぐうじんぽうづ

太神宮寶神圖　（写本）一卷

伊勢外宮內宮の神寶、弓、箭、桁、鉾、劍以下數十箇を列擧して、悉く其の圖を掲示す。天明三年癸卯(二四四三)五月十一日、伊勢貞丈の奥書あり、「右神寶圖、得村井敬義之藏本寫之。宜參校延喜太神宮式、其制違有古今少異者乎。原本圖並略、有不鮮明者、他日得善本則正之耳」といふ。

だいじんぐうはふらくじつくりやうぎん

太神宮法樂十句兩吟　（写本）一卷　高國朝臣

大永二年壬午(二一八二)八月四日の、俳諧を集めたるもの。宗長五十首宗碩四十九首をつくれり。

だいじんぐうほんぎ

太神宮本紀　（写本）一卷

伊勢太神宮の緣起にして、一名を「倭姬世記」といへり。大治四年己酉(一七八九)應永二十五年戊戌(二〇七八)寛文十年(二三三〇)等寫本の奥書あり

だいじんぐうほんぎきせいせう

太神宮本紀歸正鈔　（写本）七卷　御巫　淸直

「太神宮本紀」は「倭姬命世紀」の總名なり。本書はそを註釋したるもの。廣く諸家の註說を取捨せり。

◉御巫淸直の傳記は「齋宮祭考證」の下にあり。

だいしんくわうよづ

大淸廣輿圖　一舖　長久保玄珠

淸國全州の地圖にて、京師、省城、府城、州城、縣治州府、邊鎭、衞城、守國、古蹟、事實、驛路、夷狄、春秋、侯國、戰國七雄等を標示す。天明五年乙巳(二四四五)久保亨の序、乾隆五十年〔我が天明五年〕吳超稆赤城の序等あり。

◉長久保玄珠の傳記は「長崎紀行」の下にあり。

だいしんさんてうじりやく

大淸三朝事略　二卷　村山　緯

淸朝太祖太宗世祖三世の大事を略敍したるもの。詳に漢文の細註を加ふ。北條仲鼎と共に略次するところにして、自序及び村山溪が寛政十一年己未(二四五九)の跋文を載す。

◉村山緯の傳は「淸鑑易知錄」の下にあり。

だいじんしだい

大臣次第　（写本）十二冊　飯田　忠彥

古來の太政大臣、內大臣左大臣、右大臣准大臣等を交名して略歷を記述したるものなり。

◉飯田忠彥の傳は「國史姓名譜」の下にあり。

だいじんしよさつ

大臣書札　（写本）一卷　藤原　晴季

大臣書札の式法を記したるもの。慶長五年庚子(二二六〇)の奥書あり。

◉藤原晴季は左大臣公彥の子にして、本名を實維といふ。天文九年從五位下に敍せられ、權中納言に累遷し、右近衞大將、權大納言を經て左近衞大將に至り、內教坊別當を兼れ、內大臣となり、晩年從一位右大臣に至る。慶長元年女婿關白秀次の事に座して流謫せられたるも、後赦に遇ひて復任し、元和三年丁巳(二二七七)薨す景光院と法諡す。

だいしんしりやく

大淸志略　（写本）一卷

淸國の南北兩京十四省を記して、名省の位置、古蹟人、物、産物、里程等を記したるものなり。

だいしんてうやもんだふ

大淸朝野問答　（写本）二卷

淸國當時の皇帝の事より、事實行蹟、政務官祿、地理等其の朝廷に於ける事と、民間風俗の事等を、問答に擬ひ、彼の時文を以て雜錄したるものなり。

だいしんふうぞく

大淸風俗　（写本）一卷

本書は享保四年己亥(二三七九)三月の記にて、卷末に「大淸當時の仕置其の外段々の儀琉球人へ相尋可申上旨被仰付候に付、承屆候趣、左之通御座候」とあり。

だいじんぶにん

大臣補任　（写本）一卷

大化元年乙巳(一三〇五)より、仁孝天皇の文政五年壬午(二四八二)に至る大臣補任の年月日を記したるものなり。

だいじんまひかうしよう

大盡舞考證　一卷　山東　京傳

むかし吉原などにて盛んに行はれたる、小歌「大盡舞」の文句の出據意義等を考證註釋したるもの。卷首に凡例五則及び引用書目三十一部を擧げたり。博搜の功稱すべきなり。享和四年甲子(二四六四)の作。溪舍和山人の「大盡舞考餘」と併せて、「溫知叢書」第十二編に收めらる。

◉山東京傳の傳は「小說浮牡丹」の下にあり。

だいしんれきだいじんぶつきやうちぜんづ

大淸歷代人物疆地全圖　一折　鈴木　本榮

淸國歷代の人物を主として寫し出せる地圖なり。代々の英將雄士の出所、戰地、城居等の位置を示せり。野州高根澤宇津三省の校正するところなり。著者鈴木本榮は常陸國宍戸の人なり。

たいすうへう

對數表　一卷　小出　修喜

一より一萬に至る普通對數を記したる八位表なり。其の首に加減、乘除、開方、比例等の算法を例示したり。表中は只眞數と對數との對記に過ぎずして、差數だも記さゞりき。然れども當時對數表の版本なき故に最も人の奇珍とする所と爲りぬ。文政九年丙戌(二四八六)出版せらる。

◉小出修喜は長十郎と稱す。初の名は政乘、後ち宮城大學と稱し、再び舊姓に復す。阿州の藩士なり。少うして數學を好み、後ち宮城流恒川德行に從て學び、同氏の奥を窮して、更に關流日下誠の門に入り、大に數理に通す。傍ら安部晴親に從て曆算を受け、終に同家の教授と爲る。後又和田寧の門弟と爲り、更に圓理の眞理を受く、是より學術一版の進歩を見る。慶應元年乙丑(二五二五)八月、年六十七にて歿す。諡して修善院自遂居士と曰ふ。

たいすうへうせいかい

對數表精解　（写本）一卷　內田　五觀

普通の根元を解きたるもの。此の解法は安島直圓

氏の創發なり。其の法每位數を得ることに、九乘方根を要す。故に多位を求むるに當りては、乘方根の大なること驚くべし。直圓氏の遺稿は「不朽算法」下卷に出たり。今五觀氏直に之れを記したるものなり。安島氏の功大なりと謂ふべし。本書は安政元年甲寅〔二五一四〕に成り、門人竹村好博の編と記せり。

◉內田五觀は彌太郎と稱し觀齋と號す。日下誠の門に入り、大に數理に通ず。弱冠にして同門中第一と稱す。乃ち師の後を繼ぐ。誠が門人多く五觀に從ふ。是れを以て其の名益々高し。後また和田寧の門に入り、竊に圓理の新法を受く是れより學術益々高し、著書亦少からざれど大抵草稿に屬す。本書の如きは全く安島先師の功なり。然るを之れを言はざりしは、甚だ氏の爲に惜むべき所なり。

だいせいをしやうりれきりやくき

大清和尚履歷略記　寫本　一卷

明德二年辛未〔二〇五一〕七十一歲にて入寂せる宗滑大清和尚の略傳なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百三十八、傳部第四十九に入る。

たいせいきぎもん

大成記疑問　寫本　二卷

大成記の中に記されたる事實の疑はしきを訂正したるものなり。著者年代共に詳ならず。

たいせいきやうなんもん

大成經難文　寫本　一卷

舊事本紀大成經を非難したるもの。巨細に本文の要を擧げて攻擊せり。

たいせいきやうはもん

大成經破文　二卷

舊事本紀大成經を辯駁したるものなり。一々本文の非點を擧げて明確に論難せり。

たいせいきやうはもんたふしやくへん

大成經破文答釋編　寫本　一卷　僧　道海

舊事本紀大成經の非を鳴らして辯じたる「大成經破文」を更に辯駁したるもの。末に「天和第二壬戌年〔二三四二〕菊月念五日、余羅橫難、於一七日正受神助、述作之、後學緇素、雖一文一字、不可改造之者也」とあり。

◉道海の傳記は「指月堂夜話」の下にあり。

たいせいきやうらいゆせう

大成經來由抄　寫本　一卷

大成經の神代本紀、先天本紀、等二十八紀の各來歷を略說したるものなり。

たいせいぐんろく

大成郡錄　寫本　十一册

宇和島領、御庄、津島、城下、川原淵、山奥、野村、山田、多田、矢野、保內、諸組の石高等の統計錄なり。

たいせいさんけい

大成算經　二十卷　關　孝和

古傳の法則に基きて諸術を記述し、而後更に自ら發明したる諸術を記載したるもの。先づ首卷を書きて之れに總括を記す。卽ち算數論、基數、大數、小數、異名、度數等凡て十三條と爲す。本編第一卷は五技卽加減因乘歸除定位商除開方等とし、第二卷より第二十卷に至りては雜技、變技、三要、象法、日用術、形法、形率、求積、形巧、兩儀、同題解、病題議、演段、例等是なり。而して每項を數條に別てり。蓋し關氏の祕傳大概此の中に備りぬ。其術類固り關氏の傳法にして、門人建部賢弘が筆したるものなりと傳ふ。是の故に起稿多年に涉りて其成りたる年月未だ詳ならざれども、大率寶永前後に在りたるもの丶如し。因にいふ本書を以て建部賢弘が傳書としたるものあり。

◉關孝和は新助と稱し、自由亭と號す。上毛藤岡の人にして、本性は內山氏、關五郎左衞門の養ふ所と爲りて關家を襲り。德川幕府に仕ふ。初め櫻田殿に屬し、勘定奉行と爲る、後ち本丸納戶組頭に進む。天性數理に奇才あり、年甫て六歲、老成相集りて算を布くを見て曰く、某は何を失し某は何を失すと、一々其の失算を指す。衆驚て神童と言ふ。高原吉種に從て算術を學ぶ、天然の傑才を以て大に斯道の奧を究め、遂に前代未發の數理卽點竄及び以上の諸術を發明したり。卽ち門を別ち、類を聚めて、凡そ數百卷に及ぶ。實に是れ純然たる日本數學の大機軸を開きたる者にして、從來師としたりし支那數學に勝れること甚だ遠し。人呼で算聖と曰ふ。寶永五年戊子〔二三六八〕十月歿す、行年六十七。諡して法行院殿宗達日心大居士と曰ふ。江戶牛込淨輪寺に葬る。關氏の門人數百人、其の室に入る者數人師弟相傳へて世々盛んなり。人之を關流と訓ふ。後世門流漸く多きも、皆竊に關氏を祖とせざるはなし。後ち寬政六年に至りて四傳の門人本田利明等更に碑を建つ。

たいせいさんけいぞくろく

大成算經續錄　寫本　一卷　山路　主住

算法勿憚改一百問の答術を詳記したる書なり。解法盡く天元術に依りたり。故に續錄たりと雖も「大成算經」とは其の趣向大に異り、年代記載なきも、元文寬保の間に成りたるものの如し。

◉山路主住は彌左衞門と稱し、君樹また貝蓮軒と號す。初め久留島義太に從て數學を學び、又中根元圭に受け、後ち松永良弼の門に入り、終に大に斯道の奧を究む。もと德川幕府の小臣にして松前主馬の組徒士なりしが、後瀧川播磨守組小普請に入り、又青山備後守組に轉す。寬延元年日官澁川六藏、西川正休等が助手と爲り、大に補曆製作の事に與れり。是れより數回昇進して、遂に日官と爲る。作曆の實權、凡て氏に歸したり。諸侯其の名を聞き、藩士をして其の門に遊學せしむるもの頗る多し。安永元年十二月卒す。諡して聰信院知達義觀居士と曰ふ。

たいせいさんけいぞくろくげんかい

大成算經續錄諺解　寫本　二卷　翠　臨　軒

向に山路主住の著したる「大成算經續錄」あり。其の解法、只天元術によりて答術を解きたるものなれば、其の方法に至りては、初學者通じ易からず。著者之れを憾とす。乃ち本書は大に本術の出る所を詳に說明したるものなり。延享四年丁卯〔二四〇七〕に成りぬ。

たいせいさんてんかう

大勢三轉考　三卷　伊達　千廣

骨の代、職の代、名の代と分ちて、國勢三變轉の事實を論述したるものなり。孝明天皇の嘉永元年戊申〔二五〇八〕六月、自らの末記に、職務の暇夜々燈下に記せる由を記せり。著者伊達千廣は紀伊の人なり。今その詳傳を得ず。

たいせいししふ

退省詩集　寫本　十四卷

著者數百首の詩集なり。文政八年乙酉〔二四八五〕友野瑍校正の朱書あり。十四卷五册に寫傳す。

たいせいししよじびき

大成四書字引　一卷

四書の古註新註共に穿索して大成せる字書なり。袖珍本に作れり。著者編年等詳ならず。

たいせいでんじやうりやうのしき

大成殿上梁の私記　寫本　一卷

寬政年中昌平坂の大成殿重修落成の事を記したるものなり。「史料叢書」の中に收めらる。

たいせいねつびやうろん

泰西熱病論　七卷　吉田　成德

泰西の醫書を譯したるものにて、卷一に單熱、複熱、焮衝熱、間歇熱。卷二に固形質、流動質、血液焮崩。卷三に神經熱腐敗熱區別、遲延神經熱。卷四に惡性腐敗熱、附り腸胃熱。卷五痘瘡。卷六海上保護。卷七附錄。以上十編と一附錄より成る。文化十一年甲戌〔二四七四〕の自序あり。同年刻成す。門人等の同校するところなり。後編五卷あり、共に大に行れたりといふ。

◉吉田成德は直心と字し、長叔と稱し、駒谷また蘭馨と號す。夙に學を好み、幕府の醫官土岐長元の門に入りて漢方を學び、桂川甫周に就て蘭學を受け、斯學の研究に熱心せり。業成りて、和蘭內科を開業し、是より名聲漸く著る。文化七年適々金澤侯病あり、衆醫の治し得ざるに方りて、これを聘し、俸二十口を賜り、明年よりまた年に二十兩づつを與へて翻譯の資に充てしむ。是より意を著譯に專にすることを得たり。卽ち、內科解環十五卷、蘭藥鏡原五十卷等あり。門人には、定立長衙、高野長英、小關三英、湊長安、松岡道園、程田玄悅等の名家あり。文政七年甲申〔二四八四〕八月十日、金澤に病歿す、年四十六。

たいせいぶかん

大成武鑑　五卷

德川時代の諸大名並に幕府の大老、老中、御用人を始じめ、諸奉行諸役人の世系、知領高、家紋、獻上物、其の他の諸件を圖記したるものなり。文久二年壬戌〔二五二二〕に成る。

たいせいよちづせつ

泰西輿地圖說　十七卷　朽木　龍橋

歐羅巴洲の圖說にて開卷に計度、譯名、總目、地球、

夜國、湖海等を擧げ、歐羅巴總論には隣界、幅員、風土、爵名、人數、言語、分州等を記し、以下歐洲各國の事實を記載す。天明九年己酉〔二四四九〕鳩谷孔平信敏が序あり。十七卷六册に版行せり。◉朽木龍橋の傳記は「新撰泉譜」の下にあり。

たいせいれい

大成令　（寫本）七十六卷

寬永の頃より寬保の始めに至る、德川幕府の布達書付等を分類編纂したるもの。其の目錄枚擧するに遑あらず。然れども之れを前に揭出したる「憲敎類典」に比較するに間々脫漏したる所あり。

たいせいろく

泰政錄　（寫本）三十卷

德川氏時代の事績を漢文にて記したるもの。天文十一年壬寅〔二二〇二〕より、元和元年乙卯〔二二七五〕に至る三十卷八册に寫傳す。

たいせいろくわ

泰西錄話　（寫本）一卷　古賀　煜

西洋諸國の政略を記し、著者の評說を附したるもの。僅に數紙より成れり「崎函一掃」中に收めらる。◉古賀煜の傳は「建元發編」の下にあり。

たいせいわかんねんだいき

大成和漢年代記　一卷　鶴峯　戊申

欽明天皇五年甲子〔一二〇四〕より。文久三年癸亥〔二五二三〕に至る、和漢の年代記なり。◉鶴峯戊申の傳記は「神階錄」の下にあり。

たいせうき

大笑記　一卷　三浦　爲春

慶長十五年庚戌〔二二七〇〕九月、駿河より肥後熊本に至れる道の記なり。卷末に「旅やつれの姿も思はゆけれど、人目をも忍び、都に入り、洛中洛外の名所舊蹟のありさま、心ことはの及ぶところに非ざれば、空しく筆をすて畢、後見む人の笑ひの種なれば、名づけて大笑記とやせむ。されども道すがら人々の語しことを、其まゝしるせば、筆語のあやまりをばゆるさるべくやあらむ。于時慶長庚戌小春下澣記レ之。三浦長門守爲春」と記せり。◉三浦爲春は、當時長門守たり。德川家康より紀州家に附せられたる長門守時春の父なり。

たいせうこうりやくふ

大照公略譜　一卷　瀧　長愷

毛利秀就の略傳。大照は秀就の諡なり。寶曆年中毛利重就が、儒臣瀧鶴臺に命じて纂輯せしめたるものなりと云ふ。「長周叢書」の中に收めらる。◉瀧長愷の傳記は「三之逕」の下にあり。

だいせうみやうかうたい

大小名交代　（寫本）二卷

延寶元年癸丑〔二三三三〕同二年中、大小名參覲御暇の時賜物、及び獻上物の目錄を揭ぐまた琉球、阿蘭等よりの獻上物をも記したり。

だいせつようしふはうじゆたいせい

大節用集寶珠大成　一卷

本邦のあらゆる熟字、熟語、俗字、俗語等を假名順に列擧して、一々振假名、註解等を施したるもの。頭書には諸國神名字盡、佛の名盡、古人名盡等を假名順にあげ、次に全國の諸名所を國順に、又、山、川、浦、里津港等を網羅せり。元文元年丙辰〔二三九六〕十一月、京都にて出版す。

たいぜんかんごべんらん

大全漢語便覽　一卷　松浦　八平

漢熟語をいろは順に編輯して、各片假名にて譯義を附したるものなり。卷端に畫引索引を附す。著者松浦八平は梅岳山人と號す。

たいぜんき

大禪記　（寫本）一卷　藤原　惟方

久安五年己巳〔一八〇九〕の七月より、十月に至る日記。多くは廷中に關する記事なり。又は「參議惟方卿記」とも云へり。◉藤原惟方は權中納言顯賴の子なり。永治平治の間累官して撿非違使別當となる。甥信賴の逆謀に與みしたるも、兄光賴の戒むるところとなり、大に悔悟して直に順に歸す。後經宗と共に朝權を弄し後白河上皇に罪を得て長門に流され、薙髮して寂信と改む後仁安元年丙戌〔一八二六〕召還せらる。世に粟田別當と稱す。

だいぜんしよくくらりやうごぐうのづ

大膳職內藏寮御供之圖　（寫本）一卷

御飯四種物、御汁、生物、干物、菓子等の盛方、及び諸器具等を圖示したるものなり。

だいぜんぢんこふき

大全塵劫記　一卷　山本　賀前

數目八算見一より、次序を逐て開立に至り、而して後、天元術、點竄術を記載したる獨學算書なり。天保三年壬辰〔二四九二〕出版。厥の後安政元年丁巳〔二五一七〕に至りて、小野廣胖之れが附錄を發刊せり。本書は山本賀前の編述と記入せるも、實は長谷川寬の編成に係りたるものなり。本書一出以來寬の名、大に人の知る所と爲り、是れより門人甚だ多かりきと。◉山本賀前の傳は「算法助術」の下にあり。

だいぜんはやびきせつようしふ

大全早引節用集　一卷　山下　重政

當時流行の節用書數多に參し增補訂正して袖珍一册に作りたるものなり。◉山下重政のことは「播磨國大繪圖」の下にあり。

だいぞうほかいさんきかうもくたいせい

大增補改算記綱目大成　一卷

改算記の種類多し。是より先き「增補改算記綱目」の世に行はるゝあり。今之れに大、大成の三字を加へたれども、更に前書と異る所を見ず。想ふに坊間書肆の手に成りたるものならん。寬政四年壬子〔二四五二〕の出版にかゝる。

たいそさうげふし

大祖創業志　（寫本）一卷　津阪　孝綽

德川家康の創業始末を漢文にて詳記したるものなり。「假修叢書」の卷二十一に收めたり。◉津阪孝綽の傳記は「絕句類選評本」の下にあり。

だいだいりおんづ

大內裏御圖　（寫本）一鋪

大內裏總構の圖にて、最も詳密を盡せり。南御門を始め、紫宸殿清涼殿諸衙諸局を連綴し、各司名を記し、桁梁行の間數、褫障子の差をも記し、着色を要するものには着色したり。

だいだいりぎやうじのづ

大內裏行事圖　（寫本）一卷

公事儀式の圖にして、祈年祭の圖より、於二鼓吹司一試レ生等の圖に至る、四十二張をも集む。

だいだいりづ

大內裏圖　（寫本）一鋪

大內裏の樣態を三區に別圖す。第一區は南御門承明門を始め、紫宸殿清涼殿其餘諸座諸官人の結所などを記し、第二區は御座之間常御殿上中下段、南御殿御黑殿・御湯殿を始め、御文庫、御米庫、御舂屋、奧部屋、調味部屋等に至り、第三區は弘御所より、升之間、諸大夫之間、公卿間等より、諸府庫、諸器具部屋等に至る。思ふに第一區は大內正廳の圖にして、第二、第三區は本院と新院か、または仙洞女院の圖なるべきか。當否尙考ふべし。

だいだいりづかうしよう

大內裏圖考證　（寫本）四十八卷　裏松　光世

大內裏圖を考證したるものにて、初に洛中各町の道幅、垣、犬行、溝等を列記し、大內裡の各部に於ては、其の圖を揭げ、諸書を抄出して、其の位置構造沿革制規等を記し、附錄親王公卿の邸宅に及べり。首卷に列れたる引用書は殆ど三百部の多きに達す。博綜の功稱すべきなり。全部四十八卷を、目錄三册本文五十七册、續編八册等に作り更に繪圖八册を添ふ。其の第一は京城。第二は內裡。第三太政官。第四八省院。第五武德殿。第六大學寮。第七豐樂院。第八眞言院等の圖なり。本書の編纂に就ては藤井貞幹も與りて力ありきといふ。◉裏松光世は烏丸光榮の末子にて、裏松益光の養子となり、正五位下左少辨叙任せらる。竹內式部の事に座して落飾蟄居し固禪と號す。月夜尺杖を以て京中を測量し、本書「大內裏圖考證」を編纂せり。天明八年戊申〔二四四八〕參內を許され、造內裏故實の敎問に奉答せり。また「皇居年表續編」五卷をも著したり。

だいだうをしやうぎやうじやう

大道和尙行狀　（寫本）一卷

出雲智㒵庵開山大道和尙の傳記。漢文にて記さる。「續群書類從」卷二百三十四、傳部第四十五にあり。

だいだうくん

大道訓　五卷　關　誠甫

張橫渠の「西銘」を和譯したるもの。能く仁の體用を說き、天地と我と同體の義を示せり。卷三以下は「或問」にして、本義に不審を設けて其の意を敷衍したるものなり。正德三年癸巳〔二三七三〕の自

序及び菜氏の序あり。◉關哉甫は通稱を幸輔といふ。豐後の儒學者にして岡藩に仕ふ。著書は本書の外に、春秋胡氏傳諺解、冥加訓等あり。享保十五年庚戌〔二三九〇〕八十五にて歿す。

だいたうまんぴつ

大嶹漫筆　（寫本）一卷

薩摩大島の產物、食用蘇鐵、甘藷其の他の食品を圖說し、また燒酎製造の事を雜記したり。

だいだうわくもん

大道或問　一卷　平田　篤胤

皇道の要、儒佛の說等を人の問に應じて對へ示したるもの。問題を低書し、答辨を詳細にす。門人碧川好尙が其の師の遺書を編輯したること、安政四年丁巳〔二五一七〕九月の序に見えたり。◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

だいたふぐんき

大塔軍記　（寫本）一卷　僧　堯深

應永七年庚辰〔二〇六〇〕信州更級郡布施鄕に於ける大塔合戰の始末を記す。「續群書類從」卷六百十九、合戰部第四十九に入る。

だいちいつとうき

太治一統記　（寫本）三卷

卷首に源家の盛衰を漢文にて記し、次に德川氏の系圖を揭ぐ。卷一に入りて淸康君御成立事より、東條合戰に至る十四條。卷二に東照宮初陣事より、一向一揆降參事に至る十四。卷三に東照宮岡崎御歸城より、北條家沒落に至る二十七條を記す。寶永五年戊子〔二三六八〕の編輯と見ゆ。

だいちうき

大柱記　（寫本）一卷　竹口　尙重

大柱記は大和國高市郡下平田村にて、明和八年辛卯〔二四三一〕池を穿つ時、廻り十圍尺、長三尺の大柱を掘得て、同郡越村服部某の內に祕藏せるを、寬政七年乙卯〔二四五五〕同家の請によりて記せるところなり。「賜淨康一河島皇子墓記」「五郡社記」と合册せり。◉竹口尙重の傳は「南朝編年紀略」の下にあり。

だいぢかいげんさだめのき

大治改元定記　（寫本）一卷

大治三年戊申〔一七八八〕正月二十三日、改元の定記なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百八十六、公事部第三十九にあり。

だいちよねんき

大治四年記　（寫本）一卷　源　師時

大治四年己酉〔一七八九〕の八月と九月との日記。本書に署名なしと雖、萬治元年戊戌〔二三一八〕林恕〔春齋〕の奥書に、師時の記なることを考說せり。今之れに從ふ。◉源師時の傳は「長秋記」の下にあり。

だいつうぜんじぎやうじつ

大通禪師行實　（寫本）一卷

鎌倉巨福山建長興國禪寺第十代の祖大通禪師の略傳なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百二十八、傳部第三十九に入る。

たいつせんせいいかう

太一先生遺稿　一卷　前田　信成

著者の遺稿。志則三十餘條、學範五條書賦雜文七編あり。文政八年乙酉〔二四八五〕大聖寺侯菅原利之が信成の追遠の爲めに梓行せりといふ。信成の男信片、孫信任の同校するところなり。同文政八年菅原利之の序、唐公愷、太田敦叔の跋あり。◉前田信成は名を恒、字を子有といひ、後利渠と名け信成と改む。夙に學を好み詩文に長ず安永五年丙申〔二四三六〕十月朔日、病を以て歿す年四十三。

だいとうか

大統歌　二卷　鹽谷　世弘

神武天皇以來、後水尾天皇に至る歷代の皇統及び朝廷國家の大事蹟等を順次四字句に歌作して、初學の誦讀に便し、歷史の大綱を敎示したるもの。例せば、天七地五、遡矣鴻荒、維神武帝、起自西疆、戡亂遏劉、驅除虎狼、奠都橿原、鎭茲萬方等、凡て五百二十八句、二千一百十二あり。嘉永四年辛亥〔二五一一〕の自序を附す。◉鹽谷世弘の傳は「阿芙蓉彙聞」の下にあり。

だいとうこきんしせん

大東古今詩雋　七卷　戸崎　允明

本邦古今の傑詩を編輯したるものなり。明和九年壬辰〔二四三二〕の自序あり。

◉戸崎允明の傳は「國號考」の下にあり。

だいとうこくしぎやうじつ

大幢國師行實　（寫本）一卷　僧　如憲

觀應二年辛卯〔二〇一一〕五十九歲にて入寂せる大梅山月林皎禪師の略傳なり。應永十二年丁酉〔二〇六五〕法孫如憲が漢文にて記すところなり。「續群書類從」卷二百三十四、傳部第四十五に入る。

だいとうせいご

大東世語　五卷　服部　元喬

我が邦古來の故事名文言を漢文に譯述したるもの。其の體劉義慶が「世說」に倣擬せるより「大東世語」とは名けたり。卷一に德行、言語、政事。卷二に文學、方正、雅量、識鑒。卷三に賞譽、品藻、規箴、捷悟、夙惠、豪爽、容止。卷四に企羨、傷逝、捿逸、賢媛、術解、巧藝、寵禮、任誕。卷五に簡傲、排調、輕詆、假譎、黜免、忿狷、尤悔、紕漏、仇隙等に類排す。寬永元年戊辰〔二四〇八〕十月、自序及び鵜孟の序あり、同三年三月出版す。◉服部元喬は江戸の鴻儒。子遷と字し、小右衞門と稱し、南郭また芙蕖館と號す。もと平安の人なりしが、夙く江戸に出でて柳澤吉保に仕へ、壯年に及び、物徂徠の門に入學し、日夜精研、遂に物門の巨才と成る。年三十四にして致仕し、專詩古文辭を修め、門を開きて徒を敎ふ。來り學ぶもの頗る多し。晩年肥後侯の爲めに賓師を以て優遇せらる。當時物門の巨豪漸く滅じ、南郭獨り其の名望を荷ふ。著書は本書の外に、南郭文集、燈下書、遺契、文筌小言、儀禮圖抄及び左傳白文、郭註莊子、張注列子、新刻蒙求、十八史略、唐詩品彙七律、同絕句、唐詩選、唐詩字略、明詩選等の校正あり。寶曆九年己卯〔二四一九〕六月二十一日、七十七にて歿す。品川東海寺中少林院に葬れり。

だいどうほんぎいつぶん

大同本紀逸文　二卷　平田　篤胤

此書は平城天皇の大同年中に、伊勢兩宮の宮人に敕ありて、撰び進らしめ給へる、謂はゆる大同本紀の逸文を拾集したるものなり。◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

だいどうるゐじゆはう

大同類聚方　（寫本）五卷　安部　眞直

大同三年、著者出雲廣貞と共に敕を奉じて撰述せるものにて、我が邦醫書の權輿なり。もと百卷なりしが今は散佚して、文治元年乙巳〔一八四五〕十一月、典藥頭丹波賴康の抄錄したる卷一より卷五に至る五卷と、卷三十七以下と殘るのみにて、卷六より卷三十六までは傳はらずといふ。◉安部眞直は儒醫にして、衞門佐、大舍人助、相模介等を歷て、少納言左近衞少將に累遷せり。本書「大同類聚方」一百卷は敕によりて大同三年戊子〔一四六八〕五月、出雲廣貞等と奏進する所也。

だいどうるゐじゆはうやくひんかんめいかう

大同類聚方藥品漢名考　（寫本）一卷　岡田　淳之

本書は大同類聚方に記載せるところの藥品の漢名を考說したるものなり。

だいとくこうふ

台德公譜　（寫本）一卷

本書は德川二代將軍台德院秀忠一生間の年譜なり

だいとくじりやくけいふ

大德寺略系譜　（寫本）一卷

紫野大德寺の開山宗峯より、第四百三十二代笑雲に至るまでの略系譜なり。

だいなごんためかねきやうかしふ

大納言爲兼卿家集　一卷　藤原　爲兼

玉葉和歌集の撰者爲兼の歌集なり。北川眞顏諸書によりて補訂したりといふ。◉藤原爲兼の傳は「玉葉和歌集」の下に出づ。

だいなごんなりみちまりくでんにつき

大納言成通鞠口傳日記　藤原　成通　（寫本）一卷

蹴鞠に關する口傳五十餘箇條を記したるもの。觀應二年辛卯〔二〇一一〕三月、某書寫の奥書あり。◉藤原成通の傳記は「三十箇條式」の下に出たり。

だいなごんはいがぶるゐき

大納言拜賀部類記　（寫本）一卷

定家朝臣記、水左記、中右記、玉海、山槐記、吉記、三長記、自曆記、その他幾多の記錄中より、大納言拜賀の事を部類したるものなり。「續群書類從」卷二百九十八、公事部第五十一に入る。

だいなごんものがたり

大納言物語 （寫本）一卷

大納言某の贈答艶書を書き集め、各端書を加へて一篇の物語やうに作り成したるものなり。

だいにかしふ

大貳家集 （寫本）一卷 藤原賢子

二條太皇太后宮大夫大貳の歌集なり。百數十首あり、此の中撰集に入るもの十九首あり。

◉藤原賢子の傳記は「狹衣」の下にあり。

だいにちきやうぢうしんぽんしよもんだい

大日經住心品疏問題 十卷 （僧快全 僧成雄）

眞言宗に尊崇する「大日經住心品疏」の文意を、問答體に解釋したるもの。原書一本及び二本のは快全の講、一末、二末及び第三のは同門成雄の講にして、明治十九年丙戌（二五四六）活刷に附せり。

◉快全は眞言宗の僧。高野山の名僧宥快法印の弟子にして、應永の頃の人なり。本書の外に「大日經疏鈔」二十卷、「菩提心論問題」二卷等を著せり。

◉成雄は眞言宗高野山の名僧宥快法印（應永二十三年入寂）の弟子なり。快全、宥信、快齋等と共に同學中の尤なるものなりき。

だいにほんえんかいじつそくぜんづ

大日本沿海實測全圖 三十三幅 伊能忠敬

幕府の命によりて大日本の沿海を實測して圖錄したるもの。大中小の三道に分ち、大圖は曲尺三寸六分を以て一里となし、中圖は六分、小圖は三分を以て準率とし、總て三十三幅、沿海の巨細を載せて明細なり。文政四年辛巳（二四八一）の自序あり。

◉伊能忠敬の傳は「大日本沿海實測錄」の下にあり

だいにほんえんかいじつそくろく

大日本沿海實測錄 十三卷 伊能忠敬

寛政十二年庚申（二四六〇）幕命を承けて、全國六十八州及び蝦夷の地を經歷實測して著したるもの。文政四年辛巳（二四八一）の自序あり。本書は十三卷、別に一卷目錄を附して、明治三年庚午（二五三〇）大學南校に於て校讐出版す。

◉伊能忠敬は曆學者なり。勘解由と稱し、子齋東河と號す。中御門天皇の享保十六年辛亥（二三九一）に生る。好で曆數の學を研究し、後、高橋東岡に學び推步測量の精を極む。官命を受けて全國の沿道沿海を測量す。著す所に、地球測遠術問答、紀源法、割圓八線表、國郡晝夜時刻對數表、紀源術並に用法、求割圓八線表等あり。文化四年丁卯（二四六七）四月、七十七歲にして卒せり。

だいにほんこくいちのみやのき

大日本國一宮記 一卷

全國にて一宮と稱する神社の祭神、社號、位置等を略記したるもの。鴨大明神より和多津美社に至る。

だいにほんこくかいびやくほんえんじんぎひぶん

大日本國開闢本緣神祇祕文 （寫本）一卷 僧 空海

著者の首唱にかゝる兩部神道の旨義を記述したるものなり。

◉空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下にあり。

だいにほんこくかいびやくゆらいき

大日本國開闢由來記 六卷 平野重誠

此の書は一名「皇國開闢由來記」の下に解題せり。

だいにほんこくぐんしよくはうきりやく

大日本國郡職方紀略 （寫本）一卷

各國の下に國名を註し、一の宮を記し、郡高、田數、寺社領等を記し、各郡城主の歷代まで記せり、此の書、記載の事實によるに明和以後の作なるべし。

だいにほんこくぐんづ

大日本國郡圖 （寫本）二卷

日本全國地圖にして、天文方位等詳しく辨正す。

だいにほんこくじゆんろめいさいきたいせい

大日本國順路明細記大成 一折

弘化三年丙午（二五〇六）の初版を、山崎久作校正增補して、嘉永三年庚戌（二五一〇）江戸にて出版。

だいにほんこくていわうねんだいき

大日本國帝王年代記 三卷 僧 圓智

神代以來、第百十三代靈元天皇に至る年代記なり。下段には支那の事實を我が年代にあて、彼の年號をも擧げて、順揭せり。寛文九年己酉（二三二九）作るところなり。「倭漢合運指掌圖」と參觀すべし。

◉圓智のことは「倭漢合運指掌圖」の下にあり。

だいにほんごくていわうりやくき

大日本國帝王略記 一卷

神武天皇より第百十六代櫻町天皇までの略記なり。末に「大日本中興武將略記」として、源賴朝以下德川吉宗に至る三十九人を略記す。當時の作なり。卷首に「大日本國帝系略之圖」を揭ぐ。

だいにほんごくほけきやうけんき

大日本國法華經驗記 三卷 僧 鎭源

日本に於ける古來の法華經の靈驗威德に關する所傳、百二十九人の事績を編集したるもの。卽ち上の卷に「傳燈佛法聖德太子」より、「播州平願持經者」に至る四十條。中の卷に「嵯峨定照僧都」より「七卷持經者明蓮法師」に至る四十條。下の卷に「越後國神融法師」より、「紀伊國牟婁郡女」に至る四十九條を收む。全編漢文にて記したり。享保二年丁酉（二三七七）五月、僧光謙の序、同元年多峯遊光院の僧光榮の跋あり。同二年京都にて出版す。

◉鎭源は首楞嚴院の住僧にして、實に長久年中の人。此の書の發行前凡そ六百餘年の人なりといふ。

だいにほんさいけんしししやうぜんづ

大日本細見指掌全圖 一鋪 鳥飼洞齋

日本全地圖なり。著色にて國界を分ち里程方位等を正示せり。

だいにほんし

大日本史 二百四十六卷 德川光圀

神武天皇より、後小松天皇に至る本紀、並に公武諸臣の列傳なり。卷一より卷七十三に至る七十三卷を帝王本紀とし、卷七十四より卷八十五に至る十二卷を后妃列傳とし、卷八十六より卷九十九に至る十四卷を皇子列傳とし、卷百より卷百〇五に至る六卷を皇女列傳とし、卷百〇六より卷百七十八に至る七十三卷を諸臣列傳とし、卷百七十九より卷百八十六に至る八卷を將軍列傳とし、卷百八十七より卷百九十一に至る五卷を將軍家族列傳とし、卷百九十二より卷二百十三に至る二十二卷を將軍家臣列傳とし、卷二百十四より卷二百十八に至る五卷を文學列傳とし、卷二百十九より卷二百二十二に至る四卷を歌人列傳とし、卷二百二十三を孝子列傳、卷二百二十四を義烈列傳、卷二百二十五を烈女列傳、卷二百二十六を隱逸列傳、卷二百二十七を方伎列傳、卷二百二十八より卷二百三十に至る三卷を叛臣列傳とし、卷二百三十一を逆臣列傳、卷二百三十二より卷二百四十三に至る十二卷を外國列傳として、隋、唐、五代央、越、宋、遼、金、蒙古、明、新羅、高勾麗、高麗、百濟、任那、吮羅、渤海、蝦夷、肅愼、吐火羅、舍衛、南天竺、林邑、崑崙等を記せり。凡て本紀七十三卷、列傳一百七十卷、序目錄三卷より成る。本書編纂に引用せるところの書は實に六百七十餘部の多きに及べり。事實詳明、考證精確にして從來無比の良史たり。其の神功皇后を后妃傳に收め、大友皇子を帝紀に列し、南朝を以て正統となすが如きは、義公の英斷なりと稱す、而して本書は寛文十二年壬子（二三三二）より古書を集め、史臣を聘して編輯を創め、元祿十二年己卯（二三五九）までに本紀及び后妃皇子皇女の三傳なり、卿の薨後寶永六年己丑（二三六九）に至りて紀傳全く成り、嘉永年中先づ紀傳を刊行し、合本百冊始めて世に廣く行はれたり。正德五年乙未（二三七五）十一月、權中納言從三位源綱條の序、享保三年戊戌（二三七八）六月、從五位下大學頭藤原信篤の序、享保五年十月從三位左近衛權中將源宗堯の序、黃龍顯寛源侯の後序等あり。次に修史條例六十五條ありて其の始末を明らかにす。其の後、豐田亮、栗田寛等編纂に從事して、「神祇志」二十冊、「職官志」五冊、「氏族志」十二冊、「兵志」三冊、「刑志」二冊、「禮樂志」十冊、「佛事志」六冊、「食貨志」十四冊、「陰陽志」三冊、「國郡志」（未刊）、「公卿表」七冊等の志表續々發行せられたり。

◉德川光圀は水戸の城主なり。賴房の第三子にして家康の孫。寛永五年戊辰（二二八八）六月十日生る。名を德亮といひ、小字を千代松、後子龍また觀之といひ、日新齋、常山人、率然子、梅里等の號あり。幼にして穎異、擧作衆と異る。十三年首服を加へて從五位に敍せられ、寛永十七年從三位に進む。其の政績治功は實に少からず、文教に關する功績の一般を擧ぐれば、「大日本史」を撰して神功皇后の帝紀にありしものを后に列し、大友皇子を天皇と定め、南朝を正統とし、また日本假名文を拾集して「扶桑拾葉集」三十卷を作り、彰考館を作りて和漢の群籍を拾集編輯す「禮儀類典」五百卷を修す。賴房の卒去に際し、臣下に說て殉死を止め領國の淫祠三千八百を毀ち、新地の寺院九百九十七を除

き、殖產牧畜を謀りしこと少からず。單に自著書としては、喪祭儀略、常山文集、六國史校正、釋萬葉集等あり、元祿十三年庚辰〔二三六〇〕十二月六日、七十三にて西山に卒す。謚して義公と稱す。天保三年五月詔して從二位權大納言を贈り、明治二年十二月特に從一位を贈らる。

だいにほんしさんそう

大日本史讚藪 （木版）五卷 安積 覺

大日本史の本紀、列傳等の末に附したる讚辭を抄集したるものなり。

◉安積覺の傳は「湖亭渉筆」の下にあり。

だいにほんしじよ

大日本史序 一卷 賴 惟寛

權中納言源綱條の作れる大日本史序を行書せる習字帖なり。明治十五年出版す。

◉賴惟寛の傳は「藝備孝義傳」の下にあり。

だいにほんしほ

大日本史補 （木版）一卷 久保 季茲

大日本史に神代本紀のなきより「古事記」「日本書紀」其の他の書につきて、私に補作したるものなり。「大日本史」の體に傚ひ記せり。

◉久保季茲の傳は「古道訓蒙頌」の下にあり。

だいにほんしよこくめいぎせうわくもん

大日本諸國名義鈔或問 （木版）一卷 伊藤 弘風

此の書は一名「國名鈔」といふ該題下に解題せり。

だいにほんだうちうかうていさいけんき

大日本道中行程細見 一折 醉 雅子

凡例に「日本の地理丸きを長く書きのぶる故に方角に拘はらず順道をしるす、是に由て全國を其終りに載す」また「西は朝鮮釜山海、對馬、壹岐、五島、平戶、長崎等より、東は奧仙臺、森岡、弘前、津輕、松前、蝦夷のところに至る、其の間往來の馬次、道筋、船着等都て大略を記してもるゝことなきが如し、此によつて目錄をなさず」といへり。著者醉雅子はさきに「本朝行程之書」を著し、大に世に行はれたるより、更に旅行用として本書を作れりと云ふ。

だいにほんていわうれきだい

大日本帝王歷代 一卷

孝德天皇の大化元年乙巳〔一三〇五〕より、嘉永六年癸丑〔二五一三〕に至る、袖珍年代記なり。

だいにほんはやびきさいけんゑづ

大日本早引細見繪圖 一折

天保十三年壬寅〔二五〇二〕の初版を嘉永元年、安政四年、文久四年甲子〔二五二四〕等に改版したる小地圖なり。奈良繪圖屋庄八の發行する所なり。

だいにほんひとりあんない

大日本獨案內 一鋪

日本道中行程記に基きて其の圖を縮寫し、着色して各國形を成せるものなり。寬政十二年庚申〔二四六〇〕浪華に版刻す。

だいにほんふうどしよりふのしふせつ

大日本風土所立之輯說 （木版）一卷

西川忠英の「日本水土考」に基き、尙故老の傳說等を集めて、敷衍したるものなり。

だいにほんふどき

大日本風土記 （木版）三十八册

大日本全國の古地誌なり。著者年代共に詳ならず。

だいにほんめいさんづゑ

大日本名產圖會 五卷 大原 東野

五畿內各國の名產を一册づつに繪作りにしたるもの。各諸家の發句古歌等を擧げたり。文化八年辛未〔二四七一〕の自序及び富小路正三位刑部卿貞直の序あり。

◉大原東野は民聲と稱し、如水亭と號す。浪華の畫工なり。別著に「五畿內產物圖會」五卷あり。

だいにほんやし

大日本野史 二百九十一卷 飯田 忠彥

水戶編纂の「大日本史」に續き、後小松天皇より、仁孝天皇に至る大略二百四十年間の大小事績を。同じく紀傳體に記したる漢文史なり。著者は全く「大日本史」の後編に供へたるより、同史の事を前史と稱せり。後の學者、往々此の書の筆法等を評して、「大日本史」に劣れりとすれど、蓋し同史に續きて、國史家に惠益すること、此の書を措て他に何物かある。殊に一家の經營刻苦に成れるものにして、其の勞は決して共同的事業に比すべくもあらず。嘉永四年辛亥〔二五一一〕の自序あり。翌五年編成の功を竣る。翌六年池內奉時の序あり、本書は近年東京國文社にて、活版に附したるものあり。

◉飯田忠彥の傳は「國史姓名譜」の下にあり。

だいにほんよちぜんづ

（增訂）大日本輿地全圖 一折 逸見豊次郎

日本全國の國名、城下、國界、郡界、道路、神祠、佛寺、港等を符記せる詳圖なり。嘉永二年己酉〔二五〇九〕の再版。元治元年甲子〔二五二四〕鹽谷宕陰世弘の序あり。

だいにほんよちべんらん

大日本輿地便覽 二折 山崎 義故

大日本全國の各國詳細圖なり。天保五年甲午〔二四九四〕の自跋、同年齋藤謙の序あり。

◉山崎義故は津藩の人にして時に年七十九歲なりとあり。

たいにんへん

體認編 （木版）八卷 片山 器

近世諸名家の言行美事を類聚したるもの。天保二年辛卯〔二四九一〕の自序中にも「此の書は十餘年前抄出せし、名公鉅卿の嘉言善行にして、思皇編と題し置しが、猶此の頭緖を削り冗を去り、朱の趙氏が自警編に傚ひて、類を分ち、學問に起り、處事に止り、己を修め人を治るの序をもて、五部三十七類、都て八卷となしぬ。讀書者已に體認せざれば、會得することかたし。それをのみ希ふ所なれば、改めて體認編と號す」云々といふ。其大抵を知るべし。

だいねんをしやうでん

大年和尙傳 （木版）一卷

貞治二年癸卯〔二〇二三〕十月二日、入寂せる肯非山高成禪寺の開山、法延大年和尙の傳記なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百三十五、傳部第四十七にあり。

たいのうかう

袋囊考 （木版）一卷 藤原 憲顯

古今の袋物を網羅して各其の出所形狀主用等を考證す。魚袋、宿物袋、鑰袋、木契袋、驛路袋、飛彈袋、驛傳函選、殿上日給札袋、擬階奏短册袋、五月五日騎者姓名及馬毛札帒、文帒經選、脾袋、算袋、笙袋、笛袋、和琴袋、琵琶袋、鶏尾琴袋、箏袋、笏袋、太刀袋、燧袋、尺袋、笠袋、胡籙袋、香袋、弓帒、柄袋、屠蘇袋、尾袋、弼袋、併衣袋、藥袋、鏑袋、旗袋、弦袋、鞆袋、戴袋、石帶納袋、茱萸袋、餌袋、小帒、屛風袋、鞘袋、頁袋、波利袋、足袋、几帳袋、人袋等を圖說考證し、末に鞭袋、砂金袋、杖袋、かれのむすび袋、獸袋、詩袋、縫袋、細袋、舍利袋しなふくろの名を擧ぐ。

だいばいいつしごろく

大梅一絲語錄 五册 僧 光頓

江州高野永源寺の中興、一絲和尙の詩文語類を集めたるものなり。一絲は名を文守といひ、近代の智識にして詩文に最も長じたり。編者光頓は一絲和尙の徒弟なり。今その詳傳を得ず。

だいばいさんだいだうかぜんじぎやうじやう

大梅山大道可禪師行狀 （木版）一卷 僧 鐵鎧

延寶八年に生れ、寶曆二年四月五日、七十三歲にて示寂せる道可禪師の一生事績なり。寶曆二年壬申〔二四一二〕冬十月、受庇小師鐵鎧の選述するところと記す。末に同人の編たる禪師の偈頌贊を收む。

だいばいさんやわ

大梅山夜話 一卷 僧 文守

一名「一絲和尙夜話」の下に解題せり。蓋し「大梅山」は一絲和尙の住職たりし寺の山號なるべし。

たいはいのこと

體拜事 （木版）一卷

弓馬故實の書にして、體拜の事を記す。卷頭に、「步立の事射禮にありといへども、もれたる事少々書之」と記せり。「弓馬集書」の中にあり。

たいはくをしやうごろく

太白和尙語錄 （木版）一卷 僧 太白

應永十八年辛卯〔二〇七一〕入寺して、東山建仁禪寺の住たりし太白和尙の語錄なり。

だいばつびかう

題跋備考 （木版）二卷 栗原 信充

山城國葛野郡栂尾山高山寺なる明惠上人の遺書中より、題跋を影寫し、各其の書寫の人傳を古記錄中より抄出して附錄せり。天保十年己亥〔二四九九〕

六月の自序あり。

◉栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

だいはんじあきしげのき

大判事章茂記　（寫本）一巻　中原　章茂

應永二十三年丙申〔二〇七六〕八月、九月、公儀に關して井上某に遣したる消息數通を集む。塙保己一書寫の奥書あり。

たいはんせいじもんだふ

對藩政事問答　（寫本）二巻

對馬藩の典故事實を記したるものにて大略「對馬國記」に同じ。寛政三年辛亥〔二四五一〕子龍の跋あり。「此編本題曰對馬日記、蓋日記者誌乘之類也。此書也爲奏答使問其國政而作也。不宜日日記。今改命其名、曰對藩政事問答。但以爲庶吏待問者、而設因欲其精密、故重複出入頗多。予也時欲會其要、故去其煩重、以從簡約、且摘關對國之政事者、一二以附其後、初五下筆十一日卒業」といへり。

たいひへいかん

泰否炳鑑　（寫本）二巻　會澤　安

巻一には「兩卦略解」と題して、周易中泰否兩卦の意義を解釋敷演し、巻二には「消長事證」と題し、支那宋朝の政事の得失を、泰否兩卦に當て、評論せり

◉會澤安の傳記は「閑聖漫錄」の下にあり。

だいふき

大府記　（寫本）十七册　勸修寺爲房

此の書は一名により「大記」の下に解題せり。

だいふさうこくかう

大扶桑國考　二巻　平田　篤胤

唐土の古書古傳に、東方に扶桑國といへる神靈の國域、君子國ありといへる集說を集め其扶桑國は我が國にして、彼の土の三皇五帝も皆我が皇孫なることを考論したるもの。門人關武雄・大高秀明等の同校するところにして、天保七年丙申〔二四九六〕八月伊勢太神安守序、同五年生田國秀跋あり。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

たいふざくら

大夫櫻　一册　和氣　遠舟

花に寄せて敦盛を歎ひたる、須磨寺勸進の俳句を集めたるものなり。延寶八年庚申〔二三四〇〕三月成れり。近年發行の俳諧文庫第三編「芭蕉翁以前俳諧集」の下巻中にも收む。

たいふしんわ

大夫新話　一巻

素丸、逸窓、花月、鴉翠・里姿、青錢、丘馬、己専、素邑、其の他數十家の發句集なり。いづれも、後櫻町天皇の明和七年庚寅〔二四三〇〕の作にして、同年の編輯にかゝる。

だいぶつじごろく

大佛寺語錄　一巻　僧　道元

大佛寺化儀の上堂の垂誡に係るものなり。永平廣錄の第二巻なり。

◉道元の傳は「正法眼藏」の下にあり。

だいぶつでんらいくわえんせうづゑ

大佛殿雷火炎燒圖畫　（寫本）一巻

寛政十年戊午〔二四五八〕七月朔日夜より、同二日に渉りて、洛陽に於ける雷火の顚末を詳細に記したるものなり。「輪池叢書」の第二十四に收む。

だいぶつみぐしくやうにつき

大佛御頭供養日記　（寫本）一巻

貞觀三年辛巳〔一五二一〕三月十日、東大寺大佛修理の爲めの供養せる時の記なり。「續群書類從」巻七百九十五、釋家部第八十に收む。

だいぶつものがたり

大佛物語　二巻

入道、念佛、禪學等の事を、童蒙婦女にも了解し易きやうに記したるもの。寛永二十一年甲申〔二三〇四〕に版刻せられたり。

たいふのじやうよしつねかしこまりまうしのき

大夫尉義經畏申記　一巻

可レ令下向二市廛一人結番上事、定二補撿非違使一事、撿非違使部類等の事を載錄せり。治承三年己亥〔一八三九〕の頃の事に係る。「群書類從」巻百〇八、公事部第三十に收めたり。

たいへいえどわうらい

泰平江戸往來　一巻

最初に七福神の入舟、能舞臺を圖し、次に、讀書秋月、算盤夜雨、金箱夕照、暖簾歸帆、勘定晴嵐、資錢落雁、銀子暮雪、天秤晩鐘の八景を圖し、次に本文自遣往來を掲げ、頭書には普通の熟語、國盡歌其の他等を出せり。文化十年癸酉〔二四七三〕出版す。

たいへいき

太平記　四十巻

花園天皇の文保二年戊午〔一九七八〕より、後村上天皇の正平二十二年丙午〔二〇二六〕に至る凡そ五十年間の戰亂を記したる書なり。後醍醐帝御治世武家繁昌、無禮講玄惠法印昌黎文集を講ず、日野阿若丸佐渡にて父の敵をうつ、主上御夢楠正成、主上笠置御沒落、八歳の宮御歌、備後三郎、大塔宮熊野落、正成天王寺未來記披見、吉野の城千劔破城等軍、赤松蜂起、船上合戰、妻鹿孫三郎勇力、足利殿上洛、六波羅攻、新田義貞謀叛、鎌倉合戰、高時一門自害、書寫山行幸、筑紫合戰、公家一統政道、大内裏造營、藤房卿遁世、新田足利確執、三井寺合戰、建武二年正月合戰、將軍都落、新田左中將赤松を責らる、經の島合戰、正成兄弟討死、先帝吉野へ潛幸、光嚴院御重祚、奥州國司顯家卿上洛、義貞自害、勾當内侍、天下時勢粧、先帝崩御南帝受禪、鹽冶判官讒死、大森彦七、天龍寺供養、正行吉野へ參る、同最期、直義隱遁、玄惠法印末期、義詮朝臣政務、師直以下誅せらる、新田義興自害、天王寺造營、湖水乾く、高麗人來朝、光嚴院禪定法皇行脚、中殿御會、細川右馬頭西國より上洛の事、其の他君臣の得失、和漢の故事、詩歌落書等に至るまで洩さず收錄す。本文四十巻の外に劔の巻、一巻を附して、十柄の劍、鬚切、膝丸、小烏等の名劍の由來を詳記せり。本書の題號は、最初「安危來由記」といひ、次に「國家治亂記」と改め、次に「國家太平記」といひ、次に「天下太平記」と改め、即ち四たび變じたりといふ、今の「太平記」は「天下太平記」を省略したるものなるべし。本書は古來上下の愛讀するところとなりて、足利時代以來幾種の抄本末書出來、德川氏の初代には「太平記讀み」と云へるもの〔現今行はるゝ講談師の始めなり〕さへ行はれたり。而して普通の本は、古版本、活字本、頭書本、枕本及び水戸の參考本等あり。作者編年等に就きては、普通北畠玄惠〔二〇一〇歿〕なりといひ傳ふれど、「太平記編纂由來書」に據れば、巻によりて作者を異にし、「鎌倉大草紙」「太平記批判記」等は撰者の事を云はずして、尊氏歿後凡そ五十年後の作なりといへり。近年大學史料編纂員の研究にては洞院公定の日記に基きて小島法師の作なりとすれど其の傳は未だ詳ならず。茲には未詳に附して後の研究を待つ。本書の文勢は如何といふに、實に壯大雄偉にして巧に和漢文及び佛經の語を混和し、一種の筆力を有して諸物語中の上乘なり。敍事の妙は「盛衰記」に下らず、また彼の「藩翰譜」と伯仲の間にあり。

たいへいき

太平氣　三巻

楠正成の軍謀を根據として作り成せる小說にて、例の蒟蒻本に作れり。

たいへいきえんぎ

太平記演義　五巻　岡島　璞

「太平記」を漢字に譯し、小說體に作りたるもの。天子立后入弘徽殿事より、高氏叛平家事に至る三十四段あり。欄を二に分ち、上欄に演義、下欄に通語を掲ぐ。享保四年己亥〔二三七九〕秋八月、守山祐弘の序あり。

◉岡島璞の傳は「字海便覽」の下にあり。

たいへいきおんぎ

太平記音義　四十巻

太平記の中の、熟字熟語の、音と義とを列擧して、讀方を附し、略解を加へたるものにて、四十巻に分てるを二册に版行せり。

たいへいきかうもく

太平記綱目　六十一巻　原　友軒

前掲「太平記」の中の合戰の事實及び和漢故事の誤謬等を考正改訂し、且つ其の脫漏を增補し、陣立戰場武具兵器等の圖をも示し、問答體の標註を加へたるものなり。

たいへいきぐんでん

太平基軍傳　（寫本）六十巻

德川氏時代の軍事を詳錄したるもの。石田三成隱謀發端の事並に秀吉公御隱居、太閤と奉號事より、金澤勢大聖寺へ發向の事、並に山口右京亢奇謀の事に至る百十六條三十巻を前編とし、山口右京亢勇戰の事並に金澤勢兩度敗軍の事より、眞田阿波守評定の事並幸村明言父子別離の事に至る百九條三十巻を後編とす。

たいへいきせう

太平記抄　四十巻

「太平記」を抄譯したるものにて、全部四十卷に分てるを、十冊に版行せり。

たいへいきだいぜん

太平記大全　五十卷　西　道智

前揭「太平記」中の諸將勇士の系圖、傳記並に合戰の事實等を改訂し、尙標註を加へたるものなり。

◉西道智の傳記は「大系圖」の下にあり。

たいへいきづきやう

太平記圖經　五卷

太平記中の戰場及び行軍の形狀を圖に著し其の利害得失を評論したるものなり。明曆二年丙申〔二三一六〕出版す。

たいへいきねんぺう

太平記年表　四卷　河原　貞賴

後醍醐天皇の元應元年己未〔一九七九〕より、後光嚴院の貞治六年丁未〔二〇二七〕に至るまで、「太平記」に記載せるところの五十年間の治亂を年月日に繫けたるものなり。元祿二年己巳〔二三四九〕西村道爺の序、加藤某の跋あり。著者河原貞賴は源姓にして、風林と號せり。

たいへいきのじだいていわうりやくけいふ

太平記之時代帝王略系譜　一冊

太平記時代歷代の御系圖御略歷、及び將軍略歷其の他を記す。即卷首に後醍醐、光嚴、光明、崇光、後光嚴の御略歷を揭げ南北朝の年號を擧げ、次に北條氏、新田氏、足利氏、仁木氏等の系譜を載せたり。

次に「太平記評判在名類例鈔」と題して「太平記」中の地名寺名等を列擧して四十卷に及べり。但し、卷は他の綱沿くば編と同じく一枚或は二枚を以て收まれり。明曆元年乙未〔二三一五〕五月出版す。

たいへいきひせつ

太平記祕說　五卷

後小松帝時代の著しき事績を、小說的に書き綴りたるもの。和田新吾忿激辭姑、高橋民部播州補任等より、現在若菜過去玉笛、河內判官再到參河等まで十五箇段あり。天明二年壬寅〔二四四二〕出版。和田某の署名あり。

たいへいきひやうばんしえうりじんむきよくせう

太平記評判私要理盡無極鈔　五十卷　和田　助則

太平記の中の兵事を評論す。文明八年丙申〔二一三六〕三月五日、洛外の隱士桃翁の序あり、中に論じて曰く、「依是自古閱於所記之書、而論兵者、於本朝凡有十三家、皆七書之文理、爲筌蹄而探智謀魚兎。其十三家者、探淵鈔八卷者論盛衰記赤松滿祐作也。拔要誌八卷者釋盛衰記山徒圓能作也。戰鬪誌七卷者書賴朝之軍配松田康氏作也。無極鈔七卷者吉田光氏作也。評太平記古覽誌三卷者紀伊友氏作也。本太平記兵書也。智命鈔三卷者、正成軍書也南都儒德齋述也。知本鈔四卷者義貞正成論七書山城守正任作也。天事錄三卷者高時不知兵法而記暗將長覺作也。合記論五卷者論太平記山徒高仁作也。京洛鈔三卷者太平記之鈔釋也松野助茂作也。通見鈔六卷者論太平記小笠原左京大夫元氏作也。太阿鈔五卷者記於太平記陣圖阪部氏望作也。依稽鈔三卷者太平記之拔鈔也多武峯覺仙作也。今此評判私要無極鈔五十卷者和田下野守助則入道榮閑作也。括寄於十三家之書、而合成一部、廣論古今之兵革、而狹評太平記之勝負矣。且有義貞長俊正成等之軍記、皆以雖不全、然和田助則、或補或求而正之、窺此書則記中之剛膽、是非得失、眼前如見、可謂評得分」云々といへり。其の大要を知るべし。題名の趣意に就ては、「萬物雖無盡、盡也、理不盡亦是盡也、極者無始也、何不言理盡無極」といふ。五十卷四十五冊に版す。著者和田助則は下野守たり。入道して榮閑といふ。

たいへいぎよくだん

太平玉談　（寫本）三卷

松永道齋の「道齋聞書」と大同少異なり。恐くは同書に僅の增減を加へて別名を附したる者なるべし。

たいへいくわくふ

太平鶴譜　一卷　田中　長興

鶴の種類及び關係せる事實を輯錄したるものなり。櫻町天皇の延享元年甲子〔二四〇四〕の作にして、同年出版せり。

◉田中長興の事は「面影雜子」の下にあり。

たいへいこくおんりだん

太平國恩俚譚　十五卷　加藤　在止

當時の世話氣質を顯したる滑稽に近き作話を書き綴りたるもの。明和七年庚寅〔二四三〇〕五月、牧叉の序あり。

たいへいさく

太平策　（寫本）一卷　荻生　茂卿

隋の王通の「太平十二策」に倣ひて作りたる經濟論なり。

◉荻生茂卿の傳は「蘐園祕錄」の下にあり。

たいへいざつわ

太平雜話　（寫本）二十一卷

諸傳記、家々の覺書等を輯錄したるものなり。卷端に「中古名戰德川一統志大全」と記し、また「太平雜話」と記したるもあり。

たいへいしやうしびだん

太平將士美談　（寫本）三卷　永山　利貞

本書は古來將士の美談を筆記したるものなり。もと數百條の雜話中より拔萃したりとて、百七十條を擧げたり。但しこれも六卷にて、三百七十餘條なりしが、三卷を佚して、今僅に三卷を殘せるなり。中御門天皇の正德二年壬辰〔二三七二〕に編したるなり。

◉永山利貞は筑前の儒臣なり。嘗て父潛齋に從ひて諸方に遊歷し、種々武邊の話を筆記したる事ありき。

たいへいすゐこき

太平推固記　（寫本）一卷　室　直淸

家康、秀忠二代男子の諸傳にして、秀康に始まりて正之に終れり。

◉室直淸の傳は「駿臺雜話」の下にあり。

たいへいねんぺう

泰平年表　（寫本）四卷　大野　廣城

天文十一年壬寅〔二二〇二〕より天保八年丁酉〔二四九七〕まで、即ち德川家康より同家齊に至る、十一代三百年間の出來事をば、年序を逐うて載錄したるもの。本書は天保十二年辛丑〔二五〇一〕の著者の例言に據るに、三百部を限り上梓して、同志に頒ち發賣を禁じたりと云ふ。卷首に引用書目百五十餘部及びいろは分け索引を附したり。

◉大野廣城は權之丞と稱し忍軒と號す。江戶の和學者にして、幕府に仕へ小十人たりしが、靑標紙、殿居袋を著して罪を得、丹波綾部邸に幽閉せられて歿す。時に天保十二年辛丑〔二五〇一〕九月十一日なり。著書は本書の外に假名便覽、東國風流、證獸類葉、執權古實、類例祕錄、的例問答、柳營事略、律令大祕錄、忍屋叢書等あり。

たいへいねんぺうこうき

泰平年表後記　（寫本）二卷

前揭「泰平年表」に續きて、天保十五年甲辰〔二五〇四〕より弘化四年丁未〔二五〇七〕迄の事を記せり。

たいへいねんぺうしき

泰平年表嗣記　（寫本）五卷

忍屋隱士即ち大野廣城の「泰平年表」に續きて、弘化元年甲辰〔二五〇四〕より同四年丁未までの、德川治下に於ける出來事を採錄したるものなり。嗣記とは云へども、記事體裁等の前者に及ばざること遠きを見る。

たいへいひき

太平祕記　（寫本）十卷

標題卷數等を異にせるも、其の事實は元文五年庚申〔二四〇〇〕の作なる「改正武野燭談」五卷と同物なり。將軍家代々、同家門、執權、老臣、諸役人、諸大老の事等を記せり。

たいへいひやうごき

太平兵庫記　二卷

楠正成が兵庫より故鄕に歸る時、家臣渡邊勇へ贈りし書なりとて、明治十六年癸未〔二五四三〕に、勇の後裔渡邊林之輔の出版したるもの。德川氏初年の古版もあり、文武之事、君と臣との事、大將道を守る事等より、將士理官之事、古今軍品々之事等に至る四十四條ありて、將士戰爭の道を示したれど、後の學者多くは本書を以て僞書とせり。

たいへいぶかん

太平武鑑　三卷

德川時代の諸大名及び幕府諸役人の略系家紋知領高等を圖記したるもの。「大成武鑑」などと同種の書なり。元祿八年乙亥〔二三五五〕に成りたり。

たいへいふぼうき

太平不忘記　十卷　相良　就與

卷一より卷六に至るまでは凡て斥候に關する事を論じ、卷七以下は凡て一般の軍法を述ぶ。寬永三年〔二二八六〕門人尾崎正豐の序あり。蓋し同氏が著者の歿後に大成したるものなり。同年出版す。

◉相良就興は縫殿助と稱し、毛利秀就に仕へ、其君をして常に武を忘れざらしめんと欲して本書を作り、名くるに「不忘記」を以てしたりといふ。

たいへいむせつ

太平夢說　（寫本）五卷

本書は「護國太平記」と同本なり。但し此本には序文ありて、當時の忌嫌を憚り夢に託して、事實を記せるよしを辨したり。

たいへいらくみくにかたぎ

太平樂皇國性質　二卷　松亭　金水

見聞の雜事を論評せるもの。儒者と佛者との說の異るところを擧げ古今風俗の變化を述べ、神社に鰐口を用ふる事の非なること其の他雜多の論評を載せたり。

◉松亭金水の傳は「松亭漫筆」の下にあり。

たいへいりうきうじんらいてうのまき

太平琉球人來朝之卷　（寫本）一卷

琉球人來聘の由來年月人名進物等を略記したるもの。「薩琉軍談」より抄錄したるものなりと云ふ。寬延元年戊辰〔二四〇八〕の序言に秀琨堂と署記せり

たいべつきばつすゐ

台別記拔萃　（寫本）一卷

「台記別記」中の、康治元年壬戌〔一八〇二〕十一月大嘗會記の中、中臣壽詞を拔萃したるものなり。

だいほうせんせいししふ

大峯先生詩集　四卷　冢田　虎

著者の詩集。寬政五年癸丑〔二四五三〕藤江秀、金谷英の序、同六年齋藤謙の序跋あり。

◉冢田虎の傳は「滑川談」の下にあり。

だいほうせんせいぶんしふ

大峯先生文集　六卷　冢田　虎

卷一に論十四章。卷二に辯七章、解七章、說四章。卷三に序題二十七章。卷四に著書序題二十四章。卷五に書牘三十四章。卷六に記八章、墓誌碑銘五章、銘讃十八章、傳二章、雜文八章等を集めたり。享和三年癸亥〔二四六三〕男冢田簡、門人土屋世範、岡崎貞濟等の校讐上梓に係る。

◉冢田虎の傳は「滑川談」の下にあり。

だいみんふ

大明譜　一卷　柳井　郷直

天文十六年丁未〔二二〇七〕著者が僧策彥に隨て明國に行かんとし。二月二十一日山口を發船する事より船員の姓名、積載物の數名、賊船と戰ふ等の事を記せり。

だいみんりつちよくかい

大明律直解　（寫本）十二卷

明律三十卷凡そ四百六十條の內を假名文にて譯解したるものなり。惜むらくは全編に及ばず。

だいみんりつれいげんかい

大明律例諺解　（寫本）三十一卷　榊原　玄輔

國語を以て精詳叮嚀に大明律の文意を註解したるものなり。

◉榊原玄輔の傳は「印章備考」の下にあり。

だいみんりつれいしやうかい

大明律例詳解　（寫本）三十卷　高瀨　忠敦

大明國の律を詳解したるものなり。別に一卷目錄を附す。延享元年甲子〔二四〇四〕の自序、同二年の林信充の序あり。

◉高瀨忠敦は字を希棧、通稱を松庵といひ學山と號す。父松意、醫を以て紀州藩に仕ふ。學山其の業を受く。將軍吉宗藩にありし時、儒官に擢でられしが、後江戶に出で、中村蘭林、桂山彩巖、川熊峯等と程朱の學を研究し、殊に律學を好み、明律に就て物徂徠と研究するもの多し。著者には論語鈔說、孟子鈔說、考工記諺解、唐律解、唐律諺解、明律例私考、同拾遺、明律譯義、明律詳解、明令考、唐話入門、千字鈔、萬字鈔、非學問、非斥非、醫學正傳標註、筮中耶尺牘、學山文字集等あり。寬延二年己巳〔二四〇九〕六月十五日、八十二にて歿す。

だいみんりつれいやくぎ

大明律例譯義　（寫本）十四卷　高瀨　忠敦

此の書は大明國の律を假名文に譯解したるものなり。別著「大明律詳解」と參看すべし。

◉高瀨忠敦の傳は「大明律例詳解」の下にあり。

たいやうをしやうぎやうじつ

大陽和尙行實　（寫本）一卷

觀應三年壬辰〔二〇一二〕正月十一日、七十一歲を

以て入寂せる義沖大陽和尙の傳記なり。漢文にて記す、延文三年戊戌〔二〇一八〕諸門人等の記するところなり。「續群書類從」卷二百三十四、傳部第四十五にあり。

だいやまちしろめのつじうら

代夜待白女辻卜　一卷　瀧澤　馬琴

著者の世話小說にて、明治十九年丙戌〔二五四六〕活刷一本に發行せり。

◉瀧澤馬琴の傳記は「南總里見八犬傳」の下にあり

たいようぜんじごろく

太容禪師語錄　一卷　僧　太容

「太容和尙住能州諸嶽山總持禪寺語錄」と內題して、十數枚あり。貞享五年戊辰〔二三四八〕三月十五日、獄庵亥玄充の序あり。

だいよみくせきりかみ

題讀曲切紙　（寫本）一卷　平間　長雅

和歌四季戀雜の題の讀曲を八通の切紙としたるものなり。奧に稀なる題の切紙四通、題の用意切紙五通ありて難題讀方の心得等を記したり。

◉平間長雅の傳は「長雅集」の下にあり。

だいりうたあはせ

內裏歌合　一卷

此の書は村上天皇の天德四年庚申〔一六二〇〕三月三十日、內裏歌合の歌及び記事を載せたるものなり。「群書類從」卷百八十一、和歌部第三十六に收めらる。

だいりうたあはせ

內裏歌合　（寫本）一卷

應和二年壬戌〔一六二二〕五月四日、內裏御催の歌合なり。此の種の歌合にて、寬和元年乙酉〔一六四五〕八月七日の內裏歌合。同年八月十日の內裏歌合。同二年丙戌〔一六四六〕の內裏歌合。元久元年甲子〔一八六四〕十月の內裏歌合。承曆三年己未〔一七三九〕の內裏歌合。永保二年壬戌〔一七四二〕の內裏歌合。建仁三年癸亥〔一八六三〕の內裏歌合等各一卷あり。

だいりうたあはせみぎのかたごばん

內裏歌合右方後番　（寫本）一卷

子日、霞、鶯、櫻、藤花その他等十五題にて、保實、匡房、通俊等凡て十人にて合せたる十五番歌合なり。「續群書類從」卷四百〇七、和歌部第四十二に收む。

だいりおんびやうぶじやうでふ

內裏御屛風上帖　（寫本）一卷　後柏原天皇

大永元年辛巳〔二一八一〕の御製にて、春七首、夏三首、秋七首、冬三種、戀六首、雜九首、凡て三十五首あり、奧書に三十六枚書進云々とあれど、歌數は三十五なり。「續群書類從」卷四百〇二、和歌部第三十七にあり。

◉後柏原天皇の御傳記は「柏玉集」の下に拜揭す。

だいりぎしき

內裏儀式　（寫本）一卷

正朔拜天地四方屬星及び二陵式以下、五月五日觀馬射式に至る十四項の內裏儀式を記せり。卷末に享保八年〔二三八三〕六月二十六日藏人右中辨正五位兼行左衞門權佐藤原朝臣俊將自寫の奧書あり。

だいりごばんうたあはせ

內裏後番歌合　（寫本）一卷

承曆二年戊午〔一七三八〕の內裏後番歌合なり。

だいりごふしんちやう

內裏御普請帳　（寫本）一卷

慶長十六年辛亥〔二二七一〕內裏御造營の時、其の役に與りし人々の姓名官職俸祿等を記したるものなり。

だいりしいかあはせ

內裏詩歌合　一卷

建保元年癸酉〔一八七三〕二月二十六日に催されたる詩歌合の詩歌を集めたるもの。題は山中花夕野外秋望の二題。「群書類從」卷二百二十三、和歌部第七十八に收む。

だいりしき

內裏式　二卷　藤原　冬嗣

正月元日より十二月に至る內裏諸式典の次第を記したるもの。弘仁十二年辛丑〔一四八一〕正月、藤原冬嗣、良岑安世、藤原三守、朝野鹿取、小野岑守、桑原公腹赤、滋野貞主等が、敕を奉じて修定上奏したるを、更に天長十年癸丑〔一四九三〕二月、淸原夏野、藤原吉野、紀長江、春澄善繩等が敕によって斟

酌添削したる所なり。『群書類從』卷七十九、公事部第一に收めらる。
◉藤原冬嗣の傳は「弘仁式」の下にあり。

だいりじふごばんうたあはせ

内裏十五番歌合　（寫本）一卷

承曆二年戊午〔一七三八〕の歌合にして、大納言顯房の判なり。

だいりせんかうぶるゐ

内裡遷行部類　（寫本）一卷

中古記、玉葉記、愚昧記、その他の諸記錄によりて、天仁、天永、仁安、嘉應、安元、治承、元曆、元久、貞和等の遷行記を部類したるものなり。『續群書類從』卷八十八、帝王部第七にあり。

だいりづ

内裏圖　一舖　浦田淸林堂

南は丸太町通を限り、北は相國寺門前を限り、西は烏丸通を限り、東は京極通を限り、禁裏仙洞女院御所御花畠、親王家、攝家及び諸家邸宅、宮門跡方、里坊並に町家、神社佛寺等を圖せり。寛政三年辛亥〔二四五一〕刻す。
◉浦田淸林堂は書畫工なり。本名を詳にせず、淸林堂は其の堂號なるべし。

だいりづ

内裡圖　九折

内裡圖付中和院圖一折に、神祇官圖、太政官圖、眞言院圖、大學寮圖、豐樂院圖、八省院圖、京城略圖等を併せ九帖に版行す。

だいりひな

内裏雛　六卷

京師の内裏及び名高き社寺舊蹟等の緣起來歷を記したるものにて、一名を「山城名所寺社物語」、また「京の花」ともいふ。寶曆七年丁丑〔二四一七〕の版刻なり。

だいりめいしよひやくしゆ

内裏名所百首　一卷

諸國の名所を詠出したるもの。作者は順德院女房、僧正行意、參議定家卿を十二人。題は春二十、夏十、秋二十、冬十、戀二十、雜二十あり。各人每題に一首づつを詠めり。建保三年乙亥〔一八七五〕十月の事なり。『群書類從』卷百七十一、和歌部第二十六に收めらる。

だいりんるゐえふしふ

題林類葉集　（寫本）七卷

古來の撰集家集中の類を題名のいろは順に類聚したるもの。出所を上に、讀者を下に記せり。凡二三千首もあるべし。延寶五年丁巳〔二三三七〕七卷三册に版行す。

たいれいかくごき

躰禮覺悟記　（寫本）四册

『伊勢弓馬叢書』の中の一書にして、全編中、所々に伊勢貞丈の考證書入あり、書入中には他家の傳と比較して其の違點を指摘することあり。

たいれいよそう

對禮餘藻　（寫本）三卷　古賀　樸

文化八年辛未〔二四七一〕著者對馬に行き韓使と唱酬したる詩什及び筆語を錄したるものなり。文政五年壬午〔二四八二〕男煜跋を附す。
◉古賀樸の傳は「十字解」の下にあり。

たいわじはじめせいご

大和事始正誤　（寫本）二卷　伊勢　貞丈

貝原好古の著したる「和事始」の誤謬を訂正したるものなり。假名文にて記す。天明元年辛丑〔二四四一〕八月、漢文の自跋あり。
◉伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

たいわぼくけい

大和木經　（寫本）一卷　岩崎　常正

本邦及び外國産の木材二百數品を類聚し、其の異名、硬軟用方等を詳に示したるものなり。文政年間のものなるべし。
◉岩崎常正の傳は「岩崎灌園遺稿」の下にあり。

たいわんていしきじ

臺灣鄭氏紀事　三卷　川口　長孺

我が年代に繫けて臺灣鄭氏の事績の大小を記述したるもの。全編漢文に割註を入れて作れり。文政十一年〔二四八八〕林衡の序、靑山延于の跋あり。
◉川口長孺の傳は「三朝嘉言錄」の下にあり。

たういんぎよしやう

島隱漁唱　（寫本）三卷

文明八年丙申〔二一三六〕六月の作。以下數百首の詩を集めたるものなり。

たういんそんかう

宕陰存稿　十三卷　鹽谷　世弘

著者の漢文集なり。凡そ百十數編、諸體の文を列擧し、更に補遺を附して數編を收む慶應三年丁卯〔二五二七〕芳野世育の序あり。禮樂射御書數の六卷として版行す。
◉鹽谷世弘の傳は「阿芙蓉彙聞」の下にあり。

たういんひじ

棠陰比事　五卷

唐土の話事を書き輯めたる宋桂萬榮の「棠陰比事」を和譯したるものなり。向相訪、賊、錢推求奴、啓攄明婦、裴均釋夾、凡そ一百四十四條あり。全編假名文にて記す。慶安二年己丑〔二三〇九〕出版す。

たういんひじかせう

棠陰比事加鈔　六卷　林　道春

棠陰比事の原文に假名を附し、更に別項に其の解釋を揭げたるものなり。寛文二年壬寅〔二三二二〕の作なり。
◉林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

だういんひでんしなんせう

導引祕傳指南抄　一卷　一　愚子

導引按摩の術を記載す。導引根源訓、按摩人を撰訓、養生按摩の訓、以下二十餘項按摩の術法を記せり。寛政五年癸丑〔二四五三〕の自跋あり。著者一愚子は浪華軒と冠して姓名を錄せず。

たういんわかい

唐音和解　二卷　逍遙軒馬安

唐土の普通單語を擧げ、乾坤、干支、地理、人品、禽獸、草木、器用、飮食、言語、設宴話等に分ちて熟字に唐音を附し、下に我が普通語を擧げて和音を附し對照す。卷末に飮中八仙の圖及び同畫註を揭げたり。正德六年丙申〔二三七六〕の自序あり。寛延三年庚午〔二四一〇〕出版す。

たううんろくじ

踏雲錄事　（寫本）一卷　僧　行智

修驗山伏道の來歷を詳述したるものなり。准三宮御所の命によりて、天保七年丙申〔二四九六〕十一月、注進すといふ。
◉行智の傳は「悉曇字記眞釋」の下にあり。

たうゑいぶつしせん

唐詠物詩選　十卷　平　信好

唐詩の詠物に關するものを類別列擧したるもの。著者おもへらく、詩は唐を以て標的となし詠物の一體は殊に唐を捨てゝ他にあらずと。而して卷一に天文四十七首、時令六十七。卷二に地理百十二、宮室二十四。卷三に宮室三十五、器財二十、衣服八、飮食三十四、藥菜十一。卷四に文史三十五、武功二十九、音樂四十二。卷五に樵漁十二、婦女三十七。卷六に僧道三十三、佛寺二十五、仙觀七。卷七に鳥獸八十六、蟲魚二十四。卷八に草木六十七。卷九に草木五十七。卷十に草木七十三。凡て八百九十五首を收む。安永五年丙申〔二四三六〕の自序、江村北海の序、同四年龍公美の序等あり。小本一册に作る。著者平信好は師古といひ、平安の人なり。

たうえきへんぎよくほんざう

湯液片玉本草　一卷　高田　玄柳

本草綱目の中より、日用最要と見込しもの二百數種を抄錄して、いろは順に列記したるものなり。

たうおうしふ

唐翁詩集　五卷　僧　大旨

著者の詩集にて、享保二十年乙卯〔二三九五〕伊藤東涯の序あり。五卷中一卷は「續集」にして同十九年釋天產の序、釋義碑の跋を附したり。
◉大旨は隱遁して攝津に住し、字を唐翁といふ。大旨は其の號なり。

たうおくげかゞみ

當御公家鑑　一卷

公家の方所官職、家紋爵位等を列記したるもの。是よりさき「公家鑑」の版行あり、爾來方所存亡位職の遷轉等ありたれば、また訂正改名して本書を出すといふ。寶永五年戊子〔二三六八〕の出版なり。

だうか

道歌　（寫本）一卷

超脫利害心、人間世、世界只是當下一念、世間之凡態如矮人觀場等悟道の和歌數十首をつられたり。寛文七年丁未〔二三二七〕六月十一日とあれど、著者の名を記さず。

たうかいしふ

蹈海集　八卷　服部　元雄

著者の詩文集なり。江戸の人伊周受の編輯するところなり。明和元年甲申〔二四二四〕八月、神戸侯忠與の序、餘承裕の跋あり、明和六年己丑〔二四二九〕八月出版す。

◉服部元雄は江戸の儒者たり。仲英と字し、多門と稱し、白賁また蹈海と號す。少にして服部南郭に學び、業成り最も詩を善くす。別に塾門を開く。未だ幾ならずして南郭の養子となり、本姓西村を改めて服部氏を冒す。明和四年丁亥〔二四二七〕六月八日、五十四にて歿す。品川東海寺中少林院に葬る。

たうかいしふしふい

蹈海集拾遺　二卷　服部　元雄

著者の遺稿。河田乘彝の作れる墓誌銘を作したり。寛政十年藤忠齋の跋あり、翌年出版す。

◉服部元雄の傳は「蹈海集」の下を見よ。

だうかいでん

導海傳　（寫本）一卷

乘船航海の術を記したるものにて、船中必要の器械等は、皆圖を示して說明せり。

たうかうざつき

桃岡雜記　一卷　八田　知紀

賴山陽の「日本政記」の論贊中に三條、帆足萬里の「入學新論」中に五條共に國體を度外視するの僻論なることを辯駁し、凡て儒者の皇國を外にするの非を鳴せり、附錄には德川家康の國事に盡力せしこと、儒者の「春秋」を熟讀せざること等を論ぜり。弘化二年乙巳〔二五〇五〕岩垣松苗の漢文序あり、翌三年出版す。

◉八田知紀の傳は「經義大意」の下にあり。

たうがくざんき

桃蘂殘輝　（寫本）一卷　藤原　冬良

此の書は一名「令聞書」といふ。該題下に解題せり。

だうがくへうてき

道學標的　一卷　佐藤　直方

道學の標準を論述したるもの。自序中に「學者聖賢を學び其道に造らんと欲せば、則ち又以て聖學の要皈を識らざるべかず。由て竊に聖賢の言の此に關するものを列擧し、以て講學用力の標的に備ふといふ」とあり。正德三年癸巳〔二三七三〕出版す。

◉佐藤直方は備後福山の人。五郎左衞門と稱し、剛齋と號す。京に出でて山崎闇齋に學び、能く其旨を得、江戸に出でて諸侯の間に遊ぶ。初め福山侯に仕へ、後廐橋侯に師聘せられ、其邸に居ること二十餘年、晚年彥根侯に招かれて賓禮を受く。從ひ學ぶもの少からず。著書は本書の外に、四書便講、講學便箋錄、大學全蒙釋言、鬼神論集說、排釋錄、孟子盡心口講、靜座集說等あり。享保四年己亥〔二三七九〕八月十五日江戸に歿す、年七十。

だうかこゝろのむち

道歌心の策　一卷　無染居士

檉林皇后を始として、榮西、明惠、道元、法燈、大覺、法心、無住、北條時賴、如大禪尼、大燈、夢窓等凡て禪家五十人の道歌五十首を集め、各首の下に其の肖像を揭げ、上欄に同人の略傳逸事を記したり。同宗後輩の奬勵にとて編し心の策とは名けたりといふ。天保四年癸巳〔二四九三〕出版す。

たうかざつろく

棠下雜錄　（寫本）二卷　平野　敬德

治國安民に關する說論にして、租稅、產業道德等の事を評述す。著者さきに「治國錄」を著し、任國安民の事を論述し、今此の書を著して、其の遺漏を補へりといふ。文化十年癸酉〔二四七三〕春二月の作なり。著者平野敬德は安藝國廣島の人なり。

だうかしふ

道歌集　一卷　二宮　尊德

翁の道詠に係る道歌を編輯したるもの。誠者天之道也誠之者人之道也誠者不勉而中不思得の歌「田をふかくよく耕してやしなへば、いのらずとても米やみのらん」已下百五十餘首を收めたり。明治三十年丁酉〔二五五七〕に二宮尊德出版す。

◉二宮尊德の傳は「窮民撫恤仕法書」の下にあり。

たうかせちゑしだい

踏歌節會次第　（寫本）一卷

其の名の示すが如し。天和三年癸亥〔二三四三〕及び寶永五年戊子〔二三六八〕の奧書を載す。

だうがぼらぐんき

堂洞軍記　（寫本）一卷

永祿八年乙丑〔二二二五〕美濃國加茂郡加沼田堂洞掛上の合戰始末を記したるもの。龍興榮華之事、西方三人衆心替之事、稻葉軍之事、齋藤山城守祖先之事、堂洞合戰之事、關加治田軍之事、關城責之事、兼山加治田軍之事、齋藤新五郎蹟目之事、以上の目より成る。「續群書類從」卷六百十七、合戰部第四十七に入る。

たうからしひやくゐん

唐辛子百韻　一册　西山　宗因

著者の俳諧集なり。編述したる年時は、明記なくて、知りがたし。

◉西山宗因の傳記は「大阪獨吟集」の下にあり。

たうかんしんだいわじやうでんき

唐鑑眞大和上傳記　一卷　眞人　元開

「鑑眞大和上傳記」として、「か」の部に解題したり。

たうきかう

陶器考　二卷　田內　梅軒

我が各國各種の陶器を擧げて考證す。其凡例には「客歲諸蠻國の陶器を分鑑して一卷となし、此を同志に告ぐ、幸に誤を正し、及ばざるを告るものあり、依て更に校正を加へ、副るに本邦國々古今陶するところを擧げ茶具に入るところの器品、また當時埋れて世に出でざるものを集めて、附錄一卷となす」云々といへり。安政二年乙卯〔二五一五〕の作にかゝる。著者田內梅軒は京都の人にして米三郎と稱す。

たうきみつぱふしよ

陶器窑法書　（寫本）一卷　御室　乾山

陶器の製法に關する口傳を記せるもの。寛政四年壬子〔二四五二〕五月、萬古堂三世三阿の奧書あり。

◉御室乾山は洛陽の人、磁器製造の精妙を以て著る。晚年寨命により、暫く江戸根岸に住して製陶の業に從ひ、後また京都に歸り歿しぬ。

だうきやうづかい

道經圖解　一卷　石川　嘉貞

大極、陰陽、乾坤、形化、人心、性、人倫之大經、倫理之道亂等を圖解したるもの。圖下に漢文の詳論あり。天保九年戊戌〔二四九八〕男貞恒序を附して出版す。

たうきらくさう

陶器樂草　（寫本）一卷　茶　顚　庵

樂燒、土燒等諸種陶器の製造に用ゆる土石、其の燒方及び藥調合の分量等を示したるもの。當業家の參考を要すべき書なり。天保三年壬辰〔二四九二〕書寫のよしを記せり。

たうきんさんぱふ

陶金算法　（寫本）二卷

勾股弦求積術並に日用計算の問題三百餘を出して其の答術演段等を記したるものなり。

だうくわうはふしんわうごゑいしふ

道晃法親王御詠集　（寫本）二卷　道晃法親王

寛和十四年丁丑〔二二九七〕三月三日仙洞御着到歌より、延寶七年己未〔二三三九〕六月の辭世までを記せり。

◉道晃法親王は後陽成帝の第十一子にして、吉宮と稱す。聖護院に入り、道勝法親王に從ひて剃髮受業す。寛永三年親王となり、同七年大峯に入り、同十六年灌頂し、二品に敍し、園城寺の長吏となり、三山檢校に補せられ、若王寺檢校を兼ぬ。明曆二年牛車宮中に入るを聽さる。性、學を好み、詩歌文章を善くし、兼ねて書を學び、また茶道に通ぜり。延寶七年己未〔二三三九〕六月十八日、六十八歲にて薨ぜり。遍照寺と號す。

たうくわゑんいかう

桃花園遺稿　四卷　鵜殿　孟一

著者の詩集。擬古樂府、五言古詩、七言古詩、五言律、五言排律、七言律、五言絕句、七言絕句等總計四百七十首を收錄したり。天明二年壬寅〔二四四二〕藤粲の序、安達修の跋あり。同四年上梓す。

◉鵜殿孟一は士寧と字し、左膝と稱す。父の職を襲ひて德川幕府兩御番の御小性組となり、祿千石を領せり。士寧幼にして書を好み、性理學を修め、後徂徠の復古學を喜び、服部南郭に學び、修辭の學自ら一機軸を爲し、當時に知られたり。晚年官を罷めて本莊に家居せるより人呼で本莊先生といへり。著書は本書の外に、鵜肋集、棲居放言等あり安永三年甲午〔二四三四〕十月二十二日年六十五にて歿す

たうくわずゐえふ

桃華蘂葉　（寫本）一卷　一條　兼良

一條家に着用すべき裝束の色目冠扇太刀烏帽子、其の他書狀文書等の事を記したるもの。文明十三年辛丑〔二一四一〕卯月上旬に記せし由の奥書あり。卷末に附したる「胡曹抄」は、服飾の事を記したるものにして、天文十三年甲辰〔二二〇四〕東山左大臣兼熙の作といふ。

◉一條兼良の傳記は「歌林良材集」の下にあり。

たうくわどういかう

桃花洞遺稿　二卷　白石　榮

上卷に古今體詩及び序、記事を收め、下卷に雜著文を載す。安永九年庚子〔二四四〇〕龜井魯道の序、翌天明元年入江貞の序、風容明の跋あり。

◉白石榮は平戸松浦氏の文學にして、子春と字し、桃華洞と號せり。

たうくわのき

陶化之記　一卷　松平　定信

學校に於ける薰陶敎化の要を平易適切に說き示したるもの。文政十一年戊子〔二四八八〕五月の記。「樂翁公遺書」に收めらる。

◉松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

だうくわんをかひぶん

道灌丘碑文　一卷　石島　正猗

道灌丘は江戸城北日暮里本行寺にあり。其の西北の山を道灌山といふ。太田道灌保隆の蹟にして、丘は其の斥候臺の趾なりといふ。碑は、道灌の後裔掛川城主太田氏が寬延三年庚午〔二四一〇〕、寺主等と謀りて建設し正猗をして碑文を作らしめたるなり。蓋し此の丘は關道閑の舊蹟なるを、後人誤て太田道灌に附會したるものなりといへど、其の考證以前なる、此の碑文の、事實に相違せるは、其の心して見るべきなり。寶曆二年壬申〔二四一二〕太田資信の序あり。

◉石島正猗の傳記は「芰荷園詩集」の下にあり。

だうくわんしろく

導竅私錄　三卷　小出　龍

人體解剖の書にして、五臟六腑の位置形狀を詳記し、旁ら經絡津液脂肪等、人身の各部に及べり。著者は和漢洋の解剖書を參考し、且つ男女十餘人の屍體を解剖したる實驗に依りて本書を著したるなりと云ふ。天保七年丙申〔二四九六〕の刊行に係る。小出龍は醫士なり。字は君德、薇山と號し、備後の人、業を惠美三白に學び、後大阪に移りて開業したりき。

たうくわんせう

唐官鈔　（木版）三卷　伊藤　長胤

唐六典及び通典、唐書、百官志等に考へて、官職、爵位等の大略を註說したるもの。漢文にて記す。享保元年丙申〔二三七六〕の自序、寶曆三年癸酉〔二四一三〕藤原榮親の序、伴重威の跋等あり。

◉伊藤長胤の傳記は「輶軒小錄」の下にあり。

たうけいいかう

桃溪遺稿　一卷　僧　桃溪

著者の詩偈を輯錄したるもの。安永四年乙未〔二四三五〕五月に上梓す。

◉桃溪は眞宗本願寺派江州正崇寺の住持たり。名は若霖、汝岱と字す。學內外を兼ね詩文に巧にして、當時の儒宗白石東涯等と交驩し、宗學は知空に從つて其の蘊奥を極め、該宗第三の能化となり。學黌を司ること凡十九年。本書の外に「正信偈文軌」五卷、「三經科校本」四卷、「私淑編」一卷等世に刊行。享保二十年乙卯〔二三九五〕九月、六十一歲にて入寂す。離塵院と謚せり。

たうげんいじ

桃源遺事　（木版）五卷　安積　覺

此の書は一名「西山遺事」の下に解題したり。

だうげんをしやうぎやうろく

道元和尙行錄　（木版）一卷

永平寺開山道元禪師の傳記なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百二十五、傳部第三十六にあり。

たうけんしんしよ

陶犬新書　三卷　おほ家かね延

種々の世說雜話百餘種を記し、間々其の由來をも考說したるもの。少しく其の條目を例擧すれば、酒を人にすゝむる詞、八文字屋本は其頃の作、すつぽんのゐんは美味、肝煎は蛇驗、うそふきの假面、嫖子の稱遊里の時變、はるの夜のほとゝぎす、水引の事等あり。題號の意は天保卯年の自序に「陶ものの犬夜を守る警めなく、瓦の鷄晨をつかさとる益なしといふ古ことに違はず。此ふみもいかめしけれど、人の爲、わかためならぬよしなしごとなれは、おなしこゝろもて、こゝに名つけぬ」と云へり。

だうげんぜんじごろくせんげん

道元禪師語錄僞原　一卷　僧　道元

道元禪師の語錄にして、單に「永平錄僞原」と內題す。序跋あり。靈元天皇の天和三年癸亥〔二三四三〕出版す。

◉道元の傳は「正法眼藏」の下にあり。

たうげんせんせいぜんしふ

桃源先生全集　（木版）十卷　野　沂

著者の詩文集。卷一は歌、賦、辭、詩。卷二、三、四、五、六、七は詩、卷八は啓、書、辨、解、文、序、跋。卷九は銘、讚、問對、墓誌。卷十は論、說、記、記事等にて凡そ數百編あり。延享三年丙寅〔二四〇六〕門人滕野山の蹟、同五年人見求の跋等あり。

◉野沂は脩南と字し桃源と號し、或は括囊と稱す。幼より穎悟にて苦學幾年途に經史に通じ、子弟を敎ふるもの多し。享保十六年辛亥〔二三九一〕歿す。

たうけんづ

刀劍圖　（木版）五帖　多賀　常政

伊勢太神宮、鶴岡八幡宮等の諸寶劍及び義家、義經其他歷諸名家の名刀を模寫したるもの。多くは伊勢貞丈の原本に基きて、明和八年辛卯〔二四三一〕に模寫せり。帝國圖書館に貴重品として藏す。

◉多賀常政のことは「雜記問答」の下にあり。

たうけんづ

刀劍圖　（木版）二軸　榊原　長俊

諸家の古刀劍を一々模寫して、其の製作等を說明したるものなり。

◉榊原長俊の傳は「駿河國志」の下にあり。

たうけんづかう

刀劍圖考　一卷　栗原　信充

古人の刀劍を圖して其の寸尺製作の事等を記したるものなり。卷末に刀劍の名義を釋して附す。天保十四年癸卯〔二五〇三〕出版す。

◉栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

たうけんぶようろん

刀劍武用論　一卷　川部　正秀

刀劍製造の事を論述したるもの。上田丹司の水心子に與ふる手簡一通、川部正秀の上田丹司に贈れる書狀二通を錄し、武廣公長の附言を記したり。皆刀劍製造に關する論說なり。文化八年辛未〔二四七一〕武廣公長の跋、同九年井上淸章の序あり。

◉川部正秀は出羽山形の劍冶にして、鎌倉長船の兩傳を得て、刀劍鍛錬の術を復古し、作るところに名作多し。從て業を受くるもの多かりき。光格天皇の文化六年己巳〔二四六九〕歿す享年未だ詳ならず。

たうけんべんろん

刀劍辨論　二卷　臥遊軒主人

川部正秀（水心子）の著したる「刀劍辨疑」「刀劍實用論」の二書を辨駁したるものなり。仁孝天皇の弘化四年丁未〔二五〇七〕の自序、孝明天皇の嘉永元年戊申〔二五〇八〕江木戩の序あり、同四年出版す。著者臥遊軒主人は別に「隱岐の白波」一卷を著せり。

だうけんはふしゑいさう

道堅法師詠草　（木版）一卷　僧　道堅

詠三十首、詠百首等の和歌、凡て三百餘種を揭ぐ。永正十年癸酉〔二一七三〕の奥書あり。「續群書類從」卷四百四十七、和歌部第八十二にあり。

◉道堅のことは「道堅法師自歌合」の下にあり。

だうけんはふしひやくしゆ

道堅法師百首　（木版）一卷　僧　道堅

此の書また著者の詠歌百首を撰集したるものなり。春二十首音羽川の題より末松山に至り、夏十首大井川より松浦山に至り、秋二十首泊瀨山より、阿武隈川に至り、戀二十首伏見里より名所に至り、雜二十首芳野川より御津濱に至る。「續群書類從」卷三百九十七、和歌部第三十二にあり。

◉道堅のことは「道堅法師自歌合」の下にあり。

だうけんはふしみづからのうたあはせ

道堅法師自歌合　一卷　僧　道堅

初春待花、山路尋花以下著者の自歌合二十五番五十首を集めたり。證議は凡河內俊恒にして、其の明應六年丁巳〔二一五七〕十二月の奥詞を載せたり。「群書類從」卷二百二十一、和歌部第七十六に收めらる。「續群書類從」卷四百十九、和歌部第五十四にも入れたり。

◉道堅は本書の外に、道堅法師詠草、道堅法師百首等の著あり。

たうけんもんだふ

刀劍問答　一卷　伊勢　貞丈

刀劍故實の間に答へたる書なり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕の自序あり、同十五年刊本とす。
◉伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

たうこうもうとてうしふ

唐紅毛渡鳥集 （寫本）一巻 比野勘六

支那其他の諸國より渡來せる鳥類の飼養法を記したるものにて、享和二年壬戌〔二四六二〕の作なり。
◉比野勘六の傳は「鳥博士續編」の下にあり。

たうごはう

唐後方 七十七巻 桑原璋

此の書は唐以後諸風症の治方を集錄したるものなり。別に一巻の目錄を附し、都合七十八册に版刻せり。年代詳ならず。著者桑原璋は一に隆と稱す。詳傳は知りがたし。

たうごべんよう

唐語便用 六巻 岡島璞

內には「唐話便用」と題して、談話上普通必要の言詞を擧げて一々唐音を附し、和訓を註したるもの。卷一には二字並に四字等の詞を擧げ、卷二には三字並に五字、卷三には六字と七字と相連の話、卷四には初相見說話、卷五には諸般賀人說話、卷六には與僧家相會說話を掲げ、長話の詞には更に俗譯を註したり。享保十年乙巳〔二三八五〕僧大潮の序あり、同二十年出版す。
◉岡島璞の傳は「字海便覽」の下にあり。

だうさいきゝがき

道齋聞書 （寫本）一巻 松永良明

著者の日記にして、井上主計頭が、往年駿府に使番たりし時家康の談訓を承りし事、本多加信が物語等罪事雜記を記したるもの。末記によれば著者が大久保次郎左衞門の所望によりて寫し與へたる趣なり。今見る所は明治九年內務省の寫本にかゝる。本書或は「道齋記」また「井上主計頭覺書」として傳ふるものあり。
◉松永良明は初め左門と稱し、後薙髮して道齋と改む。

だうさいずゐひつ

道齋隨筆 三巻 田中和

漢字に就て讀法正誤、句讀點法、批法鉤法、四聲點發、反切正訛、二合字助字、助字本義廣說、古今字通、偏旁通用、重語、五正字、五俗字、倒句例、反語例等の事を記したる隨筆なり。道齋は著者の號なり。寶曆五年乙亥〔二四一五〕金田宏の選輯上梓する所。
◉田中和は阿波の人にして、或は中村氏を稱す。字を文平といひ、道齋と號し、京都に出でて講說す。著書は本書の外に、道齋先生尺牘承諭編、道齋奇子、尺牘稱謂辨、續稱謂辨、弁尺牘紀要、滄溟尺牘辨疑、印字選、邇言考、唐文式、夜話集、文章孤白等あり

たうざはらひ

當座拂 一册 千山

俳句の集にて、元祿十六年癸未〔二三六三〕京都にて出版したるものなり。
◉千山のことは、「花の雲」の下にあり。

だうさんやうじやうしよ

道三養生書 （寫本）一巻 曲直瀨道三

食を愼みて脾を養ひ、婬を愼みて腎を養ふべき事を說く。天正十四年丙戌〔二二四六〕六月、村上次郎右衞門尉に進上したるものなり。明和四年丁亥〔二四二七〕十二月十四日、伊勢貞丈の奧書、寬政二年庚戌〔二四五〇〕藤原の奧書等あり。
◉曲直瀨道三は「醫學天正記」の下にあり。

たうじしよかくわんゐしようしんしだい

當時諸家官位昇進次第 （寫本）一巻 壺井義知

諸家一定の官位分限等を記したるもの。奧書に「初學の時、未だ近世諸家昇進の次第を知らず、葉室賴重卿園基勝より記し賜はる書なり。寶永五年〔二三六八〕十二月五日、頤安記之」とあり。
◉壺井義知の傳は「官職浮說或問」の下にあり。

たうしせんいかう

唐詩選夷考 七巻 平賀晋民

唐詩選を註解したるもの。「唐詩選訓解」、「唐詩選句解」等の說の是非を辨じ、折衷して能く其の正路を示せりといふ。天明八年戊申〔二四四八〕藤本敬、寬政元年己酉〔二四四九〕井潛等の序あり。
◉平賀晋民は安藝の儒者にして房父と字し、惣右衞門と稱し、中南と號す。周易洗心解、周官集義、周官名物考、周官義疏刪、禮記纂義、尙書梅本辨說等の著書あり。

たうしせんゑほん

唐詩選繪本 十五巻 橘道一

此の書もまた唐詩選の全部を和解し、且各首繪畫を以て其の景狀を寫したるものなり。光格天皇の天明八年戊申〔二四四八〕の自序あり。著者橘道一は石峯と號す。詳傳は得がたし。

たうしせんかうしやく

唐詩選講釋 七巻 千葉玄之

明李于鱗の編選にかゝる「唐詩選」の全部を、假名文にて講釋したるものなり。文化十年癸酉〔二四七三〕書肆嵩山房小林高英の序あり。
◉千葉玄之の傳記は「芸閣文集」の下にあり。

たうしせんこくじかい

唐詩選國字解 七巻 服部元喬

唐詩選の中一百二十八家の作、四百六十五首を擇び註解したるもの。門人林元圭の筆錄したるところなり。寬政三年辛亥〔二四五一〕書肆嵩山房小林高英の序あり。
◉服部元喬の傳は「大東世語」の下にあり。

たうしせんごごんぜつく

繪本唐詩選五言絶句 二巻 葛飾爲一

唐詩選中の、五言絶句を抄出して、各、景狀を繪圖したるものなり明治十二年己卯〔二五三九〕出版す
◉葛飾爲一の傳記は「士農工商」の下にあり。

たうしせんよし

唐詩選餘師 八巻 小林高英

唐詩選の全部を一句每に註解したるものなり。餘師の名は例の「經典餘師」に倣へるなり。今見るところは、明治七年甲戌〔二五三四〕の版刻にかゝる。
◉小林高英は書肆嵩山房の主人なり。別に「唐詩選和訓」の編あり。

たうしせんわくん

唐詩選和訓 四巻 小林高英

唐詩選の全部に和訓を施したるものなり。寬政二年庚戌〔二四五〇〕書肆嵩山房の自序あり。著者小林高英は別に「唐詩選餘師」の著あり。

たうじちんせつえうひろく

當時珍說要祕錄 （寫本）二巻

將軍德川家重の時代に於ける武家諸家の事績を雜記したるものなり。もと十卷のものなりしを、今二卷に合卷し、小柴研齋の「見聞雜記」第三十一、三十二の二册に收めたり。

たうじないぐうねんちうぎやうじ

當時內宮年中行事 （寫本）一巻

元文四年己未〔二三九九〕內宮年中行事の次第を記したるもの。同年四月命に因りて、太神宮禰宜等が奏進したる所なり。

だうじやうくわんげん

堂上管絃 （寫本）一巻 德川齊修

文政五年壬午〔二四八二〕三月一日、文恭廟左大臣、愼德廟內大臣に任ぜられたるを以て、其の翌日柳營に於て大饗を行へり。本書は當日の記事なり。
◉德川齊修は水戶侯治紀の長子にして幼名を榮之進といひ、字を子誠といふ。寬政五年江戶小石川邸に生れ、十一歲の時立て世孫となる。文化七年元服を加へ、左衞門督に任じ、累官して、同十一年從三位權中將に遷り同十三年封を襲きて參議となり、文政八年乙酉〔二四八五〕權中納言となる。每に治民經濟の法を考へ、博覽强記にして、詞賦書畫等に巧なりき。同十二年十月薨ず、年三十三、私謚して哀公といふ。

だうじやうこじつ

堂上故實 （寫本）一巻

卷首「右大臣冬經公江御伺御返答」と記して、七夕八朔白帷子用之事、熨斗目小袖之事付直垂下着之事、一ツ襟、二ツ襟之事、重陽藍染之事等以下の諸故實を說明したるものなり。

だうじやうゑことば

道成寺繪詞 （寫本）一巻

俗傳安鎭清姬の說話なり。卷尾闕文し、中間の繪は之れを省けり。「續群書類從」八百二十八、釋家部第百〇五に收めたり。

だうじやうえんぎ

道成寺緣起 一巻

安鎭清姬の古事を以て有名なる道成寺の古緣起なり。詞は土佐廣周の手に成れりと傳ふ。應永頃のものなり。

だうじやうじかう

道成寺考 （寫本）一巻 屋代弘賢

道成寺に關する諸說の異同を辨じて考證したるも

の。法華驗記、今昔物語、元亨釋書、道成寺鐘銘、南紀名勝略志、熊野遊記、道成寺緣起、安鎭淸姬略物語、笈埃隨筆、中山傳信錄等を引證せり。近年「溫知叢書」に收めて發售せり。

⊙屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

だうじやうじのかねわかいりやくえんぎ

道成寺鐘和解略緣起　一卷

紀伊國日高郡矢田庄なる道成寺は、文武帝の敕願所にて、鐘は南朝後村上帝の正平年中改鑄し給ひたるを、後南北朝合戰の時、取りて兵器とし、治平の後、天正年中、洛陽の民地に採得し、妙滿寺に納附したりといふ次第を記述す。別に原文あるを和解したるもの。寶曆九年己卯〔二四一九〕の版なり。

だうじやうぶんげんちやう

堂上分限帳　（寫本）一卷

法皇御所一萬百七十三石七合、新院御所五千石、禁裏一萬九千八百九十六石五斗四升五合等の分限記也

だうしやぜんじごろく

道者禪師語錄　一卷　僧　道者

南山道者禪師の示衆、答問、偈頌、鐘銘、題讚、書問、附錄等を輯錄したるもの。貞享三年丙寅〔二三四六〕獨庵叟玄光和南の序、同年松浦鎭信の序、寶曆三年癸酉〔二四一三〕南山義北の跋等あり。侍者慧斑、禪貞等の編するところなり。

だうじよしんわうごにふだんき

道助親王御入壇記　（寫本）一卷　尊性法親王

後鳥羽天皇の第二皇子道助親王が建曆二年壬申〔一八七二〕十二月六日、仁和寺觀音院に於て受戒せられたる次第を筆錄したるものなり。「續群書類從」卷七百四十八、釋家部第三十三に「尊性親王御入壇記」として收めたるものは、建曆元年四月四日の灌頂記なり。

⊙尊性法親王は「尊性親王御入壇記」の下に傳す。

だうじよはふしんわうけごじつしゆわか

道助法親王家五十首和歌　一卷

作者は道助法親王、右大將公經、藤原定家、同雅經、同家隆等二十二人。歌題は春十二、夏七、秋十二、冬七、戀六、雜六ありて、總計二百十五首を集む。建保六年戊寅〔一八七八〕の詠あり。「群書類從」卷百七十七、和歌部第三十二に收めらる。

たうじれつこうくわあふしふ

當時列侯花押集　（寫本）八卷

尾張、紀伊、水戶、越前、保科、久松、松平、以下當時列侯の花押を輯集したるもの。各家の居城石高、姓名、系譜等を記す。享保十七年壬子〔二三九二〕の作也。

だうじんかう

道神考　（寫本）一卷　秋本　安民

導祖神の事を考證したるもの、前漢書以下數多の古書に徵して詳に論ぜり。

たうすゐけつ

蹈水訣　一卷　小堀　常春

游泳術を記したるものにして凡そ三十一箇條あり。寶曆六年丙子〔二四一六〕の自序、秋山儀の序、服部宣雄の後序あり。同八年出版す。

⊙小堀常春は長順と稱す。肥後の人にして同藩の茶博士なり。父を村岡伊大夫といふ。伊大夫夙に水練の技に長じ、君侯の命を受けて多くの門徒を敎へ來りしが、其歿後、常春其の術を究め、父の技を傳へむために本書を著せりといふ。

たうせいあなさがし

當世穴さがし　（寫本）五卷　穎齋主人

滑稽一口話を錄したるもの。豆男夢占の吉左右、三味せんの流行等より、筒屋の夜話、萬度御はらひの託宣等に至る、千條あり。明和六年己丑〔二四二九〕の作なり。

⊙穎齋主人の本名詳ならざれども別に「後編穴さがし」の著あり。

たうせいかいさんき

當世改算記　一册　金子　昌良

數目八算見一より、凡そ珠算術に係るもの一切を擧ぐ。而して後器算術、天元術及び點竄術に至るまで、算學一と通りを記述したる獨學書なり。書中累乘算顆術の如きは、一の奇術と謂ふべし。弘化四年丁未〔二五〇七〕出版せらる。

⊙金子昌良は左右平と稱す。菊池長良の門人なり。後に本書を增補して「增補當世改算記」を成せり。

たうせいしよかひやくにんいつしゆ

當世諸家百人一首　（寫本）八卷　馬　文耕

當代諸家百人の歌を撰び小倉百首に擬して、天智天皇の御歌の所に大御所吉宗の歌を、持統天皇の御歌の所に證明院尼公の歌を、人丸の歌の所に水戶光圀の歌をといふ如く配當し、一首毎に詳解せり。寶曆八年戊寅〔二四一八〕の夏の自序あり。八卷二册に寫傳す。

⊙馬文耕の傳記は「近世江都著聞集」の下にあり。

たうせいちゑかゞみ

當世智惠鑑　五卷　德　悔子

廻國那鄙の枕、善惡の報應等の題にて綴りたる小說的談話なり。正德二年壬辰〔二三七二〕の自序を附し、同年出版す。

たうせいぢんこふき

當世塵劫記　一卷　會田　安明

算題を兒童の遊戲、其の外近易なる事物に寄せて問を設け、且つ答術を付したる書なり。無算者より之を見れば、甚だ卑近の珠算術の如きも、卷中皆是れ約術以上の問題なれば、點竄術に通ぜざる者は、本書の眞價を知る能はざるべし。算家に於ては、頗る興味あるものとす。天明五年乙巳〔二四四五〕出版せり。

⊙會田安明の傳は「算法古今通覽」の條に詳なり。

たうせいちんせつえうひろく

當世珍說要祕錄　（寫本）二卷

寶曆年間德川幕營中の雜事、諸司及び部下の雜說を集錄したるもの。箇條頗多し。「武家祕錄」といふ書と大同少異なり。

たうせいとらのまき

當世虎の卷　一卷　田螺　金魚

天明の頃新吉原松葉屋の遊女三代目瀨川といへるに烏山檢校といへるが懸想し辛うして根引せしといへる風聞を種として書き綴り、花街青樓の氣質內情を顯したる洒落本なり。

⊙田螺金魚は江戶の人なり。神田三河町邊の町醫の子なりといふ。天明年代の洒落本小說家を以て知らる。著書は本書の外に、妓者呼子鳥、十八大通百手枕、淫女皮肉論、一事千金等あり。

たうせいへただんぎそうもくろく

當世下手談義總目錄　五卷　山本　好阿

工藤祐經が靈芝居へ言傳せし事、八王子の臍翁座敷談義の事、惣七安賣の引札せし事、娛足齋園茗山栗の亡魂に出逢ふ事、足屋の道千賣卜に妙を得し事、鵜殿退卜徒然草講談の事、都路無字大夫江の島參詣の事、以上を本書講義の總目錄となす。寶曆二年壬申〔二四一二〕の出版。

⊙山本好阿の傳は「續下手談義」の下にあり。

だうせうぐさう

道照愚草　（寫本）一卷　伊勢　貞久

武家儀式その他の諸故實を記したるもの數十條より成れり。「續群書類從」卷六百九十武家部第三十六にあり。

⊙伊勢貞久は因幡守貞城の二男にて、六郎左衞門尉貞順の親なり。伊勢下總守と稱す。始めは六郎左衞門尉と稱し、入道しての號を道照といへり。本書の外に「伊勢貞久武雜記」の著あり。

たうせうせつてきろく

唐小說摘錄　（寫本）三卷

唐一代の小說、尙書、開元、天寶、遺事等を輯錄したるものなり。

たうせんいつけん

唐船一件　（寫本）一卷

唐船漂着、異國船渡來、海岸番所、唐船俵物等に關する書類を集收す。

たうせんおひはらひき

唐船追拂記　（寫本）一卷

「異國船漂流次第」と內題して、享保二年丁酉〔二三七七〕同三年等の漂着異國船の始末に關する記事。

たうせんしさう

稻川詩草　七卷　山梨　治憲

著者稻川の詩集。文政四年辛巳〔二四八一〕松崎復の序、和田正誠の跋あり。袖珍本四册に作らる。

⊙山梨治憲の傳は「駿河國巡村記」の下にあり。

たうそうげんみんへんたいぎしふ

唐宋元明變體僞集　一卷　谷　斗南

名の如く唐宋元明四代の變體詩を收錄したるもの。三言、三五言、三五七言、三七言、四五七言、四六八言、九言、其の他等にて一百餘種あり。文政元年

戊寅（二四七八）九月二十八日の自序、同二年雨森正煥の跋あり。

◉谷斗南は江戸の人、立悳と號し、太公と稱す。本書の外に「全唐聲律論」三十五卷の著あり。

たうそうしごぎよくせつ

唐宋詩語玉屑　十卷　高木専輔

唐宋詩中より、熟語を抄出し、天文、地理、時令、人事、器用、飲食、服飾、神仙、軍旅、飛禽走獸鱗介、昆蟲。樹木、草花の諸門に分ち、平平、仄仄、若くば平仄、仄平と連聚せり。文政十三年庚寅（二四九〇）江村有儀の序あり。天保十二年（二五〇一）安政三年（二五一六）明治十二年（二五三九）等三版を重ねたり。小本四冊に作る。著者高木専輔は淡路國の人なり。其の詳傳は得がたし。

たうそうしべん

唐宋詩辨　一卷　長谷川松山

著者の詩話なり。唐宋の詩を引證評論せり。自序あれとも年月を記さす。文化十二年乙亥（二四七五）刊本とす。著者長谷川松山は越後尼瀬の人、醫業に從事せり。

たうそうめいかしろんきせう

唐宋名家史論奇鈔　七卷　松崎祐之

唐宋の名家蘇洵、韓愈、杜如晦等凡て三十餘家の史論一百四十餘編を編輯し句點したるもの。或は世變を識するもの、成敗を論するもの、古を援て今を諷するもの、人に託して自ら喩するもの等を撰び、忠良憤懣の心を述し、邪慝僥倖の道を塞ぐの一端に備へたるなり。正德三年癸巳（二三七三）の自序及び伊藤東涯の序あり四冊に作る。

◉松崎祐之の傳は「古押譜」の下にあり。

たうだいき

當代記　（寫本）十卷

永祿十一年戊辰（二二二八）より慶長二十年乙卯（二二七五）に至る德川氏の大略を編年的に記したるもの。卷一は永祿十一年より元龜三年に至り、卷二は元龜四年より天正十年、卷三は天正十一年より同十九年、卷四は文祿元年より慶長五年、卷五は慶長六年より同十年、卷六は同十一年より十二年、卷七は同十三年、卷八は十四年より十五年、卷九は十六年より十八年、卷十は十九年二十年に及べり。「官本當代記」と同物にして、卷數異り從て所載の配當少異あるのみ。

たうだいぶけきんぴろく

當代武家禁祕錄　（寫本）二十卷

卷一天下泰平の事並に當將軍家明君にて渡らせ給ふ事より、卷二十米倉主計頭保教令嗣鍋三郎へ家督相續之儀に付享保二十年乙卯大珍事彼家老始末の事に至る數十項の武家談なり。仁義禮智の四冊に作る。

たうだいわじやうとうせいでん

唐大和上東征傳　一卷　僧　元開

前揭「鑑眞大和上傳記」卽是なり。「群書類從」には今の如く題名し、之れを卷六十九、傳部第六に收めたり。著者の傳記は同書の下にあり。

たうだうえんきよくしふ

當道宴曲集　（寫本）五卷

歌曲の類聚にて卷一に四季七首、卷二に賀及び神祇七首、卷三に戀九首、卷四に雜上付無常十二首、卷五に雜下付釋教十二首を收めたり。各首皆其の作者を記す。

たうだうしふえふろく

當道拾葉錄　（寫本）一卷

山城國宇治郡山科鄕四宮村柳谷山に跡を止めたる絲竹管絃道の祖神天夜の尊の由來緣起を書したるものなり。

だうちうがたひしよ

道中方祕書　（寫本）一卷

道中奉行の職掌に關する雜事を輯錄したるものなり。駄賃並荷物次第、貫目並人足掛之定等より、海道の唱の事、五海道御定人馬並里數合宿の類等に至る百八十五條を收めたり。

だうちうき

道中記　一卷

江戸日本橋を起點として、東海道、中仙道の各驛の里程道筋その他の雜事を記したる横本小冊子なり

だうちうどめがき

道中留書　（寫本）八卷

江戸時代に於ける諸國道中驛路の規定等を記したるもの。駄賃並に荷物の次第、貫目並に人足掛の定等より、長崎奉行其外御用旅行御定の外、相對雇並に諸向荷物貫目改增之分其の外諸家早飛脚等之人馬賃錢請取方駄賃帳持參無之もの改所其の外等にて取計の義に付品川宿外三箇宿請取證文といふ項に至る一百六十四條より成れり。

だうちうひざくりげ

道中膝栗毛　十五卷　十返舍一九

滑稽小說「膝栗毛」に續いて、彌次郎兵衞。北八といふ兩滑稽家が奧羽に旅行して到るところにあらゆる滑稽俳優を演じ、人をして抱腹絕倒すべきやう物したり。蓋し滑稽小說の随一にして一九著作の傑物なり。初編、二編、三編、四編、五編に分ち、各三卷あり、東海道旅行の「膝栗毛」に對し、本書は「續道中膝栗毛」また「道中膝栗毛續編」といふ。弘化二年乙巳（二五〇五）の稿を、同五年出版す。近年發行の「帝國文庫」の中にも收めたり。

◉十返舍一九は有名の戲作者なり。安永四年乙未（二四三五）に生れ、俗稱は重田貞一といひ、醉螺とも號す。父の職を襲きて駿府町尹の屬吏となりしが、磊落酒を好み、吏務を屑とせず、職を弟に讓りて大阪に遊び、又江戸に遊び、滑稽小說家を以て鳴る。天保二年辛卯（二四九一）八月七日病歿す、行年五十七。著書頗る多し。下に列擧すべし、素見數の子、同後編夜半冷酒、敎訓角力取年、娼客竅學門、同後編青樓女庭訓、野夏玉子、起承轉合、同後編遊冶郎、商內神、狐穴道入、同後編青樓日照雨、青樓夜話色講釋、吉原談語、同後編夜廓行燈、惠比夏之梅、質往來、廓の意氣地、旅恥書捨一通、撈會入雲鳥、戀油揚樽、御誂向鼠嫁入、身延山詣の仇討、敵討北方の世界、年中行狀記、復讐國詞兵庫音頭、替錢通用諺讀錄、忠臣星月夜、諸金太郎月、怪談奉始、管狐燭藥、怪談家內奇狐狸、玉櫛笥二人奴、操染心雛形、化物小遣帳、跡着夜袋、風光花の桂男、浮世錢箱、閻魔獄界、初日彩七福卽生、信有奇怪會、心學時計草、諺東插袋、出着鑑野邊若草、御膳淺草話、怜悧怪異話、拐師直開帳、朧月安西堤、怪物餘論、油斷敵藥功能書、人唯樽の底拔、擲打變術卷、假名文章女忠臣、初登山手習狀、御德川黃金草鞋、千里一刎勇の天邊、太平記無禮講中、附祭跡新書、雜談紙府籠、落咄叶福助、今は昔狐夜噺、和藤內、滑稽しつこなし、花笠男者命、家內安全鼠山入、夜眼道目笠之內、戀仇被形容、春風柳下蔭、落咄風の神、滑稽しつこなし後編、時花灑拔非、常盤國風土記、化物見越松、垣覗木草盲目、忠臣店謂帖、花盤大安賢、甲州矢倉澤仇討、摩嗟綠の林、化物太平記、化物仇討、一陽來復鼠嫁入、雲土道中記、面皮千枚ばり、三十石夜船の始、大矢數意恨仇討、善惡兩夏藥、鼓草花の仇討、腹內養生論、裏面心の拔路次、木曾杜野狐復讐、諏訪湖狐怪談、大福茶呑噺、通俗巫山の夢、兩評娶入鈔、桑名德藏廻船噺、花軍梅の先陣、福神江嶋詣、竹本義太夫武士、鳳凰染三桐山、宮利生仇討、一陽來復帳、鈎惠比須水揚帳、臍煎茶舌噺、地神五代記、十返舍戲作種本、三ッ浦難波復讐、八百八後家、出儲器綠起、鳩讚試禮者笑宴、風流婦仇討、正眞卽功紙、蓮の若葉敵討、分福茶質問、殿下茶屋聚仇討、安部川敵討、取得貨德川、前度往昔軍、尻棒御要慎、三輔符爲通次第、善惡角力勝負附、穴賢狐緣組、物見松御休所、怪物徵初夢、河童尻子玉、開運大黑傘、戀仇討狐助太刀、夏裕男男達縞、明眼千人盲仙術、玄猪の節、色外題空黃表紙、初寶鬼笑、玄德武勇傳、增補大江山物語、大鯨豐年貢、見巡開帳はなし、悴益照降町、平川仇討實記、幽嶽村仇討、幽野太郎物語、浮氣草紙、紙治小春大雜言、伊呂波短歌、開た風耳學問、大峯山陀羅助始、雛祭妹脊仇討、中昔戀道種、嗚呼忍舗咄、大悲大慈利劔之助太刀、彥山靈驗英獄仇討噺、開帳延喜繁華、當夏物語、大江山酒顚童子談、男達三箇大鼓、勇略女敎訓、緣はいなもの味な物好、屈身一九著、一九甚作關七島、的中地本問屋、今昔矢口の仇浪、東男連理の緒、色外題浮は氣表紙、三峰山御猿助太刀、仇討金剛杖、座頭の宮山來、三世相女手鑑、美男狸金箔、金の草鞋十八編、稚聚忠臣藏、商人金采配、今此奈綠居にもあろか、屋津天御覽、忠臣陶物藏、春霞女廻國、化物見世開、大男東下旅の道草、滑稽當座帳、花盤部仇討、忠孝二筋道、貧福蜻蛉返、東川仇討實記、敵討初嵐桐一葉、人の心兩面摺、通人衆言、新居開覽附組由來、敵討戀友猿、滑稽旅からす二編、心學苧蛸汁、忠信娃々餅、法の聟輪廻の仇討、同後編、馬鹿附藥、金寶身體直、銘は正宗刀の珍說、道中膝栗毛、忠臣一代八卦、義經腰越松、成程根尭一九が作、道中膝栗毛續編、黃金花咲陸奧雙紙、滑稽田舍諺、結神米松山、位山學之橫綱、天下茶屋敵討、三國太郎再來傳、伊勢音頭戀の手跡、陽尼崎孫嫡子由來、美濃近江雜物語、義は光る夜功の珠、唐土茶番狂言の趣原、曲輪音操松、凧之森狐之仇討、御嶽山詣仇討、妙義嶽應女文章、高野師直實傳小夜衣色摺新形染、木曾秋錦旗揚、信州雜食橋由來、玉襷待合噺、新製小人島廻り、紅染關時雨傘、竹生島琵琶湖水、敵討高野楓、力瑳

一對男、六阿彌陀詣、淸談博多小女郎譚、妙見宮大內鏡、俗言種狐拳、初時雨矢口渉、雲明常磐松、多羅福注文帳、復仇奥州瓶割阪、露時雨驚籠の渉、弓削道譚、駿州阿部川仇討話、慾の川乘合噺、旅硯伊賀越日記、はえぬき力男、男結花の緣起、昔語玉菊草紙、復仇阿部の花街、蒲原入道獨魂、菅原流淸書雙紙、玉柏二人男、昔々赤地法印、阪東七英士、敵討猿喬場柏餅、面白黑心學草紙、人欲見通卜筮、善惡兩道步の浮橋、魁伊豆の旗揚、忠臣跡のまつり、神國倭國の功、梅川忠兵衞戀の初旅、梅蕊筑紫神垣、開運菊一文字、敵討越後獅子、御覽戀は曲者、復讐奇話天の橋立落咄機嫌上戶、木下陰狹間合戰、貞操の柳、奴五斗平名撰瀧水、毛屋村孝行男、武者順禮捨松噺、海陸西國往來、猪熊入道物語、石山布留仇討、駿州鷺蛇五唐衣、二艘羽有馬の藤、餅菓子卽席手製集、文字の知戲、吉原年中行事、大蛇物語、風光る白旗榮、仇討上州絹、紫榮海草土產、通俗貨油那、同後編、福の神致の山入、見通し占、昔男辯物語、敵討矢指ヶ浦、於臍加福茶番、婦人手紙の文言、風光る白旗榮後編、滑稽二日醉、きうかん帖、敵討先程の御笑草、同のりの花合邦辻、同岸柳島物語、同浪花の梅、同浪速男、同磐手杜、同鷺娘の出來、同女川文章、同葛の松原、同阿部曲輪、同進獄怪談、同進の若葉、同西海硯、同蝦蟆の妙藥、同夜居應、同桔梗ヶ原、同高野楓、同丹州手に打栗、同余世波與佳津多、諸國請狀指、手造釀法、附合案文、仙女香七變化等、凡、三百十一種あり。

だうちうへかうさつ

道中へ高札　（本寫）一册

年度不詳の道中高札にて、幕府評定所より引繼きて、內閣文庫に保存せり。

だうちやうとせつ

道聽途說　（本寫）二册　大鄕　良則

著者の見聞隨筆なり。乙酉丙戌の字を內題上に冠せり、同二年間の漫書なるべし。中を二十四編に分ち月日の順に記せり。

◉大鄕良則の傳は「釋典私儀」の下にあり。

だうぢやうはふしのでん

道場法師傳　一卷

法師の奇跡を略記したるもの。「群書類從」卷六十九、傳部第六に收めらる。

だうちようじしようめい

道澄寺鐘銘　一帖　小野　道風

山城國道澄寺の鐘銘にして、著者の階書したるものを、浪花の三宅正誼の模寫したるを刻したるものなり。此の鐘、今は移りて大和國宇治郡榮山寺にありといふ。

◉小野道風の傳は「安幾破起帖」の下に出づ。

だうていいつとうし

道程一統志　（本寫）十三卷

本邦諸國の、江戶及び近國所々への道程を記したるものなり。著者年代共に詳ならず。

たうどういひつ

桃洞遺筆　九卷　小原　桃洞

和漢群書中より、本草に關する考を抄錄し、且つ自ら山川を跋涉して目擊したるものを圖錄せり。著者の遺稿を小原蘭峽の編輯して、天保四年癸巳〔二四九三〕出版したるものなり。

◉小原桃洞の事は「紀州產物志」の下にあり。

だうとうせうでん

道統小傳　二卷　武田　信成

支那三皇五帝以下の道統を序したるもの。伏羲、神農、黃帝、帝堯、帝舜、禹王、湯王、文王、武王、柳下惠、周公、孔子、子思、孟子、周子及び程顥、楊時、羅仲素、李延仲朱熹、眞德秀、許衡、薛文淸、程顥、謝顯道、胡康侯、胡仁仲等の略傳を揭ぐ。寬永二十一年甲申〔二三〇四〕冬十月の自跋、同二十一年林道春の序あり。其の序中に、「原夫聖賢事蹟、則五帝本於易大傳、三代君臣據於詩書禮春秋等、仲尼及弟子考于論孟太史公之記、周子程子以下、取諸宋史言行錄、伊洛淵源錄、許衡薛瑄以下取諸元史大明理學之書、皆是事實也。今武田信成少年、有好事之志、勞搜索拾掇綴可以嘉焉、若尙由總所本據、乃可乎。乃父法印道安袖其稿來請余副詞不已」云々といふ。而して、今東京高等師範學校に傳ふる所の寫本は、右の武田信成の自筆本なりと云ふ。

◉武田信成は名を靜、字を杏仙といひ、長春院と稱し、綠山と號す、信成は一の字なり、江戶に醫を以て業とせり。寶永二年乙酉〔二三六五〕七月二十六日歿す、品川東海寺中少林院に葬れり。

たうどかうていき

唐土行程記　四卷　淸田　絅

朝鮮金羅道の人、崔溥（號錦南）が自家唐土漂流の始末を記したる「漂海錄」に基きて、其の唐土の道路、山川、土產、人物、風俗等を譯出したるものなり。明和六年己丑〔二四二九〕江村綬、柚木太玄の序、同年伊藤選訓の跋あり。

◉淸田絅の傳は「孔雀樓集」の下にあり。

たうどきんもうづゐ

唐土訓蒙圖彙　十四卷　平住　專庵

天文、地理、宮室、人物、人事、器用、草木、禽獸、魚介蟲の九門に分ちて、唐土の事實を插畫假名書にしたるもの。享保四年己亥〔二三七九〕の自序同戊亥玉非直道の序あり。十四卷三册に作る。畫は橘村有稅子（別號後素軒）の手に成る。

◉平住專庵の傳は「袖珍本草雋」の下にあり。

だうとくきやうくわいげん

道德經會元　三卷　三家　元珉

老子道德經の註解なり。其の師婁庭氏の說を傳へ、自家の說を交へて成せるものなり。寬文二年壬寅〔二三二二〕二月の自序及び凡例同五年の自跋、六年貞確子の跋等あり。著者三家元珉は伊勢の儒者にして書陽と號せり。

たうどていわうりやくき

唐土帝王略記　三卷　小里　景儔

帝堯陶唐氏より、淸世祖章皇帝に至るまでの事實を漢文にて歷敍したるものなり。仁孝天皇の天保十五年甲辰〔二五〇四〕菊池桐孫の序、東條耕の序等あり。

たうどひじのうみ

唐土祕事の海　二卷　多賀谷環中仙

唐土に行はるゝ手品數種の方法を圖示したるもの。例せば、紙にて作りたる魚を動かす事、天人日かれの傳授、五色の砂の曲、水上管の傳授以下十數種あり。享保十八年癸丑〔二三九三〕出版す。

◉多賀谷環中仙のことは「（袖珍御伽）璣訓蒙鑑草」の下にあり。

たうどめいしようづゑ

唐土名勝圖繪　六卷　岡田　尙友

皇朝諸國名勝圖繪に倣ひて、唐土の名勝を編成したりといふ。享和四年甲子〔二四六四〕菅川恕の序、文化二年乙丑〔二四六五〕奧田元繼の序あり、同三年刊本とす。

◉岡田尙友は大阪の畫工なり。字を子德、號を玉山といふ。少にして畫を月岡雪鼎に學び、人物、山水、花鳥等に巧妙なり。本書の外に「太閤記圖」を作りて最も人に愛覽せらる。文化九年壬申〔二四七二〕七十六歲にて歿す。

たうどれきだいしうぐんえんかくちづ

唐土歷代州郡沿革地圖　一折　長久保玄珠

唐土沿革圖にて、大淸國海陸道程圖、禹貢九州、周職方氏、春秋列國、戰國七雄、秦三十六郡、西漢州郡、東漢州郡、三國州郡、兩晉南北朝、唐十五道、大明一統志、亞細亞小東洋等の十三圖なり。最も精細を作せり。光格天皇の寬政元年己酉〔二四四九〕水戶立原萬の序あり。

◉長久保玄珠の傳は「長崎紀行」の下にあり。

だうにおうだうわぞくへん

道二翁道話續編　八卷　中澤　義道

三敎一致の說に基ける說話を輯錄したるものなり、年代詳ならず。

◉中澤義道は通稱を龜屋久兵衞といひ、剃髮して道二と號せり。京師の人手島堵庵の門に入りて心學を學び、後江戶に來り、參前舍を建てゝ家說を主張せり。享保三年戊戌〔二三七八〕七十九歲にて歿せり。

たうはくきぶん

唐舶記聞　（本寫）一卷

長崎に來舶の唐人及び和蘭陀人等の物語を同時役人より上書したるものゝ寫なるべし。船乘の法、和蘭陀世界圖、蝦夷松前へ渡る北京筋織物等の事、鯨の事、人參の事、其の他凡て數十條あり。

たうはくまごしちへうかいばなし

唐泊孫七漂海話　（本寫）一卷

桃園天皇の寶曆十二年壬午〔二四二二〕十月六日、筑前國志摩郡唐泊浦なる伊勢丸の船頭、十左衞門の水夫都合二十人、鄕里を出でて諸所の荷物を運漕し居たりしが、後櫻町天皇の明和元年甲申〔二四二四〕途に諸外國に漂流し、船員十九人まで沒し、孫七一人明和七年庚寅〔二四三〇〕に至りて、阿蘭陀より送還せられたる事あり。本書は其の始末を記したるものなり。

たうばのりかたほい

唐馬乘方補遺　（寫本）一卷

唐馬乘方を詳述補遺したるもの。成島仙藏峯雄補寫の奥書に、「舊本享保中藏于御庫、其書頗脫文、寛政六年甲寅〔二四五四〕正月、平賀式部少輔、自長崎携其稿、奉台命以補舊本之遺漏云」とあり、其の沿革を知るべし。『弓馬雜纂』の中にあり、

たうばんづかん

刀盤圖鑑　（寫本）一卷

卷首に刀盤賞鑑口訣を揭げたり。著者年代共に詳ならず。

たうふくかう

唐服考　（寫本）一卷　成島　道筑

唐六典大明會典等より、服飾に關する記事を抄錄して、大邦服飾の考據に供したるものなり。

◉成島道筑の傳は「春の御ふれ」の下にあり。

たうぶしえふしふ

當武枝葉集　（寫本）二十四卷

江戶時代に於ける武家を悉くいろは順に列擧して各家紋領石其他略歷系譜等を擧げたるものあり。井伊掃部頭藤原直興より、京極主膳正源高明に至る凡そ三百人を收む。外に一卷目錄ありて二十五册に寫傳せり、貞享四年丁卯〔二三四七〕の作なり。

たうやがいけんづ

陶治概見圖　（寫本）一軸

彼土宋元間の陶器を研究して、其の製法次第を圖したるものにて、最始より最終に至る二十圖あり。青陵海保皐鶴の序あり。編者を「翼華木翁」とせり。

たうやくべんらん

唐譯便覽　五卷　岡島　璞

我國普通の言語いろは順に唐語を列擧して、各唐音を附し、其下に我通語を註せり。故に詞の長短、事實の相對等に拘はらず從て其體裁自ら「唐語便用」と相違せり。享保十一年丙午〔二三八六〕伊藤東涯序せり。同年刊行す。

◉岡島璞の傳は「字海便覽」の下にあり。

たうやくほんてうきじ

「唐譯本朝紀事　（寫本）一卷　樊　世輔

太平記演義の體に倣ひて記事せり。土佐房襲義經第事、那須與一射扇事、記宗任咏梅花事、滑川事附最明寺夢想云事、記時賴入道宿源左衞門家事、記鹽冶判官遇讒致死事、記大森彦七事、記高景時入城報並景季秀句事等の漢文記なり。寛政六年甲寅〔二四五四〕の自序あり。

◉樊世輔は長崎の譯官司なり。本書は嘗て長崎奉行の命により、日を期して編纂したるものなりと。今其の詳傳を得ず。

たうよういちらん

當用一覽　（寫本）四卷

德川氏の官職敍任の事評定所式目年中行事、五節句御禮、着座御免の名、支猪の式、家康、秀忠、家光定の服忌令等を輯錄す。

たうようさんぱふ

當用算法　一卷　佐久間　纘

乘除以上世間日用に急なる算法を記載したる獨學書なり。附錄には既に諸算書に出たる同題の別術數件を列記したり。其の書は『算法雜俎』、『算法新書』、『當世塵劫記』、『五明算法』等十餘部に涉りたり。孝明天皇の安政元年甲寅〔二五一四〕出版したるなり。

◉佐久間纘は二郞太郞と稱し、庸軒と號す。奧州三春の藩士にして、渡邊一の門に入り、同門中にて錚錚の聞ありたるものなり。

たうようとめ

當用留　（寫本）五册

幕府評定所より引繼ぎて内閣文庫に保存せるものにして、天保七年丙申〔二四九六〕より。慶應三年丁卯〔二五二七〕に至る。

たうり

桃李　一卷　谷口　蕪村

蕪村几董の連句を集む。安永九年庚子〔二四四〇〕の編なり。近年發行の俳諧文集第十二編「蕪村曉臺全集」の中にも收めたり。

◉谷口蕪村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

たうりうまゑづのまき

當流馬繪圖卷　（寫本）一卷

大坪流馬繪圖の書にして、馭馬の故實を一々圖說せり。「弓馬祕抄」の中に收む。

たうりうまたづなひでんせう

當流馬手綱祕傳抄　（寫本）一卷

卷端に記して、文治年中甲斐國内藤藤五郞信貞といふもの、唐に入りて五百の手綱を傳へたる事あり、其の書中より我朝當世の馬の意、人の機根等に適へるものを記し出せりといへり。『弓馬集書』の中にあり。

たうりうえうごしなん

當流謠語指南　二卷

「謠のかたり抄」として、一曲中にかたりを摘抄したるもの。上卷に「もり久」より、「碇潜」に至る四十三。下卷に「せいたい」より、「鉢の木」に至る四十四章を收めたり、元祿八年乙亥〔二三五五〕榎並甚兵衞の版行したるものなり。

たうりうかごぬけ

當流籠拔　一册　宗　旦

宗旦、木兵、百丸、鬼貫、鐵山の五吟俳諧集なり。延寶比のものなるべし。

◉宗旦のことは「三人蛸」の下にあり。

たうりうきゝがき

當流聞書　（寫本）一卷　多賀　高忠

犬追物に關する一切故實百餘條を詳說したるものなり。文龜二年壬戌〔二一六二〕元信の奥書あり。「右道論」と合して、「弓馬叢集」の中に收む。

◉多賀高忠は武家故實家にて、豐後守と稱す。別著に、犬追物付紙日記、多賀高忠弓之記、八廻之日記、高忠軍陣聞書、遠笠懸、多賀高忠軍書、高忠聞書、高忠聞書雜々、高忠聞書別記、類聚流鏑馬次第多豐等あり。

たうりうさんぱふもくろくかい

當流算法目錄解　（寫本）一卷

關流傳書なる見題目錄中の要部を解きたるものなり。著者及び年代詳ならず。

たうりうしき

當流式　（寫本）二卷

弓馬故實の書にて、一名「京極大草紙」また「佐々木大草紙」といふ。永祿三年庚申〔二二二〇〕八月、和久田藤内右衞門尉の奥書に、高橋豐前守の所藏を寫し取れる由あり。『續群書類從』卷六百八十三上下、武家部第二十九にも收めたり。

たうりうせつようれうりだいぜん

當流節用料理大全　一卷

饗膳の諸式、四季の獻立、調理諸法等を記し、饗膳諸式の由來、鳥類の時季、蔬菜の用法其の他等を頭書したるものなり。正德四年甲午〔二三七四〕出版す。著者は四條家の高島某なりといふ。

たうりうのくでんひきよくきゝがき

當流之口傳祕曲聞書　（寫本）一卷

弓馬故實の書にて、射術の諸式を記す。『弓馬叢集』の中に收む。

たうりうほんぞんべん

當流本尊辨　一卷　僧　日溪

眞宗に安置する立像本尊は、觀經に說ける住立空中の像を模したるよしを辨明したるものなり。

◉日溪の傳は「淨土折衝編」の下にあり。

たうりうようはうくでんしよ

當流鷹方口傳書　（寫本）一卷　小笠原長時

鷹故實の傳書にて、所揭項目五十三箇條あり。

◉小笠原長時の傳記は「元服之次第」の下にあり。

たうりけいじゆつ

（算法）桃李蹊術　（寫本）一卷　松永　良弼

題を桃李子に寄せ、其の術は則ち約術、兩一術、或は一の消息式なる者を設けて、以て其の法を得る所の一種の算題集なり。書名は「桃李言はず、下自ら蹊を成す」の古語に取りしなるべし。本書は關流傳書の一にして別傳目錄中に存す。年代記載なし。

◉松永良弼の傳は「方圓算經」の下にあり。

たうわさんえう

唐話纂要　六卷　岡島　璞

唐土通語の熟字を輯め、並に長短話の連語、諸名詞、歌曲紀事等を揭げ、國字を以て發音を辨說したるもの。享保元年丙申〔二三七六〕林將監、藤原安治、高希樸等の序、白樫仲凱、原武鄉等の跋あり。

◉岡島璞の傳は「字海便覽」の下に出づ。

だゑんおうしうりやくへう

楕圓應周略表　（寫本）一卷　和田　寧

楕圓の切線等諸線を畫きて、互に各線を求め、且つ

之れが略表を記したるもの。之れを詳言すれば、正圓に於ける八線の如き關係を楕圓に施し、且つ之れに屬する他の諸線をも、互に相求めて、之を正矩反矩に分別して、凡そ五十五線を得たり。加之其の表を記し、又用例を示したるものなり。實に古今の一書とす。年代記載なきも、文政年間に成りたるものゝ如し。

◉和田寧の傳は「圓理算法」の下にあり。

だゑんかい

（算法）楕圓解　二卷　豐田　勝義

普通楕圓（圓壔或は圓錐を斜截したる面形を云ふ）及び長立圓等の解を記すと雖も、其の主とする所は、環楕圓に在り。立環を截斷するに其の所に從て其の形を異にす。故に環楕圓、尖楕圓、環偏楕圓等の名稱を下して、解法頗る密なり。天保十三年壬寅〔二五〇二〕出版す。

◉豐田勝義は伊三郎と稱す。藤堂侯の藩士にして、村田恒光の門人なり。本書は勝義が撰と記入したれども、概ね師恒光の手に成りたるものなり。

だゑんしふかい

楕圓集解　（寫本）一卷　內田　五觀

內題には「東瞳先生楕圓集解」と記す。東瞳は恭が前の號なり。天保九年戊戌〔二四九八〕書寫の奧書あり。

◉內田五觀の傳は「對數表精解」の下にあり。

だえんふ

蛇蝘譜　一卷

蛇、蝘蜓のことを詳記したる動物書なり。著者年代共に詳ならず。

たがいへ

誰が家　一册　榎本　其角

本書は著者の俳句集なり。貞享頃の作なるべし。

◉榎本其角の傳記は「句兄弟」の下にあり。

たかうぢいかごしゆわか

尊氏以下五首和歌　（寫本）一卷

足利尊氏、資明、直義、爲秀、季氏、慶秀、師長、以下の、「秋秋陪住吉社壇同詠五首和歌」なり。延武三年丙子〔一九九六〕九月十三日尊氏の判にかゝる。

たかうまれやうのしよ

鷹生樣の書　（寫本）一卷

鷹の生樣及び其の兄弟見分の法等を詳說圖示す。

たかゑづのしよ

鷹繪圖之書　（寫本）一卷　兒玉　玄蕃

鷹に關する諸故實を一々圖說したるものにて、弘治三年丁巳〔二二一七〕の傳書なり。著者兒玉玄蕃は武州の住にして經平と字す。

たかをかう

高尾考　（寫本）三卷

遊女高尾の事項を考說したるものなり。多く古印本を引證せる中、しば〳〵巴人亭文寶の考察あるにより、同人の編輯なるべしとも云へど未だ確かならず。

たかをきかう

高雄紀行　（寫本）一卷　清水谷（シミツタニ）實業

高雄山に紅葉見たる時の和文紀行にして數葉あり。寬仁十一年九月二十日といふ菜の奧書あれど、寬仁は五年二月二日を以て治安と改元あり、治安は四年七月十三日に萬壽と改元あり、故に寬仁の十一年といふは萬壽四年丁卯〔一六八七〕にあたれり。何かの誤なるべし。

◉清水谷實業は左大臣實條の孫にして、初、鳴瀧を稱し、後、正四位下左近衞中將清水谷公榮の嗣を襲ぎ、漸く進みて權大納言に任じ、正二位に敍せらる。性、文學を好み、和歌を善くせり。寶永六年己丑〔二三六九〕年六十二にて薨去す。

たかをくけつ

高雄口決　（寫本）一卷　僧　空海

天長七年庚戌〔一四九〇〕十一月十五日、承曼荼羅の次第法にして、著者の口授を弟子眞濟の筆錄せるところなり。

◉空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下にあり。

たかをさんじんごじえんぎ

高雄山神護寺緣起　（寫本）一卷　賢　忠

諸家の舊記に據りて、同寺の古緣起を記したるものなり。著者賢忠は從三位たり。

たかをさんちうこうき

高雄山中興記　（寫本）一卷

文覺上人が高雄山神護寺を中興したる事績に關する書類を集錄したるものなり。

たかをねんだいき

高尾年代記　一卷　柳亭　種彥

一名を「諸先生高雄考集覽」と云ひ、初代目より十代目までの高雄の事績を考證したるもの。引用書目は三十餘種にわたり、年序を逐うて各其の原文及び原圖を擧げ、自己の考案をも附記したり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕著者の凡例、嘉永二年〔二五〇九〕柳亭種員、文亭梅彥、笠亭仙果等の序あり。

◉柳亭種彥の傳は「修紫田舍源氏」の下にあり。

たかかげきやうのき

隆蔭卿記　（寫本）一册　四條　隆蔭

著者の日記にして、文保二年戊午〔一九七八〕九月五日同六日の後伏見院除服一件の記事なり。著者四條隆蔭は大納言たり。

たかきゝがき

鷹聞書　（寫本）一卷

此の書は鷹故實の聞書にて鷹の由來より、種々の故實等を項書したるものなり。「續群書類從」卷五百四十三、鷹部第三にあり。

たかぎのじつでん

高木廼實傳　十卷　松亭　金水

高木折右衞門之理の事績を綴り成したる戲作小說、畫は葛飾爲斎の筆なり。初輯五卷は嘉永五年壬子〔二五一二〕の著なり。

◉松亭金水の傳は「松亭漫筆」の下にあり。

たかきやうべんぎせう

鷹經辨疑抄　（寫本）一卷　藤原　基春

鷹一切に關する記述なり、鷹を相ることより、飼餋等の事に至る。卷末に「文龜三年癸亥〔二一六三〕七月十日、諫議大夫藤基春」と記し、更に安永七年戊戌〔二四三八〕藤原翠の奧書あり。「續群書類從」卷五百四十一、上中下、鷹部第一にあり。

◉藤原基春は持明院と號す。別著に「鷹十卷之書」あり。

たかくでん

鷹口傳　（寫本）一卷

鷹に關する口傳數十項を記したるものなり。卷末に「康應元年十月二十八日」と記せり。「續群書類從」卷五百四十三、鷹部第三に入る。

たかくらけしやうぞくせう

高倉家裝束抄　（寫本）一卷

高倉家相傳の裝束及び調度の事を記したるもの。應永九年壬午〔二〇六二〕修寫の奧書あり。また元祿十二年己卯〔二三五九〕藤原定基の奧書によるに、原本は內大臣冬信の筆蹟なりと云ふ。

たかくらながつなのき

高倉永綱記　（寫本）一卷　高倉　永綱

裝束の故實を記したるものにて、襪子、小袖、冠等凡て數十項あり。

◉高倉永綱は藤原姓。官に仕へて三位たり。貞治年中の人。著書は本書の外に、七箇重事一卷、選歷裝束折一卷等あり。

たかくらのゐんいつくしまぎやうかうき

高倉院嚴島行幸記　一卷　土御門通親

高倉天皇、治承四年庚子〔一八四〇〕三月嚴島御幸の時の和文記事なり。「群書類從」卷三百二十九、紀行部第三に收めたり。

◉土御門通親は內大臣雅通の子にして、後白河、二條、六條、高倉、安德、後鳥羽、土御門の七朝に歷事し、治承中藏人頭に補し參議に任ぜられ、權中納言、淳和獎學兩院の別當、左衞門督、撿非違使別當、權大納言、後院別當等を歷て、遂に自ら右近衞大將に拜し、また內大臣に任ず。建仁二年壬戌〔一八六二〕十月、五十四歲にて薨す。

たかくらのゐんごげんぶくのき

高倉院御元服記　（寫本）一卷

嘉應三年辛卯〔一八三一〕正月三日、高倉天皇御元服遊ばせらるゝ時の詳細記錄なり。漢文にて記す。永享四年壬子〔二〇九二〕奧書す。「續群書類從」卷二百九十二、公事部第四十五にあり。

たかくらのゐんごそくゐのき

高倉院御卽位記　（寫本）一卷　清原　賴業

仁安三年戊子〔一八二八〕三月二十日御卽位遊ばされたる時の詳細記錄なり。漢文にて記す。「續群書類從」卷二百七十二、公事部第二十五にあり。

◉清原賴業の傳は「大外記賴業記」の下にあり。

たかくらのゐんしようかのき

高倉院昇遐記　一卷　土御門通親

治承五年辛丑(一八四一)正月十四日、高倉院崩御ましませし前後の御模樣及び著者の感懷など多くの詠草を雜へて記したるもの。「群書類從」卷五百十六、雜部第七十一に收めらる。

⊙土御門通親は「高倉院嚴島行幸記」の下に傳す。

たかけいもうしふ

鷹啓蒙集　（寫本）七册　大宮新藏人

鷹故實に關する詳說にて、横綴七册に作れり。別著「大宮流鷹書」と併せ見るべし。

⊙大宮新藏人のことは「類鷹字義」の下にあり。

たかことばしふ

鷹詞集　（寫本）一卷

鷹に關する定語百三十八箇を舉げて、一々解說す。天文七年戊戌(二一九八)七月十六日の奥書に、「右此鷹言集一册、稲津別府上野守門弟子に傳之者也」とあり。

たかことばれんか

鷹詞連歌　（寫本）一卷

鷹故實を連歌し一々小解を加へたるもの。卷端に「二條殿、基房卿、松殿歟」と記せり。作者に就ての事なるべし。

たかさきし

高崎志　（寫本）三卷　川邊　寛

上州高崎の地誌にて、上卷高崎大意より龍廣寺に至り、中卷連雀町より常盤町の北觀音に至り、下卷新町より和田三石に終れり。天明九年己酉(二四四九)主命により編したるものなり。著者川邊寛は上州高崎の人にして、字を子綽といふ。松平輝和に仕へて其の命によりて本書を作りたり。

たかさとし

鷹諭　（寫本）一卷

鷹の故實に關することを歌に詠して、一々小解を加へたるものなり。歌數七十七首あり。

たかさんびやくしゆわか

鷹三百首和歌　一卷

春、夏、秋、冬、戀、雜に部立して鷹に關する歌二百九十三首を集めたるもの。「群書類從」卷三百五十七、鷹部下に、藤原定家と署名のまゝ之れを收め、其の奥書に「右鷹三百首恐非二定家卿作一。蓋後人依託耳。然姑從二世所一稱收レ之」と記せり。

たかしかけえかひ

鷹仕懸餌飼　（寫本）二卷

鷹の仕懸法、餌養法等の故實を詳說したる傳書なり著者編年等詳ならず。

たかじつくわんのしよ

鷹十卷之書　（寫本）十卷　藤原　基春

鷹に關する諸種の故實を記したる書にて、全部十卷に分てるを、三册に寫傳せり。

⊙藤原基春のことは「鷹經辨疑抄」の下にあり。

たかしなしけいづ

高階氏系圖　一卷

天武帝より師直師友等に至る高階氏歷代の系圖なり。「群書類從」卷六十三、系圖部第四に收めらる。

たかしななかあきのき

高階仲章記　（寫本）一卷　高階　仲章

此の書は康和五年癸未(一七六三)八月と同十月との日記なり。塙保己一書寫の奥書あり。著者高階仲章は右兵衛佐なり。

たかすけあそんのき

高輔朝臣記　（寫本）一卷　平　高輔

此の書は著者の日錄にて、正元元年己未(一九一九)の奥書あり。塙保己一の校合本あり。著者平高輔は藏人頭内藏頭たり。

たかすけあそんひやくばんみづからのうたあはせ

隆祐朝臣百番自歌合　一卷　藤原　隆祐

其の名の示せる如く、隆祐朝臣の自歌合を集めたるもの。「群書類從」卷二百二十、和歌部第七十五に收めらる。

⊙藤原隆祐は宮内卿家隆の子にして、從四位下に敍せられ侍從に任ぜらる。夙く和歌に志して當時の歌人と稱せらる。

たかすわなかのづ

高須輪中之圖　（寫本）一鋪

高須は美濃國石津郡にあり、元祿元年戊辰(二三四八)松平攝津守義行が始めて賜りたる地なり。東は尾州海西郡に接し、西は濃州多藝郡に接し、南は勢州、北は濃州安八郡に接す。輪中の村々山川等を圖したるものなり。

たかせがはのさだめ

高瀬川之定　（寫本）一卷

京都高瀬川の二條樋口より伏見番所に至る間數、船舶の數、上下の船賃、所々橋梁の間數等を記したるもの。蓋、徳川氏時代の記なるべし。

たかそくしだい

鷹捉飼次第　（寫本）一卷

鷹を捉ふる方法、又飼ひ立つる次第等に關する故實を詳記したるものなり。

たかたいさんしんらんしやうにんしやうとうでん

高田開山親鸞聖人正統傳　六卷　僧　良空

眞宗高田派專修寺に用ふる所の親鸞傳記なり。「親鸞聖人正統傳」に同じ。たゞ高田派の人、殊に此の字を冠し用ふ。

⊙良空の傳は「親鸞聖人正統傳」の下にあり。

たがたかたゞぐわざうもんだふ

多賀高忠畫像問答　（寫本）一卷　伊勢　貞丈

多賀豐後守高忠の畫像につきて、多賀三大夫中原常政の問に對して答へたる者なり。安永五年丙申(二四三六)十一月下旬の作。

⊙伊勢貞丈の傳記は「安齋叢書」の下にあり。

たがたかたゞぐんしよ

多賀高忠軍書　（寫本）一卷　多賀　高忠

軍法故實の書にて二十餘條あり。永正八年辛未(二一七一)、弘治二年丙辰(二二一六)等の奥書あり。

⊙多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

たがたかたゞゆみのき

多賀高忠弓之記　（寫本）一卷　多賀　高忠

弓矢故實の傳書にして、形狀、製作等を詳說せり。「弓馬祕抄」の中に收む。

⊙多賀高忠のことは「當流聞書」の下にあり。

たかたじやうおんうけとりのき

高田城御受取記　（寫本）二卷

延寶九年辛酉(二三四一)、松平越後守領地沒收の時、幕使高田城受取の記錄なり。

たかたゞきゝがき

高忠聞書　（寫本）一册　多賀　高忠

「美人草」の寫傳にかゝるもの。或は「美人雜」と表書したるもあり。寛正五年甲申(二一二四)十一月の聞書にして、高忠の奥書あり。

⊙多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

たかたゞきゝがきざつざつ

高忠聞書雜々　（寫本）七册　多賀　高忠

弓矢馬術一切の式法を聞書したるものにて、「弓馬叢集」の中に收む。

⊙多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

たかたゞきゝがきべつき

高忠聞書別記　（寫本）一卷　多賀　高忠

伊勢弓馬叢書の中の一書にして、弓馬の故實數十條を記し、寛正九年(寛正は六年にて文正と改元、寛正の九年目は應仁の二年紀元二千百二十八年にあたる)十一月自ら奥書す。明應二年(二一五三)永正十七年(二一八〇)等諸家の奥書あり。

⊙多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

たかたゞぐんぢんきゝがき

高忠軍陣聞書　（寫本）一卷　多賀　高忠

伊勢弓馬叢書の中の一書にして、出陣時祝次第同可酌事、軍陣にて弓可持次第事、以下凡て二十餘目あり。永正八年辛未(二一七一)六月、小八木若狹守忠勝、證本に依て書寫する由の奥書あり。此の書は末に「築城記」を添へたり別に解題す。

⊙多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

たかたゞつけがみにつき

高忠附紙日記　（寫本）一卷　多賀　高忠

犬追物の付紙日記にして、小笠原備前守持長以來の傳書なり。寛正五年甲申(二一二四)延寶三年乙卯(二三三五)八月等の奥書ある横綴一册子なり。「續群書類從」卷六百七十六、武家部第二十二に收むるものは「犬追物附紙日記」と題せり。

⊙多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

たかたやかへゑでん

高田屋嘉兵衞傳　（寫本）一卷　河野　逸

淡路國津名郡都志本村の高田屋嘉兵衞といふもの、虜船に捕へられ、俄西亞國に至りし始末を記したるものなり。高田屋嘉兵衞は文政十年丁亥〔二四八七〕年五十九にて病歿せり。

◉河野逸のことは『延齡錄』の下にあり。

たかつくば

鷹筑波　（寫本）七冊　山本　西武

俳諧の集なり。松永貞德の跋あり。寛永十五年戊寅〔二二九八〕九月二十五日、七冊完成せり。

◉山本西武の傳記は『あはゝ千句』の下にあり。

たかてんじんをがさはらかふ

高天神小笠原家譜　（寫本）一卷

信州深志の住、修理大夫貞朝の長子信濃守長高より、正親町天皇の元龜天正の間高天神城にありて、武田信玄及び勝賴等と合戰したる小笠原氏儀に至る略譜なり。『續群書類從』卷百二十六、系圖部第十一にあり。

たかてんじんをがさはらけいづ

高天神小笠原系圖　（寫本）一卷

小笠原長淸より元龜二年辛未〔二二三一〕天正二年甲戌〔二二三四〕武田勝賴と合戰したる與八郎氏儀に至る略系圖なり。『續群書類從』卷百二十六、系圖部第十一に收む。

たかとほぐんき

高遠軍記　（寫本）一卷　平　常富

信濃國伊奈郡高遠城に關する古事十箇條を記錄せり。第一笠原賴直行狀附高遠築城の事、第二木曾家親移任附高遠興廢事、第三千村内匠守城附御嶽權現靈驗の事、第四城主轉替附仁科家系の事、第五織田家侵伐附下伊那筋開城の事、第六織田信忠說客附高遠籠城の事、第七高遠城攻附仁科信盛生害の事、第八甲信騷動附保科正直武功の事、第九高遠合戰附正直關東移居の事、第十保科再住附鳥居家の事等なり。卷尾に「右元曆元年〔一八四四〕高遠築城より、寛政元年〔二四四九〕に至て凡六百三年になる」と云へり。寛政元年己酉〔二四四九〕の自跋あり

◉平常富は信濃國の人にして、内藤氏に仕へたりといふ。別著には『田制沿革考』あり。

たかながきやうき

隆長卿記　一卷　隆　長

本書は一名『後宇多院御灌頂記』の下に解題せり。

たかなしけいづ

高梨系圖　（寫本）一卷

鎭守府將軍賴義の舍弟從五位下掃部助賴季より、明曆三年丁酉〔二三一七〕四月九日に生れたる高梨久三郎廣盛に至る數十代間の系圖なり。『續群書類從』卷百三十、系圖部第二十五にあり。

たかねおろし　[illegible]　二

たかのしよ

鷹廼書　（寫本）二卷

鷹の始の事、鷹を使ひ始られし事等より、一切鷹に關する由來故實等九十九條あり。卷末に「天上三年六月十日攝津松鷗軒常安判」とあり、蓋し天上は天正の音通を用ひたるものか、松鷗軒常安は本書の著者なるべきか。姑らく疑を存す。

たかのしよ

鷹之書　（寫本）一卷

鷹故實の書にして、元龜元年庚午〔二二三〇〕六月、德丸志摩入道宗瓷の奥書あり。

たかのしよ

鷹書　（寫本）一卷　茂呂　金朝

鷹故實の書にて、詳しく圖說せり。文化九年壬申〔二四七二〕著者の奥書捺印あり。其の自筆なるべし。著者茂呂金朝は源姓にして、五岳閑人と號す。

たかのしよ

鷹書　（寫本）五卷　小笠原政淸

小笠原家鷹の傳書にて、鷹に關する養法便法、凡ての故實數十條を記せり。永正元年甲子〔二一六四〕九月七日政淸の奥書及び天文七年、天正八年、寛永二年等の諸家の日付あり、五卷三冊に寫傳す。

◉小笠原政淸のことは『弓箭纂要』の下にあり。

たかのしよ

鷹書　（寫本）一卷

鷹故實の傳書にて、末に吉田多右衞門尉の記名あり、更に元和五年己未〔二二七九〕三月五日、家元より天野彥八に宛てたる末記あり。

たかのふみ

鷹文　（寫本）一卷

鷹に關する故實に傳を條書したるものにて、末に嘉曆三年戊辰〔一九八八〕永正十三年丙子〔二一七六〕等の書寫の奥書あり『續群書類從』卷五百四十四、鷹部第四に入る。

たかのほこのこと

鷹能架能事　（寫本）一卷

鷹の架一切に關する法規を圖說詳解したるものなり。圖は彩色を加へて見事に寫し出せり。

たかはしうぢぶみかうちう

高橋氏文考註　（寫本）一卷　伴　信友

本朝月令、政事要略及び年中行事祕抄に載錄したる、高橋氏文の異本を校合し、其の事の次第によりて、三條を表章して考註を記したるもの。天保十三年壬寅〔二五〇二〕三月の自序あり。『やまと叢誌』第十三に收めたり。本書或は『高橋氏文殘簡訂註』と題して寫傳せるもあり。

◉伴信友の傳は『古事逸傳考』の下にあり。

たかはしうぢぶみざんかんていちう

高橋氏文殘簡訂註　（寫本）一卷　伴　信友

此の書は一名『高橋氏文考註』の下に解題せり。

たかはしぜうんろく

高橋紹運錄　（寫本）三卷　藤原　一蓑

九州豊前なる高橋鑑種の一生盛衰を記して、高橋家由來の事より、九州御國割の次第に至る五十三箇條より成れり。慶安五年壬辰〔二三一二〕藤原一蓑の奥書あり。『續群書類從』卷六百四十七上下、合戰部第七十七にあり。

たかばはき　[illegible]一巻　齊藤[illegible]

たかはふぎしふ

鷹法儀集　（寫本）一卷　大宮新藏人

此の書は一名『類鷹字義』といふ題下に解題せり。

たかひさき

貴久記　（寫本）六卷　久　通

島津貴久を中心として、同家祖先來の傳歷を漢文にて詳記したるもの。著者其の父下野守久元の志を繼ぎて、之れを作り、朝鮮人爲善をして作成せしむ。寛永二十一年甲申〔二三〇四〕同爲善の跋あり。著者久通は島津家の苗裔にして、圖書頭たり。

たかひせう

鷹祕抄　（寫本）一卷

鷹の起源より、二十數項の故實を記せり。『續群書類從』卷五百四十四、鷹部第四にあり。

たがひせんごばんたゞのぶ

互先碁盤忠信　五卷　江島屋其磧

鎌倉時代の事實に因みて綴り成したる八文字屋小說なり。されば其の序文中にも「往古の賴朝義經其外の名高き勇士を、今目の前に見る心地せし鎌倉實記の、おもしろき趣向を五冊に綴りて、童男の心をいさましむるものなり」と云へり。『百萬塔』第二に收めらる。八文字舍自笑と共編するところなり。

◉江島屋其磧の傳は『其磧諸國物語』の下にあり。

たかひでんしよ

鷹祕傳書　（寫本）一卷

鷹故實の書にして、慶長十二年丁未〔二二六七〕卯月晦日の末記あり。

たかひやくしゆ

鷹百首　一卷　僧　慈鎭

「かすめども鷹はしら尾の暗に、空とふ鳥の目路近くなる」に始まりて、「陸奥のしのふの鷹を手にすゑて、あだちが原なれるはたが子ぞ」に終れり。『群書類從』卷三百五十七、鷹部下に收めらる。

◉慈鎭の傳は『拾玉集』の下に在り。

たかひやくしゆ

鷹百首　一卷　西園寺公經

「たか山にあさる鹿のしは〳〵も、世につかふべき道ぞかけぬる」より、「はし鷹のこもつちこえに一もちり、とるもとらぬも面白のはや」に至れり。『群書類從』卷三百五十七、鷹部下に收めらる。『西園寺殿鷹百首』と題して寫傳せるもあり。

◉西園寺公經は内大臣實行の子にして、左近衞中將、藏人頭、權大納言たり、承久の亂、公經鎌倉に媚あるを以て幽閉せられしが、北條泰時京師を陷れ、後堀河天皇立つに及びて内大臣に任ぜられ、翌年太政大臣に陞り、尋で從一位に敍せらる。後嵯峨天皇の寛元二年甲辰〔一九〇四〕七十四歲にて薨したり。